想造世界

玲音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想造世界

【Ｎコード】
Ｎ８５２３Ｑ

【作者名】
玲音

【あらすじ】
あるところに、一匹の妖怪がいました。
その妖怪は、１６歳の時に故郷を出て、人間界へと踏み出しました。
人間界では、夜は何でも屋と言う仕事を営み、昼間は人間として学校に通っていました。

しかし、仲間に会ったことによってかなんなのか、彼の人生は一変しました。
どこにでもいる普通の彼の人生が一変したのです。

しかし彼は幸せでした。沢山の仲間や、愛しい人と出会い、不幸なこともありましたが、幸せでした。

この話は、そんな彼の人生の断片を書いたものです。

感想とかアドバイスがあったら、ぜひお願いします。参考にさせていただきます！

＊あらすじ、やっとかえました！こっちの方が、本編に忠実な気がします！

後々タイトルも変えようかと思っているのですが、それはもう少し後になると思います。

人間界への旅立ち

ここは、人間界とは別にある世界、魔界。

ここには、多くの妖怪などが住み着いている。俺もその中の一匹として親父に十六になるまで育ててもらっていた。だが・・・・。

「亜修羅、私は狙われている。だから、亜修羅まで巻き込むのは申し訳ない。だから、一人で人間界に渡ってくれ」

「だけど、親父は・・・・？」

「私がお前について行ったら、逃がす意味が無いじゃないか」

「でも・・・・」

「亜修羅。お前はもう大人だ。一人で人間界で生きて行くことぐらいは出来るはずだ。それとも、人間界が怖いのか？私はそのような臆病者を育ててしまったのか？」

「・・・・わかった。親父、必ず生き延びるんだぞ」

「ああ。亜修羅が帰って来るまで死にはせん。それとも、私がその間に死ぬような弱い妖怪だと思っているのか？」

魔界では、親父の名前を知らない奴などいない。いたら、そいつは人間界にずっといて、魔界の様子を知らなかったのだろう。それくらい、親父は強かった。そして、冷酷だった。

俺に向けられる笑顔は本当のものなのだろうけど、まだ冷たさが拭いきれていないように見える。

「いや、親父。親父の強さは俺が一番よくわかってる。だから、俺は行く。親父の強さを信じて人間界に行って来るよ」

「そうか。覚悟を決めたか。なら、早いうちがいい。明日の朝日が

昇る前にでも出発したらいい」
「わかった」

俺は、自分の部屋に行くと、明日の出発のために身支度を整えた。その中には、お袋の形見のペンダントも入っている。

お袋は、俺を生むと直ぐに死んだらしい。元々体が弱かったみたいで、体力的に間に合わなかった。だから、お袋のことは、このペンダントのことぐらいしか知らないのだ。

「今更、お袋のことを考えてもどうにもならないよな」

そう呟き、一回ギュッと手で包み込むようにペンダントを握ると、箱にしまった。

お袋の次は親父が命を狙われている。親父とて、そんなに何年も生き残れるはずはない。俺が帰って来た時には、きっとこの家すら消えているだろう。

お袋は守ることが出来なかったけれど、親父は、俺が守ろうと思えば助けられると思う。俺だって、助けたい。だが、親父の目を見ると、それなりの覚悟の色があった。その覚悟を俺が曲げていいのだろうか？いや、いいはずはない。だから、嫌々ながらも、人間界に行くことを決めたんだ。

人間界と魔界は、異空トンネルで通じている。そのトンネルを抜ければ、簡単に人間界に行くことが出来る。だから、人間界に行く手段はそんなに大変ではない。大変なのは、　人間界での生活方法。普通は仕事か何かを見つけるらしいが、大体は失敗している。だから、俺は、あえて職を取らずに学校とやらに通ってみようと思う。

そこで、しばらくの間身を置き、夜になったら何でも屋をすることにする。それが賢い生き方だと親父がこの前言っていた。何でも屋と言うのは、報酬さえもらえれば何でもやる。それが、例え殺しでもやる。逆に、ジュースだって買って来る。

こっちの方が、普通に仕事をやるよりもジャンルがないのだし、金銭的な交渉を上手に話したら、報酬の値を上げることも出来る。

親父は、それをやっていたから冷酷だと言うのだ。今まで、親父は何万人と言う妖怪や人間を殺して来ただろう。それを普通に行っているのだ。冷酷にならないと、そんなことは出来ないはずだ。

そんな恐ろしいことを躊躇いもなくやるものだから、周りの妖怪からも恐れられてるんだ。親父を味方につけるのは凄く心強いが、敵となると、躊躇いもなく殺されるから、恐怖を感じるんだろう。

俺だって、親父が躊躇いも無く妖怪を殺している様子を見て、そんなことをしてもらった金で生活しているのだと思うと、恐ろしくなる。だが、これが一番手っ取りく、尚且つ一番儲かる仕事なんだそうだ。

魔界にも何でも屋は何人もいるが、大体のところは殺しはしない。いくら金を積まれたって、殺しまではしない。でも、親父はそれを引き受けるから、依頼が殺到するのだ。

俺も、何でも屋の仕事を手伝っている。とは言え、殺しはしない。俺が解決出来そうな簡単なものを任されるだけなのだ。

「おい、亜修羅。ちょっと手伝ってくれ！」

「わかった。今行くから待っててくれ」

下からの呼びかけに大声で答えると、荷物を持って下に下りた。

「じゃあ、行って来る」
「ああ。気をつけて行くんだぞ」
「それはこっちの台詞じゃないか。親父」
「そうだな。しかし、私にはもう、お前しか守るものがないのでな」
「今は俺の命よりも、親父の命の方が大事だろ?」

俺が何となく聞くと、親父はうつむいた。何か気に触ることでも言ったのかと思ったが、すぐに顔を上げる。その表情は笑っているのに、なぜかもの凄い悲しみを感じ取れる表情だった。

「いや、私はもっと早くに殺されるべきだったのだ。金をもらう為に、平気で生命を殺して来た私は重大な罪に問われている。それは、死を持っても償い切れない罪だろう。だが、私が生きていたら、また生命を殺すことになるかもしれない。だから、私は死ぬべきなんだよ」
「そんなこと・・・・。じゃあ、俺を追い出すのは、自分の死を俺に見せたくないからなのか?」
「そう言うことになるかもしれんな。それに、もう疲れたのだよ。己を心の芯まで冷酷にして、生命を殺すことなど。しかし、今の私は、自分でも制御出来ないまま、また生命を殺すだろう。なら、こ

うするしか止める手は無いのだ」
「だけど・・・・」

俺は、親父の目を見た。その目は、覚悟の色をしている。そう言えば、生命を殺す時の親父の目も、いつもこうだった。親父は、こうなることをわかっていて殺していたんだ。

「ああ、わかった。なら、これだけは約束してくれ。向こうでは必ず殺すな。人助けをするんだ」
「それぐらい、喜んでやるさ」

親父の言葉を聞くと、何とも言えない気持ちになり、涙が出て来る。慌てて後ろを向いて表情を隠す。親父の前で泣くなんて、みっともなくて、一生笑いのネタにされる。でも、その一生も、直ぐに終わってしまう。

「じゃあ、行って来るからな」
「ああ、気をつけるんだぞ」

震えるし、かすれるしで、全く聞こえなかったであろう俺の言葉を、親父は聞き返しもせずに答えてくれた。

これ以上いても、ただ涙が止まらなくなるだけだ。だったら、いても仕方がないだろう。

涙も拭わないまま、走り去るように親父から離れた。これが、親父との最後の別れだ。そう思うと、どうにもならない気持ちになるけれど、俺が泣いたってどうこうする問題じゃない為、必死で涙を止めた。

しばらく歩くと、異空トンネルのある洞窟についた。辺りは誰もいないから、今の今まで泣いていたなど見られる者もいず、内心ホッとした。

洞窟を一望してから洞窟内に入る。中は暗くてじめじめしていて、とても居心地のいいと言える場所ではなかった。しかし、異空トンネルに向かうには、この道を通らないと行けないのだ。

随分と歩いたけれど、先が全然見えない。と言うか、入って来た場所さえ見えない。入り口付近ではわずかにあった光も、消えてしまったのだ。仕方ないから、嗅覚と聴覚で辺りの安全を確かめる。視力はあてにはならない。さっきも吸血蝙蝠に血を吸われかけたところだ。

神経を耳と鼻に集中して歩いていると、足元がおろそかになった。と言うのも、足下にある穴に気がつかなかったのだ。まぁ、どっち道見えていなかっただろう。真っ暗闇だったから。

俺は、とっさに手を伸ばしたが、穴の上には届かず、無様にも穴の中に落っこちた。暗闇の中、底知れぬ穴に落ちるのは恐怖だが、同時にワクワクもした。きっとここが異空トンネルなのだ。ここを出れば、きっと人間界に出る。

ずっと下を見ていたが、ずっと暗くて何も見えない。随分長いトンネルだと思っていると、急に足元が明るくなった。すると、一気に視界が開けて、俺は異空トンネルから落とされた。

異空トンネルは、そのまま姿を消した。そして、俺だけがここにいる。

周りは木に沢山囲まれており、狐の俺にはいい環境だった。

「ここが、人間界か・・・・」

何とも言えない嬉しさがこみ上げて来て、思わず呟いていた。

人間界での生活

俺は、いつから道を踏み外したのだろうか？親父が生命を殺し、どんな風になって行ったか知っているはずなのに、何でも屋の仕事で殺しを引き受けている。それが、段々当たり前のように思えて来るのが自分でも怖かった。

その代わり、金は沢山入って来たから、楽にアパートを借りることが出来た。それに、学校へ入る手続きも。けれど、汚いことをした金で借りたアパートは内装が綺麗でも、くすんで見える。やはり、自分も親父のようになるのかと思うと、少し怖くなった。

だから、もう心を閉じることにする。冷酷と言う気持ち以外に蓋をし、外に出さないようにした。こうしたら、もう何も悩むことは無い。

「伊織君、どうしたの？」

「・・・・・」

そうだ、今は学校にいるのだ。物思いにふけって忘れていたが、授業と言うものを受けているのだ。その間にボーッとしたら怒られる。最初の時にボーッとして痛い目にあったから、やめようと決めたん

だ。

今話しかけて来たのは、隣の席の石村友美。俺がボケッとしてると、しつこく話しかけて来るうざい女だ。そいつが隣の席だから、ろくに考え事すら出来ない有様だ。

「伊織、ここの問題は？」

数学の教師が、聞いていなかった俺をわざと当てる。けれど、俺は何のためらいもなく答えを述べると、着席した。教師は得意そうな顔をしていたのに、俺が答えると、悔しそうな顔をしたが、一応「よくわかったな、眠っていたくせに」と皮肉を言った。この数学の教師も嫌いだ。うるさいし、めんどくさい。

俺が人間界で使っている人間での名前。それは、伊織修。俺は三週間ほど前に転校して来たのだ。出来るだけ注目を浴びないように細心の注意を払っているのだが、なぜか目立つ羽目になる。

俺は、妖孤としての能力など一切発揮していないのに・・・・。全て、俺の右隣にいる女のせいだ。こいつが纏わりついて来るから、他の奴らもつられて来る。だから、この女との縁を切りたいのだが、どうやったところで離れない。凄い執念と言うべきか・・・・。

そんな憂鬱な二時間目が終わり、休憩時間になった。すると、隣の女はそれと同時に話しかけてくるのだ。だったら、こっちはそれよりも早く逃げる。けれど、いつも捕まってしまう。なぜだか・・・・。こいつはエスパーだろうかと本気で思ったこともある。

「ねぇ、伊織君ってさ、どうしてあんまりしゃべらないの？それに、今だって明らかに嫌そうな顔をしてる」

「・・・・人の勝手だろう」

纏わりついて来る女を振り払う。その時、後ろから何かが飛んで来た。瞬時にそれをキャッチする。と言っても、見るだけでも面倒なので、後ろを向いたままでだ。

「凄い、伊織君！」

手の中にある消しゴムをピシッと一点の方向に向かって飛ばすと、そのまま教室を出て、屋上に行き、真ん中辺りで寝転がった。

人間界にいると、生活が狂いだす。それは事実だ。現に、人間界に来てからほとんど睡眠時間がない。こんな状態でいるから眠くなるんだ。

夜が開ける頃くらいまで仕事はびっしりな為、ほとんど眠っている時間はない。せいぜい、休み時間中だけだ。

そう思い返して来ると、睡魔が襲って来た。妖怪とて、休養は必要だ。

そんなことを思って気を緩めると、気がついた時には瞼が下りて来て、眠ってしまった。

どれくらい立った時だったかは知らないが、物音がした。その物音は目の前だ。

近づいて来た物のにおいすら感じなかった。そんな自分を責めながら急いで目を明ける。すると、目の前にいたのは、あのうざい女だった。

動きを止めた時、上から何かがパサッと落ちて来た。それは、ここの制服の上着だ。

「伊織君がいなくなったら、どこ行っても見つからなかった理由って、ここにいたからなんだね？」

そう言われて、しまった！と思った。いつもは鍵をかけておく屋上のドアだが、今日は、迂闊にも鍵を閉め忘れていた。これで、俺の時間はどれくらい減って行くんだ。ほとんどがここにいる時間なんだ。

「ねぇ、伊織君、私のこと・・・・嫌い？」

そう聞かれた時、なぜかうなずかなかった。ここまで嫌っているのに、なぜうなずかないのかは知らないが、そう言う自分が少し意外だったのは事実だ。

俺は、その問いにはえないまま、制服の上着を返すと、教室に戻った。もうすぐ授業が始まる。女もしばらくしてから戻って来たが、今度は俺に話しかけることはなかった。

それから何とか授業を終え、下校する時刻になった。いつもなら、この時にも女はしつこくくっついて来るが、今日は会いもしなかっ

た。その分俺はストレスが溜まらず、気分がすっきりしていた。

何でも屋の仕事が始まるのは、午後九時から。今は午後四時だから、五時間の間は余裕がある。その時間は、学校の宿題や、依頼の整理などのことをしているから、直ぐに時間が過ぎるんだ。

下校の途中、道路を群がって塞いでいた連中と出会った。

「道路の真ん中にいるのは邪魔だ。どこか他のところで集まれ」

「何だよ、兄ちゃん？」

一人の男が肩を掴んだ。そして、ギュッと力を入れて来る。俺は、その手を二倍の力で握り返してやった。人間の出す力なんて、下級妖怪にも及ばない。そんなのの二倍なんて簡単だ。楽に百倍ぐらいは行けるんじゃないのか？

「いててててて」

「退くのなら離す。退かないなら、このままお前の手を握りつぶす」

「わっ、わかったよ」

男共は、俺が離すと急いで去って行った。ああ言う奴らは、一度締めれば懲りるはずだ。自分より強い相手にはひれ伏すタイプだろうな。そう言う奴が一番嫌いなのだが。

それからアパートに着き、鍵を開けて中に入る。部屋の中にはほとんど家具を置いていないから、引越し直後か引越し前によく間違われる。しかし、それには答えないで、いつも追い返すのだ。

学生鞄を置くと、宿題として出されたものを取り出す。それから、明日の時間割をそろえ、宿題に移る。

学校の勉強はさほど難しいものではないが、面倒だ。だから省くと、バツにされる。本当にめんどくさいものだ。

二十分程度で宿題を終わらすと、今度は押入れの中にある山積みの紙の束を取り出す。それに、氏名と依頼内容、報酬が書いてあるのだ。それに俺が同意したものだけ、実行すると言う何とも簡単なことだが、面倒なのは、引き受けた相手に知らせる手段。それが、手紙なのだ。しかも、一枚一枚丁寧に書いて行くからめんどくさい。

コピー機を買う余裕はあるが、家の余裕がない。だから、仕方なく手書きで書いているんだ。これで、五時間かけてやっている作業がわかったと思う。

届いた依頼に目を通し、実行するものだけ依頼主に手書きの手紙を書く。これを、ここ三週間ずっと繰り返しているのだ。いい加減飽きて来たが、何とか頑張っている。

いつの間に時間が過ぎて、午後九時を回った。

大きく伸びをすると、人間の変化を解き、元の妖孤の姿に戻る。それから、今日やる仕事の内容が書かれた紙を白装束の中に押し込むと、窓から外に出て、しっかりと鍵を閉めた。

依頼の内容とは、妖怪じみたことや、人間みたいなものもある。妖怪じみたことは、人を驚かすための道具を設置して来るとか。はっきり言って、妖怪の部類に入るかどうかは謎だが・・・。人間みたいなものとは、新発売のゲームの順番待ちをしてくれとのことだった。他にも、隣の家がうるさいから静かにしてくれとか、重い荷物をどこどこまで持って行ってくれとか、ひどい時は子供の面倒を

見ろと言われたことまであった。

しかし、どれも的確にこなして行って、ボーナスをもらえるほどだった。それだけ、何でも屋の仕事になじんでいると言うことになる。

今日も、朝の三時半まで仕事に費やし、それから二時間半は依頼の整理をし、学校に向かうために家を出る。それが毎日の繰り返しだ。

そんなことが毎回続くから、今日も同じなんだろうなと言う気持ちを隠しきれずにいた。

学校の授業はいつも通りの半分聞いて、半分聞いていないのまま受けた。その態度にムカつくのか、数学の教師が何度も俺を指したけれど、それに答えるから更に腹が立つらしい。バカバカしいな、大人なのに。

相変わらず女は話しかけて来ず、静かな時間を過ごせた。それはそれで楽しいものもあったが、なぜか、少し寂しく思った。なぜだか自分でもわからない。

「石村、やっと伊織のこと諦めたみたいだぜ？」
「そうだな、話しかけないところからすると・・・・。告って失敗したとかなのか？可哀想だな、あんな無愛想な奴にフられるなんて」

俺の席から斜め向こう側にいる男達がこっちを見て話している。本人達は離れているから聞こえないだろうと思って話しているんだとしても、生憎、俺には丸聞こえだ。いくら教室の隅から隅まで離れても、そんなの嫌でも耳に入って来る。

俺は、出来るだけ気づいていないと言う風に、本を顔まで持ち上げた。しかし、そうしたって、話は嫌でも耳に入って来るし、ただ男達の表情が見えないだけだが、そっちの方が幾分マシだった。

勝手に想像して、バカバカしいにも程がある。俺は何にもしていないし、告白されてもいない。ただ、女が急に話しかけて来なくなっただけだ。

チラッと右隣に視線を向けると、女は、表情が晴れないような顔つきで、紙に何かを書いていた。

俺は、また本に視線を戻すと、本に集中出来るように出来るだけ頑張った。

そして、放課後。

なぜか、俺の前を女が歩いている。こう言うのを、偶然とか運命とか人は言うけれど、俺はそうは思わない。ただの嫌がらせだと思う。

毎回そうだ。なぜか俺の前をいつも歩いている。嫌がらせなのか、それとも、単に帰る方向が同じなのか。それは未だに疑問だが、あまり考えないようにしている。

その時、なぜだか知らないが、嫌な予感がした。この先にある四つ角の左にだ。妖気に似たような物が渦巻いている。

女は、いつもその角を左に曲がっている。と言うことは、女が妖怪に襲われかねないと言うことになる。それだけはまずい。人には、妖怪なんていないと思わせておいた方が、断然楽だからだ。

少し気は引けたが、前を歩く女に話しかけた。

「何で、昨日から全くしゃべろうとしない？」

「だって、私のこと・・・嫌いなんでしょ？」

「さあな。俺は、あんたのことを好きでも嫌いでもない。ただのクラスメートとして見てるからな」

「そっか。じゃあ、嫌いじゃないんだね！！」

「・・・・」

もっと言い方を考えればよかったのだが、いくら言葉を頑張って考えたって、きっと同じ勘違いをされていただろう。

「私のこと、好きなんでしょ？」

「・・・・」

俺は、「あんたのことが好きでも嫌いでもない。ただのクラスメートとして見てるからな」と言ったはずだ。しかしどうだ。女はすっかり自分を好きだと思っているじゃないか。物分かりが悪いと言うのか、ポジティブだと言うのか。ただ呆れるしかなかった。

「そっか、よかった。私、伊織君に嫌われてると思ってて、ずっと話しかけるの我慢してたんだ。よかった。じゃあ、これからもドンドン話しかけてもいいかな？」

俺は、それには答えずに、ため息をついた。しかし、女はなぜか喜んだ。きっと、また変な勘違いをしているのだろう。決して何も話していないのに。

その時、背後でしっかりと妖気を感じた。こいつが元凶だなと思って、視線を軽くそちらにやると、いた。水溜りみたいな奴だが、俺が見ているのに気がついたのか姿を現した。

女に気づかれないように、一瞬の隙をついてそいつから逃げる。人間に変化している間は、あまり力が出せない。だから、こいつにもギリギリで勝てるぐらいだろう。

しかし、俺はそう言う駆け引きが嫌いだからな。それに、確実にしとめる方法を選んだら、女に正体がバレる。だから、逃げるのが一

番無難なところなのだ。

突然、手を掴んで走り出した俺に、女は驚いていたけれど、妖怪の姿は見ていなかったらしく、一緒に走って来た。今では、もう妖気を全開に発しているらしく、後ろを振り向かずとも、妖怪がついて来るのがわかった。

「何？どうしてそんなに急いでるの？」
「今は言えない。とにかく走れ！」
「わかった」

女は素直にうなずくと、聞くのをやめた。こんな状況を誰が説明出来るって言うんだ。せめてもの救いは、しつこく聞いてこないところだ。きっと、本能的にまずいなと思ったのだろう。普段もそうしてくれればいいのだが・・・・。

その時、水溜りに似た妖怪が、無色透明な液を俺達の足元に飛ばして来た。最初は、いっそのこと、女を抱えてそのままこの状況を打破する方法も考えたが、やっぱりそれではバレると思った。

「飛べ！」
「なっ、何で？」
「いいから！」

何とか勢いで押し、女はジャンプした。俺も続けてジャンプする。

液は道路に当たってジュッと溶けた。これは、人間の体が耐え切れる程度のものじゃない。人間が当ったら、きっと骨もろとも崩れるだろうな。

考えを察知したかのように、妖怪は液を逃げられないところに乱射した。俺ならジャンプで何とか回避することは出来るけれど、人間の足では無理だ。仕方ない。

俺は女を抱えると、そのままコンクリート塀に飛び上がり、更に屋根までも飛び乗った。それからは、もう屋根を飛び石のように飛んで逃げることしか出来なかった。

「伊織君・・・・？」

女は、ありえないと言うような顔でこちらを見ているが、そんなことを気にしている余裕はない。とにかく、神社に隠れようと思った。一番近い場所だからだ。

神社の真上まで来ると、そのまま地面に飛び降りた。人間では、骨が折れても仕方ない高さなのを平気で飛び降りた俺に対し、女は気絶寸前の顔で見ていた。

人間の姿とはいえ、人間よりも頑丈な体だから、こんなところから飛び降りても全然平気だ。しかし、人にとってはあり得ない行動なのだろう。

地面に飛び降りると、女を降ろし、辺りを見渡す。すると、さっきの妖怪がいた。どうして俺が下りる位置がわかったのか知らないが、そいつが後ろにいた。

「亜修羅、なんで逃げるんだよ」
「えっ？亜修羅って？」
「そいつの本当の名だよ」
「黙れ、ヘドロ」

「ああっ、怖い怖い。人間界に来て俺のことすら忘れちゃったのかい？」

「み、水溜りがしゃべってる！？」

「おしゃべりは過ぎない方がいいぞ。でないと、お前を殺すことになる」

ここまで話されたら、もう弁解の余地もない。だから、妖狐の姿に戻って、妖怪を追いやることは可能だ。

「いいのか？女の前で妖狐の姿に戻って」

少し怯えたように俺を見る妖怪。人間のままでの俺は、こいつに勝てるかわからないけれど、妖狐になれば、俺の方が断然強いからだ。

・・・・哀れだな。

「ああ、なってやるさ。死ぬ覚悟はいいか？」

俺は、そう言うと同時に妖狐の姿に戻った。

変わり者の妖怪

俺は、妖狐の姿に戻ると、間髪入れずに妖怪を真っ二つに切り裂いた。

「ぬぁ・・・・」

「だから言ったはずだ。おしゃべりが過ぎると痛い目に合うってな」

「なぜだ・・・・。知り合いだったはずじゃ・・・・」

「お前のような下級妖怪の知り合いなぞ、俺は知らん」

「しかし・・・・」

妖怪は、全てを言い終わる前に、息絶えて行った。

「いっ、伊織く・・・・？」

話そうとする女に、瞬時に睡眠粉を降りかけた。睡眠粉で眠った女をそのまま抱えると、においを頼りに家まで連れて行った。途中、分量を間違えて起きて来るんじゃないかと冷や冷やしたが、その心配は無用だったらしい。

女は、俺の妖狐姿を完全に見た。これを、あの女がどう思うかで変わって来る。今まで自分は眠っていたので、夢じゃないかと見るか。それとも、これは現実だと思うか。どっちにしろ、あいつは俺とは関係ない。近寄らせないのがあいつのためになるだろう。

せっかく妖狐の姿になったので、今日はもう何でも屋の仕事を始めることにした。別に夜じゃなくちゃいけない理由なんて一つもない。ただ、夜の方が妖狐の姿になる時に、昼間よりは負担がかかりにくいと言うことだけで。

一端家に帰り、押入れから依頼内容の書かれた紙束を引きずり出すと、何を実行するかを決めないで、そのまま抱えて窓から外に出た。

依頼を見ながら実行するものを決めていけばいい。報酬は後でもらえばいいのだ。

抱えている紙束の一番上の依頼内容に目を通し、これは実行すると決めて、早速現場に向かった。

「えーっ、嘘だぁ」

「本当だよ。昨日、私の目の前で、伊織君が変身したんだよ！」

「どんな物に？まさか、妖怪とか言わないよね？」

隣で盛り上がっている話を、本を読みながら聞き耳を立てる。やはり、あの女は俺が現実で妖狐になったとわかっているらしい。やはり、これくらいでは思考を混乱させることは出来なかったか。

俺の思っている思考の混乱と言うのは、現実ではあり得ないようなことが起きた。しかし、起きてみるとさっきまで道路にいたのに、家に帰って来ている。そうすると、夢か現実かわからなくなる。その方法を使ってみたものの、ダメだったらしい。

「うーん、何か、よくわからなかったけどね。だいたい覚えているのは・・・亜修羅って呼ばれてて、頭に小麦色の獣耳があって、髪の毛が金髪っぽい綺麗な色でね、瞳が銀色。白装束を着てて、足ははだしだった」

俺はその話を聞いて、組んでいた足のバランスを崩し、つんのめりそうになった。女が言ったことは、全てが本当である。「どこがだいたいだ！」と言ってやりたいのを我慢して、本に目を戻す。しかし、意識はもう、そちらの方に向かっていた。

それにしても、瞳の色なんていつ見たんだ・・・。なんだか、ジッと見られていたようで、気分を害されたんだが・・・。

「友美。それ、絶対夢だから！いくら伊織君が、ミスターミステリアスだとしても、そんな、実は妖狐でした！何て落ちはないと思うよ」

「妖狐って・・・・何？」

「その名前の通り、妖怪の狐。その獣耳からすると、多分妖狐だと思うよ」

「奈緒美ちゃんは、どうしてそんなことに詳しいの？」

「そう言うのに興味があってね。それより友美。伊織君に興味があるのはわかるけど、あんまり変な夢を見ないであげてね。伊織君がかわいそうだよ」

「そっか。夢・・・だったのかな？」

「あったりまえじゃん！」

「そうだね、現実離れし過ぎてるもんね」

女の友達の力を借り、女は昨日の出来事を夢として片付けた。よし、何とか一安心だ。

やっと心が少し安らかになり、本に集中することが出来た。元から読書は好きなのだが、本は顔を隠すことが出来るから、聞き耳を立てる時に役に立つので使っている。

そうして、学校は何事もなく終わった。女は、昨日のことをすっかり夢だと思い込んで、矛盾している点があるにも関わらず、納得していた。

それから帰り道。一人で通学路を通り、アパートに向かっている途中だった。

前を歩いている男から、妙な気を感じるのに気がついた。普通の人間の場合は、気を感じられる奴はあまりいない。しかし、こいつの気は人間離れし過ぎている。きっと、こいつも妖怪なのか・・・・。

「そう、君と同じ妖怪」

そいつは、俺の気持ちがわかったのか、クルリと振り向いた。身構えるけれど、相手から殺気を感じない。俺とやり合うつもりはないのか？

「誰だ、お前は」
「僕は、犬神の凛。こっちの名では、丘本宗介」
「俺は・・・・」
「ああ、亜修羅のことは知ってるよ。こっちでの名前も。伊織修でしょ？」
「なぜ、俺の名を知っている？」
「それは・・・・。あのさ、僕も、何でも屋でアルバイトしていい？お金が足りなくて・・・・。それに、亜修羅の仕事ぶりを生で見てみたいし」

そいつの申し出は、俺の発想を遥かに超えたことだったから、しばらくの間、あまり言葉の意味がわからなかったけれど、やっとわかった時には、なぜこいつが俺のところに来ることになるんだと思う。

「断る。お前の力がわからない以上、信頼することも出来ない。それに、お前のことをよく知らない。いつ裏切られて金を盗まれるか知ったことじゃないからな」

「じゃあ、これから一週間。僕は亜修羅の家に泊まるから、その時の態度とか、夜に強さを見せることにする。それで、無理だったら諦めるよ」

「待て。なぜ、俺の家にお前を入れなくちゃならない？それじゃあ、アルバイトよりも危険じゃないか」

「だって、僕の家、さっき全焼しちゃったんだもん」

「・・・なぜ？」

「家事をしてたら、火事になっちゃって。あっ、これ駄洒落じゃないよ？」

「わかってる！しかし、なぜ俺が」

「だって、強そうだし、何でも屋やってるし、一番僕の知り合いの中で頼りになるかなって思ったから」

「俺とお前は今日会ったばかりだぞ」

「それでも、知り合いでしょ？」

「はぁ～。じゃあ、その一週間でお前の力を見るから、その一週間、気を引き締めろよ」

俺は、口じゃこいつには勝てないと思い、仕方なしにこいつをアパートに泊めることを許可してしまった。これから起きる大惨事のことなど知らずに、軽い気持ちで・・・。

共同生活

「おい、お前。俺は確かにいいと言ったが、家に入れるなんて言ってないぞ」
「それって、酷くないですか？普通、入れてくれるでしょう？生身の人間を置いてけぼりにするなんて、僕、寂しくて死んじゃいますよ・・・・」
「ふん、ハムスターでもあるまい」
「ウサギだよ」
「・・・・うるさい」

俺がそう言い捨てて扉を閉めようとすると、妖怪が扉にしがみ付いて、俺に懇願する。だが、俺は譲らない気があった。こいつなんか入れたら、ろくなことはないだろう。それに、男同士で同じ部屋に住むのはおかしいと思われるはずだ。こいつだって、十五くらいだろう。何とかバイトを見つけてそっちに行けばいいんだ。

「僕の心はガラスのハートなんですよ！繊細で、寂しいと死んでしまうんです！！」
「じゃあ、男同士で、この狭い部屋にいろと言うのか？俺はそんなのごめんだ。俺はここの持ち主だ。それによって、お前が外に出る理由が出来る」
「そんな、亜修羅。友達でしょ？」
「いや、俺はただの知り合いとも思っていない。ただの迷惑人だ」
「じゃあ、僕が女装をするから。そうしたら大丈夫」
「そう言う問題じゃない！むしろ、そっちの方が嫌だ。それに何が大丈夫なんだ？」
「男同士を気にするなら、大丈夫だって事だよ」
「馬鹿だな、お前」

俺がそう言った時、不意にドアから手が離されたので、そのまま後ろに倒れてしまった。一回ため息をつくと、ドアの横にある窓を薄く開けて、外の様子を伺う。

外では、妖怪が向こう側を向いて、背中を丸めて体育座りをしていた。その様子が余りにも惨めで、少し言い過ぎたと思った。しかし、女装をされるのは困る。嫌がるのは当たり前だ。確かに、迷惑人とは言い過ぎたが、女装のことに関しては悪いとは思わない。

「おい、妖怪。今日だけだからな」
「入れてくれるの？」
「ああ、押入れの中だけどな」
「ありがとう、中に入れればどこでもいいんだ。それと、その、妖怪って言うのやめてくれる？僕、名乗ったじゃん。犬神の凛だって」
「ああ、わかった。さっさと入って、さっさと押入れに入ってくれ」

めんどくさくなってそう言うと、扉の鍵は開けたままにしておき、宿題を広げた。ただでさえ、今日は宿題が多くてカリカリしているんだ。その上、あの変な性格の奴まで来た。俺の頭をどれだけ混乱させれば、運命は俺からターゲットを変えるのだろうか・・・・。

「何ターゲットって格好つけてるの？」
「うるさい。さっさと押入れに入ってろ」

机に広げたノートをシャーペンの先でトントン叩きながら言うけれど、凛は全く押入れに入る気配がない。むしろ、物凄くこちらを凝視している。振り返ってみると、凛が物珍しそうな顔をして、ノートの問題を眺めている。はっきり言って、勉強の邪魔だ。しかし、ここで追いやってもまた来るだろう。だったら、質問に答えようじ

ゃないか。

「何か用か？用がないなら、早く押入れに入ってもらいたい」

「いや、別に用はないんだけど。ただ、高校ってそんな勉強するんだなっと思ってさ。僕、受験生だし。なんだか、テストの答案を見た感じがする」

「悪いと思うなら、見なければいいだろう。俺はこれが宿題なのだから、しまうことはない」

「そっか。じゃあね」

凛は、そう感想を述べた後、押し入れの上の段に上って、押入れの扉をしめた。下の段には、人が入る隙間など微塵にもないほど、紙の束が積んであるから上を選んだのだろう。まぁ、当たり前と言えば当たり前だが、あいつなら、そんなことをやりそうな気がしたのだ。

やっと凛がいなくなって、宿題に取り掛かれると思ったその時、押入れの中から悲鳴と言うか、絶叫と言うのか。そんな声が聞こえた。その直後、凛が押入れの扉を思い切り開けて、転がり出てくる。

「どうした？」

「ごっ、ゴキブリが・・・・」

「お前は女か」

俺は、呆れて凛をパシンと叩いた。ゴキブリを恐れる男がいるか？まぁ、いるかもしれない。しかし、ゴキブリを恐れる妖怪がいるか？いや、これはいないだろう。逆に、ゴキブリの方が凛を怖がっているだろう。

「何さ、ゴキブリの味方だって言うのかい？」

「違う。ゴキブリごときでギャーギャー騒がれたら、仕事もままならないと言いたいんだ。もし、お前と一緒に仕事をしている時に、ゴキブリが現れた。そうしたら、お前は叫ぶだろう。そうなると、その悲鳴を聞いて人間が起きて来る。こうなると面倒になるからだ」
「そうだけどさ・・・・。ゴキブリって、黒光りしてて、ブーンって飛んでさ。それに、カサカサ動くしさ。世界最強の生命力持ってるし・・・・」
「とにかく、ゴキブリぐらいで文句を言うなら出て行け。ここは古いんだ。ゴキブリとも共存生活していると思え」

これはさすがに言い過ぎだが、ゴキブリは他の家よりはよく出て来る。しかし、それは全て燃やしたから、いつもゼロの状態に戻しているはずなのだが・・・・。世界最強の生命力とは、上手く言ったものだな。

「・・・・わかった。あのゴキブリで修行して来る」

凛はそれだけ言うと、押入れの中に入って行った。しかし、絶え間なく続く悲鳴に、耳が半分壊れそうな状態だ。このまま勉強をしろとは、無理を言う。頭のいい奴ならともかく、俺は普通だから、こんな中で勉強なんか到底無理だ。

「おい。そんなに怖いなら出ろ。人間の姿だってな、耳がいいんだ。そう何度も怒鳴られて、耳が半分壊れた」
「だって、この中に入ってろって言ったじゃん」

凛は、半泣きになりながらこちらを振り返る。そこまで怖いなら、なぜ出てこようとしなかったのか。それは修行のためなのか。それとも、俺の言うことをちゃんと聞いていただけなのか。どちらにしろ、これ以上押入れにいられたら、俺の耳は半分ではなく、全く聞

こえなくなってしまう。それだけは避けねば。

「とにかく出て来い。うるさくて集中できない」

「亜修羅ってさ、なんか突っ張ってるみたいだけど、優しいよね？それに、最近は殺しの内容を断ってるしさ。前は普通に殺ってたのにさ」

「うるさい！気分があるんだ、気分が。最近は、偶々気分が乗らないだけだ」

とは言ったものの、殺しを引き受けなくなって来たのは事実である。元から悪いことなのだから、引き受けなくなっていいのだが、最近は、やはり冷酷になりきれない。だから、やっぱりダメだと思うようになって来ているのだ。

それにしても、どうしてこいつは俺の仕事内容を知っているのだろうか？見張っていたのか？

「あのさ、そんなにつらいならさ、どうして殺しなんかするのさ？いくら何でも屋と言ってもさ、殺しはまずいでしょ？まだ未成年だし。少年院に入るかもしれないけど」

「・・・・」

「じゃあ、もし僕がアルバイトに入ったら、僕に依頼の実行を選ばせてよ。亜修羅は、実行を行うの」

「ああ、そうだな。その時は任せる」

「やった♪」

「まだ、認めた訳じゃないからな。勘違いするなよ」

口から出た言葉はそっけないものだったが、俺の心はいつも以上に温かかった。

共同生活二

昨日は、凛がそのまま外にいて、家の主の俺がタンスで寝る羽目になった。本当は布団で眠りたいところだが、あのまま凛を押入れに寝かせておいたら、俺は眠るどころではなかっただろう。ギャーギャー騒ぎまくって、うるさいとアパートの住人に駆け込まれるとめんどうだから、仕方なしに俺の布団を貸すことになった。

「なんか、こう思うと、人間の姿になってても、妖狐のにおいは消えないよね？」

「おい、お前。人の布団で寝ておいて、においをずっと嗅ぎまくってたのか？そんな奴は即、お断りだな。それに、もう俺に近づくな」

「そんなんじゃないよ。僕も、亜修羅同様に鼻がいいでしょ？だから、意識してやろうとは思ってなかったんだけど、自然と鼻ににおいが入って来たんだよ」

「ふん。お前だって、人間のくせに、犬のにおいが強烈だぞ」

鼻をつまんで見せたところ、凛はそれを気にしていたのか、顔をしかめると、自分のにおいをかぎだした。まるで、加齢臭を気にしだした中年みたいだ。

「だよね、一日に五回は水を被るようにしてるんだけど・・・・」

と言うなり、凛は水道の蛇口の向きを無理やり上に曲げると、水道をひねった。もちろん、水は噴水のようにあたり一面に飛び散った。出してあった教科書にも、せっかくやったプリントにも。

それと同様に、凛と俺も水浸し。凛は満足そうだが、俺は怒ったいた。

「おい、何してくれるんだ！せっかくやった宿題のプリントや、教科書が濡れたじゃないか。結構苦労してやったんだぞ、この問題！！それに、これから学校行くって言うのに、制服も、体も、髪も！ビショビショじゃないか！！この髪、乾かすのに凄く時間がかかるんだぞ。三十分かかるんだぞ！！」

「あっ、ごめん。髪を乾かすのに、そんなにかかるとは思ってなかったから」

俺の髪は、普通の人間よりもめんどくさく、乾かすのにも時間がかかる上、そのままほうっておくと、大爆発を起こす。だから結果から言うと、長い時間をかけて髪を乾かさないと、ひどいことになると言うことだ。

「ったく、何てことしてくれる。後五分だぞ」

ブツブツ文句を言いながら髪を乾かす。ここで、決してバサバサと乱雑に乾かしてはならない。めんどくさいが、ブラシで解かしながら乾かさないと、爆発する。

「何か、亜修羅の乾かし方って、少女の乾かし方みたい。髪を傷つけないように、丁寧に、ブラシで解かすかしながらドライヤーで乾かしてるよね？」

「おい、それはお前に言える立場か？自分が髪をぬらしたくせに。ふざけるなよ」

「ごめん、じゃあ僕も亜修羅に合わせて遅刻するよ」

凛は勝手にそう決め、押入れを開けた途端、ドライヤーのうるさい音にかき消されないぐらいの大声をあげて、押入れをバンと閉めると、そのままドアを開けて出て行った。

これはいいチャンスだと思い、鍵を閉めると、また髪を乾かす作業に移った。それからしばらく立つと、ドアをドンドン叩く音が聞こえた。きっと、凛に違いない。

「開けて！開けて！！水をぶちまけたのは僕が悪かったから！」

最初はその言葉を無視して乾かしていたが、あまりにもうるさいので入れてやった。見ると、凛は半泣き状態である。本当に、こいつは犬神なのだろうか。それにしては、かなりの臆病者である。

「何で鍵なんかかけたのさ?僕を追い出すチャンスだと思ったの?」
「そうだ」
「また。何で、人を傷つける言葉を、そう即答で答えるのかな?」
「とにかく、学校行くぞ」
「ええぇ、せっかく休めると思ったのに」

ブチブチ文句を言う凛を引きずり出し、学校に向かう。頭にはせめてもの情けで帽子を被った。それに髪を入れれば大丈夫だろう。

なぜ帽子に髪を入れるのか。それは、ちゃんとした訳がある。人間の姿の俺は、髪がそう長くはないが、妖狐の姿になると長くなる。しかも、黒から金髪に代わるのだ。だから、完全に乾かさないといけないんだ。これは、生乾きの状態でいると起こることだから、普通にしっかりと乾かしていれば、普段の黒髪の短髪でいられる。

凛はやたらしつこく話しかけて来た。女よりもうるさくしつこいのだ。こいつといると、狂うなと思った俺は、通学路から外れた方向から学校に向かうことにした。こうすれば、凛もついて来はしない。

そうして、凛からの機関銃攻撃を何とか避けると、髪のことに気を配りながら、何とか学校に登校した。

「おはよ、伊織君。あれ？どうして帽子なんか被ってるの？」
「・・・・」

靴を履き替えている時に女が聞いて来る。それを無視し、そのまま階段を上って教室に向かう。そして鞄を机の横にかけると、本を取り出し、読み始めた。もちろん、帽子は被ったまま。

「おい伊織。お前、頭がおかしくなったんじゃないか？教室に入って来ても、まだ帽子を被ってるなんてよ」
「・・・・」
「目も悪くなったのか？」
「・・・・」
「おい、聞いてんのか？」

喧嘩っ早い男が俺の襟を掴んで凄んで来た。男は、俺が本から視線をはずし一瞥すると、場の悪い顔をして襟を放すと連れの奴らと離れて行った。

そのまま、襟を直すと席に着く。そして、また本に目を戻す。それが、ほとんどのことだった。俺から手を出すことはない。いや、出さずに終わるんだ。ただ、相手を見るだけで戦意喪失を誘うらしい。それはある意味で、幸を呼んでいるだろう。

しかし、それは、時に不幸を呼び寄せることもある。

「おい、一年坊、ちょっと面貸せや」

いかにも不良丸出しと言う男子生徒が、突然俺の教室に入り込んで来た。その途端、クラスメートは四方の隅に、お互いの身を縮めあっている。

ただ一人、俺だけが平然と読書をしていた。それが不良のプライドを傷つけたのか、俺を殴りつけようとする。それを、取り巻きの一人が差し押さえる。そして、何かを耳打ちすると、不良はおとなしくなった。

「お前か、最近転校して来た一年坊ってのは。しっかし、なんだ。俺の方がよっぽどイケてるじゃねぇか。顔のいい転校生が来たって騒ぎ立てまくってて、楽しみにしてたのによ」

不良は、つぶれたパグ似の顔を撫で回す。そして、取り巻きに鏡を出させると自分の顔をじっくりと眺めだした。こいつ、不良のうえにナルシストなんて、最悪だな。俺の方がよっぽどマシだ。自分でいい顔と言うのは引けるが、このパグのつぶれ顔よりは断然マシだ。

「お前の方がよっぽど不細工じゃないのか？パグとゴリラを掛け合わせたような顔をして。よく、そんな醜い顔を毎日眺めていられるな。いい加減、現実を直視したらどうだ？」

「お前、猿飛さんが一番気にしていることを・・・・」

「何か言ったか、沙山・・・・」

完全に怒っているパグのつぶれ顔。取り巻きの一人をにらみつけてから、さっきとは打って変わっての、殺意も感じられるほどの視線でこちらをにらんで来た。

しかし、こんな弱いにらみで負ける俺じゃない。妖怪でなら、この倍以上のにらみをする奴がいるんだ。

「いえ・・・・」
「パグのつぶれ顔。ここは、お前のクラスじゃないぞ。勘違いするな。俺たち、一年B組の教室だ。お前は、ペット小屋にでも押し込まれていろ」
「お前、猿飛さんをバカにするなぁー」

取り巻きの連中五人が、机や椅子を蹴散らし、拳を振り上げて襲い掛かって来る。俺は、戦うつもりはないが、仕方なしに立ち上がると、少し本気でにらみつけてやった。

すると、さっきとは打って変わって戦意喪失したようで、拳を下ろし、すごすごとパグのつぶれ顔の後ろに隠れた。

これが、妖怪のにらみってものだ。自分達のにらみがどれだけ可愛いものか、これでわかったか。俺にしてみれば、恋する女が相手を見つめる視線と同じくらいに感じたぞ。

さすがつぶれ顔。これ以上つぶれないらしく、何とか持ちこたえたらみたいでこっちを見ている。しかし、さっきまでの殺気すら感じる視線とは違い、今は恐れている様子が手に取るようにわかった。

「お前、なぜ教室内なのに帽子を被っているんだ?」
「パグのつぶれ顔には関係ないことだ」
「まさか、その下はツルツルだったりしてな」
「それは傑作ですね、猿飛さん。早速取って見ましょうか?」

その話を聞いて、クラスの男達の目の色が変わった。さっきまでは、恐れをなしていたのに、急に俺の帽子のことを取ることを目的にしたようだ。

そして、俺は挟み撃ちに遭った。しかし、何とかそれをみんな避け、教室の四隅の一つを後ろに、前を向いてドンドン迫って来る男達から離れようと後ずさる。その時、不意に帽子を取られた感触がした。

後ろを振り返ると、そこには無表情な顔が見える。いつも影が薄くて全然気づかれないのだが、男達にとってはそれが今には一番よかったことらしい。

帽子の中に押し込んでいた髪が、帽子を取られたことにより一気に滑り落ちた。光を浴びて、光るように輝く長い金髪を、その場にいた全員が呆然と眺めることとなった。

ついにバレるか・・・・

自分の迂闊さを呪いたいところだが、そんなことをしたってことが遅すぎる。どう説明をすればいいのか。

「はっはっはっはっ、金髪ロングかよ。趣味悪いな！」

「俺じゃ、恥ずかしくて無理だぜ」

最初は説明のことで迷っていたが、今の言葉は俺のプライドを傷つけた。髪の色はこれでも気に入っているのだ。それを、何も知らない奴に否定される覚えはない。

「人がどんな髪にしようが、その人の勝手だ。お前らに文句を言われる資格はない」

「へん、校則違反だぞ。女子だって、腰より上が上限なのに、お前はほぼ足元まであるじゃないか。それに、髪を染めるのだって禁止だしな」

「校則など、俺には関係ない。それに、これは地毛だ。決して染めている訳ではない。しかし、お前らのような泥に浸かった様な色は死んでも嫌だけどな」

「何？」

「パグのつぶれ顔。よくも帽子を取ってくれたな？おかげでこんなことになったじゃないか」

「うるせぃ、金髪ロングに言われたかねぇな」

再び言っておく。俺はこの色を気に入ったいる。それを、何も知らない奴に否定される覚えはない。

「痛い目に合いたいようだな」

少しばかり痛めつけたところで、何ともならないだろうと思い、構える。男達も構えた。
教室に長い沈黙が下りる。しかし、沈黙は意外な人物によって壊された。

「亜修羅！大変なんだよ、亜修羅、どこ！！」

凛だ。学校に行っているはずの凛が、なぜここにいるのかわからないが、今はとにかく本名で呼ぶのをやめさせたい。

「こっちだ」
「あ、亜修・・・・」
「ここでは本名で呼ぶな、いいな。伊織修だ」

こっちにやって来た凛の髪を引っ張ると、自分の方に引き寄せ、耳元で静かに言った。

「わかったよ、痛いから離してよ。せっかく危機を知らせてあげようと思ったのに・・・・って、その髪!?帽子は?」
「あのパグのつぶれ顔に取られた」
「あ、猿飛だ。あいつ、僕の学校の近くにある高校の三年生で、問題児なんだ。そいつが亜・・・・修に目をつけて。今日殴りこみに行ってやるとか言ってたから・・・・」

凛は、あまり状況が飲み込めていないのかキョロキョロと状況を察する何かを探しているように見える。

「亜修羅って、誰?」
「あっ、あだ名です。すみません、高校にあだ名で呼びに来てしま

って」
「そうなんだ」

女の一人が聞くと、凛がそれとなく答える。もしかしたら、凛の方が人間界滞在経験は上かもしれない。理由とか言い訳がそれなりに上手い。

「ねぇ、何か友美の言っていたことが現実っぽくなってない？」
「そうだよね、金髪だし、亜修羅って呼ばれてたし・・・・」

女達は、聞こえないようにコソコソ言っている。まずいな、帽子を取られた時点でまずいが、凛が来たことで状況が更に悪化した。ここをどう乗り切るか・・・・。

「あっ、獣耳!?」

女の一人がそう叫んで俺を指差す。とっさに目を上に向けると・・・・って見えない！じれったくなって凛に聞こうとすると・・・・。

「狐みたいですよね、伊織君って意外とマニアックなところがあって、コスプレとか好きなんですよ」

凛は、猫の耳がついたカチューシャのようなものを持っている。と言うことは、こいつが持ってるのを獣耳だと間違えたのか？いや、そんなことより。

「おい。なぜ、俺がマニアックなコスプレ好きな性格になっている？」
「しょうがないじゃない。ここではこう乗り切るしか。コスプレだったら、金髪ロングだって説明がつくし、女の子が見た獣耳もこう

言うのかもってことになるじゃん」
「わかった。帰ったらお前を四分の三殺しにするからな」
「やめて！！」

凛の言った通り、その仮説は何とか納得されたようだ。しかし、マニアックなコスプレ好きと認識されるのは、俺のプライドをどれだけ傷つけることになるか。そして、その原因を作った凛をどう罰するかをよーく考えることにした。

「ふん、コスプレが好きだったとはな。オタクじゃねぇか？こいつ。メイド喫茶とか言って、メイドといちゃついてたりしてな」
「いや、逆にプラモデルにはまってたりするかもな」
「それか、異次元のキャラクターに恋をして、ずっと追い続けてるとか。こいつの家、もしかしたら、フィギュアとか色んなもんがゴロゴロしてるかもな」
「離せ、凛。俺はこいつらをみんなの記憶から消し去る！」
「修、抑えて。ここでやったら、僕が一生懸命間考えて言った言い訳が台無しじゃないか」

俺は、プライドをズタズタに引き裂かれた代わりに、こいつらの体をズタズタに引き裂いてやろうかと思った。しかし、凛が体を羽交い絞めにして邪魔をする。いや、止めてくれている。心の大半は邪魔だと思っていたが、心の片隅ではありがたく思っていた。

「どれも違うな、こいつの部屋にはきっとエロ本とか転がってるぜ」
「待って、修」

凛の言葉は空しくも俺を抑えることが出来なかった。

腕を振り解くと、最後の言葉を言った男を壁に押し付けた。その間、

小数点の時間帯。人間では到底無理なスピードだ。

「お前、それ以上言ったら殺すぞ」

「・・・・・」

「・・・・・」

「あっちゃー」

凛を除く全員が、俺を凝視したまま固まった。無論、口も動かない。

固まっている奴らから帽子を奪うと、頭に被って髪を押し込むと、本を読む体制に入る。その時、チャイムが鳴り、教師が入って来た。

あれから、誰も俺とは口を聞かなかった。隣の女でさえも黙りこくっている。

しかし、そんなことを気にしていられるほど俺も暇な訳ではない。だから、さっさと家に帰った。

「お帰り、いやぁ、災難だったね」

「帰ったら、四分の三殺しって言ったな」

「えっ・・・・」

引きつった笑顔を向けて来る凛を無視し、近くにあったハサミを投

げる。それは、凛の横をスレスレに通り過ぎて、壁にグサッと刺さった。当たったら、凛ですら無傷では済まないだろう。

「四分の四が完全だ。それの手前だからな」
「よかった。でも・・・・本当はただ単に外したんじゃないの？」
「今度は本気でその頭にブッ刺すぞ」
「ごめんなさい」

凛は、素直に謝る。そうされると、怒っていた気持ちが失せる。妖怪でこんな潔い奴を見たことがない。やはり、こいつは変わっている。絶対に。

その時、玄関のチャイムが鳴った。俺は、ここでドアの外をしっかりと確認しておくべきだった。いつも、ドアの外を確認しないで開ける自分の迂闊さを、今、呪う事になる。

ドアを開けた先にいたのは、クラスメート全員。なぜ俺の家に集結したのかは一目瞭然だ。凛のせいだ。

「上がらせてもらうぜ」

何も言わない俺を奥へ押しやって、ギュウギュウに人が入って来る。凛はと言うと、ドアを開ける瞬間にどこかに行ったのか、見当たらなかった。

「あの中に何か入ってるのかもしれねぇぜ」

男が指差したのは、押入れの中。そこはまずい。依頼書を置いているところだ。

「そこは開けるな！第一、人の家に勝手に上がり込んで、何で物色してるんだ！」

「いやぁ、お前に汚名を着せるために」

止めようとする俺を、数人の男が羽交い絞めにして動かないようにする。いくら妖狐とは言え、人間の姿をしているんだから、数人の人間に抑えられちゃ身動きが取れない。

そして、男がゆっくり押入れを開けた。

不思議な気持ち

「なんだ、紙の束が大量に入ってるだけじゃねぇか。何だこれ、小学生と中学生の時の答案用紙じゃないか」
「・・・・なんだって？」
「お前、小さい頃はよっぽど頭が悪かったんだな。零点ばっかだぞ。いい方で二十点未満。どんだけ勉強したんだよ」
「そうか」

男の言葉を聞いて、一瞬目が点になったが、取りあえず依頼書が見られなくてよかった。しかし変だ。俺が人間界に来たのは最近。高校に入ったばかりの時。だから、小中学生のころのテストの答案なんて・・・・。

そこでふと思い浮かんだ顔がある。きっと凛が自分の答案用紙を入れたのだろう。あいつのやり方は気に食わないが、精一杯言い訳を考えてくれる。

しばらくクラスメートは俺の部屋を物色しまくった後、何もないとわかると、謝りもしないで帰って行った。

みなが帰った後、すぐに凛が帰って来た。そして、答案用紙を押入れから出すと、火で燃やし始めた!?

「おい、お前なにやってる!?ここは家の中だぞ。そんなものを家の中で燃やしたら・・・・。もしかして、それをやって家が全焼したのか？」
「うん。まぁ」
「じゃあ、やるな!ここは俺の家だぞ!!」

バコッと凛を叩く。すると、凛はその弾みでライターから手を離した。ライターは火が消えたからいいが、答案用紙も落としたからそこら辺に散らばっている燃えやすい物に引火して、ドンドン燃えて行く。そして、押入れの奥の方にあった依頼書も燃えそうになった。

「あっちゃー」

「あっちゃー。じゃない！早く火を止めろ！！」

凛はよたよたと歩いて、曲がった蛇口を思い切りひねる。すると、水がシャワーのように部屋中に飛び散って、勢いを増していた炎を一気に消した。火事の時は、この水道は役に立つかもしれない。

「ふぅ、危なかった・・・・」

「おい、危なかったじゃない！！もう少しで全焼しそうになったじゃないか。もし全焼したら、お前が弁償金だせよな」

「えっ、お金ないのわかってるでしょ？」

「とにかく、俺の家にいるならおとなしくしてろ！学校でも大変なんだ。家にいる時まで気を使わせないでくれ」

「だってさ、恥ずかしかったんだもん。小中学生の頃の答案用紙」

「わかったか？」

「・・・・はい」

凛はやっと反省して、押入れの中に入ろうとした。だけど、また悲鳴を上げて正反対にあるタンスに飛び込んだ。

「まだゴキブリを怖がてるのか？」

「だって、嫌いなものは嫌いなんだよ。ゴキブリを殺すスプレーとか買ってないの？」

「金の無駄だ。そんなのが無くても、スリッパでつぶせば済む」

「いやぁ！ゴキブリがつぶれたのって気持ち悪いんだよ。一層！！」
「お前の悲鳴の方が気持ち悪い。本当は女なんじゃないのか？」
「そんなことないよ。ちゃんとした男だよ」

そう言って出て来た凛は、男にも女にも見える。中性的と言うのか、どうなのか・・・・。

「じゃあ、ゴキブリのつぶれた死骸くらい一時間でも見ていられるほどになれよ」
「ダメだよ。気持ち悪いじゃん」
「ったく、そんなことを言っていたら妖怪と何か戦えないんじゃないのか？」
「そんなことはないよ。ほら、証拠写真」

凛は袖から写真を取り出した。そこには、ゴキブリよりも遥かに恐ろしく気持ちの悪い物体がいるが、凛は怖がっているようには見えない。ゴキブリだけに異常なまでの反応を起こすのか？こいつは。

それよりも、こいつは妖怪と戦うたびに記念写真を撮っているのか？おかしな奴だ。

「それで、今のところ、僕はどれくらい？やっぱりまだダメ？」
「百点中十点だ」
「ええぇ！！？それだけ？随分頑張ってるのに？」
「ああ、まだまだアルバイトにするには不足している部分が多すぎる。後四日で挽回不能なくらいにな」
「きっ、厳しい・・・・」

凛はガクッと肩を落とすと、そのまま、部屋の隅に体育座りで座り、ドロ～ンとした雰囲気を出し始めた。おいおい、そんなことで俺が

同情すると思うなよ。

しばらくはそれを無視して宿題をやっていたが、やけにそっちの方向が気になる。確かに、凛が来てから大変なことは色々あったが、面白いと思うこともあったし、何かと変な印象は持たれつつも、上手い言い訳を言ってかばってくれている。そこのところを考えてやらないとな。

「さっきのは訂正する。百点中、十二・五点だ」
「あんまし変わってないじゃん」
「二・五点上がったんだ。それ以上は、自分何とかしろ」
「そんなぁ、もう二十点ぐらい！」
「ダメだ」
「じゃあ、十五点！」
「断る」
「じゃあ、十点！！」
「いい加減にしろ！」
「じゃあ、五点でいいから・・・・」
「百点中、三十点だ」
「・・・・えっ？」

俺が急に言葉を変えて来たから、あまり認識が早く行われなかったのか、聞き返して来た。ああ、俺は段々甘くなって来てるな。極悪非道な妖狐も、ここまで甘くなるとは誰も思うまい。

「嫌なら零点だ」
「ありがとう、亜修羅！やっぱり亜修羅は優しいね！」
「二十点だ！」
「照れちゃって♪」
「うるさい、十点だ！」

凛のペースにはまるものの、不快な気持ちは一切しなかった。普通の相手ならば、相手のペースにはまったと思うと、不快な気持ちがするのに、自然と凛に大してはそう言う気持ちが起きない。実に不思議な妖怪だ、こいつも。

今日は、土曜日で学校が休みだから、凛はまだ起きない。もう七時だと言うのに。

今日は休みの日だから、六時に起きたのだが、平日は五時に起きている。早いと言う人もいるだろうが、俺は小さい頃からずっとその時間帯に起きているから、そんなに早いと思わない。

凛がいなかったら、もう出かけている時間帯なのだが、凛を一人で家に残すのはかなり危険な為、凛が起きるまで、昨日の宿題の続きをしていることにした。

二時間後、凛はやっと起き出した。九時まで寝たと言うのに、まだ眠たげだ。どれだけ眠れば眠気が治まるんだろうか、こいつは。

「凛、早速だが出かけるぞ」

「へぇ、何で？」

「食料や、その他の消費物を補充するためだ」

「亜修羅が一人で行って来れば？」
「いや、凛を一人で家に残すのは危険だと思うからな」
「それって、心配してくれてるの？」
「ああ、この家のな。俺が止めなかったら、凛はどんな無茶なことでもするだろう。それが、この家にとってどれだけ負担のかかることなのか。ただでさえ古いんだぞ、この家は。もっと丁寧に使ってもらわないと困るんだ」
「わかった。ふぁ～～」

凛は、寝ぼけ眼で大きく伸びをした後に欠伸をすると、布団から出て、自分が水道を曲げたのも覚えておらずに水をひねって、顔面に水がかかることになったが、取りあえずごしごしやってから拭いた。

しかし、冷たい水で顔を洗ったにも関わらず、まだ寝ぼけ眼でボーッとしている。寝過ぎて頭がボーッとしているんじゃないのか？

「ボケッとしてないで行くぞ。今日中に二十個の店を回るんだからな。休みはないと思え」
「えええぇぇぇ～～～」

随分と長い抗議の声を無視し、いつまでも出ない凛を引っ張り出すと、ドアを閉めて鍵をかけた。

「最初は銀行からだ」
「銀行ねぇ、ここからじゃ一番遠いじゃん」
「いいんだ。お前はただついて来るだけなんだからな」
「はぁ～い」

凛は何とか階段を下り切ったが、目の前の電信柱には気がつかなかったみたいで、まともに電信柱にぶつかった。

フラフラ～っとよろけたかと思ったら、バタンとその場で倒れてしまった。どうしようかと一瞬迷う。気絶した凛を置いて行ったら、ここまでつれて来た意味がなくなる。かと言って、背負って行くのは買い物が沢山あるから無理だ。と言うことは、ただ一つ。

「おい、起きろ。凛！」

気絶している凛の頬を思い切り叩く。すると、凛はむっくりと起き上がった。頬を押さえて顔をしかめている。

「痛ったいなぁー、何するのさ」
「お前がぶっ倒れたから起こしてやったんだろう」
「そっか、階段から下りた後の記憶がないからね。てっきり眠っちゃってるのかとばかり思ってたけど、気絶してたんだね」

気絶と眠りの違いもわからない凛に同情したけれど、言葉には表さなかった。出したら、すぐに凛のペースにはまることになる。

銀行まで歩いて行って番号札をもらうと、椅子に座った。凛はと言うと、俺よりも人間界にいた時間が長いはずなのに、銀行に初めて来た子供のようにはしゃぎまくっていた。

「おい、静かにしろ。お前の方がキャリアはあるんだろう？」
「えっ、キャビア？キャビアなんか食べたこと無いよ。家、貧乏だったし。キャビアが食べたいなら・・・・」
「キャビアなんか言っていない。キャリアと言ったんだ。とにかく座れ。人がジロジロこっち見てんのがわからないのか？不審者がられてるぞ」
「だって、亜・・っ修よりもここにいた時間は長いけど、それなり

に小さい頃からだから、銀行なんて両親に任せてて来たこと無いんだもん」

凛の言葉の、両親がいて当たり前のような口ぶりは、とても羨ましかった。俺は、もう直両親共に逝ってしまうからな。

「・・・もしかして、二人とも？」

「いや、今のところはお袋だけだが。親父ももう直ぐ逝く。自らその答えを選んだんだ。だから、きっともう直に」

「ごめん、知らなかったから・・・」

「いや、気にするな。それよりも、さっさと座れ！」

「はい」

俺は、少し驚いていた。今まで、凛を除いて詳しく自分の情報を漏らしたことはない。その情報を悪く使う奴がいるから、絶対に話してはならないと親父から教わったんだ。だから、その教えを守るように今まで話したことがないのに、なぜこいつの時だけさらっと口にしたんだ？

それだけが疑問だった。もちろん、凛には意図がないのはわかっている。こいつがそんなこと考えられるほど頭がよくないのはわかっている。と言うことは・・・信用してるのか？こいつを。

隣に座って、さっきもらった番号札を熱心に見ている凛の方を振り返る。いや、それはないな。こんな奴を簡単に信用するはずがない。

「何さ？」

「何でもない。それより、そのカードは破るなよ？破ったら番号わからなくなるからな」

「それぐらいわかってるよ。子供でもわかる」

「お前は、中学生でも子供並みの思考しか出来ないだろう？」
「ひっどい、その言い方はないと思うよ。例え小中学生の時の答案の点数が少しばかり低いからって」
そう言えば、誰かに対してからかったり軽い気持ちで口を利いたことなんて一度もない。やっぱりこいつには何かがあるのか？
「少しじゃないだろう。小学生の簡単な問題ですら二十点未満しか取れないなんて、想像すらつかない」
「その時代の僕にとっては大変だったんだ！」
「だから、静かにしろって言ってるだろう」
「む・・・・」
ムッとした顔で椅子に座り直す凛を見て、何だか不思議な気持ちになった。こんな気持ちは生まれてこのかた初めてだ。

指名手配

凛が来てから、今日で四日目だ。しかし、未だに凛の言動は理解しがたいものだ。

さっきも、どこから持って来たのかわからない防犯ブザーを家の中で引っ張り、キンキン鳴り響く音を部屋中に撒き散らした。

「おい、何やってんだ!耳が壊れるだろうが!!」

「僕だってわざと引っ張ったんじゃないんだけど、止めるために耳から手を離すとまずいから!鼓膜が破けて、耳が永遠に聞こえなくなっちゃうから!!」

「凛が引っ張ったんだろう?それぐらい責任を持って止めろ!!」

隣で縮こまっている凛を足蹴りすると、渋々と言った感じで凛が防犯ブザーに近づく。その光景は、まるで這い這いで猛犬を起こさないように前を歩くような感じに見えた。

やっとの思いで、部屋のど真ん中でうるさく鳴っている防犯ブザーを手にすると、凛は一秒もかからずに防犯ブザーを止めた。

やっと部屋中に響き渡るキンキンな音が止み、耳から手を離す。しかし、まだ耳鳴りがする。きっと、しばらくは耳鳴りが止むことはないだろう。

「何で防犯ブザーなんか鳴らすんだよ!!俺の耳を壊す気か?」

「僕だって、亜修羅と同じくらい耳が痛くなるんだ。そんな、自分の耳を痛めつけることなんかしないよ」

「じゃあ、何で防犯ブザーなんて持ってるんだよ。お前中三だろう

？男だろ？妖怪だろ？その三大原則があるのに、何で防犯ブザーなんか持ってんだ？」
「いや、これは友達も・・・・」
「嘘だろ？学校で配られたとか言うんじゃないだろうな？」
「そうだよ。まぁ、持ち主は僕じゃないけど。そろそろ持ち主が来る頃だと思うんだけど・・・・」

その時、チャイムが鳴った。俺は実のところ、中三で防犯ブザーを持っている奴がどんな奴なのかを見てみたいと言う気はあったが、凛にバレるとまたうるさく言われるから、必死にその衝動を堪えた。

「来た来た」

凛は俺の方を見ると、にやっと笑った。それが、嫌味なのか、それとも偶々なのかわからないけど、凄く嫌味に見えてムカつく。

「さっさと行け！」
「はいはい」

その返事を聞いて、嫌味だなと思った。そう言う察しはいいくせに、ゴキブリでギャーギャー喚くなんて。いい迷惑だ。こっちにしてみれば。

しかし、やっぱり気になり、そっと影に隠れて向こうを見た。すると、今までの疑問が一気に解決した。

凛が男だから、ずっと男だと思っていた。しかし、女ならありえるかもしれない。これで、一気に疑問が解決した。

ずっと観察していると、女は帰るようのなので、俺は急いで元の机

に座ると、平静を保った。俺、凛と付き合っていて、凄く人格が変わったな。前ならこんなコソコソなんかしないで、堂々と見て、バレたら殺ってたもんな。

「亜修羅、思春期の子供を持つお父さんみたいな行動しないでよ」
「俺はずっとここにいたぞ」
「わかってるよ、亜修羅がこっちを見てたこと。気配で感じたし、それに話をよく聞こうとして、耳に意識が行かなくなって獣耳になってるし」

指差されて、慌てて獣耳を消す。くそっ、またこいつにやられた。こいつを言い包める上手い方法はないなのか？

「・・・避けて！」
「わかってる」

凛は俺を突き飛ばそうとしたが、俺が突き飛ばす前に避けたから、凛は腹から地面に落ちた。その上を一本の細い針が通過し、壁に刺さった。その壁は見る見る腐食して行く。

「うわぁっ、この針、猛毒が塗ってあるよ。誰がこんなこと」
「知るか。お前がヘラヘラしてるから、恨みでも勝ったんじゃないのか？」
「いくら僕だって、そんなヘマはしないよ！」

そんなやり取りをしている間にも、猛毒を塗った針はビュンビュン飛んで来る。このままじゃ、家が崩れると思ったから、窓から外に出て森の方に走った。家を崩されたら溜まったもんじゃない。

「ねぇ、何で森の方に走ってるの？」

「そこなら、人への被害も少ないだろう」
「へぇ、亜修羅も色々と考えてるんだ」
「お前、こいつを倒したら、次はお前だ」
「冗談、冗談。それより、やっと僕の強さをわかってるもらえる機会が来たんだ。ここは、僕に任せてよ」
「ふん、泣いてしがみ付いてきても助けてやらないからな」
「わかってるさ、そんなことなんかしない。一瞬で型をつけるからさ」

いつものヘラヘラした感じの凛とは、少し雰囲気が違うなと思った俺は、その後は何も言わずに、凛がどういう行動をするのか、拝見させてもらおうと思った。

「お～～い、針鼠!!そんなちまちました攻撃してっと、俺がお前の息の根先に止めちゃうぞ!」
「そこまで及びはせん。なぜなら、お前は私の猛毒を浴びて塵も残さず腐るからだ」
「腐るって、塵も残るじゃないか」
「うるさい!お前はここで眠っていろ。私が用のあるのは、隣にいる妖狐なのだ」
「わかったよ。でも、それには及ばない。僕が君の事を、息をつく暇を与えずに引き摺り下ろしてあげる」

言うや否や、凛は人間の姿から犬神の姿に変わり、多くある木の中から一つに駆け上り、何かを爪に引っ掛けて引き摺り下ろして来た。

それは、針鼠だ。その名の通り、背中に沢山の針がついた針鼠。

「何すんじゃい!驚いたじゃないかい」
「僕は忠告したよ?僕が君の事を、息をつく暇を与えずに引き摺り

下ろしてあげるって。それで、どうして亜修羅を襲ったの？」
「魔界では、失踪した指名手配者の子供を捜している。しかし、中々見つからず、その子供に懸賞金がかけられた。その額は、一生楽して暮らして行ける程の額だ。その子供は金髪の妖狐らしい。だから、私は貴様を捕まえようとしたのだ。きっと、私以外にも貴様を狙っている奴がいるだろう。莫大な懸賞金がかけられているのだからな」
「そっか、素直に教えてくれてありがとう。素直に教えたから、亜修羅を襲ったことはチャラにしてあげる」
「もし、言わなかったら・・・・？」

針鼠は怯えた顔で、上から見下ろして来る犬神を見上げる。俺は思った。こいつも俺と同じ気持ちなのかもしれないと。

「即座に罰則。刑は死刑。わかった？」
「はっ、はい！！」
「よろしい。じゃあ、情報ご苦労さん」
「あの・・・・」
「何？」
「私をあなたの部下にして頂けないでしょうか？襲った身ではありますが、あなたの強さに惹かれました」

俺は、当たり前のように断ると思っていた。しかし、凛には俺の常識は通じなかった。

「いいよ。でも、裏切ったら死刑（地獄行き）の刑に処すよ」

凛は、そんな言葉をニコニコしながら言う。俺なら、無表情な顔で言う。なぜなら、そっちの方が迫力があると思うからだ。しかし、凛を見てわかった。満面の笑みで言われた方がよっぽど怖いんだな

って。

「死刑と、死刑（地獄行き）との違いは何でしょうか？」

「死刑にも、即死や、ジワジワと苦しみながら殺して行く方法があるんだけど、地獄行きは、犬神の冥道を開く力を使って行うことなんだ。まぁ、想像に任せるよ。ちなみに、冥道に行った奴はいくら苦しんでも死ねないから、永遠の苦しみをずっと味わうことになるんだよね。冥道に行ったことがある人の話に寄れば・・・・」

ここから先は、かなりまずい発言が多々あったため、強制的に取り除かせてもらった。冷徹に生きていたと思っていた自分が、砂糖くらい甘く感じる。それくらい、冥道とは恐ろしいものだった。そして、俺にとって凛と言う存在も、冥道と同じくらい恐ろしいものに変わった瞬間だった。

初めての仲間

「凛、お前はあの話を聞いて、俺を捕まえようとしないのか？」

森から帰る途中、ずっと聞いてみたかったことを、今、聞いた。

ここで何と答えられても仕方ない。まだ出会ってから浅い日付しか経っていないし、魔界に住むものなら、楽して金をもうけたいと思う奴がほとんどだと思っているからだ。

「あのさ、バカじゃないの？僕が亜修羅を捕まえようとしてたら、懸賞金のことを知った時点で捕まえて、警察に連れて行く。そのつもりがないから、さっきだって守ってあげたんでしょ？」

凛の言い方にかなり苛立ちを感じたが、あまり怒る気になれなかった。まだ、欲深い妖怪の中でこんな奴がいてよかったと思うしかなかった。

正直に言うと、犬神に姿を変えた凛には、俺も敵うどうかわからない。いつもヘラヘラしてるが、犬神になると、途端に性格がコロッと変わってしまう。変な奴だが、心強いと思うこともある。

「お前、そろそろ人間の姿に戻れよ。もうすぐ森から出るぞ」

「わかってる」

犬神の姿になると、凛は少し突っ張りになるようだ。しかも、俺と同じタイプだから余計に真似されているみたいでムカつくが・・・。

人間の姿に変わった途端、犬神の時の威厳と言うかなんと言うか、そんなものが一気に消えうせてしまった。それは、凛が自らでやっているのか。それとも、ただ性格が豹変しただけなのか・・・・。そこだけは謎だった。

「今日でとうとう七日目だね。約束の一週間」
「ああ、そうだな。お前は落ちた」
「え・・・・えええぇぇぇ!!」
「何をそんなに驚く?当たり前のことだろう」
「だって、そんなにあっさりと言われると・・・・。テレビとかでもそうじゃん。沢山溜めに溜めまくって、正解、不正解を言ってるじゃん。なのに、亜修羅は何の前触れもなく言うんだもん」
「そうか、そこを突っ込むのなら結果的には文句は無いんだな」
「・・・・」

今回は俺の方が勝っていたようだ。大人げないが、それがとてつもなく嬉しかった。普段から負けてばっかだと、何でもないことで勝っても嬉しいと思う。バカになったな、俺も。こんなことで喜ぶなんて。

「僕、頑張ったじゃん!何でダメなの?」
「いつ、お前に殺されるかわからないからだ」
「どうしてそう思うの?」

「・・・勘だ」
「勘で僕の人生を決めたって言うの？」
「人生って、大げさだな。こんなんで人生が決まる訳ないだろう」
俺は簡単に言った。しかし、よく考えてみれば、人間でも何かを感じるのか、妖怪を雇ってくれるところは少ない。もし雇ってもらえても、すぐに人間としてはあり得ない失敗をするからクビになる。そんな悪循環の連続なんだ。
「なぁ・・・・」
「じゃあ、もういいよ！ケチ！！」
凛は勝手に逆ギレして行ってしまった。あんまりにも早く事が過ぎて行ってしまったために、あまり認識が定かではなかったが、やっと正常に認識出来るようになった時、凛が泣いていることに気がついた。
さすがに悪いとは思ったが、どこかに行ってしまった後だったから、仕方なく帰路についた。
なぜ、凛を不合格にしたのか。それは、凛に殺されると思ったからではなく、懸賞金の件があるからだ。
確かに、凛は強いが、それと同じくらい単純である。だから、巻き込むのは危険と考えたんだ。本当はもっと違う言い方で言うつもりだったが、言えなかった。
何となく、暗い気持ちで家に帰ると、管理人に怒られた。鍵を開けたまま外出するのは無用心だと。普通は、家の中の参上を言うところだろうが。

管理人が帰った後の部屋は、何だか寂しげに思えた。一人しかいない部屋は、がらんどうで空しささえ感じた。

何とか寂しいと言う気持ちと、凛に悪いことをしたと言う気持ちを忘れるために、寝ようと思ったが、無理だった。

押入れを開けてみると、数匹のゴキブリが動いていた。殺しても殺しても出て来るこいつらは、本当に世界最強の生命力を誇ると言われても違和感はないな。

そんなことを思っていると、凛のことを思い出してしまい、無理やり忘れようと押入れをバンと閉めると、布団の中に潜り込んだ。

しかし、悶々と凛のことばかりが気になり、何事もはかどらなかった。いくら気を逸らそうとしてもだ。

森での出来事から一週間が経った日、奇跡的に凛と会うことが出来た。

すると、自分から突き放しておいて、話しかけてしまった。

「おい・・・・」
「あっ、亜修羅・・・・」

凛は、クルッと背を向けて歩いて行こうとしたが、とっさに手を伸ばして引き止めた。このチャンスを逃したら、多分ないだろう。だから、ここで本当のことを言う。

「待て！！」

「なっ、何さ・・・・」
「話がある！」
「あっ、そう。じゃあ、あそこで」

俺の気迫に押されたような感じで、物凄くうろたえている。指差した先には、公園があった。誰もいないから、何とか話せるだろう。いや、話さなければならない。

「話って何？」
「バイトのことだ」
「ああ、そのこと？気にしなくていいよ。僕も言い過ぎたし。でも大丈夫。バイト見つかったから」

俺は、一瞬迷った。しかし、自分の思ったことは正直に伝えた方がいいと思い、話すことにした。

「あの時、俺の評価では・・・・いや、評価なんかしていなかった。仲間になってもらいたかった。だが、俺に懸賞金がかけられてるってことは、当然、一緒にいる奴も狙われる。だから、お前の強さは知ってるけれど、気が進まなかった。決して、お前が俺を殺しそうだとか言う理由なんかじゃなかったことだけはわかってくれ。じゃあ」

一気に言うと、恥ずかしくなって、立ち上がりかけたが、凛に腕を掴まれた。

「そっか。じゃあ、バイトに入れてくれる？」
「だから言っただろう！お前も巻き込まれるかもしれないんだぞ」
「わかってるって、そんなこと。亜修羅にバイトとして働かせてくれって言った時から知ってた。だから、覚悟なんか十分に出来てる。

後は、亜修羅がいいと言うかで僕の採用、不採用が決まるんだよ。
どっちの結果が出ても、僕は未だにバイトが見つかってないけどさ」
「・・・・採用」
「聞こえない！」
「採用だ！」

なぜ、凛に怒られなくちゃいけないのかわからないが、喝を入れられたので、さっきの三倍の声で怒鳴ってやった。

耳を塞いでいたけれど、何だか嬉しそうだ。

俺もすがすがしい気持ちがしてよかった。凛も、凛なりに頑張ってくれた。それなのに、信用してやらないのは、可哀想だよな。

「なんで懸賞金のことを知っても、俺を襲わないんだ?」
「それは、そんなつもりはないから。ただそれだけのこと。最初は、やっぱり、懸賞金目当てに観察してたんだけど、何だか惹かれちゃったみたいで」
「惹かれたなんて気持ち悪い言い方するのはやめろ!俺が引くぞ」
「じゃあ、好きって言えばいいの?」
「それはもっとおかしい!」

恥ずかしい気持ちが一気にこみ上げて来る。今までそんなことを誰からも言われたことがないから・・・・。

「ああ、亜修羅。今、なにか変なこと考えたでしょ?顔が真っ赤だよ、いやらしいなぁ」
「ふざけるな!お前が変なことを言ったからだろう」
「変なことって・・・・。友達のこと好き?とか、嫌い?とかって表現あるじゃん」
「だからってな、そんなこと言われたこともない奴に・・・・」
「ええぇ!!?ないの?言われたことないの?可哀想に・・・・」

凛の哀れみと半ばバカにしたような顔に、さっきまでの恥ずかしさは消え、逆に怒りが湧いて出た。

「うるさい、お前みたいな奴にわかるか!両親もいて幸せな奴にはな!」
「ああ、そうだ。その話、全くの嘘」
「う・・・・嘘?」
「うん、家を全焼しちゃったのは本当だけど、仮の両親だっていな

いし、本当の両親も行方不明なんだよ」
「そうなのか」
「怒った？」
「いや、損した」
「？」

俺の言葉の意味がわからない凛は、はてなマークを顔中に浮かべたけど、俺は答えを言わずにいた。言ったら、どうせまたからかわれるに決まっている。

学校では、相変わらず変人扱いを受けてはいるが、毎回屋上に退散するので、あまり気にならなくなった。

本当は、俺が逃げる必要なんてない。ただ、懸賞金がかけられている身ともなると、周りの生徒と親しくしてはならない。関係ないのに狙われたら、助ける俺が大変だ。

しかし、どうしてもついて来る奴がいる。

「何でいつもここにいるんだ。俺に学校に来るなって言いたいのか？」
「違うよ、私のことは気にしないで」

そう。屋上に避難すると、毎回女がいる。屋上にいる時は静かなのだが、後ろからずっと見て来るから、眠るどころではない。最近は大分睡眠が取れるようになったものの、前だったら、俺は怒っただろう。

「気にするなって、気にするだろう普通。そんなにジッと見られたら」

「ごっ、ごめん」

俺は、しょうがなしに場所を移動した。ここは、日当たりも悪いし風通しも悪い。だから、あまり好きではない。

そう思いながらも眠ってしまった。自分でも無神経だと思うが・・・。

眠っている間を襲われることはなかったのが、不幸中の幸いだった。

少しボーッとする頭を振りながら影から出て来ると、凄く多い妖怪が屋上を埋め尽くしていた。

「いたぞ、一気にやっちまえ～～！！」

「ったく、外道は外道なりの考えがあるようだが。そんなの俺に通用すると思ってるのか？」

変化をを解き、妖狐の姿に戻る。それから、チャイムがなりそうなので一気に型をつけることにした。

「烈火郷満層！」

妖怪達の足元から、烈火の如く、マグマが吹き上げられた。それは、

妖怪たちの真上から降って来て、赤いドームのようだ。
そして、一匹残らず倒した後、何事も無かったかの用に教室に戻った。

しかし、授業はとっくに始まっていて、教師にいびられた。最悪なことに、数学の教師だ。

「伊織、なぜ遅れた。理由を言え！」
「寝過ごしました」
「何？寝過ごしただと？わしの授業の時ばかり遅れて！」
「いえ、そんなことはありません」
「なら、どう言うことだ？」
「他の授業でも遅れます」
「ふん。不良生徒が」

こいつは、教師のくせに変態だ。男には厳しいくせに、女には砂糖のように甘い。なぜ、こんな奴が教師をやっていられるのか俺も不思議だが、みんなもきっとそう思ってるだろう。

「先生、もう許してあげて下さい。伊織君は、あんまり寝る時間がないんです」
「・・・うむ、仕方ない許してやる。でも、今度は遅れてこないように！」

教師は難しい顔をしているが、明らかに気に入りの女に止められたから、即、俺を咎めるのをやめたのだろう。そして、そのお気に入りの女とは・・・。

「浅積先生、伊織君には特に厳しいからね。大丈夫だった？」

「ああ」

隣の席の女。うるさく話しかけて来てうざいと思ってる奴だった。きっと、この女が俺のことを好きだと感づいているから、男の中でも特に俺に厳しいのだろう。いい迷惑だ。

「何で伊織君にはあんなに厳しいんだろうね？」

「知るか」

こいつは、本当に鈍感だ。他の女は、浅積の変態のような動きに気づいていて、みんな、目を合わせないようにしているが、こいつはそんなことにも気がつかず、普通に接している。恐ろしいほど鈍感な奴だ。

「逆に、私には優しいし」

「・・・・」

「ねぇ、どうしてかな？」

女がそう聞いた時、浅積の頭に角のようなものが一瞬見えた。とっさに立ち上がってしまって、浅積ににらまれる。

「何か？」

「いえ・・・・」

確かに見えた。鬼のような角が。これは、少し見張る必要があるな。そう直感した。

見張らないといけないなと確信した時からずっと張っているだが、奴は本当に変態だ。それを見ているこっちまで嫌気が差して来る。

前を歩く女のスカートをめくろうとしたり、前から来る女の胸を見てニヤニヤ笑っているし。仕舞いには、わざとぶつかってみたりと言うことを毎回している。

ああ、こいつが妖怪だったら即刻殺してやりたい。そう思いながら変態行為をジッと見ていた。

そんなげっそりしそうな光景を見続け、やっと放課後になった。今のところ、変態行為は行っているが、妖怪関係の怪しいことはしていない。

そろそろ帰ろうかと思った時、声が聞こえた。声の主は、奴の気に入りの女と、奴だ。気に入りの女とは、言わずと知れている、うざい女のことだ。

俺は、かなり遠くから見張っていた。視力だけは、妖狐の姿の時とかわらないからだ。しかし、耳はそこまでよくないために会話が聞こえない。しかし、女が嫌がっているのがわかった。

その時、俺の中で何かが切れた音がした。もう、これ以上あいつの変態行為を見ていられない。

俺は、躊躇いも無く妖狐の姿に戻ると、浅積の頭を思い切り殴った。

本当は、奴をバラバラに引き裂いてやりたいぐらいだ。しかし、俺はそこまで理性を失っていた訳ではないので、何とか殴るだけですんだ。

しかし、妖怪の思い切りを頭で受けた人間は即死だろう。それでも起き上がったら妖怪・・・・。

そいつは、見事起き上がった。よし、妖怪なら手加減なしで大丈夫だな。

「邪魔をするな！なぜ邪魔をする。わしのこの悲しい気持ちがわからんくせに！！」

「外道の気持ちなんぞ、俺にはわかるか！特に、変態の気持ちなんざ更々わからない。何で、お前の遊び道具としてこいつを使った？」

完全に鬼の姿と化した浅積に向かって言う。それから、チラと女の方を見やった。しかし、それがまずかった。

「その子が一番の好みなんだ。お前もそうだろう、亜修羅」

見てはいけないものを見て、慌てて前を向く。くそっ、こいつの意図が読めない。なぜ襲おうとしない。そう言う奴が一番面倒なんだ。

「俺は違う。それより、あいつの服を返せ！」

「いやじゃ、せめてこれだけでも持って帰る」

ああ、本当にこいつを殺してやりたい。そんな衝動を必死に堪える。こいつは、何がしたいんだ？俺の動揺ぶりを見て楽しんでるのか？

「返せ、今なら瀕死状態で生かしておいてやる」

「ダメだ。本当は、この下のやつがよかったけどお前に邪魔された

からな。しょうがなしにこれで我慢しようって言うんだ」

そいつは、女の着ていたブラウスを大事そうに抱えている。・・・・吐き気がする。なぜ、こんな奴に付き合ってなくちゃならないのか。さっさと殺ってしまいたい。

まだ幸いなのは、女が気絶していることだ。出なかったらこいつは・・・・どうなっていただろうか？

「しょうがない。じゃあ、お前を大事な服ごと煉獄の炎で燃やしつくしてやる！烈火郷満層！！」

「あじゃーーーーー！！！」

そいつは、俺を迷わせた割には弱かった。簡単にやられた。しかし、問題が残った。女のブラウスまで勢いで燃やしてしまった。

その時、ある考えが浮かんだ。それは、俺のを貸すこと。俺はと言うと、その間はずっと妖狐の姿でいれば問題はない。

服の問題は片付いたが、今度は俺がまた変な目で見られることになる。もう、それはいいか。すでにクラスメートから変な目で見られてるもんな。

学校に置いて行くのもなんだから、家に運ぼうとした時、まずいことに女が意識を取り戻した。なぜ、こんな最悪なタイミングに・・・・。

「あっ、ありがとう」

「？」

何て言われるかと思ったが、全く予想していなかった言葉に驚きを隠せなかった。こいつ、狂ってるのか？

「だって、助けてくれた上に服まで貸してくれたでしょ？」

ああ、やっぱり、妖狐の姿になっても服さえあればバレるか。まぁ、上着なら二枚あるからな、そのまま家に帰っても、もう一枚あったから大丈夫だ。

「ちゃんと着ないと風邪ひくぞ」

女は、そう言われてやっと自分の惨状がわかったようで、小さく悲鳴を上げてからボタンを閉めた。

「・・・あの、伊織君？」
「そんな奴は知らん」
「でも、生徒手帳・・・・」

ダメだ、嘘を突き通せない。生徒手帳を見られるとは思ってもみなかった。

「ああ、そうだ」
「まさか、本当だったんだね。伊織君って、妖狐って言う種類なんだね。本名は亜修羅って方なんでしょ？」
「まあな」
「かなりびっくり・・・・」
「俺はもう行くから」
「でも、これは？」
「もう一つあるから安心しろ」
「本当にびっくりだよ・・・・」

俺はその声と同時にその場を離れたが、最後の言葉を聞き取ることが出来た。
それは・・・・。

モテ談議

「初恋の相手！？」
「ああ」
「あり得ない、あんな可愛い子が・・・・こんな亜修羅に惚れるなんて・・・・」

愕然と言った様子でフラフラと座りこむ凛。絶対芝居だなと思って話しかける。

「何で、俺があいつに惚れられて、そんなに気落ちする？」

すると、やはり芝居だったようで、電光石火の如く立ち上がると、俺の短所を続々と話し出した。

「だって、冷徹だし、女の子に冷たいし、僕にも冷たいし、ハムスターにも冷たいし、ナマケモノにも冷たいし、それに懸賞金が賭けられてるし・・・・」

そこでビシッと指差して来る。

「それに、無愛想だしね。女の子には、全くモテないと思ってたんだけどな・・・・」

凛は、長々と、ゆうに十分くらいは俺の短所を言いまくった。そんな、一ヶ月も一緒にいないのに、どこで短所を見つけたのか。俺が、短所だらけなのか？もしくは、俺の短所しか見ていなかったのか。

「じゃあ、長所はどこだ？」

「・・・あ・・・・う」

さっきまでの機関銃並の勢いは消えて、線香花火のようにおとなしくなった。どうやら、「俺の短所しか見ていなかった」が正解だったようだ。

「おい、どうしてそこで止まる？」
「だって・・・長所なんか・・・・。あっ、金髪！！」

俺は、凛を殴った。なぜ金髪が長所なんだ。とことん人の短所しかみない奴だ。まぁ、凛の長所を言えと言われても、俺も言えないだろう。

「あっ、そうそう。文化祭来ない？」
「なぜ、俺の短所からその話に移った？」
「何か忘れてるな・・・と思ってて。亜修羅に殴られたらスッポンと思い出してね」
「文化祭・・・・」
「そう。面白いよ？聞いた事ない？」
「俺は、そこまでバカじゃない！」

文化祭。前に聞いたことがある。その日だけは授業は一切無く、ただ遊びまくる日。そう聞いていた。

「明日は、遊びまくる日なのか？」
「違う、違う。学校が学校じゃなくなるって日かな？詳しいことは明日来たらわかるよ」
「・・・面白いか？」
「当然♪」
「わかった。明日、文化祭に行こう」

「やった♪」

俺は、凛の喜びようを見て、何かよからぬことを感じたが、時すでに遅し。今から断る訳にも行かず、仕方なく行くことにした。

「でもな・・・。まぁ、いいか。僕だって・・・うん」
「何だよ、その、一人で納得って言うのは」
「えっ、いや。亜修羅もモテるんだねって話してたんだ」
「まだその話しするのか？」
「ふふん。まさか、自分に自信がないんじゃないの？」
「そう言うお前はどうなんだよ？」
「僕？僕はね、はっきり言って、自信あるよ。モテるしね」
「嘘つくな、お前のどこがいいんだ？バカでボケでヘラヘラして、その上人をいびってる奴じゃないか」

俺の言葉に、凛は顔をしかめた。まるで心外だと言いたげだ。本当に思ってるのだろうが。

「心外だな。もっと言い方を優しくするんだよ。ボケのところを、天然とかさ。ヘラヘラってところを面白いって。そうやって口が悪いからモテないんだよ」
「お前の中の俺は全てがモテないんだろう？わかってる。それくらい」
「そんなことないよ。いいところもあると思ってる」
「じゃあ、どこだ？三秒以内に答えろ」
「・・・そう言うところがいけないんだよ」
「おい、今、話を逸らしたな！そんなことをモテる奴がやっていいのか？」
「今は別！これも臨機応変ってやつだもん」

凛は、上手く俺の攻撃を避けた。こいつ、口だけは達者だからな。頭は空っぽだけど。

「勉強が出来なくたってモテるんだよ。空っぽとか言わないでよ」
「ふん、勉強できない奴は、バカだって言われるのが落ちだ」
「でも、僕は教えてくれるよ？」
「・・・・凛は凛だ！」
「僕さ、人間界に来る前、随分と大変だったから、人間界ではモテないように普通に行こうと思ってたんだけど、やっぱり無理だったよ・・・・」
「自慢するな！」

俺が殴ろうとすると、凛はひょいと避けた。しかしその手は考えてあって、足で凛の足を引っ掛けた。

ドシンと凛がずっこける。ざまぁ見ろ。人のことをいびるからそんな目に会うんだ。

「いたたた。でもさ、亜修羅だって、何もしゃべらないで立ってるだけならかっこいいと思うんだけどな」
「お前は、普通に立っててもかっこがつかないがな」
「いやいや、そんなことはありませんよ。でもさ、やっぱり、男の子も女の子も、こう言う話が好きだよね？亜修羅が話にノッて来るなんて意外だったよ。クールな人だから、ノッて来ないと思ってたのに」
「うるさい、これとクールは関係ない！」
「まぁ、そう言う口調を直せばいいと思うんだけどな」
「凛に俺の口調に文句を言う権利はない！」

それからしばらく間、その話が続いたのだった。

文化祭

とうとう、嫌な予感がした文化祭当日。俺はあまり眠れなくて大変だったと言うのに、凛はと言うと、呑気に枕を抱えて寝ている。

その幸せそうな顔を見ていると、邪魔してやりたくなるが、ぐっと堪える。いくら飛んだり跳ねたりしたって、こいつは起きるはずがない。そして、下にいる住人に文句を言われるだけだ。

九時から文化祭が始まるらしい。生徒は、七時に行って、最終準備を行うらしいが・・・・。六時の現在。凛は未だに深い眠りについている。本当に、こいつは文化祭に間に合うのだろうか？しかし、起こさなくていいって言ったのは自分だしな。

と言うのは昨日・・・・。

「七時に行くことになってるんだけど、僕のことは起こさなくていいからね」
「何でだ？」
「いいの。絶対七時五分前には起きるから」

・・・と言うことがあったのだ。だから、凛を起こさずに、観葉植物のように、ずっと見ている。しかし、凛は起きるどころか、寝返りすらしない熟睡よう。これじゃ起きないだろう。最悪は起こしてやろうか。

その時、六時五十五分になった。すると、今まで熟睡していた凛が起き上がった。

「ほらね？」
「ああ、そうだな。じゃあ、いつもそうやって起きてくれ。俺も毎朝起こして大変なんだ」
「ダメだよ、これは相当感情が高ぶってないと出来ないんだから」
「ほら、さっさと行って来いよ。後五分だぞ」
「何言ってんのさ。亜修羅も来るんだよ」
「・・・そう言うことか」
「あっ、バレてました？」
「とっくの昔だ。でも、今更断っても遅いよって言われそうだったから言わなかっただけの話だ」
「やった！人数が足りなくて」
「それで、凛のクラスはどんな出し物をするんだ？」

俺が聞くと、凛は思い切り顔をしかめた。この表情、しっかり心構えをしておかないと。変なことを言い出す時にする表情だ。

「メイド喫茶」
「何てマニアックな・・・」
「しかも、男女、係反対なんだよね・・・」
「・・・まさか」

俺がゆっくりと凛の方を振り返ると、凛は目を逸らした。俺の考えがイエスってことを表している。そんなの、いくら手伝いとは言え、俺は死んでも嫌だぞ！

「俺は行かない。一人で行って来い」
「そんな、見捨てないで！！お願いだからついて来て！本当にお願い！！」
「俺は、そんなことをするぐらいなら、死んだ方がマシだ。むしろ、積極的にそっちを望むぞ！」

「もう、わがまま言ったり、いびったりしないから！」

自分がわがまま言っていたり、からかったりいびっていたりしていたことはわかってたみたいだ。まだわからないよりはマシだが、わかっていてやるのも気分が悪い。そして、そんな凛に振り回されている自分も腹立たしい。

「どんなことがあっても行くか！例え、永遠の命が手に入ると言われようが、一生遊んで暮らせる分の金をあげると言われても、死んでも嫌だ！！」

「でも、僕が地獄の底まで追いかけてやるから・・・・」

そう言われて、不意に悪寒が走った。

「・・・わかった。じゃあ、行くから、それ以外の仕事させろよな。させた時は、即刻クビとは言わず、首だ」

「わかった。じゃあ、行こう♪」

凛に手を引かれ、嫌々ついて行く俺。前を歩く凛は、鼻歌まで歌っている。これは、完璧にさせられるだろう。

「僕の学校は、ここだよ」

そこは、明らかに、今日は文化祭をやるとわかった。なぜなら、校門の上に大きなアーチがあって、それが校内に続いていて、その一番最初に文化祭って書いてあるんだ。これを見てわからない奴は、子供以下だ。

「そうか。見れば、誰だってわかるはずだ」

凛は、細かく学校の場所の説明をし、最後に自分の教室に入った。
中は電気がついていて、人の熱気が凄い。みな、感情が高ぶって、興奮しているからだろう。

「おーい、みんな、注目!!昨日、僕が手伝いに来てくれる人がいるって言った、その人」
「その人って言い方ないだろう、無理やりつれて来たくせに」
「ここから少し遠いところにある高校に通ってる、僕のお兄ちゃん。修って言うんだ」
「おい、勝手に人を兄に・・・・」

隣にいる凛に愚痴を言っていると、今まで沈黙を流し続けていた凛のクラスメートがうわぁと一気に叫びだした。

そのうるささには、凛まで耳を塞いでいる。俺も、もちろん耳をしっかりとガード。

すると、抑えていたその腕を誰かが取り、俺をどこかに連れて行った。

「おい、どこに連れてく気だ?」
「宗介から聞いてないんですか?うちの出し物は、男女逆転のメイド喫茶だって」
「・・・・」
「その着替えに行くんですよ。教室の中にはほとんど男子がいなかったでしょう?それは、衣装合わせをする為。最後の衣装合わせを」
「・・・・」
「どうしたんですか?」
「どうもこうも、無理やり手伝わされて、何で女装なんかしなくちゃならない!」

「えっと・・・・」

俺がそいつにまくし立てていると、廊下の方から足音が聞こえる。凛の足音だ。大体それぐらいはわかる。

「修、僕もやるから。お願い！あっ、英助は向こうに戻っていていいから。修には僕が頼み通す」

「わかった」

二人は勝手に会話を交わし、連れてこうとした男の方は帰って行った。残るは、俺と凛だけ。

「本当にお願い、どうしても・・・・」

「どんなことすんだ？」

「内容は比較的簡単だよ。ただ、洋服を来てオーダーに答えるだけ。女の子が後ろで作るから、僕らが被害者に・・・・」

「凛もやるんだよな？」

「当然。人手が足りないんだから」

「わかった。でも、なんでそんなことをすることになったんだ？進んでやる訳ないだろ？」

俺の言葉に、凛がため息をついて説明をしてくれたのだが、あまりにも長いから、俺が短縮して説明をすると、実は、隣のクラスと喧嘩をしたらしく、その時に、クラスメートの一人が、「お前等なんか、俺達が女装したって勝てるな！」って言ったのが始まりらしく、本人たちは冗談のつもりが、隣のクラスの奴等が校長に言って、可哀相なことに、こんなことをする羽目になったらしい。

それにしても、校長も、よくこんな訳のわからないことを承諾したと思うだろう。校長いわく、「面白ければ何でもいい」らしい。そ

れに巻き込まれるこっちの気持ちにもなってくれ・・・・。

「何で俺が巻き込まれるんだよ?学校の問題に、俺は関係ないだろ?」

「いいって言った時点で、契約されてるんだよ」

「じゃあ、終わったら遊ばせろよ?それぐらいの権利は俺にもあるよな?」

「もちろん!でも、残念だけど、今日は遊ぶこと出来ないからね。その代わり、二日目は思い切り遊ぶことが出来るよ!まぁ、二日目に遊んだ方がラッキーだから。我慢して!」

「・・・・ああ」

もう投げやりに答えた。何を言っても避けられない。そうわかっているからだ。なら、明日、沢山遊べばいい。俺にしては珍しいプラス思考で行くことにした。

「おお、宗介!!と、隣にいんのは誰だ?」

「僕のお兄ちゃん!」

「随分顔が違うな」

「まぁね」

「再び聞くが、何で、俺がお前の兄貴になってるんだ?思い切り違和感を感じるんだが」

「そう?僕は別に普通だけど」

平然と凛は言い切るが、俺は全くそんな風に流せない。

と言うか、クラスの奴等も、どうして、兄がこんなことをするのを止めないのだろうか?凛と思考が似ていて、道連れにしようとしているのだろうか?

そんな俺の気持ちには全く気づかずに、凛は、先に教室の様子を伺

うと、手招きをして来た。教室の中は、さっきの熱気とは明らかに違い、冷たい空気が流れていた。みな、自分の女装姿に呆然としていると言った方が相応しいのかもしれない。

「はい、修」
「・・・・」

それは、やはりメイド喫茶だからだろうが、メイド服。それを見ると、明らかに気分が不快になる。しかし、凛はと言うと、普通な態度だ。こいつ、そう言う一面もあるのか？

もし、こいつがあるとしても、俺はそう言う一面はないのだ。巻き込まれる俺は、悲劇としかいいようがない。

「ああ、言っとくけど、僕が普通なのは、こう言うのに慣れてるからってことで、決してそう言う意図は無いんでね。頼んだよ」

凛は、いつも俺の考えを見透かす。心の声まで聞かれるのかと思うほどだが、違うようだ。何となくの勘らしい。

それにしても、慣れてるって、どう言う意味だろうか？そう言う一面がないのなら、どうして慣れる必要がある？

頭の中が疑問で一杯な俺を無視して、凛が再び話し始める。

「あっ、それと、着替えが終わった人は、第一理科室に行って。そっちに女子がいるから。そこでメイクしてもらって」
「おい、聞いてないぞ。メイクまでするのか？」
「当然。それとも、素の顔でやりたいの？知り合いが来た時、バレたら恥ずかしいどころじゃないでしょ？」

「ああ、それもそうだな」

凛の肩に置いていた手の力を抜くと、改めてメイド服とにらめっこをする。しかし、いくらにらんでも、服には効果が現れるはずもなく、仕方なく着替えることにした。

いつもなら、魔法とかは信じない俺だが、今だけは、魔法が使えたらよかったと思った。自分の姿を消して、この場から去れるから。

しかし、そんなことが出来るはずもない。そんなことを考える自分が哀れに思えて、ため息をついた。

何が悲しくて、朝っぱらから女装なんかさせられるのか。そして、なぜ一日中着ていなくちゃいけないのか。

「なぁ、凛のクラス、人数少ないな」

「ああ、本当は倍くらいいるんだけど、隣のクラスに吸収されちゃって」

「どう言う意味だ？」

「向こうもこっちと同じ喫茶店なんだけど、違う点は『メイド』じゃなくて『イケメン』」

・・・あんまり変わってないような気がする。内容的にはかなり変わっているが、全体を見ると、変な方向に傾いてるぞ、この学年。

「断然、女装よりも男のままがいいと言う人がいてさ。みんなそっちに行っちゃった。この学校はね、文化祭で一番の売り上げを記録したところには賞品がもらえるんだ。それを目当てに頑張ってるんだけどね。隣のクラスが強敵で・・・・」

「俺も、女装をするくらいなら、向こうに行きたいと思うぞ」

「ダメだよ。だって、もう遅いもん」
「・・・・はぁ」

俺は、凛の話を聞きながら着替えていた。そして、呆然とした。違和感が無いのだ。髪が短いのが少し変だが、それ以外は一切無し。それに、呆然としてしまった。

実を言うと、勝負とかが大好きな俺は、そこで話をやめた凛に続きを話してもらいたくて、簡易の試着室のような場所から出て来た。

「それで、どうなるんだ?」
「えっと・・・・毎回向こうの・・・・」

動きが一時停止したように止まった。少しの沈黙の後、凛は戸惑いながらも話を再開させた。しかし、目線は俺の上下をずっと往復し続けているのだが・・・・。

その視線が何を言いたいのか、とてもよくわかる。しかし、言ったら無傷じゃ済まさないぞ。

「クラスが勝っちゃうから、今年は最後の文化祭だし。さらに気合を入れて行こうってことで」
「なら、何でメイドなんかにしたんだ?向こうと同じ『いけめん』とかにすればいいだろう?そっちの方が平等だ」
「もしかして、亜修羅。勝負とか賭け事、大好き?」
「ああ」
「それに加えて、女装が大嫌い?」
「誰でもそうだろう」
「別に、そこまで嫌がることはないと思うんだけどな・・・・」

その発言を聞いて、やはりこいつはそう言う一面があるのだと確信した。普通の男なら、俺ぐらい嫌がるのが普通だ。しかし、こいつは平然としている。決まりだ。

「まぁ、仕方ないからやるさ」

俺の答えに安心したように、凛が自分も簡易の試着室のようなものに入って着替える。

俺はその間、目の前にある等身大を映す鏡で自分の姿を確認していた。

ああ、俺の顔は女に似てるから違和感がないってことなのか？悲しすぎるぞ、そんな事実。

鏡を見ながら心でそんなことをつぶやいていると、肩をポンッと叩かれた。

「じゃっ、行く？」

早々と着替えて来た凛も様になっていた。元から少し髪が長いところもあって、これじゃあ女に間違われるのが当たり前かもしれない。

第一理科室では、男が椅子に座って、女が化粧をしていると言う妙な組み合わせが沢山あった。

「誰か、空いてる人いるかな？二人」

誰からとも無く視線がこちらへ向けられる。その目は・・・何とも言いたくはなかった。自分が自分じゃなくなるような気もするし

な。それに、大体想像がつくだろ？

「えっと、こっちが・・・・」

向こうの端っこの方で、声と指が見えた。

「あっちだってさ」

「見ればわかる」

「そんなに怒んないで。これから、修の大好きな勝負が始まるよ」

手が挙がった方向に向かい、空いている席に座る。たまたま、凛も隣だった。

十分後、俺は完全に女になってしまった。もう、服を着替えて、化粧を落とさない限り、男である証拠を示せる物はない。俺は、このまま男としての自覚を失ってしまうんじゃないか・・・・。

そう思うくらい、女になりきっていた。

「あっと、もうこんな時間だ。最終チェックをして来なくちゃ。修も来て！」

「ああ」

凛も、俺と大差ないのが不幸中の幸いだったから、まだよかった。しかし、そんなものでまぎれるほど、俺の心の傷は浅くはない。きっと、一生深く刻まれるだろう。

凛だったら、「これも、一種の思い出だと思って！」と言うだろうが、俺はそこまで器用な奴じゃないんだ。

「準備ＯＫ。もう直ぐ勝負が始まるよ？大丈夫？」
「ああ、勝負はやるからには勝つ。それが俺のモットーだ」

俺は、精一杯頑張ることを決めた。こんな姿になってまでやるんだ。これで負けたら、俺の心は一生回復しないだろう。だから、心の傷を少しでも浅くする為、勝利を掴み取るんだ！

文化祭は大変

やるからには勝ちたいと思う。しかし、何をすれば勝てるのかわからない。

そもそも、こんなことで、勝てるのか?せめて、役割が逆ならまだしも、女装で勝てる気なんかさらさらしない・・・・。

「凛、どうすれば勝てるんだ?」
「・・・わからない。でも、頑張るしかない!根性で!!」
「客の前ではそんなこと言うなよ?変な噂でも立てられたらイチコロだ」
「ああ、亜修羅。やっと本気になってくれたんだね?」
「少し、偵察に行って来る」

文化祭が始まり、大勢の客が行き来している。その中に、一際女の長い列が出来ているところがあった。きっと、そこが凛の言っていた強敵のクラス。あいつ等のせいで、俺が女装をしなければならなくなったクラス。

そう思うと、物凄くムカついて来たが、何とか感情を抑える。暴れたら、失格だと凛に釘を刺された為、何とか押さえる。

こっそりとドアの外から覗いててみると、みな、さほどかっこよくはないが、礼儀は正しい。よし、盗めるだけ盗もう。と言っても、盗めるようなものはない。ただ、礼儀正しいと言うだけだ。

その他にも色んなことを考えていると、肩を叩かれた。

「ご婦人、メイド喫茶はあちらですよ？」
「誰が婦人だ！俺は男だ！！」

そこにいたのは、中にいる奴とはあまりにも違いすぎるほどかっこいい奴だったが、俺は男だから、そんな奴にフニャフニャなるかよ。

「ああ、ごめんなさい。あそこは女装喫茶でしたね」

そいつは、顔はいいが、性格は最悪らしい。そう言う奴が一番ムカつくんだ。大体そうだ。顔がよければ性格が悪い。性格がよければ顔はそんなでもない。均等に作られていないものだ。

「お前のクラスには俺たちが必ず勝つ。お前らに一位の座を譲ったら、一位の名が汚れる」
「そんなことが出来るんですか？女装喫茶で」

女装喫茶のところを強調されて言われ、こいつの首を絞めてやろうかと思ったが、何とか持ちこたえると、ドスを聞かせた声で、静かに言った。

「お前等が校長に言いつけたんだろ？そんなせこいことまでしてやって、もし、一位になれなかったら、さぞかし恥ずかしいだろうな。でもな、俺はお前等に同情するつもりはない。だから、一位になる。覚悟しておけよ」

男の襟を掴んで引き寄せてそう言うと、突き放すように手を離した。

その動作に思い切りうろたえたようで、顔を引きつらせている。

それを見ると、そのまま、クルリと向きを変えてクラスに戻る。あ

いつ、妖怪だったら殺してやりたい。いや、殺している・・・・。
しかし、ある程度脅しておいたから、少しは怒りが収まった。

「亜修羅、そんなに殺気だってたら、来るお客さんも来なくなっちゃうよ」
「わかってる。あいつには死んでも勝つ。そう決めていただけだ」
「そんな凄んだ声で対応したら、怖がられちゃうよ?それに、口調も怖いし・・・・」
「大丈夫よ、気にしないで。妖怪だったら野郎を殺ってたけど、人間だからそこまではしないわ」
「・・・・声と口調が変わっただけで、全然言ってること怖いんだけど」
「大丈夫だ、気にすんな。俺は勝つと決めた相手には必ず勝つって決めてるんだ」
「うん、頑張って」

その時、お客が来た。俺が動こうとすると、それを手で制する凛。
そして、俺に向かってウィンクした後、入って来たお客を対応し始めた。

さっきのウィンクは、僕の動きを見ててと言いたげだったから、凛のことはしっかりと見た。

それから戻って来る時、親指を突き出した。あまり意味がわからず、戸惑っていると、凛が話した。

「一番高い商品を頼ませた」
「どうやって?」
「笑顔で進めた。そしたら、って」
「そうか、俺もやってみるか」

それからしばらくしてから、多くの客が来たが、メイドが女じゃなくてブーブー言っている。しかし、俺らには何も言わずにいる。きっと女と間違えられてるんだ。

だから、女に接客を任せておけばよかったのだ。普通、女装なんて思わないだろうからな・・・・。

しつこいだろうが、しみじみ思ってしまう。「役割が逆だったら」と・・・・。

「何にしましょうか?」

貼り付けの笑顔で聞く。それから、声色を変えて口調も丁寧語に。勝つためには、これしか方法がないんだ。

「・・・・オススメとかある?」

しめた!と思い、出来るだけ自然に、尚且つ確実的な方法で勧めると、それを頼んでくれた。よし、このまま順調に行ければ・・・・。

と喜んでいたのもつかの間。文句を言われていた男達がついにキレて、お客に向かって暴力を振るった。

「おい、ま・・・・」

そのせいで、今まで並んでいた客がめっきり減ってしまった。

クソッ、どうすればいいんだ。暴力を振るった奴は、まずいと思ったのか、顔を下に向けている。

「どんまい、しょうがないよ。あんなに愚痴言われたらさ。次から頑張ればいいよ」
「ああ、すまないな、みんな」

最初はそいつが許せなかったが、本気で反省しているようで、怒りも自然と止んだ。よく考えてみると、何も言われない方が男として恥だと思う。女と間違われているのだから・・・・。

最初の一時間は繁盛していたのに、残りの三時間は誰一人お客が来なかった。

「ああ、このままじゃ負けるな。あいつにあんなにドスを聞かせたのに・・・・」
「何でそう思うのさ?」
「隣のクラスは、大繁盛じゃないか。なのに俺たちは全然ダメだ」
「ドスって?」
「隣のクラスの奴がいただろ?生意気な奴。あいつに凄んでやったんだ」
「そうしたら?」
「ビビってた」
「まぁ、亜修羅の脅しは凄いからね」

お客が座るテーブルに、誰もいないから座って昼飯を食べる。・・・・何かいい方法はないのか?向こうと同じくらいになるようなこと。

「なぁ、こっちも、メイドといけめん?の奴両方に分けてやったらどうだ?」
「そんなこと言ったって・・・・」
「やるからには勝つのが勝負だろう!初めから負けてると思ってや

った勝負には負けるんだ！いくら可能性がなくても、勝ってると思えば奇跡的に勝つことが出来るかもしれないんだぞ！！」

俺の気迫に一気に押された一同。ただ一人、凛だけが動じない。そう言えば、学校に来てからドジを一回も踏んでないな。逆に、頼りにされて、リーダー的な存在だ。じゃあ、なぜ、家ではあんなに頼りなくて、金魚のフンみたいにベタベタくっついて来るんだ？

「僕はいいと思う。ちなみに、僕はイケメンの方がいい。と言うか、いっそのこと女の子をメイドにして、残った男の子で裏を取り繕うって言うのはどうかな？」

「いいな、そのアイディア。早速女子達に知らせてくるぜ」

一人の男が立ち上がり、教室を出て行った。

その様子を見ながら、普通はそうするだろうと言う言葉が出そうになるが、口を塞いで我慢した。もう、嘘をついたっていい。メイドを女にするだけなんだ。やっていることに変わりはない。大丈夫だ。

「亜修羅、どうする？」

「俺はもちろん表にいるぞ。裏で地味に働くなんて、性に合わない」

「だよね？じゃあ、ちょっと服を変えるから、みんな、ついて来て！」

凛の後に続く、メイド服を来た男達。なんだか変な光景だが、はたから見ると面白いかもしれない。

どこから用意したのか、凛が燕尾服を全員に渡す。俺は、それに着替えて、化粧を落とすと、やっと落ち着いた気持ちになった。やっぱり、足元がスースーするのは居心地が悪い。なにより、これで男

としての自覚を取り戻したような気分だ。

「よっし、もう直ぐ休み時間が終わるよ。気を引き締めて行こうね？」

「おう！！」

休み時間が終わり、また客がうろつき出した。・・・・どうやったら来てもらえるだろうか・・・・。

「なぁ、来るかな？客」

「大丈夫だよ。そんなに気にしなくていいって。飯田のせいじゃないんだから」

「ああ、すまねぇな」

その時、廊下から客が顔を出した。メイド服と燕尾服を着ている生徒がいて、戸惑っているようだったけど、凛がいち早くそれに気づいて丁寧に教えた。

すると、女達は凛にコロッとなって入って来た。こいつ、学校とかでは確かにかっこいいと言えるかもしれない。家ではかなりの別人だが。

そんなことを思っていると、また次の奴が戸惑い顔で立っている。今度は、俺が出て行った。勝つと言う執念があったから。

「ここは、メイド喫茶といけめん？喫茶の両方を運営しております。お客様はどちらにいたしますか？」

今度は貼り付けじゃなく、本気で頑張った笑顔。すると、やはりこちらもコロッと落ちた。そのままテーブルに座らせる。廊下の方か

ら、今度は男の声が聞こえた。すると、メイド服を着た女達が出て行き、無事つれて来た。

「何にいたしますか？」

「・・・・オススメを持って来て下さい」

俺は思った。オススメを頼んでくれた人には、手品かなんかを見せればいいんじゃないかと。

「オススメを頼んでいただいた方には、手品をお見せします」

何となく、思いつきでやった人間では出来ないことを、女達はキャーキャー言って喜んだ。

と言うのも、人間が見えない素早さで机の上の花を取り、プレゼントしただけの、いたって簡単なこと。

頼んでもらったのを裏に伝えるために、たまたま凛の後ろを通り過ぎた。

「中々やるじゃん、本当に勝つためには手段を選ばないね？」

「凛もやったらどうだ？」

「うん、実践しみる」

そして、オススメを選んだ客は何とか帰った。めんどくさいと思った。しかし、勝ちたい為に頑張った。それが、幸を呼んだのか、客足がかなり増えた。

今では、教室の外を列が並んでいる状態だ。これなら勝てるかもしれない。

しかし、またハプニングが起こった。列に並んでいたお客が早くしろと言い出したのだ。確かに、遅い。

「おい、凛。どうする？」

「・・・ここは、亜修羅に任せるよ。もし、マジックか何かで惑わせなかったら、最悪は、妖狐の姿になっちゃえば？」

「人のことだと思って軽く言うんじゃない。それに、おもちゃじゃないんだぞ？」

仕方なしに廊下に出てマジックを行う。最初のうちはそれでしのげていたが、やがて飽きられて来て、とうとう、俺は妖狐にならざる終えなくなってしまった。そこまでして止めなくてはいけないのだろうか？これは、重大なことなのに・・・・。

俺が迷っている間、並んでいる奴らはジッとこっちを見て来る。

しかし、もし、この中に妖怪がいたら、ただ事じゃすまないぞ。それこそ、大惨事・・・・。

「修、ちょっと・・・・」

凛が影で手招きしている。策をくれるのか。それとも、ただ呼んだだけなのか。最初はわからなかったけれど、ただ一つ言えることは、凛の策は俺に変な印象を与えると言うものだけだった。

「あのさ、亜修羅って炎を使うんだよね？だったら、それを上手く使うとか出来ない？」

「それを言うなら、お前が冥道を開けばいいだろう」

「無理無理。冥道を開くと、その冥道に当たった部分は全部削られ

ちゃうから。屋外でやらないと」
「俺だって、このままじゃ出来ないぞ」
「だから、妖狐になって！」
「だから、人事だと思って簡単に言うなって・・・・・」
「大丈夫、僕が説明してあげる。亜修羅は・・・・上から降ってくればいい」

雨じゃないから降ることなんて出来ないと言いたかった。しかし、それは当たり前過ぎる。もしかしたら、天井にくっついて、合図があったら手を離して落ちるみたいなことをしろって言うのか？？

「そう言うこと。じゃあ、早速」

凛は、俺の承諾も得ず、勝手に話し出した。しかし、あいつはとことんバカだ。俺が妖怪だって言っている。

すると、並んでいる奴らは笑った。きっと冗談だと思っているらしい。本当の妖怪が目の前にいるとも知らずに。

俺は、仕方なく妖狐の姿に戻った。妖狐の姿は見せものじゃないのに。なぜ、何もない今、妖狐に戻らなくてはいけないのか。

凛の言う通り、天井に登って、上から下の様子を伺う。今のところ、人間だけがいるらしい。誰も襲って来ない。

ジッと下を見てると、凛が後ろに手を回し、何か変な動きをした。あんまりよくわからないが、取りあえず下りろと言う合図かと思い、飛び降りた。

突然上から飛び降りて来た人物に驚くお客。しかし、それよりも何

よりも、獣耳が驚いたらしい。

「さっきの言葉、通じた？」

「後ろで動かしてた手か？」

「手話だよ、手話。手話で、『来て！』って合図したんだから。降りて来たから手話をわかってたのかと思ってたけど、わからなかったんだね」

「うるさい、わからなくたっていいだろう」

「まぁいいや。じゃあ、後は任せた！」

「おい！」

凛は、来た時同様突然いなくなった。妖狐の姿にさせておいて、任せたはないだろう・・・。これからどうすればいいんだ？あいつは、俺に墓穴を掘らせたかったのか？

「耳、触ってみてもいいですか？」

一人の女が恥ずかしそうに言った。かなり嫌だったが、少しくらいいいかなと思って触らせた。

「何か、本物みたいですね」

「・・・・」

すると、他の奴らまで触りたいと言い出した為、溜まったものじゃない。そのおかげで、順番待ちに文句を言う奴はいなくなったが、しばらくの間、耳が痛くなるのは確かだ。

やっと一段落付き、落ち着いていると、凛がやって来た。のこのことやって来たのだ。

「どうだった？」
「どうだったもこうだったも、何も言えない。耳が痛い」
「次は僕が変わるから」
「ああ、そうしてくれ」
「あっ、お客さんが来た！亜修羅は中に入って！」

凛に背中を押され、ヨロヨロしながらも、人間の姿になった。メイド服を着させられ、化粧をさせられ、おまけに妖狐の姿にさせられて耳を引っ張られ、俺は、心身ともに疲れきっていた。

結果微妙・・・・

そして、とうとう一日目の売り上げを発表する時が来た。

俺は体を張って頑張った。なのに、一位じゃなかったら、俺が何の為に体を張ったのかわからなくなる。だから、懸命に祈った。

いつもなら神なんかを信じてはいないのだが、今回ばかりは神に頼るしかない。俺は全力を尽くしたんだ。

「本当に勝負とかが好きなんだね?今までと、全然人格違うじゃん」
「お前だって、家とは大違いじゃないか」
「まあね。何だか、家だと気が抜けちゃって・・・。ドジとかばっかりするんだよね」
「家でも今ぐらいビシッとしてろよ」
「家にいる時ぐらい、気を抜いてもいいでしょ?それすらダメって言うの?」
「ああ、わかったよ。うるさい。発表する時ぐらい静かにしろ」
「チェッ、ひどいなあ。最後は僕が身代わりになったじゃん。耳がジンジンするよ」

ブチブチ文句を言いながらも、やはり結果が気になるようで、校長の話に耳を傾けている。そう言えば、この校長が、俺に女装をさせた奴だ。違うなんて言わせないぞ。遠まわしにさせたんだからな!

朝礼台に立っている校長を睨みつけながら耳を済ませる。この時ばかりは、騒がしかった校庭も静まり返っている。

「えー、三位は二年B。二位は三年A。一位は・・・・」

凛のクラスは三年B組。これで、俺達の名前が呼ばれたら、あいつを負かしたことになる。

「一年B。以上が上位三クラスです。では、クラスの代表の人は、朝礼台に上ってきて下さい」

「・・・・選ばれなかったね。亜修羅を無理やり引っ張り出して来たのに」

「そうだな」

「あれ?怒らないの?」

「怒る気すら失せた」

俺は、墓石で後頭部を殴られたようなショックを受けた。もう、立ち直れるかどうか・・・・。あんな服まで来て、妖狐の姿にもなったと言うのに。ショックが大き過ぎて、隠しきれるものじゃない。

「それから、今回は特別賞があります。三年B組です。三年B組の発想の展開が面白かったので、特別賞とします」

「だってさ」

「特別賞?」

「そうだよ、今まで特別賞なんてなかったもん。凄いんだよ、きっと」

凛はポンポンと肩を叩くと朝礼台に上った。俺は、少しだけ回復したけれど、やはり一位になれなかったことは残念だ。体を張って、痛い耳を無理やり触られて・・・・。

「そんなに一位にこだわらなくてもいいじゃん!明日は僕らが遊べる番なんだから、楽しもうよ。楽しんでいる時ぐらい、妖怪も邪魔して来ないって」

「・・・ああ、明日もあるんだよな」
「そうそう」

明日もあることを思い出して、少しだけ元気になった。単純だな、俺って。そう自分でも思う程だ。

発表が終わった後に教室に戻ると、黒板に1ーAの教室へ行けと書いてあった。1ーAの教室と言えば、俺たちがやっていた場所だ。

「あ、これって・・・・」
「先生、約束を守るのか？」
「やったー！！」
「何のことだ？話が読めない」

なぜか、黒板の字を見た途端、クラスの奴等が飛び跳ねて喜んでいる為、一緒に喜んでいる凛に聞いてみた。

「僕らの担任の先生が約束してくれたんだ。一位を取れなくても、朝礼台に乗った時は、焼肉おごってくれるって」
「俺には関係ないことだな。先に帰ってる」
「関係あるよ！一緒にやってくれたんだから。先生にはさ、僕が上手く言っとくから」

思い思いに喜びながら、１ーAの教室に向かう一同。その後ろを俺らが歩く。

「なぁ、それって、肉を焼くのか？」
「そうだよ」
「気持ち悪いな。肉は生でしか食ったことないんだぞ」
「そりゃ、妖狐の味覚では生の方が美味しいかもしれないけど、焼

いても美味しいよ。まぁ、人間は生を食べるとお腹を壊しちゃうからね」

「弱い生き物だな、人間って言うのは」

「言っておくけど、今、その弱い人間の姿でいるんだからね」

「ああ」

肉を焼くなんて想像も付かないが、少し興味があった。それに、凛に強引に引っ張られているしな。

「あっ、先生！！」

凛が大声を発して走って行く。思わず耳を塞ぎ、凛を睨む。だが、凛は後ろを向いているから、全く気がつかない様子。

そんな気持ちもわからない凛は、担任らしい男と話している。たまにこちらを振り向くけれど、すぐに担任の男に視線を戻す。どんなことを話しているのか聞いてみたいところだが、生憎、周りがうるさ過ぎて聞こえなかった。

しばらく見ていると、凛が大々的に丸を作った。担任の男がこちらを向く。俺は、とっさにお辞儀をした。本当にとっさだった。

「先生に話したら、いいって言ってくれたんだ。先生、太っ腹だよね」

「あいつは太ってないし、腹も出てないぞ」

俺が真顔で答えると、凛に思い切り笑われた。訳もわからず笑われるのは、実に不快なことで、理由を迫った。

「太っ腹って言うのは、気前がいいってことだよ。なのに・・・・

はっはっはっはっ！涙出ちゃう！！」

凛が余りにも笑うから、ついに手が出た。

「いったいなぁ」

「そこまで笑う必要あるか！お前だって、キャリアをキャビアと間違えたことがあるだろう。その時だって、俺は笑わなかったじゃないか」

「そうだね。ごめん」

やっと笑いが納まったようで、素直に謝って来た。本当は、許すつもりは全くない。人を思い切りバカにしたからだ。でも、思い切り優しい言葉で許してやることにした。

「今度バカにしたら殺すからな」

「わかったよ♪」

「殺す」

「やっやめっ・・・・」

凛のことを数回殴った後、押さえつけていた手を離した。

所詮、殺すと言っても殺すことなど出来ないのだ。他の奴ならば躊躇うが、殺すことは出来る。しかし、凛だけは勢いで殺すと言っても無理なのだ。一応、仲間と思っているからな・・・・。

子供みたいにブチブチ言っている凛を横目に、俺はため息をついた。

居眠り星の王子

「ねぇ、起きて！起きてってば！！」

凛の声がしたかと思ったら、突然バシバシ叩かれた。それに驚いて飛び起きる。声のする方向を見ると、まだ真夜中なのに、凛が隣に座っていた。

「何だよ、まだ真夜中じゃないか」

「だけど、文化祭やってるんだよ！！」

「おい、文化祭が楽しみだからって嘘をつくな。つくならもっとマシな嘘をつけ。こんな真夜中に文化祭がやってる訳ないだろう？」

「だって、行ってみたらやってたんだもん」

そう言う凛の服装を見ると、確かにパジャマではなく、今出かけてきたと言える様な格好である。こいつ、バカか？真夜中に何で学校なんか行くんだよ。

「何で真夜中に学校なんて行ったんだ？」

「だって、楽しみだったから」

「バカか！それとこれとは違うだろう」

「亜修羅にはわかんないんだよ、一々人のこと叩くしさ。これ以上頭がよくなっちゃったらどうするのさ？」

「それを言うなら逆だ。『これ以上頭が悪くなったらどうするんだ？』だ。でも、安心しろ。お前の頭は最低以下の悪さだ。それ以上悪くなることはない」

「ああ！僕、傷ついちゃった。ガラスの心が粉々に崩れちゃった。これ以上ないくらいにパラパラになっちゃった。このまま、パラパラワールドに行っちゃうよ！飛んで行っちゃうよ！！いいの？ここ

からいなくなっちゃうよ？」
「ああ、勝手にしろ。パラレルワールドに行きたいなら行け。止めないから」
「えっ、止めてくれないの？あんなにずっと一緒にいたのに？」
「気持ち悪い聞き方するな。俺は止めない。そう言ってるんだ。さようなら」

凛が中々出て行かないから、俺が窓を開けて凛を外に放り出した。
そして、また布団に入った。

と言うところで目が覚めた。

おかしい、さっきのは夢だったのか？それだったら、余りにもリアルだ。叩かれたところとか・・・・。

チラリと隣を見ると、寝始めた時よりも近距離に凛がいる。しかし、眠っている。寝ている時まで、こいつは俺の邪魔をするのか。

ゴキブリで多騒ぎする凛は、押入れでは眠れず、俺がタンスに入ってたのだが、俺もタンスで眠るのに疲れて、離れて眠ることにしたのだ。と言っても、部屋自体狭い為、あまり離れてはいないが。

夢の中に入っている凛は、ウサギの柄がついたピンクのパジャマを

着ている。最初それを出された時には、本気で女かと疑った。しかし、どう見てもこいつは男だ。だとしたら、悪趣味だと言うことだ。

やはり、俺の見解はあっていた。こいつは、女装が趣味のバカだ。

前に、服をくれると言っていたことがある。しかし、全力で断った。服の実物は見ていないが、こいつの悪趣味ぶりを見ると、きっと、ウサギとか、ピンクとかのだろうと思ったからだ。

俺がそんなことを考えながら、凛のいる方向と反対側に寝返りをうった時、背中を蹴られた。

俺は、ムカッとして、布団からガバッと出ると、態々背後まで回って背中を蹴った。

しかし、凛はそれにさえ気がついていないように、動きもしない。本当に、こいつは熟睡してるな。こんなんじゃ、何やっても起きないな。

そう思って、もう一回蹴ってみた。すると、今度は起きているかのように寝返りをうって上手く交わした。こいつ、化け物か？

今度は、殴ったり蹴ったりしないで、凛の顔の前で手を振ってみた。しかし、これには無反応。一定的に聞こえる息の音だけ。

試しに、布団を引っ張ってみると、起きているかのように布団をガッチリ掴んでいる。思い切り引っ張って取ろうとしたが、途中で布団が悲鳴を上げだしたのでやめた。

遊ぶのをそろそろやめて、眠ろうと思って布団に入ると、今度は俺

の布団を引っ張り出した。

「おい、離せ！これは俺の布団だ。お前のは、自分で下に蹴ったんだろう。さっきはあんなに強情として離さなかったくせに」

しかし、眠っている奴に何を言っても聞こえるはずがなく、手を離そうとしない。逆に、引っ張る力を強くして来る。

俺も負けじと、体に布団を巻きつけてしっかりと外れないように巻き、握る。

凛本人は、気持ちよさそうに眠っているのに、なぜ、俺がこんな目に合わなくちゃいけないんだ。夢の中では、あんな願望を抱いてたのかもしれないな。惨めだな、俺。そして、可哀想だ。

そんな風にふと思った時、力が緩んだ。すると、今までずっと同じ力で引っ張っていた凛の元へ、俺は布団に包まったまま、ゴロゴロ転がって行った。そして、ガンッと激突。

俺は、頭を凛に強打して、しばらくの間星が回っていたが、やっと納まった。

ヨロヨロと立ち上がって凛を見る。何事もなかったように眠っている。こいつ、恐ろしい。あんなに思い切りぶつかって、起きないはずがない。

眠る時にはレム睡眠と、ノンレム睡眠との交互で成り立っているらしい。しかし、こいつには、レム睡眠がなく、ノンレム睡眠で成り立っているのかと思ってしまうほどに眠りが深い。いや、本当にノンレム睡眠しかしていないのかもしれない。

もしかしたら、ノンレム睡眠でもないかもしれない。いくら深い眠りの状態と言っても、もの凄い音がしたぐらい思い切りぶつかったんだ。起きるはずだ。ノンレム睡眠でも。

「居眠り星から来た、王子なんじゃないのか?凛」

「うん」

「・・・・」

今、眠っているはずの凛が答えた。これは、偶然なのだろうか・・・・。しかし、凛が居眠り星の王子。余りにも似合いすぎている。こいつは、居眠り星人かもな・・・・。

理解

あれから、俺は眠ることが出来なかった。明らかに起きているとしか言いようのない凛の動きによって・・・・。

「あれぇ、どうしたの？寝不足？」
「ああ。誰かさんのせいでな」
「誰かさんって、誰？」
「ここの家には、俺を除いてお前しかいないだろう！」
「だって、僕、何にもしてないもん」

さっきからそう言い張る凛に、俺は真夜中の出来事を話して聞かせた。しかし、凛が食いついたのは、全く違う場所だった。

「酷い！何で僕を窓から放り出すのさ。ここ、二階だよ？死んじゃうよ？いいの？僕が死んじゃっても！！」
「だから、夢だって言っているだろう。何回言えばいいんだ！」
「夢だからってさ、引き止めるくらいしてくれたっていいじゃないか・・・・」
「だから、そんな夢のことで泣くな！バカだな」
「バカじゃないもん。酷い・・・・」

夢で、凛を引き止めなかったからと言っただけで、凛は泣き出した。まるで、子供が泣くようにうるさい。何度も夢だって言ってるのに、全然聞く耳を持たない。

「だから、夢だって言ってるだろう。夢だからそうやって追い出したんだろう」
「現実だったら？」

「・・・・」

そう言われて、思わず黙り込んで下を向く。「絶対しない」と言い切れないからだ。

「やっぱり、追い出すんじゃないか！！」

「実際では追い出す訳ないだろう、凛がいなくなったら、それなりに寂しくなるし」

「・・・・本当？」

「ああ、きっとそうだ」

「でも、前にも、家に入れてくれなかったじゃないか」

一度止まった涙も、また流れている。ああ、こいつは本当にめんどくさいな。俺に恥ずかしいことを言わせたいのか？あれ以上の言葉、言えないぞ・・・・。恥ずかしくて。

「じゃあ、何て言えば泣き止むんだよ」

「もっと慰めて」

「は？」

「だから、もう少し優しく慰めてよ。親が子供を慰めるみたいに」

「無理だ。俺自身、親に優しくされたことすらないんだ。親が子供を慰めるって言うのが知らない」

「いいの！」

凛は、まだ泣いている。子供だな、体格のでかい子供。それ以上に言いようのない奴だ。

しばらくは、どんなことをすればいいのか迷って、耳が痛くなるのを我慢していたが、一向に泣き止まない。

「おい、文化祭に間に合わなくなるぞ」
「いいもん、文化祭なんて行かないもん」
凛は、すねて向こうの隅っこに歩いて行き、体育座りで座った。仕方ないから、とりあえず、適当に慰めようと思う。
「いい加減泣き止め」
出来るだけ優しい声で言った。言葉は全く変わっていないから、ダメなんじゃないかと思ったが、なんとか泣き止んだ。
やっとうるさい声から開放されて、自然とため息が漏れた。これでよかったらしい。
「・・・おい、あんなんでよかったのか?」
「うん。優しさを感じた」
「どうして急に泣き出したりしたんだ?」
「知らないよ。なぜか無償に悲しくなったり時々する。その時は、何だか我慢が出来ないんだ」
「わがままな奴だな」
「わがままじゃないよ!亜修羅は慈悲の心を持ってないの?」
「慈悲の意味すら知らない。それよりも、さっさと文化祭に行くぞ。昨日は散々だったんだ。今日は遊ばせてもらうからな」
「あったりまえじゃん♪」
いつもの通りに戻った凛。こいつも、こいつなりに大変なんだろうかと思った。
「二日目はどんなことをやるんだ?」
「覚えてないよ。とりあえず、回っておけばいいよ」

「こんな気楽な考えの奴が、大変なんだろうか?」と、今さっきまで思っていたことを考えている途中も、凛に腕を引っ張られて外に引きずり出された。

こいつは体は華奢なくせに、物凄い怪力を持っている。きっと、本気で俺の腕を握ったら、俺の骨は折れるだろう。それぐらい脅威的だ。しかも、性格も面倒だから、こいつを敵に回して得なことは一つもないな・・・・。

そう感じていた時、背後で視線を感じた。とっさに振り向くと、老婆がいた。しかし、老婆の目は只者の目ではなく、明らかに妖怪であった。しかし、俺を狙う者の目じゃない。

すると、老婆は手招きをすると、クルリと後ろを向くと、そのまま歩いて行った。何だか、不思議な老婆だが、ついて行かないといけない気がした。

「おい凛、先に行っててくれ」
「・・・わかった」

凛が学校に向かったのを確かめた後、その老婆の傍まで走って行った。そして、横に並ぶ。

「お主、凛の友達か?」
「友達って程の者じゃない。ただの知り合いだ」
「そうか。お主には言っておかなくちゃならんことがある。時間はあるか?」
「出来るだけ手短にしろ」
「そうか。じゃあ、まずは私のことを話そう。私は、見ての通りの

妖怪だ。そして、犬神凛の祖母にあたる者じゃ。これから話すことは、凛のことなんじゃが、いいか？」

「手早くしてくれよ」

俺は、凛の婆さんにそう言うと、その場で立ち止まって、コンクリートに寄りかかって腕を組む。

普段なら、あまり関係ないような話を聞くようなことはないが、何か訳がありそうな話だったからだ。

「凛は幼い頃に両親を亡くした。それからは、私が育てて来たのだが、凛はいつも一人ぼっちだった。理由は、冥道を開くことが出来るから。冥道を開くことが出来る者は、大人になったら同じ種族の仲間に恐れられ、やがて殺される。凛の両親は、共に冥道を開くことが出来た。だから、恐れられ、殺されたのだ。幸い、凛はその事実を知らんのだが、冥道を開くことが出来るせいで、話すことも出来なかった。凛は、今まで人と話したり、一緒にいたりとしたことがほとんどなかったんだ。私も、冥道を開ける凛を恐れておった。それがわかっていたのか、私にも懐かなかった」

「そうか」

「しかし、凛はお主に出会った。お主だけは、自分を嫌わず、ずっと一緒にいてくれる。そう思ったようだな。だから、お主に甘えることがあるだろう。その時は、甘えさせてやってくれないか？子供みたいに、泣き出したりすることがあるかもしれん。その時は、優しく慰めてやってくれ。凛は、今まで誰にも甘えることなく生きて来たんじゃ。しかし、そろそろそれも限界のようでな。それだけだ」

俺は、閉じていた目を開くと、凛の婆さんに言った。

「随分長い話だったな。俺は、『手短に』って言ったぞ？」

「これが手短じゃ。そこら辺を理解してくれ」
「ふん、あいつの事なんか。これっぽっちも理解したくはないな」
そう言って、凛の婆さんの前から走って、凛の学校に行った。
本当に理解したくない訳ではない。しかし、何となく恥ずかしいじゃないか。理解したいと思うなんて、俺らしくない。
文化祭で大盛り上がりの校内に入ると、俺を見つけた凛が走り寄って来る。
「あっ、あしゅ・・・・修！」
「そんなにごちゃごちゃ持って走ってると、ずっこけた時・・・・」
俺が言い終わる前に、凛は石につまずいて転んだ。見てるこっちが痛くなって来るような転び方だった。
「うわぁっ、服がドロドロだ」
凛の服は酷い有様になっていた。アイスと生クリームと、キャラメルソースと、ドロが混ざって、明らかに変な色になっていた。
「そんなに両手に持ったまま走って来るからだろう」
「だってさ・・・・」
そう言いながら服を見下ろす凛。
子供・・・・か。そのまんまだな。
そう一瞬思ったけれど、直ぐに我に返って、凛を立ち上がらせよう

とする。

「早く立ち上がれ。邪魔だぞ」
「ああ、うん・・・・。はぐしゅん！」
「なんだ、それ？くしゃみか？」
「そうだよ」
「変なくしゃみすんなよ」
「わかった。まともなのに挑戦してみるよ。・・・・はぐしょん！」
「わかった、もういいから。保健室に行くぞ。そのままじゃ風邪を引くかもしれない」

変なくしゃみをする凛を引っ張って行った。保健室には、ちゃんと保健の先生がいて、苦笑しながら代えの服を渡してくれた。

保健の先生が苦笑する理由がわかる。普通、はしゃいだからって、もう直ぐ高校の奴が、服をドロドロにするだろうか？しないだろうな。だからきっと笑ったんだろう。

「亜修羅、さっき、僕に対して初めて笑ったよね？」

「・・・・笑っていない」
「いや、笑ったって。保健室に促している言葉を言った後、少し表情を緩めたじゃん。あれは、確かに笑ったと思うよ。それに、今だって意表を突かれた表情をしたよ？」
「意表を突かれた表情なんかしていない。それに、あれは、凛がバカだと思ったからだ。決して笑ってはいない」
「そうかな？亜修羅、口にはあまり出さないけど、顔は素直だから」
「とっ、とにかく、俺は笑ってない！」
「はいはい。そんな大声を出さなくても結構ですよ～～」
「そんな口を利いてるから、バカになるんだ」

最後の方は何とか勢いで押した。かなり焦った。実を言うと、かすかにだが、笑ったような気がする。でも、凛には秘密だ。

「それって、関係ないと思うけど？」

「俺が言いたいのは、バカな奴は何をしゃべってもバカだってことだ」

「ふん、バカバカって。バカにばっかりしてると、カバになっちゃうよ」

「俺は、元々狐だ」

「僕だって、元は犬だよ」

凛はそう言って胸を張るが、不意に視線を自分の着ている洋服に移した。

「なんかこの服、ダサいよね？」

「そうか？お前にはぴったりだぞ」

「僕がダサいって言うのかい？」

「いや、アホだって言いたいんだ」

「ふん、もういいよ。亜修羅となんか、回ってあげないから。他の子誘うもん」

凛は一人でいじけて歩いて行ってしまった。たまに甘えるかもしれないと凛の婆さんは言っていたが、ほとんどいつも甘えてるようなもんだぞ、凛は。

「じゃあな！」

「待ってよ、追いかけて来てよ！！」

凛が、止めない俺を慌てて追いかけて来る。いつもなら、うざいと

思うところだが、凛の婆さんの話を聞いた後だったからか、少し嫌とは感じたが、ちゃんと理解が出来た。

不思議な奴

「なぁ、そろそろ別行動したくならないか？」
「全然。楽しいじゃないか。二人の方が」
「・・・・一人で回らせてくれよ」
「わかった。でも、一人で先に帰ったりしないでよ？」
「ああ。後でうるさく言われるのはわかってるからな」
「全くさ。一人で帰るのが怖いくせに♪」
「うるさい」

からかって来る凛から逃げて、やっと一人で落ち着いて回れるようになった。凛のペースだと、ゆっくり見ている暇がない。自分のペースでゆっくりと歩きたかったんだ。しかし、中々そうも行かない。女達に何回も声をかけられ、静かに自分のペースで歩くつもりが、うるさく乱されて行った。

そろそろ怒りが限界に達していた時だった、再び話しかけられて、嫌々振り向く。そこにいたのは、やはり女だ。しかし、なぜかあまり嫌な感じはしなかった。

「もしよかったら、一緒に回りませんか？」
「・・・・ああ」

そいつは今までの奴らよりも普通の格好をしていて、メガネをかけておとなしそうだったから、気が合うかと思ったんだ。

「よかった。一緒に回る人がいなくて、寂しかったんです」

そいつは、下手にベタベタもせず、普通に接する。こう言う奴が一番いいんだ。他の女は無闇にくっついてくるから嫌なんだ。

そいつは、俺が向かうところについて来て、文句一つ言わずに一緒にいた。美術部の絵を見ている時も、吹奏楽部の音楽を聞いている時も、静かに聴いていた。

「どこかで休むか？」
「そうですね、結構沢山回って疲れちゃいましたね」

そいつの承諾を得て、そこらへんにあった店に入る。それから、コーヒーを頼むと、一息ついた。

「名前は？」
「桜木明日夏です」
「俺は、伊織修だ」
「修さんですね？文化祭はやっぱり楽しいですよね」
「ああ。ワイワイやって、何だかこっちまで楽しくなって来る」
「ちょっと、トイレ行って来ます」

そいつは立ち上がるとトイレに向かった。しばらくすると、廊下の外まで来たようだが、中に入れないようだ。

声からして、大勢の女に囲まれているらしい。そして、罵られている。

「あんた、今時メガネなんかかけてダサいのよ！普通はコンタクトでしょ？」
「それに、胸だって全くないじゃない！」
「色気だって全くないのに」

「あの・・・・」
「何であんたが、あの人と一緒にいるのよ！全然釣り合わないんだから！！」
「だから・・・・」
「とにかく、さっさとどこか行ってちょうだい！邪魔なの！！」

廊下での会話がうるさく聞こえて来る。しばらくしてから戻って来たが、少し落ち込んでいる様子だ。

「何か言われたのか？」
「はぁ、どこか行ってくれって。邪魔だから」
「別に、俺にとっては邪魔じゃない。邪魔だから」
必要もない。お前が俺といるのが嫌ならどこかに行けばいい。でも、いたいなら、態々あんな奴らの言うことを聞かなければいいんだ」

さっき来たばっかりのコーヒーを一口飲む。ホットだから火傷しないかと心配だったが、余り心配はいらなかった。

「ありがとうございます」

そいつは、そう言うと席に座り、コーヒーを一口飲んだ。しかし、何かが違う。こいつは、何かが違うんだ。その何かとはなんだ？

「何か変ですか？」
「いや、気にするな」

考えに耽って、思わずジッと見てしまう。女にしか見えない。けれど、違和感を感じるのはなぜだ？何かがおかしい。その何かとはなんだ？

それから、ずっと観察をしているのだが、何だか違和感が拭えない。人間じゃないって言う違和感とは違う。変な奴だ。しかし、気は合う。

それにしても、何だか後ろから凄い数の視線がついて来るのがわかる。振り返るのも怖いぐらいの視線だ。しかし、それを向けられているのは俺ではなく、桜木だ。

「やっぱり、変でしょうか？」

「気にするな」

そうは言っても、かなり気になる。これは、妖怪並みの睨みだ。人間の女は、怒ると妖怪並みの睨みを放つらしい。メデューサみたいに石化させる能力があったら、桜木はひとたまりもないだろう。それくらい、恐ろしい睨みと殺気だ。

すると、向こう側からも女に囲まれた奴が来る。最初はよく見えなかった。何しろ、女が多過ぎて見えなかった。

「あっ、修！」

声を聞いて驚いた。凛だ。あいつの言ってること、嘘じゃなかったんだな。

凛が、わらわらと群がって来る女を何とかかき分けて近づいて来る。もう、ここ一帯女だらけだ。

「それに、桜木君も」

・・・君？

そこにいる一同全員が驚愕した。ただ二人だけ、凛と桜木を除いて。

「・・・・あんた、男だったの？」

凄いにらみを放っていた女の一人が問いかける。何だか、凄く疲れた顔をしているのが手に取るようにわかる。俺の感じていた違和感がこれだと気がついたのは、それからしばらく経った後だった。

「はい。みなさん、何かを勘違いしているようで・・・・」

「そうだよ、桜木君は男だよ、僕も初めて会った時はびっくりしちゃったけどさ」

「時に宗介。何でそんなにゾロゾロ連れ歩いているんだ？可哀相な男達にも分けてやれるくらいじゃないか」

「いやぁ、参ったな。っと、そうそう。生徒会長が言ってたんだけど、文化祭は男女の組で回れって。でないと、賞を取ったクラスも落とすって。だから、修も誰か女の子を見つけた方がいいよ！じゃあ！」

「ちょっと待て！どこにそんな自己中な生徒会長がいるんだよ！」

俺はそう怒鳴って凛に聞いたが、凛は何も答えないで歩いて行ってしまった。しかし、腕が上がって、ピースをしている。それで、大体のことはわかった。

あいつ、生徒会長までやってるのか？どうりで滅茶苦茶な文化祭だ。

それに、会長があんなに女を引き連れたら、他の男はどうすればいいんだ？

「あっ、えっと・・・・。僕のせいで迷惑をかけてしまったみたい

で、すみませんでした」
「お前も、誰か女を見つけた方がいいぞ」
「しかし、中々相手が見つからないんです。一応、宗介君と同じクラスなので、見つけないといけないと思ってたんですけど、見た目がこうなんで、どうもダメなんです」
「丁度いい。この中から選んだらどうだ？」
「いえ、それは・・・・」

俺は、桜木の言葉を最後まで聞かずにそのまま歩き出した。

生徒会長は一番偉いらしいが、そんなことは関係ない。凛が生徒会長なら、破ってもいいだろう。

そう思ってブラブラ歩く。空は、大分暗くなりかけていると言うのに、人だかりは減ることはない。むしろ、増えていた。みんな、バカな生徒会長の言うことを鵜呑みにし、必死で女や男を捜してる。

「修」

肩をトントンと叩かれて、振り返ると、凛が女装をして立っていた。

こいつ、完璧悪趣味・・・・。

「女の子がいないの？最悪は僕が一緒に歩いてあげるよ。出ないと、外に出ることすら出来ないし」
「うるさい、耳が痛くなるほど声はかけられた！でも、めんどくさかっただけだ・・・・」
「じゃあ、桜木君に頼めば？」
「何を？」
「だから、一緒に行こうって。桜木君なら男の子には見えないよ」

「さっき、無理矢理別れてきたんだ。それなのに、そんなことを頼める訳ないだろう」
「そう言うと思って、つれて来た。ちゃんと女装してますよ♪」
凛は勝手に言うと、傍にある樹に向かって手招きをした。そこから、女としか思えない桜木が出て来る。凛の悪趣味に付き合わされ、凄く可哀想に思える。

「これで大丈夫、形だけ作っておけば通るようにしてあるから」
「お前が生徒会長なんだろう？何でこんなめんどくさいことしたんだ？」
「いやぁ、文化祭は恋の進展にいい機会だと思ってさ。だから、無理矢理にもね。じゃあ、僕はこの後やることがあるから」
凛は、女子に見つからないようにそそくさとどこかに消えた。きっと、女装も変装と称しているらしい。

「どうしてそうなった？」
「えっとですね・・・・修さんがいなくなった後、違う意味で女子に囲まれたんです。それに戸惑ってるところを助けてもらったんですけど、そうしたら頼みたいことがあるって言われて。それでメガネを取ってこれを着ろと言われました。反論しようとしたんですが、宗介君もするようなので、一人でさせるのは可哀想だと思い、着ました」
「あいつのことは気にしなくていいんだぞ。元から悪趣味なんだからな」
「悪趣味とは？」
「パジャマなんか、ピンク地にウサギ柄がついたのを着てるんだぞ？」
「可愛いですね」

桜木の答えを聞いて、物凄く驚いたけれど、こいつにこれ以上言っても無駄だと思って、まだ回っていないところを思い出し、桜木を連れて回った。

桜木は、何も言わずについて来る。だから、俺もあえて話さなかったが、何だか、物凄く気まずい。

「そう言えば、お前、昨日は来なかったよな？」

「あっ、はい。実を言うと、今不登校で・・・・。三年生の始めに宗介君が僕の家に来てくれまして。そして、ちょっとした知り合いになったんです」

「何かされなかったか？」

「何かとは？」

「例えば、家を燃やされかけたとか、恥をかかされたとか、大声で泣かれたとか」

俺の言葉に桜木が一瞬目を見張る。それから即座に「ないですね」と答える。と言うことは、ああ言うことをするのは俺だけなのか。凛の婆さんは甘えていると言っているが、俺にとって、いつも命を狙われているようで溜まったものじゃない。俺を恨んでいるだけかと思っていた。

丁度七時五分前になった頃、向こうの方からこっちに向かって来る人影が見える。

わかるだろう？凛だ。凛以外に、俺達に近付く奴等はいない。

「何だよ」

「はぁ、はぁ」

「大丈夫ですか？」

桜木の言葉に、膝に手をついて息をしていた凛が、「待って」と言うように手を上げるから、しばらくの間待ってやると、やっと話しだした。

「あっ、あのさ、七時になったら花火を揚げるんだけど、手伝って。桜木君も」

凛は、息を整えたはずなのに、まだ、苦しそうだ。しかし、それには構わず、俺らの手を引いて校舎の中に上がりこみ、放送室のところまで来た。

「僕が、一分前に何か言葉をしゃべる。例えば、『楽しかった文化祭も、そろそろ終わりの時間になりました』とかさ。だから、その放送が聞こえたら、打ち上げ花火をセットして。それから、カウントを数えるから。十の辺りでライターをセット。それから、三のところで最初に揚げる花火に火をつけて。それからは、次々と火をつけて行っちゃっていいから。それが終わったら、また放送室に戻って来て」

「・・・・めんどくさいな」

「ああ、亜修羅。絶対めんどくさがって帰らないでよ？大事な話があるんだから」

「ああ。後でお前にブーブー言われる方が後始末が悪いからな」

「じゃ、よろしく！」

凛は、警官が取る敬礼のポーズをする。しかし、俺らはうなずいた。

「・・・・ダメじゃん。二人も敬礼、はい！」

「・・・・こうか？」

「こうですか？」
「そう。そして、『ラジャー』って」

「そんな恥ずかしいことが出来るか！」と言いたいが、誰もいないし、やるだけやってやろうと思った。甘いな、とことん甘いよ、俺。

「・・・ラっ、ラジャー・・・・」
「よし、行って来い！」
「調子にのんな！バカ！！」

せっかく従ってやった俺の気持ちも知らず、偉そうな態度の凛を叩く。子供にはしつけが大切だ。こいつは、でっかい子供だしな。

「いった・・・・」
「行くぞ、桜木」
「あっ、はい」

痛がる凛を置いて、俺は、桜木と一緒に花火が置いてあるところに向かった。

「あのぉ・・・・」
「なんだ？」

桜木の手を引っ張って廊下を突き進む俺に、戸惑いがちに聞いて来る桜木。

「花火の置いてある場所って、どこでしょうか・・・・」

最もな質問に、思わず足が止まった。そうだ。凛は、花火が置いてある場所を一言も言わなかった。手伝わせたくせに・・・・。

「あいつ・・・・」
「あっ、放送室に戻っても、もう遅いですよ。ここの学校の校則では、放送三分前から鍵を閉めることになってるんです。それから立ち入りも禁止なので」
「あいつがそんな校則なんか守る奴だと思うか？」
「はい」

・・・凛に対しての印象は大分違うようだが、とにかく、放送室の鍵は開いてるだろうと思い、階段を上って行ったのだが・・・・。

「やっぱり、閉まってますね」
「あいつ、本当に嫌味な奴だな」
「とっ、とにかく急ぎましょ」

桜木に言われて急いで探すが、見つからない。そして最悪なことに、呑気な凛の声が学校中に響き渡った。

「楽しかった文化祭も、そろそろ終わりの時間です。あっと言う間だったかと思いますが、楽しんで頂けたでしょうか？最後は、盛大にバコーンと行きますんで、花火班、よろしく！」

最後の方は、俺らに向けられた言葉だと思った。しかし、その大事な花火の場所を教えないで、どうしろって言うんだ。

「何が花火班だ！花火の場所も教えないくせに！」

「あっ、修さん。大声を出さないで下さい！」

俺が大声で凛に言ってやると、桜木が慌てて止めて来た。これぐらい、やったっていいんだ。花火の場所を教えないで、準備をしておけと言う奴がバカなのだ。

気が焦っていて気がつかなかったが、周りを妖気に囲まれていたことに、今気がついた。

「けんしょ・・・・」

時間が時間だから、躊躇わずに妖狐の姿に戻り、四方八方に並ぶ妖怪を次々と消して行った。

その時、自分の方で手一杯だったので、忘れている存在に気がついた。桜木だ。妖怪もそれに気がつき、そちらの方向に向かう。

それからは、スローモーションのようだった。人間よりも、十倍以上は強いはずの妖怪の攻撃を俊敏な動きでかわしていくのは見事だった。

「おい、桜木、お前も・・・・？」
「いいえ。ただ、特殊能力があるだけなんです。きっと、宗介君が言いたかったのはこのことだと思います。それより、さっさとやっちゃいましょう。こんな奴等」
こいつ、さっきまでおとなしかったのに、スイッチが入った途端、急に喧嘩っ早くなったな。でも、こいつはかなりいけるかもしれない。
「それでは、カウントを始めます。十、九、八・・・・」
いつの間にか、カウントに入っている。しかし、妖怪は大勢過ぎて、拉致があかない。
「七、六、五、四、三・・・・」
「僕が、三、二、一、に合わせて打ちますから、ゼロで何とかして下さい」
そう言うなり、桜木はどこから取り出したのか、銃を取り出すと、空に向かって発砲した。
バンッと言う表現が一番似ている音がして、白い光が花火のように上って行く。それから、二の声に合わせてもう一発。
「一、ゼロ！」
一で桜木が撃った球の後に、俺が真上に向かって炎を打ち上げた。
それは、空で華麗に弾けると、下にいる妖怪に白い光と共に降り注いだ。

「ぐわぁぁぁ、焼ける・・・・・」
「眩しい、眩しい・・・・・」

炎に当った妖怪は、しばらく苦しんだ後にパラパラと灰になって消え、光が直撃した妖怪は、当った瞬間に消えた。

そうして、降り注ぐ炎と光に苛まれ、妖怪達は全滅した。

「お前、一体何者だ?」
「人間ですよ。ただ、少しだけ他の人とは違うだけです」
「そうじゃなくて、普通の人間が、なぜ妖怪と互角に戦えるのかってことだ」
「それは・・・・」
「桜木君は、妖怪だからだよ」

声のした方向を向くと、凛が制服をちゃんと着て立っていた。その顔には、「自分が言いたかったのに!」とでも言いたげな表情が浮かんでいる。

「人間なんだろう?」
「あれ、そうだっけ?」
「はい。人間ですけど、妖怪退治屋って知ってますか?それの養成学校に行ってたんです。ですが、それも卒業したので、人間界に帰って普通の生活をしていました。そしたら、宗介君に会って。それから、修さんにも会ったんです。でも、びっくりでした。修さんが妖怪だなんて・・・・。ずっと近くにいたのに気がつきませんでした」
「それを言うなら、こいつも妖怪だぞ?悪趣味妖怪」
「本当ですか?」
「まぁ、ね。妖怪なんだ。でも、何で言っちゃうのさ!こう言うの

は、僕みたいなガラスの心を持った男の子には恥ずかしいことなのに・・・・」

「俺が、デリカシーがないと言いたいのか？」

「そう言うこと」

「ふざけるな」

凛を叩く。桜木は、それを不思議そうな顔で見ていた。

「僕は、妖怪退治屋の養成学校で、『妖怪はみんな、自分勝手でわがままで、お互い仲が悪い』と教わったんですが・・・・」

「自分勝手でわがままなのはこいつだ。それに、俺は凛に迷惑している。決して仲がよくなんかない」

「嘘つき！実は僕がいなかったら寂しかったりするくせにさ！」

「うるさい！お前なんか、ビービー泣く子供じゃないか。でかい体して」

「僕、亜修羅より大きくないから。誤解しないでよね」

「お二人の本当の名前は、亜修羅さんと、凛さんなんですね」

喧嘩する俺達を、冷静に観察する桜木。はたから見れば、変な連中だと思われるだろうが、それでもいいだろう。

「実は、話って言うのが・・・・」

凛が話し出した話は、とても最悪なことだった。そして、凛の神経を疑いたくなるようなものだった。

「おい、よく凛と普通に話せるな」

「ええ、まあ。家を燃やされたくらいで怒ったら、自分の命が危機に迫っている時も冷静でいられないだろうから、怒るなって教わったんです」

「だが、俺だったら、こいつを灰にするぞ」
「いいんです。何回も謝ってくれたので。それに、家は何とか直したんで。ちょっと住みにくいんですけど」
「おい、本当にこいつの家を燃やしたのか？」
「・・・うん。だって、狭くて、ライターをいじくってたら燃えちゃってさ。だから、亜修羅・・・・」

凛がすがるような目でこちらを見て来る。凛がこんな顔をする時は、ろくなことを言い出さない時だと、俺は学んだ。きっと、まずいことを言われると思って、逃げようとしたところを、凛に必死で掴まれる。

「離せ、俺の家だって狭いんだ。俺が寝ている時に、何回蹴られ、殴られたと思う？もう一人増えるなんて無理だ！」
「だって、桜木君。不幸な子なんだよ？両親は交通事故で死んじゃうし、育ててくれたおばさんはバスに轢かれちゃって死んじゃって。そう来ると、桜木君を預かりたくないって。自分が死ぬのが嫌だからって、預かってくれる人がいなくて、その上、家が燃えちゃって。・・・小さかったけどさ」
「最後の家を燃やしたのはお前だろう。それに、俺がこいつを預かるってことは、俺に死ねって言うのか？」
「交通事故や、バスに轢かれるくらいじゃ亜修羅は死なないでしょ？」
「大怪我するぞ」
「お願い！」
「・・・・」

無言で桜木の方を向く。そして、しつこくせがんで来る凛を見る。
それからため息。

「俺の家は狭いんだぞ。どうやって寝るんだ?」
「だから、こうやって・・・・」

凛はしゃがむと、近くにあった木の棒で絵を描く。言いたいことはわかった。しかし、こいつは自分の寝相の悪さを把握していない。

「自分がこんなにおとなしくしてられると思ってるのか?こんなに離れてても転がって来るんだぞ」
「あの、いいです。その、家がありますから」
「直した家か?」
「はい。貧乏臭いんであまり見せたくないんですけど」
「そうだ!桜木君ね、犬小屋に住んでるんだよ!」

俺は、ゆっくりと桜木の方を振り返り、一言だけ言った。

「・・・家に来るか?」
「いえ、大丈夫です。何とか生きていられますから」

余りにも桜木が哀れに見えて、何とかしてあげたいと思った。これじゃあ、中学生でホームレスじゃないか。

「いや、犬小屋よりは狭くてボロイ家の方がマシだろう。最悪は、隣の部屋も借りればいい。金さえ払えばいいんだからな」
「いえ、本当に慣れてますから。大丈夫です」
「犬小屋で寝泊りしてる奴をほっとく方が悪い」

多少強引ながらも、桜木を承諾させた。せめて、ボロボロの家に住んでいるんならいいが、犬小屋ではあまりにも可哀想だ。それに、凛が燃やしてしまってもわかる。

「ちょっと、まだ帰れないよ？文化祭の片付けがあるんだから」
「それを、俺も手伝えって言うのか？」
「うん」

凛の図々しさは百も承知だが、ここまで来ると、怒る気すら失せる。人の家に転がり込んで来たかと思えば、他人の家を燃やし、新しい住人を増やした挙句、文化祭の後片付けまで手伝えと言うのだ。

「俺は忙しいんだ。今日中にやっておかないといけない仕事が沢山あるんだからな。先に帰らせてもらう」
「僕が手伝います。それじゃあダメですか？」
「ありがとう！じゃあ、亜修羅、よろしく！！」

とことん凛のわがままに振り回されて、俺はどうなるんだろうと帰り道にしみじみと思った。

告白

俺が仕事から帰って来た時には、二人は何とか眠っていた。しかし、俺の場所がない。

桜木は、遠慮するように縮こまっているんだが、凛は全く気にしていなくて、部屋のど真ん中で眠っている。

そんな風に入り口で観察していると、桜木の方が起き上がった。

「あっ、すみません。退きますね」

「いや、退いて欲しいのはこいつだ。容赦なくど真ん中を陣取っているんだからな」

「今まで何をしていたんですか？」

「依頼を片付けて来たんだ。内容は、色々だ」

「ああ、そうだったんですか。えっと・・・・メガネ、メガネ・・・・」

桜木は、漫画とかでよく見る、手で辺りを伺ってメガネを探す動作をしている。しかし、今は真夜中で真っ暗なところにあるメガネを探すのだから、仕方ないのだろう。

「あっ、あった、あった」

「凛につぶされてなかったか？」

「はい、大丈夫です」

「不登校ってことは、ずっとこの家にいるのか？」

「いえ、明日から一緒に学校行こうって。僕がついてるから大丈夫だって、凛君に言われたので行ってみようと思います」

「そうか」

「あっ、じゃあ、そろそろ帰ります。随分お世話になっちゃいましたけど」

立ち上がって、出て行こうとするが、何かに足を引っ掛けたようで、思い切り転んだ。バンッと言う音と、カタンとメガネがどこかにぶつかった音がした後、桜木は何とか立ち上がった。

「待て、その家は壊して来た」
「えっ！じゃあ・・・・」
「そのついでに、大家に金を渡して来たから、隣の部屋を使え。じゃあな」

まだ呆然としている桜木を追い出すと、ドアを閉めて、ついでに鍵も閉めた。
それから、仕方なく隅の方で丸まって眠った。

朝方目が覚めたから、隣の部屋に行ってみた。すると、ドアの鍵が開いていた。
「物騒だな」と思いつつも、ドアを開け放つ。中では、桜木がちゃんと寝ていたが、何もかけてさえいないから、布団をかけてやった。

出来るだけ小さな音を立てて扉を閉じるけれど、凛は起きてしまったようだ。

「どうしたの？」
「いや、何でもない。それより、何でドアの音がすると目が覚めるんだ？」
「知ーらない♪」
「変な体質だな」
「別に、亜修羅には関係ないじゃん」

凛はそう言ってむくれると、驚異的な速さで眠りについた。その間、一秒もかかっていないだろう。

「バカな奴だ」

「バカじゃないもん！！」

俺の声が聞こえたように、凛は怒鳴ったが、寝言だったらしい。

こいつ、本当に眠っていても意識があるんじゃないか？

ふとそう思って、ゆっくり凛に近づく。そして、チョンと凛に触ってみた。しかし、起きない。こいつ、地獄耳って奴なのか？

凛の傍にいると、何をされるのかわからないので、取りあえず部屋の隅で予習をしていた。

六時頃、人の足音が聞こえたから覗いて見ると、桜木だ。

「あの、おはようございます。布団ありがとうございました。凛君は？」

俺は、無言で眠っている凛を指差す。桜木はうなずくと、部屋に帰って行った。

「ああ、全然眠れない。寝不足だよ」

「起きたか。さっき桜木が、凛をたずねに来たぞ」

「ああ、本当？制服のことかな？」

凛は、その悪趣味なパジャマのまま、寝ぼけ眼で部屋を出て行った。

今日は、凛を起こすと言う大仕事をしないで済み、よかったと思った。毎朝死ぬ気で凛を起こさなくちゃならないのは、さすがにしんどいからな。

凛が出て行っている間に制服に着替え、学校に行く準備をした。いつもは朝食を作るところだが、昨日、凛に散々甘い物を食べさせられて、気持ち悪い。二日酔いと同じような感じだから、食べる気がしない。だから、あいつらの分もいいか。

そんなことを思いながら欠伸をしていると、ドアを凛が壊して飛び込んで来た。その後ろに、桜木もくっついて来ている。

「どうしよう！」
「どうした？」

どっちかと言うと低血圧だから、ボーッとしているところに、勢いよく飛び込んで来た凛をジトッとした目で見る。

「ボタンが一個付いてないよ」
「別に、ボタン一個ぐらいでそんなに騒ぐなよ。ボタンよりも、ドアが外れたことの方が一大事だろう」

玄関に立っている二人を部屋の中に追いやり、ドアを何とかくっつける。

「そうですよ、凛君。ボタンが一個ないぐらい大丈夫です」
「そっか。じゃあ、行こう」
「・・・・」

人の家のドアを吹き飛ばしたのに、どうでもいいことだったらしい。

蝶番を何とか溶かしてくっつけたが、また、この調子で飛び込んで来られたら、このドアは使い物にならなくなるだろう。

最後にドアを閉めた俺は、出来るだけ優しく閉めた。

いつも通りに教室に入ると、自分の席に一直線に向かう。ここで、いつもなら女がうるさく付きまとって来るのだが、今日はやけに静かにジッとこっちを見るだけだった。

そして、一時間目が始まったのだが、最悪なことを思い出した。一時間目は数学だと言うことだ。

明らかに顔をしかめて教科書を出す。しかし、入って来たのは浅積とは正反対の奴だった。ハゲで、デブで腹が出てるってところは同じだ。しかし、顔つきが全然違い、浅積は素の変態顔をしていたが、こいつはお人よし顔。

まぁ、変態顔の教師に教わるよりはマシか。

「浅積先生の代わりとして、数学の教師をすることになりました。福森です」

女は何も言わなかったが、心の中では絶対に喜んでいるはずだ。あ

の変態の浅積が消えたんだから、俺も万々歳だ。

福森はしばらく自分の自己紹介をした後、数学の授業を始めた。それは、浅積と違い、かなりのローペースだが、誰にひいきすることも、いじわるすることもなく、わからなかったら丁寧に教えていた。

それから、チャイムが鳴るまでの空いた時間は、自分の笑い話をしていたが、俺は面白いとは思わなかった。

しかし、こいつは気に入ったことは間違いない。

二時間目は美術、大嫌いの大嫌い。何が嫌いって、全てが嫌いだ。教師も、絵も。全て何を含めても嫌いだった。

俺が嫌ながら、懸命に描いている絵を、あざ笑い、バカにした。美術の教師を殺したいと何回思ったことか。しかし、何とか堪えてここまで来たんだ。

しかし、今日だけは足を引っ掛けてやった。そうしたら、思い切りヒットして、盛大に美術の教師はこけ、その上に色とりどりの絵の具が降り注ぎ、パレットが上から降って来た。

みんな、美術の教師も嫌いなようで、その有様を見て、誰からともなく笑い出した。

「誰がやった!!」
「知りませ～ん♪」
「先生、ちゃんと足元を見ないとダメですよ」
「クックックック・・・・」

生徒に笑われ、真っ赤になる美術の教師。いつも生徒の絵を見て笑っている罰だ。その恥ずかしさを一生忘れるな。

美術の教師は奇声を発した後、美術室から続く準備室に入って行った。

「足引っ掛けた奴、ナイス」
「鬱憤を晴らしてくれて、ありがとう！」
「うわぁぁ～！！」

歓声があがる。誰が引っ掛けたのかともわからないのに、ひっかけた奴に対して喜んでいる。もちろん、俺は名乗り出るつもりはないが。

それからは、もう一人の美術の教師が教えたが、さっきの教師が戻って来ることはなかった。

めんどくさい美術の時間が終わり、休み時間になった。俺は、出来るだけ人目に付かないように階段を上って行った。

今日はかなり早く来たから、女もいないだろうと思っていた。しかし、女はいた。こいつ、いつも何時からここに上って来てるんだ？

「ねぇ、伊織君てさ、彼女がいるの？」
「・・・・」
「やっぱり、いるんだ」
「何でそう思った？」
「だって、桜道中学の文化祭に可愛い子と来てたから」

俺は、そこで納得した。桜道中とは、凛達が通っている中学のこと

だ。それに、女装をした桜木と一緒にいたから、こいつは何かを勘違いしているようだ。

「あいつは彼女じゃない。それに、女ですらない。ただ、知り合いに嫌が応でも着せられただけだ。勘違いするな」

「じゃあ、彼女じゃないんだね！」

「ああ」

めんどくさそうに聞こえるように言うと、立ち上がり、教室に戻ろうとした。こいつと二人きりでいるよりは、場所を移動した方がいい。

「わかった・・・・」

女は、口を結んでいた。俺は、これ以上こんな雰囲気に触れていたくなかったから、さっさと下りようとした時、女が決意をしたように、俺を呼び止めた。

「あのさ・・・・」

「・・・・」

「私、ずっと伊織君のことが好きだったの。私と付き合ってくれない？」

背後で言われているから、女がどんな表情をしているのか分からない。

「・・・・」

「返事はまた今度でいいからさ」

女が絶えかねたように言うなり、逃げるように屋上から去った。

俺は、しばらく屋上に立っていた。

最低？

屋上での出来事の後、しばらくの間は固まっていたが、チャイムでやっと我に返った。

慌てて階段を駆け下りる。そして、教室に滑り込みセーフ。しかし、隣の席があいつで気まずい。最悪の席順だ。早く席替えしてもらいたい。

そんな俺のモヤモヤした気持ちは教師に伝わるはずがなく、ノロノロと訳の分からない英語が聞こえて来るだけだった。

普段なら楽に聞き取れる英語も、あんなことを言われて戸惑っていると、わからないものだ。

ボーッと授業を受けている時に、大勢の足音が廊下をバタバタと走って来る音が聞こえた。最初は気がつかなかった一同だが、音が大きくなって聞こえ始めたようだ。

教室がざわつく。そんなのは無理もない。授業中に廊下をあんなに音を立てて走ってるんだ。しかも、大勢で。そんなバカは、放っておくのが一番だ。

そんなことを考えて、恐ろしい事実に気がついた。その足音は、段々とこちらに近づいて来ている。そして、授業中の廊下をバタバタと大騒ぎで走るバカな奴と言ったら、一人しかいない。

いや、でも、学校に行っているはずだ。そんなことがある訳は・・・。

俺の嫌な予感は的中し、ざわつく教室に勢いよく沢山の人のなだれが押し寄せた。その先頭は、凛と桜木だ。

あいつはバカじゃないと思ってたが、とんだ勘違いのようだ。

凛達の後ろからは、狂った男達が走って来る。

「た～す～け～て～～！！！」

凛達は、迫って来る男達の群れから逃げるように俺の後ろに隠れる。

おい、俺に身代わりになれって言うのか？何て酷い仕打ちなんだよ、俺は。

「何で一々俺のところに来るんだよ」

「だって、困った時は保護者に言いなさいって言うじゃないか！一番年上だから、保護者なの！！」

「何があったんだよ！？」

もう悩んでいるどころではなく、その時だけは麻痺した脳がフル回転することが出来た。

「実は、ちょっと色々あって、怒らせてしまったみたいで・・・・」

「そうだよ、何だかしらないんだけど、怒らせちゃったみたいで。助けてよ！」」

「俺に何をしろって言うんだよ！事情がわからないままじゃ、俺だってどうしようも出来ない」

口論する俺達を、ぼんやりとした表情で見つめているクラスメート

と教師。しかし、追っかけて来た狂った男達は、闘争心むき出しだった。

「おい、お前、俺達の邪魔をするのか？」
「俺に話を振るな！事情なんか知らないんだからな！！」

その他にも、多々の言葉。事情を全く知らない俺を問い詰めて、こいつ等は頭がおかしいらしい。

「おい、お前ら。こいつ等は何にも知らないって言ってるんだ。ただの当てつけで言っているんなら、タダじゃすまないぞ」
「お前は、こいつ等の何者なんだ？」

すると、今まで俺に隠れていた凛が顔を出した。

「保護者です！」
「なら、責任を取ってもらおうか！」

そう言って、にらみつけて来る狂った男達が怖いのか、二人は俺を前に突き出し、自分は隠れる。俺だって、こんな奴等とやり合っていられる程暇じゃない。

「そもそも、お前の方が強いだろうが！」
「でも、めんどくさいもん」

そう言って、嫌がる俺を前に押し出す二人。

ちっ、仕方ない・・・・。

「・・・お前等、いい加減しつこいぞ。こいつ等が何をしたのか

わからないが、そんなにしつこくしていると、お前らの骨を粉々にしてやるぞ」

俺が一歩を踏み出して凄んで見せると、そいつ等は一歩引いた。

「なっ、なんだよ・・・・」

「去れ！さっさとこの場を去れば、俺はお前等のことを許してやる。そうでなければ、名誉毀損の罰で、お前等に刑を下す」

近くにあったロッカーを力一杯ではないが、叩く。その音が物凄く響いて、そいつ等は怯えて逃げて行った。

出来るだけ力を入れないように音を立てることにかなり苦労したが、どっち道壊れてしまった。

「いっ、行った・・・・」

「行きましたね・・・・」

二人は足の力が抜けたらしく、教室のタイルにガンと膝を落とすと、大きくため息をついた。

俺はどうしようもなくなり、とにかく動けないでいる二人を近くの男子トイレまで連れこんだ。そして、入り口の扉を閉める。

「大丈夫か？」

「はい。大丈夫です。ありがとうございました」

「・・・・怖かったよぉ～～」

そう言って、急に凛が泣き出すものだから、かなりビビッたが、何とか慰める。

「もう、大丈夫だと思うが、一応学校にいろよ。そのかわり、屋上でおとなしくしてるんだぞ」

凛達に言い聞かせるように言った後、少しだけ表情を緩めた。凛は、これを笑っていると言うのだが、俺はそうとは思わない。これは、あくまで微笑だ。

いや、微笑も一応「笑」と言う字を書くから、笑っているんだろうか・・・・？

すると、凛は泣きやんで、俺の方を不思議そうな顔を見ているけれど、つぶやいた。

「だってさ、本当に怖くて・・・・」

「だから、学校にいていいって言っただろう？」

「うん、ありがとう」

「ありがとうございます。もうすぐ高校に入ると言うのに、修さんに頼ってしまって、すみませんでした。自分達で対応出来るようにならないといけませんよね？」

「亜修羅さ、さっき、口調が優しくなったよね？いつも、そう話してくれればいいのに」

「あれは特別だ。普段あんなフニャフニャなことを言っていたら、すぐにそこを突かれる」

「でも、本当にありがとう。身代わりになってくれて」

「さっさと行け！授業中に飛び込んで来たんだからな」

ありがとうと言われて、顔が少し赤くなる。それを隠すために、凛と桜木の背中を押して、男子トイレから出ると、屋上への階段の前に立たせた。

「俺は授業に戻るからな」
「うん、ありがとう！」
「ありがとうございました！」

二人は、さっきとは全く違う笑顔で手を振ると、屋上に向かって行った。

それからは、何とか適当に話をごまかして、何とか納得してもらえた。

そうして、やっと落ち着いて椅子に座ると、今度は女の言葉が俺の頭を締め付けた。それでわかったことは、俺には「自由」と言うものがないんだなと言うことだ。

そんな時、ふと思った。悩む必要もない。俺は妖怪だ。それをわかってあいつが言っているはずがない。だから、それを理由にすればいいんだ。それに、妖怪は人間と交わってはいけないことになってるしな。

そう決まったら、ウダウダ悩むのはやめて、行動に移すことにしよう。休み時間に言えばいい。それなら、時間もまだある。

しかし、時間と言うものは、嫌なことをすると言う風に思うとドンドン過ぎて行き、楽しいことをすると思えばノロノロと過ぎて行くと言う。全くその通りであった。

あっと言う間に時間が過ぎて、昼休み。

俺が屋上に行くと、女はやっぱりそこにいた。

「さっきの返事が出た」
「あっ・・・・」

女は驚いたような顔をしてから、顔を伏せる。

それを見て、俺はため息が出そうになった。
さっさと言って、早くすっきりしたかった。しかし、中々言葉が出て来ない。

女も、今度は屋上から出ることもなく、じっと地面をみつめて待っていた。

俺には、それが逆に堪える。

しばらくの沈黙の後、俺の口から出た言葉は・・・・。

「俺の正体を知って、そのことを言ってるのか?」
「・・・・うん」
「・・・・悪いが、無理だ。それが答えだ」
「そっか」

長い沈黙が続く。その時、カタッと何かが倒れる音がした。

そこで、俺は大変なことに気がついた。あいつ等を、屋上に行かせたことを忘れていたんだ。きっと、聞いてるに違いない。

「何でダメなのか理由を教えて?」

二人がいるとわかってて、この話を続けていられるほど俺は度胸が

ない。

「そんなこと、どうでもいいだろう」

そう答えた時、女が近づいて来たと思ったら、頬に衝撃が走った。

「最低！伊織君なんか、大っ嫌い！！」

そう大声で罵ると、女は屋上から出て行った。

言われ慣れているからあまりショックを受けなかった。しかし、なぜか心にモヤモヤが残った。

何か変

僕（何か、亜修羅が落ち込んでいて無理そうだから、代わりに僕がやることにするよ！）は、桜木君と顔を見合わせる。

「僕、人間の女の子にフられる妖怪を初めて見たよ。ギネスブックに載るかな？」

「そんなことはありませんよ。ギネスブックに載るのは、ちゃんと判定する人がついて、認めてもらわないと載りませんよ。それに、今、修さんは傷ついていると思います。そんなことを言っていいのでしょうか？」

「いいの、聞こえてないから」

最もなことを言う桜木君の言葉を、上手く丸め込んで、再び亜修羅を観察し続ける。

むこうを向いているからどんな表情をしているかわからないけど、「落ち込んでいるのかな？」と言うことはわかる。

「そう言う問題でしょうか？」

「まぁ、ほっといてあげるのが、今僕らに出来ることだからさ。ほっといてあげようよ。無闇に声をかけようものなら、半殺しに遭うよ」

「えっ・・・・」

「だからさ、僕らは帰ろう？」

「はい。でも、あそこには修さんがいますよ？」

「大丈夫、今は非常事態だから、犬神の姿に戻る。そのまま桜木君も運んで行ってあげるよ。そこまで奴らもついて来ないでしょう？」

「はい・・・・しかし・・・・」

桜木君の言葉を聞き流し、サッと元の姿に戻ると、慌てる桜木君を抱えてさっさと近くにある家の屋根に飛び移った。

何とか亜修羅にはバれていない・・・・と思った。

「ちょっと、降ろして下さい！」

「そんなに暴れたら、本当に落としちゃうよ？」

お姫様抱っこのような状態のまま、桜木君が暴れる。でも、下をちらりと見てからおとなしくなった。

「すみませんでした・・落とさないで下さい・・・・」

「大丈夫、落とす気はないから」

「はぁ・・・・」

桜木君は僕の答えを聞いて、安堵のため息を漏らした。それにしても軽い。大きな羽を持ってるみたいだよ。

「凄く軽いね」

「いや、僕、重いですよ。多分、妖怪からしてみれば軽いと思うんですけど・・・・」

「そう言えば、今何時かな？もうとっくに給食の時間かもね」

「いえ、もう給食の時間はとっくに過ぎてますよ。多分、五時間目か六時間目くらいじゃないですか？」

「ええっ！！？いつもお昼抜いたことないのに・・・・・。あっ！」

「なっ、なんですか？その明らかにまずそうな・・・・悲鳴に近い声は・・・・？」

桜木君の問いは、屋根から落ちて行くことで答えを表した。お昼を

抜いたと言う事実を知って、驚いた時に足が滑っちゃったんだ。

「大丈夫、ここから落ちても死なないから」
「僕は死んじゃいますよ！」
「あれ？って、人間の姿に戻っちゃったよ！！」
「・・・何とか今まで危機を乗り越えて来ましたが、僕の命もここまでなんですか・・・・」

僕らは、重なって屋根から落っこちた。僕が下で、桜木君が上。でも、僕の下は固いコンクリートじゃなかった。コンクリートのはずなのに。

下を見ると、何かを踏んづけている。きっと、布団か何かだろう。

「こんなところに布団が落ちててよかったね」

その時、前に伸びていた何かがもぞもぞと動き出した。

「いえ、違いますよ！人間です、人ですよ！！」
「そんなぁ、桜木君。いくら桜木君が軽いって言ってもさ、僕は四十あるんだから。この布団、つぶれちゃってるよ」
「いや、今動きましたから。手が動きましたから。早く退きましょう」

桜木君に腕を引かれて、布団の上から退く。すると、それは桜木君の言う通り、人間だった。

「大丈夫ですか？」
「・・・・」
「あの・・・・」

桜木君が、その人を起こすと気絶していた。しかも、頭から血を流している。

「あああああ・・・・血が・・・・」
「だから言ったじゃん！つぶれちゃってるって」
「そんなことより、早く病院に連れて行きましょう！！」

桜木君は、その男の人の足を引っ張って、病院まで連れて行こうとするけど、太ってはいないと言っても、男の人だから六十はあるんじゃないかな？桜木君が苦戦している。

「凛君も手伝って！」
「桜木君は後からついて来るだけでいいよ。僕が引きずって行くから」

桜木君の変わりに足を持つと、そのままコンクリートの上をズルズルと引きずって行く。

「ああ、凛君！頭をガンガンぶつけてますよ！」
「しょうがないなぁ、担ぐしかないか」

今度は腕を引っ張って、自分の背中に男の人を乗っけると、ズンズン歩き出した。その様子を驚いたような目で見ている桜木君。

「凄いですね、凛君。僕とそんなに体重変わらないのに、普通の顔をして背負えるなんて」
「まぁ、妖怪だからね」

そんな感じで近くの病院まで男の人を連れて行った。

「大丈夫でしょうか？」
「うん、そんなに傷も深そうじゃなかったし。大丈夫だと思うよ？」
「・・・・大丈夫ですかねぇ」

その時、看護婦さんが僕等を呼びに来た。何でも、お礼を言いたいらしい。

看護婦さんの後について病室に向かう。

「あの、怪我は大丈夫ですか？」
「・・・結構ひどい怪我だったけど、あの人の生命力は凄いわ。普通の人なら、一週間は意識不明なところなのに、もう意識が戻って起き上がってるわ」
「そうですか」

僕は、安心している桜木君に向かって親指を立てた。

「ほら、言った通り。大丈夫だよ！」
「うん、よかった」
「他の患者さんはお休みしてる時間だから、静かにしてね」

看護婦さんは扉を開けて、僕らを促す。僕らは、看護婦さんが言った言葉にうなずくと、中に入った。

「奥に入って右よ」
「ありがとうございます」

病室に入って奥に行くと、包帯を頭に巻いた男の人がベットに座っていた。

「あの・・・・頭、もう大丈夫なんですか？」
「ああ、もう大丈夫だよ。でも、君達、確か空から降って来たよね？」
「ああ・・・・えっと・・・・。はい、ちょっと屋根に上って遊んでいたら足を滑らしてしまって。すみませんでした」
「えっ・・・・・！？」

僕の言い訳に驚く桜木君。でも、男の人は納得したようにうなずいた。

「俺も、よく屋根に上って落ちたよ」
「ええ・・・・・！？」

二回目の驚きが桜木君を襲ったけど、僕はそんな予感がしていたから、驚きもしなかった。

「それでよく頭を打つから、回復力が凄くなっちゃってね。それより、ありがとう。ここまで運んで来てくれて。俺、重かっただろ？」
「ああ、いえ。朝飯前です。日ごろから三百キロの物を持ち上げているんで」

日ごろから、三百キロのものを持ち上げているって言ったのは、本当なんだよ？信じないだろうと思うけど、僕は物凄く力持ちだから、それぐらいは全然平気なんだ。

「ははははは、冗談が上手いね。まるで本当に聞こえるよ。ところで、名前は？」
「僕は、丘本宗介。この子は、桜木明日夏君です」

僕が紹介すると、桜木君は無言でお辞儀をした。

「そっか、丘本君と桜木君だね。改めてありがとう。俺は、鳴瀬七海。変な名前だろう？よく、女、女ってからかわれる」

「いい名前だと思いますよ？」

「そっか、ありがとう」

それから、僕等はしばらく話をした後、鳴瀬さんと別れた。

大分時間が過ぎて、下校途中の生徒の姿が垣間見れるほどになっていた。

「今から学校に行っても遅いよね？」

「でも、鞄置いてきちゃいましたし、戻った方がいいと思います」

「でも、また出歩くと変な奴等に捕まっちゃうと思うよ？」

「はい、それも承知の上で、何とか頑張りましょう」

さほど頑張ることでもないだろうと思いながら、やっぱり追いかけて来る奴等を払い除け、鞄を取ると、急いでアパートに戻った。

しかし、亜修羅の姿が見当たらず、中に入ることが出来ない。

「では、隣の部屋に行きましょう。朝、修さんが隣の部屋の鍵を渡して下さったので」

「そうだね、亜修羅が帰って来るまではお邪魔させてもらうよ」

桜木君は、鍵を開けて中に入れてくれた。これは言葉では言えないけど、人間のにおいは強い。別に、変な意味じゃないけど、妖怪はにおいを消すことが出来るから、そう感じちゃうんだと思う。だから、部屋中桜木君のにおいがする。あっ、変な誤解はしないでね！

僕はまともな妖怪だから!!

「何ボーッとしてるんですか?」
「いや、何でもないよ」

桜木君に聞かれて、慌てて首と手を振ったから、首が外れるかと思った。

それから、しばらく桜木君のところに居ながらも、外に耳を傾けていた。しかし、亜修羅が帰って来る様子がない。そろそろ不審に思った頃、やっと鍵を開けるカチャッと言う音が聞こえた。

「帰って来た!」
「来ましたか?」

二人で外に出て行くと、丁度亜修羅が入って行くところだった。それに声をかけようとしたけど、亜修羅は全く気がついていないようで、目の前でバタンとドアを閉めてしまった。

「もしかして、まだ落ち込んでいるのかな?」
「わかりません。でも、いつもの修さんとは雰囲気が全く違いましたよね。何と言うか、しぼんだ風船のように」
「よし、励ましに行ってこよう」

中に入って行くと、亜修羅はまるで心が入っていないかの用に、一点を見つめたまま、鞄も下ろさないで立っていた。

「元気出しなよ!まぁ、人間にフられる妖怪は初めて見たけどさ」
「・・・・」
「どうしたの?」

僕が目の前に回って覗き込むと、やっと僕達に気がついたようで焦点が合った。

「いや、何でもない」
「そんなにショックだったの？」
「・・・・・」

亜修羅は、感情のこもっていない声で答えた後、首を振った。顔も無表情で、何だか心を丸ごと抜かれたような感じだ。

かなり重傷なので、どうしようかと迷ったけど、あんまりベタベタくっつくなって言われてるし、今の亜修羅をからかったって、何の面白みもないから、今日は離れることにした。

「桜木君、今日は君の部屋に眠らせてくれる？」
「あっ、はい。わかりました」

そうして僕らは、亜修羅を置いて部屋を出た。

何だか、いつもと雰囲気の違う亜修羅が心配ではあったけど、下手に首を突っ込むと怒られそうなので、しばらくはほおって置くことにした。

あれから、何だかおかしい亜修羅をずっと見張ってはいたけど、おかしいのはその心だけらしく、普通に動いていたりはした。でも、どこか上の空って言うか何と言うか。

次の日の朝、僕は百万分の一の確率で起きる現象を起こした。と言うのも、そんなに大したことではない。自分の力だけで起きると言うことだ。これは、滅多にないことだから自分でもびっくりしているけど、亜修羅のことが気になって、隣へ行った。

いくらおかしいとは言え、鍵はかけているはずだ。だから、僕が除いているのは今までいた部屋のベランダから、亜修羅のいるベランダに飛び移ったんだ。いつもならカーテンが閉まってるはずだけど、今日は閉まってなかった。でも、僕にとっては好都合だ。

中を覗くと、ちゃんといつも通りに起きている。動きもいつも通りなんだけど、やっぱり表情が能面を被っているみたいに全くない。何だか、物凄く不気味だ。

亜修羅に気づかれないうちにさっさと退場すると、再び寝ようとした。しかし、目が冴えて眠れない。これは、産まれて初めての出来事だった。今まで目が冴えると言うことなど一度もなかったんだ。

すると、桜木君が起きた。僕が立てた音で目を覚ましちゃったのだろう。

「おはよ」

「おはようございます。あの、それはなんですか？」

桜木君が指を指したのは、枕元にある刀。小ぶりで、扱いやすそうな感じの刀だ。

「これは、形見って言うか・・・・、そんなようなもの。両親がいなくなる前にくれたんだ。それに、これって凄いんだよ。普通、冥道を開くことが出来るのは、天性のからそう言う力を持った限られた者だけんなんだけど、この刀で宙を切れば、そこに冥道が現れるんだ。名前は確か・・・・・」

「冥道霊閃（めいどうれいせん）・・・・？」

ボソッとつぶやいた桜木君。でも、自信がないと言うのは手に取るようにわかる。

「そうだよ。知ってたの？」

「知ってたも何も・・・・魔界じゃ、国宝物じゃないですか！！魔界を国と言うのかわかりませんが。でも、何でそんなものを・・・・？」

「わからないんだ。他にも、二つの国宝があるよね？」

「はい、冥道霊閃、烈火闘刃（れっかとうじん）、雷光銃（らいこうじゅう）。この三つが国宝ですよね？」

「うん。それぞれの武器は、使い手を選ぶらしいね。だけど、僕はなぜか冥道霊閃に認められた。でも、まだ一回も使ったことがないよ。烈火闘刃が使えるのは、炎を操る妖怪だし、雷光銃は、何の手がかりもないし。どうして、僕なんかを選んだんだろうって不思議に思うよ」

国宝と言う大層な物が、今、自分の手の中に収められているなんて考えても、何だかあまり実感が湧かない。

「あの・・・ちょっとでいいんですけど、冥道霊閃を見せてもらえますか？」
「はい！」

刀の柄の部分を持って差し出した。桜木君はおずおずと受け取ると、ぎこちない動きでゆっくりと鞘を外した。

その時に、シュッと言う音とシャキッと言うような音が混じった音がして、刃こぼれ一つない刀身が現れた。刀身は、太陽の光に当ってキラリと光る。

桜木君はしばらくの間見とれていたけど、ハッと我に帰って、急いで刀を鞘に収めると、僕に返して来た。

「あっ、ありがとうございました。一度でいいから国宝を見てみたかったんです」
「うん。国宝と言われるほど膨大な妖力を宿した刀は他にはないからね。烈火闘刃を覗いて」
「そうですね、大事にしまっておいて下さいね」
「わかってるって。悪いことに使う奴が現れたら、大変だもんね」

僕らが国宝の話しで盛り上がっている間に、時間はあっと言う間に過ぎて、もう直登校しなくてはならない時刻になった。

「そろそろ急がないとね」
「はい、そうですね」

何とか支度を済ませると、亜修羅のいる部屋に向かった。しかし、すでに出かけた後だった。僕らには、一声もかけないで行くなんて・

・・・。

いつもだったら、きっと、一言でも声をかけて行ってくれるだろう。でも、声すらかけてくれなかった。

「凛君、そんなに落ち込まないで下さい。修さんも、きっと急いで学校に行かなくてはならないことがあって、止むを得なく行ったんだと思いますよ?」

桜木君が肩を叩いて慰めてくれたけど、気分が元通りに戻らない。何だか、凄くショックで、話すのも嫌だった。

「・・・ねぇ、桜木君。今日は学校休んじゃおうか」

沈黙の次に言った言葉がこれなので、桜木君は驚いたが、ちゃんと訳を聴いてくれた。

「どうしてですか?」

「昨日から、亜修羅の様子が変だからさ。学校でも何か起こらないかと思って心配なんだよ」

「・・・体調が悪くないのに休むのは、あまりいい方法ではないと思うのですが・・・。そうですね。確かに、いつもの修さんとは違いますね。僕も心配です。今日は学校を休みましょう」

「じゃあ、さっそく尾行してみよう」

と言うことで、勝手に休みを決定した僕たちは、急いで亜修羅の学校へ向かった。今日は、もう変な奴らも学校に登校した後だったらしく、いなかった。(本当は、電話をして学校側に休みを知らせなくちゃいけないらしいんだけど、今日は特別だ!)

僕らは裏門をよじ登ると、校内に忍び込んだ。それから、亜修羅の教室の下まで歩く。

そして・・・見つけた！

丁度いい位置に大きな木が植えてあったので、そこに隠れるようにして、亜修羅の様子を伺うことにした。この時、亜修羅が窓際でよかったと思った。

「とくに変わった様子はないようですけど・・・」
「うん。ボーッとしているけど、指差されたらちゃんと反応してるしね」

木の枝に立って、上をじっと見上げる。かなりの高さのところにいるから、足を踏み外したら無傷じゃすまないけど、足元を見ないで亜修羅を見張り続けた。

しかし、ジッと亜修羅を見ているのも段々暇になって来た。

「ねぇ、どこか他のところに行こうよ。もう飽きちゃった」
「もうちょっと見て行きましょうよ。せめて、給食の時間になるまで」
「・・・・」

僕は暇で暇で仕方がなく、木の枝から取った芽みたいなものを亜修羅がいるガラスめがけて投げた。すると、窓は閉まっているものだとばかり思っていたけど、閉まっていなくて、そのまま、亜修羅に命中。

亜修羅は、当然、「なんだろうな?」と言う顔でこちらを向いた。

僕らは、慌てて葉っぱが生い茂っている方向に動く。桜木君は、移動に間に合ったけど、僕は間に合わなくて、とっさに体を後ろに倒して、コウモリのように足で木の枝にぶら下がった。

「凛君、退屈なのはわかりますが、もうちょっと考えて下さいよ。もう少しでばれちゃうところでした」

亜修羅は再び前を向いたのを確認すると、そのまま勢いをつけて木の枝に座った。

「うん、わかった。ところで、今、何時?」

「三時間目の終わりぐらいですね」

桜木君が時計に目をやった時と同時に、校内にチャイムが鳴り響いた。

その後にガタガタと椅子から立ち上がる音が聞こえる。それから、日直が号令をかけた後、授業は終わった。

「あれ?何だか割烹着を着ている人がいるけど?給食の時間じゃないの?」

「・・・ああ、本当ですね。僕の時計、一時間きっかり遅れていたようです。もう、給食の時間です」

「ねぇ、何か買いに行こうよ」

「そうですね。さすがにお腹が空いて来ましたし」

僕らは意見が一致したので、近くのコンビニまで買出しに行った。と、そこで出会ったのは・・・。言いたくもない、大体検討はつ

くと思うから、あえて言わない。

そいつらは、相変わらず僕等に敵意をむき出しである。本当に心当たりがないから、困っちゃうんだよね。

「どうしよう、このままじゃ捕まっちゃう」

「あそこの病院に助けてもらいましょう」

桜木君が指差した病院めがけて僕らはダッシュ。そして、病院の自動ドアが開いた向こうに人がいる。しかし、僕らは全速力で走って来たので、急に止まることは出来ない。急ブレーキは無理だ。そして、その人にもろにぶつかり、お互い吹っ飛ばされた。

近くにいた看護婦さんやらが、僕らのことを助け起こしてくれて注意をする。僕らが事情を説明すると、看護婦さん達に、「今度からは、出来るだけ他の建物に駆け込んでね」と言われてしまった。

僕らは苦笑するしかなかった。確かに、病院以外のところに駆け込めばよかったのだが、ここが一番に目に入ったから・・・みたいなことで病院に突っ込んで来ちゃったんだ。

「あっ、君達は、昨日の二人じゃないか」

そう言われて、僕等が突き飛ばしてしまった人を見ると、鳴瀬さんだった。まだ頭に包帯を巻いているけど、解けかけている。きっと、僕らがぶつかった拍子に解けてしまったんだろう。

「ああ、鳴瀬さん。すみませんでした。大丈夫ですか?」

「俺は大丈夫だけど、二人は、何かあったの?」

「まぁ、はい。ちょっと不審者に追いかけられて・・・。まだ外

に隠れているかも知れないんですけど・・・・」

「そっか。じゃあ、しばらくの間、俺の病室にいていいよ」

「ありがとうございます。本当にぶつかってごめんなさい」

僕らは、鳴瀬さんの後に続いて病室に入った。その途端、お腹がグゥ～と鳴った。

「あの・・・・僕ら、まだ昼食食べてないんですけど、この病院ってそう言うのを売ってますか？」

「ああ、売ってるよ。売り場は、さっきの入り口を右に曲がった突き当たりにあるところだよ」

「ありがとうございます」

僕らは、恥ずかしいのと空腹感で、いそいそと病室から出ると、鳴瀬さんに言われたところに行った。

「この病院、結構広いんだね」

「そうですね、ここまで広いとは思ってなかったです。予想外でした」

病室のドアの前で、僕は大切にしまってあった冥道霊閃を落としてしまった。

「大丈夫ですか？」

「うん、何とか」

「傷ついたりしてないですか？仮にも国宝ですから、傷なんかつけたら、大変なことになりますから」

「大丈夫。冥道霊閃って、意外と丈夫だから。前に、トラックに刀

身を踏まれた事があるけど、びくともしなかったから」
「それは凄いですね・・・・」

苦笑しながら桜木君は言った。そこで、やっと病室の前にいるのだと思い出して、慌ててその話をやめた。でも、聞こえていたみたいだ。

「ねぇ、さっき、国宝とか、冥道霊閃とか言ってたけど、それって何？」
「ああ、えっと・・・・」
「どうしましょうか？」
「いいんじゃない？」

僕は勝手にそう決めると、鳴瀬さんに説明した。

「えっと、これは冥道霊閃って言う魔界の国宝の一つの武器なんだ。これを一振りすると、冥道を開くことが出来る」
「見せてくれる？」
「どうぞ」

「ちょっと、いいんですか？そんなに簡単に渡して」
「うん。大丈夫」

桜木君の言葉に、僕はうなずく。鳴瀬さんは、とても興味深そうにじっと見ていたけど、しばらくしたら返してくれた。

「ありがとう」
「いえ、大丈夫です。国宝と言っても、両親の形見みたいなものなので。これが本物かどうかはわかりませんから」

最後に一応付け足しておく。知り合いに、間違ったことを教えたくなかったんだ。

僕は、冥道霊閃を大切にしまうと、鳴瀬さんと話した。桜木君も、それにつられて一緒に話す。

話はあっと言う間に盛り上がって、時間のことを思い出したのは、それから五時間近く経ったころだった。

「あっ、それじゃあ、僕達帰ります」
「ああ。じゃあ、またね」
「ありがとうございました」

僕等はお辞儀をすると、病室から出て、帰路についた。

「修さん、あれからどうなったんでしょうね？」
「どうだろう。帰って来たらわかるんじゃないかな？」

家に帰ってみると、家にはまだ帰って来ていないらしく、鍵がかかっていて、明かりも消えていた。

「もう少ししたら帰って来るんだと思いますよ」
「そうだね。帰ってすぐにいなくても、焦ることはないよね」

しかし、亜修羅は一向に帰って来なかった。もう、九時近くになるのに。これは、いくらなんでも遅過ぎる。

外に出てみたけど、亜修羅らしき人影は見えなかった。ため息をついて扉を閉めた時、ポストに何かが入っているのがわかった。

取り出して見ると、白い紙が四つ織にして、押し込まれていた。その紙を開いてみると、こう書いてあった。

『犬神の凛、お前の仲間、妖狐亜修羅を捕らえた。返して欲しければ、国宝の冥道霊閃を持って、十時までに佐々並森に来い。来なければ、人質を殺す』

僕は一瞬目を疑ったが、その紙をくしゃくしゃに丸めると、握りつぶした。

そうだ、国宝と言うことは、こう言うことも起こり得るんだ。そう簡単に人に話すことじゃないんだ。

初めて国宝と言うものの重さを知って、自分がベラベラと軽口でしゃべっていたことを怒りたかった。

「どうしたんですか？」

「僕、佐々並森に行って来る！！」

「ちょっ、ちょっと待って下さい！」

後から追いかけて来る桜木君を無視して、僕は全力疾走で佐々並森に向かった。

全力で走って、十時前に佐々並森についたけど、心境は穏やかではなかった。きっと、僕が話した話を偶々聞いていた妖怪が冥道霊閃を欲しがって行ったことだと思う。僕が、そんなことを話さなかったら、亜修羅がそんなに危険な目に遭うことはなかったと思う。

ギュッと拳を握り締めて、唇もギュッと噛む。その時、後ろからついて来ていたはずの桜木君がいないことに気がついた。すると、上から白い紙がヒラヒラと降って来た。

それの内容は、ほとんど亜修羅の時と変わらなかった。ただ、人質の名前が桜木君に変わったところと、指定場所が違うだけ。その他のところは、全く一緒だった。時刻も、交換する代物も。そして、来なかった時の代償も。

十時になるまで、ほとんど時間がない。どっちを優先する？いや、それじゃ無理だ。どちらを助ける？どちらを・・・コロス？

僕は、もうどうにも出来なくなって、ただ、捕まった二人に謝ることしか出来ないと思っていた。

その時、昔慕っていたお兄さんが言っていた言葉を思い出した。

「凛。もし、お前の大事なものが、一気に二つともなくなりそうな危機に陥っていたら、おまえはどうする？しかも、どちらも、引き換えの条件は同じで、時刻も同じ。違うのは場所ぐらい。わかりやすく言うと、どちらかを選ばなくちゃいけない時だったら、どちらを選ぶ？」

「うーーん、わからない。大切な物って何もないし、その大切なものの意味すらわからない。それなのに、どれを選ぶって言われても・・・・」

幼い僕は、首をかしげてお兄さんの意見を促す。すると、お兄さんは笑ってこう答えた。

「多分、今はわからないかもしれない。でも、いつかは大切な人や、仲間が出て来る。もしも、そんな大切な人が危険にさらされている時は、『みんなを助ける』んだ」

「でも、同じ時刻で条件は同じなんでしょ？どうやって二人を助けるの？」

「それは・・・・・」

あれ、それは・・・なんだったけな?大事なところで忘れちゃってるよ。うわぁーーー、僕のバカ!!とか言ってる場合じゃない。お兄さんのおかげで、大分気分が軽くなった。

しかし、答えはわからないままだ。えっと・・・なんだろう?どうすれば二人とも同時に助けられるんだろう?

僕が偶々ポケットに手を入れた時に、何かが手に当った。それは、昨日桜木君がくれたビー玉だった。

もう片方のポケットに手を入れてみると、また何かが手に当った。取り出してみると、消しゴムだった。それは、前に亜修羅が勉強を教えてくれた時に返しそびれたものだった。と言うか、あげるって言われたから返さなくていいのか・・・。

その時、消しゴムを包んでいた紙の下に、黒いマジックペンで何かが書いてあるのがわかった。それを剥がしてみると、消しゴムめいっぱいに、「バカ」と書いてあった。その裏は、「アホ」

「何これ?」と思って、一瞬目を疑ったけど、亜修羅のジョークだなと思って笑った。

その時に、やっと閃いた。お兄さんが言った言葉。よく分からなかったけど、今ならよく分かる。

僕は両手の中の物をギュッと握ると、バッと開いた。さっきとそんなに大差はないけど、この二つの物に感謝を送ったつもりだ。

もし、大切な仲間が危機に陥っている時、どちらかを選ばなくてはならない時。その時は、命を懸けてでも仲間を守る。そして、仲間を信じることが大切なんだ。

そうお兄さんは言っていた。小さい時の僕は、大切な人の為とは言え、自分が一番大切な人だったから、他人のために命を懸けるなんておかしいと思ってた。

あっ、ナルシストじゃないからね！ただ単に、大切なものって何もなかったから想像つかなかったんだ。でも、今ならお兄さんの言いたかったことがよく分かる。

「待っててよ！今から行くから！！」

佐々並森中に響き渡るくらいの大声で二人に言葉を送った後、急いで佐々並森を出て行った。

そして、桜木君が捕まってるところへ行った。なぜなら、亜修羅なら大丈夫だろうと言う気がしてならなかったんだ。これは、信じる気持ちって言うんだよね。何だか、不思議な気持ちだよ。信じるって・・・・。

心から信頼するって、ここまで気持ちが楽になるんだね。

僕は、いつの間にか、亜修羅を信頼し切っていたようだ。だからこんな時も、か弱い桜木君の方を助けようと思えたんだ。ありがとう、亜修羅。そして、桜木君を信頼していない訳じゃないんだよ！

僕は、全速力を超えたスピードで走りながら、指定場所まで走り、

残り三十秒と言うギリギリのところで指定場所にたどり着いた。

「遅かったな、犬神。国宝と仲間、どちらをとったのだ？」

「もちろん、仲間に決まっている」

「じゃあ、冥道霊閃をこちらに渡してもらおうか」

「いや、その前に、人質の安全を保障してくれ」

「ああ、人質なら生きている。こっちへ来い」

妖怪が手招きをすると、向こうのほうから体中をロープでグルグル巻きにされて、猿轡を噛まされている桜木君が仲間の妖怪に連れられてやって来た。何かを懸命に叫ぼうとしているけど、猿轡が邪魔で、まともに話せないらしい。

「人質のロープ等を全て外せ」

「・・・・よし、外せ」

そいつは僕の目を見てから、僕が本気だと悟ったようで、桜木君のロープや猿轡を外した。

「凛君、冥道霊閃を渡してはいけません。僕の命は何とかなります。しかし、冥道霊閃は・・・・その莫大な妖力を全て放出すれば、地球の半分は破滅するほどです。ですから・・・・」

「これが、冥道霊閃だ」

桜木君の言葉を無視し、冥道霊閃を渡すと、妖怪達は桜木君をこちらに押して寄越した。そして、気が変わらないうちにとでも思ったのか、さっさと退散して行った。

「凛君、君は世界滅亡を手伝った人にされちゃいますよ！いいんですか！！」

まくし立てる桜木君とは裏腹に、僕は穏やかな顔をしていた。

「世界が滅亡しようが、宇宙が消え去ろうが、仲間一人助ける為ならなんだってやる。だって、仲間を犠牲にして地球や宇宙を救っても、楽しくないでしょ？」

笑顔で問いかけられて、言葉につまる桜木君。顔が真っ赤になっている。

「すみませんでした。僕も少し言い過ぎたようです。両親の形見を渡すなんて、相当な覚悟がない限り、僕では出来ません」

「多分、両親は生きていると思うよ」

「でも、魔界の国宝を、得体の知れない人に渡すなんて、相当の決意が必要だと思います。それも、たった一人の仲間のために、凛君は、その重荷を一人で背負ってるんですから。実はあの時、とっさに『渡しちゃいけない』と言ったけれど、凛君が本当に渡さなかったら僕はどうなっていただろうかと思ってゾッとしてたんです。しかし、凛君は渡してくれました。僕と言うちっぽけな存在の為に、数多くのものを犠牲にして下さったんです。ありがとうございました」

桜木君に深々とお辞儀をされて恥ずかしくなったけど、その感情も、地球の壊滅とか、宇宙が消えるとか言う膨大な言葉に圧倒されて、すぐに無くなった。

「どうして急に佐々並森に来ようと思ったんですか？」

「実は、桜木君とは他の奴で、冥道霊閃を欲しがってた奴がいるんだ。でも、そいつとの取引はパーにしちゃった。だって、冥道霊閃

を失っちゃったんだもん。そこに、亜修羅がいるって手紙に書いてあった。来なかったら殺すとも言ってた」

「じゃあ、何で僕のところに・・・・」

不思議そうな桜木君が僕の方を見ているけど、何だかあまり言葉が浮かばない。

「信じてたから・・・・」

しかし、なぜかそうつぶやいた後、勝手に言葉を話し出した。

「信じてたから、桜木君のところに来れたんだよ。あっ、これ、桜木君を信用していないとか、そう言う変な意味に結び付けないでね？全く違うから。桜木君のことだって、ちゃんと信頼してるよ？ただ、亜修羅の方が妖狐だから、安全かなと思っただけのことだから」

慌てて言葉を訂正する僕。桜木君は、ちょっと笑ってから前を向いた。その顔つきは、いつになく真剣だ。

「でも、どうしましょう？修さんは捕まったままなんですよね？」

「・・・修のことだから、何とかなる！そう思ってる」

「えっ・・・・？」

指定された時間も代物もないけど、一応佐々並森に戻った。すると、いた。結構強い。中の上くらいの強さかもしれない。

「貴様、なぜ来なかった。それに、冥道霊閃はどうした？」

「それよりも、人質の方が先だ」

「人質なら、ここにいる。だから、さっさと冥道霊閃を渡せ」

「人質が動かないぞ。それは、本当に亜修羅なのか？」

僕の問いに、妖怪の表情が一瞬強張ったが、また余裕の笑みを浮かべだした。策があるのかな?

「そうだ、本物だぞ」
「じゃあ、触らせてくれ」
「それはよせ!」

妖怪の反応を見てわかった。こいつは、亜修羅なんか捕まえていない。きっと、幻術使いで、幻術で亜修羅を出しているんだろう。

「嘘ついたな?」
「・・・・」
「嘘言ったよな?」
「・・・・」

「正直に言えば、冥界送りは我慢するよ。どうなのさ?」
「はい、嘘をつきました」
「正直に言ったから、まだましなところに送るよ」
「冥界送りは我慢するって・・・・!」
「あんただって嘘言ったんだ。僕だって嘘を言ったんだよ!!」

嫌がる妖怪の前に冥道を開き、その妖怪を吸い込んだ。これで、邪魔者は一匹消えた。でも、そうしたら、亜修羅はどこに行ったんだろう?全く検討がつかない。

「でも、こいつが嘘をついてたんなら、本物の亜修羅はどこへ行っちゃったんだろうね?」
「どうでしょう?何だか、僕らはまずい状況に立たされていると言うことは、言わずと知れてますよね?国宝・・・・。それを凛君が

持っているんですから、周りにいる人間にも被害が出ることでしょう。出来ることなら、人間との接触は避けた方がいいと思います」
「桜木君は？」
「僕はいいですよ。普通の人間じゃないんで」
「あのさ、桜木君。大変言いづらいことなんだけど・・・・」
「なんですか？」
僕の神妙なムードに圧倒されて、桜木君も、神妙なムードに染まる。
「・・・・『桜っち』って呼んでもいい？」
「・・・・なんでですか？」
僕の言葉を聞いた桜木君は、一分ぐらい黙っていたけど、やっとそれだけ言った。
「だって、何時までも桜木君じゃ固いから、『桜っちって呼んでもいい？』って聞いてるんだけど・・・・」
「言いづらい話と言うのは、そっち方面での言いづらいだったんですか？」
「うん」
僕の答えに、少し疲れた表情をする桜木君（本当は、もう桜っちって呼びたいけど、まだ承諾も得てないからさ）を、僕はせがむような目で見た。
「僕は構いませんが・・・・」
「やった！」
「それよりも、早く修さんを探す方が先決ではないかと思うんですけど・・・・」

「そうだよね。桜っちはどう思う?」
「僕の意見はと言いますと、修さんはどんなことを言っても、放心状態になるまでショックを受けることはないと思います。だから、あの放心状態の修さんは、さっきの妖怪が作り出した幻術だと考えたのですが・・・・」
「桜っち!凄いよ。頭冴えてるね!!」

桜っちのありがたい助言に、僕は激しく共感した。でも、そうすると、いつから亜修羅は偽者と摩り替わったんだろう?僕らが離れたのは、亜修羅がフられてから家に帰るまでの間。その間に、亜修羅に何かがあったんだ。

「桜っちの考えをどうぞ」
「そこで思ったんですけど、そうなると、いつ、本物の修さんと偽者の修さんは入れ替わったのかってことになります。そうすると、僕らが屋上から屋根に降りた時から、家に帰るまでの時間なんですよ。だから、その間に何かあったと考えられます。修さんってあんまり、人と話したりしませんか?」
「あんまり話さないと思うよ。あの通り、性格冷たいし」

「だとすると、さっきの妖怪を冥界に送ったのは、逆にめんどくさいことをしてしまったと考えることも出来ます」
「どう言うこと?」

何だか、雰囲気的に名探偵のオーラが出て来た桜っちに答えを望む僕。桜っちはわかるようだけど、僕にはさっぱり。

自分でも、頭悪いな・・・・ってよく思う。特に物を整理して考えるって言うところが最悪にダメ。

「まぁ、他の人と話す、話さないは別として、修さんは普段からあまり人付き合いをしない方ですよね？と言うことは、人とあまり接触しないと言うことです。そうすると、あの妖怪は、修さんの幻術を作り出すために、修さんと少し接触したと思います。なので、修さんと接触した時に、同時に捕まえたと言う考え方も出来なくはないんです。しかし、修さんの性格を考えると、その考えが一番確率が高いと思うんですけど・・・・」

桜っちの、名探偵並みの推理力には驚かされるばかりだったけど、そうなると、謎が一つ増える。それは・・・・。

「じゃあ、亜修羅はどこに隠されているの？と言うかあの時、本物の亜修羅がいたのなら、何で本物の方を出さなかったのさ？」

「居場所のことはまだわからないですけど、本物の修さんを出さなかった理由は明白です。それは、修さんには懸賞金がかけられていることです。だからあの妖怪は、修さんを差し出し、懸賞金を手に入れ、幻術で見せた修さんを囮に冥道霊閃を奪おうとした訳です。結構妖怪も考えてますね。もうちょっと単純な者達だと思っていたんですけど」

「あのさ、場所は？」

僕は、桜っちに全て任せることに決めた。僕が考えると、ここまで到達するのに、楽に一時間はかかるだろうから。

「凛君。君がここにたどり着いた時、十時何分前でしたか？」

「十分くらい前かな？」

「修さんは妖狐なので、月光の光はプラスになりますよね？」

「そうだよ。前にそんなことを言っていたような、言っていないような・・・・」

「断定した場所はわかりませんが、多分、この森からゼロ分から、二十分までに行ける距離にあり、月光が当らないような暗い場所か、地下室のような場所。それから、全然見つからないであろう場所ですね」

「何で、月光を浴びせちゃいけないの？」

僕が問うと、桜っちはニコッと可愛い笑みを浮かべた。

「最初に会った時、妖怪退治屋は、相手の力量を測ることが出来るんです。それを基にすれば、修さんの方が断然強い。だから、月光に当てないようにして、これ以上自分にかかる負担を重くしないようにしているんだと思います」

「秀才、天才、万々歳！！」

「あの・・・それはなんですか？」

桜っちは、僕の発言に、ポカンと口を開けてこちらを見ている。おかしかったかな？

僕は、考えることが出来ないから、桜っちを精一杯褒めてあげようと思ったから、いい言葉を沢山並べてみたんだけど、ダメだったみたいだ。

「一応、褒めたんだけど・・・・」

「ああ・・・えっと、ありがとうございます・・・・。試しに、探しに行きませんか？」

「もう十一時近いけど、出歩いて大丈夫？僕は妖怪だから平気だけ

ど」

「はい。凛君がいるので大丈夫です」

「そっか。じゃあ、行こう！」

僕らは、そうして気を取り直して、亜修羅を探すべく、佐々並森から出た。

「・・・・見つからないね」
「あくまでも、推定ですからね」
「・・・・明日にする？」
「そうですね。さすがに冷えて来ましたよ」

桜っちの言葉に、体の芯から冷え切っていた僕は救われた。

僕のせいで亜修羅が捕まっちゃったのかもしれないけど、さすがに夜まで探すのはキツい。肉体的にも、精神的にも。そりゃ、無茶苦茶探し回った方が見つかるかも知れないけどさ、取りあえず今は、お風呂に入って眠りたい。そんな気分だった。

「ところでさ、桜っち。亜修羅ったらさ、酷いんだよ。これ」

僕が取り出した消しゴムを見て、目を点にする桜っち。僕は、その消しゴムを包んでいる紙を取る。

「これさ、亜修羅が初めて勉強を教えてくれた時にくれたんだけどさ、酷くない？バカとかアホって大きな文字で書いてあるんだよ？しかも、僕に渡す時に態々マジックペンで書いたんだから」
「そうなんですか？」
「うん」

桜っちは、僕の顔を見てから消しゴムを見た。それから、押し殺したような声で「クックックックッ」と笑い出した。

僕もつられて笑う。面白いと思ったからじゃない。ただ、安心した

んだ。一人じゃないとわかって。

僕らは笑ってから気分が軽くなって、帰り道は静かじゃなかった。真夜中なのにうるさいって怒鳴られたから、おとなしくしたけどさ、とっても楽しかった。

家に帰ると、僕はお風呂に入りたかった。でも、沸かし方を知らないから、聞いてみると教えてくれた。

何とかセットが終わってお風呂が沸くと体を洗い、湯船に浸かる。

「はぁ」

お風呂の水を手で掬い、それが湯船に落ちる様子を見ていると、自然にため息が出た。

亜修羅は、性格は悪いけど、根っからの極悪人って訳じゃない。それに、からかいがいがあって楽しいんだ。そんな亜修羅がいないから、しみじみと寂しさが込みあがって来る。

暗い気持ちを奮い立たせようと、首を振って前を向くけど、そこで目に入ったシャンプーで、また思い出した。それは、シャンプーを使い過ぎた時、ねちねちした姑のようにしつこく文句を言って来たんだ。

確か、「シャンプー代だって、バカにならないんだ。無駄遣いするな！」だったかな？そう言うことを延々と聞かされて、めんどくさくなったから、話を最後まで聞いてなかったんだよね・・・・。

最初は反省したふりをしてたけど、その言葉に、ついには笑い出し

てしまった。それから、今度は殴られた。抗議はしたけど、あまり強くは言えない。怒られているところに笑う僕も、悪いと思ったんだ。

そんな寂しさを振り払うように、冥道霊閃のことを考えた。

魔界の国宝と呼ばれるもの。その妖力は膨大で、全てを出し尽くしたら、地球が半分はなくなるほどだ。と言うことは、三つそろえたらとんでもないことになるよね？地球どころか、宇宙まで破壊しきれない。なのに、あんな簡単に冥道霊閃をどこの骨とも知らない奴に渡してしまった。本当に、それでよかったんだろうか？

心の中の靄が晴れなくて、このまま水の中に顔を沈めて眠ってしまおうかと思ったけれど、死んじゃうかもしれないと思って、直ぐにやめた。

「でも、しょうがないよ。友達のためだもん」

そう自分に言い訳してみた。でも、心は何だかモヤモヤしたままだ。亜修羅は捕まってしまうし、冥道霊閃は奪われちゃうし。僕の答えは、本当に合ってるのかな？もし、間違いだとしたら・・・・。

「どうしたんですか？お風呂に入っても、まだくつろげませんか？」

ドアの向こう側から声が聞こえる。僕のため息が聞こえたのだろうか？

「ううん。たださ、何だか色々考えちゃって。桜っちの前で言うのはあれなんだけどさ・・・・。あんな奴に、世界の半分を壊せるくらいの国宝を渡しちゃってよかったのかなって思うんだ。僕の考え

が間違いなんじゃないかなって」

「・・・それは、凛君自らが決めたことなんですよね？」

「そうだよ」

そう答えると、しばらく沈黙が続いたけど、やがて声が聞こえた。

「誰でも、自分が決めたことが正しいかなんてわかる人はいないんです。わかるのは神様くらい。でも、自分で決めたことなんだから、自分を信じてみましょうよ。出した答えが、例え間違っていたとしても、それを正すチャンスはきっと来るはずです。そう信じればいいんです。人を信じるよりも何よりも、自分を信じないと何も始まらない。僕はそう思います」

「・・・桜っち、何だか、正論を言うね？」

「あっ、いえ。正論って言うか・・・僕が思ったことを言ったまでなので・・・。凛君の気持ちも考えないで、勝手なことを言ってすみません。聞かなかったことにして下さい。そんなことより、湯船が冷めちゃいますよ。そうなると、風邪をひいてしまいます。急いで出て来てください」

「はいよ！」

亜修羅が聞いたら、「変な返事をするな！」と言われそうだ。でも、そう突っ込む亜修羅もいないんだろうなと思った。

少し寂しい気持ちになったけど、桜っちがいるんだからと思って、元気を出した。

お風呂から上がってパジャマに着替える。

すると、その柄を見ても思い出してしまう。亜修羅は、この柄も色も悪趣味だって言うけどさ、いいじゃないか。可愛いじゃん、ウサギ。それとも、亜修羅は動物が嫌いで、特にウサギに恨みでもあるのかな？

いや、それはないだろうね？うさぎなんて恨みを持つほど憎らしくないし、むしろ可愛い方だし・・・・。

色々考えて、訳がわからなくなって来たから、首を振ると、部屋に戻る。

「出たよ～」
「どうでしたか？」
「気持ちよかったよ、体もポカポカしてるしね。これで、やっと眠れる気がする」
「そうですか、それはよかった」

僕は、しいてあった布団に横になると、一分も経たないうちに眠ってしまった。

「凛君、起きて下さい」

朝の何時かわからない時刻に、僕は桜っちに揺り起こされた。

「・・・・今、何時？」

「朝の八時です」

「なぁんだ。まだ、よい子は寝てる時間だよ」

再び布団をかぶって眠ろうとする僕の肩を抑えて、桜っちが真剣そのものの顔で言った。

「まずいです、天変地異が起こってます」

「本当？」

「いえ、違います。ただの地震です。でも、この地震で北極の氷が壊れたことは事実です。そして、その波は温かい国に向かっているので、その国で氷が溶けて、一気にその国を襲うことがあるかも知れません。それに、この悪天候ですし・・・・」

桜っちの視線に合わせるように窓の外を見る。すると、台風が舞い降りて来たかのような悪天候だった。雷がゴロゴロと鳴り響き、風速は四十メートル以上ありそうだ。屋根が吹っ飛んでいる家も、そう少なくはない。それに、雨の粒は大きな雹のようで、当たっただけでも痛そうだった。

「それに、東北地方の方では、水気の少ない地面から順に、ひび割れが起こっているようですし・・・・。もう、これは天変地異としか言い様がありません。どのくらいの時間でこの地球の半分がなくなるのかわかりませんが、それも時間の問題でしょう」

「・・・・大変だ！」

僕は、やっと事の重大さに気がついて、慌てて起き上がる。その拍子に、布団が吹っ飛ぶ。

「どうすれば助かるかな?」

「多分、冥道霊閃の妖力を出していると言うことは、冥道の一番奥だと思います。そこで、それを操っている人物を倒せば済むと思います。しかし、そいつを倒しても、冥道霊閃の妖力と戦わなければなりません。それは、きっと死と直面するものだと思いますが・・・・」

「・・・わかってる。自分がどれだけ重大なことをしてしまったのか。だから、その償いとして、命をかけるなら、それも悪くないと思う」

その時、この悪天候にも関わらず、来客が来た。最初は空耳かと思ったが、チャイムがせわしなく鳴っているから、空耳じゃないと確信した。

そう確信したら、早く入れてあげないと、吹き飛ばされるしまうと思ったから、慌ててドアを開けに行く。

僕が扉を開けると同時に、凄い雨と風が吹きつけて来た。そして、人が入って来たのを確認すると、閉め出されるのを嫌がる風を押しのけて、何とかドアを閉めた。

来たのは、亜修羅のクラスメートの子。この間、亜修羅を叩いた子だ。

「どうしたの？こんな悪天候の中で態々来るなんて」
「伊織君は・・・・？」
「修なら帰って来てないよ」

「どうしよう。私のせいだ・・・・」
「そんなことないよ」

必死で女の子を宥める僕に対して、桜っちはテレビを付けた。すると、丁度ニュース番組をやっていて、アナウンサーが次々と入って来る情報をせわしなく読み上げている。みんな、とつぜんの出来事に大慌てをしているようだ。

「どうしましょう？世界の端から崩れて来ています。このままで行くと、日本が無くなるのも時間の問題かもしれません！」
「桜っち、この人は任せたから。僕が蒔いた種なんだ。だから、この手で・・・・。この手で、世界を救ってみせる」

「凛君、ちょっと待って・・・・」

僕は、冥道霊閃がどれだけ強い妖力を持っているかなんて知りたくもないくらいに知っていた。その妖力は、上級の妖怪が百匹以上集まった力だと言われてる。でも、僕は戦うんだ。例え、僕が力尽きても、自分で蒔いた種くらいは始末して置きたい。ほぼ、願いのようなものだけど、そう思ってた。

僕が向かったのは桜公園。ここ周辺では、一番の面積と中心地点なんだ。冥道を開くには、わずか一センチでも、その倍以上の面積を要する。そうすると、人が通れるくらいの面積を作るのは、とてつもなく広い場所を選ばなくてはならない。それに、こう言う現象を起こすには、真ん中を崩した方がいいと言うことも知っている。だ

から、桜公園なんだ。

予想通り、冥道が開いているのは桜公園だった。普通の人には冥道は見えない。でも、いくら鈍い人でも感じるはずだ。この、死の臭いを。

僕は、開きっぱなしになっている冥道の入り口にたたずむ。向こうには、細い岩で出来た道と、宇宙のような不思議な空間が広がっているだけだった。

冥道。それは、死者が通る道。生きている者は決して渡ってはならない道。もし、渡ったならば、待つのは「死」のみ。

僕は冥道の前で犬神の姿に戻り、深く深呼吸をする。犬神になって、更に冥道の死の臭いが強烈に思えて来る。しかし、深呼吸をやめなかった。

「桜っち。もし、僕が帰って来なかったら、亜修羅のことは任せたよ！信じられるのは、桜っちだけだから。亜修羅・・・・、最後に会うことが出来なくて寂しいとは思うけど、これでよかったんだと思う。でなかったら、こんな風に思えなかったと思うんだ。ありがとう、二人とも」

僕は、誰もいない桜公園の中で小さく呟き、空を見上げた。しかし、生憎の悪天候。僕のことを、さっさと行けと促しているようだ。

体中に雨が痛いほどにぶつかって来て、体中がびしょぬれだ。風も強くて、吹っ飛ばされそうだ。

「わかってるって。行ったら帰って来れないってことがわかってる

からさ。何だか勢いがつかなくて。でも、もう行くからさ」

心の声に近いような小さな声で独り言をつぶやくと、無限に続く冥道の道に一歩踏み込んだ。

これで、僕も死人だ。

魔界の国宝　冥道編　悲劇

冥道の道は、歩いてみるとギリギリの幅だったけど、何とか落ちはしなかった。

きっと、ここから落ちても命はないだろう。しかし、こんなところで無残に死んだら、何の為に心を決めて来たのかわからない。だから、気を抜くことなんか出来ない。

綱渡りをするように、両腕でバランスを取って歩いて行く。すると、足元で大量の殺気を感じた。

僕はとっさに身構える。

それは、ドンドン近づいて来て、ついに行く手を塞いだ。そいつらが道に乗ると、なぜか冥道の道は広がった。これで、何とか戦えるって訳だ。

行く手を塞いだのは、ゾンビだ。妖怪も、人間も混じっている。きっと、僕から肉体を奪おうとしているんだ。このゾンビ達は、魂は生きていても、肉体が滅びているから冥道から出られないんだから。きっとそうだ。

僕は、これからある戦いに備えて、妖力は一切使わないことにし、全て体術で凌いだ。ゾンビは、一発殴ったら倒れたけど、やはりゾンビ。結果的に、道から下に落とさなくてはならないらしい。そうしないと、何度でも蘇って来る。

苦戦をしながらも、何とか半分のゾンビを振り落とした。でも、ま

だ残りが半分もいる。ゾンビってこんなにしつこいんだって、今日初めて知ったよ。でも、もう遅いんだ。死んでしまう日にそんなことがわかっても、あんまり嬉しくない。自分がゾンビになったら悲しくなるもん。

「ゾンビも大変だよね、成仏できずに冥道を彷徨っている。冥界と人間界の間を彷徨って、入って来た者を食らうなんてさ」

独り言のようにつぶやく。そして、ふと自分がゾンビに同情していることがわかり、慌ててその考えを消す。でも、僕の中でそう思う自分の気持ちが膨らんで来るのがわかった。「同情なんてしたら、自分が死んでしまうんだ！」と言い聞かせてみても、やっぱり無理だ。

僕の様子に気がついたゾンビが、襲うのをやめて、そろそろと後ろに下がって行く。その様子がやけに可哀想に見える。ゾンビはただ、自分が死んでしまったのを理解できずに、元の世界に戻りたいが為に、入って来た者の肉体を借りようとしていたみたいだ。きっと、理性があるに違いない。でないと、僕の様子に気がついて攻撃を止めるはずがない。

その時、頭の隅に、昔聞いたことのある懐かしい曲が流れて来た。どこかで聞いたことのあるような曲だけど、思い出せない。でも、体が勝手に踊りのような、何と言うか、不思議な動きをしだしたんだ。これも、どこかで見たことがある。

すると、ゾンビ達の動きに変化が現れた。ゾンビ達の顔が次第に快さそうな顔になって行ったんだ。そして最後には、白い光に包まれて、消えちゃった・・・・。

僕は、唖然としてゾンビが消えて行く光景を眺めていた。何だか、この、踊りのようなものを踊ったら、ゾンビ達が成仏して行ったようだから、不思議でたまらなくなったんだ。

全てのゾンビが成仏した時に、僕はふと、この曲と踊りをどこで見たのか思い出した。お兄さんだ。僕が昔慕っていたお兄さんが、笛の音に合わせながら踊ってたのを、見てて覚えちゃったんだ。

しばらくの間、不思議な気持ちに浸っていたけど、今はそれどれどころではないことを思い出して、急いで細い冥道の道を走った。

すると、途中で大きな洞窟を見つけた。しかし、近づいてよく見てみると、それは大昔に死んだ、巨大な何かの頭蓋骨だった。その口の中に、何か不思議なものを感じる。

「全く、こんなところにも入らなくちゃいけないのかなぁ？やっぱりダメだよね。でも、冥道でこんな洞窟があるなんて知らないけどさ、変な気配を感じるから、やっぱり行ったほうがいいよね？」

誰かに聞くように自問自答する。そして、意を決して頭蓋骨の口の中に入った。

中は、本物の洞窟と同じように歩く音が響いて、ジメジメしていて、どこかで水が垂れる音が聞こえる。壁には、何色かわからないけど、苔ビッシリと生えている。

「うえぇ、気持ち悪いっ！ぬるぬるしてる」

僕の声が向こう側にまで聞こえそうな程響く。苔を触った手が、ぬるぬるしているから思わず叫んじゃったんだけど、その声に驚いた

ようで、中に沢山いたらしいコウモリがバサバサと飛んで行った。
冥道の洞窟と言っても、普通の洞窟とはさほど違いがないようだ。

しかし、コウモリがバサバサと飛んで行ったのは、僕の声が原因じゃなかったんだ。

突然、後ろから頭をつかまれて、そのまま壁に殴りつけられた。

「つっ・・・・」

顔をしかめた瞬間に、頭上で空を切る音が聞こえた為、僕は、ギリギリのところでしゃがんで避けると、大きい何者かの足を思い切り蹴り、バランスが崩れたところに、腹部に回し蹴りを入れて相手を壁に激突させた。

「ほう、多少やるようだな。しかし、途中の関門でお前は倒されるだろう」
「うるさいな、僕は冥道に入って来る時に、あんなかっこいいこと言っちゃったんだよ!邪魔しないで!!」

「しかし、お前はここで倒されるのだ。俺にな」
「わかったって、もういいよ。そう言う展開っていつも見てるから!」

僕は、この程度の敵なら簡単だろうと思っていたけど、僕が力を抜いていたように、向こうも力を抜いているのを知った。

僕がそう言った途端、僕の顔すれすれに刀が飛び、後ろの壁に突き刺さる。正確に言うと、僕の頬は切れた。そんなに傷は深くないけど。

でも、これでわかった。向こうはかなり強い。そう確信した。だから、僕も本気を出すことにする。でないと負けてしまう。それだけはダメだ。

「わかったよ。あんたの強さは。でも・・・・、僕も、負ける訳にはいかない！」

相手の刀を壁から抜くと、相手に刀を投げて返した後に、身構える。

「そうか。でも、残念だな。冥道の奥に向かうには、俺を抜いた後三人とも戦わなくちゃならん。そんなこと、お前のわずかな妖力じゃ足りない」

「ざーんねんでした。僕だって、まだ本気なんか出しちゃいない。さぁ、やる？」

「意外と好戦的なんだな、貴様も。さすが犬神だな」

そう言いながらも、向かって来た僕の拳の軌道を変えて、空いている右手の刀を横に振って、斬ろうとする。

とっさに後ろに飛び退こうと思ったけど、腕をガッチリ捕まれていて動けない。とっさにジャンプをして、相手を飛び越えて向こう側に渡る。腕は、回る時にちゃんとひねったから大丈夫。

すると、その動きにもついて来て、クルリと振り向く。その時に、手を握る力が緩んだ。その隙を逃さずに、腕を振り払ってその反動を利用して、頭めがけて足を横に振る。

相手は避け切れなかったらしく、腕でガードをしたけど、そこから

鈍い音がした。きっと、骨が折れたんだろう。

それに怯んでいる間に、僕は飛び退いて間を置く。何と言うか、犬神って刀を使ったりするよりも、自分の体で戦う方が得意なんだ。犬神の特徴って言われたら、素早い体術って答えるのが普通だと思うし。

その時、急に足に激痛が走った。とっさにしゃがみこむ。見ると、変な形に足が切れている。まるで、模様を描いたようだ。

「浅はかだったな、犬神。俺の能力がわかりもしないで攻撃をするのがいけないんだ」

「くっ・・・・」

「もう、その右足は使えないだろう。そして、やがて毒が体中に回り、お前を死に至らしめる。・・・・ぐあっ・・・・」

「ふふん、僕が気づかないと思ってた?僕だってバカなことはしない。普段はバカだって言われてるけど、戦闘にまでバカさを持って来ないよ。さっき蹴った時に、とっさに猛毒の粉を振りかけたんだよ。犬神のサブの戦い方、知らないでしょ?なら、教えてあげる。大体は体術として通っているけど、薬草や、毒粉を使ったりもするんだよ。その調合も可能。ちなみに、それは今のところ中の上ぐらいの毒。大したダメージはないと思うけど、早いうちに解毒剤を塗りこまないと、腕を丸ごと切断する羽目になるからね」

お互い違う方の腕と足を押さえながら言う僕等。なんだ、思考が似てるじゃないか。何だか嫌だね、こんな奴と重なっちゃうなんてさ。

動けば毒が早く回ると言うことも知っているけど、僕は、痺れて痛くてしょうがない足を無理に動かすと、歩く。

相手も、僕に毒を塗られた腕を押さえながら近づいて来る。僕は、物凄く足が痛かった。でも、モタモタしている暇はない。

「型をつけるよ！」

「なっ、なぜだ！なぜ動ける！？もう右足は痺れて動かないはずだが・・・・」

「僕は、約束は守るから。自分でケリをつけるって桜っちに言ったからさ。だから、もう型をつけなくちゃいけない。僕の足が無くなったとしても、それは仕方ない。自分が蒔いた種だからね。だけど、そのせいで人が傷つくのを見るのは嫌だ。自分と関係ない人は巻き込んじゃいけない。だから・・・・」

僕は、多分一生使い物にならないかもしれない右足を見下ろした後、最後の一歩を踏み切り、動けない状態でいた相手を殴った。

「ふっ・・・・妖怪でも、そんなことを言う奴がいるとはな・・・・」

最後にそう言うと、そいつはバタッと気絶した。その途端、足から痛みと痺れが消えた。もしかして、あれはこいつの術だったのかな？それだったら、かわいそうなことをしたな。僕の毒薬、解毒剤ないし・・・・。

そう思って見下ろした時、相手が動かないことがわかった。きっと、体全体に毒がいきわたって、息が出来なくなり、死んだのだろう。

それを知って、絶句した。殺すつもりはなかった。毒薬と言っても、ほとんど体に害はない毒で、痺れ薬のようなものだったのに・・・・

。

そう悔やんでいる時、思い出した。あの踊りを、どんな時に踊るのか。前に教えてくれたことを思い出したんだ。

僕は、この時だけは焦る気持ちを静め、さっきと同じように動く。これは、「魂を成仏させる為の舞」そう言っていたような気がする。この舞を踊ると、迷っていた魂や、この世に未練がある魂も、すぐに天国へ行けるらしい。だから、この人にも天国に行ってもらいたかった。

最後に、両手を広げて体を包むように斜めに振り下ろすと、白い物が上に上って行くのが見えたような気がした。

「あんたは、元から僕を殺すつもりはなかったらしいね。でも、僕はあんたを死の世界に連れて行ってしまった。だから、せめてもの償いで天国に連れて行きたいと思ったんだ。もし、許せないのなら、いつでも僕を呪っていい。その時は、僕も素直に死ぬよ。でも、それは、世界を救った後だけどね」

そうつぶやくと、魂がなくなった体を洞窟の壁によっかかるように座らせ、更に奥へと進んだ。これ以上同情するのはダメだ。僕が同情しちゃったら、あの人が迷ってしまう。

心の隅では、もう少し謝りたいと言う気持ちもあったけど、そのまま奥に歩き出した。ごめん、殺すつもりはなかったんだ。確かに毒は毒だけど、弱い毒だったんだよ。殺すつもりなんて、僕だって更々なかった。ごめん、本当に・・・・。

涙が出て来そうになって、目をつぶると、無我夢中で走った。

しばらく洞窟の中を走ると、一番奥らしい場所に出た。そこには、丁度真ん中に、古びた剣が床に刺さっている。大きさは、冥道霊閃と同じくらいの大きさで、形もほとんど同じ。冥道霊閃を真似て作った刀と言っても過言ではないだろう。

そこでわかった。不思議な気配を発していたのはあの人ではなく、この古びた剣だ。その剣に思わず近寄る。と、突然頭の中で何者かの声が響いた。

《人殺しよ、我に触るでない。天に送ったからと言って、自分を許すつもりか？》

「違う、そんなんじゃない。ただ・・・・」

突然聞こえて来た声に動揺しながらも、何とか首を振る。

《お前に殺すつもりがなかったんだとしても、お前はあいつを殺した。それは事実だ。殺そうと思わなかったら、毒なんて仕込まないはずだ。だから、お前は気づかないうちに、あやつを殺そうと思っていたのだ》

「違う！そんなことは思ってない。ただ・・、仲間が・・・・」

《貴様は、いつもそう言って仲間のせいにする。お前にとっての仲間は、自分に言い訳をする為のただの道具か？》

「違う！」

《違わないではないか。いつも人のせいにし、自分の罪を人に擦り付け、今度は自分の過ちで、人が死ぬのが見たくないと言う脆弱な

気持ちで、この冥道に足を運んだのだろう。しかし、そう言う奴に待つのは、『死』のみだ。真に勇気を持つものだけが、冥道の奥に行くことが出来る》

話しているのが剣だとわかって、僕は近づこうとしたけど、結界が張ってあるようで、全く近づけない。どう頑張っても無理なんだ。

《脆弱な奴には、『死』のみが与えられる》

剣がそう言った途端、洞窟が凄い揺れを起こし始めた。今にも崩れそうな勢いで揺れている。僕は、とっさに剣の元に走って抜こうと思ったけど、無理。

《バカな奴だ。お前のような脆弱な奴に、我が抜ける訳がない。真の勇気がある者だけが、我を抜くことが出来る》

剣は「まぁ、我を抜いたら自分の死から脱することも出来るだろう」とつけたしたように言った。

「・・・僕は、脆弱でバカで惨めで、一人ぼっちの妖怪だ。子供のうちから可愛がってくれる両親はいなくなって、一人だった。それに、僕が冥道を開くことが出来ると言うことだけで、村人からは偏見の眼差しで見られた。でも、それさえも我慢した。何とか我慢した。でも、これだけは許せなかった。村人が、両親を殺したんだってわかった時は、一瞬気が狂いそうになった。今まで、ずっと普通に接していたのに、冥道が開けると言うそれだけの理由で、仲の良かった妖怪を殺したんだから。

僕は、それから人を信じなくなった。ずっと信頼していたお兄さんも、少し前に村から出て行ってしまってたし、祖母も信用できない。

だから、一人でずっと恐怖と戦いながら、仇のことをずっと考えていた。そして、僕が十歳の時、育った村を壊した。村人も、全員殺した。でも、すっきりしなかった。人を殺すことで、余計罪を重く感じたんだ。それから僕の人生は滅茶苦茶だった。もう、絶対人を信用しない。仲間も作らない。そう決心してた。でも、いつの間にか、信頼する仲間が出来ちゃった。

嬉しかったよ、信頼出来る仲間が出来て。でも、反対に、前に殺してしまった村人達のことを思うと、なんてバカなことをしたんだと思う。殺したって、二人が帰って来る訳でもないのに。だから、僕は、もう仲間を失いたくない。信頼している人を失いたくない。今までずっと孤独で生きて来た氷の心を溶かしてくれる仲間にやっと会えたんだ。だから、その二人が生きる人間界を、僕のせいで壊したくない。僕が死んだっていい。自分が今までやって来たことの罪があるから、いつでも死ぬ覚悟は出来てる。

でも、あの二人だけはダメだ！僕が死んじゃっても、あの二人には生きていてもらいたい。死んでから天国にいけなくても望むこと。二人が助かるなら、進んで地獄に行く。それくらい大事な仲間なんだ。だから、僕がここで立ち止まって、人間界が壊れていくのをジッと待っている訳にはいかないんだ。所詮、僕は弱い。こんなことを言ってたって、大事な人を失いたくないだけだ。でも、これだけには、強くなれる」

僕は、いつの間にか泣いていた。必死に剣に語りかけるように話していた。僕は弱い。いくら心の底を見えないように隠しても、どこかできっとボロがでるはずだ。でも、これだけは、心の底から強くなれる。絶対に。

《・・・本当か？》

「・・・はっきり言って、自分が強いとか弱いとかどうこうなんて考えもしなかった。でも、よく考えてみると、僕は弱くて臆病だ。一人になるのが怖くて、仲間に死ぬなと言ってる。だけど、僕にはそれしかわからない。だから、それだけで頑張る。頑張って行く。これが、真の勇気と違うか同じなのかはわからないけど、僕はそう思ってる」

僕はそう言うと、その場に座り込んだ。そして、ゴゴゴッと音を立てて崩れて行く洞窟をじっと見ていた。何だか、これから死ぬって言うのに心が穏やかだ。

「ありがとう。やっぱり僕は弱い。だから、ここで死ぬしかないんだよ」

剣は、もう黙ってしまった。僕はゆっくりと息を吐くと、刻々と迫りつつある死の時間を、穏やかな気持ちで待っていた。

魔界の国宝　冥道編　決意

あれ・・・・。何だか、揺れが納まったような気がする・・・・。

目を開けると、確かにさっきまで揺れていたはずの洞窟が、しーんと静まり返っている。これは、嵐の前の静けさと言うものなのかな？

《犬神よ、自らの手を見てみるがいい》

「あっ、さっきの古びた剣がなくなってる！」

《犬神よ、今からでもまだ間に合うんだぞ。我を侮辱したことを謝れ。さすれば、許してやらんこともない》

「そんなこと言ったってさ・・・・さっきの古びた剣と、このツルピカの剣じゃ・・・・」

《なぜ我の髪が少ないことを知っている！？》

「・・・・あっ、ごめん。でもさ、僕、忙しいの知ってるでしょ？だから、用がないなら行くよ」

《待て、汝は我を知らないのか？この天華乱爪を》

「そんなの知らないよ。何？一緒に連れてって欲しいの？いいけど、これから冥道霊閃の暴走を止めに行くんだからね」

《とにかく、我がついて行ってやろう。お前の勇気と覚悟はわかった。だから・・・・》

「そう、ありがとう。じゃあ、許してもらえたんだ」

僕は早めに話を切り上げると、天華乱爪とか言う剣を持って洞窟を出る。この剣は、最初はブツブツ言っていたくせに、認めたとかなんとかになったらペラペラ話し出すし。出来るだけ黙っててもらいたいんだけどな。

そのまま何事もなく歩いて行くと、再び、さっきと同じような洞窟が見つかった。今度は、そこから嫌な予感がする。もう無駄な戦いはしたくないから避けようと思い、何もない片方の道を歩いて行く。それに、ここからだと地球がどうなっているのかわからないし、余計な時間は経たせたくなかった。

しかし、その考えを読まれていたのか、目の前に人が立ちふさがった。ああ、もう、時間がないのに！

「そこの者、しばし待たれよ」

「何？あんたも僕の邪魔をするの？早く行かないと人間界が壊れちゃうんだよ、お願いだから退いて！」

「それは出来ぬ。我は、第二の関門を守る者。我が認め限り、そなたを通す訳にはいかぬ」

僕は、それを聞いて、顔から血の気が引いて行くのがわかった。あの人のことを思い出してしまったんだ。その件は、それだけ響いたらしい。

僕の様子を見てか、そいつは言った。

「安心するがよい、我と戦うのは体ではない。ココだ」

そいつが指を指したところは、頭だ。

それを見て、自然と「敗北」と言う文字が頭に浮かぶ。

でっ、でも、戦う前から負けることを考えてちゃダメだよね！・・・・でも、負けるかも。頭固くないし。

「僕、頭固くないから無理です」
「違う、頭脳で勝負をするのだ。これなら、どちらも共に怪我することなどないはずだ」
「何で冥道の奥に行く為に頭脳対決なんか・・・・」
「問答無用！男なら素直に対決を望むものであろう。では、第一問！」
「えええぇ～！！」
「『シダイ』に熱くなる」
「しっ、シダイ？」
しだいと言う言葉は知ってる。でも、そんな漢字なんか習ったかな？と迷う。最近のことだったら覚えているけど・・・・。
「どうした？中学校卒業レベルの問題だぞ？そなたは中学三年ではないのか？」
「中学三年生だよ！でも・・・・」
その時、ふと頭の中に漢字が浮かんで来た。次第・・・・。これは、亜修羅が教えてくれたんだ。他にも色々と教えてもらったな。使い方を教えてくれる時、必ず僕を貶す使い方を教えるんだけど。
例えば、次第だったら、「凛みたいに、次第に頭が悪くなること」とか・・・・。
「次第！」
「正解。では第二問。これも中学卒業レベルだ。『ギョウセキ』」
「わからない」

それには即答で答えた。これは、教えてもらってない。きっと、僕のいじめ方がわからなかったんだろう。だから、教えてくれなかったんだ。

「では、レベルが少し上がるぞ。高校在学レベルだ。『トロ』」
「大トロ！」
「なぜマグロになる」

「だって、意味がわからないんだもん」
「ふむ・・・・。『苦しい胸中をトロする』」

どっち道わからないよぉ・・・・第一、僕、中学生だし。高校生の問題なんかわかる訳ないし。トロ・・・・とろ・・・・何だか大トロとか中トロぐらいしか頭に浮かんで来ない。

「わからぬか。仕方ない。答えは・・・・」
「わかった！吐露だ！！」
「正解だ」

僕は、あてずっぽうで言ったことが正解になっていて、助かった。本当に助かった。

これは、確か、亜修羅がノートに書いていたような気がしたんだよね。意味はわからなかったけど。それを思い出して、とっさに答えたんだ。

「言い忘れていたが、質問は十問出す。そのうちの八問正解でここを通す。だから、後一問間違えると、後には引けぬ。それをよく考えることだな」
「でも・・・・わからないって言う答えは間違えることになるの？」

「本当のところはそうなのだが、今回は特別になしにする。だから、わからなかったら、わからないと言っていいのだ。何回でも」

僕はそれを聞いてかなり気持ちが楽になったけど、それと同じくらい不思議に思った。やけに易しいと思う。でも、あえて突っ込みを入れなかった。条件を厳しくされて困るのは僕だしね。

それから、僕はわからないを連呼しながらも誠心誠意をかけて、死ぬ気で頑張って答えた。間違えたと思い、冷や冷やしながらも、何とか「正解」と言う言葉を言われると嬉しかった。

「残り一問正解すればお前を通すことが出来る。逆に、間違えたらそなたはここを通れない。我は、最初に十問と言ったが・・・・早、百問超えか」

「ごめん、人間君」

「我は人間君などではない。海楼だ」

「海楼君、色んなところで助けてくれるよね？何で？」

「我はそなたを助けた覚えは決してない」

いや、あるんだよ、それが・・・・。僕はさっき、誠心誠意死ぬ気で頑張ったと言ったけど、ほとんど海楼の動きに助けられてる。何かこの人、本当はいい人なんじゃないかなって思ったんだ。

「でも・・・・」

「とにかく、次の問題に行くぞ。植物の発芽に必要な物はなんだ？」

僕は、もう迷わずに答えることにしたこれ以上わかわらないと言って逃げるのはダメだ。正解か不正解。どちらかになればいい。

「水、空気、光！」
「不正解」
「あっ・・・・・」

やっぱりダメだった。つい勢いで言ったけど、三つ目に必要なのは適当な温度。光と言うよりも、日光と肥料は植物をより成長させるもの。それとごっちゃになってたんだ。

何で答えてから思い出すのかは不思議だけど、いつもそうなんだ。間違えてから、本当の答えが浮かんで来る。まるで、自分自身で首を絞めているようなものだよね。

ダメだった、ごめん。僕が調子に乗って答えるから。

「そなたは、なぜ冥道の奥に行くことを望む？奥に待っているのは、死のみなのだぞ？」
「奥に、冥道霊閃の妖力を全て出し尽くそうとしている奴がいる。そいつを止める為に行く」

「冥道の奥に行けば行く程、魂は肉体から嫌が応でも離れていくのだぞ？それは、強烈な痛みを請け負うことになるのだぞ？」
「承知してるよ、そんなこと。でないと、冥道になんか自ら入って来る訳ないじゃん」

僕は、内心驚いて震えが走ったけど、その素振りは全く見せなかった。それくらいの覚悟は、冥道に入る時から出来ている。

「そうか。なら、今回のみ通らせてやろう」
「本当！？」

「あっ・・・・」
「？」

僕が叫んだとたんに、海楼が不自然なところで言葉を切ったと思ったら、バタッと前に倒れた。その後ろには、海楼よりも小さな子供がいる。その子の手には刀が握られていて、その刀からは、大量の血が滴り落ちている。海楼の血だ。

その子供は、その小柄な体にしては大き過ぎる刀を軽々と振ると、冥道の道に海楼の血を吹き飛ばした。その横には、倒れて動かない海楼がいた。

「何で！？」
「負けた奴に用はない。ましてや、掟まで破ったのだ。死刑実行だ」

そいつはそう言い捨てると、自らの仲間を置き去りにし、そのまま歩いて行った。

「待て！お前は海楼の仲間じゃないのか？」
「死人に仲間などいない。それに、俺をその弱者と一緒にするな」
「何でそんなに無慈悲に人が殺せるんだよ！」

「価値のないゴミは、平気で斬って捨てられる。そう言うことだ。最後の関門は、俺がお前の相手だ。その間に死なないようにしろよ。俺のことを憎く思うならな。その時相手をしてやる」

そいつは、そう言うと消えた。ワープをしたように、その場から消えた。残ったのは、僕と血だらけになった海楼だけ。まだ生きているのかわからないけど、生きていても、きっともう直ぐに死んでし

まうだろう。

「何で・・・・」

僕は、頭が真っ白になりながら、倒れている海楼を見た。今度は、殺そうとなんかしていない。でも、海楼は殺された。

何で?僕に負けたから?そうかもしれない。でも、一番の原因は・・・・僕?

そう思って落胆していると、動かなかった海桜の目がゆっくりと開いたかと思うと、かすれた声で話しだした。

「犬神よ、そう落ち込むな。我は望んでそなたに道を譲った。これは承知の上なのだ。我も感じていた。冥道の奥から発せられる強大な力を。だから、止めてもらいたい。第四関門には、さっきの奴がいる。そいつは悪魔だ。どんなに残酷なことをしても、悪いとなんて思わない。だから、そなたのことも痛めつけて喜ぶだろう。でも、頑張ってくれ。そいつを抜いたら冥道の奥だ。そなたに、魔光霊命(まこうれいめい)様のご加護があらんことを・・・・」

「海楼!」

海楼は、最後に僕の幸福を望んで死んで行った。魔光霊命様とは、魔界で言われる神様のことだ。

・・・僕は、どうしたらいいんだろう。何だかわからなくなって来たよ。望んでもいない死が二回も来るなんてさ。

でも、ここで立ち止まる訳には行かない。人間界に、桜っちや亜修

羅。冥道で死んで行ったあの人と海楼の為にも、絶対に止めてみせる。

僕は、沸々と静かな怒りがこみ上げて来るのがわかった。あの子供は、なんとも思わずに海楼を殺した。それは許されることじゃない。だから、海楼の願いからも、絶対に、冥道霊閃の暴走を止めないと。

《犬神よ、こやつを天国へ向かわせてやれ》

「わかってる・・・・」

僕は、涙を振り払うように踊り続けた。ただ、海楼に無事天国に行ってもらいたいが為に、必死に踊った。

《海楼の死は、貴様のせいではない。安心しろ》

「・・・・行こうか、みんなの為に。もう、何だか自分の気持ちを隠すのにも疲れて来たよ。これからは、思ったことは全て行動に移す」

僕はかすれた声で言うと、海楼にお辞儀をしてから冥道の道を歩き出した。

《犬神よ、なぜそんな怖い顔をしている？》

「怖い顔なんかじゃないさ。ただ、いつも笑ってるからそう見えるだけ。無表情が怖い顔に見えるってだけだから」

いつもそう言われる。普段から、いつの間にか笑顔を作っているから、無表情になると怒ってるって言われる。確かに、今の僕の心の中は穏やかじゃないけどさ。

海楼は、無慈悲にも斬って捨てられた。それも、仲間の手で。そんなことは絶対許しておいてはいけない。僕だって昔はそうだったけど、救ってもらえた。色んな人に。

だから、あの子も救う。今の僕の気持ちは、怒りと言うよりも、あの子に対しての慈悲の気持ちだった。きっと、本人は気がつかないだろうけど、人を殺して悲しまない人は誰もいない。機会は別かもしれないけど、人間でも妖怪でも、きっとどこかで心が痛んでいるはずだ。

僕も、最初はあの子と同じように思ってたけど、段々苦しくなって来た。あの子も、きっと苦しいと思う。だから、救うんだ。あの子の心を。

冥道を歩く足の速さが次第に早くなる。気が競っているのが自分でもわかる。仕舞いには、細い冥道の道を走っていた。落ちたらお仕舞いだと言うのに、走った。

それがいけなかったのか、どこまで進んだかわからない時に、冥道

の道が崩れ落ちた。一瞬、地面がなくなって、あれ・・・・?としか思えなかったけど、やがてどうしようと思って、かろうじて崩れ落ちていない道の縁に捕まろうと思ったけど、手を出すのが遅くて、失敗した。

と、その時、包帯だらけの手が僕の手をつかんだ。一瞬目を疑ったけど、確かに包帯が巻かれた手に握られている。

僕は、その手に助けられて、冥道の道に何とか上ることが出来た。助けてくれたのは、全身包帯だらけのミイラだった。

「大丈夫かい?」

「あっ、ありがとう。でも、僕に近づかない方がいいよ。君、第三関門の子だよね?第四関門の子に殺されちゃうよ?」

「大丈夫、俺は元々死んでるのがわからない?死んでるからミイラなんだろう?」

「そうだね」

僕は少しだけ安心した。すでに死んでいるなら殺されることはないはずだ。それなら、少しくらい話をしても大丈夫だろう。

「でもさ、ミイラって心臓が動いてないんでしょ?ならどうして動いていられるの?」

「ミイラって言うのはさ、心臓が動かない代わりに生命の渦があるんだ。そのおかげで動いてるんだ。ミイラもそれを斬られたら死んじゃうって言うか、動けなくなっちゃうんだ」

「そうか。その、生命の渦って言うのはどこだ?」

「それは・・・・」

僕らは、同時に振り返った。そこには、海楼を無慈悲にも殺したあ

の子供が立っていた。その手には、その体には長すぎる刀を持っていた。ミイラのことも殺そうとしているのかな?

「ミイラ、関門の掟を破るな。破った奴は死刑実行。そう言う決まりだ。だから、お前も死ね!」

その子は電光石火の如く、ミイラに近づくと、刀を突き出した。僕は、とっさにミイラをかばい、刀がわき腹を刺した。普段なら、あまり痛くはないはずなのに、なぜか物凄く痛い。

「チッ、外したか」

その子は、同じようにスパッと勢いよく刀を抜いたから、体に激痛が走る。こんな激痛は何年ぶりだろうか。そうだ、三年ぶりだ。

「なぜ、お前はそこまで生死に敏感に反応する?用のない者は邪魔だろう。殺していいではないか」

「そんな無慈悲に人を殺していいはずないだろう。君だって、海楼を殺して悲しいと思わなかったのか?」

わき腹を抑えながら、搾り出すような声で反応する。今は痛がっている暇はない。とにかくこの子に・・・・。

「ああ、なんとも思わなかったな。バカな奴だ。死にもしないミイラを殺そうとした俺の刀に自ら当たりに行くなんて。自殺行為だぞ。ただでさえ、肉体から魂が離れていっていると言うのに」

「それでもいいんだ。とにかく、これ以上君に人を殺させたくはない。なんとも思っていないと自分では思ってるらしいけど、絶対心の片隅では傷ついてるはずだ。そして、それはいつか爆発する。その前に君を止めなくちゃいけない!」

「わかったような口を利くな。俺は今、気が立っているんだ。ミイラがダメならお前が変わりでもいいぞ？」
「僕は宣言する。君は、絶対僕のことをこれ以上痛めつけることは出来ない。どんなにムキになって刀を振るおうとしても、自分の心が自らの動きを止める」

「もし、俺がお前を刺したらどうなる？」
「死んじゃうんじゃないかな？もう、意識が朦朧として来たしさ。でも、僕は君が刺さないと言うことを信じる。だから、刺そうと思えば刺せばいいよ」

僕は今、自分が何が目的で冥道に来たのか、完全に忘れていた。ただ、今はこのことしか思っていられなかった。それだけを思うのに精一杯だったんだ。あまり働かない頭で考えるのは、これだけで精一杯なんだ。

「そうか。なら、遠慮なく殺すぞ。慈悲の心なんかとっくに捨てた身だ。今更慈悲の心など沸く訳がない」

僕は目をつぶった。それから肩に痛みが走った。目を薄っすらと開けて肩を見ると、血は出ていなかった。きっと、刀では斬られずに、柄で叩かれたんだろう。

「チッ」

その子はそう言うと、ばつが悪そうな顔をして、またどこかに消えてしまった。

僕は、それを見届けると、何だかほっとして、足の力と共に意識を

失った。

僕は、もう目覚めることはないだろうと思っていたけど、目を覚ました。そして驚いた。目の部分意外は明かりを感じないんだ。

おかしいと思って首を振って起き上がると、悲鳴を上げそうになった。全身包帯だらけでグルグル巻きにされている。本当に、自分は死んでしまったのかと思った。でも、違うようだ。

「あっ、気づいたか？」

向こう側に、僕と同様に、包帯でグルグル巻きになったミイラの姿が見える。と言うことは、僕は死んでないのかな？いや、ミイラは死んでも僕が見えてる。と言うことは・・・僕は死んだのかな？

「僕、死んじゃったの？」

「違う、違う。俺の包帯を貸しただけ。この包帯ってね、実は治癒能力があるんだ。君がさ、本当に死にそうになってたからさ、急いで包帯を巻いて寝かせておいたんだ。どう？まだ傷が痛む？」

「ううん、傷なんか跡形もなく消えちゃってるよ。どうなってるの？」

「それは、ミイラの企業秘密。っと、急いだ方がいいんじゃないか

い？あれから三時間経ってるから、人間界で言うと、約六時間」

僕はその言葉を聞いて、飛び起きた。まずい、冥道では人間界よりも時間が遅く過ぎることを忘れていた。

「えっと、ありがとう。傷の治癒までしてもらって。でも、そんなにゆっくりお礼を言っている暇はないんだ。人間界が・・・・と言うか、全てが危ないから」

「ああ、わかってる。生半可な気持ちじゃ、冥道になんか生きたまま来ようとする奴はいないもんな」

「ありがとう」

僕は、最後にお礼を言って立ち去ろうとしたけど、それをミイラが呼び止めた。

「なぁ、その剣って、天華乱爪か？」

「そうだって本人は言ってるけど・・・・」

「凄いな、お前。それ、どこで手に入れたんだよ！」

ミイラの態度の激変ぶりに、僕は戸惑ってしまった。何となく淡々としかしゃべらなかったミイラの声色が一気に跳ね上がったからだ。

「どこって・・・・冥道の途中の洞窟で見つけた。これって、そんなに凄いものなの？」

「知らないのか？冥道霊閃と、他の二つの国宝のことは知っているだろう？実は、もう三つあるって言う噂があるんだ。だから、合計六つ。そのうちの一つに天華乱爪が入ってるんだ」

「でも、それって噂でしょ？」

「いや、どうも本当らしい。魔界の一番偉い奴が言ってたんだからな。まぁ、定かではないけどな」

僕は、自分の手で握っている剣をまじまじと見つめた。実は、国宝が六つ合って、そのうちの一つを偶然手に入れているなんて。それに、冥道霊閃を取られていなかったら、国宝を二つも持っていることになる。何と言うことだ・・・・。

「教えてくれてありがとう。とにかく、急がなくちゃいけないから、もう行くね？」

「ああ、じゃあな。大事に使えよ、それ」

ミイラは親切に言ったんだろうけど、僕の肩には少々重過ぎる。何てったって、国宝が僕のことを認めたのか。気が重いよ。それに、体がまだ動かしずらい。多分、ミイラが包帯を全部取った後の感覚ってこんな感じなんだろう。

僕は、気が重いのを感じながらも、あまり動きにくい体を動かして、ゆっくりと冥道を歩いて行った。

なぜ歩きにくいのか。きっと体を縛り付けられていたこともあるだろうけど、何よりも、肉体から魂がドンドン離れて行くと言うことが原因だと思う。

自分では、魂が離れていく感覚があんまりつかめないのに、動きにくくなっていく。これは、一種のストレスだ。いつもとあんまり変わりはしないのに、体が全然動かなくなる。その上、急ぎの用とまで来ると、ストレスが溜まらない方が難しい。

「あっ！」

僕は、また何もないところで転んだ。きっと、今までで二十回以上は転んだだろう。なにもないところで。どうやって転ぶのかは自分でもわからない。真剣に歩こうとしてるのに、足がもつれるんだ。

《大丈夫か？犬神よ。さっきから転んでばかりだが・・・》

「ああ、大丈夫。少し足元がふらつくけど」

気にしてくれる天華乱爪に答える。剣は歩かずに済むからいいなと思うけど、そんなこと、心配してくれているところで言えるはずがない。

実を言うと、全然大丈夫じゃない。さっき転んだのがまずかったらしく、足元がふらつき、頭もグルグルしているし、目も霞んでいる。真っ直ぐ歩くのが大変だ。

でも、ここで立ち止まる訳には行かないから、クラクラする頭を振

りながら、何とか前に進む。

通常の三倍以上の遅さのペースで歩き、やっと第四関門のところにたどり着いた。しかし、向こうは冥界の住人だ。こんな冥道の奥にいると言うのに、ピンピンしている。ハンデが欲しいところだけど、あの子がくれる訳がない。と言うか、ハンデを申し出るつもりもないんだけど。

「随分とヨロヨロじゃないか。足腰の悪い老人よりも酷い動きだぞ」
「うるさい。冥界の住人の君にはわからないだろうね、この苦しみ。ただ出さえ目は霞むし、足はもつれるしで大変なのに、頭まで痛くなって来たんだから」

「その調子だと、ここから先に行ったら、お前は十秒で俺と同じ国に来ることが出来るぞ。その時は、沢山世話してやるよ」
「いいよ。僕は冥界の住人になる気なんか更々ないし」
「ほざけ。お前はここで死ぬ。俺は向こう側に、絶対生きている者は通さない」

なぜそこまで、あの子は冥道の奥に僕を通したくないのかわからないけど、僕は通らなくちゃいけないんだ。そして、冥道霊閃を止めなくちゃいけない。

「でも、僕は通してもらわなくちゃならない。だけど、どうしてそこまで冥道の奥に通したくないのさ？」

「ここで死ぬお前に言っても意味がないと思うが、一応教えておいてやる。せめてもの情けだ。ここで情けをかけたから、戦闘中はもう情け容赦なく行く。そう心構えしておけ。この先には、女帝様がいらっしゃる。だから、ここを通してはならないんだ」

女帝様とは、名前は普通だけど、列記とした冥道の支配人だ。冥道を通って来る者の姿を見極めて、その人をどこに通すかを決める、大事な役割を果たしている人だ。それだったら、やっぱり悪い妖怪に捕まることも訳ないだろう。だから、護衛みたいな役割として四人がいるらしい。

「あのさ、もう一ついい？」
「まだ質問があるのか。図々しい奴だな」
「わかってる。その・・・僕の前にここを通った人っているかな？」

「いる訳がない。大体は第一関門で事切れる。お前みたいなしつこい奴は珍しい。それとも、死人か？」
「いや、多分死んでないと思うけど」

「じゃあ、ここには来ていない。お前が生きている間にココに来たのが最長だ。しかし、それもここまでだ。ここで命を絶ってもらう」

そう言うが早いか、その子は腰にかけてある鞘から刀を抜くと、僕の目の前で横に振った。いくら冥界の住人とは言え、ここまで人間で早く動くことが出来るのは、ほとんどいないだろう。妖怪の僕でさえ、剣筋が光の線にしか見えなかったんだからさ。

すんでのところで避け、自分も戦闘モードに切り替える。と言っても、動きはさほど変わらないんだけど・・・・。

ある程度の攻撃は効かないと見たその子は、今度は鋭い突きを高速で放って来た。これは、大きな動きをすることが出来ず、最小限の動きで俊敏に避けるように頑張った。でも、少々限界があり、足が

もつれて刀が足を刺した。でも、向こうもスピード重視だったようで、そんなに損傷を受けずに済んだ。

その子が鋭い突きを放つのをやめた瞬間に、僕は急いで後ろに下がろうとしたけど、足を怪我しているから、バック転を二回して、何とか後ろに下がる。

接近戦では、あの子の剣の方が長いから、僕の方が不利だ。天華乱爪もあるけど、さほど役に立ちそうにない。刀身は短いから、使ってもどっちみち長さには勝てないし。

そう思っている時、その子は不意に刀を鞘にしまい、床にほおり投げたかと思ったら、ワープでもしたかのようなスピードで、気がついた時には思い切り殴り飛ばされていた。立ち上がろうとするけども、足が痺れて立ち上がろうにも無理だった。

それに加え、何回も殴られたり蹴られたりするから、意識まで遠くなって来た。この図は、不良にリンチされる子の図を想像してもらえばいいと思う。反撃さえ出来ずに、ただ殴られているだけなんだ。

「おい、俺を救うんじゃないのか?」

襟首をつかまれて持ち上げられる。凄い力だ。自分よりも二倍くらいはある僕を持ち上げるなんて。でも、今はそんな呑気なことを考えている暇はない。そんなことを考えようものなら、即座に殺される。常に神経を研ぎ澄ませておかないと、本気で殺されてしまう。

「・・・・」

「ふん、哀れな奴だな。手も足もでないくせに俺を救うだって?もっと自分の実力を考えて言え」

「・・・・」

「お前は何の為に冥道の奥に行きたいんだ？どうせ、人間界とかを救うとか言うんだろう。自分のせっかくの居場所をなくしてもらいたくないのか。本当に哀れだな。弱い人間は」

「・・・・」

何も言わない。いや、言えない。口すら動かすことも出来ず、何とか目だけは動かすことが出来た。このまま死んじゃうのかな？僕は、あのまま、ちゃんとした別れを言わないまま、さよならしちゃうのかな？

その子は、急に手を離すと、さっき放り出した刀を取りに行く。僕は、誰も押さえつけていないのだから動けるはずなのに、動けなかった。見えない何者かに体を押さえつけられているって言う感じだ。

その子は、ゆっくりゆっくり歩いて僕の真上まで来ると、鞘から刀を抜いた。それから、刃先を僕の顔の上に構える。そして、ゆっくり狙いを定めた後、振り下ろした。

カキンと乾いた音がして、天華乱爪の刃が折れ、冥道の道に転がった。

何とかギリギリのところで抑えたけど、残念なことが一つある。天華乱爪がこんなにもろい作りだったことだ。国宝と言われているんだから、もう少しましな働きが出来ると思っていたけど、それは違い、普通よりも役に立たないと言うことがわかった。

少しの隙を見せた男の子を、僕は最後の力を振り絞って蹴り飛ばし、

何とか立ち上がった。頭がクラクラして、目が回りそうだ。

その子は簡単に立ち上がると、再び刀を構えて来た。この体で刀を避けるのは無理だ。と言うことは、このもろい刀で攻撃を抑えるしかないんだ。

僕は、出来る限り、剣への負担をかけないように攻撃を防ぐものの、瀕死の僕と、ピンピンの子供では、僕の方が弱いに決まってる。だから、ドンドン後ろに追いやられて行く。

門の前は広いとは言え、さほど広くない。冥道の道に比べたらかなり広いけど、闘技場に比べれば、三分の一もない。だから、いつかは冥道の道から落っこちてしまうようだ。

「ねぇ、もし冥道の道から落っこちちゃったらどうなるの？」

「知るか。落ちた奴のことなんざ、一々見ていられるか！」

剣で向こうの攻撃を受け止めようとしているけど、やっぱり力が足りなくて、後ろに下がってしまう。よく、戦闘のシーンとかで、剣同士で押し合いをやってるでしょ？火花が散って、にらみ合うように。それをしたいけど、力が全然入らなくて、ただ振り払われているだけみたいなんだ。

その子が振り下ろした刀を受け止める。火花が散った後に、刃が毀れる。もう直折れるだろうなと思った時、とうとう刃先から柄にかけての刀身がポッキリと折れてしまった。その折れ方は、ポッキリと音がでそうなくらい綺麗な真っ二つだった。（実際は、ガキッと鈍い音がしたんだけどね）

これで、僕の身を守る術がなくなってしまった。唯一の剣も、今の

攻撃でポッキリと折れてしまったのだ。だから、後は自分の残っている力が無くなるまでしか寿命はなくなった。

「おい、死ぬ覚悟は出来てるか？」

「まだだ。まだ死ねない。力が残っている限り、死にはしない。力の限り、精一杯生きるって誓ったんだ。今まで簡単に殺して来た人の為にも、自ら諦めたら、僕はもう一生報われない。そう思ってるから、絶対に死なない。力の限りは生きている」

「綺麗事を・・・・」

その子は、上から一直線に刀を振り下ろして来た。僕は、横に前転をして避ける。それから、立ち上がる暇もなく、今度は横になぎ払われる。

僕は避けることが出来ずに、偶々左手にぶつかった何かを、盾にして避けた。何とか凌げたようだけど、それは驚きだった。あの子の刀の鞘だったんだ。普通、鞘なんて、刀よりも簡単に切れるはずなのに、逆になっている。

その子は一瞬顔を歪めたけど、また無表情になって、今度は突進して来た。刀を構えて突進して来たんだ。僕はとっさに防いだけど、その子の方が力が強くて、鞘は吹き飛び、やがて暗闇の中に落ちて行った。

「さぁ、次はお前が落ちる番だ。最後に言いたいことはあるか？」

そう言われて、深くため息をつくと、何とか子供の方を向いて言った。

「ごめん、君を救うって言ったのに、本当に嘘をついちゃったよ。それだけは悪いと思ってる」

その子は一瞬目を丸くした後、直ぐにバカにしたように鼻を鳴らした。

「バカだな。死ぬ間際まで敵のことを考えるか。本当のバカだな、犬神」

その子は、躊躇いもなく、僕を思い切り刀の柄で突いた。道の下に落ちたら死ぬだろうと思ったようで、柄で僕を突いたんだ。

突かれた後のことはよく覚えていない。本当に死んじゃったんだと思うから。

「あの・・・確か、文化祭の時に・・・・」
「文化祭ですか？」
「うん。あの時の子だよね？」

凛君が戻って来るまで、修さんのクラスメートの子を預かっておくと言うことになっているので、何とかここに止めてはいるけど、さっきから質問攻めで・・・・。

「あの時とは？」
「文化祭の時に、女の子と間違えられて、思い切り睨まれてた子でしょ？」
「はい。なぜか、みんな変な勘違いをしているようで。それより、そんなところを覗かないで下さい！」

いろんなところを開けたり閉めたりと忙しく動き回っているクラスメートの子に、僕は何とか止めようとする。

「・・・だって、何だか落ち着かないんだもの。それより、伊織君はどうしたの？最近全然学校に来ないけど・・・・。そう思ったら、急に天変地異みたいなことが起こるし・・・・。ねぇ、あなたも妖怪なの？」

「なっ、何でそう思うんですか？と言うか、妖怪を知ってるんですか！？」

「うん。だって、伊織君って妖怪なんでしょ？だから・・・・。あっ、それとも、この現象と関係があるとか？」

「・・・いえ、それはないです。修さんのジョークですよ。ああ見えて、結構そういうジョークを言う人ですから」

何とかクラスメートの子が思っていることを説明する。きっと、修さんが自ら言ったんだと思う。結構大雑把だし、それに、言ってはまずい秘密とかでも普通に言っちゃう人だし。

「あなた、名前は？私は、石村友美」

「桜木明日夏です」

やっと動き回るのをやめ、おとなしく座っている石村さんに、ほっとしながら答える。

「明日夏君ね。明日夏君、伊織君とはどう言う関係？」

そう聞かれた時、偶々テレビを付けたので、僕には「明日夏君、伊織君とはどう言う関係だと思う？」と聞こえたんだ。

「恋人・・・・ですか？」

「えっ！？」

「あの・・・・」

石村さんの驚きように、何かまた勘違いされているのだと思って、訂正しようと言葉をかけるけど、全然聞いてくれそうな雰囲気じゃない。真っ白になって燃え尽きたと言う感じだった。

「大丈夫ですか？」

「・・・・」

石化状態になったように、全く瞬きさえしない石村さんの肩を揺す

るけど、全然反応なし。

「あの・・・・勘違いしてるようですけど。さっきなんて言ったんですか?聞こえなかったんですけど。変な勘違いしないで下さいね」

「さっき言ったのは、『明日夏君、伊織君とはどう言う関係?』って聞いたの」

その言葉を聞いて、自分が何て恐ろしいことを言ったのかと、自分を責めた。石村さんがそんな態度を取るのも当たり前だ。

「僕らは、多分、友達だと思います。でも、修さん達がどう思っているかはわからないんですけど、僕はそう思っています」

「じゃあ、さっきの言葉は?」

「僕は『明日夏君、伊織君とはどう言う関係だと思う?』って聞こえたので・・・・」

すると、今度は石村さんの顔がボンッと真っ赤になってうつむくと、床に指で何回も丸を書く。

「そんなことないよ。だって、この前フられちゃったし。それで、訳を聞いた時にはぐらかされて、気がついた時には手が出ちゃってたの。理不尽に怒って、最低だと思って、ここに来たんだけど・・・・。伊織君の様子は大丈夫?」

「そうなんですか?そんなこと全然気がつかなかったので、多分大丈夫だと思いますけど」

「そっか、よかった」

知ってるけど、知らないふりをする。凛君にも口止めしておかないと。

その時、窓から何かが飛び込んで来た。とっさに石村さんの腕をつかんで、後ろに飛び退く。僕らがいたところは、大きな穴が出来ている。

「なっ、何!?」

「くっ・・・・」

急いでしまっておいた武器の銃を出すと、一気に放つ。白い電撃が窓を砕き、外にいる妖怪に直撃する。と、間髪入れずに、また何かが突っ込んで来る。このままだと、修さんが帰って来た時には家がバラバラに崩れてたら話にならない。

でも、外は風速四十メートル以上の風に、叩きつけて来る豪雨。他にも沢山の災害がある。人間よりも多少は強い僕だけど、石村さんは人間だから無理だろう。

そんなことを考えている時、隙を突かれて、思い切り弾き飛ばされた。それから、石村さんを連れて行く。

「待て!」

そう言っても、妖怪は待つはずがなく、連れて行かれる。僕は立ち上がって走ったけど、届かない。

その時、後ろから見覚えのある黒い雷撃が飛んで行った。それは妖怪に当たり、妖怪が怯んだ隙に、人影が石村さんを助ける。

「おい、猫。人間界にいる間に、腕が落ちちまったのか?」

「だから、その名前やめてって。海里」

石村さんを助け、部屋に入って来た顔馴染みに文句を言う。海里は、魔界の妖怪退治屋の養成学校にいる時に、クラスメートと言うか、親友になった子だ。

「でもな、お前、猫みたいなもんだから、つい言っちまう。んで、この子誰？」

「友達のクラスメート。ちょっとかくかくしかじかでさ」

海里の姿を上から下までジーッと観察する。黒い短髪に、同じ色の黒くて長いハチマキ。グレーの少し短めなベストに、こちらは長めのティーシャツ。黒いズボンに黒いブーツ。そして、腰に下げている銃まで黒だ。とにかく、黒だらけ。ベスト以外全て黒。ここまで黒だらけの人も珍しいだろう。

「何だよ、ジロジロ見んなよ」

「ごめん。でも海里、確か、魔界で妖怪退治してるんじゃなかったの？」

「ああ、ちっとこっちに用があってな。それより、どうなってんだ？ここまで人間界が壊れるなんて」

「うん。これも事情があるんだ。っと、それより・・・外にいる奴らを倒しちゃわないと。海里も手伝ってくれるね？」

「ああ、当然だ。妖怪を倒すのが俺の務めだからな」

僕らは顔を見合わせると、銃を手に取り、外に飛び出した。外には、思った以上に沢山の妖怪がたむろしていた。

数は多いとは言え、そんなに強い奴は一匹もいなかった。みんな、僕と海里の銃撃を受けて、一撃で倒れ、ものの数分で全部の妖怪が

片付いた。

その間、家の中にいた石村さんはと言うと、つけっぱなしのテレビに夢中になっていて、見ていないようだった。

「そう言えば、猫って銃が一つだけだよな？みんな二つもらってるのによ。何か訳とかあるのか？」

「さぁ？でも、何か重大な訳があるはずだよ」

「それにな、俺、いつも思うけどさ。猫の動きって、本当に猫だよな？」

「？」

「だから、猫みたいな動きをするんだ。まるで、本当の猫みたいにな」

「僕、人間だからね。そこら辺はわかってるよね？」

「ああ、わかってるさ」

本当はあまり信じてないんだろうなと思いながらも、取りあえず黙っておく。

「外に出て大丈夫だった？凄い風だったよね？」

「はい、何とか大丈夫でした。それより石村さん、怪我はありませんか？」

「うん。大丈夫」

僕と石村さんが話しているのを見て、隣にいた海里が耳打ちして来る。

「お前、敬語なのか？」

「そうだよ。大体は敬語で話してる」
「んじゃ、俺にも敬語使えよ」

「ダメ！何だか嫌だから」
「嫌って何だよ」
「わかんないけどさ、海里に敬語って嫌だから」

僕の答えにため息をつくと、その場に座った。その時に、自分達が濡れていることに気がつく。床は畳だから、確か水はまずかったんじゃないかな？

そう思っても、あまり意味がなかった。なぜなら、窓は壊してしまったので、凄い突風と豪雨が部屋の中に入り込んでいるからだ。

「それにしても、凄い風だね。よくこの家が吹き飛ばされないよね」
「そうですね」

そう言われてみて、不思議だなと思った。このアパートは、はっきり言って、とても古い。新築の家の屋根が吹き飛ばされている程に強い風を受けながらも、このアパートは、さっき僕が割った窓以外は負傷ゼロだ。

「そう言えば、あの子は？元気な子」
「ああ、宗介君ですね？あの子はちょっと出かけてて。でも、こんな天気だから帰ってこられないんだと思います」

そうだ。凛君はこの悪天候の中、無理をして行っちゃったんだ。ここから冥道の様子はわからないけど、でも、あまり期待はしてはいけない。冥道に入ってしまった生き物は、生きて帰って来ることは出来ない。だから、凛君はもう・・・帰って来ない。

「そっか」

それきり沈黙が続いた。誰も話すことはしないけど、静かではない。今、すでに激しい風の音と、雨の音が聞こえる。でも、それは耳障りなもの以外の何でもなかった。

凛君は、今何をしているのだろうか？冥道の奥に向かって歩いているのか。それとも、もう息絶えてしまったのか。どちらかなんか、僕にはわからない。でも、生きていて欲しい。帰って来なかったら、人間界を救ったって意味がないんだよ。

僕は、必死に願うだけだった。凛君が奇跡的に冥道から帰って来れるように祈るのが精一杯だった。

なんだろう、ここ。真っ暗で何も見えないや。僕、死んじゃったのかな？

僕は、冥道の奥底に落ちた。その時に気を失ったようで、今目が覚めた。

でも、自分が本当に目を開けているのかわからなかった。それぐらい、周りが暗闇に包まれていた。

目の前に手を出してみても、全く見えない。もしかしたら、僕はもう生きていないのかと思った。何も見えないし、何も聞こえない。唯一感覚はまだあるけど、体が痺れているのは変わりない。

目の前が見えないのだから、動く気にもなれない。
紐で縛られているか、金縛りのような感覚になってて、全くと言っていいほど動けない。

僕がそんなことを感じていると、背筋に悪寒が走った。こんなに怖い気持ちになったのは初めてだ。

きっと、今までの恐怖の中で、一番怖いやつだと思う。自分は生きているのに、生きていないような気がして。それに、何も聞こえない。何も見えないとなると、自分が生きているのかすらわからない。

きっと、誰もがここで一番の恐怖を味わうことになると思う。自分の存在すると言う証明が出来ないのが、きっと一番怖いと思うから。

僕は目をつぶった。しかし、明けていた時とほとんど変わらない。これが死ってことなのかな?僕はきっと、天国には行けないだろうな。過去に色んなことをして来たし。

地獄とはどう言うところなのか今まで考えたことなかったけど、聞いた話では恐ろしいところだってね。今からそこに行くんだ。

目をつぶって考える。まだ、考えることが出来るから幸いだ。それすら出来なくなっていたら、僕はどうなってただろう。きっと頭がおかしくなっちゃうんじゃないかな。

《目を開けなさい》

しばらく経ってから、そんな声が聞こえた。目を開けると、とてつもなく眩しい光が目に飛び込んで来る。その時に一瞬だけ見えたけど、何だか女の人みたいだった。確か、地獄には死神がこぐ舟で行くらしい。じゃあ、この人が死神?死神ってこんなに眩しかったっけ?

「死神さんですか?」

僕が聞くと、その人は明らかに心外だと言う顔になって抗議をし始めた。

「この私が死神に見えますか?この初々しい私が、この婆さんに見えるんですか!」

女の人は、懐から、これまた光り輝く写真を取り出して見せた。その写真には、明らかに死神と言う言葉がしっくりと来るお婆さんが、残り少なくなった歯を見せて、ピースをして映っている。

そのおばあさんは黒マントを被って、黒いよれよれの着物を着ている。そして、その手には大釜が・・・・じゃなくて、普通の杖。足は下駄と言うなんとも不思議なおばあさんだった。でも、死神だとわかったのは、その笑い方が悪魔みたいだったからだ。

逆に、今目の前にいる女の人は、十代後半から二十代の前半ぐらいの歳だし、着ている洋服も、着物と言うのは変わらないけど、その上から乙姫が着ているような衣をはおってる。背は高くて、僕より二十センチくらい高い。足は裸足だけど、あまり違和感はない。これは、随分と可哀想な間違いをしてしまった。

「じゃあ、女帝様ですか？」

「違うわ！全然違う！！私がこのデブ女に見えるの！？」

またも写真を見せてくれたので、よく見て見る。ここで気がついたんだけど、さっきまで動かなかった体が動くようになったんだ。普通は動くことが出来るから、今ふと気がついたんだけど。

女帝様は太っていた。もの凄く太っていた。ありえないくらい。

「じゃあ、どちらさまですか？」

「魔界の神様って知ってる？」

「はい、魔光霊命様ですよね」

「そう。それが私」

「そうなんですか・・・。えっ、魔光霊命様ですか？」

「そうよ。やっとわかってくれた？」

そう言ってにっこり笑う魔光霊命様は、魔界の神様と言うには少々

若過ぎるように思えた。それ以前に、神様には早過ぎると思う。

「じゃあ、さっそく質問をするわね。あなたは、今までやって来た罪を反省してる？」

「はい。やってる時はなんとも思ってなかったんですけど、今思うと・・・・」

「じゃあ、何で冥道になんか入って来たの？」

「冥道の奥で、魔界の国宝のうちの一つ、冥道霊閃の力が爆発・・・・と言えばいいのかわからないんですけど、何だか勝手にではないと思うんですけど・・・・とにかくそうなってしまったんです。そうしたら、人間界にも影響が出て来て。このままでは、地球の半分が壊れてしまうと言うので・・・・」

僕の答えに考え込む魔光霊命様。僕は、突然の質問に戸惑いながら答えたけど、どんなことを言われるのか、内心気が気でなかった。

魔光霊命様は、再び口を開いた。

「これが最後の質問。あなたは、本当は過去に酷いことをして来たから、地獄に行かなくちゃならないの。でも、一つだけ地獄に行かなくて済む方法があるの。聞きたい？」

「はい」

それは聞いてみたい。地獄とは恐ろしいものと聞いていたから、行かなくて済む方法を教えてもらいたい。誰もが思うことだと思う。

「それは、人間界のことを忘れて、と言うか捨てて、私について来ること。そうすれば、見事天国へ行けるわ。でも、ついて来なかったら、コワーイ地獄が待ってるの。でも、そのおかげで人間界は救

われるわ。さて、どうする?私はどっちを強制するとかしないからね。あなたが自分で決めていいのよ」

もう、答えなど決まっていた。そっちの方が幸せになれる。

「もう、答えは決まっています」

「どっち?」

「このまま地獄に行きます。僕が地獄に行って、人間界が救われるのなら、いいです。それで」

「本当にいいの?地獄に行ったら、何されるかわからないのよ?いたぶられて、死にたいと思っても死んでるから逃げられないんだよ?それでもいいの?例えば、一番軽いもので言っても・・・・」

「あの・・・どうしても、僕に人間界を捨てて、ついてきてもらいたいと言っているように聞こえるんですが・・・・。強制する訳じゃないって言いましたよね?」

魔光霊命様の言葉を、これ以上聞くまいと話を遮る。これから待つ地獄の話をされたら堪ったものじゃない。

「そうよ、強制はしないわ。ただ、どれだけ地獄が怖いものかと確かめているだけよ。その選択で本当にいいの?今ならまだ連れて行くことは出来るけど」

「いえ。大丈夫です。こんなことで償おうとか思ってる訳じゃないですけど、せめて、僕の運命を懸けて、人間界に住む沢山の人が救われるのなら、そうしたいです。今まで沢山の人を殺して来てしまったので、最後くらい人を助けないと、死んでも死に切れません。だから、地獄に行きます。親切にありがとうございました。僕は行きます」

僕は、そう心から思っていた。嘘偽りのない本当の気持ち。今だったら、地獄に落ちてもいいだろう。そう思えた。

「わかったわ。あなたの気持ちはよ～～～くわかった。あなたは合格！」
「・・・・え？」
「あなたは無事に天国に行くことが保障されたわ」
「でも、僕は、沢山の人を殺してきちゃいました。それで天国に行ったら・・・・」

「ええ。あなたが今までやってきた事は、決して許されることじゃない。でも、人間界を助ける為に、自らの命を投げ出す人を地獄になんか落とせないわ。それに、今は心に闇がないもの。真っ白で、闇の面影のない心。それがあるから、あなたは天国に行くの」

そう魔光霊命様に言われた途端、自分の中の何かが膨れ上がったと思ったら、パチンと弾けた。体が急に熱が出た時みたいに熱くなっていくのがわかる。

自分でもおかしくなっちゃったのかと思ったけど、何とかおかしくはなっていないようだった。でも、自分の目はおかしくなってしまったようだった。

「なっ、何これ！？と言うか、犬神の面影が全くなくなっちゃった。耳もないし・・・・」
「あら、あなたは犬神でもあり、エンジェルでもあったのね。どうりで心が真っ白だと思ったわ」

「そんなことより、説明して下さい！僕の目がおかしくなっちゃったんですか？それとも頭ですか！？」

自分の着ている洋服に戸惑い、目の前にいる魔光霊命様の正体を忘れて、思い切り肩を揺する。

僕の来ているものと言ったら、天使、エンジェルだった。真っ白のワンピース（？）に、白いサンダル。背中には自分の体よりも大きい純白の羽がついてる。そして、手には・・・・。

「天華乱爪！！」

僕が持っていたのは、大抵の天使が持っている弓（あれ？弓を持ってるのはキューピッドだけだったかな？）ではなく、子供と戦った時に真っ二つに折れたはずの天華乱爪だった。

天華乱爪の刃は折れていなくて、鋭く光っている。はっきり言って、折れる前よりも、綺麗になってる。

《やっと覚醒を果たしたか、犬神よ。覚醒しないと、我がいくら魔界の国宝と言われていても、役にたたないのだ。やっと役に立てるぞ》

「は？かくせい？」

僕は訳がわからず、思い切り肩を揺さぶり過ぎて、目を回している魔光霊命様の方を振り返った。

「あの、すみませんでした。魔光霊命様。よろしければ、覚醒の件をお話していただけないでしょうか？」

「ええ、いいですよ。妖怪は、元から三回まで覚醒することが出来るのです。しかし、覚醒と言っても、そう簡単に出来るものではな

いので、大体の妖怪はしないのですが・・・・。でも、あなたは犬神から、エンジェルに覚醒したのです」
「一つついいですか？」

「なんですか？」
「エンジェルに覚醒してしまったら、もう、犬神の姿には戻れないんですか？同じように、人間の姿にも」
「いいえ、戻ることは出来ます。安心して下さい。それより、早く行ったほうがいいと思いますよ？では、私は他にもやらなくてはいけないことがあるので、これで失礼します」

魔光霊命様はそう言い残すと、あっと言う間に消えてしまった。まだ聞きたいことがあるのに・・・・。

《犬神よ、さっさと行くぞ》

「はいはい。わかってるよ・・・・って言っても、どこから出ればいいのさ？」
《さっそく我の出番だな。我を頭上に掲げて、天井を引き裂くように動かすのだ》

何だかよくわからないけど、とにかく天華乱爪を頭上に持ち上げて、天井を引き裂くように動かすと、上の方から冥道の道が見えた。

「よっし。今度は負けないぞ！と言うか、僕って死んでるの？それとも生きてるの？」
《見ての通り、生きておるだろう。魔光霊命様が、貴様を助けてくれたのだ。感謝しろ》
「ねぇ、あのさ、貴様って言い方やめてくれない？何だかバカにされてるようで嫌なんだけど」

《何を言う。貴様とは敬語だぞ。みな勘違いをして使っているようだが、漢字を見ると、貴族の貴に、王様の様ではないか》

「そうなんだ。初めて知ったよ」

驚きながらも、引き裂いた穴に手をかけて、自分の体を持ち上げる。そして、冥道の道に手をかけてよじ登る。

何か、不思議なことに、随分深く落ちた気がしていたのに、そんなに深いところにはいなかったようだ。それに、今は落ちたところが固まっていると言うか、乗ることが出来る。何だか不思議だよ、冥道って。

「貴様！なぜここにいる！！？」

明らかに驚いた様子の子供に、僕はおかしくなって笑ってしまった。その顔は、本当に子供と言う色で染まっていた。今までは、子供だけど子供じゃないと言うような顔をしていたのに、今は子供としか思えない。

「死の世界から、また冥道に戻って来ちゃった。っと、時間がないんだった。続きをしようよ」

僕の言葉に、やっと自分の立場を思い出したように、子供は構える。でも、戸惑いが隠せない様子でいる。

《犬神よ、我の力を示す時が来た。我を使って空を切るのだ！》

「何それ？どう言う意味？」

《とにかくやってみるのが一番なのだ》

「わかったよ」

取りあえず、普通に何もないところを切る。すると、何か白いものが無数に子供の方に飛んで行った。僕はしばらくの間、目をぱちくりさせていたけど、この天華乱爪の凄いところはこれだけじゃないらしい。

《今のは真っ直ぐしか飛ばないが、斜めに切れば、ブーメランのように回ったりもするぞ。まぁ、戻っては来ないがな》

言われた通りに斜めに切ると、さっきの白いものが斜めに飛んで行った。あの白いものはなんだろうか？

「あの白いのは何？」

《剣圧だ。刀の圧力が強くて目に見えるようになることがある現象だ。我は軽いが、剣圧を強くすることは出来る。ちなみに、剣圧は当ったら大変だからな。気をつけるのだぞ》

「おい、俺を無視するな！」

「してないけどさ、使い方がイマイチよくわからなくてさ」

「それは、凄い剣なのか？」

「そうじゃないかな？本人がそう言ってるんだし」

「そうか。なら、どちらが強いか一本勝負と行こうじゃないか」

「へ？」

「そんなマヌケな声を出しても無駄だ。行くぞ！」

その子は、勝手に話を進めると、刀に意識を集中しだした。その刀がドンドンどす黒い色になって行くのがわかる。僕も何かしないと・・・。

《あの子を救うんじゃなかったのか？それとも、腕ずくで止めるのか？》

「そんなこと言ったって・・・・。あの子、とんでもないことしそうだし・・・・・」

明らかにまずい状況に陥っているのは誰でもわかるはずだ。この状況でそんなことを言われても・・・・。

「僕だってあの子を救いたいけどさ。どうやったら・・・・」

《取りあえず、この冥道から引き離してやれ。天国にも地獄にもいけない。その狭間と言うものは、一番寂しいものだ》

僕は、そう言われて、どのように動けとも教えてもらってないのに、自然と体が動いた。

何だか、心が安らかになって行く。

ふと下を見上げると、僕の足は地面から遠く離れた空中にいた。いつもなら驚くところだろうけど、なぜか驚かない。

子供は、僕に向かって刀を振った。すると、こっちにどす黒い剣圧が飛んで来た。僕はと言うと、動かない。と言うか、動けない。体をどう動かそうとしても無理だった。

後少しでやられるって時に、急にその剣圧をすり抜けて、子供の前に立った。これにはびっくり。自分でもびっくりしたけど、表情は驚きもせずに、次の段階に入っている。

「私が、これから、裁判の間に貴様を送る。後は、自分で道を決めろ」

「待て！」

「救う話なら無理だ。自分のことは、自分でしか救うことが出来ない。ああは言ったが、人に救ってもらうようじゃ、貴様もまだまだ子供だ。自分のことは、自分で救え」

子供の言葉を切り捨てるように遮ると、子供の頭上に自分の手を掲げた。僕は、本当はそんな切り捨てるような言葉は言いたくなかった。でも、何だか言ってしまったんだ。

人生は一つの物語。その展開を変えていけるのは自分だけ。だから、自分で救えって言ったのかな？でも、もう少しマシな言い方があると思うんだけどな。

そんなことを思っていると、その子が、段々と光の中に消えて行くのに気がついた。本当に、裁判の間とやらにこの子を連れて行けるのか不安だった。でも、僕は止めない。

「おい、お前はそれで幸せなのか？」

急にそう聞かれた。僕はうなずく。その子は少し穏やかな顔になったと思ったら、消えてしまった。

「あのさ、最後の方、自分の意思じゃなかったけど、あれでよかったのかな？」

《ああ、あの子供も満足そうな顔だっただろう。さぁ、次はとうとう冥道霊閃との対面だ。気合を入れていけよ》

「わかってるって」

天華乱爪に言われて、僕は、最後に、子供の消えた方を見て微笑し

てから最後の門をくぐった。

魔界の国宝　冥道編　凄まじい妖気

「あのさ、最後の門をくぐってから随分経つけど・・・まだ？」
《我もここまで来たことはないのでな。よくわからぬ》
「・・・そっか」

多分、最後の門をくぐってから、きっと最低でも一時間は道なりに歩いている。なのに、一向に冥道の奥と言うものにたどり着けない。

「あのさ、そろそろ元の姿に・・・」
《犬神よ。バカなことを言うでない！その姿だからこそ苦しくもなんともないのだ。現に、あの時点で死にかけていた。それよりも奥に行った今、元の姿に戻ることは自殺行為だぞ》
「わかったよ・・・」

全身真っ白で、しかも背中に羽があると言うのは、やはり何だか変な気分になる。

第一、この羽って意味があるのかな？子供を送る前に、宙に浮いた時には羽なんか使わずに浮いてたのに・・・。

「あのさ、この羽を使って飛ぶことは出来るの？」
《当たり前だ。犬神のように歩いている奴の方が珍しい》
「だったら、早くそう言ってよ！」

取りあえず、羽で飛ぶと言うことを実践しようと思う。普通の天使は（魔光霊命様がエンジェルって言ってたから、最初はそう言ってたけど・・・。やっぱり、こっちの方がいいから）飛ぶらしいし。

しかし、犬神も人間も、空を飛ぶと言う単語からはかけ離れているから、どこをどう動かせば羽が動くかなどが、全くわからない。鳥は簡単そうに飛んでいるからって、実際は難しい。羽を動かすことすら難しいんだ。ましてや、空中でバランスを取るなんてもってのほか。

何とか羽を動かすコツをつかんだと思ったら、今度は空中でのバランスとの格闘が始まった。

羽を動かして、何とか宙に浮かぶ。そこまでは出来るんだけど、先に進むことが出来ない。何とかマンとかってさ、どちらかの腕を前にして楽々飛んでるけど、実際、ああはいかない。体を倒そうとするだけで真下に落ちそうになる。それで、慌てて羽の方に意識がいってしまうと言う悪循環が続き、中々上達しなかった。

それを見ている天華乱爪はと言うと、本人は笑いを堪えているようだが、丸聞こえだし、堪えていない。そんな声を聞きながら練習してるから、上達どころではないと思う。

「もういいや。こんなので時間を取ってたらまずい」
《もしかしたらだが、冥道の奥へは行けぬかもしれんぞ》
「どうして！」
《色々と面倒なことがあるかもしれん。もしかしたら、犬神の姿じゃないと通れないかもしれぬ》

「そっか。じゃあ、元に戻ろう」
《待て！死ぬぞ、いいのか？死んでしまうんだぞ！？》
「何で君が慌ててるのさ。いいよ、死ぬのは僕なんだし」
《もし死ななくても、もの凄い苦痛を味わうことがあるかもしれんぞ》

「大丈夫大丈夫♪」

本当は怖かったけど、そんな素振りを見せずに犬神の姿に戻った。
（これは、飛ぶよりも簡単だった）
でも、なんともない。どこが痺れるとか、目が霞むとか全くないし、頭が痛いとかクラクラするという症状すらない。ただ、いつも通りの健康そのものだった。

「何ともないけど・・・・」
《そうか、ならよかった。では、行くぞ》
「はいはい」

さっきまでしつこいくらい話して来たのに、何ともないとわかったらそっけなさすぎ。少しは僕の心配をしてくれたっていいじゃないか。

ブツブツ文句を言いながら冥道を歩いていると、見えた。今まで何もなかった道に、今までの門と同じくらいの門が。

あれが、冥道の奥に通じる門なのかな？それとも、あれは違うのかな？出来れば通じる門の方がありがたいんだけど・・・・。

その門は、遠くから見たら今までの門と同じくらいだったけど、近くに来てみると、二倍以上はあることがわかった。

その門は、僕の小さな力で押したところで開かないだろうと思ったけど、僕が手をつける前に、入って来いとばかりに自然と開いた。
自動ドアみたいだ。

自然と体に緊張が走り、足がガクガクしそうになる。ここに入った

だけで、もの凄い妖気を感じた。

きっと、ここの近くに冥道霊閃がある。そう確信出来た。だって、ここまで強い妖気を持っているのは、冥道霊閃くらいだと思う。

その恐ろしい妖気に怖気づく自分を奮い立たせて、ゆっくりと奥に進んで行く。奥には何もなく、前の門よりも更に大きな門があった。その門もまた、何もせずとも自然に開く。

僕は、いつ冥道霊閃と対面するのか気が気でない気持ちで奥に進むけど、全然辿りつかない。

でも、確かに近づいている。最初の時とは比べ物にならないくらい、凄い妖気が僕を引き裂こうとしてる。

今までで、「妖気に引き裂かれる」という思いをしたのは初めてだ。きっと、こんなことはもうないと思う。と言うより、ない方がいい。こんな怖い妖気は二度と浴びたくない。

多分、十個目の門の前に来た。これは確証じゃないけど、確実に近いと思う。この先に冥道霊閃がある。そう感じた。何とも言えない震えが体中に走ったんだ。

《きっと、この先に冥道霊閃がある。準備は出来ているか？》

「うん。大丈夫」

最後だけ門が開かないから、ゆっくりと開けた。思ったよりも軽くて、簡単に開けることが出来た。

開けた途端、凄い風と妖気が体に当る。きっと、人間や下級の妖怪

じゃ吹き飛ばされているか、もう息をしていないだろう。それぐらい凄まじい風と妖気だった。

こんなにも凄い妖気を発していると言うのに、まだ全然妖力が残っているようで、全く変わらない強大なペースで妖気を放出している。

僕は、そこに踏みとどまっているのが精一杯で、ほとんど動けなかった。

冥道の奥は、宇宙のように、星や正座が見えた。それは、今までと変わらない。でも、一番の違いは、中央にある天華乱爪と同じくらいの大きさの刀、冥道霊閃だ。冥道霊閃が、冥道の奥の地面（本当は地面なんかないんだよね。確かに踏むことは出来るけど、道みたいなものがなくて、宇宙に立っているような感じなんだ）に突き刺さって、黒い妖気を放っている。

僕は、顔を腕で隠すようにして、ゆっくりと、凄くゆっくり前に進む。全力を体にかけているのに、後ろに押し出されそうだ。だから、少しずつ進んで行くしかない。

近づくにつれて、体が切れる。きっと、凄まじい妖気を生身で感じているからだろう。目さえも明けていられないから、真っ直ぐ進んでいるのかすらわからない。

少しずつだけど、近づいて行く。きっと、ビデオで撮って早送りをしないと、進んでいるのかどうかわからないぐらいの遅さだ。でも、体にかかる負担は、進んでいなくてもかかるばかりだ。出来ることなら、さっさと抜いて、放出を食い止めたいところだけど、ガードを怠ったら、直ぐに死んでしまう。

足を踏ん張っていられるのも、もう少しな気がする。足にかかる負担だって相当なものだし、こんな強大な妖気を受けている体力にも限界が来ている。と言うか、もう限界！

でも、冥道霊閃との距離はまだ五メートル以上ある。

もうダメかと思った。足はガクガクしているし、息も上がって来た。こんな状態じゃ、もう無理だと諦めかけた。

その時、今までの思い出が蘇って来た。これは、走馬灯のように過ぎて行くって言うのかな？もうすぐ死んじゃうから蘇って来たのかな・・・・。

「うわぁぁぁぁ～～～！！！無理だ～～～！！」

「うるさい！黙って考えろ。そんな無駄な口を聞いているヒマがあったら、さっさと問題を解け！」

「凛君、僕は終わりましたよ。頑張って下さい」

「桜木だって、お前と同じ知能指数だが、終えることが出来たんだ。お前も出来るだろう？」

「無理だって・・・・」

僕は、大量の宿題の山に覆われて、泣きべそをかいてたんだよね。だって、問題が難しいし、何より多い。こんなの、今からいくら頑

張ってやっても、明日には間に合いそうに無いって思ったんだ。

「そもそも、なんでこんな時間になるまで宿題にとりかかろうとしないんだ！」

「だっ、だってさ・・・・二人が楽しそうだったから・・・・」

「俺達のせいにするな！」

「お願い！宿題手伝って！」

僕は、顔の前で両手を合わせると、頭を下げる。心からお願いしているつもりだ。

どうしてそこまでお願いしてるのかって言うと、今までは、ここまで宿題を大事に思ったことがないけど、明日宿題を忘れたら、内申に響くと担任の先生に言われて、それはまずい！と言うことなんだよね。

「宿題は、もともと一人でやるものだ。だから、俺は手伝わない。俺は眠いんだ。寝るからな」

「そっ、そんなぁ！」

亜修羅は薄情にも、僕があんなに頼んでいるのに、何のためらいもなく布団を敷くと、さっさと布団に入って僕等に背を向けてしまった。

「ちぇっ、もういいよ！薄情者！！」

「凛君、僕が手伝いますから」

「ありがとう。ごめんね」

それから何時間経ったかわからなかったけれど、いつの間にか机に突っ伏して眠っていたようだ。カーテンをあける音で目が覚めた。

まだ眠い目を擦りながら、欠伸をする。僕の向かい側では、桜っちが同じように机に突っ伏して眠っていた。

どうやら、僕等は勉強をしている途中に睡魔に襲われて、布団を敷いて寝る余裕もなく、力尽きたらしい。

「起きたのか。お前にしては早いな」

「早く起きて悪かったね。でも、まだ眠いよ。亜修羅と違って、夜中まで宿題をやったんだから」

「ふん、お前は何時間寝ても眠いだろ？」

亜修羅にそう言われて、僕はため息をつくと、しばらくその場でボーッとしていたけど、大きく伸びをして立ち上がる。

その時、机の上に鉛筆やノートがないことに気がついた。僕は、鞄にしまった覚えはないんだけど・・・・。

そう思いながらも、鞄を調べると、中にちゃんとノートがしまってあった。物がワープする訳でもないよな・・・と思いながら、何気なく宿題のページを開くと、思わず首を傾げる。

僕が絶対解けそうにない一問が、ちゃんと正しい公式で書かれていた。再び首をかしげて、自然と亜修羅の方を見る。

いや、まさかね・・・・。

僕がじっと見ていることに気がついたのか、亜修羅が振り返る。

「何だよ」

「いや、何でもないよ」

そう言って亜修羅に背を向けるけれど、ゆっくりと首を後ろに回して、再び亜修羅の様子を見た。すると、いつもは欠伸をあまりしない亜修羅が、何だか頻繁に欠伸をしているように見える。

それに、いつも低血圧でボーッとしてるところがあるけど、今回のは重傷で、制服のボタンを留めている途中で、まるで眠っているかのように一点を見つめて立っている。

これで、何となくわかった。誰が僕の宿題をやってくれたかってこと。よく見れば、途中から微妙に筆跡が違うから、僕の字を真似て書いたんだろうね。

いつもだったら、亜修羅に確かめるところだったけど、今回は、何も言わなかった。

どうせやってくれるなら、そんなにコソコソやらないで、手伝ってくれればよかったのにって思うけど、それが亜修羅には出来ないんだなって思って、自然と笑みが浮かぶのがわかった。

そうだ、帰らなくちゃ。僕のことを案じてくれる人がいる限り、僕

は死んじゃいけないんだ。

そう思うと、自然と勇気が湧いて来て、足も力が入るようになった。不思議だよね、仲間の力ってさ。こんな恐怖の中でも、その人達のことを思うと、顔に笑みが出来るのを、僕はありがたく思った。今の気持ちならやれる。二人は、目には見えない僕の中にいると思えるから。

「これから決戦が始まるよ。僕と冥道霊閃の根性、どっちが強いか勝負しようよ」

独り言のようにつぶやき、顔の前の腕を下ろした。当然、もろに冥道霊閃の妖気を浴び、吹き飛びそうになる。でも、吹き飛ばない。ボンドでくっつけたみたいに身じろぎすらしない。

それに、冥道霊閃の妖気は、確かにもの凄く強大なものだ。でも、前のような恐怖は感じられなかった。それよりも、俄然勇気が湧いて来る。

もう、器から零れ落ちているくらいなのに、止まる気配すら見せない。だから、あんなことを言えたんだ。

【根性？ふざけたことを言うな。もう私のことを止められる者は誰一人いない。それなのに、根性の話をするとは。自分の妖力と、私の妖力、どちらが高いかわかっているのか？】

不意に聞こえた声。天華乱爪の声とは違うなと思って、直ぐに冥道霊閃の声だとわかった。

「なんだ、聞こえてたんだ。じゃあいいや。当然、あんたの方が妖力は高い。でも、こっちは根性と言うよりも、粘り強いんだよ。だから、どっちが貫き通せるかって話」

【ふん、バカバカしい。私は勝手に妖力を吸い出されていい迷惑だ】

その言葉には一瞬驚いた。最初は、冥道霊閃を奪った奴がやったの

かと思っていた。だけど、そうではない。と言うことは、冥道霊閃本人がやったとしか考えられなかったんだ。

「じゃあ、僕が助けてあげる」

【無理を言うな。貴様などが私に触れようものなら、手が爛れるぞ。そんなことで済むかどうかもわからない】

「手が爛れようが吹き飛ぼうが、止めなくちゃいけないんだよ。僕はさ、そう言って来ちゃったし、人間界を助ける為にはそれしか方法がないんだから、僕には選択肢なんかないんだ。あんたを助けるのは、そのついでってこと」

【やってみるがいい。貴様が私を抜けるほどの妖力を持っていれば、抜くことが出来るはずだ】

僕の言葉に、少し気分を害された冥道霊閃は、それきり黙ってしまった。でも、僕にとってはそっちの方が好都合だ。ベラベラしゃべられるよりも、黙っていられた方が集中出来る。

少しずつ、にじり寄るように冥道霊閃に近づく。足を床から一ミリでも離したら最後。きっと、一番初めの門のところまで吹き飛ばされるだろう。

近づく程に、冥道霊閃の妖力の強さが増して行く。それと同じく、僕の中に溢れて来る勇気も増して行く。

勇気があると、なぜだか、体が勝手に行動してくれる。気持ちでは恐怖を感じるけど、体が進んでくれるから、どうにかしなくちゃという気持ちに切り替えられる。

残り一メートルぐらいになった。きっと、さっきまでなら吹き飛ばされて、とっくにズタズタになってたと思う。でも、今はあの時と覚悟が違う。これぐらいで吹き飛んでいたら、冥道霊閃に触ることは決して無理。

【貴様、本気で私に触るつもりか？腕が吹き飛ぶかも知れぬぞ】

「だから言ったでしょ？僕には抜くしか選択肢がないんだよ。決してあんたの為じゃないから。ただ、僕が人間界を救いたいと思っただけだから」

【私を抜いたところで、人間界が元通りになることはないんだぞ】

「・・・・・」

僕は、そこで歩みを止めた。何だか、勘違いをしていたような気がする。

冥道霊閃を抜けば、人間界は助かる。そう思いこんでいた。でも、違う。本当は、被害を食い止めるだけで、被害がなくなる訳ではない。なのに、いつの間にか視点を間違えていたようだ。だけど、これ以上被害を出してはいけない。

再び、ゆっくりと歩みを進める。無言のまま。

また何か言ったら、僕の決意をとんかちで叩き割りそうで、怖かったんだ。

ついに、冥道霊閃の目の前に立った。ここは、思った以上に凄い妖気の塊が充満していて、僕にとっては毒ガスがあるところと同じだった。それなのに、大きく深呼吸をした。体いっぱいに冥道霊閃の

妖気が入って来る。あまりいいことじゃない。でも、気持ちを落ち着けないとダメだ。

目をギュッとつぶり、ゆっくりと開く。そして、目の前の冥道霊閃に手を伸ばした。すると、冥道霊閃に触れる前に、結界みたいな何かに吹き飛ばされた。そして、そのまま隅へ。

「あなた、何をやっているの？私の邪魔をする気？」

突然聞こえた女の人の声に振り向く。そこには、とても太っているおばさんがいた。

きっと、女帝様だ。でも、邪魔って・・・・。

「冥道霊閃の力を放出しているのは、女帝様なんですか？」

「全く、何やってるんだか。あの役立たず達め。人を絶対通すなって言ったのに。ミイラ以外全員いなくなってるし。そのせいで、とんだ邪魔が入るところだったわ」

女帝様は、もの凄い妖気の充満しているところにいるのにも関わらず、涼しい顔をしている。（実際は、顔を真っ赤にしてはぁはぁ言っていた。でも、これってきっと妖力のせいじゃなくて、ただの太り過ぎで、歩いただけで熱くなっただけだと思うから）

「あの、聞いてますか？」

「なによ、あんたに答える義理なんかないわ。私は一番になるの。それだけよ。ふぅ、熱い。椅子を持って来てちょうだい」

誰に言ってるのかと思ったら、骸骨が四体、椅子を持ってやって来

た。
一瞬ぎょっとしたけど、僕に何をする訳でもなく消えて行った。女帝様は、冥道霊閃の前に座る。

「一番になるって？」
「私がこの世界で一番偉い者になるの。誰からも尊敬されて、うやまれるような。そうなると、この世界を壊すのが一番だと思ったの。世界を作った人なんて凄いじゃない。だからね、壊すの」

「そんなことしたら、沢山の人が死んじゃいます！」
「そんなの関係ないわ。さぁ、どこかに行ってちょうだい。私の邪魔はしないで」

随分と最低なことをする女帝様だと思った。外見は醜くても、心優しい人なら救いようがある。でも、この人は外見も性格もダメ。もう、救いようがない。

「何でそんなに自分勝手なことをするんですか！自分が偉くなりたいからと言って、世界を壊そうとするなんて。女帝様のせいで何人の人が死ぬと思いますか？女帝様は、冥界の秩序を守るお人なんじゃ・・・・・」

「お黙り！」

女帝様が、カッと目を見開き、僕を睨みつける。僕はその睨みで吹き飛ばされてしまった。

さっ、さすが・・・・冥界の秩序を守る人だ。にっ、睨みが凄い。
睨まれただけで吹き飛ばされちゃった。

「あんたに何がわかるって言うの？大切なものを目の前で失って、それでも、まだ許されなくて。そんな世界、私はいらないわ。何が女帝よ。女帝だからって、全て我慢する訳じゃないのよ。あんたも大切な仲間がいるらしいわね。だから、あんたをその大切な人の前で殺してあげる」

女帝様は恐ろしい笑い声を上げると、指を上に向けた。すると、画面が出て、映像が映る。一つには、人がいることがわかるけど、もう一つの画面には人がいることすらわからない。

「可哀想に。邪魔な妖怪のせいで気がつかないようだねぇ。気づかせてあげるから」

僕は動こうとした。でも、動けなかった。体を何者かに押さえつけられているように動かない。いつの間にか、冥道霊閃から発せられる妖気が少なくなって来ている。このままじゃ、本当にみんなが助からない。

しばらくしてから、画面の左側に骸骨に羽交い絞めにされた桜っちと、亜修羅のクラスメートの子。それから、見知らぬ男の子が映った。

「あれっ、凛君!?無事だったんですね!大変なんですよ、北極の方と南極の方の氷が溶けて世界が大洪水になって、今のところ日本は洪水になってないけど、もうすぐなるかもしれないんです!!」

桜っちが切羽詰った顔で言う。僕は、押さえつけられている何かを振り払おうともがくけど、がっちり捕まれて離れない。

「僕も、後もう少しのところまで来たんだ。でも・・・・」

「でも？」
「頑張るからさ」

今はそれしか言えなかった。女帝様はおどろおどろしい妖気を漂わせている。僕のかなう相手じゃない。それに、今は羽交い絞めにされて全く動けない。こんな状態で勝てるのか？無理だろうね。絶対無理に決まってる。でも・・・人間界が。

「さぁ、私の邪魔した刑を言い渡すわ。刑は、当たり前の死刑。さぁ、やっちゃって。思い切りいたぶるのよ。腹立たせた罰も上乗せで！」

そう言われた途端、体中が痛くなった。何かと思ったら、今まで見えなかった骸骨が、僕の体をしっかりと抑えて殴って来るんだ。骸骨と言っても、力はかなり強い。

あっと言う間に横倒しにされて、リンチ状態になった。冥道に来てから二回目のリンチ。

なんか、あんまりいい気分じゃない。でも、その気持ちよりも、自分が何も抵抗出来ないことに苛立ちを感じていた。

体中を思い切り殴られたり蹴られたりして、体中が痺れている。

そのおかげでどこを動かすことも不可能だ。頭さえも働かないし、目も明けていられない。何だか、麻酔をかけられたみたいに、あんまり痛みを感じなくなって来たし、眠くなって来た。

そう思っていると、ふと痛みが完全に消えたと思ったら、遠くの方で、みんながキャーキャー騒いでる声が聞こえる。それと同時に、

腕にかなりの痛みを感じた。きっと、何かで刺されたのかもしれない。でも、目を開けることも出来ない。だから、本当はどうなっているのか、実際はわからない。

僕が目を薄っすらと開けると、骸骨達の大群がこちらに迫って来る。みんな、カタカタと音を出して笑っているようだった。ああ、もう動けないし、眠いよ・・・・。

そう思って、僕は目を閉じた。

その時、懐かしい声が聞こえたような気がした。しかし、その人物はここにはいないはずだ。きっと、空耳だろうと思う。何だか眠いから、耳があんまりよく聞こえないし、見えもしないから。

でも、確かに聞こえる。何回も僕の名を呼んでる。

これは、幻か?それとも現実?そんな僕の考えを見抜いたかのように、その声が、今度ははっきりと聞こえた。

「凛!しっかりしろ!そんな骸骨ごときに負けるような奴かお前は!砕いてやれ!」

何だかよくわからないことを言われている気がする。

骸骨を砕く。ああ、そうか。骸骨を砕いちゃえってことか。

その声を聞いた途端、ぼんやりとしていた景色や音、その他のものがはっきりして来た。(意識もはっきりして来たから、痛いのはちょっときついけど)

「うん。わかった」
「さっさとそんな雑魚は倒せ！そんな奴らに苦戦するような弱い奴を、俺が仲間だと思うのか！」

僕は、怪我人に対しての言葉とは思えない言葉に、涙が出そうになった。ずっと行方がわからなくて、無事だってわかった。それに、仲間だって思っててくれて・・・・。それだけで十分だよ。

何だか、今までの傷がすっかり治ったみたいに、綺麗さっぱり痛みが引いた。

そうだ、女帝様は、僕をみんなの前で殺そうとした。でも、僕はそう考えてはいけない。みんなが見守って、応援してくれるから、頑張ろうと思えるんだって。

「そっか、僕は仲間なんだね。そっか・・・・」
「おい、そんなしみじみしてるんじゃない！」

僕がその言葉を感じている時に、亜修羅の声が聞こえる。僕は、怪我をしたとは思えないほど絶好調だった。だから、周りにいる骸骨を全員倒した。ものの数秒で。

「僕を仲間だって認めてくれてたんだ！！」

僕が、亜修羅の方を向いて嬉しそうに言うと、本人は恥ずかしそうにそっぽを向いてしまった。

「うっ、うるさい！そうなんども言わせるな。それよりも、さっさと帰って俺を助けに来い！」
「了解！」

体の中で、力が溢れそうな程湧き上がって来るのがわかる。ふと、刺された方の腕を見ると、傷が一つもなかった。

あれ？どうしちゃったんだろう？まぁ、後でどうにかなることだしね。今はとにかく、女帝を倒して、冥道霊閃を止めることに専念しないと。

僕は、ゆっくりと女帝に向き直ると、天華乱爪を向ける。

「世界を滅ぼすことなんかさせない。仲間に誓って言う。これから、僕があなたを倒す！」

しばらくの沈黙が流れた。それから、急に女帝が笑い出した。

「ほっほっほっほっ。骸骨の幻影に引っかかるような奴が、私の幻影を見破れるとでも思っているの？」

「げっ、幻影？」

「そう。あなたは幻影を見させられていたの。本人の心の負担などが、幻影によって映されるの。あなたは、相当無理を感じてる。だけど、一人で背負い込むことしか出来ない。だから、相当うなされてたわ。そのまま本当に殺そうと思ったのに・・・・」

女帝がギロリとスクリーンの方向を睨む。恐ろしい睨みで、それを向けられたのは僕じゃないとわかっているのに、寒気がした。

「あいつが邪魔をした。許せない。まずはこいつ等を殺してから、あんたを殺してあげる」

今度は僕じゃなく、画面に映っているみんなが危険な状態になってしまった。今まで羽交い絞めにしていた骸骨が、女帝の合図で首を絞める。

「やめろ！僕を先に殺せ！！」

「あら嫌だ。そんなに本気にならなくてもいいんじゃないかしら。どうせ、妖怪や人間なんて、この世には沢山存在する。その中から代わりを見つければいいじゃない？でも、自分はただ一人。まさか、自分の命を犠牲にして、人の命を救おうとするなんて・・・・。救

いようのないバカね」

「女帝、あんたは大切なものを失ったと言っていた。それは何だ?」

急に心が静かになり、やけに落ち着けた。体の中の力がドンドン大きくなって行く。意識をしないと、溢れ出しそうだ。

「あんたに関係ないわ。あんたにも、私と同じ気持ちにしてあげる」

「そうやって人のことを苦しめて、なんになる?人と自分を同じ気持ちにして何が楽しい?亡くなったあんたの大事な人が、それで喜ぶと思うのか?」

僕の言葉に、一瞬怯む女帝。力が弱まった隙を見て、みんなが骸骨を突き飛ばす。

「うるさい!だから、あんたに何が・・・・」

「わかるから言ってるんだ!僕だって、両親を殺された。あんたと同じ境遇だ。それに、人を陥れようとしたところも同じだ。でも、わかった。いくら最低な人でも、その人の変わりはいない。人を一人殺すのは大きな罪だ。それがわかった時にはもう何人も殺って来た後だった。女帝、あんたはもう何人も人を殺した。これ以上罪を重ねるな。全部を破壊しつくしてから、自分のやったことの恐ろしさに気づく。しかし、今更慰めてくれる奴なんかいないんだぞ?」

「いいのよ。私は一人でいるのがいいの。もう、誰とも関わりたくないの。その人を失った悲しみを、もう二度と味わいたくないの。だから壊すの。私と関わらないように、全部壊して、殺すの。冥道霊閃は、本当に全部の力を引き出せば、地球一個なんか簡単に壊せる。だから、もう邪魔しないで」

女帝の顔がゆがみ、鼻を啜る。僕は、何だかひとりでに口走っていたようで、あまり、言った言葉を覚えていない。

もう間に合わないかもしれないと思って焦る。地球が一個壊れてしまうなら、日本と言う小さな国なんかは、もうあっと言う間だ。それに、僕がダラダラしていたせいで、他の人が、何人犠牲になったのだろう。

冥道霊閃の妖気は、もうほとんど出尽くしていると言っていいだろう。これで、もう地球は壊れてしまうのか。本当に・・・・。

《犬神よ、あの女を説得するにはこれしか方法がない。我を使え》

天華乱爪が、僕の元に転がって来る。何だか嫌な予感がした。でも、やらないといけないと言う気がした。

「わかった。何をやればいいのかもわかった」

《そうか。なら、始めよ》

僕は、犬神の姿から、天使の姿になる。何て言うか、人間から犬神の姿に戻る時のような感覚でなれたから、もう、体が慣れてしまったのかもしれない。

「死海から蘇りし使者よ、己の体に、一時の生命をもたらす」

自然と頭に浮かんで来た文字を読み、持っていた天華乱爪を天に突き上げる。すると、何もしていないのに体が宙に浮き、宙に天華乱爪を刺し、グルリと円を描く。

すると、円を書いた線が白く光ったと思ったら、なくなった。そして、そこから何かが降って来た。よく見ると、男の人だ。何だか、勝手に動いていたけど、何が起こるのか全くわからないんだよね。

「プリウス！」

今まで、鼻を啜って泣いていた女帝が、勢いよく立ち上がって、男の人の名前を呼ぶ。

もしかして・・・・夫さんとか？だったら、正反対だ。太り過ぎと、痩せ過ぎと。

「アスラ！」

男の人が、走って女帝の元に近づく。女帝も立ち上がり、ゆっくりと歩く。そして、お互い嬉しそうに再会を果たした。

状況の飲み込めない僕達は、その光景を、ただ見ているしかなかった。男の人を連れて来た僕でさえ、意味がわからない。

「ずっと空から見ていたよ。でも、どうして地球を滅ぼそうとするんだい？君らしくないじゃないか」

「だって、もう嫌なのよ、こんな世界。人のことも考えないで、勝手に大切なものを奪って行くこの世界なんて、滅びればいいのよ」

「そんなことしちゃいけないよ、アスラ。私は、望んで死を選んだんだ。決して殺された訳じゃないよ」

「どうして・・・・」

「アスラを殺すと言われたんだよ。私は、必死に頼んだ。アスラを

殺すなら、私を変わりに殺してくれって」

「なんで？」

女帝が泣きながら聞く。僕は、やっと、ここら辺で状況が飲み込めた。きっと、僕が、女帝の死んでしまった夫さんを連れて来たと言うことだ。

「人間と言うものは、人の為に命を投げ出す生き物なんだよ。私も、その気持ちがわかった。自分は死んでもいいから、大切な人だけは生きていてもらいたい。きっと、死んだばかりの頃は悲しむかもしれないけれど、それでも、私は、君に生きていてもらいたかったんだ」

「そんな・・・・」

「だから、世界を恨んじゃダメだよ。世界が元からなかったら、私達はめぐり合うことが出来なかった。私達がめぐり合えたのは、この世界のおかげなんだ。その世界を恨んではダメだよ。これは、私のせいなんだ。悲しい思いをさせて悪かったね。アスラ」

女帝から、さっきまでの妖気と、むき出しの殺気は消えていた。やっと納得してもらえたようだ。

「やっと会えて私も嬉しいけど、もう少しで行かなくちゃならない。アスラ、もう二度とこんなことをしてはいけないよ」

「はい」

女帝は、僕の方に近づいて来るプリウスさんをずっと見ていた。心を決めて見送るんだと思う。

「アスラに会わせてくれてありがとう、天使君。これで、私の役目は果たせたよ。世界の人々は、無事助かるといいね」

「あっ、はい。ありがとうございました」

穴に入って行く前に、プリウスさんが僕に言った。僕は、一応答えはしたけど、かなりの人が命を失っていると思う。もう、取り返しのつかない程の人の命が。

プリウスさんが入って行くと、穴はひとりでに消えて、残ったのは沈黙だけだった。

僕は静かに下に下りると、犬神の姿に戻った。何だか、今までのことが何もなかったかのように、静けさが漂っている。

不意に、女帝が椅子に座り、結界を解いた。

「私のことを殺しなさい。そして、冥道霊閃を抜いてください。私のような罪人は、死を持って償うべきなのです。何人もの人を殺し、世界を壊そうとした。その罪は、計り知れないほど重いものでしょうから」

僕は、無言で女帝に近づく。ちゃんと、天華乱爪を持っている。

スクリーンは真っ暗闇になっていた。声も聞こえないし、何も見えない。きっと・・・・。

僕は、女帝めがけて天華乱爪を振り下ろした。女帝は、目をギュッとつぶっている。

「女帝、目を明けて下さい」

僕に言われて、そうっと目を開ける女帝。そして、僕の両手に何もないと見て、不思議そうな顔をする。

「さっきの剣は？」

「剣なら、振り下ろす際に床に投げました。僕は、もう人を殺さないと決めました。だから、貴方を殺すことはしません。その代わり、ちゃんと罪を償ってくださいね」

「はい」

素直にうなずく女帝に、僕は、あの子供にやった時のように、裁判の間と言うところに女帝を送った。変な気分はした。裁判の判定を下す女帝が裁判を受けるなんて。でも、どこに連れて行っていいのかわからなかったから・・・・。

やがて、冥道の奥にいるのは僕だけとなった。全てが静かになって、わずかな音さえも聞こえない。これが、完全に世界がなくなった音。もう直ぐ、この冥道もなくなるだろう。

ゆっくりと冥道霊閃に近づくと、力を出し切って、ただの刀に近い冥道霊閃を抜いた。その時、シュッと言う音が聞こえたけれど、それ以外は何の音も聞こえなかった。

僕は、不思議と、冥道霊閃を見て笑った。何を思って笑ったのかわからない。

絶望しきっていて笑ったのか。それとも、頭がおかしくなったのか。誰も答えを知る人はいないと思う。自分でだってわからないんだから。

ただ一つわかることは、その笑みは乾いた笑みだと言うことだけだ。

冥道霊閃を元の鞘にしまうと、今まで硬く閉ざされていた門が一斉に開き、僕の行く道を開けてくれた。

最終的に、誰が冥道霊閃を使って冥道に入って来たのかはわからなかった。きっと、僕から奪った人だろうとは思うけど、その人は途中で力尽きた。それを、女帝が拾ったのが始まりかもしれない。

何の物音もしない静かな冥道を歩く。行きの時に襲って来たゾンビの姿も見えない。あの時は焦っていて、とてもうざったらしいと思ったけど、ここまで静かだと、ある意味怖い。冥道の道を歩く音さえも聞こえない。

これが、完全なる無。音も、気配も、何も感じない。僕は、悔しいと言う気持ちすらなくなっていた。地球がなくなった。そう言う風に思うけど、何とも思えないで、そのまま心に残っている。心さえも失ったゴーレムのような気分だった。この冥道の先に待つものはなんなんだろうって、とても怖くて、このまま冥道に留まってしまおうかと言う気にさえなった。

しかし、足は、僕の気持ちを聞かずに歩き続ける。

行きは長く感じた道も、今ではとても早く感じた。もう、冥道の入り口の前に来てしまったんだ。向こう側は見えない。でも、地球以外のどこかの惑星だと思った。地球は滅びてしまった。僕が遅かったから。

中々一歩を踏み出せずにいたけれど、やがて、意を決して、一歩を

踏み出した。ギュッと目をつぶり、一歩目を踏み出す。僕が出て行くと、冥道は消えた。それはわかった。でも、後のことは目をつぶっていてわからなかった。

草木のにおいが一面に広がっている。そして、土のにおいもした。きっと、草原みたいなところなんだろうなと思った。でも、目は硬く閉じたまま、開かない。きっと、怖いんだ。

だけど、嫌がる心を無視して、目をこじ開けた。一番最初に見たのは、大きな木。それから芝生。

でも、それ以外は何も見えなかった。辺り一面に、同じような木が植えてあって、囲いを作るように立っていた。

木のことはあまりよく知らないけど、多分、においからして桜だと思う。辺り一面に桜の木が立っているんだ。

まるで、桜公園みたいだ。地球以外にもこんなところがあるんだな・・・。

僕は、大きく深呼吸をした。僕以外に、誰もいないような静けさがずっと続いている。

そこに、沈黙を破る誰かの声が聞こえた。

「ぼけっとつっ立ってるなよ」

「その言い方は・・・・・」

僕は、ビクッと体が反応するのを感じた。いないはずの人の声が聞こえる。これは、きっと空耳だ。それか、似たような声の人が会話をしてるんだ。

僕は、ぎこちない動きで、後ろを振り向かずに歩き出した。また、さっきの声が聞こえる。

「無視すんな！」

「待ってください」

声と同時に、芝生を踏んで、こっちに歩いて来る足音が聞こえる。

僕は、まだ、昔のことを引きずっている自分を振り払おうと、頭を振って走り出した。涙が出て来るけど、無視。

後ろから追いかけて来る声も聞こえるけど、無視。全部僕が作り出したことだ。早く諦めろ、僕。思い出したって仕方ないじゃないか。

その時、腕をつかまれた。そのまま、僕は、その人達に引き止められた。後ろを振り向かない。と言うか、振り向けない。これ以上、自分の頭の中の映像に惑わされてはいけない。これも幻だ。つかまれているのは、きっと誰か違う生き物につかまれているんだ。

そう思っていた。でも、やっぱり振り向きたくなって、振り向いた。そこには、二人がいた。でも、これは本物じゃない。だって・・・。

僕が困惑している時、肩をトントンと叩かれた。今度は即座に振り返る。そこには、冥道の底に落ちていた時に質問をして来た、魔光霊命様がいた。

「犬神、貴方の気持ちがわかったの。だから、私も全面的に協力しようと思ってね」

「・・・わかりません。ここはどこですか?あの二人は誰ですか?」

「ここは地球。そして、二人は貴方の大切な人。貴方が頑張っている間、私も頑張っちゃった♪信じられないなら、見てみる?」

魔光霊命様が指を鳴らすと、スクリーンが出た。そこには、色んな人が映っていた。白人の人もいれば、黒人の人も。僕らと同じ黄色人種の人もいる。世界各国の人が、かなりの大騒ぎを起こしていた。と言っても、喜びの大騒ぎだ。

「貴方が頑張ってるから、私は、この事件で人が死んでしまわないように人を助けようと頑張ったの。それで、人は全員無事。一人も怪我をしないで済んだし、もちろん、地球も何とかなったわ」

「じゃあ、誰も死ぬことがないまま終わったんですか?」

「そうよ」

「じゃあ、二人も・・・・」

「本物よ」

僕は、そう言われてグルンと後ろを振り返った。そこには、今までと全く変わらない二人がいる。本物。本当に全く変わっていない二人がいる。

「ったく、人が面倒なのを堪えて迎えに来てやったのに、何で逃げるんだ?」

「修さん、本当のことを言ったらどうですか?僕が助けに行った時に、ここに迎えに行こうと、僕より早く言ったのは修さんじゃないですか」

「バカ!言うな!アホ!」

僕は、無言で二人のやり取りを見ていた。本物の二人だ。何の代わ

りもない、いつも通りの二人。

「ただいま」

僕がそう言うと、二人は言い合いをやめて笑う。

「お帰り」

僕は、二人に駆け寄った。二人も、僕の方に近づいて来る。

僕は、目の前にいる二人を見て、心から安心した。よかったと言う気持ちがこみ上げて来て、泣きそうになる。

「お前、泣くなよ」

「だって、二人が生きてたって思うと、嬉しかったんだもん！」

「僕も、凛君が無事に帰って来てくれて嬉しいです」

「ありがとう！」

僕は、泣きじゃくりながら、二人に何度もお礼を言った。

僕は、弱くて臆病で仲間に頼るようなことしか出来ない。でも、僕にだって出来ることはあるはずだ。

今の僕に出来ること・・・・。それは、二人に精一杯お礼を言うこと。

僕のわがままに答えてくれた二人に、「生きててくれて、ありがとう」って。

休憩タイム　ドッジボール大会開催！

俺がいない間に、随分なことを言われたことはわかっている。それは誤解だ。それだけは言っておこう。

さて、今は何をしているかと言うと、ドッジボールをしている。なぜドッジボールをしているのかと言うと・・・・。

「突然ですが、これからドッジボール大会をします。相手は桜道中学校の三年生です。場所は、ここの校庭では狭いので、向こうの校庭で行うことにします。では、他のクラスはもう行っているので、行きましょう」

と言う担任からの言われで、納得もしないまま、桜道中学に行かさ

れる事になった。急にドッジボールと言われても、あまりわからない。と言うか、そもそもドッジボール事態を知らないんだ。どうやってやればいいのか。

「ねぇ伊織君、ドッジボールって毎回やるんだって。うちの高校の一年生と、向こうの三年生が。一種の行事みたいなものなんだって。なんでも、うちの学校の校長と、向こうの学校の校長が兄弟で、仲が悪いんだって。だから、毎年どっちの生徒が強いかってやるらしいよ」

「ああ、そうなのか・・・・」

九月だから、決して熱いはずではないのに、ベタベタくっついて来る奴がいるから、とても熱い。俺が学校を休んだ期間は、そんなにないはずだ。その間の記憶はぶっ飛んでいるが、桜木に助けられて、無事、見知らぬところから出て来ることが出来た。学校に登校したら、多くの奴らが近づいて来たが、すぐにひいて行った。なのに、この女だけは、金魚のフンも顔負けなくらい、しつこくくっついて来る。

「校長先生の問題を生徒にさせるのはどうかと思うんだけど、どう思う？」

「さあな」

女と目を合わせないように、目の前の信号を見る。少しでも目を合わせたたら、どんなことになるかぐらい簡単にわかる。信号は赤のまま、中々青に変わらない。苛立ちを感じる程赤のままだ。

やっと青に変わり、信号を渡る。その時、後ろから視線を感じた。ふと後ろを振り返ると、見知らぬ女がこちらをじっと見ていた。大

して変な気は感じないが、あまりいい気分な訳がない。

すると、こちらの考えがわかったかのように、女がやっと見るのをやめた。それには、ほっとため息が出る。人に見られることがどれだけ嫌か、誰だってわかるはずだ。しかも、知らない奴に。

「どうしたの？」

ふと、今度は知っている女の視線を感じて、悪寒が走る。俺にとって、こいつは恐怖なのかもしれない。普通の人間の女を恐怖と思う妖怪は変だが、その言葉が一番適している。

「・・・・」

無言で女の横をすり抜ける。そして、いつもなら、進んで列の後ろの方に行くが、今は、出来るだけ前に行きたかった。恐怖を追い払うように。

ズンズンと前に行き、やっと心が落ち着いたところで、前の奴の後につく。

ドッジボールのドッジが避けると言う意味なのは知っているが、ルールなんか知らない。

ドッジボールとはどう言うものなのかと考えていると、見覚えのある学校に着いた。文化祭の時に、思い切り面倒なことに付き合わされたことのある学校だ。

今でもあの時のことが鮮明に思い出され、思い返すと腹立たしいことばかりだった。しかし、今はドッジボールをやりに来たのだ。そんなことを考えても仕方がない。

列に続いて校門を通り、校庭に入る。そこには、すでに、ここの学校の三年生が全員と、俺の学校の一年、二クラスが集まっていた。校庭には、ど真ん中に大きな線が引いてあるだけで、それ以外は何にも書かれていない。縦の線はあるが、横の線はなしと言うことか。

「それじゃあ、上を脱いで、ブラウスの状態になって下さい。上着を着てはやりにくいと思うので」

担任に言われて、渋々上着を脱ぎ、そこら辺において置く。校舎の方から視線を感じる。今は授業中だと言うのに、一、二年生が、各教室の窓際に集まって、校庭を見下ろしている。

それから、ここの学校の教師に集められ、ドッジボールのルールを知った。簡単なルールで、ボールを避けるか、当てるかをしてればいいだけの話だ。

俺が説明に納得していると、どうやって来たのか、凛と桜木が隣にいた。

「ドッジボールだよ。何だかわくわくするなぁ」
「お前等、どうやってこっちに来たんだよ?三年はあっちだろ?」
「ああ。一年生の偵察に行って来いって言われてるから大丈夫。バレても」
「本当か?」

凛に言われると、何だか嘘らしく聞こえる。そもそも、話自体が嘘らしい。信じろと言う方が無理があると思う。

「はい、本当です。でも、こちらは作戦を立てないみたいですね。

こっちは、しつこいくらい立ててるんですけど・・・・」
「こんなものに作戦なんかいらないはずだ。避けるか当てるかのどちらかの動きしかしないんだ」

「はい、でも・・・何だかよく分からないんですけどね」
「亜修羅、絶対僕達が勝つからね。今年の三年生は強敵ばっかりだよ」
「ああ、そうかー。凄いなー」

棒読みで驚いてみせる。これ以上凛と話していても無駄だと思い、担任の言葉に耳を傾けた。

「今年の三年生は強敵だぞ。みんな、昼休みにドッジボールをして、特訓をしていたらしい。特に注目なのが五人いる。この、五人の柱を崩せば後は何とかなるだろう。まず、一人目は、投げは弱いが、避けが中の上くらいの、高宮。投げは強いが、避けが中の下くらいの郁末。投げも、避けも中の上くらいの浅塚。今言った三名は、まだマシな奴らだ。残りの二名は、きっと普通の奴らじゃ当てることは不可能だ」

担任は、そう言って苦虫を噛み潰したような顔をする。俺は、そこでピンと来た。これで、凛の言っていた言葉がわかる。

「まぁ、取りあえず名前を言うぞ。投げも上くらいはあるけど、避けは凄すぎる桜木。最後の一人は・・・・」

担任は言葉を言う気さえ失せたような顔をする。そして、偶々こちらを見てギョッとしたような顔になった。当たり前だ、恐ろしい奴らが二人ともこっちにいるからな。

凛は、しばらくブツブツ言っていたけど、担任の持っていたファイルをひったくると、自らの自己紹介を始めた。

バカだ、あいつ・・・・。

「先生が言った最後の一人は、僕、丘本宗介。校長先生から『期待の星』って呼ばれてる。でも、そんなに強くないから安心して。それに、こっちには強力な助っ人がいるしね・・・・」

凛がわざとらしくこちらに目を向ける。一斉にみんなの目が俺の方を向き、なぜか納得するような表情を作る。

「伊織修。僕達のところでも、要注意人物と見なされてる人物だからね」

ご丁寧に、俺の解説までし終えた凛は、満足げに帰って行った。

なぜ、俺の身体能力をあいつらは知っているんだ?と言う疑問があった。しかし、それもすぐに解決。きっと、凛が言ったのだろう。あいつ、人に迷惑かけることしかしないな。

「とっ、とりあえずそう言うことだ」

担任は動揺しながらも、話を締めくくり、口を閉じた。それと同時期に、向こう側も話が終わったようで、こちらの方を向く。

「両者の作戦が終わったようなので、各校長先生から応援のメッセージを頂きます」

向こう側の教師が勝手に言うと、いつ来たのかわからない校長が二

人立っていた。どちらとも、どことなく似ている。兄弟だから、当たり前か。

校長は、我が校が必ず勝つと、相手の学校に言いふらしただけだった。応援メッセージも何もない。ただ、喧嘩を売っただけだ。バカらしい。何でこんなバカな戦いに巻き込まれなければならない・・・。

呆れながらも、仕方なしにコートの外側に立つ。

チームは学年で全部混ぜた後、三等分すると言うもので、違うクラスの奴も同じチームになるかもしれないと言うことだった。三クラスあるうち、どちらが多く勝てたかによって勝負が決まるらしい。そして、今から始まるのは、一回戦目。俺は三回戦目に出ることになったから、ぼんやりとドッジボールを見ていることにした。

コートの中では、既に一回戦に出場するチームがスタンバイしており、教師の笛の音と共に、学年の代表がジャンプボールをし、ゲームが開始した。

すると、また、凛と桜木が来た。こいつら（と言うか、主に凛だな）は、どうして俺にそんなにくっついて来るんだ。仮にも敵同士なのに、そこまでくっついていたいのか。

「なんの用だ？」

「何回戦で出る事になったの？」

答えるのももどかしく、指で三の文字を作る。それを見てガッツポーズをする凛に、俺は、逆に肩を落とした。

こいつと戦うなんて・・・・。一番めんどくさい奴を相手にしたな。まだ、あのしつこい女の方がマシに見える。

それから、グチグチと色々なことを言われながらも、それを上手く受け流し、ドッジボールを観戦する。大体のことはわかった。これならいい線は行くだろう。しかし、弱過ぎる。なぜ、ここまで弱いのか不思議なくらいだ。

やっと二回戦が終わり、三回戦が始まろうとしている。今のところ、一勝一敗。だから、俺等の勝負で勝ち負けが決まる訳だ。あまり期待されても困るな。けれど、やるからには勝つしかないな。

休憩タイム　勝負の結果は・・・・

俺らがコートに入って行くと、今まであまり歓声があがらなかった校舎の見学者から、歓声が上がった。

きっと、凛達に向けられたものだろう。凛は、それに応じるように親指を立てて、歓声に答える。

「では、ジャンプボールから始めます。ちなみに、ボールを取った側は、ジャンプボールをした人には、約五秒の間当ててはいけません。では、はじめ！」

審判を務める教師が笛を吹き、ボールを宙に飛ばす。最初にボールに触れたのは、三年生側だった。ボールはそのまま、三年生側に落ちる。

そのボールを拾ったのは最悪なことに、凛だった。真っ先に俺を狙って来るかと思ったが、そうではなかった。かなり速いスピードのボールで、まずは一人を外野送りにした。

そのボールを拾ったのは、クラスが別の奴だ。そいつのボールは速いが、凛に楽々避けられ、後ろのめがねに命中。と言っても、桜木とは違う奴のことだ。

今のところ、両陣とも外野に四人。内野に三十二人と言う人数だ。まだ勝負はわからないが、これからドンドン決まって行くだろう。

校舎にいる生徒から歓声が上がる。またもや、凛が同時に二人の人間を外野送りにしたのだ。そして、こっちの投げたボールは外れた。

そのまま、ボールは外野の方へ行き、外野の奴らが投げる。しかし、そのボールは外れ、またもや凛の手に納まる。

そのような悪循環が続き、圧倒的な差でこちらがピンチとなった。どれくらい圧倒的かと言うと、こっちが俺を除いて後五人。向こうは、未だ二十七人もいる。これは、絶対に負けたと思う。

しかし、勝負は賭けと同じで、いつ逆転するかわからない。だから、諦めるな。そろそろ俺も避ける担当じゃなくて、当てて行こうと思う。

そんなことを思って気を抜いた直後を、凛に狙い撃ちにされた。無残にも当てられ、俺はもれなく外野に送られた。

そんな俺を、他の奴らは自分のことを棚に上げ、ブツブツ文句を言っている。凛の方を見ると、笑われた。

そこで、キレた。自分達は下手なくせに、人が当ったら文句を言う奴らにも、凛にも、無性に腹が立った。

こうなったら、絶対に勝ってやる。今まで、あまり起こらなかった闘争本能が爆発した。

しかし、爆発はしても、中々ボールを取ることが出来ない。みんな、自分が内野に行きたいが為に必死だ。多少、高一ぐらいになったらドッジボールなんてバカらしいと思う奴はいるだろうと思っていたが、それは、俺ぐらいしかいないらしい。みんながみんな、必死にやっている。

「伊織、何をしている！さっさと三年生を当てて、内野に入らんか

！！」

一人の教師がそう怒鳴る。もう、我慢出来ない。なぜ、俺ばかりこんな思いをしなくてはならない？
どれもこれも、あいつのせいだ・・・・。

ボールが外野に飛んで来た。しかし、取れなかった。

「ボールを貸せ」
「でも、俺が・・・・」
「いいから」

押さえきれなくなった怒りを感じてか、そいつは素直にボールを渡した。それから、急いで傍を離れる。

俺は、取りあえず適当に弱そうなやつを狙い、見事命中した。これで、内野に入ることが出来る。それからだ。本当の勝負は。

しかし、人数は減るばかりで、内野には残り二人だけとなった。しかも、残りの奴は投げることも出来ないし、避けるのが何とかと言う運動神経がなさ過ぎの奴だった。でも、まだ一人よりはマシだ。

三年生側の内野の人数も、かなり減って来て、七人になった。その中に、やはり奴らは残っている。投げるボールを避けて、後ろにいる奴らに当たると言うことだった。

校舎からの応援が一層うるさくなる。それが、無性にムカついて、うるさかった。しかし、気にすることはない。あいつらさえ倒せば終わる。

残りの五人は（桜木と凛を抜いた人数）、結構手ごわかったが、何とか当てることが出来た。
そして内野には、残り二人ずつ残ることになった。

「おい、お前は避けるのに集中しとけよ。投げるのは俺がやるから」
「ああ、わかった」

名前さえ知らない奴に話しかけるなんて、滅多にないことだ。しかし、今は勝つことしか頭にない。凛達に負けたら、一生言われ続けることになるだろう。

今、ボールは一年生側の外野にある。そのボールは、二人に避けられ、こちらに飛んで来た。それを取って、すぐに投げ返す。凛はひょいっと避けるし、桜木はギリギリのところで避ける。やっぱり、尋常じゃないよな、あいつら。

今度は、凛が投げて来る。今のところ、桜木が投げてくるのを見たことがない。ほとんど凛に取られているんだろうな。

ボールをすれすれのところで何とか避ける。もう一人の奴も、何とか、本当にギリギリのところで避けた。

そんな、どちらも引かない攻防が続く。（いや、攻避けか）観戦している生徒も、外野にいる奴らも、校長もいい加減飽きたのか、ブーイングを始めた。

こいつら、妖怪だったら無事じゃ済まさない。全治三ヶ月ぐらいの傷は最低でも負わせてやる。

そのブーイングに耐えかねた校長が、試合をやめさせた。最終的に

はじゃんけん勝負になり、（これは、校長同士がやった）三年生側の校長が勝った。これじゃあ、今まで頑張った俺らのことはどうなるのか・・・・。

熱が冷め、やっと冷静になった俺は、そうは思うけど、あまり怒りは感じなかった。ドッジボールぐらいで燃えていた自分がバカらしく思えるんだ。

それから、校長の話があり、やっと学校に戻ることが出来た。

しかし、いつの間に残りの二時間を使い切っていて、学校に帰ったら、すぐに帰り仕度が始まった。

担任が、今日のドッジボールのことや、明日のことなどを手短に話した後に帰る事になった。と言っても、掃除を終えてからだが。

今週の掃除当番は体育館で、廊下の突き当たりにある体育館まで行かなくてはならない。先週は教室だったから、移動をすることはなかったのだが、今週から変わった。めんどくさい。

体育館の中では、すでにバスケ部が練習を始めている。と言うことは、裏のところを掃除するだけでいいらしい。先に来ていた奴らがほうきで短い廊下を掃いている。

いつもうるさく付きまとって来る女がいない。きっと、ゴミを捨てに行っているんだろう。その間に、自分の係の場所を掃除して行こう。

俺の係の場所は、男子更衣室。たまに人がいるから、ノックして入れと体育の教師に言われているが、見られてまずいものではないと

思うので、ノックなしに入って行く。

今日は珍しく人がいたが、一礼をすると、さっさと掃除をして出て行く。

掃除と言っても、ゴミが落ちていたら拾い、トイレットペーパーを確認するだけの大した作業がないものだ。

男子更衣室から出て、廊下に出た時、ゴミ捨てから帰って来たあいつとはちあわせした。

まずいと思い、急いで鞄をつかむと、足早に体育館を出て、靴をなんとか履き替えてから校門を出る。

あの女とは席が近いから、同じ班だ。と言うことは、「同じ班」＝「毎回同じところの掃除をする」と言うことだ。だから、掃除が終わると、すぐに一緒に帰ろうと話しかけて来る。だから、いつも何とか撒いて来ているのだ。

校門を出たところで、今さっきまで一緒にいた二人が待っていた。学校の帰りは、いつもこいつらが迎えに来るから、いつも一緒に帰って来る。

「一緒に帰ろ！」

「ここまで来たら、家まで道が一緒なんだから、帰るしかないだろう」

「そうだね」

こいつ、絶対それを見越してるなと毎回思うのだが、一緒に帰って来る。一人で帰る方がいいが、ここまでされて断る気力は、今の俺

にはない。

「今日のドッジボール、最終的に校長先生のじゃんけんで勝負が決まっちゃったね」

「ああ、あれは最悪だ。校長に付き合わされた挙句、校長のじゃんけんのせいで負けた俺らの気持ちを考えてみろ」

「いや、僕らに言われてもさ・・・・」

偶々公園の前を通った時、バイオリンの音が聞こえて来た。子供が弾いているようで、かなりたどたどしい。

「ねぇ、ちょっと公園に寄ってもいいかな?」

「ああ、勝手にしろ」

そう言って、その場にとどまろうとした俺を、凛が、「何してるの?」と言いたげな顔で引っ張って行く。どっち道、俺は連れて行かされるらしい。

嫌々ついて行くと、公園のベンチに、十歳ぐらいの子供がバイオリンを持って座っていた。その顔には、絶望の色が浮かんでいるのが伺える。

「上手く弾けないの?」

「うん、どうしても弾けないの。お兄ちゃん、弾ける?」

「うん、まぁね。大して上手くはないけどさ」

凛はそう言いながら、子供からバイオリンを受け取ると、弾き始めた。

意外だった。凛がバイオリンを弾けるなんて。しかも、上手い。バイオリンの先生になれるんじゃないかと言うぐらいだ。

凛が弾き終わると、いつの間に集まったのかわからないが、人だかりが出来ていた。その人達が大きな拍手をする。凛はと言うと、恥ずかしそうにお辞儀をしてから、男の子にバイオリンを返した。

「お兄ちゃん凄い！」
「ありがとう。でも、大したことないよ」
「あのさ、僕、毎日ここに来るからさ、もしよかったら教えて！」
「うん。わかった」

凛は、勝手に約束をすると、公園を出た。

・・・何だか、本当に意外だった。これしか言葉がない。

「なぁ、バイオリンってどれくらいやってたんだ？」
「八歳から十二歳までやってたよ」
「すっ、凄いですね！？普通、四年であそこまで弾けますか？」

「わからない。でも、凄いって言われた。神童だって言われたけど、あんまり自覚はなかったな」
「どこかコンクールとか出たこととかありますか？」
「うん。全国の十歳の部で優勝はしたことはあるよ。それ以外の歳は、準優勝しか取れなかったんだけどね」

「でも確か、お前って両親がいないことになってなかったか？」
「それは、十三歳からね。それまではいたんだよ」
「それよりも、全国ですか！全国で優勝は凄いです！神童ですよ、凛さん！！」

興奮する桜木とは裏腹に、凛は、普通に当たり前のように言っている。

こいつはもしかしたら、本当に神童なのかもな・・・と、横で普通に歩いている凛を見て思った。

休憩タイム　やっぱり、無地のパジャマが一番です・・・・。

次の日の朝は、早くに目が覚めた。まだ、凛は夢の中だ。

しばらくは起き上がってボーッとしていたけれど、時間がもったいないと思って、取りあえず着替えてから外に出ることにした。時間がもったいなくて外に出るのは余り話が通らないが、出て行きたくなったのだ。

まだ朝の四時だから、さすがの凛も起きなかった。そっちの方がうるさく言われなくて済むんだけどな。

鍵を閉めて階段を下り、通りに出たところで知らない女・・・・ではなかった。

昨日、俺の方をじっと見ていた女だった。昨日と同じ、何だか変な洋服を来ている。黒いフリフリの洋服に、クマのぬいぐるみを抱いている。中学生ぐらいなのに、明らかに不自然だ。

そんな変な女が話しかけてきた。

「あなたが、私の運命の人ね」

「・・・・は？」

「前に襲われていたところを助けてくれたでしょ？」

「・・・・？」

こんな女なんか助けた覚えはない。大体、何時の話だ？

「何時の話だ？それは」

「三年前の時よ」
「俺には覚えがない」
「なくても、私にはあるの。ねぇ、覚えてないの？」
「覚えていないもどうもこうも・・・そんな覚えすらない」

朝早いから、まだ寝ぼけているのかもしれない。きっとそうだ。運命なんか、俺は全く信じないし、そんな運命を感じるような体験すらしたことない。いや、したくない。とにかく、俺はこいつを助けた覚えはないし、会ったのは昨日が初めてのはずだ。

「でも、私は覚えてるの！」
「ああ、そうか。朝早いから寝ぼけてるんじゃないのか？」

俺は簡単にあしらって、さっさと家に戻ろうとすると、その女は瞬時に腕をつかみ、引っ張った。思わず前につんのめりそうになる。

「待って！行かないで！！」
「何だよ、まだ用があるのか？」
「だって、せっかく会えたのに・・・。これも、神様のお導きだと思うし・・・」

「だからって、朝から人に纏わりつくな！」
「もう、恥ずかしがっちゃってさ！」

こいつは、凛と同じタイプだと思い、肩を沈める俺。それとは裏腹に、とても朝のテンションとは思えない女。

「取りあえず、俺は帰る！」

女の腕を振り払い、逃げるように家に入り、鍵を閉める。その音に、

隣の部屋にいた桜木や、凛がびっくりしてこっちを見る。

「どっ、どうかしましたか？」

「どうしたの？」

桜木の腕を引っ張って部屋の中に引きずり込むと、再び、ドアをガチャンと閉めて、鍵をしっかり閉めてから、二人を部屋のど真ん中に連れ込んだ。

「さっき、外に出たら変な女に運命がどうのこうのとか言われて・・・」

「そうなの？よかったね・・・・」

「よくない！何だか変な女でな、『助けてくれたの覚えてないの？』とか言われて・・・・。三年前の出来事だって言われても、まだ、俺は人間界にいなかったんだぞ？」

「そうだね。じゃあ、人違いだよ」

そこまで話した時、ドアをドンドン叩く音が聞こえた。それから、声も聞こえる。その声は、今一番聞きたくない声だった。

しかし、凛のバカは、寝ぼけ眼でドアを開けてしまった。そして、その女のことを中に入れる。

・・・・バカ。

「君が修を運命の人だって勘違いした人？」

「修さんって言うのね。私は、舞園望美！よろしくね！！」

「えっとさ、本人は覚えがないらしいんだけど。その時の状況を詳しく教えてあげて」

なぜ恥ずかしがりもせず、パジャマのまま話していられるのか。しかも、悪趣味のパジャマを着て。でも、話を上手く進めてくれることはありがたい。

女の言うことを省略すると、三年前、どこかのホールでいじめられているところを助けてくれたんだそうで、慰める為にバイオリンを弾いてくれたらしい。話を聞く分には、俺よりも凛に近い気がする。しかし、凛にはそんな覚えがないそうで、誰か他の奴じゃないかと言われた。

「あの、取りあえず、修は全く違うと思うので、どうぞお帰り下さい」

凛は、半ば強引にそいつを追い出すと、パンパンと手を叩き、深くため息をついた。

「亜修羅もめんどくさそうな女の子に捕まっちゃったね。きっと、ずっと付きまとって来るよ?」
「俺、もう嫌だ。学校なんか行きたくないぞ」
「それでもダメだよ。ちゃんと学校に行かないと・・・・」

「ああ眠い、俺は寝る。ああ、でもパジャマは洗濯機の中にあるのか」
「じゃあ、僕の貸してあげる」
「ああ、悪いな」

俺は、その時忘れていた。凛のパジャマが悪趣味だったなんて・・・・。

凛から受け取ったパジャマを見て、固まる俺。ニコニコ顔の凛。どんな展開になるのかと楽しそうな桜木。

凛から渡されたパジャマは、薄い黄色い生地に、ひよこが沢山いるパジャマだ。

「あれ？嫌だ？じゃあ、これは？」

どこから取り出したのか、水色の生地の、可愛らしいハムスターが沢山いるパジャマを出す凛。

どっちも嫌だ。絶対に俺はこんなのを着たくはない。

「いや、どちらも遠慮しておく」

「せっかく出したんだからさ、どっちか着てよ。僕的には、桜っちがひよこちゃんで、亜修羅がハムスターの方がいいと思うんだけどな、色的に」

「どっちも嫌だぞ！」

「僕も、これは少し・・・・」

遠慮がちに断る桜木と、全力で断る俺に、凛は無理矢理着せた。桜木は、途中で抵抗をやめたけど、俺は最後までやめなかった。けど、凛の力に負けて、今は、見事にハムスターのパジャマを着ている。何が悲しくて、高校生の男がハムスター柄のパジャマを着なくてはならないのか。

「じゃあ、寝よう。三人で寝れば悪夢も怖くない！」

「学校に行くから、いい加減、元の服を返せ！」

「別に、学校なんかどうでもいいよ。ただ、亜修羅が着たらどうなるかな？と思って。ちょっと小さいか。やっぱり僕のじゃ」

「そんなことはどうでもいい。返せ！」

凛から洋服を奪うとさっさと元の服に着替えて、桜木にも服を渡しそれから布団をたたむ。

凛も起きたのなら、これ以上寝かす必要はない。起こすこっちの身にもなってみろ。大変だぞ。

「あっ、布団！」

「もう、起きたんだろう？なら起きろ！」

「嫌だぁ～～！！まだ眠いもん」

俺が押入れに運び込もうとしている布団に飛びつき、その勢いで思い切り後ろに倒れて、頭を壁にぶつける。

「！？」

柱の角に頭を思い切りぶつけて、思わず顔を歪める。まだマシなところに当たったからいいが、打ち所が悪かったら、きっと死んでいた。

「眠りへの執着心をもう少しなくしたらどうだ？」

「いいの。これは僕のとりえの一つ」

そんなことを言いながら、謝りもしないで、俺から布団を奪い、かけ布団を抱き枕みたいにして眠ってしまった凛に、呆れた眼差しを向けても、本人は無視。と言うか、気づいていない。

「あの、僕・・・着替えてきますね」

桜木が、自分の服を持って外に出て行く。残されたのは、俺と、熟睡中の凛だけ。いっつも起こすのは俺だ。たまには桜木に起こさせてもいいかもな・・・・。

休憩タイム　ちょっとした優しさ

仕方なく凛を寝かせていると、いつの間にか時計が七時を回っていることがわかった。さっき眠ったばかりだが、そろそろ起こさないとな。

「おい！起きろ」
「・・・・」
「起きろ！」
「・・・・」

耳元で大声で怒鳴っても無視。どうやったら眠っていられるのかと言う程大声で起こしているのに、起きない。

半まで粘ったが、どうしても起きなかったから、諦めて自分の仕度を始める。毎回そうだ。いつも仕度が終わり、出ようとした時に起きる。おかげで、いつも遅刻ギリギリの時間帯に行っていることになる。

今日も、靴を履いて出ようとした時に、やっと起き上がった。

ったく、何てめんどくさい目覚ましだ。

「後五分で八時だぞ」
「ああ、すぐ終わるから」

明らかにふらふらした様子で奥の方に消えて行く。危なっかしいなと思っても、放っておく。そうすると、ガラガラガチャーンと大きな音がする。これで、凛がいつも目覚めるんだ。

「よし、準備完了。ね、五分もかからなかったでしょ？」
「ああ、そうだな」
棒読みで答え、鍵を閉める。そこへ、桜木が出て来た。
「桜っち、グッドタイミング！」
「そうですか？」
「そうそう！」
朝だと言うのに、凄い元気。俺なら、朝からこんなテンションで一日を過ごしたら、一生分の元気を使い果たすだろう。なのに、こいつの元気は無限大だ。底がない。
「あっ、そうだ！今日も昨日の公園に行っていいかな？昨日約束しちゃったからさ」
「だからって、一々俺らがついて行く必要はないと思うぞ」
「いいのさ、そんなの関係ないもん」
「俺は迷惑してるぞ」
「そんなこと言ってさ♪二人はどこかで暇つぶしてていいからさ」
その時、背後から何かが覆いかぶさるようにぶつかって来た。振り向かずとも、においでわかる。会いたくない、勘違いされている女だ。
「離れろ！！」
「いやぁ、だってせっかく会えたんだもの。嬉しいことこの上ないの。あの時一目ぼれしちゃったしさ。今もだけど・・・」
「だから、俺は違うって！」
「だって、そっくりだもの。それに、バイオリンだって弾けるし」

「あれは俺じゃない」
「嘘つくのはやめてよ」

「うるさい、とにかく離れろ！」

驚異的な力で離れない女を、必死に引き剥がそうとする。しかし、無駄。力が強すぎる。人間とは思えない力だ。

「あの・・・修さんも嫌がってるんで、やめてあげてください」
「いいのよ、運命ってこんなことなのよ」
「だから、運命なんかないって言ってるだろう！？」

結局、女は学校までべったりくっついて来た。学校までは入って来なかったが、寿命が七年は縮んだ思いだ。

やっと学校が終わった。しかし、俺には更なる悪夢が待っていた。凛達の代わりに、あの女がいる。学校でだって、違う女にベタベタくっつかれて、登下校の時にはこいつにベタベタされて・・・・。全員で俺を殺そうとしているのか？

「一緒に帰ろ！」
「・・・・」

凛に言ったような答えを返さず、無言で走り出す。そして、昨日の公園に一直線に入る。それから振り返る。女の姿は見えない。何とか撒けたようだ。

「ねぇ、大変？」
「はぁ？」
「あの女の子」

「ああ、寿命が七年縮んだ」

俺がそう答えると、凛の顔が曇った。それを見て、何かまずいことを言ったかと思った。しかし、どうも違うようだ。

「あのさ、僕、思い出したんだ。あの女の子のこと。十二歳の最後のコンクール会場で、あの子を助けたんだよ。それから、コンクールで弾く曲を弾いてあげたんだ。その時、僕もやっぱりあの子が好きになっちゃった。一目惚れってわからないよね？亜修羅がしそうにないし」
「おい、それって、バカにしてるのか？」

「いや、違うよ。ただ、絶対にしないだろうなって・・・・」
「バカにするな。俺だって、それぐらい・・・・」
「えっ、あるの！？」

自分で言っていて、慌てて口を塞ぐと、凛に背を向ける。今は、俺の恋愛話よりも、凛のことだ。

「話を戻せ」
「・・・わかったよ。けどさ、好きになっちゃったんだよね。で

も、僕は妖怪だから、人間と結ばれてはいけないことになってる。だから、惜しい思いで、何も言わないまま逃げてきちゃったんだよ」

「・・・凛も、ちゃんと考えて行動してるんだな」

「何さ！その言い方！！あの時のことで亜修羅に迷惑をかけちゃったからさ、謝ってるのに。何でバカにするのさ？酷いよ！」

「悪い、そんな深い意味で言った訳じゃない」

凛が本気で怒り出したから、慌てて謝る。怒らせたら絶対に厄介だ。

「でもさ、あの子、外国から態々日本に来てるんだよね。その・・・・僕を探すためにさ。しかも、あの子はフランス人なんだけど、フランスの偉い人の娘さんでさ、日本にいることが出来る期間は三日だけなんだ。だから、明日には帰っちゃう」

「それでも俺は、自分は違うって言うぞ。お前の運命の相手じゃないって」

「だって、それじゃあ、余りにも酷だから・・・・。付き合ってあげてよ」

「なぜ？お前は、あの女の詳しいことを知ってるんだろ？」

「それは、前の時に教えてもらったんだよ。もちろん、僕のことは一言も言わなかったけど。だから、お願い！」

「俺は、断固として否定する」

「そんなこと言ったって・・・・」

「自分のことは自分で片付けろ」

懇願して来る凛を無情にも跳ね除けて、凛の傍から離れる。これは、

凛のことだ。けじめはきっちり自分でつけなくちゃいけないんだ。

残された凛は、何だかとても辛そうだったが、自分でけじめをつけられるようにならないと、人間界で住んで行けないからな。

「修さん、いいんですか？あんなに跳ね除けちゃって」

「ああ。あれはあいつの問題だ。それの助けぐらいはやってやれる。でも、俺に任すのは簡単だが、自分で対応しきれなくなる。一時悩めば、一人で解決出来るようになる。そっちの方が明らかに賢いだろう」

「そうですね。ここは、頑張ってもらいましょう。凛君に」

桜木も、俺の言葉に納得した。今頑張れば、またこんなことになった時に、自分で考えることが出来るだろう。

明日であの女は帰る。それまでの間、あいつがどう考えるのかは誰にもわからない。

休憩タイム　何だかんだでデパートへ

「ねぇ、僕決めたさ。自分の正体も見せないし、亜修羅にも言わさない。あやふやなままで終わらせるだ」
「おい、話し方がおかしいぞ。普通、『ねぇ、僕決めたよ。自分の正体も見せないし、亜修羅にも言わせない。あやふやなままで終わらせるよ』だろ？」

「実はさ、考えてた時に本を見つけてさ。その本の通りにやろうと思う。それでさ、主人公が変な話し方で。うつっちゃっただけだよ」
「あやふやなままって何をするんだ？」
「まずは、とにかく高い建物のある場所に呼ぶ。僕は、二階からバイオリンを弾く。それで終了」

「いいのか？そんなんで」
「うん、大丈夫。僕も、そんな凝ったこと出来ないしさ」

きっと一睡もしていなかったのか、俺に言葉を伝えた途端、バタリと倒れるように眠ってしまった。決め方はあまりにも単純すぎるが、凛にはそれが精一杯なんだろう。

「簡単に決めすぎだ」

死んだように動かない凛を小突く。しかし、全く凛は動じない。

ため息をつくと、取りあえず布団を畳む。それから、何をしようかと考えながら、窓の外を覗く。大して変わった物はない。

凛の言っていた本ってなんだろうと思ったけれど、大して気にしな

いことにした。しかし、そうすると、することがなくなってしまう。

何かないかと窓の外をチラチラと見ていると、コンビニを発見した。そのコンビニをジッと見ていると、扉から慌てて逃げる奴が見えた。その後ろから、店員が走って追いかけている。きっと、万引きか。

することもないから、近くにあったペットボトルを犯人の走路に向かって投げた。そのペットボトルは犯人の走路に見事転がって行き、犯人がずっこける。店員は、見事にそれを捕まえ、ペットボトルが飛んで来た俺の方向を見てお辞儀をした。

一安心した様子で犯人をコンビニに連れ入る店員を眺めながら、そのままボーッとしていると、不意に肩を叩かれた。

「あのさ、今日は学校行かなくていいよね？ちょっと休憩しようよ。僕さ、冥道から帰って来てから、全然息抜きしてないのを思い出してさ。ショッピングに行こうよ」

「ああ、俺はいいけどな。つーか、お前は女か？その発想は？」

「ショッピングの後は、ゲーセンに行って遊ぶんだよ」

「誰の金を使うんだ？」

大体と言うか、絶対俺の金だろうなとわかっていたが、一応聞いてみた。

「決まってるじゃないか！」

「人の金を使うのに、当たり前とか言うな！まぁ、いいか。今日ぐらいは」

「やった！桜っちに教えて来よう！」

「おい、待て！金は温存しとくのが一番なんだぞ！」

俺の言葉は、むなしくも凛のバタンというドアを閉める音にかき消された。

しかし、すぐに凛が桜木を連れて入って来る。

「それじゃあ、早速行こう！」

「おい、まだ六時だぞ。どこの店も開いてないはずだぞ」

「いいの、電車で都心まで行くんだから。こんな山奥から行ったら足りないぐらいだよ」

凛に速く速くとうるさいくらいに急かされ、何とか着替えが終わったかと思ったら、今度はそのまま外に連れ出されそうになる。

「おい、ちょっと待て、外で待ってろ！」

「わかった、三秒だけ待ってあげる」

朝だと言うのに、大声で三秒を数える凛。恥ずかしくなって、二秒で何とか全てを終わらせた。

「じゃっ、行こう！」

ドアから出て来た途端、階段の方向に引き摺り下ろされる俺って・・・。

「おい、買い物ってどれくらいかかるんだ？」

「知らないよ。僕だって、そんなこと知らないし、お金を払ってるところも見たことないもん」

「多分、そんなにかからないと思いますけど・・・・」

「取りあえず、十万持って来たが・・・・」

俺の言葉に、目を丸くして驚いた後、異常なぐらいに肩をグラグラと揺すって来る桜木。言葉すら出ないのか、口をパクパクさせるだけで、何も聞こえない。

「そっ、そっ、そっ、そっ・・・・そんな大金、持って来ちゃいけませんよ!!!?」

珍しくも、町中に響き渡るような大絶叫を起こす桜木。俺は、何とか耳を塞いだが、凛は間に合わず、気絶をした。それほど桜木の声がデカかったんだ。

「大金じゃない。家にはまだあるから大丈夫だ」
「そう言う問題じゃありませんよ。そんなこと知られたら、変な人に絡まれちゃいます」
「大丈夫だ、殴ればいい」

俺はそう言いながら、凛を起こすために叩く。三発叩いたところで、やっと目を覚ました。

「ああ、びっくりした。どうしたのさ、桜っち。あんな大声を出して」
「だって凛君、修さんが・・・・」
「まぁ、そんなことはどうでもいいや。行こうよ、今すぐ」

さっきまで倒れていた人間とは思えないスピードで立ち上がると、駅に向かう。よっぽど早く行きたいらしい。もの凄い勢いだ。

何とか駅に着き、都会へ行く方向の電車に乗る。ただでさえ、かな

り田舎の方なのに、時間も早いから、車両には、俺達以外誰も乗っていなかった。

「うわぁ、誰もいないよ。貸しきり電車だぁ～♪」

「何だか、気持ちがいいですねぇ」

凛は、電車の座席に横になりながら、窓の外を見ている。（足も全部座席に乗せている）

桜木は、椅子に座っておとなしくしている。

俺は、がら空きで席が空いているけれど、座らずに、立って吊革につかまっていた。

「ああ、くつろげる～」

「お前はくつろぎすぎだ。いい加減人が・・・・」

大分都会に近づいて来たと思った。いつ人が入って来てもおかしくないところまで来ている。

そう思ってた時に、人が入って来た。その時の凛の過敏な動きと言ったら、ビデオに収めて置きたいほどだった。

ドアが開いて、人の話し声が聞こえた途端、瞬時に普通に座ったんだ。

「亜修羅、桜っち。こっち！」

「なっ、なんだ！？」

凛に腕を引っ張られ、座席に無理矢理座らされる。

「何だよ」
「だって、乗客が来たから」
「んなこと言ったって、俺と桜木はちゃんとしてたんだから、座席に座らされる義理はないぞ」

「だってさ、一応乗って来たのが女の子だし・・・・。それに、何だか落ち着かないからさ」
「俺は、こっちの方が落ち着かないと思うけどな」

と言うのも、凛の両隣には、座席に一つの余裕もなく、俺と桜木がいる。こっちの方が明らかに落ち着かないと思うのは、俺だけなのか？

それにしても、凛がそう言うことを意識していることは初めて知った。ただバカみたいにふざけているだけかと思っていた。

都会に近づくにつれ、段々と人が乗って来て、下りる駅に着いた時には、最初はガラガラだった車内はラッシュ状態になっている。

「次の駅で降りるからな」
「わかってるよ。でも、降りれるかな？人が多過ぎて、降りれなかったらどうしよう？」
「そっ、そうですね。そこが心配です」
「なら、もう降りる準備をすればいいだろう」

ウダウダ心配だどうのこうの言っている間に、人をかき分けてドアの付近に行けばいい。そうしたら、絶対大丈夫なはずだ。

凛と桜木の腕を引いて、上手く人の間をすり抜け、ドアの前に立つ。

と、同時にドアが開く。

すると、後ろから思い切り押されて、ホームに押し流される。そのまま、流れに押されて階段を下りて行く。

「うわぁ、なっ、流れに押される！」
「取りあえず、南口から出るぞ！！」

お互いのことを考えている余裕もなく、とりあえず、近くに見えた南口から外に出る。

それから、みんながいるか確認をする。

何とか人にもみくちゃにされながらも、全員無事に出てこられたようだ。

「それにしても、凄い人だね」
「ああ、俺もここまでは想像していなかった」
「そうですね、人の熱気に押しつぶされそうです」

桜木の言葉は最もだと思った。

さすがは都会。高い建物が密集しているし、人の勢いで押しつぶされそうだ。

「取りあえず、どこに行きたかったんだ？」
「・・・デパートに行きたい」
「でも、デパートって凄く数が多いぞ」

近くにあった案内板をみただけでも、三個もデパートがある。その中で一番近いのは、後ろを振り向けば入り口が見えるぐらいだ。

「じゃあ、一番近いところでいいや」

「じゃあ、あっちだな」

真後ろのデパートに行くには、とても大きな横断歩道を渡らなくてはいけない。

しかし、あんな大きな横断歩道を見たことがない。さすが都会・・・・なのか？

大きな横断歩道を大勢の人にまぎれて渡る。やっぱりこうして見ると、都会は流行の最先端の変わりに、田舎は遅れている。何だか、俺らの洋服が浮いて見える。

しかし、そんなのはあまり気にしない。ただ、少し浮いて見えると思っただけだ。

大きな横断歩道を渡り、またまた大きなデパートの自動ドアの中に入り、案内板を見る。

色んなコーナーがあるけれど、凛がどこに行きたいと言い出すのか、俺には全くわからなかった。

「どこへ行きたい？」

「取りあえず、二階から全部見て行こうよ」

「全部回りきるのは大変だし、時間がかかるぞ？」

「まぁ、いいの。じゃあ、まずは二階からゴー！」

近くにエレベーターがあるのに、態々階段で二階に上って行くのはどうかと思ったが、取りあえず、凛に付き合うことにした。

休憩タイム　デパート最高!!

階段を上った先に見えたのは、大きなショーウィンドゥだった。と言うか、そこ以外に沢山のショーウィンドゥが並んでる。都会の奴らは、ショーウィンドゥが好きなのかと思う程だ。

「ああ、ここはつまんないな」
「じゃあ、三階に行くか？」
「あったり前じゃん♪」

階段を上った瞬間にそう呟いたかと思ったら、また階段をダーッと駆け出す。引っ張ってもらってるから楽なのだが、凛は疲れないだろうか。

三階に到着。確か、三階は婦人服売り場。二階よりも（二階は紳士服売り場）縁がないだろうと思って、上に行くのかと思ったら中に入って行く。

「おい、バカ！ここは婦人服売り場だぞ？」
「いいの」

何がいいのかわからないけれど、取りあえずついて行く。

こいつ、いつも女ものを着てたのかと思っていたら、凛の目的地が違うことがわかった。

「僕、ここに行きたかったんだ」
「何だよ、朝からこんなのを食ったら腹壊すぞ？」
「大丈夫、胃は丈夫だもん」

「じゃあ、買って来いよ」

財布を渡してその場にとどまった俺を見て、凛が引っ張る。

「亜修羅も来るの！」

「俺は朝からそんな甘い物は食いたくない！」

「だから、買わなくてもいいから」

「じゃあ、何で俺がついて行く必要がある？」

「だって、買い方わからないんだもん」

「桜木がいるだろう」

「桜っちだって、ほとんど知らないって言ってるよ」

「嘘だろう・・・・」

そうは言ったけど、凛は嘘ついているようには見えない。凛はともかく、桜木も経験がないって・・・・今までどうやって生きて来たんだよ。凛なら何とか生き延びていられそうだけど、あいつは普通の人間なんだし。

「そう言うことだからさ、よろしく！」

気を抜いたところを引っ張って行かれる。六時に出て来て、六時十分発の電車に乗ったのに、店内にある時計は九時を回っていた。随分時間が経ったようだ。

そう思うと、俺達が住んでいるのがどれだけ田舎なのかと言うことがわかるな。

凛が来たのは、婦人服売り場の一番奥にあるアイスクリームが目的だったらしい。

俺だったら絶対腹を壊すと思うのだが・・・・。

店員は、俺達を見て少しいぶかしんだが（今は学校の時間だからな）、すぐに接客を始めた。

「なにするんだよ？」

「・・・・」

「おい」

「・・・・」

「お連れのみな様は、あちらにいますけど・・・・」

店員に言われて振り返る。二人は後ろにはいず、店の奥にある大きな看板を見上げていた。

子供だな、あいつらは本当に。

「おい、なにするんだ？」

「何でもいいよ！桜っちも僕と同じ！」

「いや、悪いからいいですよ」

俺は、凛の言葉を聞いて、桜木の言葉を聞く前に、取りあえず頼んだ。あいつらの好みなんか知るか。あいつらが自分で決めないのが悪い。

「お待たせしました。五百六十円です」

電車に乗った時にかなりくずれたから、何とか大量のおつりをもらうことはなかった。しかし、また、店員に不思議な目で見られた。

と言うか、驚きの目か。

金を払うと、さっさと受け取り、二人を引きずり出してから、やっと話した。

「何見てたんだよ？」

「おっきなアイスだよ！コーンの上にアイスが五個乗ってた！！」

「そうか、でもそれはソフトクリームだ。五段になんかしたらくずれるぞ」

「このデパートの中にあるんだって。だから、後で行こうよ」

「まだ食うのか？」

「後でって言ってるでしょ！」

後でと言ったって、俺にとっては驚愕だ。どうしてそんなに甘い物を食べられるのか不思議なくらいだ。気持ち悪くならないのか？

「さぁ、行こう♪」

「まだ食ってるだろう？」

「時間がもったいない。それに、ここに立ってるのは邪魔だしね」

「落としたって知らないぞ」

「平気平気♪ちゃんと歩くから」

凛はズンズンと歩いて行く。仕方がないからついて行くが、危なっかしいんだよな、思い切り。

売り物の服にアイスクリームをつけそうになったりする。

金を払うのは俺だと言うことを自覚してもらいたい。

四階は、子供服とゲームを売っている階だった。それを見て、凛がはしゃぐ。きっとゲーム目当てだろうな。

「おい、そんなにはしゃぐな。落とすぞ」

「じゃあ、亜修羅が持っててよ。ちょっと遊んで来る。桜っちもね」

凛と桜木の分のアイスを無理矢理持たされる。桜木は、半ば強引に引っ張られて行ったが、実際にゲームをしているのを見ていると、まんざらでもなさそうだ。

あまりにも二人が楽しそうだったから、少し気になって覗いてみた。そこには、おどろおどろしい建物に、ゾンビが徘徊している。まるで、バイ○ハザードみたいだな、これ。

「おい、そんな気色悪い生き物をぶち抜いて、面白いのか？」

「出来ると楽しいよ。何と言うか、快感♪」

ゴキブリは怖いくせに、こんな生々しいゾンビをぶち抜くことは快感らしい。

凛のことを気に入っている読者のみなさん、凛はこう言う恐ろしい奴だ。それだけは言っておこう。

「亜修羅、今変なこと言ったでしょ？僕は、ゾンビをぶち抜くことが楽しいって言ってる訳じゃないよ。ただ、倒せた時が快感って言うんだよ。ほら、ラスボスを倒した時の快感と同じようなものだよ」

後ろを向いて考えていたのに、凛に考えを見透かされた。画面に集中しているはずなのに・・・・。なぜ？

「僕は、ちょっと怖いんですけど・・・・」
「そう言いながらやってるな」
「そうですね、僕はちょっと怖いのでやめさせてもらいます」

桜木は、真っ青な顔で、俺からアイスクリームを受け取る。そんな顔で食っても、余計気分が悪くなるだけだぞ。

「じゃあ、僕もやめたっと。あっ、あっちにもある！」

凛が走って行った方向にあったのは、モンスターを倒して行くと言うような奴だ。所謂、ロールプレイングゲームだな。

「おい、凛！もうそろそろやめろ。時間がなくなるぞ。ここで遊んでたら、ゲーセン行けないぞ」
「それはまずい！」

何がまずいのか・・・・。とことん凛の思考は理解しがたいが、取りあえず、ゲームをやめてくれたことはよかった。

しかし、五階に行く前に凛が何かを発見した。その目線の先にあるのは、また食い物屋。どんだけ食い意地が張ってるんだ。

「僕、お腹空いたから、あそこに入ろう？」
「そうですね、さすがにお腹も空きますね」
「まぁ、確かにな」
「じゃあ、行こうよ」

自分も腹が空いてるから、今度はすんなりと凛に同意した。

そこは、ファーストフード店で、朝だからか、客はほとんどいない。
朝食とも昼食とも言えない時間帯なら、当たり前か。
店に入り、注文をしてから品を受け取り、近くの椅子に座る。
「おい、その高い壁はなんだ？」
俺の目の前に立ちはだかる壁を指差す。
隣の桜木は、すでに包みを開けて、ハンバーガーにかじりついている。
るから、全く気づいていないようだ。
「壁・・・ですか？」
俺の言葉に、初めて前を見る桜木。そして、目の前の壁に仰天する。
すると、その壁が崩れて凛の顔が見えた。
「壁じゃないよ、美味しそうなハンバーガーだよ！」
「お前、何個頼んだんだよ」
「二十個」
「二十個！？」
普通に言う凛に、驚きを隠し切れない桜木。
俺は、驚きを通り越して呆れていた。こいつ、絶対太るぞ。
「お前、体重いくつだ？」
「四十」
「嘘つくな、五十はあるだろう」

「そんなにないもん！」

「あの・・・多分、凛君はそんなにないと思うんですけど・・・」

「そうだよ、じゃあ、亜修羅はどうなのさ！」

「おっ、俺は・・・秘密だ」

「何でさ」

「うるさい！」

凛に教える必要はない。個人情報は絶対に他人に言うなと言われてるし（これは少し違うが）、それに何より、自らの体重を把握していないから、いくら聞かれたって、答えられる訳がない。

「そう言えば修さんは知らなかったですよね、凛君の食べる量。僕は学校でいつも見てるんですけど驚きますから、初めて見る修さんはかなり驚いたと思います」

「まぁ、そうだね。大体の人は驚くけどさ、これくらい食べないとお腹がたまらないんだよね」

話す時すらも、口を動かしモグモグと食べ続ける凛。凄い食欲だ。育ち盛りと言ったって、これは食い過ぎだと思うぞ。同い年の桜木は一個だけだし。

「じゃあ、行こう」

最後にコーラを飲み終わると、席を立つ凛。俺は食べ終わっていたけど、桜木は何だかもたついている。

「桜っち、頑張れ」

「はい・・・・」

・・・もしかして、こいつは小食なのか？凛は大食い。桜木は小食・・・まともなのは俺だけか。

桜木は、何とかと言った様子でハンバーガーを飲み込むと、ため息をついた。

「よっし、次行こうか♪」

あんなにも食った後なのに、すばやく動ける凛を凄いと思うが、言うことはしない。

「待ってください、あんまり早く動けません！」
「早く！早く！」
「待て！」

走って出て行く凛を、俺達は慌てて追いかけた。

休憩タイム　何とかなった・・・・かな？

あれからゲームセンターに行き、散々遊んだ後、凛はやっと帰る気になったようだ。

「あのさ、ゲームセンターのところ、何でとばされてるの？」
「まぁ、なんだ。作者の都合だろう。休憩があんまり続くのもまずいと思ったんだろうな。」
「ダメだよ！僕のバッタークリーンヒットが！ベストハイスコアが！」

「別にいいだろう。ゲームでハイスコアが出たことが話されなくても。それに、バッタークリーンヒットって何だよ？バッターをバットでフッ飛ばすのかよ？」
「違うよ、超剛速球をカーンって打ったじゃないか！」

「そうですね、あれは凄かったです！」
「とにかく、飛ばすぞ。お前の活躍なんか、どうだっていいんだ」
「何でさ！これ、僕のための休憩でしょ？」
「うぬぼれるな。そもそも、俺はそんなことは知らん！とにかく、先に進めるぞ」

ブツブツと文句を言い続ける凛に、たこ焼きを買って食わせると、文句を言わなくなった。

こいつは、本当に赤ん坊だな。腹が減って文句をいい、満たされると黙る。

これで、たこ焼きは五個目だ。（六個入りのやつを、五個だ）その

他にも、アイスクリーム、ケーキ、クレープ、それからパン。（これは、昼食の二時間後までに食ったものだ）

二時間でここまで食うと、見てるこっちが腹いっぱいになる。しかも、甘い物ばっかりだ。俺にとっては我慢のならないことだ。

「もう帰るの？まだ都会の物を食べたいんだけど・・・・」

「凛、お前は食う為に都会に行きたいって言ったのか？」

「そうだよ、それ以外ないじゃないか」

「ああそうか。うるさく付きまとって来る女に別れをするんじゃないのか？」

「あっ、そうだったね。でも僕、バイオリンあげちゃったからな。持ってないんだよ」

「とにかく戻るぞ。今日を逃したら、また何時会えるのかわからないんだろう？」

大事なところを忘れてしまっている凛を引っ張って電車に乗る。桜木は、ちゃんと覚えていたようだからよかった。

長い間電車に揺られて、約二時間半ぐらいで目的の駅に着く。時間は四時半だ。多分、まだ行っていないだろう。

駅から家に帰る途中に、この前の公園に通りかかった。

そう思ったら、凛は、そっちの方に足を向けている。

「おい、どこに行くんだ？」

「教えに行くんだよ。その時に、バイオリン貸してもらえばいいよ」

「女はどうする？」

「うーん。ここに来るんじゃない？亜修羅がいることを察知して」
「・・・・それはないだろう」

言葉ではそう言いながらも、あの女だったら本当に来そうで、自らあの女に近づく気はなかった。あいつだったら本当に来そうだ。

「だから、教えるんだ」

凛に流されて、一緒に公園に入る。

公園に入ると、少し控えめにバイオリンの音が聞こえる。

それと、何だか他の奴の声が聞こえる。

「あれ？あの子の他に、違う声が聞こえる」

なぜか、茂みに隠れるように促される。

なぜ隠れる必要があるのかわからないが、取りあえず様子を見ると言うことかもしれない。

「おい、クソガキ、耳障りなんだよ！こんなところでキーキー音を鳴らすなよ。俺達の邪魔だ」
「でも・・・・」
「んな下手で練習したって、上手く行かねぇってわからねぇのかよ？だから、お前はどこか行けってんだ！」

「でも・・・・ここで練習するって決めたから・・・・」
「ああ？ガキが生意気言ってんじゃねぇよ。才能のかけらもない、

ガキが。他に生きる意味なんてないんだろう？なら、死んじまえよ」

そいつは、持っていた金属バットを子供に向かって振り下ろす。

そいつがそう言った時、凛の表情が無表情に変わり、スッと立ち上がって茂みをかき分けて行く。

いつもと雰囲気が全く違う。怒っているようだ。

「ねぇあんた、そう簡単に死ぬとか言うなよ」

凛が、いつもと全く違う能面のような無表情で、何の感情もこもっていない声で話す。いつものニコニコしている凛と違って、何だか大きな恐怖に見える。

男が振り下ろそうとしていた金属バットを何の苦もなく止めると、グイとひねって金属バットを奪うと、真っ二つに折った。

「なんだ、お前。俺達になんか文句でもあるのかよ？」

「大有りだよ」

「ああ？ガキが生意気言ってるんじゃねぇよ。てめぇも殺されてぇのか？」

「だから、死ぬとか簡単に言ってるんじゃないって言ってんだよ」

「お兄ちゃん・・・・」

「大丈夫。こいつらは、一瞬で片付けるから」

震えている子供に向かって、いつもの笑みを浮かべるけれど、まだ怖がっているようだ。不良と言うより、凛のことを。

しかし、そんなことに気づいていないようで、ゆっくりと子供の前に歩いて行くと、かばうように前に立って不良の方を見る。

その視線が、にらんでいる訳でもないのにやけに鋭く見える。

「うるせぇ、ガキに関係ねぇだろう！」

不良は凛に突っ込んで行った。と思ったら、凛の近くにあった木が倒れた。

きっと、不良が近付く前に、凛が木をなぎ倒したんだろう。一発のパンチで。

砂埃が上がって、思わず咳き込む。砂埃は、もろに俺達の方に向かって来たからだ。

もう少し考えてやってくれよ・・・・。

しばらくの沈黙の後、凛の声が聞こえた。

「言っておくけど、あんたより僕の方がよっぽど長く生きてるから。あんたのじいちゃんより長生きしてるよ。だから、ガキとか言うなよ。それに、そんなに殺すって連呼するなら、殺して欲しいとみなして、僕が本気であんたらを殺すよ」

凛の目が、嘘のかけらもないとわかった不良は、さすがに怯えて走り去ってしまった。当たり前だ。一発殴っただけで太い木を倒したのだし、金属バットも折ってしまうのだ。凛が本気になれば、人間の骨を折るのもたやすいだろう。普通の人間では無理な技だ。

不良を追い払うと、いつものフニャフニャな笑顔で子供の方に向き直る。

この転換の早さ、まさに神業だ。この様子を見ても、神童と言えるだろう。

「大丈夫？佐藤君」

「あ、はい。いっ、今のは・・・・」

明らかに怯えられている。あんなのを見せられたら当たり前か。

「ちょっと空手をやっててね。それよりも、友達を紹介するよ。お～い！」

いつもの凛に戻り、動作も子供じみている。

さっきのは、本当の妖怪って動きだったからな。

それを見て、少しほっとする。それは俺だけじゃなく、固唾を呑んで見守っていた桜木も同じようだった。

「こっちが修で、こっちが桜っち」

「あの、その名前で教えないで下さい。僕にもちゃんと名前があるので」

「ああ、ごめん。でも、そう呼んでもいいよね？」

「あっ・・・・はい」

明らかに嫌そうではあったが、うなずくしか選択肢がないような雰囲気だった。

あれを見せられた後では、俺でも逆らうのは気が引ける。
いつもはフニャフニャしているけれど、あれは素の性格じゃないらしい。

「あのさ、ちょっとそのバイオリンを貸してもらえないかな？」
「いいですけど・・・・」
「ちょっと訳ありでね」

凛は子供からバイオリンを受け取ると、丁度近くにある建物の中に入って行く。

と、ほぼ同時に、嫌な声が聞こえて来た。

まさか、本当に来るとは・・・ある意味凄い。

「やっぱりここにいたんだ。ここにいるかなって思って！」
「ああお前、いいところに来た。ちょっとこっち来い」

本当にやって来た女を、凛が入って行った建物の傍に連れて行く。

ついでに、さっきの子供も連れて来た。

「どうしたの？こんなところに連れて来て？」
「いや、少しここで待っててくれ」

そう言うと、桜木と子供を連れて、急いで裏の入り口から建物に入る。

「何をするんですか？」

「ちょっとね。これから、あのお兄ちゃんがバイオリンを弾くんだよ」
「本当？」
「うん、本当」
俺の変わりに説明をしてくれる桜木。そのおかげで説明が省けるからいい。
俺なら、口が裂けても、凛のことをお兄ちゃんなどと言えない。
「弾くよ。いい？」
凛に声をかけられた部屋に入ると、沢山の老人の目が俺らに止まった。
ちょっとまずいところに来たんじゃないのか？
「おい、先客がいるじゃないか。いいのかよ、乱入して」
「いいんだよ。聞かせて欲しいって言われたんだもん」
凛がそう言い切り、窓の傍の椅子に座る。
聞かせて欲しいと言われたのは、嘘じゃないらしい。みんなが真剣な顔で耳を傍立てている。子供も、真剣に耳をそばだてていた。
みんなの視線を浴びる中、凛はバイオリンを弾き始めた。
この曲は、アメイジンググレイスだ。
音楽の時間に聞いたことがあるけれど、それよりも上手いかもしれ

ない。音楽のことはよく知らないが、とても心に染みて来る。

気づいた時には凛は弾き終えていて、小さな拍手を恥ずかしそうに受けていた。

そして、紙を下に向かって落とす。

何を書いてあるのかわからないが、何か書いてあるんだろう。

「ああよかった。行ったよ行った。ちゃんとわかったみたい」

「あの紙になんて書いたんだ？」

「え？それは内緒♪」

聞いてみたが、答えるつもりはないらしい。

でも、これでちゃんとあの女がわかったのだ。それなら、凛が何を書こうと、俺が聞く必要はない。

「もう一回、聞かせてくれんかのぉ。老い先短い私らでも感動したんじゃ」

「わかりました！もう一回弾きます！」

凛は、そう元気に申し出ると、アメイジンググレイスを弾いた。

冥道霊閃の件から一ヶ月が経った。

その間に変わったことはなく（そっち関係でないとすれば、都会のデパートに行った）、今日もいつも通りに三人で下校をしている途中だった。

「そう言えば、桜っちを預けるとみんな不慮の事故に遭うって言うけどさ、僕らはなぜか何も起こってないよね？」

「そうですね、それだけは望ましいことです」

「もう桜っちの親戚とかいとこっていないの？」

「いえ、一人だけいます。その人にもやっぱり災難は降りかかるんですが、強運と言うのかなんと言うか、今のところは無傷なんです」

「じゃあ、そいつのところに行ったらいいだろう？」

俺が最もなことを言うと、桜木が浮かない顔をした。

何か理由があるらしい。どんな問題だ？金？生活？わからん。

「それは・・・・」

「あれ？もしかして、明日夏じゃないの？」

背後から女の声が聞こえて来た。

その途端、桜木が思い切り顔をしかめた。苦虫を噛み潰した程度じゃない。それの十倍くらいだ。

そこまで女が嫌いなのか？

「あっ、やっぱり明日夏じゃない」

「ああ、玖未子さん・・・・」

桜木がこちらを見る。目で、「この人が強運の親戚、大貫玖未子さんです」と訴えるように見える。

どうしてそ時点で名前を知っているのかと言う疑問を抱くだろうが、そんなどうでもいい質問には答えないからな、どうとでも思ってくれ。

その女は、ドレスに似たような感じの真っ赤な服を着ていて、化粧をしている。歳は、二十代前半ぐらいだ。

服装は派手だが、特にそれほど嫌がる要素はないと思っていたが、次の行動を見て、桜木が嫌な顔をしてこの女のところに行かない意味がわかった。

「やっぱり可愛い！」

その女は、恥ずかしがることもなく桜木をギュッと抱きしめたのだ。

無論、男としては恥だろう。だが桜木は、それに慣れているようで、必死に我慢をしている。

「久しぶりに会ったけど、全然変わってないわね。あっ、まだ眼鏡してる！コンタクトにした方が可愛いって言ってるじゃない！」

「ごめんなさい、玖未子さん。そんなお金がないから・・・・。それよりも、眼鏡を返して下さい！」

明らかに小さい桜木が、自分の上に持ち上げられた眼鏡を必死に取ろうとしている。

見ている限り、桜木には取れそうにない。

「なんか、桜っちがこの人の家に住みたくないって言う気持ち、わかると思う。毎日あれじゃ、気が滅入っちゃうよ」

「ああ。俺だったら寝ている隙に抹殺する」

「えぇぇ？抹殺？」

「嘘だ。寝ている間に体中ロープで縛り付ける」

「そっちも可哀想」

「それで玖未子さん、何か用ですか？」

やっと眼鏡を取り戻せた桜木が聞く。玖未子は、ニコニコ笑顔で桜木のことを撫で回している。

「あの・・・用、ないんですか？」

「ねぇ明日夏、玖未子さんは止めてって言ったでしょ？お姉ちゃんって呼んでって」

「あの、お姉ちゃん、何か用があるんですか？いつも都会で働いているのに」

「ちょっと古里帰り。それに、明日夏はどうしてるかな？と思って。あら？お友達？」

初めて俺達に気づきましたって感じで話しかけて来る玖未子。ずっとここにいたのに気がつかなかったのはおかしい。

「はい、桜木君の友達・・・だよね？」

「僕はそう思ってますよ。僕と同じ制服を着ている子が、丘本宗介君。隣の人は、伊織修さんです。お姉ちゃん」

玖未子は最初、ジーッと凛を見ていたと思ったら、何の前触れもなく、桜木にした様に抱きついた。それから一言。

「この子も可愛い！！」

「・・・・」

凛は固まってしまった。本当の石のように、後ろに倒れることもなければ前に倒れることもなく、その場で道しるべのように立ち尽くしていた。

そんな凛を放し、今度は俺の方に向かって来た。

とっさにあとずさろうとしても、無理だった。ジーッと顔を見られると、動けなくなってしまう。

玖未子の親は、人をジーッと見ては失礼と言うことをちゃんと教えたのだろうか？

しばらく見られたが、何もせずに歩いて行く。

しかし、ほっとしたのもつかの間。また振り向き、やっぱり前の二人と同様に抱きついて来た。

違うのは、言葉だけ。

「この子、かっこいい！！」

「・・・・」

やっと、凛がどんな心境だったのかが今わかった。

燃え尽きて、真っ白な灰になった気分だ。こんなことをされて動ける桜木は凄い。

きっと、玖未子に何回も抱きつかれて、免疫が出来たんだろうな。

「あっ、そうだ!手伝って欲しいことがあるの。実はね、仕事先が引越しすることになって・・・。だから、あの力持ちの子に手伝って欲しいの」

「あの子は忙しいみたいですけど・・・・」

「じゃあ、明日夏と、明日夏の友達にお願い出来ないかしら?その間、私達もやらなくちゃいけないことがあるから」

「わかりました」

「現地へは私が車で送るから」

玖未子はそう言い切るなり、走り出して行った。

何だか話がよく読めない。なんで俺達までが桜木の親戚の仕事先の引越しを手伝はなくてはならないのか。親戚よりも程遠いじゃないか、会社と言うのは。

「さっきの話の続きですけど、玖未子さんがああ言う人だから、僕はあの人のところには行きたくないんです。でも、前に一度だけ泊まったことがあります。それは恐ろしい経験でした。もう、二度と味わいたくありません」

「恐ろしい経験ってどんな？」

「まずは、しょっちゅう抱きついて来ます。それから、その時は十三歳だったんですけど、十三歳なのに、やたら子ども扱いするし。寝ている時に、ジーッと見られていたのが一番怖かったです。その時、玖未子さんは優しい微笑みを浮かべていたようですが、僕にとっては悪魔の笑いでした。おかげでその日は一睡も出来ず、尚且つ疲れていたので死にそうでした」

桜木が大げさに話す。

いや、もしかしたら、本当にそんなことになったのかもしれない。俺だったら今頃生きていないだろうな。

「玖未子さんのお仕事って言うのは？」

「玖未子さんは、都会で夜のお店で働いてます」

「それって、キャバクラとか？」

「わかりません」

今までずっと黙って聞いていたが、不意に聞き覚えのない単語が出て来た。

きゃばくら？なんだそれは？

「その、『きゃばくら』とはなんだ？」

「悪いおじさんが入り浸る店」

「いえ、そんな店では・・・・」

「そうか、悪いおっさんがいる店か。そんなところに俺達は行く羽

目になるのか？」
「そうだね、僕も言葉くらいしか聞いたことがないから現地に行くのは初めてだよ。まぁ、この世代で行く自体が無理だからね」
凛の言っていることが、あまり理解出来ない。
「それはおっさんが行くところだから子供は入れないのか？」
「ふふっ・・・・」
「笑うんだったら、お前は理由を知ってるのか？」
「あっ・・・・」
俺の問いに、我慢しきれなくなったと言う様子で笑い出した凛が、不意に笑いを止めた。
こいつ、知らずに人をバカにしたのか・・・・。
「とっ、とにかく、そんな話はよしましょう。衛生上、あまりよくありません」
「そんな変なところなのか？」
「青少年にとってはいけません」
桜木の言葉の意味もわからない。
俺達の歳で行ってはいけないと言うのに、これからなんで連れて行かれるんだ？人間界は変なもので溢れかえっている。
「そうか。じゃあ、話題を変える。玖未子が言っていた、『力持ちの子』って誰だ？」

話題が切り替わり、少しホッとした表情を見せる桜木。
きっと、その「きゃばくら」とか言うことをよく知っていて、悪いものだとわかっているからかもしれない。
「凛君は会ったと言うか、スクリーンに映し出されている時に見ましたよね？僕の隣にいた子」
「ああ、あの子？」
「はい、海里って言うんですけど、力持ちなんですよ」
「どれくらい？」
「大きな冷蔵庫を一人で持ち上げられます」
「それだけ？」
「それだけとは？」
「いや、だってさ、今は人間の姿をしてるからそんなには重いものを持てないかもしれないけど、妖怪の姿だったら、二tトラック三台は軽々持ち上げられるよ」
凛の言葉に、桜木の顔面が蒼白になった。
俺達といたら、いつでも殺されるとでも思ったのだろうか？
「まぁ、人間の姿とは言っても元は妖怪だから、軽々とまでは行かないけど、頑張れば乗用車三台くらい持ち上げられるかも」
「じゃあ、僕はいつでも殺せるんですか？」
桜木の言葉に、今度は凛が驚く。
まさか、そんな言葉が出て来るとは思わなかったのだろう。

「まぁ、本気を出せば、簡単につぶすことは出来るよ。でも、桜っちを殺すなんてことはしないよ。なんでそんなことを思ったの？」
「いえ、それを一例にしただけです」
随分と変な例えをするなと思っていると、赤い軽自動車が走って来た。
赤と言っても控えめな赤ではなく、ド派手な赤だ。乗っているこっちが恥ずかしくなりそうだ。
運転席の窓が下り、玖未子の顔が見える。
「乗って！」
「このままですか？」
「もちろん！時間がないからね」
俺達が仕方なく乗ると、一番奥に座っている桜木がシートベルトをするように促して来た。
「警察にバレたって大したことはないだろう？」
「いえ、危険なのは玖未子さんなんです」
「シートベルトをつけてね、思いっ切り飛ばすから」
「つけなかったらどうなるんですか？」
「この窓を突き抜けて、地面に直撃！」
玖未子が、前の大きな窓をコツコツと叩きながら言う。
俺達は、とても危険な奴の車に乗ってしまったらしい。急停止など

は心構えをしておいた方がいいだろう。

「全員シートベルトＯＫね？」
「はい。大丈夫です」
「じゃあ、スタート！」

桜木が答えた途端、俺達を乗せた真っ赤な車は、猛スピードで道路を突っ切って行った。

まず、言いたいことはただ一つ。玖未子の免許は取り消しだ。

こんな危ない運転をする奴に、車の免許を持たせておいては危険だ。実際、都会に着くまでに死にそうになった回数は、三十六回。無論、生きた心地がしなかった。

「何回も死ぬかと思った・・・・」

「・・・・」

「慣れている僕でさえですからね」

お互い、口数が少ない割りに、互いの気持ちをはっきりと理解することが出来た。

この車に乗って、唯一無事な人間は玖未子だけだ。一人あっけらかんとしている。

「こっちよ」

道の先を行く玖未子を見失わないように歩く。

しかし、目が回ったように視界が回って見えるから、それも苦難の技だ。玖未子はよく平気でいられる。

大道りを渡り、小道に入ったところの階段を下りて行く。凛が言うには、変なおっさんが入り浸るところと聞いているが、見た目は殺風景で、そんなに面白みもなさそうだ。

階段を下りた先にあるドアの中は、何だか不思議なところだった。
机と椅子が沢山並んでいて、それに負けないぐらい酒も棚に沢山並んでいて、明かりが妙にまぶしいぐらいに点いている。どうとも例えが思い浮かばない。

「ここのどこが面白いんだ？」
「さぁ？僕には大人の感性が理解出来ないよ」

玖未子に聞こえないように凛に聞くが、こちらもわからないらしい。
大人の感性がわからないと言っても、人間の大人より、お前はもっと長生きしてると思うけどな。

「ここにあるものを、全て外に運び出してくれる？」
「あっ、はい。わかりました」
「じゃあ、私は行って来るわね」

玖未子が出て行こうとするところに、ドアが開き、大勢の女達が顔を見せた。誰も化粧が濃い。見てるこっちが気持ち悪くなりそうだ。
俺は、あくまで化粧が濃い奴は嫌いだ。そもそも、妖怪は化粧なんかしない。

「あれ？その子達は？」
「前に紹介したでしょ？いとこと、その友達」

その発言の後の騒動は、話したくない。身の毛もよだつ恐ろしいものだったとだけ言っておこう。話すだけで失神しそうだ。

「じゃあ、行って来るわね、よろしく！」
「行ってらっしゃい」

桜木が見送った後、やっと静かになった。これで、しばらくの間は命が保障された。

「あの、ごめんなさい。何だか大変なことになってしまって・・・・」

「まぁ、桜っちが気にすることはないよ。さっさと運び出しちゃおう。あっ、そうだ！僕ら、このままの姿でやるの？」

「多分、人は来ないと思いますので、妖怪の姿に戻りたかったら戻っても大丈夫ですよ」

「じゃあ、戻ろっと」

言うや否や、犬神の姿に戻っている凛は、短気と言うべきか、行動派と言うべきか・・・・。

「亜修羅は？」

「俺は、妖怪になったからと言って、凛ぐらいに力が強くなることはないからな」

「でも、一応なれば？」

「いや、いい」

「どうして？」

「凛は、どうして妖狐の姿にこだわる？」

「何でだろうな？でも、とにかく！」

半ば強引に言われて、仕方なく妖狐の姿に戻る。どうしてそこまで凛が妖狐の姿にこだわるのかがわからないが、取りあえず戻ってみる。大して変わらないんだけどな。

「そう言えば、王子様のイメージって、どんな感じ？」

俺を見るなり、ふと思い出したように問うて来る凛。
俺のどこから王子様の話なんて取り出したんだ？第一、何で王子様だ。

「さあな、知らん」
「白馬の王子様・・・と言う感じでしょうか？」
「そうだよね、白馬に乗った王子様が助けに来てくれるって言うのが、大体の乙女の夢だよね。それで、白馬の王子様って金髪のイメージがあるんだよね。桜っちはどう？」

「僕もそうですね」
「おい、待て。何で白馬の王子の話になる？俺が金髪なのと、何か理由があるのか？」
「たまたま金髪を見たから聞いてみただけ。さあ、仕事！」

自分から話しかけておいて、話を断ち切る凛。

自分勝手な奴だと思うが、何だか憎めない。と言うか、もう慣れてしまっている。

「まずは、何から運んだ方がいいのでしょうか？」
「大きいものとか？」
「そうですね、大きいものから順に運んで行きましょう」

――それから十分後。

そこは、さっきとは比べ物にならないぐらい、綺麗さっぱりとした場所になっていた。

普通の人間なら、一日以上はかかるであろう量の荷物を、十分で片付けたのだ。

「これからどうすればいいんだ？」
「何かやってようよ」
「やるって、何をだ？」

俺がそう問いかけると、凛が髪を触って来る。

「サラサラだね、髪の毛」
「やたら触るな」
「だってさ、何か、一度触ったらやめられないって感じ。シャンプーのＣＭに出られるんじゃない？」

そう言いながら、嫌がる俺のことなんか無視をしてやたら触って来る。そんなに髪をいじくりたいなら、自分の髪でも触ってればいいんだ。

「凛君も、さほどごわごわではないように見えますけど・・・・」
「うん。確かに、絡まってはいないけど、亜修羅の髪は一味違うんだよ」
「何が違うんだ？」
「触り心地」

そう言われた途端、なんとも言えない震えが体に走る。こいつはたまに、とても変なことを言うから、俺の体に震えが走るのだ。

「気持ち悪いこと言うな！」
「どこが変だって言うのさ？」

やたら髪を触って来る時点でおかしいと思うが・・・。それを凛は理解していないにせよ、あまり気持ちのいいものじゃない。

「そもそも、触ってくる時点で変だ！」

「何て言うかさ、触ってると、フワフワのぬいぐるみを思い出す」

「俺は、ぬいぐるみの代わりなのか？」

「違う違う。髪が柔らかいってこと。こんな感じ、前にもあった気がするんだけどな・・・・」

凛が変なことを考え出す。

人の髪が柔らかいだのどうだのと言うことを普通は差ほど考えもしないだろう。しかし、凛は普通ではない。

そんな凛を無視して、桜木に話しかける。

「それより、何でいつも敬語なんだ？」

「いえ、そんな、敬語と言うか・・・・。確かに敬語ですけど。そんなに訳はありません」

「ねぇねぇ、『叩いて被ってじゃんけんポン』しようよ！」

「なんだよ、それ？」

「じゃんけんをして勝った人は、負けた人の頭を叩く。負けた人は、勝った人が叩くよりも先に防いだら勝ち。逆に、勝った人が先に叩いたら勝ち」

「そしたら、二人しか出来ないだろう？」

「いいんだよ、三人でやっても」

凛の申し出で、あんまりルールはわからないが、とにかくやってみる。

「じゃんけんポン！」

俺がグー、凛がチョキ、桜木がパー。

「あいこでしょ！」

今度は、俺がパーで、凛と桜木がチョキ。

凛が頭をバシッと叩く。桜木は遠慮をしたのか、叩いて来ない。しかし、凛は情け容赦なく、パシッでも、パチッでもなく、バシッと叩いたんだ。

「おい！何でそんなに力いっぱい叩くんだ！」

「だって、ゲームだもん。続きやるよ、じゃんけんポン！」

勝った！俺と桜木が勝って、凛が負け。

勝ったとわかると、凛を叩く。バシッと音がした。

「そんなに本気で叩くことないじゃないか！」

「お前だってそれぐらいの力で叩いたぞ？」

「違うよ！僕はもっと優しかったよ！年上のくせに年下をいじめて・・・意気地なし！」

「お前に言われたくないな！」

「ちょっと二人とも、やめて下さい。他のことをしましょう？」

逆ギレする凛に、宥める桜木。自分から殴ってきたくせに、酷い奴だな。

「そうだね、他のことをしよう。でも、何をするの？」

部屋のど真ん中で丸くなって、お互いの顔を見る俺達。

さっきも、部屋の真ん中で騒いでいたのだ。態々真ん中を陣取らなくてもいいと思うが、何となく真ん中に集まったのだ。

「一緒に、トリックバトルはどうですか？」

不意にドアから聞こえた声に、驚きながらも見上げる。そこには、白衣を着て眼鏡をかけた、何かの研究員か何かのような奴だった。

「あの・・・どちらさまですか？」

「楠と言う者だよ。どうだね？やって見ないかい？」

「やります！面白そうだし！」

「バカ！勝手に決めるな！！」

即答した凛を押さえつけ、よく考える。今、俺達は妖怪の姿をしている。それを見て驚かないなんて、こいつも妖怪の可能性がある。と言うことは、凛の持っている冥道霊閃や、天華乱爪が目当てで近寄って来ているだけかもしれないからだ。

「何か怪しくないか？」

「そうですね、こんなところに入って来るなんて」

「でもさ、そんなに人を疑っちゃダメじゃん！」

「じゃあお前は、一人で対処しきることが出来るのか？」

「大丈夫。今度の主人公は桜っちだから」
「なんでそう言い切れるんだ！」

余りにも能天気な凛に、苛立ちを隠せない。

自分だって狙われるかもしれないのに、今度の主人公は僕じゃないとか訳のわからないことを言い出すし。

「だって、僕はこの前冥道霊閃を手に入れたからね。もしかしたら、桜っちか亜修羅なんだけど、桜っちの身内が出て来るってことで、桜っちが主人公。だから、僕がどうにかなった時は、桜っちが助けてくれるよ」

「わっ、わかりませんよ！僕だって、凛君を守れるほど凄くないので・・・・」
「大丈夫。ねっ、様子を見て、マズそうだったら抜ければいいしさ、やろうよ！」
「ああ。じゃあ、自分の命は自分で守れよ？」

「了解！」

凛が、どうしても、そのトリックバトルと言うのをしたいと言うから、様子見として行くことにした。

「じゃあ、そのトリックバトルに参加させて下さい」
「ＯＫ。じゃあ、ついて来て。会場に案内するよ」

楠はそう言うと、出て行ってしまった。

「とにかく、様子見としてだからな」
「わかってるって♪」
「あの・・・・二人は、そのまま行くんですか？」
「仕方ないだろう、この姿を見られたんだからな」

「じゃあ、せめて耳は隠した方がいいですよ」
「そうだな」

桜木に言われ、獣耳を消す。と言っても、見えなくしただけで、そこにはちゃんと存在している。

「じゃあ、行こう！」

どうしても様子見とは思えない凛の態度に、ため息をつきながら追いかけた。

楠の車が大きなドームの前で止まる。

そのドームは、東京ドームを十個分並べたぐらいの広さがある。・・・こんなところでやるのか？

「ここが会場です」

「大きなドームですね」

「ええ。我が楠建設一番の出来ですからね」

さりげなく宣伝をした後、俺達を車から降ろし、ドームの中に促す。

余程自らのドームを自慢したいのか、時間がないのかと、どちらかだろう。

入り口は自動ドアで、中は、これもまた大きなホールだった。

まだ人がまばらにいるからいいが、人が誰もいなかったら、大きさに威圧されてしまう。

「どうですか？」

「凄いですね！何だかワクワクします！」

「そうですか。それはよかった。ささっ、受付はこちらです。受付で登録をした後、部屋の鍵をもらえるから、その鍵の部屋で休むといい」

楠は去り際にそう言うと、そそくさと走って行った。妙に動きが小さい奴だ。小心者と言うのか？

受付はホールのど真ん中にあり、長い机に二人の女が座っていた。
あんなど真ん中にいて、寂しくならないだろうか？普通だったら、少しは嫌になるだろうな。

「あの・・・トリックバトルに出たいんですけど・・・」
「トリックバトルトーナメントの出場者ですね？では、ここにチーム名を書いて下さい」
「ちっ、チーム名？」

桜木が、想定外と言うようにこちらを振り返る。

俺は、顔を合わせないようにそっぽを向く。

凛はと言うと、再び髪を触って来る。いい加減慣れて来たが、あまり心いいものではない。

「おい、だから触るなって！」
「シャンプーのＣＭに出てみればいいのに。と言うか、むしろ・・・。亜修羅って女だったり・・・」
「するかよ！何で髪から俺が女だと言う結論にたどり着く？おかしいぞ！」

「いや、そうとしか思えないほどだからさ」
「あの、チーム名・・・」
「だからってな、俺がどうして女になるんだ？」
「別に変な意味はないけどさ」

「だから、チーム名・・・」

「変な意味がなくても、俺はそう思われるのは嫌だ！」
「チーム名は『犬神！』」
「わかりました。犬神ですね」

全く話がかみ合っていない気がするが、気にしないでくれ。

俺は、髪のことを話していた。桜木は、チーム名のことだ。ことがゴチャゴチャするようになったのは、凛が鞍替えをしたからだ。

「おい、何で犬神なんだよ？」
「だって、妖狐よりかっこいいじゃないか」
「ふん、ナルシストが。自分がかっこいいと思ってる大バカ者め」

「そんなんじゃないもん！亜修羅みたいに、自分の髪をそこまで丁寧に手入れしてないもん！」
「俺だって、そんなこと一度もしたことないぞ。何も知らないくせに、知ってる風に言うなよ！」
「二人とも、行きますよ」

「どこに？」
「部屋ですよ」
「僕達、後で行くから！」

凛がそう言った途端、空気が一変して冷たくなった。空気中の成分が、全て凍りついたような感じだ。

「みっともないですよ。行きましょう」
「はい・・・・」
「・・・・」

桜木の威圧に、俺と凛は怒りが冷めて、冷静になる。普段怒らない奴を怒らすと怖いって言うが、桜木の場合、怖いどころじゃない。それ以上の何かがあるんだ。何かはあえて言わないが。

「すみませんでした。騒いでしまって」
「いいのよ」

受付の女に謝ってから、先に鍵を持って歩いて行く。

その後を、少しビビリながら歩いて行く。

あいつ、怒らせるとヤバイな。

「亜修羅、さっ、桜っちが・・・・」
「ああ」
「何か話しかけてよ」

「何で俺が話しかけなくちゃいけない！お前が話しかけろ！！」
「でも、僕、怖いよ」
「俺だって嫌だ」

小声で言い合いをしていると、不意に桜木が振り返った。しかし、もう怒っていない様で、辺りの空気が冷たくなることはなく、正常なままだった。

「あの・・・もう怒っていませんので、そんなに恐縮しないで下さい。そんなに怖かったですか？」

無言で思い切り首を縦に振る。凛も同様、硬く口を結んだまま、思い切り縦に首を振っている。

「脅すようなことをしてすみませんでした。大して怒っていた訳ではないんですけど、ちょっとムッとしたぐらいで・・・・」

こいつ、ムッとしたぐらいであんなに怖くなるのかよ?それに、普段はムッともしたことがないのか?いや、今のあいつに反論したら、いいことは起きないな。やめておこう。

「じゃっ、じゃあ・・・・、もう怒ってないの?」
「はい。怒ってません」
「本当?」

「はい。滅多に怒らないと言われてるので。その分、怒ると怖いと友人に言われました」
「そっか、今はとりあえず怒ってないんだね?はぁ、ちょっと気が抜けた」

張り詰めていた空気が溶けて行き、元の空気に戻る。

桜木にはあまり感じないんだろうけど、空気を操る力か何かを持っているんじゃないか?それぐらい空気が変わるぞ。

「まぁ、さっきのことは忘れて下さい」

桜木と付き合っている限り、一生忘れない出来事になったと思う。そう簡単に忘れることは、不可能に近い。

「ねぇ、どんな部屋かな?」
「俺に聞くなよ」
「桜っちはどう思う?」

「・・・普通の部屋なんじゃないでしょうか?特別汚くもなく、綺麗でもなく・・・・」

「そう言えばさ、どうして部屋なんかあるんだろうね?ちょっとしかいないはずじゃないのかな?受付のお姉さんの言葉だと、何だか、しばらくそこにいることになるようなことを言っていたような・・・」

「はい。そうしっかりと言ってましたよ。それに、手ぶらのようですが、何か必要なものはありますか?って聞かれましたから、一応日常生活で必要なものをお願いしますと言ったら、住所を聞かれました。きっと、持って来て頂けるんだと思います」

「おい、待て!俺は、銀行には金を預けてないんだぞ?そいつらが泥棒だったら、全財産盗まれることになるんだぞ!?」

「そっ、そうなんですか?何で銀行に預けないんですか?」

「銀行強盗とかいるだろう?だから、自分で守った方が安全だと思ったからだ」

「きっと大丈夫だよ、信用しようよ」

凛が凄くのんびりとした声で言うから、イラッとする。人間界なんか、金さえなければ生きていけないんだぞ?

「なに呑気なことを言ってるんだ?」

「もしお金を盗まれたところでさ、まだ何でも屋の仕事をしてるんだったら、生きていけるじゃん。前よりはお金を溜めるのが大変にしても」

「おい、働くのは俺なんだぞ?金がなくなった時は、お前等も何でも屋じゃなくてもいいから働け!同じ住人として」

「でも、中三ぐらいってさ、あんまり請け負ってくれないよ？」

「じゃあ、俺の仕事を手伝え。俺なんかな、十六で一つの仕事を一人でやり切ってるんだ。凛達も手伝った方がはかどるに決まってる」

「ええぇ～～」

嫌がる凛を無視し、本当に金がなくなった時は、無理矢理にでも手伝わせると決めて、廊下を歩く。こいつらは、（特に凛は）俺を保護者みたいに思ってるけどな、俺だって、まだ現役の高校生だ。

しかも、一歳しか歳が変わらないのに、俺は働いて、凛達は遊んでと言うのは明らかに不幸だ。たった一歳年上なだけで。

後ろでブツブツ言っている凛を無視して、鍵の番号の部屋を見つけた。見た感じだと、そう広くもないように見える。しかし、ドアが小さい。俺の身長と差ほど変わらない。

「うわぁ、このドアちっちゃいね。亜修羅の身長と差ほど変わらないんだけど。部屋もこれくらい小さいのかな？」

「いえ、ドアが小さくても、部屋は広いってこともあるかもしれません。でも、こう見ると、修さんが大きいのか、ドアが小さいのかわかりませんね。修さんは小さくはないと思うんですけど・・・・。でも、ドアが小さいと、不思議な気分がします」

俺は、未だに桜木の言動に警戒を示しているが、凛は怒っていないとわかった時点で、いつも通りに接している。ある意味、そこは凛の凄いところだと思う。

「取りあえず、考えるよりもさ、中に入っちゃおうよ。そっちの方

が考えるより簡単だし」
「そんなに単純でいいのか？」
「大丈夫大丈夫。受験勉強みたいに眉間にしわを寄せて考え込むなんて嫌いだよ」
「そう言えばお前ら、受験勉強はいいのか？もう十一月だぞ？」

「大丈夫。高校に行くつもりはないしね」
「はい。僕も行きませんから」
「じゃあ、俺も高校を中退しようか。いい加減飽き飽きして来たところだしな」
「僕らだってさ、義務教育って言う制度がなければさ・・・・。いいな亜修羅は。高校生は義務教育じゃないから、無理に行くことはないんだもん」

「そんなことより、さっさと部屋に入るぞ」

たまたま、人間界に来たのが十六の時なのだから、仕方がない。

凛につべこべ言われる筋合いもない。（まぁ、これはつべこべとは言わないだろうが）

そう割り切って部屋の中に入った。

部屋の中には、ど真ん中に大きなベットがあり、部屋の奥に窓がある。右と左にもう一つ部屋があるようだ。思ったよりも広い。

「うわぁ、ベットだ！トランポリンみたい！！」
「おい、お前なんかが飛び跳ねたら壊れるぞ！」
「右側には、お風呂と洗面所がありますよ！」

各自、全く違うことを言っているが、俺が心配しているのは、凛の身の安全ではなく、ベットが壊れないかと言うことだ。

小さな子供が飛び跳ねる分には大丈夫なベットも、凛みたいな奴が飛び跳ねたら絶対に壊れる。これは断言出来る。

「僕、ここで寝たい」
「待て、俺だって初めてベットを拝んだんだぞ?俺だって、寝てみたい」
「でも、寝たいもん！」
「俺だって同じだ！」
「僕だって、ベットで寝たことなんかないもん！」

「嘘つくな。人間界にいる時間が長いお前が、そんなはずがない！」
「そんなに喧嘩するなら、じゃんけんで決めたらどうですか？」
「そうだな」
「えーっ、じゃんけん弱いよぉ」

桜木の申し出にブツブツ文句を言っている凛を無視して、さっさとじゃんけんを始めると、慌ててじゃんけんに参加した。

結果、凛が勝った。・・・・チッ。

「うわぁ〜〜い！僕が勝った！」

「お前、じゃんけんが弱かったんじゃなかったのか？」

俺達がじゃんけんをしている間に、いつの間にか桜木がいなくなっていたと思ったら、奥の方で桜木の声が聞こえる。

「あっ、でも、左の部屋に、二段ベットがありますよ」

「何でそれを早く言わないんだ！」

「えっと・・・二人がお取り込み中だったようなので、割り込んじゃいけないかなと思いまして」

桜木がそう言うと、凛はすぐさま目を輝かせて、授業の時に答えるように、勢いよく手を挙げた。

「じゃあ僕、やっぱり上がいい！」

「ダメだ。お前は寝相が悪いから落ちる。桜木が上に寝ろ」

「でも、そう言うのが苦手なんですよ。高いところで寝るって言うのが。それに、二段ベットの梯子って少し急で怖いです」

「ほら！だから・・・・」

「じゃあ、俺が上で寝る。お前は下で寝ろ。桜木は、こっちでいいな？」

「はい。でも、二人はもういいんですか？ここじゃなくて」

「ああ」

「あああ〜、上〜」

ブツブツ言う凛を無視して、やっとどこで寝るかが決まった。俺も、凄く寝相が言い訳でもないが、差ほど悪い訳でもない。凛と比べるなんて、もっての他だ。

「そう言えばさ、トイレは？」

「それが・・・部屋になかったんです。行きたいんですか？」

「そうじゃないけどさ。まぁいいや。それで、これからどうする？と言うか、まず、トリックって何？どんなことをするの？」

「マジックみたいな物じゃないですか？」

「でも、僕、マジック出来ない・・・」

凛が、凄く悲しそうな顔をする。そこまで悲しむことはないと思うのは俺だけだろうか？

マジックが出来ないからって、死んでしまう訳でもないのに。

「そうですね。僕も出来ません。だから、どうやって相手を騙すかと言うことが大切になって来ます」

「・・・あのさ、亜修羅って炎を操るけどさ、炎に強い？」

「ああ。常に炎を触っていると言う感じだからな」

「よし、それを使おう！亜修羅を火あぶりにする。それで、無事に出て来た亜修羅は凄い！」

「おい、俺だってな、地獄の火炎に焼かれたら死ぬぞ。それ以外は無傷だけどな」

「じゃあ、大丈夫」

「でも、毎回同じはまずいだろう」

「あの・・・人間って、二百四十六ボルト以上の電流が当たると

死んじゃうって知ってますか？」
「そうなのか？」
「はい。前に、僕は雷が直撃したことがあるんです」
「じゃあ、桜っちは幽霊ってことなの？」

「いえ、そうではなくて、その雷は、十万ボルト～二十万ボルトぐらいあったそうです。でも・・・僕は、雷に撃たれても無傷だったんです」
「・・・・」

しばらくの間、言葉が出なかった。俺は、炎を操る妖怪として、炎に強いのは当たり前だ。しかし、桜木はどうだ？人間なんだぞ？なら、そんな電撃を食らったら死ぬはずだ。

「あの・・・続きを話していいですか？」
「あっ、ああ」
「でも、実は、その雷は本当の雷じゃなくて、人間が作り出した弱い雷だったんです。余りにも弱すぎて、針が逆に動いてしまったんです。だから、その雷は、一ボルトもなかったんです」

「桜っち、何でそんな話をするのさ！ドキドキしちゃったじゃないか！！」
「あっ、いえ、ちょっと思い出したので、話してみたくなって。すみません」

桜木の言葉に、呆れと、疲れのため息が吐き出される。

でも、桜木が人間だって言うことが証明できてよかった。実を言うと、桜木が妖怪みたいだと感じていたからだ。だから、たまに不安になるが、これを聞いて安心した。なぜ不安になるのかは知らない

が、不安になるんだ。

その時、ドアの上にあるスピーカーから男の声が聞こえた。

「これから、トリックバトルトーナメントのルール説明などを三階ホールにて行います。出場者のみな様は、三階ホールにお集まり下さい」

「三階ホールか・・・・。普通、ホールって一階にない？」

「いや、二階にも三階にもあるところはあるだろう。一階にしかホールがない訳じゃない。それに、もし、二階にしかトイレがなかったら困るだろう？きっと、それと同じだ」

「トイレって・・・・」

例えに対して苦笑いを浮かべる桜木。例えは例えだ。不意に思ったから使ってみただけだ。凛は、それに納得しているようだし。

「取りあえず、行こうよ。トイレに」

「は？」

「だって、ホールはトイレと一緒なんでしょ？」

「・・・・」

こいつはやっぱりアホか。知能数は、猿以下じゃないのか？

自分に向けられている目がとても可哀想な奴を見る目だと気がついたのか、鋭いところを突いて来る。

「あのさ、猿以下じゃないからね。そうやって人をバカにするのはやめてよ。亜修羅がトイレと一緒だって言うから・・・・」

「俺は、トイレとホールが同じだなんて、一言も言ってない。それに、もしもの話だ。例えだ。わかるか？」
「だってさ、最初に、『例えば』なんて言ってないじゃないか！」
「三階のホールに行くぞ。時間がない」
これ以上言っても無駄かと思い、桜木を促して、部屋を出た。

エレベーターを使って三階のホールに向かう。その途中で会ったのは、普通の服を着た大人だった。学生、しかも、制服の奴なんて誰一人いない。

「学生って、僕らしかいないのかな？」
「さあな。見た限りではそうとしか見えないが・・・・」
「多分、これは泊りがけで行うものだから、親の許可が下りないのでしょう。僕達は、親と言うものはいないので」
「なんか、大人に囲まれるのは好きじゃないなぁ。早く終わって欲しいよ」
「まだ、話すら始まってないけどな」

「そこは黙ってうなずいてるの！」
「そんなに怒鳴るな。話が始まるだろう」

怒鳴る凛を上手く窘めて、ステージの上に立った男を見る。

すると、自然と周りが静かになる。さすがは大人だ。何も言われなくても空気を読んでいる。

「お集まりのみな様、トリックバトルトーナメントにようこそいらっしゃいました。私は、トリックバトルの司会を務めさせて頂きま

す、葛田と申します。以後、お見知りおきを。
次に、このホールを立てた楠建築の社長兼、当トーナメントの最高責任者の楠剣一さんのお話です」

どうでもいいような話を長々と続けられ、いい加減飽きて来たところ、やっとルールが説明された。

「では、トリックバトルトーナメントのルールを説明いたします。トーナメントの組み合わせは、各階に貼ってあるトーナメント表をご確認下さい。そのトーナメント表で、自分のチームとぶつかったチームと戦ってもらいます。と言っても、叩くのではなく、マジックで勝負です。

コイントスで先行後攻を決めて、先行のチームは後攻のチームに自らのマジックを見せます。後攻チームは先行チームのタネを見破れ、自分のチームのマジックが見破られなければ勝利です。先行チームも後攻と同様です。尚、決着がつかなかった場合、両チームとも残ることになります。このトーナメントは、優勝者が出るまで遂行いたしますので、それまでは家に帰れないと思って下さい。敗者の人も同様なので。何か、ご質問はございますか？」

葛田はそう言い終えた後、みなを見渡した。何個か質問はあったが、俺達には関係のないことばかりだった。

「では、ルール説明は以上です。トーナメント表は、三階ホール、二階東階段横掲示板、一階ロビー掲示板に貼ってありますので、各自でご確認下さいませ。一番早くても、明日の九時からトーナメントは始まりますので、それまでの間、ゆっくりとおくつろぎ下さいませ」

やっと話が終わり、みな、前に貼ってあるトーナメント表を見た後、ホールを出て行く。

「明日はないみたいだね」
「取りあえず、どんなことが出来るかとかを考える余裕はあるってことですね。明日、他のチームのマジックを見てみましょうか」
「そうだな。俺はどちらかと言うと器用じゃないからな。お前らに任せる」

「じゃあ、どんなことになっても文句を言わないでよ？」
「どんなことって何だよ？」
「それは・・・・」

何だか嫌な予感のする目で見て来る。どんなことをされるのかは想像がつかないけれど、何だか嫌な予感はビンビンする。

「じゃあいい。俺も一緒にやる」
「そうそう」
「何が『そうそう』だ」
「別に♪早く部屋に戻ろう♪」

「何をそんなにウキウキしてるんだ？」
「なんでもないよ。ただ、ちょっとウキウキしただけ」
「急にウキウキするはずないだろう。何か理由があるはずだ」

「だから、理由なんてないって！」
「だから、無闇やたらに触るなって言ってるだろう」

髪を触って来る凛を引き離し、部屋に戻ることにした。今日は何もない。だったら、明日の為にゆっくり寝た方がいいだろう。

魔界の国宝　雷光銃編　幽霊って、信じます・・・・？

昨日は早く寝て、今は真夜中頃だろう。何か違和感を感じて起きる。すると、二段ベットの梯子の方から、腕と体が見える。

こっ、これは、霊・・・・なのか？

自然と背筋が伸びて、大きく息を吐く。体が強張っているのがわかる。

暗くてよくは見えないが、確かに、体と腕が見える。その下は見えない。上半身だけの霊か？

幽霊なんてあんまり信じていなかったが、実際見てみると、嘘じゃないんだと思う。

それにしても、霊は一向に動く気配を見せない。それどころか、むしろ眠っているようだ。

・・・・眠っている？

自分の考えに疑問を抱き、試しに、その霊を触ってみた。すると、ちゃんと感触がある。と言うことは、霊じゃない。だったら・・・・誰だよ？

「おい、誰だ？」

声をかけても、見知らぬ人物は起きない。勝手に人の部屋に入り込んで、梯子の中間部分で眠るとは。よっぽど神経が図太いか、大バ

カのどちらかだ。

暗がりで顔もよく見えないし、同じように周りも見えないから、変に動いて自分も落ちるだけだ。

「おい、起きろ。誰だ?」

今度は強く揺さぶった。すると、その人物がむっくりと起き上がる。この状態だと、きっと梯子に足がかかっている状態になる。よく後ろに倒れないものだ。

「トイレ・・・・」

「は?トイレ?」

誰だと言う質問に、トイレと答えた人物は誰なのかわかった。耳は妖狐の姿のままだから、自信はある。

「おい、下で寝てたんじゃないのかよ?」

「あのね・・・・トイレ行きたくなってさ」

「そんなの一人で行けよ。子供じゃあるまいし」

「でも、一人じゃ怖いしさ」

「大丈夫だ。トイレに行きたいと思って上って来たが、そのまま寝むるほどじゃ、大したことはない。そのまま寝とけ」

今から再び寝ようとする俺を、凛がつかんで引き止める。眠気が飛んだように、身動きが取れない。

「何するんだよ!」

「だってさ、廊下にも電気がないしさ。今だって、お互いの顔すら

見えないじゃん。本当に真っ暗だから、凄く怖いんだって」
「お前はもう十五だろう?ほぼ大人の仲間入りしてるんだ。一人で暗闇の中ぐらいを歩けなくてどうする?」

「とにかく、行くの!」
「うわっ!?お前、何する・・・・」

凛が思い切り引っ張り、梯子の方に倒れる。そのまま、梯子にいた凛と一緒に床に落ちる。真っ暗闇だから、落ちるってことがあまりわからなかったが、体が宙に浮いたとわかったから、落ちたとわかったんだ。

「何で引っ張るんだよ!」
「だって、よく見えなかったし」
「だからってな、自分が乗っかってるのが梯子だってぐらいわかっとけ!」

しばらく言い合いをしていたが、不意におかしいことに気がついた。いつもなら、言い合いを止めに入る桜木が見当たらない。あんな大きな音を立てて落ちたのだから、普通の奴なら起きるだろう。

「そう言えば、桜木はどこだ?」
「確かにいないね。全く見えないからわからないけど。トイレかな?」
「よし、桜木を探すついでに付き合ってやる」
「なんだかんだ言ってさ、亜修羅っていつもついて来てくれるよね」

凛に言われて、そうだなと自分でも気がつく。なんだかんだ言いながらも、どうせは凛の言うことを聞いてやる。凛は子供だから仕方ないが、俺が聞いてやることもないと思う。

「じゃあ、一人で行け。俺も一人で探して来る」
「ごめん、ごめん！さっきの訂正。全然来てくれない。だからもっと来て！」

「俺はいつもお前に振り回されてる。これ以上文句を言うなら、一生何にもしない」
「ついて来て！」

俺は甘い。激甘のあんこに、砂糖を山盛りにかけたぐらい甘い。そんなものを思うだけで、吐き気がして来るのだが・・・。例えだ。例えの話しだ。

「わかったよ」
「最初はさ、桜っちについて来てもらおうと思ったんだけどさ。暗いところが苦手だって前に言ってたことがあったのを思い出してさ。それで、梯子を上ってる途中に凄い睡魔に襲われて、そのまま熟睡」

「俺は、お前の感性が信じられない。よくあんな中途半端なところで眠れたものだ。珍しく寝相がよかったな」
「自分でも結構びっくりなんだけどね」

部屋の外に出て、静まり返っている廊下を歩いているのだが、一つ気がかりなことがある。

「・・・おい」
「何？」
「離せ」
「嫌だよ。つかんでないと、見えないもん」
「女みたいなことを言うな！」

部屋を出てから、パジャマ（部屋に戻ったら着替えが置いてあった）の裾を離さない凛に言う。確かに、周りは暗闇で相手は見えない。だからと言って、つかむことはないだろう。話しているのだから。

「この際、女の子だと思ってもいいから。どう思ってくれてもいいから！」

「・・・・」

そこまで離すのが嫌なのかと思うと、逆に不思議に思えて来る。俺は、女に見られるのは断固として嫌だ。なのに、凛はいいと言う。余程怖いのか、新しい扉が開きかけているのか・・・・。

前の方だと願いたいものだ。

「ほら、行って来い」

「そこで絶対待っててよ！絶対動かないでよ！！」

「ああ。そんな大きな声を出すな」

やっと、トイレの中に入って行った凛を見て、大きく息を吐く。本当に子供だ。百人中、九十九人が言うだろう。しかし、凛にとっては甘えだそうだ。いや、違うだろう。完全に子供に戻ってるだろうとしか思えない。

その時、影でコソコソと話す声が聞こえた。多分、トリックバトルトーナメントの出場者だろう。

「この大会の優勝賞品ってな、なんでも、魔界の国宝の一つって話しらしいぜ」

「なんだよ、そのうそくさい話」

「それがな、なにやら本当らしいんだ。魔界の国宝は、三つ集めると、世界を支配出来るんだってよ。そのうちの一つが、この大会の優勝賞品らしいんだ」

「ふーん、その話、本当か？」

「ああ、そう言っていた」

盗み聞き（いや、わざとじゃない。自然と耳に入って来るのだ）をしている俺も、最初は信じていなかったが、もし、本当だったらとんでもないことになる。人間が魔界の物に触れたら、ただじゃ済まない。

ましてや、国宝だ。これは、優勝するしかない。選択肢は一つしかないんだ。桜木と凛にも報告をしなくちゃな。

それから数秒後、凛が戻って来た。俺がいなくなってないかと、慌てていたようだけれど、俺はここから一ミリも動いてないぞ。

「よかった、ちゃんといてくれて。いなくなっちゃってたらどうしようかって思ってた」

「それより、まずいことになった。まずは、急いで桜木を探そう」

「何で？」

「話は三人そろってからだ」

しばらく探し回ったが、桜木の姿が見当たらない。ここのドームの中にいないように、どこにもいない。

「どこにもいないな」

「うん。どうしたんだろう？」

探し回って部屋に戻った。すると、出かける前はいなかった桜木がいる。窓を開けて、カーテンも開けて、窓辺に肘をついて物思いにふけっている。

「うわぁ、何だか、物思いにふけってるよ」
「今話しかけるのもまずいな」

そっとドアを閉めようとする俺を、凛が止める。そして、ジェスチャーで、少しだけ開けておけと言っている。仕方なく、薄く扉を開けて覗く。

月の光が部屋の中に差し込んで、桜木の表情は見て取れる。あまり、浮かなく、今にも泣き出しそうな感じの顔だ。こんなところを覗きするのは、よくないと思う。

「桜っち、悲しそう」
「・・・・行くぞ」
「でも、僕らの部屋はここだけど・・・・」

「少し外に出よう」

凛も、桜木の雰囲気がわかったようにうなずくと、廊下の窓から飛び降りた。

外は、街灯と月の光で明るい。今日は満月だ。

「と言うか、僕ら、パジャマのままだよ」

「よし、どこかの屋根にでも座るか」

「おっ、ひっさしぶり！」

偶々近くにあった屋根に座り、空を見上げた。曇り空だが、魔界にいた頃のことを思い出す。

すると、懐かしいと言う思いが波紋のように広がった。

「あのさ、桜っちは、僕らのことを結構知ってるけどさ、僕らはあんまり桜っちのこと知らないよね」

「そうだな」

「桜っちはさ、いつも悲しいとか、そんなことを微塵にも見せないけどさ、本当は悲しかったり苦しかったりするのかな？」

「そうだな。俺達と出会うまで、ホームレスだったんだからな。映画にも取られてないぞ。ホームレス小学生なんて」

「ふざけてないの！僕は本気で言ってるんだ。いつもああやって一人で悲しんだりしててもさ、僕らは何もしてあげられないんだよ？」

凛が、いつになく真剣な顔で言って来る。こちらも、何となく泣きそうな顔だ。

「・・・・」

「可哀想だよ・・・・。もっと頼ってくれてもいいのに・・・・」

何かのドラマの役者みたいに、凛の顔がグシャリと歪む。泣くのを我慢しているようだけれど、すでに涙が出ている。

俺は、無言で凛の肩を叩いた。何も言えず、こうするしかなかった。

「・・・おい、何で俺の気持ちじゃなくて、髪なんだ」

「だってっ・・・おちっ、つくっ、から・・・・」

「はぁ・・・・泣き止むまでだからな」

今は仕方なく触ることを許したが、それよりも、俺の心を慰めてもらいたい。こいつは、態度も言動も大げさだから、俺も大げさに表現しないと、凛に気持ちが伝わらないらしい。

「ありがとう・・・・」

「おい、そんなにしつこく触るなよ」

「これも、まだ、泣き止んでないから」

凛の言葉に、思わず黙り込む。こいつは、泣いている時でさえ、口だけは達者だ。そして、人の気持ちを考えていない。

俺は、さっき肩を叩いた時に、出来るだけ気持ちを入れたつもりだが、凛は俺の気持ちは無視し、髪を触っている。俺が何を言ったって無駄ってことじゃないかよ。

俺よりも、髪の方がいいと言われてるようなものだ。そう言われると、少し情けないが、いじけてしまう。

「・・・・僕、子供みたいだよね。」

「本当にな。と言うか、泣き止んだなら髪を触るな！」

やっと泣き止んだ凛の手を髪から離させる。こうでもしないと、何時までも離しそうに無いからだ。

「でも、僕は子供なんだから、いいじゃないか！」

「子供だって、いつまでも子供じゃいけないんだ。俺だって、もともとは子供だったんだ」

「そうなんだぁ～～」

俺は、凛の反応に思わずガックリと肩を落とす。

確かに、俺の子供の頃が想像出来ないのはわからなくもない。ただ、子供の頃がないと思っていたとは驚きだ。俺だって、子供の時代はある。

どんな未来生物でも、生長の過程で子供時代は必ずあるだろう。大人から生まれて来る生物を知っているなら、教えてもらいたいぐらいだ。

「とにかく、俺がいいたいことは、俺はお前と歳の差が一つしか違わないと言うことだ。だから、保護者とかって思うなよ」

「何でそんな風に言うのさ？」

「お前も、俺みたいに自立しろって言うんだよ」

「そんなの、当分無理だよ。子供時代を一人で過ごして来たからね」

「・・・・はぁ」

ため息をつきながら凛の方を向くと、何だか悲しそうな顔をしている。今までのふざけた様子はなくて、心からそう感じているようだ。

「僕さ、ずっと一人だったから、亜修羅達に出会えて本当に嬉しかった。誰も、僕の存在を認めてくれる人はいないと思ってたから、亜修羅のことも、利用するだけ利用して、用が済んだら捨てようと思ってた。でも、一緒に過ごすうちに、本当に楽しくて、こんな楽しい思いをしたのは何年ぶりだろうって思うようになって。

亜修羅から見れば、この言葉も嘘だって思われるかもしれないけど、そんなことはないよ。僕は、今の生活に幸せを感じてる。自分を否定しないで、ちゃんと理解してくれる仲間がいて、幸せだと思ってる。・・・この言葉も信じなくても、これだけは信じて欲しい。僕は、二人に心から『ありがとう』って思ってる」

凛の言葉に偽りがないと言うことは、顔を見て直ぐにわかった。

しかし、凛の言葉を全て受け止める度胸は俺にはない。それに、そんなにたいそうな言葉をもらえるような立場でもない。

ただ、凛の言葉は信じようと思う。俺も、似たような気持ちだからな。

「俺も、似たような気持ちだ」

「それって、ありがとうって思ってるってこと？」

それとは少し違うように感じたが、とりあえずうなずく。すると、かなり嬉しそうにガッツポーズをした。

こいつは、バカみたいに明るいけれど、過去で苦労しているんだなと思った。しかし、それを言葉に出して言うことはしない。なぜなら、上手くはぐらかされるから。

だから、心で思うだけにしておくんだ。

それからしばらくして部屋に戻ると、桜木は何事もなかったかのように寝ていた。それを見て、ほっとしたのは確かだ。

「何だか、気持ちよさそうに寝てるね」

「ああ、そうだな」

桜木を確認してから、俺達もまた、ベットに入った。しかし、目が冴えて眠れない。それは、凛も同じようで、下から声をかけて来た。

「ねぇ亜修羅、起きてる？」

「ああ」

「僕さ、思ったんだけど・・・・」

「何を思ったんだ？」

そこで言葉を切る凛に聞く。何を思ったのか、はっきりしないんじゃ無理があるだろう。凛の心が読める訳でもあるまいし。

「今日、お寿司食べたい」

「・・・・は？」

「前に言ってたんだ。桜っちがさ、お寿司を食べるのが夢なんだって。だから、明日の戦いの前に、夢を叶えてあげたいなって」

「寿司が夢・・・・」

何だか、とても可哀想な桜木に同情したくなるが、そんなことを言っても、このドームからは出られないし、かと言って、ここに寿司屋がある訳じゃないだろう。第一、学校に行くのに金は持って行っていないから、すっからかんだ。

「僕さ、それを聞いた時、凄く可哀想だなって思ったんだよ。今まで家がないって言う時点で凄かったし。お寿司なんて、夢のまた夢なんだろうなって」
「俺だって、嫌と言うことはない。ただ、金はないし、第一、寿司屋なんかどこにあるんだ?」
「ドームの中の十階にあったよ」

「それって、もはやドームじゃなくて、半球型のビルじゃないか・・・」
「それに、お金だったら今から取りに行けるでしょ」

俺の呟きを無視し、凛が言う。凛は表現が大げさな上、考えることも無茶ぶりだ。付き合っていて疲れるタイプだが、慣れればそう悪い奴でもないと思える。ただ、ベタベタくっついて来るところだけは直してもらいたい。

「そうだな。丁度眠れない。だったら、家から持って来るか」
「おっ、何だか、今日は僕の意見に素直に従ったね」
「お前の為じゃない。桜木の為でもないが、とにかく、気が向いた」
「奥さんったら、素直じゃないのよねぇ、田中さん」

「おい、おばさんになってるぞ。それに、架空の人物に話しかけてるんじゃない。頭でも打ったのか?」
「そんなこたぁねぇぜ。おやっさん。あっしは元気溌剌でっせ」
「おい、誰だよそいつ。俺、そんな奴の言葉なんか知らないぞ」
「坊ちゃんは勉強が足りないようですね。私がみっちり・・・」
「いい加減にしろ!行くならさっさと行くぞ」

「痛いなぁ、叩くことないじゃないか。て言うか、どうやって叩い

たのさ。下に下りて来ないで」
「ぶら下がってるんだよ。犬神のお前なら簡単だろう」
梯子に絡めていた足を解き、空中で一回転をして、地面に足から着地する。あいつなら、空中で三回ぐらい回転しそうだ。
「まあね、人間の小学生の子でも出来るよ」
そんなことを言っている凛を無視し、今度は部屋の窓（さっき、桜木がいた窓）から飛び降りて、真下にあった家の屋根に飛び降りる。その後から、凛が飛び降りて来る。
「おい、窓の鍵は閉めて来たのかよ？」
「大丈夫、何とか閉めて来た。ちょっと急いだ方がいいかもよ。時計を見た時、三時だったから」
「そうか。まぁ、屋根の上を走って行けば安全だと思うけどな。一応ってこともあるからな」
そう言うことで、屋根の上を走り、誰にも見つからずに家に戻れた。しかし、家の中で何か物音がする。
まさか・・・泥棒か？
「おい、家の中からゴソゴソと音がするぞ」
「もしかして、泥棒？」
凄い小声で話しながら、そっと裏に回り、ベランダから中を覗く。カーテンは、幸いなことに開いていたが、あまり好ましくないものを見てしまった。やはり、泥棒だった。

「おい、どうする？」
「もちろん、盗まれる前に捕まえる」
「どう言う手段で？」
「正面突破！」

凛の意見など聞いても無駄だ。大体想像はついたし、（現に、思った通りのことを言った）その言葉への返事も決まっている。だから、自分でちゃんと考えよう。凛に聞くな。

「何？その顔。自分から聞いたくせにさ」
「だからってな、自慢げに『正面突破！』なんて言う奴がいるか？」
「だって、それしか手がないんだもん。それに、相手は人間だし、もし包丁とか銃とかを持ってたりしてもさ、銃の弾は避けられるし、包丁だって、刺さっても死にはしないでしょ」

「言っておくけどな、俺は、そんなに死にそうになってまであいつを捕まえたくはない。第一、凛にとっては簡単なことかもしれないけど、俺は、凛のように戦闘種族じゃない。勘違いするな。俺は頭脳だ」
「とか言っちゃってさ、部類はそう分けられてても、亜修羅ってさ、結構突発的なことばかり言うじゃん」

凛に言われて、確かにそうだとは思う。けれど、凛よりは物事を深く考えて言っているつもりだ。凛こそ、まさしく突発的な発言の仙人だ。そこだけは尊敬する。

ここで、少し種族について話しておこう。

妖怪の種族は、大きく三つに分けられる。戦闘種族、頭脳種族、転生種族だ。戦闘種族は、主に戦いを好み、三つの種族の中では一番

戦闘能力が高い。これは、凛だ。頭脳種族は戦闘を拒み、頭脳で対決をする。出来るだけ戦闘は避けるタイプだ。これは、俺。最後に、転生種族とは、死んでも何度でも蘇ることが出来る不死身の種族。凄い種族故に、数が極わずかで、出会った奴は珍しいと言われている。これが、妖怪の三つの種族だ。

その種族は生まれつきに決まり、部類は関係なく決められる。例えば、同じ犬神でも、戦闘種族になったり、頭脳種族になったりもする。転生種族は滅多にないだろう。これは、例えるのも無駄なくらい確率が低い。

「だからさ、行こう」
「・・・・まぁ、この場合・・・・仕方がないのか？」

俺のボヤキを無視し、凛がベランダの窓をソロソロと開けて中に入る。続けて、俺も中に入る。

その時、月の光が入って来ないとわかった泥棒が後ろを振り返った。そして、何もしゃべる間もなく、大きな袋をサンタクロースみたいにかつぎ、ドアをバンッと開け放ち、出て行った。

「ほら、亜修羅が遅いから！」
「俺のせいにするな。あのクソ泥！」

「口悪いって。大丈夫。直ぐ捕まえられるから」

泥棒を追いかけながら、余裕の口調で話す凛。俺は、凛のように余裕にはなれない。

泥棒は車に乗り込み、エンジンを全開にして走り出した。

おい、まだ追いかけるのかよ。車なんて追いつけるとは思えないけどな。

「よし、あれくらいのスピードなら大丈夫」

「お前は平気かもしれないけどな、俺は全然平気じゃないんだぞ！」

「えっ、体力なさ過ぎ」

俺は、イラッとして凛を殴る。俺が変なんじゃない。こいつがおかしいんだ。

「まぁ、取りあえず、こっちは屋根の上を走ろうよ」

凛に窘められ、納得はしないものの、車を追いかける。その車は、今度はコンビニの横に止まり、コンビニの中に入る。あの泥棒は、追いかけられてるって言うのに、まだ盗みを働く気か。それとも、上手く逃げたつもりなのか？

真夜中のコンビニは、人気が少ないと言えども、二、三人の客がいた。しかし、そんなの関係ない。

「強行突破するぞ」

「・・・・僕の言葉と同じにしたくないから、無理に言葉を変えたみたいだね」

「いや、そう言う訳じゃない。もう、コンビニであいつらを仕留める」

「・・・・全く、頭脳種族じゃないって。戦闘大好きじゃん。亜修羅って・・・・・」

「何か言ったか？」

「いや、別に。行こうか」

凛の呟きははっきり聞こえたが、あえて聞こえてない風に聞いた。
理由なんて、ただムカつくからだ。

コンビニの中に入る前に、中を確認する。すると、二人のうちの一人が、人質を殺すなどと怒鳴り散らし、もう一人は、コンビニのレジを開いている。あいつら、本当にバカだな。同情するぐらいに。

「おい、凛・・・・」
「泥棒！観念して捕まれ！」
「あのバカ・・・・」

凛は俺の言葉も聞かずに、のうのうとコンビニの中に入り、刑事ドラマで言うような言葉を言う。それで、相手にも気づかれたとバレ、こっちもコンビニの中に入る。

「これ以上近づくな・・・・でないと、撃つぞ！」

女の客の首を押さえ込むようにして左手で抱え、右手の銃を凛に向けている。

しかし、凛は笑顔で前にズンズン進むから、逆に怖いらしい。銃を持つ手が震えている。しかも、パジャマだ。・・・・これは関係ないか。

「いいよ。その弾、避けてあげる」
「おい、いくらかっこつけてもな、お前はパジャマだってことを覚えとけ！」
「あっ・・・・」

凛が、今気がついたとばかりにパジャマを見下ろす。そのパジャマは言わずと知れている、ピンクの可愛らしいウサギ柄。俺は死んでも着たいと思わないパジャマだ。それを着ていたら、いくらかっこいいことを言っても、かっこよさがゼロになる。

「俺は人質をどうにかするから、凛は泥棒を頼んだぞ」

「任されちゃった♪」

喜ぶ凛をあえて無視して、人質の方に近寄る。それで何かを聞いたら、心配でたまらなくなりそうだ。

「怪我はないか？」

「あっ、ああ。でも、この姉ちゃんが銃で撃たれた」

男の指差す方に目をやると、確かに、服が血まみれになっている二十代ぐらいの女がいる。まずは応急処置が必要そうだな。

「おい、あのウサギの柄のパジャマの方の奴が銃で撃たれるぞ」

俺が女の応急処置を行っている間、男が話しかけて来る。もの凄くうざいと思うが、不安なのだろうと思い、何とか突き放さずに答える。

「あいつなら大丈夫だ」

その時、銃声が聞こえた。無論、泥棒が凛に向かって撃ったのだろう。凛はそれを素早い動きで交わした後、凄いスピードで泥棒に近づき、人質をつかんでいる方の男の腹を殴り、力が抜けたところで人質を自分の方に引っ張り、そのまま手を離してレジの男の腕に蹴

りを一発食らわせた。

あいつは手加減ってものを全く知らず、ボキッと言うような嫌な音がしたかと思うと、泥棒が苦しみだした。それまでの時間は、約一秒。みんなには、何が起こったのかわからなかっただろう。

「その人、銃で撃たれちゃった？」

「ああ、そんな感じだ」

「じゃあこれ。傷口に塗ると治りが早くなる薬」

「・・・あんたが塗ってやれ」

凛が助けた女の客に、薬を投げてよこす。あまり気が進まない。

「おい、あの泥棒凄い苦しんでるけど、大丈夫なのか？」

「どうなんだろうね、結構優しくやったつもりだけど、骨は折れてるか、砕けてるか・・・・」

「・・・・」

男の顔がサーッと青ざめるのが簡単に見て取れた。当たり前だ。

「おい、いい加減にしろ。俺らはここら辺りで足を引こう。警察には誰かが通報するだろう」

「おっ、お金は？」

「ああ、そうだったな」

盗まれた金を取り戻し、やっぱり手元にあるのが一番だと思って、そのまま持って行く事にした。大金を持っていると危険だと言われるが、それは人間の場合だけだ。妖怪の俺は違う。人間に襲われたって、絶対に大丈夫だ。妖怪なら・・・・。

日が大分明けて来た。そろそろ帰らないとまずいかもしれないと思い、急いで帰った。

「危ない、四時だよ。後一時間で日が昇るところだったよ」
「あいつ、またいなくなってるぞ」
「あっ、本当だ。何だか、しょっちゅういなくなってるね、桜っち」

もぬけのからとなったベッドを見下ろし、しみじみ思う。真夜中に、あいつは何回起きて移動をしているのか。本当に調べてみたい。

「そう言う問題じゃないだろう。変に思わないか？」
「何が？」
「・・・・」

その時、ドアが開き、探していた桜木が入って来た。特に変わった様子もなく、おかしいところもない。

「あっ、二人とも。起きてたんですか？」
「桜木、こんな時間にどこ行ってたんだよ」
「トイレですよ。冷え性なもので、布団を被ってても、足が冷えてしまうんです」

「そうか」
「それよりも、二人の方がどうかしたんですか？パジャマがグチャグチャですよ」
「ああ、ちょっと出かけて来た」
「そうなんですか」

不自然な言葉に対し、桜木は何も言わずに納得する。妖怪のことを知っているから何も言わないのだろうが、知らなかったら、きっと

ちゃんとした答えを問うて来るはずだ。

「・・・盗まれました」

「何が？」

「雷光銃が、何者かに盗まれました」

「何だって！？」

まずは、桜木が優勝賞品が魔界の国宝の一つだってことを知っていたことに驚き、それに加え、雷光銃が何者かに盗まれたことにも驚かされた。

「実を言うと、二人が出かけている間に、楠さんに頼まれていたんです。雷光銃を守るように。楠さんは本当は人間ではなく、魔界の国王のいとこなんです。なぜ、雷光銃を持って来たのかと言うのは、いずれ訪れるであろう種族争いのためなんだそうです。そこで、人間界に雷光銃と同じ波長を出す人を発見したので、その人に雷光銃を託すらしいです」

「ちょっと待てよ、種族争いって何だよ？種族争いは妖怪での問題だろう？人間は関係がないんじゃないのか？」

「はい、ありません。でも、しょうがないんです。その使命から逃げることは出来ません」

思いも寄らない方に話が向かい、戸惑って話しも出来ない凛は、首を縦に振り続けている。

俺は、何とか話すことが出来るが、頭が混乱して来る。

「何で国宝が役に立つんだよ？」

「わかりません。でも、魔界の国宝を三つ集めると世界を支配出来

るとか、そう言うのは単なる嘘らしいです。本当の力は知らないのですが、それだけは本当みたいです」

そんなことを話していると、ドアがノックされた。こんな時間に人の部屋に来るなんて、どんな奴だ。

「楠さんです。本名は阿紋さんですけど」

桜木が、俺の気持ちを見透かしたように言い、ドアを開ける。そこには、楠が立っていた。

なるほど。トリックバトルは、単なる人集めの為のものだったのか。

「明日夏君から聞いた通りだ。それで、君たちを妖怪と見越して、二つ頼みごとがある・・・・」

「断る」

「まだ、何も言ってないじゃないか」

「おい、大体想像がつかないのか？こう言う場合、一つ目は雷光銃を見つけ出して、二つ目はその周波数に合った人を探して欲しいとか言われるに決まってる。そんなのごめんだ。行事にだけはしっかり出ないとならないからな」

「いや、違う。頼みと言うのは、雷光銃を見つけ出して、周波数の合った人を探す。これがワンセットだ。二つ目は、またもや、人間界で行方が不明になった烈火闘刃を見つけ出し、更に周波数の合った人間に渡してもらいたい」

「・・・俺は、人間の言うことなんざ、聞かないぞ」

「私は妖怪であるし、これは頼みと言うより、何でも屋の依頼と受

け取ってもらいたい。もちろん、報酬も出す。だから、頼む。私には荷が重過ぎる」

楠はプライドを踏みにじり、土下座をして頼み込んで来た。

そこまでされてもな・・・命を危険にさらすことだ。報酬の値段で決めよう。

「いくらだ?」

「当ててみて下さい。ちなみに、四つある条件のうち、一つずつの金額です」

聞いているのはこっちなのに、なぜ聞かれなくてはならないのかと困る。

答えを求めるように凛を振り返るが、わからないと目で告げられる。

「十万?」

「いえ。桁が違います」

「百万?」

「はずれです」

「・・・・」

俺は、次の言葉を言うのを躊躇った。

確か、一つの条件でもらえる金額だったはずだよな?それじゃあ、余程危険で、大事な仕事なのか。報酬がそんな大金なんて、今まで受け持ったことがない。せいぜい百万程度だ。今回の仕事は、その額を簡単に上回るらしい。

「千万・・・・」
「一億です」
「おい、血迷ったか？」

「いえ、本気です。この仕事には、それなりの価値があります。何でも屋のあなたなら、報酬の額が高いほど危険で、慎重に行わなくてはならないことを知っているでしょう」

「桜木は、それを承知したのか？」
「はい、種族争いとかはよく分かりませんが、一応。でも、店主は修さんですから、修さんが決めて下さい」

「凛は？」
「僕は、亜修羅に任せる。そう言う難しいことを考えるのは苦手」
「そうか。俺の答えはとっくに決まっている。もちろん、承諾した。その代わり、後で金が足りないとか言うなよ？こっちは命を懸けるんだ」

「そうですか。お金の方なら大丈夫ですよ。一応魔王のいとこで、お金だけは腐るほどありますから」

何だか、話が飛び過ぎてよくわからない面もあるが、とにかく断ろうとは思わなかった。

報酬が高いとかどうのこうのじゃなく、魔界の国宝とも言われるものを見てみたかったし、それを操る者を見てみたかったのだ。

魔界の国宝　雷光銃編　ちょっとした会話

楠は話をした後すぐに帰って行ったが、俺達はそのまましばらく立っていた。

「何だか、話が見えなくなって来たよ。あの人は、魔界の国宝のことを、二つしか言ってなかった。それって、僕が持ってるって知ってて言わなかったのかな?それに、その冥道霊閃を持ってる僕は、種族争いやらに深く関わることになるの?」

「わからない。あいつの考えてる意図がわからない。一応請け負ったが、最悪は、無理矢理にでも取り消しにすることもあるかもしれない」

「でも、相手は王族の一人ですよ?機嫌を損ねたらまずいんじゃ・・・」

「そんなことが怖くて、何でも屋なんか出来る訳ないだろう。何度も王族に目を付けられて来たが、交わして来た。今回も同じだ」

凛と桜木が、「凄い」とまでは言わなかったが、顔が思い切り言っている。この二人は、気持ちが表情に出やすいから、相手に考えを読まれることがありそうだ。

「まぁ、難しいけどな、王族だから。ほぼ、スレスレで避けて来たぐらいだ」

「・・・・」

「スレスレって?」

「スレスレはスレスレだ」

「でも、そのスレスレってどんなスレスレ?」

「だから、それは、スレスレはスレスレだ」
「ああ、何だかスレスレってばっかり言ってるから、スレスレの意味がわからなくなって来たよ」
「お前が聞いて来たんだろうが！」

「待って下さい。そんなことで喧嘩をするよりも、今は、どうやって盗まれた雷光銃を取り戻すかが先決じゃないですか？」
「そうだな。まずはそれからだ」

俺は壁によりかかり、凛はそのまま床に座り、桜木がベットに座る。

「でもさ、何の手がかりもないのに、探せとだけ言われてもさ、思い切り困るよね」
「まずは、自分が知っている情報をお互いに出し合おう。それを元に考えるんだ」
「僕は、何にも知らないよ」

「俺が知ってるのは、魔界の国宝が大会の優勝賞品だってことと、その情報が漏れていたことだ。きっと、その情報が流れて行って、犯行に及んだ奴の耳に入ったんだろう」

「そうなんですか？やっぱり凄いですね。僕は、楠さんにその事実を二人よりも早く知りましたが、一言も口に出していないはずです。雷光銃は地下にある特別室に、警備員とトラップに包まれて置いてあったのですが、犯人はそれをものともせずに通り抜け、雷光銃を盗みました。手口は、トラップは上手くかいくぐり、警備員は煙球で目くらましをしたようですが、警報が鳴って駆けつけた時には警備員は眠っていたので、きっと、その手の物が入っていたんでしょうか？窓が開いていたから、窓から出たんだと思うのですが・・・」

「そんなに詳しく知っているなら、何でもっと早くに言わないんだ」
「二人が戸惑っているようでしたしね、順序を立てて」
桜木の言うことも一理あると思うが、今は順序とかよりも、早く見つけ出すことが先決だ。そう言うことは、早く言ってもらいたい。
「それで？」
「犯人を特定する手がかりはないかと捜してみたのですが、全くなかったんです。でも、犯人は人間じゃないことがわかります。あの煙を一口吸うと、五時間ぐらいは目を覚まさない程度で、かなりの量でした。なので、とても大きな入れ物を持ってトラップをくぐらなければいけないのですが、両手を使ってしか避けられないトラップなども、綺麗に避けていました。だから、きっと妖怪だと思います」
それは、犯人を特定する大事なところじゃないかと思うが、一応何も言わずに聞いている。何かを言ったら、大切な情報の前に、その問いの答えを答えそうだからだ。
こいつも、凛に似て来たな。俺も、いつか凛に似てしまうようになるのだろうか。
「僕さ、そう言う探偵みたいなことや、ミステリーって苦手なんだよね。探偵とかが謎解きをするけども、全くわからない。意味がわからない。『この人、何言っちゃってるの？』ってぐらいわからない」
「俺だって、差ほど好きな訳じゃない。むしろ嫌いだ」

「でもさ、亜修羅は頭脳種族でしょ？」
「それは、俺とは関係ない。仮にその種族に入っていたとしても、本人をそれで縛り付けることはない」
「今、何気にいいこと言ったね」
「話がずれてますよ、戻しましょう」

桜木に言われて、再び雷光銃が盗まれた件について話す。

「・・・おい、楠は、この大会は人を呼び集めるために開いたって言ってたよな？だけど、その大事なものが盗まれると、大会はどうなるんだ？」
「どうでしょうかね。十一月の空は変わりやすいですから」
「それ、本当か？」

「いえ、どうかはわかりません。ただ、今が十一月なので」
「そんなことより、どうなるか聞いてるか？」
「いえ、全く。でも、このまま続行だと思いますけど」
「なんでだ？」

「もしかしたら、この大会の参加者の中に犯人がいるかもしれないからです」
「今の言葉って、探偵が言いそうな言葉じゃない？それと似たようなことを聞いたことがある」

桜木は、そこの辺りを意識して言ったのだろうか？それとも、ただ単に、意味を考えずに言ったのか。凛の言葉が入ると、前の方があっているように聞こえるが、本当のところはどうなのだろうか？

「修さん、変なところで考え込まないで下さい」
「あっ、ああ。じゃあ、俺達は、まだここにいなくてはいけないと

言うことか」
「そう言うことになりますね」
そこで、話は一端終了。最初から少し話題がずれたが、大事なことであるのに変わりはない。
そうか、楠もちゃんと盗まれることも想定して作っていたようだ。さすが王族。
不意に、凛が話しだす。
「あのさ、僕、クリスマスはしたいよ」
「・・・・は？」
「だから、もうすぐ十二月でしょ？だから、この仕事、結構長引きそうだしさ。だけど、やりたいなぁって思って」
「もう直ぐ十二月ってな、まだ十一月に入ったばっかりだぞ？気が早すぎじゃないのか？」
「だって、クリスマスは予定があるからさ、イブに三人でやりたいなって」
「だからって、何で急にクリスマスなんだ？」
「だって・・・・」
凛はそこで黙り込むと、泣き出した。桜木が宥めるけど、泣き続ける。
クリスマスに、何か悲しい過去でもあったとでも言うのか？よくわからない。凛の行動は、自らの予想すらも覆すから、いつも戸惑う。
「僕も、その気持ちはわかります。クリスマスでみんなが浮かれて

いるのに、自分だけ一人、犬小屋で過ごすことの虚しさ」

少し・・・いや、かなり違うと思うが、クリスマスに（こっちに来るまで、クリスマスと言う言葉自体を知らなかった）何の思いでもないのは、俺だけらしい。まぁ当然と言えば当然だが、あまりいい気はしない。

「そうだよね。みんな友達とワイワイ楽しんでるのにさ、自分だけ一人ポツンと屋根の上から見てたりして。それでさ、雪が降って来た時なんてもう・・・・」

「そうですね、悲しいですね。雪が神様からの贈り物だと思ってましたよ」

二人は、俺には想像もつかない世界に入り込んで、泣いて、お互いを宥めあっているが、話が全くわからない。クリスマスを一人で過ごすことが、そんなに悲しくて嫌なことなのか？

「・・・まぁ、クリスマスをするのはいいが、イブとクリスマスが終わったら、直ぐに仕事に戻るからな」

「えっ、お正月は？」

「まだ先の話だ」

「じゃあ、バレンタインは？」

「それは、お前には関係ないだろう」

「じゃあ、三月三日は？お雛様は？ホワイトデーは？」

「おい、取りあえず、何かある日を上げてるだけだろう？第一、お雛様って言うのは、女の祭りだろう。俺達には関係ない」

「・・・・でも、クリスマスはやるよね？」

「・・・・」

何も言わずに後ろを向くが、視線を思い切り感じる。

これは・・・・やるって言わないと、いけない雰囲気だぞ。なんで、そんなことを気にするのか・・・・。

「ああ」

「やったーー！！」

「やりましたーー！！」

二人は、抱き合って喜んだが、そこまで喜ぶことはないと思うぞ。

「クリスマスの用事ってなんだ？」

「えっ、何だろうねぇ」

さっきまで泣いていた人物とは思えない顔で言う。

・・・ムカつく。人がちょっと気にしてやれば、調子に乗りやがって。

「何だよ、そのなんだろうねぇって言うのは」

「大体想像がつくじゃないか」

「そうなんですか？」

「そうだよ。誘われたんだ」

「凛君、学校ではモテますからね」

そこまで言われて、やっとわかった。クリスマスと言われて、ピンと来るものなんて、一つもないから、わかるはずがないだろう。

「そうか」
「あれ？何だか普通の反応。つまんないなぁ」
「俺がどんな反応をすると思ったんだ？」
「言わない、言ったら怒るもん。短気だからさ、一々、気を遣わなくちゃなんない」

「気を遣わなきゃいいだろう」
「それより、クリスマスは休んでいいんだよね。全てを忘れて」
「全てを忘れてもらっちゃ困るが、まぁ、約束をしてるならしょうがないだろう」

クリスマスは、確かキリスト教の誕生日だ。それが、なぜクリスマスツリーを飾り、ワイワイにぎわっているのかがわからない。

「そう言えばさ、亜修羅の家って、クリスマスツリー・・・ないよね？」
「買えって言うのか？」
「そうだよ。でないと、クリスマスじゃなくなっちゃうよ」
「クリスマスと言うことを理由に、休んでいるだけだと思うけどな」

「そんなことはないよ。とってもいいことだよ！」
「買うって、いつ買いに行くんだよ。今日ぐらいしか時間がないと思うぞ」
「じゃあ、今日行こうか」

そんなつもりで言った訳じゃない。今日行こうなんて、微塵も思っていなかった。

ただ、軽い気持ちで言っただけなのだが・・・。

「今日行くって言ってもな、そう簡単に・・・・」
「だって、今日ぐらいしか行く時間がないんでしょ？」
凛に言われて、しばらく考えた後、凛を引っ張り、部屋の隅まで連れて行く。もちろん、桜木は不思議そうな顔をしたが、無視だ。
「今日、寿司に行くんじゃなかったのか？その為に泥棒を追いかけたんじゃないのか？」
「買いに行ったついでに行ってくればいいよ」
「依頼の期限はないようだしな・・・・」
期限があるなら最低限しか動きをやめることは出来ないが、決まっていないようだし、まぁ、いいだろう。出来るだけ早くやった方がいいとは思うが・・・・。
「まぁ、いいか」
「じゃあ、早速行こうよ」
「は？どこに行くんですか？」
「クリスマスツリー等を買いに行くんだよ」
「今日ですか？」
「そう。今からね」
「でも、まだやっと七時を回ったばかりです。どこの店も閉まってるんじゃないでしょうか？」
「もちろん、朝ごはんを食べてから行くんだよ」
「ああ、そうなんですか。それなら大丈夫ですね」

どうして朝ごはんで桜木が納得したのかと言うと、凛は、よく食うし、遅いしで、待ってる時間が無駄だと思うほどだ。その間は、各自それぞれ他のことをしている。

「じゃあ、朝ごはん♪朝ごはん♪」

廊下を朝っぱらから鼻歌交じりにスキップして歩いて行く凛に、少々苛つく。

「おい、鼻歌を歌うと、歌が下手になるって知ってるか？」
「そんなの知らないもん。それに、歌は下手だから、これ以上落ちたところで大したことないよ。桜っちは知ってるよね？」
「あっ、そう言えば、前に僕も誘われて行ったんですけど、ちょっと下手でした・・・・」

「所謂、音痴ってことだろう？」
「まあね。そう言うこと」
「じゃあ、鼻歌を歌うなよ」

「歌うのは好きなんだよ」
「何だか可哀想だな」

歌が好きなのに音痴なのは可哀想だ。その人が、自分の音痴さに気がついていないならまだいいが、気づいていなくて回りの奴を巻き込むと、そいつも可哀想だし、周りで聞いている奴も可哀想だ。

やっぱり、気づいていた方がいいかもしれない。人を巻き込んでカラオケに行こうと言う気を起こさないかもしれない。

「でも、その時、僕以外は女の子だったんですけど、みんなそんなに嫌そうじゃありませんでしたよ。上手いとは言えなかったんですけど」

「それは、そいつらの耳が聞こえてないからだ」

凛に聞こえないようにボソボソと話す。後ろでそんな話が繰り広げられているともしらずに、上機嫌でスキップをする凛。はたから見れば、変な連中の一言で言い表せるだろう。

食堂に入ると、何も知らない人間達少数が、朝食を食っている。そう言う奴らの立場になってみたい。馬鹿みたいにふざけてみたいと思う時がある。しかし、少しでも気を抜くと、つけこまれるんだ。だから、そんなことは許されない。

「フレンチトーストもあるしな、どれがいいかな？やっぱり・・・・」

言葉では迷っているが、明らかに迷っているとは思えないほどに、皿の上にドンドン積み重なって行く食い物。見ているだけで、腹が一杯になって来る。

「凛君は凄いですね、あんなに食べられて。僕なんか、食べたくても食べられなくて、胃が縮んでしまったようです」

「あんなに大食いになるよりはマシだ」

「でも、よく食べる人って太ってない人が多いですよね。凛君もそうですけど、もう少し体重を増やした方がいいと思うんですよ。身長と体重が育ち盛りの男の子にしては、随分と差があり過ぎるような気もするんです」

「お前も、言える立場じゃないと思うぞ。随分小さいし、痩せっぽちだしな」

「・・・・食べられないんです。拒食症じゃないから大丈夫です」

そう言いながら、食パンを四分の一に切ったサンドイッチを大きな皿の真ん中に置く桜木。明らかに、拒食症寸前の状況だとおもうけどな。それは、食パン半分にも満たない量だぞ。

「もっと食えよ。凛を見習って」

「いえ、食欲がないんで」

「凛の心配をするより、自分の心配をした方がいいと思うぞ。拒食症患者同然の食欲だ」

「そっ、そんなに入れないで下さい！胃が弾けて飛び散ります！！」

「・・・・グロいことを言うな」

多いと言ったって、桜木が取ったサンドイッチをもう一つ入れただけだ。そんなんで胃が弾けてどうする？本当に、こいつのことが心配になって来た。

「でも、無理です」

「いや、無理でも食え」

「本当に無理なんです。だから、修さんが食べて下さい！」

小さなサンドイッチをトングでつかみ、お互いの方に押しやっていると、小さなサンドイッチはお互いのトングから滑り、変な方向に飛んで行った。

慌ててそっちの方を見ると、一人で満足そうに朝食を食っている凛の方に飛んで行った。

「おい、凛・・・・」

俺が言葉を最後まで言い終わる前に、凛が振り返り、口を開けて、飛んで来たサンドイッチを食った。ある意味、誰にも真似出来ない凄技だ。

「突然サンドイッチを投げて来るなんて、酷いじゃないか。もう直ぐで、頭がマヨネーズとツナだらけになるところだったじゃないか」

今はわかりやすく訳した後の言葉だから内容が伝わったと思うが、本当は、サンドイッチを噛みながら話すから、全く聞こえなかったんだ。ほとんど、モグモグだか、モゴモゴだかの、この二単語でしか聞こえなかったからだ。なぜわかったかは、音の途切れとかで、何とか読み取ったと言うところだ。

「無事に、お前の口の中に入ったんだからいいじゃないか」

「まあね。もう邪魔しないでよ。せっかく食べてるんだから」

「・・・・頑張ってみます」

桜木は、凛の方を見てから、ゆっくりとサンドイッチを取り、ぎこちない様子でテーブルに座った。俺も後に続いて座る。

凛の隣に桜木が座り、その正面に俺が座る。凛の目の前には、大量に積まれた皿がある。こんなにあった量が、凛の胃袋の中に消えたのだ。男と言うより、女に近いような体型の凛が、ここまで食うとは誰も想像しないだろう。桜木が小食なのはわかりそうなことだが。

――二時間後、やっと食堂を出て、出かける準備に入る。そこまで時間がかかったのは、凛ではなく、桜木だった。鼠が齧る量とほぼ

同じだけしか食わない桜木に、凛が口に押し込もうとする。

しかし、桜木は、嫌が応でも自分のペースを保って、何とか完食した。それを見て思ったことは、もう、桜木に無理に食い物を押し付けるのはやめようと思った。

「さぁ、行こう！」
「・・・くっ、苦しいです・・・歩けません」
「じゃあ、僕が背負って行ってあげるよ」

「そこまで行きたいのか？」
「まあね。楽しみだから」

そう言って、本当に桜木を背負い、廊下に出ようとする凛。

「待て、桜木が平気になるまで待とう」
「はい・・・少し休めば歩けると思うので、待って下さい」

「わかった。三十秒待ってあげる」
「・・・いくら少し休めばと言っても、それは無理です・・・」

うるさく騒ぐ凛を丸め込んで、一時間ほど休憩した。

魔界の国宝　雷光銃編　大鬼ごっこの始まり

「何で、こんなことになっちゃったんだろうね？」
「知るか！」
「やっぱり、人間の姿で来た方がよかったんですよ」
「だって、急がないと売り切れちゃうから・・・・」

「お前が、単に短気なだけなんだ。十一月から売り切れるはずがないだろう！」
「そんなこと言ったってさ、亜修羅だって反論しなかったじゃないか！」
「僕はしましたよ、やめた方がいいって」

こんなことと言うのは、桜木の苦しさが直って、出かけようとした時に、凛が犬神の姿になり、道路を走ってそのままデパートへ直行。俺も、人間の姿では追いつかず、とっさに妖狐の姿になったのだが・・・。

「しかし、こんなんじゃ進めるものも進めないだろう」
「とっ、取りあえず、でっ、出ましょう」

今がどう言う状況なのかを説明するのは、まず、デパートを出てからだ。でないと、話すことも不可能だ。

やっとの思いで外に出て、人の目をくらまし、屋根に上る。ちなみに、桜木は腕をつかんで引き上げた。

まずは、何があったのかを説明しよう。上で説明したように、凛を追いかけてデパートに入ると、急に老若男女問わずに、大勢の人に

囲まれた。そして、訳の分からないことを言われ、例えると、周りにアイドルだってバレた時みたいな感じだと言うのが無難だと思う。

「どう言うことだ？」
「わっ、わかりません。でも、この状況じゃ無理ですよ」
「じゃあ、人間の姿に戻ればいいんじゃない？」
「そもそも、凛がいけないんだぞ。何でそんなに急ぐ必要があったんだ？」

「まあまあ。いいことといいこと」
「でも、僕はこのままですけど・・・・」
「桜木は気にするな。眼鏡さえ外してればバレないだろう」
「でも、目が見えませんよ」

「前を歩く俺達ぐらいはわかるだろう？」
「はい。わかりました」

そう言うことで、人間の姿に戻ると、何とか入れた。まぁ、最初から人間の姿のまま入ればよかったことなのだが・・・・。

「もう、クリスマスのものとか売ってるでしょ？」
「ああ、そうだなー」
「早くなんかないんだよ。準備は早めにってね？」
「そうかー」

「何だか、凄く不快な気持ちになるんだけど、その棒読みみたいな返事、やめてくれない？」
「興味のないことに棒読みになることは、悪いことじゃない」
「行こう行こう。興味がある人は」

凛は桜木を引き連れて、どこかに行ってしまった。全く、迷子になるかもしれないぞ。実年齢よりも、よっぽど子供だからな、あいつは。

そう思いながらも、一人でデパート内を歩き回る。本当に迷子になるとは思ってなかったからな。言葉では、迷子になるかもしれないと言ったってな、もう直ぐ高校の奴が迷子になんて・・・・。

その時、デパート内にお知らせをする音が聞こえて来た。

まさか、違うよな。いや、断じて違うだろう。

「迷子のお知らせです・・・・」

アナウンスから聞こえて来た特徴は、二人が着ているものとそっくりだった。それを聞いた時の恥ずかしさと言ったら、たまったものじゃない。顔が赤面と言うのを通り越して、赤黒くなったかもしれないと思った。

最初、迷子センターに行かなくてもいいと思ったが、やはりダメだろうと思い、恥ずかしいが、仕方なしに迷子センターまで向かった。

「あら、貴方が二人のお父さん？随分と若いのね」

「違います。あいつらと、大層歳が変わらないのは見てわかるでしょう」

「そうなの？二十代前半ぐらいだと思ったわ」

・・・・この女の目は節穴か？四歳以上も見積もられてるぞ。そんなに老けて見えると言うのか？

第一、二十代前半で、そんなに大きな子供がいる訳ないだろう。人間の子供が出来る過程は知らないが、そんなに若いのに、子供を作るのは妖狐でも無理だ。だから、人間でもありえない。

とにかく、女に案内してもらって、凛達のいる場所に来た。凛は迷子になって恥ずかしいと言う自覚すらないらしく、普通にしている。桜木はすまなさそうな顔をする。

「おい、何で迷子になんかなったんだ?自らどこかに行ったくせに」
「お父さん!」
「ふざけるな。さっきの会話、聞いてただろう?」

「まあね、可哀想に。四歳以上も上だと思われて。でもあの人、見た目で年齢を判断するのが苦手らしいよ。僕らのこと、三歳年下だと思ってた」
「十二歳か。確かに、そう言われてみれば見えるな」
「ふん!自分のことは棚に上げてさ」

ぶつぶつ怒るも、もう勝手に歩いて行かなくなった。それがわからないような子供じゃなくてよかった。また迷子になったら、今度は助けに行かないけどな。

「まぁ、修さんの場合は、大人っぽく見えるからではないでしょうか?」
「そうか?」
「はい。僕も始めてお会いした時は、二十歳までは行かないにせよ、十八ぐらいかと思いました」

「僕は・・・・」
「まずは、何を買いに行くんだ?」

凛に言わせないように言葉を遮る。凛のことだから、きっと相当な勘違いをしているに違いない。そんなのを聞くよりは、楽しくもないクリスマスの話題の方が断然いい。

「まずは・・・・」

凛が言いかけた時、もの凄く強大な妖気を感じた。まさか、雷光銃か？

背後で感じた妖気に振り返ると、後ろから男が歩いて来る。ジーパンのポケットに手を突っ込んでいるが、きっと、その中に雷光銃が入っているに違いない。

「おい、後ろの男、雷光銃を持ってるぞ？」

「・・・・そうだね。凄い妖気を感じる。この感じは、冥道霊閃以来の感じだよ」

国宝の妖気をもろに浴びた凛が言うんだ。間違いはないだろう。俺は初めてだが、こんなに強大な妖気は魔界の国宝だと言うことぐらいはわかる。

「でも、どうしましょうか？こんなところで暴れる訳には行きませんし・・・・」

その時、相手がこっちの反応がおかしいことに気がつき、急ぎ足でデパートを出ようとした。せっかく雷光銃を持っている奴に会うことが出来たのだ。しかも、こんな早くに。逃がす訳にはいかない。

「凛は、向こう側からデパートの入り口を塞げ。桜木は、俺が指示

を出すまで一緒に追いかけろ！」
「了解！」
「わかりました」

本当は、デパート内は走っちゃいけないことになってるが、そんなの関係ない。

陳列されている品物や服などを落として追いかける。これが意外と面白い。ダメだって言われていることをやるのは、結構な快感だ。後で怒る両親もいないしな。

みんな、何が起こったのかわからない様子で道を開ける。デパートの店員はかんかんに怒って追いかけてくる。追って、追いかけられて。何だか、大きなスケールの鬼ごっこに近い。

しかし、人間の店員は足が遅く、あっと言う間に見えなくなった。その点、やはり訓練されている桜木は、悠々と走っている。

向こうは足が遅く、もう少しで追いつきそうになった時に、雷光銃の弾を飛ばして来た。慌てて避けて反撃するが、かなり差が開けてしまった。弾一つ一つにも、もの凄い妖力を感じた。

「待て！」
「ふん！待ってやる義理なんざねぇな」
「クソッ、凛を入り口に置いた配置が悪かった」

「じゃあ、僕が呼んで来ます。そのまま、僕が入り口にいます」
「わかった。頼む」

桜木を凛のところに行かせ、自分が雷光銃を持った奴を追う。それ

にしても、あいつは人間の姿のまま、妖怪の姿を見せない。妖怪なのは確かなのだが、中々見せない。そう言うところは助かっている。

「亜修羅～助けに来たよ！」

「んなことはどうでもいい。さっさと追いかけろ！」

「はいはい」

結構速いスピードでジョギングをしてると言う感じで走っているのに、凛はそれよりも簡単に、悠々と抜き去って行った。

階段を上り、四階に行く。四階は、今までの階とは違い、大きな扉が何個かあるだけだった。

ずっとデパートと言っていたが、もしかしたら、デパートは少し違うところなのかもしれない。

妖怪は、その一番手前の扉の中に入って行った。

「凛は、向こう側のドアで待機してろ！」

「また～～？」

「聞け！」

「わかったよ」

半ば嫌そうな顔をしながら、出口の方に走って行く。俺は、妖怪の後について走って行く。

中は結構暗く、足元が見にくい。見にくいなと思って追いかけていると、小さな階段があり、そこを上ったところで景色が開けた。

一瞬、余りにも眩しくて、目が眩みそうになった。上を見ると、スポットライトが俺の目を潰そうとしているかの如く、ギラギラと照りつけて来る。

それから左を見ると、困惑しきった表情を浮かべた子供達がいた。正面には、妖怪に突き飛ばされたであろう、何とか戦隊の服を着た奴と、怪獣が倒れている。と言うことは、俺達はこの劇に乱入して

来たと言う訳か。

俺が無言で妖怪をにらみつけていると、不意に妖怪が片目をつぶり、銃を構えた。何をするつもりかと思ったら、撃って来た。とっさに避けて炎を飛ばす。

そのまま元の位置に戻り、相手をにらむ。大したことじゃないが、子供達にとっては凄い衝撃だったらしい。しかし、そんなことにサービスを配れるほど、今は余裕がない。相手の考えが読めないとあっては、最もだ。

しかし、相手はサービス精神がもの凄く、雷光銃をクルクルと回したりと、凄い。それを見て、子供たちが俺の方にもキラキラな目を向けて来る。俺に何をしろと言うんだ?

「よお、霧崎」
「・・・・?」

妖怪が、不意に俺に話しかけて来る。霧崎って誰だよ?俺のことか?そんなダサい名前で呼ぶなよ。
俺の気持ちを読んだように、妖怪がまたもや片目をつぶる。俺にも合わせろってことか。

「よお、紙児」
「・・・・?」
「早く話し進めろ」

小声で会話を交わす。なんだか、不思議な気持ちだ。追っていた奴と一緒に劇をやる羽目になるなんてな。誰も想定してないだろう。
しかも、自分から変な名前で話しかけて来たくせに、俺が答えるよ

うに言うと、不思議がってるし。バカだな。

「久しぶりに会っても、全く変わらないな」

「そんなことはどうだっていいんだ。さっさと勝負をつけるぞ」

俺の言葉に肩をすくめ、子供達の方を見る。すると、笑いがどっと起こった。

「ああ、わかったよ。昔から喧嘩っ早いんだからな。お前は」

俺の過去なんか知らないくせにな・・・。言葉には出さないが、思い切りそう思う。

それに、あいつの行動がどことなく腹が立つ。どこと言われれば、断定が出来ないのだが、とにかく苛つく。

「じゃあ、早速・・・」

何も言う間もなく、撃って来る。まだ劇だと思っている子供達は、キャアキャア喜んでいるが、こっちは生死の狭間にいる。かすりでもしたら、無傷じゃ済まされないだろう。

何とか三発を避けて反撃をするが、これも軽々と避けられる。バカみたいだが、強いのだろう。それは認める。でないと、雷光銃なんかを操ることが出来ないはずだ。

息をつかず、また撃って来る。雷光銃は、弾が無限に出て来るから、弾を入れる隙がない。だから、そこをつくことも出来ず、結構きつい。

舞台の横幅は狭く、仕方なく高くジャンプをした後、空中で体を反らし、そのまま手が下の状態で地面に着地してから、その反動で二～三回バック転をした。それを見て、子供たちは驚きと凄いと言う気持ちで騒いだり、話せなくなったりとしている。決して、子供達を喜ばそうとした訳ではない。相手の妖怪に対抗心を抱いた訳じゃない。

「中々やるな～」
「ボケッとしてんな！」

こっちも炎を飛ばすが、向こうもかなり凝った演出で避ける。技とらしいが、中々だ。

着地の時に、少しの隙が出来たのを見逃さなかった。とっさに懐に突っ込み、雷光銃を奪おうとしたが、間一髪のところで避けられた。

「そろそろ遊びは終わりだ。俺はもう、行くとする！」

最後に、そう言ったかと思うと、突然高くジャンプをし、消えてしまった。

最初は驚いて動けなかったが、はっと我に帰り、慌てて追いかける。つい、あの妖怪のペースに乗せられてしまった。

舞台袖に降りると、凄く暗く感じた。舞台の上がスポットライトで眩しかったからだろう。そのギャップから、前が見えない。しかし、止まる訳にはいかず、全力で走っていると、何かに思い切りぶつかった。その勢いで、後ろに吹き飛ばされる。

物か何かにぶつかったのかと思ったが、それが動いている。やがて、

それが凛だとわかった。

「凛、何やってんだ!?」

「いったたたた・・・・。そっちこそ、何でこっちに走って来るのさ」

「こっちに逃げたからだろう」

「そのまま、こっちに逃げて行ったんだよ」

「本当か?」

「嘘を言ってどうするのさ?」

凛の口調からして、本当らしい。しかし、姿は見えなかった。もしかしたら、上を通っていかれたのかもしれない。本当に、逃げるのが得意な奴だ。

折り返し、再び舞台に戻ると、妖怪に倒された怪獣と、何とか戦隊の服を着た奴が立っていたが、再び、そいつらをふっとばして、舞台の上で止まらないまま、舞台袖の方に走って下りて行った。急いで追いかけているが、見失ってしまった。暗がりで凛とぶつかったことが、時間のロスに繋がったらしい。

「見逃したか・・・・」

「ごめん、僕のせいかな?」

「いや、そう言う訳じゃない。あいつの逃げ足が速いだけだ」

「それは・・・かばってくれてると、取っていいのかな?」

「違う、凛なんかをかばう訳ないだろう。本音を言っただけだ!」

そう言うが、勝手に顔が赤くなる。こう言うところを、自分でコントロール出来ないところが困る。そのおかげで、どれだけ俺がから

かわれたことか。

「赤くなってる～♪」

「うるさい！凛のせいだぞ！！」

「僕のせいじゃないって言ったばかりじゃないか♪」

「・・・・」

何も言えず、黙り込んで歩き出そうとする。すると肩を叩かれた。凛かと思って振り払うと、再び叩かれる。

「だから・・・・」

振り向くと、二人の男が汗だくになって立っていた。そして、自分が置かれている身のことに気がついた。

「捕まえた」

「・・・・」

背の高い方の男が言う。もう一人の小さい方は、息をつくだけで精一杯のようだ。

まずいと思って逃げ出そうとするが、肩をガッチリとつかまれて逃げ出せない。

何をされてもしかたないなと諦めかけていたが、言われた言葉は意外なものだった。

「頼みたいことがある。私達に代わって、舞台を引き継いでくれ」

「は？」

「私達の劇じゃつまらないって、君じゃなきゃダメだって」

「何で・・・・」
「頼む・・・・・」
「やっちゃいなよ」

まるで赤の他人のように、凛が満面の笑顔で肩を叩く。これほどムカつくことはない。凛も巻き込んでやる。

「こいつもやるぞ」
「頼むよ」

男達はそう言うと、その場に座り込んでしまった。おいおい、そんなに大変なのかよ?

「何で僕まで・・・・」
「そう言うことだ」

嫌がる凛を引っ張り、今さっき出て来た扉の中に入る。まさか、追いかけられている奴が、舞台にいるなんて予想がつかないだろう。

「何？さっき何かやったの？」
「まあな、あいつのペースに乗せられてな」
「でも、何で僕まで・・・・」

凛の言葉を無視し、舞台袖から観客席の方を覗く。すると、男達が言っていた通り、何だか機嫌が悪そうに子供が暴れている。

さっきまでいたはずの親達も、どこかへ消えてしまった。親がついていない子供は大暴れだ。

要するに、俺達は、この騒ぎを止めろと言うことか。

「お前、子供好きだろ？」
「ううん。そんなこと言ってないじゃないか」
「見た目が好きそうだからな。行って来い！」

舞台袖で、嫌がる凛を押し出す。凛は嫌そうな顔をして、じっと見て来る子供達を宥める。

俺は、それを見ている。子供は嫌いだ。騒がなかったら別にいいのだが、騒ぐとうるさくなるし、めんどくさくなる。だから、嫌いだ。凛も嫌そうだが、凛に任せよう。

凛は子供に促され、言われるがままにされている。ああ言うのも嫌なんだ。

「亜修羅～！道連れだぁ～！！」

少し気を緩めたところで凛に腕を引っ張られ、やむ無く子供の渦に巻き込まれた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。さっきのやって？」
「さっ、さっきの？」

「うん。ビョ～～ンって飛んでさ、クルって回ってストンって」
「・・・・ビョ～？クッ、クル？」

子供の表現が、俺のどんな動きに由来しているのか全くわからない。
ビョ～～ンってなんだ？クルッて言うのは回転だってわかるが、ストンってなんだ？全くわからない。

「そう。ビョ～～ンってクルッとストン！」
「・・・・？」
「多分さ、高く飛んでから空中で体を反らして、そのまま着地してピョンピョンとね。だと思うけど」
「凛も、こいつらとあんまり表現が変わってないな」

「そう？子供はあんまり好きじゃないけど、気持ちはよくわかってるって言われるんだ」

決して褒めている訳ではないのに、凛が余りにも嬉しそうに言うから、意味を訂正するのを躊躇われた。

「と言うか、俺よりも、凛の方がこう言うのは得意だろう？何で俺にやらせるんだよ？」
「じゃあ、いいよ。僕がやってあげる。でも、子供たちは、亜修羅

にやってもらいたいって言ってるんだよ？」

「わかったよ、じゃあ、俺がやる」

子供の考えてることは全くわからないが、この時点でもうるさいのに、もっと騒がれたら耳が壊れる。俺よりは、子供の気持ちがわかる凛の言うことを聞いておくのが無難なのだろう。

凛に言われた通り、さっき子供に見せたのと同じことをする。しかし、これと言ってなんら変わりもしない。

「この姉ちゃんも、何か特技があるの？」

「ねっ、姉ちゃん？」

「そうだい。姉ちゃんのことだい！」

「・・・・」

凛は言葉を失い、俺は思わず笑ってしまった。

無垢な子供に間違われるなんて、一番可哀想な例じゃないか。まぁ、それで笑った訳じゃあないが。

「姉ちゃんじゃないよ。兄ちゃんだよ」

「そんなことないやい！」

「そう言われてもさ、男なんだよ」

「じゃあ、兄ちゃんには・・・・」

「それは、禁句！」

子供の言いそうなことを先に読み、口を塞ぐ凛。何となく想像がつくだろうからあえて言わないが、子供とは、平気で下品なことを言

うのだと言うことを前から知っていたが、今、更に思い知らされた。

「とにかく、僕は男！生まれた時からずっと男！」

「ふーん、つまんねぇの！」

「えっ？」

「つまらねぇ、つまらねぇ～。この兄ちゃんの方がよっぽど変だ」

そう言いながら、子供達が俺の方を容赦なく指差す。

それはどう言う意味だ？と聞いてみたいが、子供だから、ろくな理由など聞けないだろう。

「だってさ♪」

「・・・・」

凛が、自分は面白くないと言われてるのに、そんなこと気にしていないかのように微笑んで来る。

それは、何を思っての微笑みか、何となく想像がつく為、少しムカつく。

「この姉ちゃんだってな、凄いことが出来るんだぞ？」

「どんなこと？」

「亜修羅は、僕のこと知ってるでしょ？わざと言うのはやめてくれる？子供だから許したんだから！」

「ねぇ、どんなことが出来るの？」

最初は俺に聞いて来たが、今度は凛に聞く。

しかし、当の凛は、困惑した顔でこちらを見るだけだ。

言葉では言わないものの、子供同様、ねぇ、どんなことが出来るの？と言いたげな顔だ。と言うか、まさしく言っている。

「冥道でも開けばいいだろう」

「ええ～こんな狭いところじゃ開けないし、もし、子供達が入っちゃったらどうするのさ？」

「・・・・」

そう言いながらも、開く気満々な凛は、冥道霊閃を取り出し、子供達にこれから起こる出来事を説明している。

「おい、本当にやる気か？」

「当然。バカにされたからね」

凛はゆっくりと目をつぶる。すると、自然と元の姿（犬神）になり、そのまま鞘から冥道霊閃を抜き、細い光とともに、向こう側が宇宙に近い、冥道が見えた。

その瞬間は、いくらうるさい子供も、息を呑んで凛の動きを見守っていた。やがて、騒ぎ始める。

「うわぁ、姉ちゃんは、やっぱり兄ちゃんだったんだ！」

「急に変わったよ！バクダンマンみたいに！と言うか、バクダンマンよりかっこいい！」

「なんか、耳があるよね。動物の耳」

「この先なんだろう？」

「細い道だね、どこに繋がってるのかな？」

それぞれ、思い思いのことを言う子供。

子供は、凛が突然犬神に変わっても、あまりびっくりはしなかった。それは、何とかマンとかの変身を本当だからだと思っているからだろう。

逆に、大人に見せれば驚く。そんなものの変身なんざ信じていないからな。

「姉ちゃんは兄ちゃんだったんだ！の意味って何？」
「だから、姉ちゃんは、兄ちゃんだってわかったってこと」
「ああ、なるほど・・・。あっ、その中は入っちゃダメだよ！？」

「どうして？」
「その道は、死んでしまった人が歩く道なんだ。だから、その道を進んで行くと、自分が生きていても、死んでしまうんだよ。魂を抜かれて」
「？」

凛の結構リアルな説明に、子供は？マークを浮かべている。しかし、雰囲気的にまずそうだと思い、何とか思いとどまったようだ。

「子供にそんな説明したってわかるはずがないだろう？」
「でもさ、何て説明したらいいのかわからないし・・・」
「そろそろ冥道閉じろよ」

「無理だよ。こんな狭い場所で冥道を開くのは妖力を凄く使うんだからさ。冥道は、狭いところで開くことも出来るんだけどさ、それなりに妖力を使うんだよ。だから、閉じるのも無理！」

「おいおい、じゃあどうするって言うんだよ？」
「そうだね・・・・」

呑気に考え込む凛を、俺は呆れた眼差しで見る。後先を考えずに凛が行動することは知っているが、ここまでとは思わなかった。

「じゃあ、頑張ってみる」
「頑張ってみるじゃなくて、閉じろ！必ず！！」
「ふん、何もわからないくせに・・・・」

ブチブチ文句を言いながら、なんか、あっけなく冥道を閉じてしまった凛。

「僕、もう疲れたよ。子供のお守りをするのも、妖力を使うのも」
「そうだな、それは同感だ。妖力は使ってないが、子供の声で耳が割れそうだ」

そんな話をしていた時、丁度何処へ消えた親達が帰って来て、子供を連れ帰って行く。これで、やっと帰れると思ったが、一人の子供が残った。他の子供達の仲では、一番大きいだろう。

「あの子、帰らないね」
「ああ、そうだな」
「何か理由があるのかな？」
「俺は帰るぞ。面倒なことに巻き込まれたくないからな」

そのまま、凛につかまれない様に外に出て、そのまま階段を上り、屋上から下に飛び降り、入り口にいる桜木に話しかける。ここまで面倒くさいことをするのは、今までの過程をわかっているはずだから、想像はつくだろう。

「あれ？凛君はどうしたんですか？」
「あいつは置いて来た。明日から、学校に行くからな」
「でも、置いて来たらまずいんじゃないですか？」

「大丈夫だ」
「置いて行くなんて、酷いじゃないか！」

急に背後から声をかけられる。無論、そこには凛がいるはずだ。確かに、凛はいた。しかし、もう一人別の人物がいた。

「おい・・・・」
「いいじゃん、可哀想なんだからさ。お母さんがね、意識不明の重体なんだって。それにさ、お父さんも不倫相手のところに入り浸っちゃってさ」

「お前、何てショッキングなことを平気な顔で言えるんだ？」
「このお兄ちゃんが、僕達の保護者だよ」

凛は、肩車をしている子供に向かって言う。話が全く読めないのは、俺だけなのか？俺がいない間に、どんな話になっているんだ？

「おい、僕らって誰のことだよ？」
「えっ、僕と、桜っちと、この子」

「だから、何で・・・・」
「だから！」

凛が大声を出し、道端を歩く人達が一斉に振り向く。

「おい、とにかく、一端家に帰るぞ」

これ以上、こんなところで大声をあげられては困る。それに、詳しいことを話すには家の方がいいだろう。

家に帰る道中、俺は何でこんなことになったのか不思議で仕方がなかった。こんな風に、桜木の時も連れてこられて、今に至っている。この子供も、ずっと家にいるんだろうか？

「じゃあ、どんなことになったのか話してみろ」

「だからね、亜修羅が出て行った後、少し話したんだけどさ。そしたら可哀想でさ」

「だから？」

「それだけだよ」

よく、子犬や子猫を拾って来ては、可哀想だから飼いたいと言う子供がいる。しかし、凛はそれよりも性質が悪い。人間を拾って来る。なら、まだ子犬や子猫の方がマシだ。

「・・・お前はどうなんだ？」

「どうなんだって言われても・・・。人に迷惑をかけるなって言われてるしさ、一人の生活はきついけどさ、死にそうになったけどさ、迷惑をかけちゃうから」

「・・・死にそうになったって？」

「うん、お父さんはお母さんじゃない女の人のところに行っちゃって帰って来ないしさ。お母さんは病気で病院にいるしさ」

「孤児院には行かないのか？」
「お母さんと約束したんだ。お母さんが帰って来るまで、家で待ってるって。だから、孤児院には行かない。だけどさ、お金もないし、何も食べられないしでさ、一回栄養失調で倒れちゃってさ」
「・・・・」
俺は、こいつに何をしてやれるんだ？
「お前は何を望んでる？」
「望んでる？」
「ああ」
「そりゃ、お父さんが帰って来てさ、お母さんの意識が戻って来ると嬉しいけど」
そうだ。こいつは、世話をしてもらうことを望んでいる訳じゃない。父さんと母さんを望んでるんだ。だったら、それを叶えてやればいい。
「よし、母さんの件はどうだかわからないが、父さんは連れ戻してやる。それまでの間は、世話をしてやる」
「何、それ？話が全く読めないけど・・・・」
「凛が言っていることよりは、合理が通ってる」
「？」
尚もわからない凛に、小声で事細かく説明していると、子供が不意に言い出した。
「お父さんのことはいい・・・・」

「なんでだ？」

「よくわからないけどさ、お父さん、お母さんのこと捨てちゃったんでしょ？出かける時に、『仕事に行って来る』って言った切り戻って来ないしさ、お母さんもそのことに気がついてて、毎日夜中に泣いてたのもわかってた。だから、お父さんは戻ってこない方がいいのかもしれない。お母さんも、ストレスで倒れちゃって、原因がわからないまま意識が戻って来ないしさ」

「それはダメだ。その父親には、ちゃんと罪を償ってもらう」

「でも、いい！僕とお母さんを捨てた人の顔なんか、見たくない！」

「お前、ケータイ持ってるか？」

「うん」

「父親のケータイ番号知ってるか？」

「知ってるけど、番号を変えちゃったみたいでさ。電話をかけても、この番号は使われてないって」

「そうか」

「そんなの聞いてどうするのさ？」

「いや、じゃあ約束だ。父親が帰って来るまでならいいだろう」

そんな父親は許しておく訳にはいかない。何でそこまで熱くなるのか自分でもわからないが、とにかく許せなかった。なぜだろうか。

「でも・・・・」

「大丈夫、お父さんが言ったんだから、大丈夫」

「おっ、お父さん？」

「いや、こいつが勝手に保護者だと思ってるだけだ。それに、こい

つと歳はそんなに変わらない」
「ありがとうございます」
「気にするな」

そうして、俺は子供を受け入れた。なぜ、あんなに熱くなったのかは今でもよく分からないが、取りあえずは受け入れることにしよう。

魔界の国宝　雷光銃編　学校で再び・・・・。

「なぁーにやってるの？」
「・・・・」

雷光銃の騒動があった次の日、とりあえず学校に来た。そして、今は五分休みの時間だ。

「ねぇ、何やってるの？」
「・・・・」
「ねぇ、ねぇ」
「うるさい！考え事をしてる時ぐらい、静かにしろ！」

ただでさえ悩まなくてはならないことが毎日増え続けていると言うのに、こう毎時間話しかけられると、うざったくなる。

「・・・ねぇ、何をそんなに考え込んでるの？」
「・・・・」

尚もうるさく問いただして来る女を無視して、椅子から立ち上がり、男子トイレの個室に入る。

どうして今までここに来なかったのか。ここなら、あの女だってついて来られないと言うことを。

さて、まずは何から始めよう。色んなことがあって、何から考えていいのかはっきりとわからない。
そんな時、個室の扉をドンドンドンドンと勢いよく叩かれた。

「おい、伊織」
「・・・・」
「おい！伊織！」

「・・・・」
「お・・・・」
「なんだ？」

ドアを開けて立っていたのは、クラスメートの男だった。名前なんて、覚えちゃいない。

「『なんだ？』って・・・・。トイレの個室に入りたいって言ったら、一つしかないだろう？」
「・・・お前も考え事か？」
「違う！とにかく、出てくれ！！」

何をそんなに急かすのか、理由がわからない。余程収集がつかない悩み事でもあるのだろうか？

「訳がないのなら、俺が先にいたんだ。しばらく待ってろ」

ドアを閉めようとすると、必死で止めて来る。訳を言えばいいものを、何も言わないんじゃ、俺だってスッキリしない。

「頼むから出てくれ！」
「ああ」

あまりにも必死に言われたから、仕方なく外に出ると、男は急いでドアをバタンと閉じてしまった。それと同じタイミングで、隣の個室のドアが開く。

「久しぶりだな、妖狐君」
「お前・・・・何でいるんだよ」

個室の中から出て来たのは、雷光銃を奪った妖怪だった。ちゃんと、高校の制服を着ている。

「まぁ、色々とな」
「返せよ、雷光銃」
「ま、その話は屋上ででもしようぜ。ここは、今こいつが入ってるからな」

その妖怪は、親指でトイレの個室のドアを指差し、トイレから出て行く。こいつは一体何が目的なんだ?全くわからない。

「俺は、冬眞って言うんだ」
「そうか」
「お前は、亜修羅って言うんだろ?ずっと見張っててわかった」

「お前の話はいい。さっさと雷光銃を返せ」
「短気だな。とにかく、俺の話しを聞いてくれ。俺は、残り数少ない転生種族の一人だ。お前は、最近魔界に戻って来たか?」
「いや。戻っていない」

とりあえず、冬眞の話しを聞こうと思う。初めから思っていたことだが、こいつはなんだか悪い妖怪には思えなかったのだ。

「今、魔界では種族ごとに言い争いが起きている。きっと、もう直ぐ種族戦争が起こることだろうと思う。それを思った族長が、俺に雷光銃の使い手と共に、雷光銃を持って来いと言って、俺を送り出

した。と言うことだ」

「・・・だからって、お前が雷光銃を持っていいと言うことはないだろう？」

俺の指摘に、冬眞は舌をチラリと見せて、ズボンのポケットから雷光銃を取り出した。

「まぁ、そんなところだ。だから、これは俺が預からせてもらう」

「おい、そんな道理が通じるとでも思ってるのか？」

「まあな、一応国宝として認められる前は、雷光銃は俺ら『転生種族』のものだったからさ。ちなみに、『戦闘種族』は冥道霊閃。『頭脳種族』は烈火闘刃」

「何でそんなに詳しいんだよ」

手すりによっかかり、尚も雷光銃を見ている冬眞から取ろうとするが、左手に持ち返られて失敗する。

それにしても、冬眞が数少ない転生種族だったとは思わなかった。と言うことは、こいつは不死身なのか。

雷光銃にしか意識の向かっていない冬眞を思い切り外側に押し出す。そのまま、冬眞は下に落ちた。

「おい、何すんだよ！一言もねぇから驚いたじゃないか！」

「いや、不死身だとわかったからな。試してみようと思ってな」

かろうじて、手すりにぶら下がっている冬眞を見下ろしながら言う。冬眞は助けてもらいたそうな顔をしているが、助けない。助けない

に越したことはないんだ。

「おい、助けろよ！お前が落としたんだろ？腕っ節は弱いんだぞ、俺！」

耐え切れず、悲痛な声で叫ぶ冬眞を無視し、背を向ける。俺だって、凛程力が強い訳じゃない。まぁ、頭は俺の方がいいけどな。でも、そう考えると、転生種族は不死身なこと意外取り得がないな。そう考えると、頭脳種族でよかったかもな。

「何を考えてる！さっさと助けやがれ！この野郎！！」

「助けてもらう人に、その言い方はないだろう？」

「助けて下さい！お願いします！」

「嫌だ」

「おい、ふざけんな！頼むから助けろ！もう、腕がまずい」

そう言う冬眞は、本当に余裕をなくしている。

仕方ない、見殺しにすると、魔界警察庁に入れられるからな。

嫌々ながら引き上げる。校庭では体育の授業をやっていたが、みんな、上を向かない為に、冬眞が落ちそうなところなど見ていなかったのだろう。

「おい、年上をバカにして楽しかったか！？こっちは本気で頼んでるのによ！死ぬところだったぜ」

「そうか、年上には見えないけどな。それに、不死身じゃないのか？」

「可愛げのないガキだぜ」

「お前には言われたくないな。年上って言っても、大して変わらないんだろう」
「・・・・よし。まぁ、何にせよ、助けてくれたことに免じて許してやろう。それで、続きだが・・・・」

その時、授業が始まっていて、もう誰も入って来ないはずの屋上のドアが開き、入って来たのは、この高校の不良達だった。みんな、髪を染めたり、ピアスをしたりと、派手な連中だ。さほど強い訳でもないのに、見た目だけがド派手だ。

「おいおい、そこのお兄ちゃん達、もう授業は始まってますよ～」
「それはそっちも同じだろう」
「いいのかな？人の縄張りを奪った上に、そんなこと言っちゃって。一年Ｂ組の伊織修君」

「何で俺の名前を知っている？」
「お隣は、二年Ｃ組の加藤涼護君だよね。二人の不良がおそろいで。仲がいいらしいね」

「お前、加藤涼護って言うのか」
「伊織修って言うんだ」

お互いの人間名を知らず、確認してしまった。別にからかった訳じゃないのだが、不良達のしゃくに障ったらしい。

まぁ、こいつらのしゃくがどこにあるのか知らないが。

「おい、とぼけてんじゃねぇぞ！」

早速殴りかかって来た不良達を、一秒もかからずノックアウトし、話しを再開する。こいつらに邪魔されて中断した時間は取り戻せないと言うのに。

「続きは？」

「・・・それがなぁ、忘れちまったよ。また今度にしてもらいたいんだ」

「そうか」

「怒んないのか？」

「ああ」

学校が終わって家に帰ると、先に帰っていた凛達がいた。

「あのさ、色々調べてみたんだけど、わかったよ。哉人君のお父さんがいるところ」

「そうか、随分速かったな」

「うん。これからそこに行くところなんだ」

凛の言葉を聞いた時、哉人の体が震えたような気がする。きっと強がってはいるが、怖くて悲しいんだろう。何とも思えない心の渦がグルグルと回っているんだろう。魔界を出て行く時、俺が感じたように。

「いいのか、哉人」

「う・・・ん。せっかくわかったんだ。だからさ、行かなくちゃ。嫌と思ってもさ」

「なら、さっさと行くぞ」

「亜修羅を待ってたのにさ～」

「早く案内しろ」

ぶんぶくれる凛を無視して、さっさと家を出て行く。まぁ、どこなのかは知らないから、歩くことは出来ないが。

凛と桜木を前にして、あるアパートにたどり着いた。外見だけでは普通のアパートと差程変わらない。ここにいるってことか。

「ここだよ、ここにいるはず」
「どうやってここにいるって知ったんだよ？」
「情報網だよ。とにかく行こう」

先に階段を上って行く二人の後から、俺も階段を上ろうとする。しかし、哉人が上って来ない。

「行くぞ」
「・・・・」

下を向いて、歩こうとしない哉人を促すと、無言で首を振った。足がガクガク震えている。

やっぱり、怖いか。

「・・・・大丈夫だ。俺がついてる」

小刻みに揺れる哉人の頭に手をのせる。驚いたように上を見上げる哉人の振るえは、大分納まって来ている。

「うん。ありがとう。お兄ちゃん」
「心の準備が必要ならば、それまで待ってるが・・・・」
「大丈夫。ここに来るまでに準備は出来てたけどさ。足が竦んじゃって」
「行けるか？」
「うん」

階段を上って行くと、奥のドアの前で二人が待っていた。

「大丈夫？」

「ああ」
「じゃあ、インターホン押しますよ」
桜木が押したインターホンの音が聞こえる。それから、ドアが開かれた。
「あなた達、どなた？」
「あなたですか？」
「は？」
「だから・・・・・」
その時、奥から男が出て来た。哉人によく似た男だった。
「かっ、哉人！！！？」
「お父さん・・・・」
「まさか、あなた！」
「ちっ、違う。これは・・・・」
「裏切ったの！！」
「違う、だから・・・・・」
「裏切ったのね・・・・・」
女は、不意に近くのテーブルに置いてあったナイフを、男に向かって突き出した。
「なっ、何を・・・・」
「あなたのせいで、この子はお父さんがいないことになってしまうのよ！その罪を償いなさい！」
止める間も無く、女は男の胸にナイフを突き立てた。白かったワイ

シャツに、赤黒いシミが広がって行く。

「お・・・・とう・・さん・・・・・？」

「全てこいつが悪いのよ！私を裏切った。私は、貴方だけだと思ってたのに！」

狂ったように、金切り声を上げる女。男は、崩れ落ちるように床に倒れる。

「・・・・私は・・もう・・・・・」

自らのナイフを、自分の胸に刺す。そのままナイフを抜き、哉人の方に刃を向けた。

「恨んでやるわ。あなたの母親も、もう直死ぬ・・・・」

女はそう言った後、死んで行った。アパートの玄関に、二人の人間の血だまりが出来ている。

「救急車を呼ばなくちゃ！？」

「もう、遅いよ・・・・」

「えっ？」

「もう死んじゃってる。それに、この人は、母さんも、僕をも裏切ったんだ。だから、いいんだ。もう、遅いんだよ」

「何言ってるの？」

「この人は、僕の父さんじゃない」

「でも・・・・」

その時、家の中の電話が鳴った。家の住民がいないから、俺が取るしかないか。

「はい」

「知ってるんだぞ。お前が俺の女を盗ったってな」

「誰だ？」

「お前の大切な者、全て奪ってやるからな！」

合成音の声が途切れ、電話が切れる。随分とめんどくさいことに巻き込まれたみたいだ。

「凛、電話しとけ！哉人、お前の母さんが危ない！」

「えっ！？」

我に帰った哉人は、先に走った俺の後について来る。さっきはあんなことを言っていたが・・・・。

「病院はどこだ？」

「わからない・・・・でも、多分、近くの病院」

哉人の言葉を聞いて、近くにある病院に向かった。しかし、そこは病院ではなかった。と言うか、病院だったと言うべきものだ。目の前には、建物の残骸が転がっていた。

「おい、そこの君達、入っちゃダメだよ！」

「退け！」

警察が止めて来るのを押し退け、妖狐の姿に戻り、哉人を抱えて建物の残骸の一番上の階に上って行く。

割れていた窓ガラスから中に入り、病院の廊下に下りる。そして、一つだけ被害が少ない病室に入って行った。

そこにはベットに横たわっている女に銃口を向けている男がいた。

「お母さん！」

「近づくんじゃねぇ！俺が務所に入っている間に・・・・。女の次は、お前だ！ガキ！！」

男は銃をこっちに向けて足元を撃って来た。その弾は避けずとも外れた。

「死ね！」

最初は本気で狙って外れたのかと思ったが、それは違っていた。俺達の目を下に向けさせている間に、哉人の母さんを撃ったんだ。

「お母さん！！」

哉人は止める間もなく母親の方に走って行った。それをニヤニヤと笑いながら、男が哉人に銃口を向ける。

「避けろ！」

俺の声をかき消すように、男は引き金を引いた。大きな銃声と共に出された弾が、哉人の背中を貫通する。そのまま、哉人はバタッと倒れた。

二度の銃声に、外の警察が動き出したようだ。拡声器での声が聞こ

える。しかし、興奮状態に陥っていたのか、声が全く聞こえない。

俺は無意識のうちに男の後ろに周り、首を押さえた。そして、そのまま力を入れる。

「な・・・何する・・・・」

「あいつは関係なかっただろう！何で撃った！！」

「・・・・」

「何で撃ったんだって聞いてんだ！！」

「ぐっ、ぐるじい・・・・だずげでぐれ・・・・」

「答えろよ！！」

更に力を入れる。すると、嫌な音がする。ギシギシと言うような、骨がこすれあう様な音がし続けている。

このまま、こいつが死んでしまうんじゃないかと思うけれど、自分では止められない。どうしようもない怒りに体が占領されてしまったようで、言うことを聞かない。

本当にまずいと思った時、後ろから凛の声が聞こえた。

「亜修羅。人を殺しちゃダメだよ！」

「凛・・・・桜木・・・・・」

「約束したよね？もう、人殺しはしないって！」

「・・・・」

「亜修羅！！」

凛に怒鳴られて、やっと我に返り、首を絞める腕を緩める。男は崩れ落ちるように床に倒れこみ、荒々しく息をしている。

「亜修羅！」
「悪い。やっぱり、まだ直ってないみたいだ。とっさになると、人を殺しかねない」

「バカ！！」
「・・・・もう少しで、約束を破るところだった」
「でも、間に合ってよかった・・・・」

約束と言うのは、凛を仲間と認めた日に約束をさせられたのだ。

その時は、もうしないだろうと思っていたから大して気にしていなかったが、今、自分の弱さに気がついて、情けない気持ちになる。

「・・・・悪かったな、助かった。凛が止めなかったら、こいつのことを殺してたと思う。こんな結果になってみると、凛がいてよかったと思う」

「・・・・ちゃんと約束は守ってよね！」

凛はそう言いながら、安堵の顔になる。約束すら守れないなんてな。情けない。自分で自分が情けない。

「あの、早く三人を病院に・・・・」
「ここが病院だよ。とにかく警察に知らせて来ようか」

いつもとは違い、落ち着いた凛に指示を出されて、警察を呼びに行った。

犯人が捕まり、事情聴取をし終わった帰り道。

「ねぇ、なんであんなに怒ったの？」

「・・・・」

「いつもだったらさ、冷静なのに・・・・。何だか、やけに熱が入ってさ」

「・・・・」

「何か、亜修羅らしくない気がする」

「・・・・悪い」

「ほら、そう言うところ！いつもだったらさ、絶対、断固として謝らないのにさ！今日の亜修羅って、何だか変だよ。どうしたの？」

そう言われても、自分でも何だかよく分からないが、あの時はムキになり、今は気がしぼんだようにどうでもよくなっている。いつもなら謝る事だって滅多にしないのに、こうも簡単に謝っている。

自分でもわからないから、逆に聞きたい方だ。

「いや、別に変わったところは無いけどな」

「・・・・哉人君が居る病院に行く？」

「行ったって意味がないだろう？」

「まあ、気にしないで。行こうよ」

凛に流されて、さっきの病院から一番近い病院に行く。

病院内は、正面に受付があり、椅子が並べられている。そこに、患者か付添い人が座っていたりする。パジャマを着て松葉杖をついて歩いて行くような人もいるから、きっと患者も普通に歩き回っているんだろう。

「ここからはどうするんですか？」

「一応看護婦さんに聞いてみようよ。それでまだだったら、根気よく待つ！」

「待つのか・・・・」

「そう。じゃ、ちょっと聞いて来るよ！」

凛は大きな声でそう言うと、手を振って受付の方に走って行く。

「・・・元気出して下さい」

「？」

「あっ、えっと・・・・。違いましたか？」

凛が受付に聞きに行った十五分後くらいに、桜木が不意に声をかけてきた。

「何が違うんだ？」

「あの、僕はてっきりショックを受けていたと思ったんですけど」

「・・・それも一理あるかもな」

「大丈夫ですよ、哉人君は助かります。お母さんだって、無事に冥界にたどり着いたと思いますよ。凛君が冥界送りをしてくれたので」

「そんな名前だったのか？」

「よくは知りません。でも、そんな感じだったような気もします」

「じゃあ、違うかも知れないんだな」

「そうです。それより、大丈夫だってことを言いたかったんです！違うかもしれないと言うことは、ほおっておいて下さい！結構、こう言うのは苦手なんですから！」

急にムキになった桜木を見て、自然に笑いがこみ上げて来る。本人には悪いが、かなり笑える。どこも笑える要素はないのだが、笑えて来る。

「何で笑ってるんですか？」
「・・・・笑ってないぞ」
「わかりますよ、必死に笑いを堪えてるように誰が見ても見えますよ」

「・・・・」
「でも、少しは元気になってもらえてよかったです」
「・・・・」

それからしばらくの間、ずっと笑い続けていた。

「まだ、笑いが止まりませんか？」

五分後くらいに桜木が話しかけて来るが、話せば笑いが堪えられなくなりそうで、無言のままうなずく。

「・・・何にもしてないんですけどね・・・・」
「あれ？何で笑ってるの？」
「ああ、凛君。なぜだか急に笑い出してしまって。僕も困ってるんです。まぁ、それほど困ってないんですけど・・・・」

「いいんじゃない？これもちょっと違うけど、さっきまでの亜修羅よりは、亜修羅っぽいし」
「難しいですね、その言葉」
「そうそう、哉人君はね、もう意識が戻ってから結構時間が経ったから、会ってもいいって！」
「そうですね、あれからかなり時間が経ちましたからね」
やっと笑いが納まり、壁にかかっている時計を見ると、九時近くになっている。随分と長い間事情聴取されたものだ。

「あっ、納まったんだ」
「ああ。何とか」

「じゃあ、病室に行こうか。ちゃんと病室の番号を聞いて来たしさ」
凛に連れられ、隅にあるエレベーターで四階まで上り、ある病室の中に入る。そこの一番奥に哉人はいた。

「大丈夫？」
「うん、僕は何とか大丈夫。あんまり深く弾が入ってなかったらしいよ。でも、お母さんが・・・・・」
「・・・・会いたい？」

「そりゃ、もうずっと前から話も出来なかったしさ、会いたいけど・・・・。死人を蘇らせることなんて・・・・・」
「おい、凛・・・・」
哉人のそばに歩いて行く凛の肩をつかんで止めたが、振り払われる。
考え無しだものな、こいつは。後でどうなっても知らないぞ、俺は。

「ちょっと出て来るね」

そのまま、廊下に出て行ってしまったのだが、どんな策があると言うのか・・・・。

数秒後、普通の顔で入って来た凛と、もう一人。こちらはぼやけているが、確かに哉人の母さんらしき人が見える。しかし、哉人には見えないようだ。

「ごめん、またちょっと出て行くね」

凛に袖を引っ張られ、そのまま訳がわからずに病室の外に連れ出される。

あれは、凛が本当に呼び出したのだろうか？

「さっきのは・・・・」

「そうだよ、哉人君のお母さん。だけど、僕らがいるとさ、話しづらいし。それに、知らないふりをしてればさ、僕が呼んだなんてわからないよ」

「何だか不自然だけどな」

「そこは、ご愛嬌でカバーをする」

「愛嬌だけでカバー出来る問題じゃないけどな。バレたら」

どうも気の抜けている凛に言葉を返すが、本人は全くと言っていいほど気にしておらず、病室の外に置いてあるアルコールで消毒をしている。

「おい、また部屋に入るんだろう？」
「大丈夫。出て来た時に、またやればいいよ」
「今さっきやって入ったばかりじゃないか」

「臭いけどさ、水が溶けるから面白いんだよね」
「溶けるって言うのか？」

俺の疑問を無視して、明らかに無駄な量を出しまくっている。そんなに出したら、いつの間にかなくなるものもなくならないだろうと思う。それに、医師や看護婦が通ったら注意されそうだ。

「もうそろそろ行こうか？」
「アルコールは？」
「大丈夫」

何が大丈夫なのかわからないが、凛が開けろとばかりに足で病室の扉を蹴るので開けてやる。

中では驚いた顔の哉人だけが残っていた。

母さんは冥界に戻ったのだろうか？

「どうしたの？そんな驚いた顔をしてさ」
「おっ、お母さんが・・・お母さんが来て、『ありがとう』って」

震える指で、ベットと棚の間に置いてあった椅子を指差している。

「えっ！？本当？」
「おい、うるさいぞ。他に患者がいるかもしれないだろう」

大声をあげて驚く凛は、芝居をしているとは思えないほどの驚きようだった。
・・・もしかしたら、出来るって確証はなかったらしい。

「うん。僕も信じられなかった。寝ぼけてたのかと思ったけど、ちゃんと手を握ってくれた時、体温を感じたしさ。だから信じる。神様が最後にお母さんに会わせてくれたんだと思うことにしたんだ」

「そっか！よかったね！！」

「うん。お母さんがお父さんのことを恨まないであげてって。私も恨まないからって言っててさ。なんだか、それまでお父さんに抱いてた気持ちが軽くなったんだよ。お墓が出来たら、今度お墓参りにでも行こうかな？って思っちゃったぐらいにね」

「そっか！よかった・・・！！」

さっきと同じパターンだと感じたのか、びっくりマークを後につけた様子。それに、他にいるかもしれない患者にも気づかったのだろう。

「ありがとう」
「？」
「何か、随分とお世話になっちゃったしさ、それに励ましてくれたりもしてね」
「ああ・・・、そんなに気を使わないでよ！また今度遊びに来てね」
「ありがとう」

「じゃあ、僕らは帰るね。お大事に」

「大丈夫。明日には退院出来るんだって。今日は一応様子見ってことでね」
「そっか。じゃ！」
「あっ、また」

「じゃあな」

凛に引っ張られ、何とか扉が閉まる前に別れを言う。病院内では凛に引っ張られてばっかりだ。

「さぁ、行こうか」
「どこにだよ？」
「決まってるじゃん。回転寿司！」
「なんで今なんだよ？」

「いいじゃん。ほら、ストーカーも一緒に！」
「俺はストーカーじゃねぇ！」

凛が、さも居て当たり前のように、後ろの電柱に手招きをする。そこから出て来たのは、冬眞だった。

「加藤涼護、何をしてる？」
「まあ・・・色々とな」
「俺等を追い掛け回してるのか？」

「違う！見張ってるんだ！！」
「誰を？」
「お前だ！桜木明日夏！」
「ぼっ、僕ですか？」

指を指され、驚きを隠せずにいる桜木に向かって、冬眞はうなずく。なぜ、妖怪でもない桜木を。

「ず～～～っと傍にいてわかったが、雷光銃と波長が同じだ。だから、お前が俺達、『転生種族』のボスだ！」
「・・・ず～～～っと傍にいたって、どれくらいの範囲でですか？」

桜木の、全くもって状況に合わない問いに、冬眞だけはついて来られたようで、顔が真っ赤になった。これは・・・・どう言う意味だ？

「それは、時々だ」
「時々ってなんですか？」
「いや・・・・」

「おい、桜木。そんなことよりも『転生種族』のボスだってことの方を問えよ」

「そんなことはどうでもいいんです。何とかなりますから。ただ、この人がどこまでのストーカーなのかと言うことが先決です！とても重度ですね。これは、僕が根性を叩きなおしてやらなきゃな・・・・」

桜木の目が真剣で、狙われていない俺ですら怖い。それに、本気で怒っていて、顔には笑みまで浮かべている。

・・・・こいつ、滅茶苦茶怖い。

桜木は、冬眞の腕を驚異的な力で引っ張り、電信柱をつかんで嫌がっていた冬眞を引きずり、前の四つ角の一角に引きずって行った。

それからの出来事は見ることは無かったが、とても恐ろしいことだったことは把握出来る。

「そう言えば、僕が『転生種族』のボスって言ってましたよね？このストーカー」
「桜っち、やっとその事実に行き発つの？」

「まぁ、驚いたんですけど・・・・凛君の件がありますから、大体は想像がついてました」
「凄い広範囲で想像がつくんだね」
凛達がそんな会話をしている間、俺は、四つ角から出て来た冬眞を見る。
「変態だな、お前」
「違う！勝手に想像しているようだが、俺は変態じゃないぞ！そもそも、訳がわからないと言ってたんじゃないのか！凝視なんかしてないからな。波長を測るのに忙しかったんだからな！」
「そうか、それなら、どうして顔が赤くなったんだ？」
「それは・・・・照れ屋なんだよ。人にじっと見られるのが苦手なんだ」
冬眞の言い訳を冷たい視線を向けながら聞いた後、一言言って歩き出した。
「負け犬の遠吠えは聞き飽きた」
「だから・・・・」
「亜修羅、行こう。すぐ近くに回転寿司があるから！その・・・・涼ちゃんも一緒にさ」
「涼ちゃんって、こいつか？」
「そうそう。悪い人じゃなさそうだしね」
「僕はあまり気が乗りませんけど、さっきあれだけやったので大丈夫だと思いますし」
桜木の言葉に、あの時のことを思い出したのか、凛がそろそろと前を向いたまま後ろに歩いて来る。

「桜っちって、意外と残忍だったんだね」
「まぁ、見た目はああでも、妖怪退治屋の養成学校に行ってたんだから、あれくらいは当然だろう。妖怪に同情はいらないからな。むしろ、残忍さが必要だ」
「あははは、そうかもね」

前を歩く桜木の方に走って行く凛。その後ろでは、なぜか俺と冬眞が並んで歩いている。

「変態だな、お前」
「二度も言うな！俺はあいつの護衛をするように頼まれたんだからな！」
「だからって、そうベタベタくっつくもんじゃない」

「だから、違うって言ってるだろう！」
「ふん。呆れるな」
「誰も俺の話しなんか聞きやしねぇ」

寂しそうに言う冬眞を横目に、俺は内心面白く思っていた。冬眞をからかうと面白いと言うことに対して面白いと思ったのだ。だから、ほとんどはからかっているだけだが、少しだけ本当の気持ちも混じっている。

「なぁ、伊織」
「なんだよ」
「幸せだな、お前は」
「どこが？」

「毎日の生活の中で、一人になる時なんてほとんどないだろう？」
「まあな」
「羨ましいぜ、ずっと一人で生きて来た俺にとっては。話を聞いてくれる奴すらいないんだからな」

そう言う冬眞は、ふざけた様子はほとんどなく、無表情なのだが、悲しさが混ざったような様子が伺えた。

「・・・話ぐらいなら、いつでも乗ってやるよ。だから、もう一人だって思うな」

自分でも驚きの言葉を話している。そんなことは思ってもいなかった言葉だ。まだボソボソと言う感じだったから、聞こえない方が幸いなのだが。

「・・・意外だな。お前から、そんな言葉が聞けるとは」
「・・・・」

恥ずかしくなってうつむく。
何てことだ！丸聞こえだったなんて。これは一生の不覚だ。

「まっ、ありがたくその言葉を受け取るぜ」
「受け取るな。聞き流せ」
「ありがたく受け取るぜ」

馴れ馴れしく肩に手を乗せて来る冬眞の手を払いのけ、恥ずかしいとも呆れたとも言えない気持ちで道路を歩いた。

寿司のネタは何が好きですか？

「二人とも仲良しだね！」
「うるさい。こいつとは仲良しじゃない」
「そうかな？凄く仲良く見えるんだけどな」

「早く入れよ」
「こっ、ここは、回転寿司ですか？」
「そうだよ。桜っちがお寿司が憧れだって言ってたからさ」

「いいんですか？修さん！」
「ああ、取りあえず、少なからず金は持ってる」

さっきの怒った時とはまるで違い、子供に戻ったようなはしゃぎぶりの桜木に、不思議な感覚を覚える。

「ゆっ、夢が叶いました！」
「よかったね。桜っち！」

「はい！」
「・・・・はぁ」
「何だよ、ため息なんかついて。この場に合わない行動するなよ」

二人が喜んでいるのを裏目に、冬眞が深いため息をつく。その理由は全くわからない。突然ため息をつかれては、わかるはずもないだろう。

「・・・・寿司に憧れているって言うのは可哀想だなって思ってな」
「そうか」

「それだけか？」

そのまま冬眞を置いて行こうとすると、声をかけられる。こいつが話しかけて来るから凛に仲がいいと思われたんだ。

「じゃあ、何て答えればいい？」
「・・・・先に入っちゃったぞ」
「そうか」

「お前、本当にあっけないと言うか、無愛想だと言うのか、つまんねぇ奴だな」
「そうか」

そんなことは言われ慣れている為、差ほど気にもしないで冬眞を置いて店に入る。

「お寿司が回転してますね」
「そりゃ、そうだろう。回転する寿司なんだからな」
「便利ですね」

「そうだな」
「ねぇ、何皿まで食べていい？」
「・・・・好きにしろ」

少し考えてみたが、一皿がいくらなのかも知らないし、最悪、持ち金が足らなかったら、凛に持って来てもらおうとも思っている。

「いいの？お金足らなくならない？」
「なったらお前が取って来い」
「何でさ！」

「食後の運動だ」
「えーー、やだなぁ～」

ぶーぶー言いながらも、食う気まんまんの凛をほおっておいて、店の外を見る。

「・・・・何で入って来ないんでしょうか？」
「お前が怖いんだよ、きっと」
「・・・・そんなに僕って怖いでしょうか？」

「さあな。自問自答してみろよ」
「ちょっと呼びに行ってきます」

そう言って桜木は店を出て行き、外で立ち往生している冬眞と何かを話している。

数秒後、桜木に連れられて入って来た冬眞は何ともなかった。

「丁度席が開きましたので、こちらへどうぞ」

店員の後について行き、六人ぐらいが座れる椅子に座る。席順は、俺の隣が凛で、向かいが桜木、斜め右が冬眞だ。

凛が、桜木に回転寿司の説明をしている間、俺はずっと回って行く寿司を見ていた。

座ってから思ったのだが、説明をするなら、隣か向かいの方が話しやすいだろうに、なぜ斜めに座ったのかが不思議だ。

「えーっと、取りあえずは食べよう」
「でも、その前にすることとかないですか？」
「何をするのさ？」

「よくわかりませんけど・・・・」
「あ、亜修羅、お茶作って！」

そう言って、俺の目の前に茶葉が入った入れ物をドンと置く。

作れって言われても、作ったことがないし、桜木と同様に回転寿司など来たことがない。

「作るって、どうやって・・・・」
「ここからコップを取って、そこにそれを入れて、このレバーにコップを押し付ければお湯が出るから」

それとかこれとかの言葉が多すぎて、あまりわかりにくかったが、取りあえず寿司が回転しているところの上から湯のみを四個取り、適当に茶葉を入れて行く。それから、、湯のみを突き出ているレバーみたいなものに押し当てると、煙を立てて湯が出て来た。

「ほら」

四人の前にそれぞれ湯のみを置き、何とか茶を入れ終わる。あんなレバーを押すと湯が出て来るなんて、便利だと思ったことは口にはしない。

凛と桜木はとっくに食べているが、何だか食う気になれない。隣でドンドン食べられると、こっちの食欲が失せて来る。それに、魚はあまり好きではない。しかも生だ。焼いてすらいない。未知の味を、

人間はよく平然と食えるものだ。

「あれ？食べないの？」
「お前が食ってるのを見てると、食う気が失せる」

「そうかな？僕はまだまだ大丈夫だけど」
「まだ食うのか？」

平然と言う凛の目の前には、すでに皿が山になって積まれている。たった短時間でここまで食べられると、むしろ吐き気まで呼び起こされる。

逆に桜木はと言うと、あそこまで喜んでいた割にはやっと一皿完食と言った様子だ。

「・・・よく、そんなに食えるな」
「えっ、だってお腹空いてたもん」
「だからって、そんなに普通は食わないぞ」

周りのお客も、凛の食べっぷりに驚きを隠せないようだ。そんなことはお構いなしにどんどん食べ続ける凛は、ある意味凄い。

「亜修羅も食べれば？」
「俺はいい。食うものがない」
「どうして？」
「寿司は食えないし、他は甘いものしかない」
「じゃあ、ご飯だけ食べれば？ネタは食べてあげる」

「・・・それって、ただ単に酢飯を食ってるだけじゃないか」
「わさびもあるよ」

「そう言う問題じゃない！」
「だって、食べないとお腹空いちゃうよ」
「まあ、そうだな」

そう言う訳で、酢飯だけを食うことになった。

ネタと酢飯の間にあるわさびがネタを取られたことで、一番上に来ているから、わさびがネタのような感じがして、少し寂しい。

「そう言えば桜っち、あんまり食べてないね。それもサビ抜きだし」
「辛いのは食べられないんです。だからサビ抜きのを。だって、わさびの部分だけ取るのって汚いでしょう？」
「うん。一理ある」

一人は大食いで一人は小食。一人は食べずに、一人は酢飯だけを食う。なんだか変な連中だと思われても仕方がないだろうが、そんなの関係ない。大勢の注目を集めているようだが、別にいい。

結局俺は酢飯だけを十四皿、桜木は三皿、凛は数えるのが面倒だったが、店員が数えたのを聞くと、四十三皿だったらしい。意外と少なかった。

「意外と少なかったな」
「まあね。遠慮したんだ。本当は倍以上いけたけどさ」

「遠慮するならもっと遠慮しろよ」
「まあまあ、ご馳走様でした♪」

席から立ち、入り口の隣にあるレジで会計をする。

「九千四百二十七円です」

案外安いことに驚き、これなら余裕だったな、なんて思いながら一万円札を渡し、お釣りを受け取る。

「何でそんなに金を持ってるんだよ？普通の高校生なんか、一万円をサラッとなんか出せないぞ？」

「色々と事情があるんだ」

「特にバイトとかしてるようにも見えないけどな」

その時、閃いたものがあった。雷光銃を返してもらう方法を思いついたのだ。

「さっきの一万円札を一万枚集めるといくらになる？」

「・・・・一億だけど？」

「それの倍は？」

「二億？」

「俺は、夜に何でも屋をやってる。実は、今大変な依頼が来てな。合計よっつあるんだが、それの一つだけで一億がもらえるんだ。そのよっつの依頼と言うのは、『雷光銃』を探し出す。その持ち主をみつけること。それから、『烈火闘刃』を探し出す。その持ち主を見つける。このよっつが条件なんだ。

それで、今、お前が雷光銃を持っている。それをこっちに渡してくれたら、雷光銃分の報酬をやろう」

「本当か！？」

「ああ、金なんか腐るほどある」

「いくらぐらいあるんだ？」

「さあな、随分溜まったんじゃないのか？いろんなこともして来たしな」
「・・・おい、お前、懸賞金の奴じゃないか！」
「今更気がついたのか？」

「ああ。でも、いいのか？こんな呑気に人間界での生活を堪能してて」
「大丈夫だ。襲って来た奴は片っ端からねじ伏せる」
「・・・真顔で恐ろしいことを言うなよ」

呆れと疲れが一気に出たような感じでため息をつく冬眞。しかし、そうでもしないと生きてはいけない。

「いいのかよ？俺だって、いつお前のことを襲うかわからないぞ」
「そうだな。しかし、何となくやらない気がする。まぁ、来たらこっちも死ぬ気で抵抗するけどな」
「げっ・・・」

「そう言うことだ。寝首をかくようなことはするなよ」
「しねぇよ」

ブツブツ小声で言っているところからすると、そんなことも考えていたようだが、俺に釘をさされて諦めたらしい。

「あっ、テレビ！もう始まっちゃってるよ！亜修羅、鍵！」

急に鍵を出せと言われて少しうろたえたが、鍵を渡すと、凛はさっさと先に走って行ってしまった。よっぽど見たいテレビだったのか。

「あいつ、いっつもどんなテレビを見てるんだ？」
「そうですね・・・・。ドラマとか、アニメとか、バラエティーとか。色々見てるみたいですよ」
「アニメとか・・・・まだ見てるのか」

「そうですね。主題歌とかノリノリで歌ってたりしますし、踊りとかがあると一緒に踊ってますし」
「・・・・あいつの精神年齢、いくつだよ？」
「大丈夫ですよ、同じクラスの子でもアニメを見てる子がいますから」

現代の中学三年生がそんなに子供じみているとは思ってみなかったから、新しいことを知ってよかったのだろうけど、あまり特した気分にはなれない。

「それで話は戻るが、それでいいよな？」
「何だっけ？」
「だから、雷光銃の話だ」

「ああ、その話だけどな。やっぱり無理だ。それを渡しちまったら、俺達の種族は滅びることになるだろうしな」

「・・・・依頼主は、魔界の王族の奴だ。そいつはきっとに種族争いごと抹消するらしい。それぞれ種族の持ち合わせている武器を奪えば、そう大きな戦争にはならないだろうと考えていると思うんだ」
「要するに、戦争のダメージを小さくするってことか？」

「そうだ。ただでさえ三種族が争いを起こすと言うのに、それに魔界の国宝まで関わって来ると、さらに被害は大きくなる。もしかしたら魔界をも越えて、人間界にまで害が及ぶかも知れない。無意味

な奴らを巻き込む訳にはいかないだろう？」

「そうだな。でも、そうなったら俺等は勝ち目がないぞ。頭脳種族や戦闘種族と違って、人数が大幅に少ないんだからな」

「そもそも、何で種族争いなんかなるんだよ？仲良くしておけばいいだろう？」

「さあな、俺にもよくわからない。ただ、種族の族長同士の争いが・・・」

「ちょっと待てよ、国宝の使い手がボスじゃないのか？」

「それは、今までの年寄りの族長どうしでの戦いだ。国宝の使い手は、新しい族長ってことだ」

「・・・ああ、めんどくさいな」

聞いているだけでめんどくさくなりそうな説明を受け、余計に種族争いが必要な理由がわからなくなって来そうだ。なぜ、種族争いの理由も知らないのに、冬眞は自分の種族のために行動するのか。

「お前は、何で種族争いの意図も知らないのに、そこまで自分の種族のために行動するんだ？」

「そりゃ、自分の種族を助けたいと思うのは当たり前だろう？」

「俺は自分の種族がどうなったって関係ない」

「ひっでぇな」

冬眞の言葉を無視して家のドアを開けようとしたが、鍵がないことを思い出し、インターホンを押す。

「開いてるよ？」

家の中から凛の声が聞こえる。手が話せない状態（いや、目が放せない状態なのかもしれない）なのか、そのまま声をかけられた。

ドアを開けてみると普通に開いた。無用心にも程があるが、とりあえず中に入った。

とりあえず、魔界へ

部屋の中に入ると、そこにはテレビに釘付けになっている二人の人物がいた。一人は凛だとわかるが、もう一人は誰だか知らない。

「おい、凛。そいつ誰だ？」

「ああ、なんかね。僕を連れに来たんだってさ。でも、これを見終わるまで待っててって言ったら待っててくれてるから」

「いや、そうじゃない。誰だ？と聞いてるんだ」

「だから、この人も同じ戦闘種族の人なんだって。それで、国宝の使い手の僕を、戦闘種族のボスにしようってことで、魔界に行こうって話になってるんだ。それから、この人も冬眞と同じで、僕の護衛も兼ねてるんだってさ」

「名前は？」

「錬賭」

「だって～」

テレビに夢中になっていて、ほとんどこっちの話は聞いていないであろう凛は、尚も目を離そうとしない。

「やっと終わった！じゃあ、行こうか」

「準備は？」

「大丈夫。じゃあ、ちょっと魔界に帰って来るよ」

「おい、ちょっと待てよ！」

出て行こうとする二人を慌てて止める。

「何さ？もしかして、僕がいないと寂しいとか？」
「そうじゃないが・・・・」
「じゃあ、ちょっと行って来るよ。敵になっちゃうかもしれないけどさ、お互い頑張ろうね」

そう言ってさっさと家を出て行こうとする凛を、なぜだか腹ただしく思えて来る。そんなにあっさり行くものなのか？

「そうだな、俺達もそろそろ行くことにする。族長、行こうぜ」
「でっ、でも、僕は人間なんですよ？」

「ああ。そんなの関係ない」
「えっ、あっ、あの・・・・。修さん、また！」

あっと言う間にみんながいなくなり、テレビの音だけが聞こえる。昔はそれが当たり前だったが、今は少し心細い。誰かと一緒にいることが当たり前になっていて、逆に一人になってみると強がってみるが、やはり寂しい。

無言で流れているニュースを見ていると、不意に窓が開いた。普通なら窓が開くなんて不自然なことが起これば驚くものの、俺は妖怪だから、差ほど驚かなかった。

「お～い、君。一人ぼっちで寂しくないですか？」
「・・・・」
「なぁ、聞いてるか？」

「・・・・」

「ふぅ」

そいつは初対面にも関わらず、普通に窓から部屋の中に入って来る。
ずうずうしい奴だと思うが、何か訳があるような気がしてならない。
とんでもないことに巻き込まれそうな感じの。

そいつはそのまま俺の横に立ち、座る。と言うのは、隣に座っていると言うことだ。

「誰だ？」
「俺は、神羅」
「何の用だ？」

「え～とですね。とりあえず、魔界に来てもらいましょうか」
「なぜだ？」
「まぁ、色々と事情があってな。いいか？」
「無理だ。俺はそんなに暇じゃない」
「族長～、そんなに俺のことを拒否らないで下さいよ～」

「やっぱりか。じゃあ、お前は俺を連れて魔界に行く。それと、護衛を任されたと言うことか」
「なんだ、わかってるじゃないか！」

神羅の言葉に思い切り気が沈む。俺は、自分の種族の族長になんかなりたくもないし、第一、種族争いなどに加わりたくもない。

「俺は族長になんかなりたくないし、それに、種族争いに加わる理由もない。しかも、俺は国宝なんて持ってないぞ？」

「・・・俺だってよくわからないけどさ、今の族長が言うには、

烈火闘刃の波長と族長の波長が似てるんだってさ。でも、まだ似てると言うところまでしかわからないから、一応確かめる為に俺をこっちに寄越したって訳さ」

「俺は、魔界には行かないぞ。色々と人間界でしなくちゃいけないことが沢山ある。それに、懸賞金をかけられている身でもあるしな」

妙に馴れ馴れしい態度がしゃくに触る場合もあるが、むしろそっちの方が俺にとっても楽かもしれないと言う結論がこの時初めて出た。

まぁ、話の内容とは全く関係ないけどな。

「大丈夫！俺が護衛するって言っただろ。ちゃんと守ってやるって！」

そう言って、バシバシと背中を叩く。

護衛の奴が守る奴のことを叩いてどうする？守られる奴から信用なくされると思わないのか？

「誰かに守られるのは好きじゃない。だから、魔界には行かない」

「それじゃあ困るんだよな。まだ本番ではないっぽいけど、結構本格的に戦争が始まっちゃってるんだ。だからさ、頼むよ！」

「・・・もし、烈火闘刃と同じ波長でも、俺は、お前らの族長にはならないからな」

やっぱり、俺は弱いな。いや、甘いのか。頼み込まれると、やはり引き受けてしまう。これはいいことだとは思うが、何となく嫌だ。

「よし！じゃ、早速」

言うが早いか、神羅は俺の腕をつかんで立ち上がらせると、丁度目の前のテレビが置いてある方に手を向ける。すると、何とも不思議な、例えると異空間への入り口みたいなものが目の前に現れた。

「族長、しっかりつかまってて下さいよ！」
「お前が俺の腕をつかんでるんじゃないか」
「ああ、そうだった。異空間は流れが激しいからな。変な方向に流されるんだ」

「お前、妙に変なしゃべり方するな」
「気にしない、気にしない」

上手く受け流され、背中をドンと押されて異空間に無理矢理つっこまれる。

「おい、押すな！転んだらどうするんだ！」
「だから、異空間は宇宙みたいにフワフワするから大丈夫なんだって！」

神羅の言う通り、異空間の中は宇宙のようにフワフワと浮くし、銀河系まで見える。本当の宇宙じゃないのかと思う。しかし、異様なまでに変な方向から風が吹いて来るから、宇宙じゃないのかもしれない。それに、宇宙では呼吸が出来ないからな。

不意に何かを当てられる。すると、呼吸は出来たものの、ちょっと呼吸がしにくいと思ったが、呼吸が楽になった。

「それ、付けといてよ。呼吸が苦しくなっちゃうから」
「じゃあ、もっと早く出せよ」
「忘れてたんだよな～」

神羅につかまれている右手じゃない左手で、その不思議な細長いプラスチックみたいなものを鼻と口に押し当てる。

「ああ、それから、魔界についたらそれは必ず外してね。でないと窒息しちゃうからね」
「何だよ。これってそんなに危険なものなのかよ？」
「そうだよ。その中の空気は、この異空間の空気とは調和するけど、人間界や魔界では逆に反発しあうからね。つけてたら、一分で即死だよ」
「危険だな」

「こっちだよ。風に流されないように上手く体を傾けろ！」
「そんなこと言われてもな、簡単じゃないんだぞ！」

神羅に言われて反論するが、決して負け惜しみを言っているんじゃない。本当に横風が凄いのだ。頑張って体を前に直そうとしても、床がないから、体が上手く方向を変えなくて、右に流されて行きそうになる。

「頑張れ！」
「お前と違ってここに来たことがないんだよ！」

「俺が支えてるから向こうに行かないだけだな。しっかりつかまってろよってことだ。でないと変な方向に飛ばされるぞ。これでわかったか？」
「ああ、わかった」

神羅の言っていることがようやくわかり、突っ張ってつかまなかったら、きっと変な方向に飛ばされてただろうと痛感した。

「よし、飛び込むぞ！」
「どこに？」
「決まってんだろ！魔界じゃあ！！」

神羅が言った途端に、急に風の流れが横風ではなく追い風になり、目の前に大きな渦が見える。そして、そこにそのまま突っ込んで行く。

「空気マスクを外せ！」
「何だよそれ！」
「そのマスク！」

「ああ、これか！」
「ああ、それだ。返してくれ！！」

なぜ大声で話しているのかと言うと、風の音と言うのか、ゴウゴウと言う音が凄くて、近くにいるはずなのに、相手の声が聞こえない。スカイダイビングのような感じだ。

神羅に空気マスク（？）を返しても、もう息は苦しくない。あの異空間の世界を抜けたからかもしれない。

「もう直ぐ外に出るから、覚悟しといてよ」
「何で外に出るのに覚悟なんか・・・・」

そう言いかけた時、滑り台とウォータースライダーから滑り落ちた

ような感覚が起きた。

と言うのも、急に追い風が止み、景色も見えない程のスピードで下に落ちて行った。そして、そのまま何かの上に思い切り落ち、バキッボキッと音を立てて最後に地面に体を打ちつけた。

「うっ」

余りの痛みに中々立ち上がれない。背中から地面に落ち、背骨が折れたかと思った。地面は手触りからすると土のようだ。そして、今まで俺が落ちて来たのは雑木林のようだった。

隣で同じように地面に背中を打ち付けてうめいている神羅を見ると、あいつもどこに落ちるのかわかっていないようだった。それか、落ちる前に言った言葉からすると、覚悟とはこのことだったのか・・・。

しばらく痛みにうめいていたが、動けるようになったので、まだ痛む体を無理矢理起こして隣でぶっ倒れている神羅に声をかける。

「おい、起きろ」
「起こして、体が死んでる！」
「自分で立て！護衛だろう」
「無理、背骨が折れた！」

「嘘付け、俺だって無事なんだぞ？」
「いや、マジ。本当。まずいって真っ二つになってる」
「じゃあ、起こさない方がいいだろう」
「いや、折れてはいないかもしれないけど、ヒビは絶対入った！」

辺りを見渡しても建物らしいものがないし、人気もない。随分と奥に落ちて来たようだ。

仕方なしに、うるさく喚く神羅を起こして背中を調べる。確かに変だ。折れてはいないものの、ヒビは入っている。

「確かにヒビは入ってるな。動けるか？」

「だから、無理だって！」

「大声を出すと、骨に響くぞ」

「はい・・・・」

確かに、動けるか？と聞く俺もおかしいと思い、神羅を担ぎ、とにかく歩き出した。どこに里や村があるかわからないが、とにかく進むしかない。

魔界の国宝　月下遊蘭編　不思議な道

「ここが魔界ですか？」
「まぁ、そうだな」
「随分と雰囲気が変わりましたね・・・・。僕がいた頃とは別物です」
「それはきっと、田舎にいたんだな。普通だぜ？これぐらいは」

僕は、目の前に広がる人間界と同じような風景に、目を疑った。

なぜなら、僕が魔界にいた頃は、周りには木や緑に囲まれてて、山の中と言う感じだったんだ。僕らの学校以外は、周りに何もなかった。

それぐらい山奥のような場所がずっと続いてるのかなって思ってたから、目の前に広がるデパートや高層ビル、ネオンなどに驚いてたんだ。

「ほら、行くぞ」
「あっ、はい」

目の前の光景に驚いたいた僕に、冬眞が催促して来るから、慌てて走った。

僕とすれ違う人は、必ず僕の方を振り返って首を捻っている。きっと、人間が魔界にいるから驚いているんだと思う。普通は、魔界に人間がいることはないからね。

しかし、こうやって見ると、本当に人間界にそっくりなんだよね。

まるで、人間界と対の世界になってるみたいで。
区画の分け方が町じゃなくて村とかの違い以外、人間界のものを全て持って来たような感覚だ。
そんなことを思って歩いていると、前を見ていなくて、立ち止まっていた冬眞に思い切りぶつかった。
「いたた・・・。どうかしたんですか？急に立ち止まったりなんかして」
「そんなに余所見ばっかりしてると、スリを働く奴の標的になるんじゃないか？」
「そうですよね。魔界がずいぶんと変わってたからって、浮かれ過ぎですよね？」
「それから、これ」
そう言って投げ渡されたのは、雷光銃だった。
そう言えばこの人、僕達がデパートで追いかけてた人だと今気がついた。
「いいんですか？あんなにまで逃げて他の人に渡さないようにして来たのに、僕になんかにすんなり渡してしまって」
僕がそう言うと、冬眞は少し考え込んだ後、僕の腕を引っ張って路地裏まで連れ込んで、声を小さくして話し始めた。
「種族争いのことは知ってるよな？」
「・・・・はい。凛君から聞きました」
「そうか。なら、話は早い。俺は、雷光銃を俺達の族長に渡す為に

盗み出したんだ。と言うことは、お前が族長だろ？だから、渡されるってことだ」

「でも、見た限りでは、そんな種族争いなんて起きているような兆しは見えないのですが・・・・」

道行く人々を見ると、別に、そんな険悪な雰囲気になる訳でもなく、普通に通り過ぎて行く。これを見て、種族争いがどうのこうのなんて言われても、全く想像がつかない。

「見ただけじゃわからない。妖怪って言うのは、怒りを『勘』で感じるんだ」

・・・難しい。勘で怒りなんて感じるのかな？

僕は妖怪じゃないから全くわからないけれど、一応冬眞の言葉を信じることにしたんだ。

「それに、こう言う便利な店が立ち並ぶ村とかはそんなことはないが、一部の村では、既に規制が始まっている」

「それって、どう言う？」

「まぁ、聞くより慣れろってことだ」

そう言われたかと思うと、冬眞は路地裏から出てしまったから、僕も後をついて行くと、さっきのにぎわった場所とは違って、僕の知っている魔界の風景に変わった。

木が沢山あって、どこかの山奥にいるような感じだ。

「しゃがめ」

そう言われたから、慌ててしゃがんで茂みに隠れる。どうして隠れなくちゃいけないのかはわからないけど、一応、言う通りにしたんだ。

「あそこを見てみろ」

「あっ、衛兵みたいな人がいますね」

「ああ。ここは、戦闘種族の領域。いわば、敵陣のど真ん中だな」

そう言われて、思わずうろたえる。

この人は、守るべき族長を敵陣の真ん中に連れて行ったんだ。信じられないよね、普通。

そんな僕の心を察してか、冬眞が首を振った。

「大丈夫だ。護衛として族長についた時から、俺達は本気で族長を守らなければいけないからな。自分の命を落としてでも守りきらなきゃいけないんだ」

「・・・命をかけて守ってもらわなくても、僕だって戦えます。元々は、妖怪退治の養成学校に行ってたんですから」

そう言う僕の言葉を聞いて、冬眞は驚いた。

だって、もともと根本的に敵だったと知ったからだろうね。人間と言うだけで生き物が違うのに、その上、自分を退治する為の学校に行っていたと聞かされるんだもんなぁ、命をかけて守れと言われた族長に。

「そうなのか・・・。じゃあ、もしかして、あの、有名な奴か？」

「有名って程でもないですけどね・・・」

冬眞はゆっくりと僕の方を見ると、少しずつ距離をとる。

「なんで離れるんですか？」

「いつ退治されるかわからないだろう？」

「でも、君は僕の護衛をしなくちゃいけないんでしょ？そんなこと許されないんじゃないかな？」

僕に言われて、冬眞は苦しそうな顔をして、しばらくの間ブツブツと何かを言っていたけど、仕方なくうなずいた。

「大丈夫ですよ。もう卒業してますし、養成学校に行っていたと言っても、今更妖怪退治の職業に就こうとは思ってないですからね。今までだって、一度も妖怪を殺したことはないです」

「でも、俺のことを殴ったじゃないかよ・・・・」

ボソッと言う冬眞の言葉をあえて無視して話題を変える。

「あの衛兵がいる先には、戦闘種族がいるってことですね。それ以外の種族は門前で倒されて」

「いや、殺されてる」

「えっ？」

「一人でも人数が減れば、楽になるからな」

「そんな・・・・」

「それに、種族争いって言っても、あいつらだけの話だ。俺達のことなんか忘れてる」

「あいつらって、戦闘種族と頭脳種族だけってことですか？」

「ああ。俺達は人数も少ないし、力もないし、頭も働かないから、

戦争以前に、存在すら忘れられてる。だから、そんなやつらに俺達の存在をわからせる為もあるんだ」

「・・・・そうなんですか」

それでも、種族争いなんてばかげてると思う。その為に殺された人達はどうなるんだろうって。殺された人の家族とかは悲しむと思うし、何より、そんなことで命を落とすなんておかしいと思う。

「まぁ、とにかく、俺達の基地へ行こう」

「あるんですか?そんなの」

「ああ、一応あるんだ」

そう言って、身をかがめて後ろに歩き出すから、僕も同じように身をかがめて歩き出す。

その時、視線を感じて、見つかったかな?と思って振り返ったけれど、そうではなかったらしくて、誰もいなかった。でも、視線は続いている。

何だか嫌な気分になって、ため息をついた時、不意に地面がなくなった。

「えっ!?」

一瞬何が起こったかわからなくなって、気がついた時には、真っ暗などこかにいた。

状況が全く飲み込めなくて、辺りを見渡していると、不意に持っていた雷光銃が光ったかと思うと、ある一点を目指して光の道が出て来た。

よくわからないけれど、ここから出る術もわからないから、とりあえず、その光りの道をたどって歩き出すことにした。

しばらく歩いたけれど、一行に何かが見える訳でもなかった。

そもそも、前に進んでるのかわからない。ちゃんと歩いてるって言う感覚はあるけれど、よくわからない。

多分、時間にして一時間以上は歩き続けていたと思う。そろそろ疲れて、その場に座り込もうとした時、今まで真っ暗な洞窟みたいだったのに、急に辺りが真っ白になったかと思ったら、花畑に一人ポツンと立っていた。

この突然の出来事にも驚いていると、不意に後ろから声が聞こえたものだから、僕は叫びそうになった。

情けないってわかってる。でも、やっぱり一人だと、平静でいられなくなるんだ。みんながいると、何だか安心して平静でいられるけど、一人になると、やっぱり不安だから。

《転生種族の族長か？》

「・・・・誰ですか？」

《雷光銃の対として作られたもう一つの国宝と言われるものだ》

そう言われて、あの話は本当だったんだと思う。

あの話と言うのは、もう一つの国宝の話だ。凛君を信じない訳じゃないけど、とても信じられる話じゃなかったんだ。だって、実は、もう三つあったなんて・・・・。まるで付け足すみたいにあるから。

でも、凛君の言ってたことは正しかった。凛君に、ふざけて、「桜っちのところにも、もう一つの国宝から呼び出されるかもよ?」と言われて、その時はないだろうなって思った。

なぜなら、僕は人間だから。妖怪のことは普通の人間よりは知ってるけど、一応人間と言う肩書きがあるから、魔界の国宝と言う大層なものが、僕なんかを呼んだりしないって思ったんだ。

凛君が言うに、あの冥道での出来事は、天華乱爪が自分を見つけさせる為に起こしたことなんじゃないかって言ってたけど、今なら、そう考えるのが妥当だと思う。

僕だって、ここがどこかはわからないけれど、完全に魔界とは違う空間にいるんだと思う。だから、呼び出されたと思った方がいいのかもしれない。

「・・・そうですか。確かに、転生種族の方に族長だって思われていますけど、僕は人間です。それでも、僕を呼びに来たんですか?」

《そうだ。私は、種族争いが起こった時に、転生種族の族長を呼んで、力を試している》

「なんでそんなことをするんですか?そもそも、魔界の国宝と言われるようなものが、どうしてこんなところに・・・・」

《無駄話はいい。私がお前のことを認めれば、力を貸してやろう。しかし、お前が私を扱うにふさわしい力を持っていないとみなせば、お前をこの場で殺す》

「えっ!?」

僕は、かなり慌てた。だって、向こうから呼び出しておいて、認められなければ殺すって、酷くないかな？もしかして、今まで族長がいなかったのって、このことが原因？

《私を扱うのは、死を覚悟した者のみしか不可能だ。そんな生半可な気持ちで扱おうものなら、自ら死を招く。私に認められる自身がないのならば、この場を去るがいい。しかし、元の世界には戻れないけどな》

とても理不尽な話だ。急に自分のところに呼び出したかと思ったら、力を試すと言われて、認められなかったら殺すと言われ、自身がないならここを去ってもいいって言うけど、魔界には帰れない。

本当に理不尽だし、意地が悪いよ。

でも、そんなことを言おうものなら、力を試される前に殺されてしまいそうだ。

この・・・そう言えば、名前を聞いてなかったな。

「あなたは、何と言う名前なんですか？」

《月下遊蘭（げっかゆうらん）だ》

さっき言いたかったのは、この、月下遊蘭は、修さんみたいなタイプだから、怒らせると怖いと思う。だから、そんなに怒らせるようなことを言ったら、認められるも何も、その前に自滅しちゃいそうだよ。

「・・・わかりました。どのみち、この試練は受けなくてはいけないようですね。だから、受けます」

《それでいいか？後戻りは出来ないぞ》
「はい。意を決めました。絶対に認めてもらいます」
姿を見せないから、声が聞こえた方向に、力強く言った。
《それなら、さっそく試練に向かってもらおう》
そう言われたかと思うと、周りが再び暗闇になって、しばくすると、再び明るくなったけど、僕が立っていた場所は、さっきの花畑ではなく、焦げくさいにおいのする山の中だった。
とりあえず歩き出すと、再び周囲が闇に包まれて、後ろから物凄く強い妖力の弾が飛んで来た。
それを慌てて避けると、今度は刀を振り下ろされて、これは何とかガードをする。
そして、二、三歩後ろに下がってから前に向き直り、驚くこととなった。なぜなら、自分自身がいるんだ。
影のように色はないんだけど、僕みたいにちゃんと動いてる。
「どうしているのかって思うんでしょ？」
「そんなこと・・・・」
「心が読めるのかって思ったよね」
「・・・・」
思った直後にズバズバと言い当てられるから、思わず目を逸らす。
「目を逸らしたって、僕には君の心が手に取るようにわかる。だか

ら、攻撃なんてしたって無駄だよ。どこを攻撃しようとしているのかが読めるからね」
「やってみなきゃわからないだろ？」
そう強がるものの、心の中では怯えていた。
それを振り払うように、雷光銃を自分に向かって撃つけれど、軽々と避けられた。そして、反撃を食らう。
何とか着地に成功したけど、間もなく攻撃を繰り出されるから、避けることが出来なくて、何とかガードをするけれど、弾き飛ばされた。
「情けないね。沢山の人に見捨てられて、可哀相に」
「・・・・くっ」
うつぶせになったまま、こぶしを握り締める。そして、立ち上がると、自らを睨みつける。僕は、こいつが嫌いだ。自分自身が嫌いだ。
「見捨てられたと知って、沢山のやつ等を殺して来たんだろ？」
「そんなことしない！」
「嘘つくなよ。お前は、周りのやつらを憎んでた」
段々と、影の方が昔の僕の口調に戻っていることに気づく。だから、容赦がないんだなって思った。ならば、僕も本気で行こう

「だからって、殺したりなんかしない！誰よりも命の大切さはわかってるはずだ！そんなことはしていない！」
「いや、お前が全員殺したんだ。自分の気がつかないうちにね」
「！！！？」

そんなことはないはずだ。絶対にない。憎んだからって、殺すようなことは・・・・。

「お前は自分が殺したことにショックを受けて、自らの身を守る為に、記憶を書き換えたんだ。不慮の事故だってな。だから、親戚が引き取ってくれないのは当たり前だ。一人もいないんだからな。全員、お前が殺したんだ」
「違う！！」

取り乱して、影の方に突っ込んで行くけれど、簡単に弾き飛ばされてしまった。五メートルぐらい吹き飛ばされて、地面に叩きつけられる。けれど、それよりも、心が動揺していて、対して痛みも感じない。

「違うって言っても、僕は記憶している。裏の感情の僕は、全ての記憶を覚えているんだ。ちゃんとな。お前は、二十五人を自らの憎しみの為に、見知らぬうちに殺してたんだ」
「そんなことはない！」

「現に、自ら近寄らない親戚だけは生き残っているじゃないか。それに、今のお前のダチも死んでいない。それどころか、事故すら起こらない。その理由は、満足してるから。そうだろ？」

「・・・・」

何も言えなくなる。僕は、本当に親戚の人達を殺して来てしまったんだろうか?そんな最低なことを無意識のうちにやっていて、平然と命のことを語ってたりしたんだろうか?

そう思うと、自分自身が更に嫌いになる。最低だよ、人のことを沢山殺して来たくせに、命を語るんじゃないよって言われちゃうよ。

「だから、お前は生きていない方がいいんだよ。あいつらのことを無意識のうちに殺したくないだろ?」

涙が出そうになる。あの人達のことは殺したくない。今までの人達のことみたいに、殺したくない。

よく思えば、親戚と言っても、あまりよくしてもらえなかった。だからって、殺していいはずがない。

「だから、ここで闇に溶け込んでしまえばいい。そうすれば、傷つけずに消えることが出来る」

「・・・・」

そっちの方がいいんじゃないかと言う気持ちが段々大きくなって来る。こいつの言っている言葉が事実かはわからないけれど、万が一のことがあるのは嫌だ。

僕みたいな最低な人間を笑顔で迎え入れてくれた人達を殺してしまいたくない。

「・・・わかったよ。殺していい」

僕がそう言うと、影は満足そうに微笑んだ。

影とは言え、これは僕自身だ。と言うことは、僕は、死を望んでるのか？いや、それは違う。今の僕は、精一杯生きたいと思ってる。

凛君が帰って来て、「生きててくれてありがとう」って言われて、自分は生きてていいんだって初めて思えた瞬間から、精一杯生きようって決めたんだ。

そう思って影の自分を見た時、微妙にその表情が悲しみを帯びているのがわかった。

いや、表現がおかしいかな？影だから表情はあまり見えないんだけど、オーラと言うか、何と言うか、自然と悲しみの感情があるってわかったんだ。

「・・・やっぱりダメだよ」

「どうして？お前は死を望んでるんだろ？」

そう言う影の表情が、怒りでも悲しみでもなく、焦りのように感じた。どうしてかわからないけれど、焦っている。

「違う。今、僕は幸せだ。だから、死なんか望んでない」

「でも、あいつらのことを殺したくはないだろ？」

「僕は、絶対そんなことはしていない。そう言いきれる。お前の方が記憶を書き換えてる。自らの罪悪感を晴らす為に、死を望んだ。でも、それだけじゃ、後一歩を踏み切れない。だから、そう思い込み、記憶すらも書き換えた」

「嘘だって言い切れるのか？」

僕の言葉に、影がうろたえて後ずさる。だけど、僕はその影に近寄った。

「言い切れる。僕は、自分自身を信じる。だから、やってないって思ったら、やってないんだ！」

僕の言葉に、ハッとした表情を浮かべるけれど、直ぐに表情を戻して、平気そうな顔をするけれど、明らかに僕を恐れている。

何だか、今ならわかる気がする。戦わずとして、自分自身を説得する方法。

影と言えど、僕自身なんだ。だから、僕自身を理解して、認めて、好きになればいい。自分を卑下して嫌っていたら、ダメに決まってる。認めてあげなきゃいけない。

「だから、もうやめよう、自分から逃げるのは。素直に好きになろうと思う。ごめんね、今までずっと嫌いだって言って跳ねつけちゃってて。苦しかったよね、だから、記憶を書き換えてまで、もがこうと思ったんだよね」

影の自分に近付いて行って、ギュッと抱きしめる。

すると、今まで強張っていた影の力が抜けて、フッと消えてしまった。

でも、最後に一瞬だけだけど、微笑んだような気がして、自分も微笑み返した。

その時、再び世界が光に包まれて、花畑に戻って来た。

「あっ・・・・」
《どうやらこちらで手違いが起こったようだ》
「あっ、でも、自分と向き直るいいチャンスだったと思うので、よかったと思います。ありがとうございました」
《うむ。礼儀は正しいようだな。それに、大きな心を持っている。よし、今回は特別にさっきのを試験として、認めよう》
「それじゃあ！！」
僕は、月下遊蘭がもらえると言うよりも、早く魔界に帰りたいんだ。だから、認められたと言われて、とても嬉しかったんだ。
でも、世の中って、そんなに上手く行かないんだよね。
《最後に、私と戦ってもらう。さぁ、準備はいいか？》
そう言われた途端、景色が再び花畑から暗闇になって、今度はプラネタリウムみたいに、星が沢山ある場所に立っていた。
プラネタリウムと違うところは、天井だけでなく、上、下、右、左全部が星で囲まれてるところだ。宇宙に投げ出された感じだね。
そんな星に見とれている時、不意に何かを投げて来られて、何とかそちらの方を振り返って受け取ると、日本刀だった。
「やっと、戦える相手が出て来たな」

背後でそう言われて振り返ると、思わず口を開けたまま、閉じるのを忘れてしまった。

なぜなら、そこに立っていたのは、どこかの国の王子様って感じの人だったんだ。

詳しく説明すると、髪は紫色で、右目には髑髏の模様のある黒い眼帯をしていて、服装は、黒いシャツに白くて長いコートを来てる。そして、ズボンも、膝ぐらいの長さがあるブーツも黒。

でも、王子様なんて柄じゃないと思った。今までの服装でも、王子様にはほど遠いけど、決定的なことがある。

それは、ピアスをしていたり、金色のネックレスをぶら下げてたりするってこと。王子様には、完全に見えないよね。

今までの服装で出た結論は、「海賊のように見える」と言うことだった。これで間違いないと思う。

でも、顔がかっこいいから、どんな格好をしても似合いそうだ。

その人は、鼻歌でも歌いそうなほど嬉しそうに日本刀を鞘から引き抜くと、その鞘を放り投げて、正眼に構える。

僕が、ボーッとしてその人のことを見ていると、不機嫌そうな顔になり、早く刀を構えろと言うように、刀を僕に向けて振って来るから、僕は慌てて鞘から刀を抜いた。

実を言うと、刀を扱うのは初めて。いつも銃ばかりを使っていたから、刀は初体験かもしれない。

それなのに、相手はそんなことを知らないから、僕が鞘を抜いたと同時に飛び込んで来て、僕は、そのまま刀を前に突き出すことしか出来なかった。

その唐突の動きに、相手は慌てて僕の上を跳び越して、c後ろに回った。途中で立ち止まることが出来なかったんだろうな・・・・。

「お前、中々突発的な動きをする奴だな。このパターンで突きを放った奴はお前が初めてだ」

「あっ、あの・・・・あなたは誰なんですか？」

「私は、月下遊蘭。さっきまで話していただろう？」

「えっ、いや、でも、月下遊蘭って、魔界の国宝の一つで、武器ですよね？」

「武器と言えど、下級なものではない。だから、人間の姿になることも可能だ。だから、話が出来たのだろう」

なるほど・・・・と思いながらも、未だに納得で来ていない部分が多々あるんだ。

「とにかく、私に勝ったらお前を認めよう」

「あっ、あの・・・・でも！」

「話は聞かないぞ」

そう言われたかと思うと、本当に何の話も聞かずに、攻撃を繰り出して来るから、僕は避けるので精一杯だった。

無論、攻撃なんて、もっての他だ。

「避けるだけじゃ、私は倒せないぞ！」
「攻撃の仕方なんて、知りません！！」

僕は、月下遊蘭の攻撃を何とか押さえると、グイッと相手の方に体重をかけて押して、自分は後ろに飛び退いて、何とか距離を広げる。

距離が狭かったから、ずっと攻撃をし続けられたんだ。今はとにかく、上がってしまった息を整えるのが重要だと判断したんだ。

「それなら、素直に負けを認めるか？」
「えっ？」

急に月下遊蘭が攻撃の手を緩めて聞くから、僕は身構えながらもその目を見る。

さっきの楽しそうな雰囲気が消えて、怖いほどに真剣だ。

「負けを認めたら、お前は私によって殺される。それでいいのか？」
「そっ、それはダメです！」
「なら、私を倒せ」
「酷いです！」

僕は、もう、そう叫ぶしかなかった。だって、勝てる訳ないのに諦めることが出来なくて、どう考えても、この人を倒すしか道はないなんて・・・・。

僕は、生きて帰ろうって決めたんだ。だから、こんなところ殺される訳にはいかない！

僕は、自ら月下遊蘭の方に走って行くと、思い切り飛び上がって、

刀を振り下ろす。けれど、軽々と避けられて、反撃を食らいそうになるから、何とか空中で体勢を変えて避ける。

「さっきより動きがよくなってるな」

「・・・・行きます！」

もう、この人の言葉は無視してしまおう。今は、帰ることしか考えちゃいけないんだ。でないと、負けちゃう。

僕は、地面に着地すると、二、三歩後ろに下がり、日本刀を下段に構えて、ジャンプした。

相手は、僕が振り下ろして来ると思ってガードをするけれど、そこで時が止まった。

・・・・えっ？

今言ったのは、大袈裟じゃない。自分でも驚いちゃったんだけど、本当に時が止まってる。

何が起きたのかわからないけれど、そのまま着地して、正眼に構える。

本当は、このまま斬れば、僕が勝つことが出来る。でも、相手は動けない状態なんだ。いくら、酷い人でも、僕はそんな酷いことはしたくない。

正々堂々といけるかはわからないけれど、相手が動けないところを斬るような最低な真似だけはしたくないんだ。

そう思って、ずっと相手を見てるんだけど、中々動き出さない。

そろそろおかしいと思い始めた時、不意に後ろから空を切る音が聞こえて、何とか右に避ける。

そちらの方を振り向くと、さっきまで目の前で静止していた月下遊蘭が刀を振ったのだ。

「どっ、どう言うこと？」

「お前が弱過ぎるから、チャンスをやったのによ、何で攻撃して来ないんだよ！」

月下遊蘭が、子供みたいに頬を膨らませて怒るから、思わず笑ってしまった。

だって、見かけに全然似合わないんだもん。

「チャンスをもらって倒しても、僕は納得行きません。正々堂々と戦って、あなたに勝ちたいんです」

「決意だけが強くても、俺には勝てないぜ。実力は、俺の方が上なんだからな」

「実力なんて、ちっぽけなものです。大切なのは、気持ちです。気持ちでは、あなたに負けません。だから、ここで倒されて下さい」

「なっ・・・・」

僕は、秒単位のスピードで月下遊蘭に近づくと、刀の刃ではない方向で思い切り殴った。

あまりの変貌ぶりに、月下遊蘭は驚いて身動きが取れなかったらしく、そのまま吹き飛ばされた。

僕自身だって驚いてる。急に力が湧き出して来たと言うかなんというか、体が熱くなって、体が俊敏に動くようになったんだ。

「ちっ、油断したぜ」

「あの・・・大丈夫ですか？」

「大丈夫かって聞くなら、あんなに思い切り殴るなよ・・・背中痛ぇし、腹は打ったしで最悪なんだ。刀って言うのはな、殴る用に出来てないんだ。だから、出来れば斬って欲しかったぜ」

「そんなこと言わないで下さい！僕は、こんなバカげたことで、あなたを殺したくはありません」

僕がそう言うと、月下遊蘭は笑い出した。

僕は、何か面白いようなことを言ったかと思って戸惑ったけど、言った覚えはないよね・・・？

「そうか、確かにバカげているかもな。こんなことで命を懸けるなんて・・・」

そう言った後、月下遊蘭はフラフラと立ち上がると、日本刀を鞘に収めるて、僕の刀の鞘も投げてくれる。

「勝負は？」

「お前の勝ちだ。あの時、お前が本気で俺を斬っていたら、俺は死んでいただろう。だから、お前の勝ちだ」

「・・・でも！」

僕がそう言った途端、手で言葉を制して来るから、思わず口ごもる。

あんなので、本当に僕のことを認めてくれたのかって不安なんだ。

「安心しろ。私は、一度仲間になると決めた相手を裏切ることは決してない。だから、事前の使い手選びがハードなのだ」

「じゃあ、仲間になってくれるんですね！」

「ああ、お前も元の世界に帰してやる。よく頑張ったな」

そう微笑みかけられて、思わずうつむいてしまう。男の僕でさえ、目を逸らしてしまうほど、その微笑が素敵だったってことだ。

そんな呑気なことを思っていた瞬間、今度は今までとはパターンが違って、周りが白くなった後、周りが見えるようになった。

ハッと気がついて辺りを窺うと、どうやら、僕が一番最初にいた場所らしい。

僕の右手には、雷光銃と似た感じの銃が握られていて、思わずため息が出てしまう。

「おい、族長、何やってるんだよ！急がないと捕まるぞ！」

「あっ、うん」

冬眞がそう言ってから、僕は、月下遊蘭に出会う前の出来事を思い出して、慌てて走り出した。

だって、せっかく見知らぬ世界から生還したって言うのに、こんなところで死んだら悲しいからね。

しばらく歩いていると、向こうの方に村みたいなものを見つけた。
とても小さな村みたいだが、結構住民は多いようだ。

「おい、神羅。村が見えて来たぞ。もう少しの辛抱だから、待ってろ」
「・・・・・」

後ろにいる神羅に話しかけるが、答えが返って来ない。
変だと思って振り返ってみると、当の本人はと言うと、安らかに眠っていた。

「・・・・人の背中で寝るなよ」

骨が折れたはずの人間が安らかに眠るとは、普通に考えておかしいと思う。
だが、それが事実なのだから仕方がない。それにしても、痛くないのか？背中は。

色々考えたが、起こすのは何となく気が引けたので、そのまま起こさずに村の目の前まで来た。

遠くからだと見えなかったが、目の前まで来たら、門の前に門番みたいな奴らが槍を構えて村に入れないように塞いでいる。

神羅の言っていた種族争いのことは、本当らしいな。

「おいお前ら、どこの種族だ?」

門番が俺達の前に鋭い槍の先をつきつけて来る。

何となく危険を感じ、二、三歩後ろに下がって気を引き締めながら答える。

「頭脳種族だ」

「背中の奴は?」

「知らん。こいつは、俺の護衛だ」

「護衛?」

「ああ、迷惑な話だがな。それで、どうするんだ、襲うのか?」

「・・・いや、お前らは我が族として認めよう。ここは、俺達頭脳種族の村だ。他種族の出入りを禁止していてな」

門番は、槍を下ろして門を開けてくれる。その門を、人間の姿のまま歩いて行く。

そう言えば、ここは魔界なのだし、妖狐の姿でもいいのだ。人間の姿の方が不自然なのだが、めんどうだから、そのままにしておくことにした。

おかしくないか?俺は人間の姿なのに、頭脳種族を名乗ったら、普通に入れてくれた。人間の姿でそんなことを言われたら、普通は不審がるんじゃないのか?

後ろを振り向くけれど、門はとっくに閉められていて、門番の顔を確認することは出来なかった。もう、後戻りは出来ないと気を張り詰めた時、聞き覚えのある声が背後から聞こえて来た。

「あなた、誰？」
「・・・・」
そのまま無言で立ち去ろうとするが、腕をつかまれて振り向かされる。背中に冷たい汗が流れるのを感じた。毎度毎度のことだ。
「どこかでみたことがあるのよねぇ。でも、誰だったかなぁ」
バレたらまずい。本能がそう知らせている。さっさと逃げれば済むことだ。
「あっ、思い出した！」
その言葉を言われた途端、俺は無情にも走り出した。神羅を担いでいる状態なのであまり速く走れず、すぐに捕まってしまったが・・・。
・・・違う意味で殺される。
「人間の姿だったから、わかんなかったよ。亜修羅だって♪」
「かっ、栞奈・・・・」
「やっぱり亜修羅だ～♪」
言うが早いか、唐突に抱きついて来る。
こいつは昔からの幼馴染で、毎度毎度こう暑苦しく抱きついて来る。その力が凄くて、いつも殺されそうになるんだ。
「ちょっ、待て！怪我人背負ってるんだ。やめろ！」

俺がそう言った途端、栞奈の満面の笑みが気まずそうな顔に変わった。

どうやら、何かを勘違いしているらしい。しかも、とんでもないことを。

「えっ、もしかして・・・・二人ってそんな関係だったの？」

「おい、変な勘違いを呼ぶようなことを言うな。第一、こいつのことは知らないだろう」

「でも、私のことはおんぶしてくれたことないのに！その人だけずるい！だから勘違いするのは当たり前じゃない！！」

「・・・・」

昔からこうだ。こいつに常識は通用しない。こう言う場合は、無視するのが一番だ。

無言でそのまま歩き出すが、横にぴったりとくっついて歩いて来る。これがうざったらしいのなんのって。そんな経験がある人はわかるだろう。

「お前は、俺とこいつの性別がわかってるのか？男だぞ？」

「でも、愛に性別なんて・・・・」

「気色の悪いことを言うな！」

嫌悪感が全身に渡り、まだ起きていない神羅を落としそうになる。それを、残りの理性を振り絞り、何とか落とさずにいる。

「こいつは魔界に来る時に雑木林に落ちて、背骨にヒビが入ってるから仕方なしに運んでやってるんだ。それに、こいつは俺の護衛だ」

「いいなぁ、私も護衛になって亜修羅の傍にいたいな～。でもさ、

その人、骨にヒビが入っている人とは思えないほど安らかに眠ってるじゃん。ムカつく、その骨のヒビ余計増やしてやりたい～～！」

「おい、やめろよ。後で何でもしてやるから。怪我人に危害を加えることはするなよ」

「じゃあ、もし私が背骨の骨にヒビが入ったらおんぶしてくれる？」

「それはまた別だ」

「何で！この人はおんぶしてるのに！！」

「こいつはこいつ、お前はお前だ」

「全く酷いよ！」

栞奈の大声で、やっと神羅が起きた。今までも、何回も何回も大声で叫ばれたのに起きなかったのはなぜだ？もっと早く起きてもらいたかった。こいつに文句を言われるのは我慢が出来ない。

「ん？ああ、寝ちまった。ここ、どこだ？」

「おい、そんなに体を反らすとヒビが・・・・」

「ん？あああっっ！！！？」

寝ていたことで骨にヒビが入っていたことを忘れていたようで、俺に言われなかったら、痛みすら感じなかったと思う。

「痛い、痛い、痛い！！」

「暴れんな、背中から落ちるぞ。今以上に痛くなるぞ！」

俺の言葉に、今度は肩をガッチリつかんで揺すっても振り落とせないぐらいびっちりくっついて来る。

単純なのはいいが、ここまでくっつかれるのも嫌だ。

「おい、離れろ！」
「落ちるの嫌だから」
「ずるい！ずるい！何で私はダメなのに！」
「お前も変に勘違いするな！」

「ああ、動くな！？落ちる！！」
「だから、お前も離れろって！」
「ずるい！」

・・・俺の周りには、話を聞く奴が一人もいない。誰か救世主が欲しいものだ。この二人を一喝する奴をな。

「だから、人の話を聞け！」
「あっ、うん」
「悪い」
「神羅は、栞奈の親父が病院をやっているから、そこまで連れて行く。栞奈は後でいくらでも付き合ってやるから」

そうして、二人はやっと納得して静かになった。そのまま栞奈の家に着き、親父に説明をした後、神羅を預ける。

「何か・・・悪かったな、護衛が迷惑をかけて」
「ああ、さっさと治して来い」
「頑張るよ！」

何を頑張るのかわからないが、取りあえず栞奈の家を出る。すると、もれなく栞奈もついて来た。

「ねぇ、何で急に魔界に帰って来たの？」

「あいつが、今の族長がどうたらかんたら・・・・」
「ああ、そっか。じゃあ、私があの護衛の変わりに族長のいるところに連れて行ってあげる。ああ、そうそう。妖狐の姿に戻った方がいいよ。そっちの方が身の安全が確認されるし」

「いや、どっちも危険だ。俺は懸賞金をかけられている身にあるからな。この格好の方がマシだ」
「じゃあ、私が守ってあげるから！」
「いや、お前に守られる義理はない」

「もう、恥ずかしがっちゃってさ♪最初は私の方が強かったのにさ。でもね、族長に会うには本当の姿を現さないといけないの。だから、その時ね♪」

栞奈はルンルンとスキップをしているのに、俺は、なんか複雑な気持ちがする。

「ほら、ここに族長がいるよ。私は外で待ってるから。族長と話して来て」

村の中で一際大きな建物の中に入り、部屋の前にいる男達に説明をした後に、中に入れてもらう。

中には数人の妖怪と、真ん中に凄く年老いていて、今にも死にそうな爺さんがいる。

きっと、そいつが族長なのか。

「おぬしが、妖狐亜修羅か？」
「ああ、そうだ」

「唐突に聞くが、烈火闘刃と波長は同じか？」

「知らん。烈火闘刃は触ったことがない。依頼を受けていたが、今だ見つけていないからな」

「貴様！族長に失礼であろう！」

「まあ待て。じゃあさっそくだが、この烈火闘刃を持ってみとくれ」

族長は、俺に怒りをぶつける奴隷（？）を宥めてから立ち上がり、後ろに飾ってる普通の刀よりも少し細身で長い刀を差し出して来た。

それを受け取ると、鞘から抜く。刀身は赤い光を当てている訳でもないのに、なぜか赤みを帯びている。

もしかしたら、それが烈火闘刃と呼ばれる由来かもしれない。本当のところはよくわからないが。

そんなことを考えていると、柄の部分がまるで炎の柄になったように熱くなると、焼けるような痛みを覚えた。

ひるんで思わず離そうとするが、族長が俺の手を握り、押さえつけて離すことが出来ない。

「つッ・・・・！？」

「辛抱せい！」

「・・・・・」

族長の気迫に押され、焼けるような痛みに耐える。

しばらく痛みは続いたが、やがて嘘のように消えた。

「やはりな。烈火闘刃は抵抗したようじゃが、やはり波長が同じ奴には勝てなかったか。烈火闘刃は、おぬしを主と認めたようだな。晴れて頭脳種族の族長を任せるぞ。わしはもう長くはない」

族長はそう言うと、力尽きたようにバタッと倒れてしまった。

「族長！大丈夫ですか？」

「ああ、わしは少し休ませてもらう」

族長は、奴隷に支えられて退出して行った。

族長になるってことは、族の長になるってことか。そんな大勢の人間のめんどうが出来る訳がない。

「亜修羅よ。族長としての責任は重いが、頑張るんじゃぞ」

俺は、奴隷の一人に帰るように言われ、烈火闘刃を持って外に出て行く。

全く、俺はいくら頼まれたって族長なんてやるつもりなんかないんだ。勝手に巻き込まれて、いい迷惑だ。

「あれ？亜修羅。それって・・・・」

「ああ、想像通り、烈火闘刃だ」

「うわぁ、本物？」

「触るな！火傷するぞ！！」

「あっ、心配してくれたんだ」

・・・あえて反論せずに歩き始める。このプラス思考は俺も見習いたいほどだ。マイナス思考をしたことはないのか？

「お父さんには会わないの？」
「・・・・いや、いいんだ。人間界に来た時に別れを告げた。二回目に会うと、その決心がブレる。だから、会わない。棺に入って燃やされるまではな」
「そっか、強いんだね。私なんか無理だよ」

「お前とは違うからな」
「もう、酷いな！」
「俺は人間界に帰るぞ」

「ちょっ、ちょっと待ってよ！族長が決まったら、その族長を称える宴会をするんだよ？亜修羅はそれの主役なんだから」
「だから、俺は族長になるつもりは更々ないし、その宴会に出るつもりもない。第一、種族争いに加わるつもりもないしな」
「でも、もう相手の軍がこっちに責めて来てるんだよ？」

栞奈が言った途端、俺が入って来た入り口から門番が走って来て、大声で緊急事態を知らせる。

「戦闘種族の奴らが攻め込んで来たぞ！ただちに追い返し、族長をお守りするのだ！！」

今までの雰囲気とは一変し、みなが戦闘態勢に入る。その図を見ると、やはり戦争だと痛感することになる。

「族長！指揮をお願いします！」
「・・・・指揮？」
「はい！指揮をお願いします！」

不意に族長と言われ、指揮を取れと言われても困る。だが、とにかく何かを言うしかない。

「倒せ。それだけだ」
「わかりました！」

俺が適当に言うと、村人は門の方から襲撃して来る戦闘種族に立ち向かって行った。

それを見送っていると、後ろから声をかけられた。

「族長！オッス」
「神羅、大丈夫なのか？」
「ああ。背骨はテーピングしてもらった」

「それじゃ、背中が曲げられないじゃないか。そもそも、そんなんで大丈夫なのか？」
「ああ、体だけは強いからな。それに、俺が出る幕じゃないからな」
「？」

じゃあ、何で来たんだ？と言う言葉を飲み込み、村人が戦っている姿を見る。

確かに、状況的にはこっちが有利のような気がする。

「まぁ、とりあえず族長は避難してましょう。族長がやられちゃ、俺らを指揮する人はいなくなる」
「おい・・・まだ族長になるって決めた訳じゃないんだぞ？」
「じゃあ、行こうね～族長♪」

俺の話を全く持って無視をして、丈夫そうな建物の中に連れて行く。
族長はその族の長だ。

そんなの、俺が務められるはずがない。みなを指揮するのが苦手なのだから。

「・・・大分片付いたみたいだね。騒ぎが静かになった」
「敵方の奴らは殺したのか？」

「あれ・・・気にしてるんですか？そんなの当たり前じゃないですか。情に流されて生かしておいたら一向に数が減らないし、逆にこっちが攻められたりするんだぞ」
「やっぱり気に食わない・・・・」

敵方だとしても、種族が別だとしても、同じ妖怪であることに変わりは無いのだ。

だから、無差別に殺してもいいと言う権利は俺達にはない。なのに、当たり前のように殺すなんて、気に食わない。

「何が？」
「俺だって昔は同じようなものだったが、今は違う。種族は違っても、同じ妖怪なのに、簡単に殺してしまうのは変だ。だから、それを俺は許さない。約束したんだ。もう人は殺さないって！」
「・・・・」

胸倉をつかみかかりそうな勢いで言う俺の顔を見て、顔を曇らせる神羅。

言い過ぎたと思って、顔を伏せる。次に何を言われるのか想像がつ

かない為、余計に怖く思える。

こいつらだって、好きで殺している訳じゃない。ただ、族長を守る為だけに、嫌なことをさせられているに過ぎないんだ。

「俺達だって、好きで殺してるんじゃないんだぜ？種族争いが起こるまではみんなの仲がよかったんだ。もちろん、俺の友達だって敵方の種族にいる。だからって、そいつだけを殺らない訳にはいかない。好きで戦争を起こしてる訳じゃないんだぞ！！」

俺の言葉以上の大声で、建物内に神羅の声が響く。

「なら、互いを理解出来るように話し合えばいいだろう。俺は、それを望む」

「そんなことが出来たら・・・・もうとっくにやってる」

さっきの大声とは裏腹に、消え入りそうな声で視線を落とす。

確かにそうだ。俺が考えつくようなことは全てやったのだろう。その後の戦争だから、仕方ないのか？

「俺は、みんなにそう言うからな。話し合えば仲良く出来るんじゃないのか？」

「俺にはわからない。でも、反対されることは確かだ」

神羅の言葉は合っていると思う。

戦争をしている奴らに、話し合って仲直りをしようと言っても、無視されるに決まっている。

だが、それぞれの族長が言ったならどうなるか。

「まぁ、やってみる価値はあるぜ」

あいつらが何と言うかわからないが、何となく想像がついていたし、
それを聞いたみんながどう思うかを見てみたかったのだ。

魔界の国宝　烈火闘刃編　第一試練・・・・？

「おっ、騒ぎは収まったようだ。そろそろ外に出てもいいかもな」
「そうか」

神羅の後に続いて外に出ると、周りの景色が変わっていて、とても驚いた。

しかし、直ぐに思い当たる節を見つけて、納得する。

きっと、凛の時みたいな魔界の国宝の試練なんじゃないかと思ったのだ。

しかし、烈火闘刃は手に入れたはずだ。それなら、何が俺を誘っているんだ？

不思議な思いをしながら、とりあえず前に向かって歩く。

ここは暗闇の空間ではなく、普通の森だった。それだけなら、なんの問題もない。

しかし、一つだけ問題がある。それは、幼少期の自分に戻っていることだ。これが現実なはずがない。だから、試練か何かだと思ったんだ。

《妖狐亜修羅よ、私はまだあなたを認めた訳ではありません。だから、試練を受けてもらいます。もし、その試練を乗り切ることが出来たのなら、私はあなたを認め、『桜乱華（おうらんか）』を伝授します》

「・・・それは、もう一つの国宝なのか？」
《いいえ。とにかく、試練を開始します》
「いや、俺は受けないぞ。そんな変な名前の武器なんか使いたくないし、何にしても、人の言うことを聞くのは嫌だ」
《問答無用です》
何だかとてもイラつく。しかし、少々意外だとも思った。
何が意外かって、烈火闘刃が女だってことだ。そもそも、刀に性別なんてあるのか・・・・？
いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、早く元の姿に戻りたい。
とりあえず、小さな体のまま森の中を走っていると、不意に森が燃え始めた。
突然の出来事に、俺は全速力で森から脱出することしか出来なかった。別に、誰が燃やしたと言う訳でもないのに、急に木が燃え始めたのだ。しかも、物凄い業火だから、必死で逃げるしかない。
「くっ・・・・」
何とか出口が見えた時、直ぐ後ろまで迫って来た炎が近くにあった木を倒して、俺を押しつぶそうとした為、何とか最後の力を振り絞って前に向かって飛ぶと、森の外に脱出した。そのまま、前転をして後ろを振り返る。

後ろでゴウゴウと炎が燃えているはずなのに、なぜか森の外に出ると、熱さを感じなかった。

変だとは思いながらも、とりあえず大きく息を吐く。小さな体だと、いつも普通にやっていることが大きな負担になる。

さっきの動作でも、腕を思い切り撃って、捻挫をしたようだ。

ため息をつきながら立ち上がると、どこへ行くともなしに歩き出す。しかし、警戒は怠らない。また、いつ燃え出すかわからないからな。

しばらく歩いた時、不意に声をかけられた。

「ちょっといいかい？」

「ん？」

振り返ってみると、何だか不思議な雰囲気の奴がいた。

黒くて長めな髪に、マントを着ていて、わかりやすく言うと、洋風の格好だな。

普通の妖怪は着物とかをよく着用しているのだが、こいつの場合は、どこかの貴族みたいな服装だ。

それにしても、体が小さいのに偉そうな言い方だ。本当に貴族なのか？

「お前は誰だ？」

「トップシークレット」

そう言って奴は笑う。

姿は子供なのだが、俺みたいに、本当はもう少し大人のようだ。

それにしても、なんかムカつく。こいつは、一体なんなんだ?トップシークレットってイラつく。随分かっこつけてるじゃないか。

「なぜ?」

「だって、君の名前も知らないから」

「じゃあ、俺の名前を教えたら、お前も教えるのか?」

「まぁ、いいよ。でも、僕に勝ったらね」

「なっ・・・・」

俺は、最後まで言葉を話すことが出来なかった。

なぜなら、一瞬の間に直ぐ目の前まで来ていて、俺の方に刀を突き出して来たからだ。

その速さが尋常ではなく、避けるだけで精一杯だった。

「お前・・・何が目的なんだ?」

「うーん、名前を教えないのが目的?」

「本気を出してるのか?」

「まぁ、そこそこかな?だけど、君は大変そうだね」

「うるさい!」

いつもと同じような口調で話しているのに、小さいだけでここまで迫力がないとは・・・呆れたものだ。

「と言うことで、僕の名前は教えない。でも、君の名前は教えても

らうよ」
「そんな理不尽が許される訳ないだろ！」
「でも、許されちゃうんだよね。僕って偉いから」
「なっ・・・・」
「それとも・・・・」

俺がそいつを睨みつけると、不意に真顔になって、目の前から消えた。

そう思ったら、不意に耳元で声が聞こえた。

「もう、この時点で殺されたいかい？」

耳元で言われたからかどうかは分からないが、自然と悪寒が走って、そいつのことを突き飛ばす。

「おっと・・・・」
「近付くな！」
「よっぽど僕のことを嫌ってるんだね」
「当たり前だろ？理不尽な奴は嫌いだ」

「まぁ、いいけどね。どっち道、僕と君は仲良くなることは不可能だから」
「・・・・は？」
「そんなに教えて欲しいなら、僕の名前を教えてあげよう」

その言い方が生意気で、決してうなずくことはしなかったが、あいつは勝手に教えて来た。

「僕の名前は、ケイ」

「そうか。なら、俺の名前も教えておこう。亜修羅だ」

俺がそう言うと、ケイは俺に近付いて来て、手を差し出して来た。

最初はどんな意味かわからなくて、じっとその目を見ていたのだが、ケイはチラリとこっちを見るから、やっと握手なのだとわかった。

俺は手を差し出すと、その手を払った。

「なっ、何するんだよ！」

「お前なんかと握手したくない。そもそも、仲良くなるのは不可能だって言ったのはお前だろう。だから、俺は仲良くなんかしない」

「そんなこと言っていいんだ～。へぇー、後で困るのは君なんだぞ！」

急にガキっぽく怒り出す。どうやって怒るのかと言うと、頬をこれでもかとぐらいに膨らませて、そっぽを向いたのだ。・・・アホらしい。

「何に困るんだ？」

「色々苦労するよ。可哀相に・・・僕は偉いから困らないけど！」

「お前、敵なんだろ？そんなに友好的でいいのか？」

「敵とは言ってないよ。ただ、仲良く出来る運命じゃないってこと」

こいつの言っている意味は不明だ。敵ではないのに仲良く出来る訳じゃない。・・・それって、どう言う意味だ？敵だから仲良く出来ないんじゃないのか？

「それに、次に会った時には、こんなこと出来ないからね」

そう意味深に言って、再び手を差し出して来る。どうしても、握手をしたいらしい。

俺は、仕方なく握手をすると、さっさと手を引っ込めた。

なぜなら、その手は、この世のものとは思えないぐらい冷たくて驚いたのだ。

「お前・・・どうしてこんなに手が冷たいんだよ?」

「亜修羅君には関係ないよ。じゃあね、また会う時まで!」

そいつは、どこかに行くのかと思ったが、不意に目の前から消えてしまった。

俺は驚いて、しばらくの間、辺りを見渡していた。

いくら妖怪と言えど、一瞬で消えることなんて不可能だ。それなのに、あいつは一瞬にして消えて見せた。どう言うことだ?

随分不思議な奴だった。

しかし、一番印象に残っているのは、その手がとても冷たいと言うことだった。

しばらくその場で考え込んでいたが、首を横に振ると、あいつのことを忘れることにした。

「随分と深いところに来たようだが・・・・」

自然と独り言が漏れる。それ程長い時間走って来たのだ。それに、こころなしか、森の奥深くに迷い込んでしまったようだ。

「このまま出て来られないのか？」

一人でつぶやいて、一人で怖くなる。

・・・本当にまずいかもしれない。

ため息が漏れる。そして、とうとうその場に座り込んだ。

何だかとても眠くて、近くの樹に寄りかかると、そのまま目を瞑って眠りに落ちた。

「亜修羅、手ぇつなご！」

「嫌だよ、恥ずかしいよ」

「恥ずかしがることないじゃない！」

「でも・・・・」

小さい頃の俺と栞奈が会話をしている。どうやら、昔のことのようだ。

嫌がる俺の手を栞奈は強引につかむと、手をギュッと握る。

俺は恥ずかしくて、その場で真っ赤になった。

「行こう！お姉ちゃんが待ってる」

「いや、恥ずかしいから離してよ！」

俺は何とか手を離そうと必死になるけど、小さい時の俺の力は、栞奈よりも小さかったから、到底無理な話だ。

この時は、丁度五歳ぐらいの時だ。俺はまだ気が弱くて、栞奈にきつく言えなかったのだ。

「行こう！」

「いやだよ、せめて手は繋ぎたくないよ」

俺がそう言うと、栞奈は悲しそうにうつむく。

その時の俺は、気弱で相手のことを考え過ぎるから、栞奈を心配する。

「あっ、ごめんね」

「ねぇ、大きくなったら、私と結婚して」

「ケッコン？」

五歳の子供が、どうして結婚なんて言葉を知っていたのかは不明だ

が、俺には当然、意味がわからない。

「そう」

「それって何？」

「結婚式って言うのを上げて、一緒の家に住んで、子供を作るの」

その言葉を聞いた途端、何も知らない無垢な俺は、心底驚いた。

その頃の俺は、もうこれ以上成長しないと思っていたから、子供の状態で子供を作るのかと驚いた。

しかも、一緒に住むと言うことは考えられなかった。

ある意味、俺がこんな性格になったのは、栞奈に余計なことを沢山教わったからだろう。だから、嫌でもひねくれたんだ・・・・いや、そんなことはない。俺はひねくれてないんだ・・・・。

「無理だよ・・・・僕は、ケッコンなんかしたくないよ」

「どうして？お姉ちゃんが好きだから？」

「いっ、いや・・・・違う！」

俺は、栞奈の言葉にうろたえて、顔を背ける。

顔が真っ赤で物凄く熱かった。

俺はそれを振り払うようにして走り出した。

「あっ、亜修羅、そっちじゃないよ！こっちだよ」

俺は、栞奈から逃げようとしたのだが、直ぐに栞奈につかまり、無

残にも引きずられて行く。

「やっ、やめてよ！」

「だって、亜修羅が逃げようとするから」

そのまま、俺は栞奈に引きずられて行って、目的地にたどり着いた。

そして、やっと手を離してもらった。

そこには、俺達がお姉ちゃんと呼んでいる奴がいた。

「修君、大丈夫？」

「あっ、えっと・・・・うん」

「そっか、よかった」

一歳しか歳が変わらないのに、とても大人っぽい笑い方をする。俺はその笑みが好きだった。

「じゃあ、行こうか！」

そう言って手を差し伸べられて、俺は手を繋ぐのが躊躇われる。

「恥ずかしいかな？じゃあ、行こう！」

今度は手を差し伸ばされることがなかったが、少し後悔した。

あの時、勇気を出していれば、手を握れたかもしれないと思った。

ここまで来ると、大体わかるだろうが、俺は、好きだったんだ。あいつのことが・・・・。

ハッと目が覚めて、慌てて辺りを窺う。そして、誰もいないとわかると、ため息をついた。

誰かに夢の中を見られたんじゃないかと思って不安だったんだ。

そんなことはないと思っていても、あいつのことは、誰にも知られたくないのだ。

ため息をつくと、再び樹に寄りかかり、ため息をつく。

昔のことを思っても仕方ない。時が戻ることはないんだ。

空を見上げると、いつの間にか星が光っている。今日は三日月で、ずっと俺のことを照らし続けている。

昔、あの三日月の上に座りたいなと思ったことがある。しかし、今はそんなことは思わない。ただ、空しく見えるだけだ。

無心になって、じっと月を眺めていた。

何の音もしないから、世界でたった一人になったような感覚だ。

風さえも吹いて来ないのはおかしいと思う。

ただ、今の俺にとっては、何とも思えなかった。無心になっているのだから。

それにしても、烈火闘刃は試練として魔界とは別の空間に俺を飛ばした。それなのに、試練と呼べるようなものは今まで一つもなかった。

これは、どう言うことなんだ・・・・？

やっと頭に思考が戻って来て、焦点があう。

今までずっと月の方を向いていたが、見ていなかったのだ。ただ、抜け殻のようにボーッとしていただけだ。

俺は、何の為に別の空間にいるんだ？試練を受ける為じゃないのか？

ふとそう思った時、烈火闘刃の声が聞こえて来た。

《試験は続いていますよ》

「試験らしいことは一つもやっていない」

《戦うことがだけが試練じゃありません。それを踏まえた上で、次の試練に向かってもらいます》

「今までのことは、全て試練だったのか？」

《私は、力がある者を認める訳ではありませんから》

「しかし、ある程度の力がないと、あんたを扱えないんじゃないのか？」

《あなたの力量は十分です。後は、人格を知るだけです。そのまま続けて下さい》

「今までのは、全てあんたがやったことなのか？試練の為に」
《いいえ、出会い、夢、全てが偶然に起きた出来事。しかし、私は、それを参考に、認めるかどうか決めています》
「・・・・・」

試練と言うと、戦ったりするのかと思っていたから、今までのことが試練の一部だと聞いて、かなり驚いた。

しかし、同時にめんどくさいと思った。

さすがは頭脳種族の武器だ。ちゃんと性格まで把握しないと認めないらしい。

俺はため息をつくと、立ち上がった。

「なぁ、俺の性格を見るって、どう決めるんだ？」
《それを教えて試練になりますか？》
「・・・・はぁ」

そうだよなと思いながらも、ため息をつく。面倒の一言しかない。

「俺は降りるぞ」
《なぜですか？》
「面倒だからだ」

俺が言うけれど、烈火闘刃は答えなかった。代わりに、目の前に人が二人立ちふさがる。

「悪いけど、ここから先は通せないよ」
「お前ら・・・・」

俺は、目の前に立ちふさがる二人を見て、思わず口を開いたまま固まってしまった。

なぜなら、凛と桜木だったからだ。

その光景を見た途端、一瞬ここが現実なのか空想なのかわからなくなったが、直ぐに正気に引き戻された。

二人が襲って来たのだ。

俺は、いつの間にか、いつもの姿に戻っていて、何とか攻撃を避け

るけれど、桜木の銃撃が腕を掠めた。
何とか体勢を立て直して立ち上がると、俺は後ろを向いて、二人から逃げる。

《妖狐亜修羅よ。逃げていたら、技を習得するなんて無理な問題ですよ》
「だから、俺は言っただろう！受けるつもりは元々ないと。それに、あいつらと戦うんだったら、もっと嫌だ」

《わがままな子ですね。私の用意した試練に打ち勝つことも出来ないのですか？あれは、本人達とは全く面識のない、単なるまがいもの程度でしょう。それなのに、どうしてそれすらも倒そうとしないのですか？》

「例えまがい物だろうがなんだろうが、信頼した仲間の姿をした奴を倒すことはしたくない。あんたに意気地なしと言われようが、俺の気持ちは変わらない。だから、試練を降りる」
《・・・・そうですか。それならば、技を習得しなかった時の種族争いの様子を見せてあげましょう》

烈火闘刃の声が聞こえた途端、辺りが真っ暗になり、突然景色が変わった。

目の前に広がるのは、燃えている森に、沢山の悲鳴、そして、あちこちで繰り広げられている戦いに敗れた者達の死体だった。

俺が呆然と前を見つめていると、目の前で倒された男が俺に気がついて、体中血だらけなのに、何とか体を引きずって俺に近付いて来る。

そして、俺の足元まで来ると、血だらけの手で俺の足をつかんで、必死に頼み込んで来る。

「頼む、あんただけは逃げてくれ。あんたが殺されたら、俺達は・・・・」

そう男が言った時、遠くの方から弓が飛んで来て、その男の体に刺さった。

ドスッと言う音とともに、男の命が絶たれる。

しかし、弓の勢いは納まらず、俺は、その場から逃げるしかなかった。

自分の臆病さが情けなくて、歯を食いしばる。しかし、逃げる事しか出来なかったのだ。

この悪夢を振り払うように必死に走るけれど、どこを見ても火の海に死体が転がっていて、戦闘が繰り広げられていた。

それを見て、戦争中は、こんな光景が普通なんじゃないかと思って、体に震えが走った。

何が恐ろしいって、その辺りに死体が無造作に転がっているのだ。それがなんとも不気味だった。

この光景は、まさしく地獄と言うにふさわしいだろう。それぐらい、酷い光景だった。

いつもの平穏な魔界とは違い、とても荒れ果てていた。

これが種族争いが起きた時の光景なのかと思うと、とても恐ろしいと思う。

俺は全速力で走り、気がついた時には、焼け野原の中心に立っていた。多分、炎で燃やされている樹すらなくなった、荒れ果てた地なのだろう。

何とか息を整えて歩いていると、不意に見覚えのある色の弾が飛んで来て、何とか避ける。

そして振り返った時に見た光景には、思わず目を疑ってしまった。

そこには、肩で息をしながら、血だらけでこちらに銃を向けている桜木の姿だったのだ。

その目は、いつもの温厚そうな光りはなく、ただ、鋭く俺を見据えていた。それがどうしてなのかが俺にはわからない。物凄く怒っているようだ。

そして何より、銃を向けているのは、桜木自身の行動なのか。それとも、無意識での行動なのか。それが一番知りたかった。

「修さん、あなたは最低な人です。ここで死んでもらいます！」

「・・・・・」

そう言われた時、何とも言えない衝撃が体に走ったような気がした。

それ程ショックだったのだ。

例えば、信頼していた仲間がいたとする。そいつに銃を向けられ、しかも、最低と言われた上に、死ねと言われるのだ。それ程のショックはない。

特に俺は、ほとんどの奴を信じたことがないから、初めて信頼した奴に裏切られて、物凄くショックを受けた。

「なんでなんだ?」

俺が聞くけれど、桜木の言葉は冷たかった。

「さようなら・・・・」

銃声が響く。周りの出来事が全てスローモーションのようになり、弾がゆっくりと俺に近付いて来るのがわかる。

俺はそれを避けることが出来る。しかし、避ける気になれなかった。

そのまま、腹部に物凄い激痛が走った後、ドサッと言う音がして、目の前が真っ暗になる。

俺はここで、仲間の手によって殺されるらしい・・・・。

なんて最悪な最後なんだって思う。しかし、それが事実なのだったら仕方がない。

《目を開けなさい》
「・・・・」
《目を開けなさい！》
「・・・・」

何だか、女の声が聞こえる。それを聞いた途端、死の世界の誰かだろうと思い、俺は無視をした。

俺は死んだんだ。だったら、起こさないでくれ。せめて安らかに眠らせてくれ。

《起きなさい、あれは幻です》

そう言われて、やっと意識が戻って来て、考えることが出来た。

そうだ。俺は、烈火闘刃に悪夢を見せられて、そのまま死んだと錯覚をしたようだ。

「・・・あれが、本当に起こるのか？」
《ええ。あれは、以前の種族争いの様子です。年々戦いは酷くなっていき、今年は最悪な事態になるでしょう》

「あんたの技を手に入れたら、あれを起こさずに済むのか？」
《・・・わかりません。ただ、希望はあります『桜乱華』とは、戦いを沈める為に作られた技だと聞いています。ただ、私にもよくわかりませんが・・・》
「・・・わかった」

烈火闘刃の話を聞いて、俺の口が自然と動く。いや、自分の意思で

言ったのだろう。

あれが幻だったからよかったが、本当に起こったら、魔界はどうなってしまうのだろうかと言うことになる。

「あんたの技をもらって、種族争いが起こらないようになる確率があるなら、俺はそれに賭ける。だから、試練を再開してくれ」

《・・・ありがとう。前の種族争いの時も、族長に声をかけたわ。でも、試練も何も受けることなく出て行ってしまったの。このまま、種族争いが続くのかと思うと、いたたまれない気持ちになった。なぜなら、私は種族争いごとに族長の手によって使われ、妖怪を倒して行く。そんな光景がいつまでも続くのかと思うと嫌で、今回は、ちょっと早めにあなたに来てもらったんです。ありがとう、種族争いを止めようとしてくれて。優しい心があるのですね》

そう言われて、自然と顔が赤くなる。

よく、凛とか桜木に、俺は優しいと言われるが、他の奴からそんなことを言ってもらったことは一回もなく、恥ずかしくなったのだ。

「やっ、優しくなんかない！俺は、ただ単に弱いだけだ。さっきの悪夢に怖気づいて、もう二度と味わいたくないと思った。だから、収めようとしているに過ぎない。ただ、俺はあんたを凄いと思う。あんな地獄に毎回駆り出され、命を奪っていくのは、よほど強い決意がなかったら出来なかったと思う」

俺がそう言うと、烈火闘刃がため息をついた。

《・・・ありがとう。あなたの理由は、確かに弱いかもしれない。

けれど、それが沢山の命を助けることに繋がるのなら、とても素晴らしいことだと思います。だから、ありがとう》

「あんたに礼を言われる必要はない。そんなことより、さっさと問題を出してくれ」

何とか動じずに言葉を言えた自分を褒めてやりたいと思う。いつもいつも、ありがとうと言われると顔が真っ赤になって動揺するから、今日は動揺しなくて、偉いと思ったのだ。

《いいえ、あなたに試練は必要ありません。あなた程白い心を持った人はもう、この世にはいないでしょうから》

そう言われて、疑問に思う。

俺の心が真っ白だって？そんな訳ないじゃないか。少し前まで平気で殺しをやっていたのだ。それなのに、どうして真っ白だって言えるんだ？

俺がそう問おうとすると、烈火闘刃が言葉を遮った。

《さっきは言葉を間違えました。確かに、あなたの心は真っ白ではありません。しかし、それ以上に素直なのです。だから、私はあなたを認めます》

「・・・・素直？」

《ええ。口は無口だけれど、表情は素直らしいですね》

こんな短時間で見透かされて、思わず顔を伏せる。

かなり恥ずかしいことだ。初対面の奴に直ぐに見分けられると言うことは、わかりやすいと言うことだ。

なんてことだ・・・・。

《では、『桜乱華』を伝授します》

そう烈火闘刃に言われた途端、目の前が真っ白になった。

魔界の国宝　烈火闘刃編　伝授

目の前が真っ白になった途端、桜の匂いがした。

そして、ゆっくりと目を明けると、目の前に大きな桜が生えていた。

突然の変化に驚いて、辺りを見渡すけれど、その桜以外は何もない。

青い空に、緑の原っぱ。そして、目の前には大きな桜があった。

風が吹いて俺の体に当たるけれど、痛いほどではなく、とても気持ちいい強さで、草の匂いや桜の匂いが吹き抜けて行く。

いつの間にか妖狐の姿に戻っていて、長い髪が風に当たって揺れている。

さっきまでは、あまりいい心地ではなかったのだが、なんだか心が落ち着いて、安らいでいる。

もし、みながこんな気持ちになったら、戦争なんて起きないだろう。

みなが幸せな気持ちになるのだから。

目を瞑って、大きく深呼吸をする。

新鮮な空気が体の中に入って来て、なんだかすがすがしい気持ちだ。

きっと、天国があったら、こんなところなんだろうなと思う。

車の音や、人の話し声。その他多くの音がある人間界と違って、ここは、そんな音は聞こえない。聞こえるのは、草が揺れる音と、桜が揺れる音だけ。それ以外は、何の音も聞こえない。

しばらくの間、幸せな気持ちに浸っていると、今まで普通の桜吹雪だったのだが、その桜が突然何かの形のようになって行き、やがて、一人の人間の形になった。

「幸せな気持ちですか？」
「・・・ああ。これがその・・・・技なのか？」
「いいえ。ここが、伝授の場所なのです」
「・・・・」

「どうしました？」
「えっ、いや・・・・」
「それでは始めますよ」
「ああ」

俺がうなずくと、ゆっくりと近づいて来る。とても不思議な姿だ。

長い髪を一つに束ねて、白い着物に、赤い袴を履いている。これだけだと想像しにくいと思うが、確か、この姿は巫女とかの姿を思い浮かべてもらえれば正解だと思う。

こんな姿をした奴を見るのは初めてだから、かなり不思議な気持ちがしたのだ。

「この技は、相手を斬る為のものではありません。それは、わかっていますね？」
「ああ」
「最後に聞きます。この技は、相手を傷つける為のものではありませんが、使い方を誤ると、その者を死に誘いかねません。使い方を誤らないと決意出来ますか？」

「・・・その、使い方を誤ると言うのは、どう言うことなんだ？意味がわからないと、うなずきようがないのだが・・・・」
「そうですね。誤った使い方。それは、相手に敵意を感じたまま使うことです。そうすると、桜吹雪は、幸せを運ぶものではなくなり、体を貫くこととなるでしょう」
「なら、この技でも相手を斬ることは出来るんだな」

俺がそう言うと、烈火闘刃が眉をひそめる為、俺は言葉を直した。

「そう言う意味じゃない。あんたの意思はわかっている。本当は、攻撃の為の技なのかもしれないが、あんたは、もう一つの使い方を知った。そしてもう、戦いを終わりにしたい。だから、そう言ったんだろ？俺は、あんたの期待をわざと裏切るほど最低な奴じゃない」

俺がそう言うと、安心したように微笑んだ。

「そうですね。聞いた私がバカでした。一度認めたんですから、そうですよね」
「・・・・ああ」
「戦うなとは言いません。ただ、無駄な争いはして欲しくないのです。だから、あなたが大切な物を守る為に戦うのなら、私はあなたに従います。ですが、あなたが自我の為に私を振るった時・・・・その時は、あなた自身の破滅を意味しますよ」

そう言われた時、嘘がないとわかり、自然と表情を引き締める。

烈火闘刃は、物腰は優しいが、言ってることがきつい。こう言うタイプはかなり苦手だ。

「ああ、わかってる・・・・」
「そうですか。それならよかったです。では、魔界に戻って下さい」
そう言われると微笑みかけられ、気がついた時には魔界に戻されていた。

「族長、どこに行ってたんですか！？急に消えたと思ったら、急に現れて！」
「そう怒るな。俺だって、わざと消えた訳じゃない。烈火闘刃に呼ばれたんだ」
「と言うことは、もう一つの武器をもらったのか！？」

「いや、俺の場合は、技をもらった。これで平等にしているんだろう」
「どんな技だ？試しに、こいつに使ってみて下さいよ」

そう言う神羅の方を見ると、羽交い絞めにされている敵種族の奴がいた。転生種族はほぼいないから、こいつは、九十九パーセントの確率で、戦闘種族だろうな。

「ああ。しかし、お前の期待には百％答えられないだろうけど、それでもいいんだな」

神羅が、こいつを俺に倒させようとしているのはわかっていることだった。

しかし俺は、その期待に答えるつもりは一切ない。烈火闘刃と約束したのだし、何より、この技は、人を傷つける為の技じゃない。

「どう言う意味だ？」
「見ていればわかる」

俺はそう言うと、不満げな神羅を無視して、妖狐の姿に戻ると、俺

のことを思い切り睨みつけている奴を見下ろした。

「殺すなら、さっさと殺せよ！」

「動くな！」

自棄になった戦闘種族の奴は、暴れ出して、危うく、俺じゃない奴に殺されそうになる。

俺がやめさせようとした時、暴れている男のケータイが落ちて、電話が来たことを知らせている。きっと、暴れたのと、バイブの効果で地面に落ちたんだろう。

俺は、男を羽交い絞めにしている奴がケータイを拾おうとしたのを手で制すると、それを拾い、電話に出る。

「誰だ？」

「・・・・あんたこそ誰なのよ」

そのケータイの声を聞いた途端、男の表情が驚きに変わり、慌てている。

俺は、その様子を確認して、男に聞いてみた。

「この女は誰なんだ？」

「俺の嫁だよ」

「そいつはどこにいるんだ？」

「あいつらは関係ないだろう！殺すなら、俺だけを殺してくれ！あいつらは関係ないだろ！」

「どこにいるのか。そして、何人家族なのかと言え」

「そんなこと、言えるかよ・・・・」

男が口を閉ざして違う方向を向くと、羽交い絞めにしている一人の方が男を殴った。

「やめろ。殴れとは言っていない」

「しかし・・・・」

反論して来る奴を、俺は睨みつけてやった。すると、おとなしく言うことを聞くようになった。

「俺は、出来るだけ乱暴なことはしたくない。だから、素直に言うことを聞け」

俺が間合いを詰めるように問いただすと、そいつは思い切り顔をしかめる。

「安心しろ。俺は、女や子供に手を上げるほど、最低な奴じゃない。お前が素直に言うことを聞いたらな」

そう言うと、そいつはため息をつくと、俺の目を真剣に見て来た。遂に、覚悟を決めたようだ。

「わかった。教える。その変わり、殺したら、お前らのことを一生恨んでやるからな」

「ああ、勝手にしろ。そして、どこにいる?」

「子供が二人と嫁がいる。場所は、ここの直ぐ近くだ」

そう言われて、思わず顔をしかめる。ここは頭脳種族の村。敵である戦闘種族が、よくこんなところにいられるものだ。

「この村の中か？」
「ああ、ここの建物の裏路地にいる」
「・・・・そうか。今から、そいつらをここに連れて来い」

「お前、やっぱり殺すんだな！」
「殺さない。それは約束したはずだ」
「うるせぇ、死ね！」

そいつは、脅威的な力で二人の妖怪を振り払うと、刀を構えて走って来る。

そして、そのまま突きを放って来る為、俺はそれを横に避けると、刀を蹴り上げた。

刀は宙を舞い、やがて、神羅の目の前の床に落ちた。

「これは、俺が預かっておくからな」
「大丈夫だ。こいつにもう、俺を襲う気力など残っていない。それに、俺は、もともとこいつらを救うつもりなんだ。それなのに、何を勘違いしているのか・・・・」

「族長、救うって、どう言うことだよ？」
「見てればわかると言っただろう」

俺はもう、全く抵抗をしない男の方を横目に見て言った。

それから直ぐに、出て行った男達が、女と子供二人を連れてやって来た。そして、体を縄で縛ろうとする為、俺はそれを止める。

「なぜですか、族長?さっきも襲われかけていたのに・・・・」
「俺は言ったはずだ。傷つけないと」

そう言って女達の方を見ると、女は、子供を守るようにしっかりと抱いている。

「嘘を言いなさい!あなたは私達の敵なの。そんなことを信用する訳ないでしょ!」
「ママ、来夢はどこに行ったの?」
「えっ?」

女がしっかりと抱いていた子供が言った途端、俺の足を何者かがつかんだ。一瞬驚いたが、そいつを持ち上げると、女の方を見る。

女が抱いている子供よりも幼くて、ハイハイがやっと出来るぐらいの年齢だから、種族争いのことなんて知らないのだろう。

「今だって、こいつのことを殺すことはいくらでも出来る。だが、殺していない。それでも信用出来ないか?」
「お願いだから、子供達だけは助けて!私は犠牲になってもいいから!」
「そんなことは言うな!!」

今まで冷静沈着だった俺が、急に怒鳴った為、周りの奴らが黙り込む。

俺はため息をつくと、取り乱してしまった自分に喝を入れた。

「とにかく、こいつはお前に返す」

何とか平静を取り戻すと、女に子供を返した。最初は警戒していたようだったが、ゆっくりと子供を受け取ると、泣き出した。

「これで、俺がお前らを殺すつもりがないとわかっただろう。だから、言うことを聞いてもらう」

「・・・わかったわ。でも、この子達は殺さないで」

「俺が言った意味がわかってるのか？『殺すつもりはない』と言ったんだぞ？」

「信用できないわ」

ここまでやっても信用を得られないのは仕方がないことだ。なら、無理矢理やらせてもらう。

「わかった。そこを動くな」

「子供は・・・」

「子供には幸せになってもらいたいだろ？」

俺はそう言うと、烈火闘刃を素早く振った。

こいつらを救えると言う確証はなかった。ただ、落ち着いていたのだけは確かだ。

しかし、それ以外は自分を信じるものがなく、目を瞑っていた。もし殺してしまったらどうしようと思った。

しばらくの間動かないでいたが、血の臭いがしない為、ゆっくりと目を開ける。

女達も、殺されると思って目を瞑っていたようだが、目を開ける。

風が部屋の中に吹いて、桜の花びらが部屋中に散らばっているのが見えるけれど、それ以外は、なんともなかった。

「族長、一体何をやったんですか?あいつ達が抵抗をやめましたよ」

近寄って、小声で話しかけて来る神羅の言葉にうなずく。

成功したようだな。

そう思うと、大きく息を吐いて、その場にしゃがんだ。なんだか、物凄く体調が悪い。

体に力が入らないと言うか、力が全て抜け出てしまったような感じだ。

「族長、大丈夫ですか?」

「・・・・」

「とりあえず、休みましょう」

神羅に肩を貸してもらい、何とか足を動かすけれど、体が物凄く重い。情けない話、一人じゃ立ってもいられないほどだ。

俺は、何とか布団まで連れて行かれると、そのまま、布団も被らないで目を瞑った。

物凄い睡魔が途端に襲って来て、布団を被ると言う単純な動作すら出来なかったのだ。

「さぁ、またこうやって話が出来るようになりましたね」
「俺は眠っているはずだが・・・・」
「そう。今は、夢の中にいます。さっきは体ごと持って行きましたけどね。さて、どうして私があなたを呼び出したのか、わかりますか？」

「呼んだと言うか、あんたが俺の夢の中に入って来てるんだろ？」
「まぁ、そうですけど、細かいことは気にしないで下さい」

俺はため息をつくと、その場に座り込んだ。

夢の中だからか、体がいつもよりは軽い。ただ、感覚がないから、夢なんだと思う。

「それで、何を言いに来たんだ？」
「あなたは、まだ察していなかったようですね。『桜乱華』と言う技の真実を。私はてっきり、それを理解していて了解していただけたのだと思って喜んでいたのですが、頭脳種族と言っても、そこまでではないようですね」

ため息をつきながらそんなことを言われて、思わずムカッとする。

何が「頭脳種族と言っても、そこまでではないようですね」だ。お前は一体何様だ！俺は、こんなに疲れてると言うのに、そんなことを言いに来たなら、さっさと帰れ。俺の睡眠を悪夢でかき消そうとするな！

「ふざけるな！俺は寝る。これ以上俺の睡眠を邪魔するなよ」
「だから言いましたよね？ここは夢の世界。あなたは、現実の世界では眠っているのです。そして、ここで眠っても、夢の中で眠っている自分の夢を見るだけでしょう。そんなの、バカみたいです」

「じゃあなんなんだよ！俺の夢にまで潜り込んで来て。そこまでして伝えなきゃいけないことがあるのか？大したことじゃなかったら怒るからな」
「だから言ったじゃないですか。『桜乱華』と言う技の真実を教えに来たと」

そう言われて、ため息をついた。睡眠中に邪魔をされて、かなり興奮していたから忘れてしまっていた。

そう言えば、バカにされて怒ったんだった。思い出すと、バカみたいに思えて、恥ずかしくなる。

「とっ、とにかく、用件を話してくれ」
「わかりました。あなたがわかっていないようなので、率直に真実を言います」
「言えるなら、初めからそうすればよかったんじゃないか？」

俺が小声でボソッとつぶやくのが聞こえているだろうけれど、烈火闘刃は無視して話を続ける。こいつは、自分の過ちを認めたがらないタイプだ。そう言う奴の態度はどうもムカつく。

「『桜乱華』は、受けると幸せな気持ちになります。その理由を教えに来ました。この世の中には沢山の技がありますが、人を幸せな気持ちにするものは少ないです。なぜなら、刀を通して自らの気持ちを伝えることが出来ないからです」

烈火闘刃の説明を受けて、俺は、短くても一分近くは口を開かなかった。なぜなら、意味がわからないからだ。

刀を通して自らの気持ちを伝える？それはどう言う意味なんだ？率直に言うなら、もっとわかり易く言ってもらいたい。

「まだわからないのですか。あの技は、あなたの心です」

「・・・・心？」

「はい。あなたの心次第で、相手を幸せにするか、傷つけるかが決まるのです。そして、そのどちらにしても、あの技は多くの妖力を使い、心を使うのです」

「・・・・・」

随分と面倒な技のようだ。しかし、心を使うとはどう言うことなのか。そこがさっぱりわからない。

「幸せや憎しみ。その全てが心で感じるもの。それが技として出て行くと言うことです」

「つまり、幸せを放ってるようなものか？」

「ええ。なので、あまり多様すると、自ら幸せを手放していることになりかねません」

「なんで、そんな面倒なことを早く言ってくれないんだ。おかげで、死ぬように眠る羽目になったんだ」

「だから、あんなに疲れていたのです。純粋であればあるほど、刀・・・・私と繋がることができ、威力が大きくなるのです。だから、純粋なあなたを選んだのですが、あなたは純粋な上に、無茶をしますからね。私が威力を抑えていなかったら、あなたは帰らぬ人となったでしょう」

そう平然と言い切る烈火闘刃を、俺はまじまじと見た。

こいつは、何て最悪な技を俺に託したんだ！あまり強く放ったら死ぬって、何なんだ？

ため息をついてその場に寝転がる。いつもなら、人の前で寝るなんてことはほとんどしないが、そのまま目を瞑った。

「現実逃避をしようとしたって無駄です。なぜなら、ここは夢の中でありますし、託した後ですから」

「そんなんじゃない。ただ、疲れたんだ」

「そうですか。それなら、後もう少しだけ言わせて下さい」

俺は、その問いには答えず、烈火闘刃に背を向ける。これで、話は聞かないと主張したつもりだが、通じていなかったらしく、平然と話し出した。

「『桜乱華』の威力は、気持ちを込めれば込めるほど大きくなります。あなたは、心の容量が普通の人の四倍近くあるので、その全てを込められたら、魔界の国宝と言われる私ですら耐え切れなくなります」

「まて、俺の心が普通の奴の四倍だって？」

「ええ。私が耐え切れなくなると、あなたは一気に心と妖力を使い果たし、二度と目を覚ますことはありません。だから、あまり心を込めないで下さい」

そう言って歩いて行こうとする烈火闘刃に背を向けたまま起き上がると、小さくつぶやいた。

「・・・わかりずらい」
「あなたも素直なのはいいですが、面倒な人ですね」
「あんた、地獄耳って言われるだろ？」

俺の問いに、肩を軽くすくめると、再び話し出す。

「通常、私に込められた気持ちは、その人に支障が出ない程度に私が調節をして放ち、余った分は返しているのです。だから、正常でいられる。ただ、調節役の私が壊れてしまうと、壁がなくなり、込めた思いが全て出てしまう。と言う訳ですね」

そう言うと、「わかったか？」と言うように首を傾げて来る。

俺は、ため息をついてうなずくと、立ち上がった。

理解したのなら、こいつといる理由はない。さっさと一人になれる場所をさがさないとな。

「あなたが仲間と出会うまでは、あなたの心は、普通の人の二分の一でした。しかし、仲間と出合ったことで四倍にまで増えたのです。仲間に感謝して、これからも仲良くしなさい」
「・・・・ああ」

俺は、小さく返事をすると、歩き出した。

お風呂の窓は、鍵まで閉めましょう

「族長！勝手に他の族に突っ込んで行った仲間が全滅させられました！」
「全くさ、族長なんて僕の性分には合わないって」
「族長、聞いていらっしゃいますか？」

「・・・ああ～。つまんない。早く人間界に帰りたいよ～」
「族長」
「な～に？」

族長なんてもの凄くめんどくさいことになっていて、早く人間界に戻りたいなと思っているのに、中々帰れない。

「ね、錬賭君。僕、帰りたいんだけど」
「無理です。族長は、戦闘種族の指揮をしていただかないといけませんから・・・・」
「あのさ、族長とか僕には出来ないんだって！重すぎるし、向かないんだって！！」

「向かないにしろ、冥道霊閃の使い手です。だから、俺らの種族の族長なんです・・・・」
「ああ。今頃桜っちや亜修羅は何をしてるのかな？」
「そいつらは、敵方種族の族長のことですか・・・・？」
「そうそう。僕の友達」

僕の言葉に顔を曇らせる錬賭。

どうせ、他族の族長と繋がっているからいけないとか思ったんだろ

うけどさ、僕の友達は友達だ。それを、誰かにとやかく言われる筋合いはないと思う。

「大変申し上げにくいことなのですが、そいつらとは縁を切った方がいいでしょう。友達とは言え、敵方の奴です。信用出来ません・・・」

ボソボソとしながらも、大変申し上げにくいと言う言葉が似合わないくらいにはっきりと錬賭は言い切った。その言葉に、僕は心がなんとなく冷たくなる。

「そうですよ。いつ、族長のことを襲うかわかりません。他種族の者なんて、どうせそう言う汚い奴らばかりですから」

錬賭の言葉に続くように、他の妖怪達も後に続く。敵方の奴と縁を切った方がいいと言う言葉が次々に交わされる。

錬賭の言葉を聞いた時も心が冷たくなったが、今は絶対零度の状態で、これ以上我慢したら動かなくなるだろうと思い、立ち上がると、近くにあったテーブルを叩く。

そんな思い切り叩いた訳じゃないけど、鉄製のテーブルが真っ二つに折れた。

「僕が誰と付き合ったり友達に思うのも勝手だろ?それをあんた達が縛り付けてもいい理由なんてない。それに、人の友達の悪口を言うのはやめてくれないかな?何も知らないくせに、自分と種族が違うからって、悪い奴だって決め付けてさ。あまり調子にのるなよ」

「・・・・」

それまで、誰が何を言っているのかわからないぐらいうるさかった部屋が、一瞬にして静まり返った。怒鳴ってもいないのに、ただ冷静に言っただけなのに、怒鳴る以上の効果があったようだ。

「それに、好きで族長なんかになった訳ではないのに、何で否定されなくちゃいけないんだ?自分の人生ぐらい、自由にさせてもらいたいものだね」

「・・・・」

みんなが静まり返り、言葉すら出ないようなので、椅子に座りなおし、少し口調をいつも通りに戻してみる。ついでに、笑顔も忘れずに。

「だから、戦争なんてやめて、みんな仲良くやろうよってこと!」

「・・・・」

少し本気になったところが悪かったかもしれない。だから、もう誰もしゃべれなくなっちゃったんだ。よく言われるからな・・・・怒ると、もの凄く雰囲気が変わるって。怖いって言われた。確かに、さっきはちょっと口調とか、トーンとかがいつもと違ったけどさ。それだけの話しだよ、本当。

「はい、反論ある人、手を挙げて!」

「・・・・」

まるで、氷で固まってしまった像のように微動だにしない妖怪達に、そろそろ僕も疲れて来る。こんなことになるから滅多に怒らないようにしてるんだけどな。亜修羅にも怒った時はヒかれちゃったし。

「ぞっ、族長様。ちょっ、ちょっとお聞きしても・・・・」

妖怪の一人が目に見えるぐらいに大きく震えながら手を挙げたが、周りにいる妖怪に危ないと窘められ、手を下ろしてしまう。

もしかして、僕の第一印象って「怖い」に決定?

「まぁ、とにかくそう言うことだからね。よろしく」

僕は仕方なく外に出た。すると、後ろから錬賭がついて来る。

この人は無表情で、ボソボソとしかしゃべらないからミステリアスなかんじだけど、今ならどんな気持ちなのかが手に取るようにわかる。だって、少し顔が引きつっているんだもの。

「族長、何処へ?」

「ちょっと、里の周りを散歩して来るよ。一緒に来るかい?」

「はい。お供いたします・・・・」

顔を引きつらせたまま錬賭はついて来る。護衛だから仕方なくついて来ているんだろう。可哀想に。僕って、そんなに大事な人なのかな?

「おい、冬眞！こいつが俺達の族長ってどう言うことだ？どう見ても人間じゃないか！」
「しょうがねぇだろう。こいつだったんだから。文句を言うならこいつに言えよ」
「ぼっ、僕に言われても困ります！それに、族長になんてなりたくありません！と言うかなれません！」

冬眞に連れられて、ある村に入ったはいいけれど、ずっとこんな感じで僕は認められていない。

確かに妖怪たちからしてみれば、人間の僕なんかが族長だって認めないと言う気持ちはわかる。僕も、人間の自分が族長になっていいのか不思議だった。

「お前、こんなヘタレに族長の重荷が背負えると思ってるのか？」
「だから、俺に言うなって！ただでさえ俺達は人数が少ないんだ。ここにいる百人ちょっとと、外にいる奴らしか仲間がいないんだ。仲良くやっていこうぜ」
「みんな認めないはずだぞ！こんな奴が族長なんてな」

その他、僕に向けられる非難の言葉で、僕の心はズタズタに引き裂かれている。

どうして妖怪退治養成所に通っていた僕が、その標的である妖怪の族長にならなくてはいけないんだろう？どんなことにも動じるなって教わったけど、こんな状況に陥って動じない人なんて滅多にいないと思う。

「あのですね、ちょっと落ち着いて下さい！」
「うるせぇ、人間が！」

「あ・・う・・・・」

そう言われると、何も言い返す言葉が無く、黙り込んでしまう。族長になると言うことは、こう言うことを含めてのことだ。僕は、強い心なんて持っていないし、忍耐も持っていないから（あっ、同じ意味だ）耐え切れないと思う。

「おい、人間だろうが宇宙人だろうが、俺達の族長に代わりない。きちんと従えよ。なあ、族長」

「吹雪さん・・・・」

その吹雪と言う人が言葉を話しだした途端、今までギャーギャーうるさかった妖怪達が一気に静まり返る。僕が来る前は、この人がボス的存在だったのかもしれない。

「でも・・・・」

「聞けよ！」

反論しようとした妖怪を、吹雪がとても冷たい目で見返す。こんな目で見られたら固まってしまうかもしれない。怖い、怖いよ、敵じゃなくてよかった・・・・。

「はい・・・・」

「そう言うことだ。族長ならこれくらいの騒ぎは自分でどうにか出来るぐらいの度胸がないとな。雷光銃が操れるから族長と認めたが、それ以外は認めてないからな」

今度は、僕にその冷たい目を向けて、そのまま出て行ってしまった。

こっ、怖いです。僕よりも、あの人の方が族長に向いてると思うんだけどな。何で僕なんだろう?

それに続いて、どんどん妖怪は出て行き、とうとう僕と冬眞だけが残った。

「あの・・・戦争って、やっぱり殺しちゃうんですか?敵方の種族を全滅させるために」

「まあそうだな。でないと、俺達みたいな少数種族は即、全滅だ」

「ちょっと待って下さい!殺しちゃうなんて酷いです!話し合えば済むことじゃないですか!」

「そんなんで納まったら戦争なんて起きねぇさ。けじめをつけるにはそれしかないんだ」

「嫌です!そんなのに加わりたくないです!僕は殺しの指揮をするなんてごめんです!」

敵だからって殺しはよくない。それに、殺しをする指揮を取るなんて嫌だ。それだったら逃げ出してやる。外に出て殺されたっていい。人を殺すのに加担するよりは死んだ方がマシだ。

どこに行くのかを咎めて来る妖怪達の間をすり抜け、門番を跳ね飛ばして門から外に出る。

すると、目の前で誰かにぶつかった。

「っ!?」

「いたっ!!」

ぶつかった人の背丈と、声からして誰だかすぐにわかったが、一応

確かめるために顔を上げてみる。

・・・やっぱりそうだ。

「凛君、いいんですか？こんなところにいて！」

「ああ、いいんだ。ちょっと散歩がてらに来ただけだから。ほら、護衛君もいるよ」

「族長、こいつは転生種族の・・・・」

「イエス！桜っちだよ。この子ね、女の子みたいだけど男の子だからね。勘違いすると痛い目に合うよ？」

「いえ、そんなことはしないですよ」

「あっ、そうそう。ねぇ、亜修羅の様子を見に行かない？」

「いいんですか？」

「大丈夫、大丈夫」

冬眞と凛君の護衛の人の顔を見れば、明らかにまずいことだと思うんだけどな。でも、ちょっとぐらいならいいかもしれない。一応、護衛もついてるし。

「おいおい、護衛がついてるから大丈夫だって思うなよ？俺だって・・・」

「役に立たなかったら護衛じゃないですよね？」

「うっ・・・・」

僕の何気ない言葉に、思い切り顔をしかめてうな垂れる冬眞。

まぁ、とりあえず放っておこうかな？下手に傷口に触ると痛いしね。

「でも、修さんのいる里がどこなのか知ってるんですか？」

「バッチグーですよ、桜っち君。さっき偵察に行って来ましたから」
「そうですか。じゃあ、行きましょう」
「レッツゴー！遠足♪遠足♪嬉しいな～♪」

敵陣に突っ込んで行く人とは思えないようなテンションの凛君と違い、さすがに護衛の人は神経を張り詰めている。

「あっ、ここ、ここ」

あっと言う間に修さんのいる里に着いた。さすがの凛君でも、敵陣のど真ん中では静かにしている。

「とりあえず、ここから中に入ってみようか。なんか、変な煙が出てるしさ」

確かに煙が外に出ている。しかし、火事だとしたら大騒ぎになるはずだから、きっと違うんだろうけど、煙が出てるなんて尋常じゃないと思うんだけどな。

「まっ、とりあえず入ってみようかね」

凛君は、普通に窓を全開に開けて、部屋の中に飛び込み、僕の手を取って中に放り込む。

その時、足元が濡れていることに気づいた。それから水の音がする。もしかしたらここは・・・風呂場？

僕の考えどおり、やはりここは風呂場だった。これなら煙が出ていたのも納得が行く。と言うか、速くでないとまずいと思う。現在お湯に使ってる人がいるし！

「凛君、出て行きましょう！ここはお風呂です！」
「そうだったの？知らなかったよ」
「おい、お前ら！どこから入って来てんだ！！」

「ほら、怒ってますよ。行きましょう！」
「いや、ここから中に入って行った方がいいよ。大丈夫、男湯だから服のまま通っても」

理屈が通っていないと思う。服のまま男湯を通るのはおかしい。凛君、ボケが始まっているのかもしれない。

しかし、幸いなのは、その風呂場が温泉みたいに広いことだ。もし狭かったら、悪いことをしたと思うことになる。

「って、お前ら、何で敵陣のど真ん中に入って来てんだよ？」
「あ、亜修羅。会いに来たんだよ。中々会えないからさ、ここから中に入って行こうと思って」
「・・・・早く出て行ってくれ。この部屋から三つ目の窓で待ってろ。そこが俺の部屋だ」
「わかったよ、十秒で出て来てね！」

凛君はそのまま窓から出るのかと思ったが、そのまま男湯を突っ切って、三つ目の窓の部屋の中に入って行った。凄い度胸だと思う。それに、知っている人でも、入浴中にお邪魔をしてしまったんだ。謝らないのはいけないと思うんだけどな。相手も一応恥ずかしいと思うし。

「あの、すみませんでした。修さん」

僕はちゃんと窓から出て、窓から部屋の中に入った。これもちょっと変だけど、正面から入れないから仕方ないよね？

冬は、寒さに弱い人にとっては宿敵！

「・・・ああ、驚いた」
「族長、急げって言われてたじゃないか」
「嫌だ。勝手に覗きやがって。俺は行くなんて言ってない」
「恥ずかしかったんだ。二人の目の前まで歩いて行ったのに」

「当たり前だろ！タオル意外は全裸なんだぞ！」
「はいはい。そんないやらしい話はやめましょう。と言うか、どうして俺とは入ってるんだ？」
「お前が風呂までついて来たんだろ！！」

「そりゃ、護衛だしな」
「風呂までついてくんな！！」

凛達が急に風呂場に入って来なければいい問題なのだがな。それを無視して文句を言える立場なのか。

ブツブツ文句を言いながらも、やはり行かないとうるさく言われそうなので、渋々部屋に戻る。

「あれ？亜修羅、浴衣なんか着てどうしたのさ？」
「神羅に風呂上りは浴衣しかないと言われたからだ」
「それだけ？」
「着てた服は洗濯された」
「勝手だね・・・・」

変な登場のされ方をしてムシャクシャはしていたが、やっぱりこれがいつもどおりで心が落ち着く。いつも通りと言うのはそう言う意

味ではなく、いつも突然来たりするのだ。食事中とか、睡眠中とか、とにかく色々だ。だから大分慣れていたが、風呂の最中は初めてだ。

「もう、風呂の途中に入ってくんじゃねぇぞ」
「わかってるよ。好きで入ったんじゃないんだしね」
「ふ～ん、こいつらが戦闘種族の族長と、転生種族の族長か。随分と可愛らしい族長殿だね」

神羅の言葉に、冬眞と、もう一人の護衛が眉をひそめ、お互いの主人を守ろうとする。

「亜修羅の護衛、随分とフレンドリーだね」
「俺、神羅ってんだ。よろしくな！」
「よろしく！僕、凛って言うんだ！」
「僕は、桜木明日夏です」

三人とも意気投合して、握手をしている。それから、とてもフレンドリーに話し合っている。

それを、ソワソワした様子で見ている二人を見ていると、面白い組み合わせが出来上がる。俺だけが、ただの傍観者なんだ。どちらにも属さない。

「じゃっ、帰ろうか！」
「どこにですか？」
「家に決まってるじゃん。こんなところにいたって無意味だってわかったでしょ？こうやって種族が違ったって仲良くすることは出来るんだ。だから、戦争なんかに加わらない。それが一番！」

「でも・・・・」

「行こう、魔界での時間の流れと人間界での時間の流れは随分と違って時差があるんだから。クリスマスが過ぎちゃうかもしれない」
「どっち道、クリスマスがやりたいだけじゃないか」
「そうだよ！何が悪いのさ！！」

俺の言葉に凛が開き直って偉そうに言う。偉そうに言える立場では決してないと思うが、とりあえずは黙る。

「しかし、それはちょっと自分勝手過ぎるんじゃないのか？」
「全然。こっちを巻き込んだ奴が悪いんだ。こっちが拒否をしちゃいけないことなんてないよ。それに、委員会活動の発表もしなくちゃいけないしさ」
「・・・それ、関係あるのか？」

「うん。実は大有り。これに出席しないと、ただでさえ点数が悪いのにさ、内申まで下がっちゃったら・・・。だから、出なくちゃいけないんだ。だから、帰らせて！」
「そう言われても困るんだけど・・・」
「じゃあ帰るからね。みんなのことはよろしく！僕らのことは海外旅行に行ってるとでも行っておいたらいいと思うよ。実際他の世界だしさ」

「んなこと言ったって、当てがあるのかよ？」
「まあね、そこに行けば絶対人間界に戻れるから。僕さ、戦争なんて嫌いだから。もしやるんだったら巻き込まれたくないしね」
「バッサリしてるな」
「まあね」

いつも曖昧な凛が、ここまでバッサリしていることに多少驚く。それにしても、前から自分勝手だと思っていたが、ここまで来ると、

ある意味気持ちがいいくらいだ。妖怪達には悪いが、元から族長なんてやるつもりもなかったんだしな。

しかし、種族争いの恐ろしさを知っている俺は、あまりのり気ではなかったが、それを二人には気づかせたくなかった。だから、強引にでものり気に思わせているんだ。

それに、まだ、本格的に始まった訳ではない。それまで、こいつ等との最後の思い出を作っておくのもいいだろうと思ったのだ。

我ながら、少々恥ずかしいと思うが、そう思ったのは事実だ。仲間の手によって殺されるなら、それまでの時間を楽しく過ごすぐらい、神も許してくれるだろう。

「あっ、服は？」
「そうだ」
「どうしましょう？」

暗い森を歩いている途中で思い出したように凛が言うので、こちらも改めてその事実に気がつく。

「まあいい。また戻ると面倒なことになるからな。だったらこのまま家へ帰ってもいい」
「多分、魔界には半日ぐらいいたから人間界では・・・・十二日経ってるってことだ。よかったよ、ギリギリセーフだ」
「そうか、よかったな」

こっちは別にいいこともなく、ただついて来ただけなので、大して嬉しくない。人間界に帰れることは嬉しいが、学校に行くことが、果たしてそんなに楽しいものなのかはわかり切っている。

そんなこんなで凛の言うとおりに、無事、人間界に戻って来た。しかし、魔界では浴衣は寒くないが、人間界だと冬真っ盛りだ。例え妖怪でも布一枚の薄っぺらい浴衣はきつい。

「ああ、寒い」

「家の中にいるのにね。ストーブは？それに、着替えてくればいいじゃん。あったかい服に」

温かい服と言われても、そんなものはもっておらず、とにかく一番温かそうな服（実際大したことないが）を着る。

いい自己満足だ。全然温かくもならないのに、なぜ着替えなくちゃいけないんだ。

「魔界に行っている間に、あっと言う間に十二月になっちゃったね」

「ああ、そうだな。冬物の服を買った方がいいと思うか？ストーブも」

「逆に聞くけど、この寒さが毎年続くんだよ？」

「言わずともわかった」

聞く方がバカだ。しかし、家にはストーブも何もないから、どうやって温まれと言うのか。

「ガスレンジに火をつけて焚き火代わりにしたらどう？」

「貧乏臭くないか？」

「じゃあ、修さんの炎はどうですか？」

「俺は出している側だから、熱くならない」

「・・・ねぇ、どこかの家に行こうよ。誰でもいいから。このま

まじゃ死んじゃいそうだよ」
「意外だな、寒さには弱いのか？」
「めっぽうね。もう、死にそうだもの。でも逆に、熱いのはめっぽう強い。百度でも余裕」

「異常だなお前は。まぁ確かに、俺も寒さには弱いな」
「僕なんか三十何度だと、もう脱水症状を起こしてしまうんです。二人はやっぱり凄いですね」
「そりゃ、妖怪だからな」

部屋の真ん中でおしくらまんじゅうをするぐらい、お互いの身を寄せ合って話している。でないと寒い。今の時点でも寒いけど、まだ体温を感じないよりはましだ。

「・・・どこか温まる場所の案がある人！」
「ない」
「僕もです」
「僕もないや。とりあえず、外を彷徨い歩こう。どこかみつけるかもしれないよ」
「その彷徨い歩いている間に凍傷を起こしそうだけどな」

「大丈夫。もし誰かが倒れても、誰かが助けるから」
「二人同時になんて運べないぞ？」
「グッジョブ！」

意味がわからない。何がグッジョブだ？と言うか、どんな意味かすら知らない。急にそんな意味不明な言葉を使われてもこっちが困るだけだ。

不満は大有りだったが、とりあえず外に出る。無論、外は家の中よ

りも寒い。

「ああ、このまま雪でも降ってくれたらいいのにさ。そしたら雪遊びで寒さなんか忘れちゃうのに」

「俺はそんなに雪遊びに夢中にならないぞ」

「そんなことを言ったから、雪が怒って降って来たじゃないか！」

「マジかよ」

凛の言う通り、鉛色の空から白い粉が降って来る。

このままじゃ本当に死ぬかもしれない。

俺は、本気でそう思い始めた。

恋のキューピット役は、思った以上に大変です

亜修羅が空を見上げて何を思っているのかわからないけれど、ほおっておいて、隣で雪を眺めている桜っちに話しかける。

「ほら、頼まれたじゃん。それを実行する時だよ、桜っち！」
「そうですか？いいんでしょうか？何かイベントの時とかの方がいいと思うのですが・・・・」

僕らが話していることとは、時が遡ること約一ヶ月前の話。僕と桜っちが、亜修羅の通ってる高校でいつも通りに待ち伏せをしている時のことだ。

「君達さ、いつも伊織君と一緒に帰ってるけどさ・・・お友達？」
「いえ、居候させてもらってます」
「凛君！あっ、宗介君！」

この不自然な態度を怪しいと思ったのか、話しかけて来た人の友達らしい人二人と一緒に、僕らを校門の隅の茂みまで追い詰めて行った。

「頼みたいことがあるんだけど、いいかしら？」
「なんでしょう？」
「この子のことなんだけど・・・・」

そう言って出て来たのは、何回か会ったことのある女の子だったが、名前を忘れてしまった。

「あの、何回か会いましたよね？」
「ええ」
「頼みって言うのは、どうにか上手くこの子にチャンスをあげて欲しいんだよ」

「チャンス？」
「うん。多分、あの様子だと両親とかいなさそうだし、二人だけが家族みたいだと思うしさ。だから頼んでるんだ」
「了解しました！その任務、僕らが請け負いましょう！」
「ありがとう」

と言うことなんだよね。でも時期を見ると、一番いいのがクリスマスだと思うけど、どうやっても亜修羅が石村さん（女の子の名前ね。ちゃんと聞いておいたんだ）とデートをするはずもない。どう導いたところで意図がばれたら、すぐ終わりだ。

「今ならさ、そんなに気にしないんじゃないかな?」
「そうですね。ちょっと電話してみます」

何かのスパイをやっているようで面白みもあるが、一応頼まれたことなので、真剣にやっている。

その為、連絡まで取れるようになっている。僕らに番号を教えるよりも、亜修羅に教えた方が早いと思うのは僕だけかな?

「あっ、えっとスパイの桜木です。これからそっちに行ってもいいでしょうか・・・。はい、はい。
わかりました」

桜っちは相槌をうった後にケータイ電話を切ると、僕に向き直って言った。

「これから行っても大丈夫みたいです。お友達もいるそうなので。じゃあ、上手く修さんを誘導しましょう」
「うん。これが至難の業。お堅いくせにモテるんだから。こっちがめんどくさいよ」

「凛君、抑えて抑えて。ここでどうにか二人だけで出かけさせましょう。そのままクリスマスに繋げるように」
「いい!その考え!!」
「何を話してるんだ?」
「いっ、いや!委員会のこと」
「さっさとどこか行くぞ。このまま立ち往生してたら凍え死ぬからな」

「そっ、そっか。じゃあもう少し頑張ってよ。友達のうちまで行くから」
「変な奴じゃないだろうな？」
「大丈夫。絶対大丈夫！」
中々進まない亜修羅の背中を押して、目的の家にたどり着く。しかし、ここからが問題だった。
「ここだよ」
「おい、なんだか嫌な予感しかしないぞ。俺は」
「大丈夫だって！」
「お前、俺をはめるつもりだろう？」
「何を大げさな♪」
何とか笑顔を作りながら必死に背中を押すも、亜修羅も負けじと両足を踏ん張って入らない。
「そのノリだと、どうせろくなことがないんだ！」
「だから大丈夫だって！ほら、桜っちもなんか言って！」
「あっ、あの。大丈夫です。だから入って下さい」
「やっぱり何かおかしいって！なぜそこまでお願いをする必要があるんだ？それ、嫌なこととかを押し付ける時の方法だろう？」
「いんや、大丈夫！！」
気合一発で亜修羅を押し倒し、インターホンを押す。これで第一段階クリア。頭脳種族は、その回転の速い頭と良すぎる勘が長所だ。現在、良すぎる勘で嫌がってたけど、無理強いをすれば大丈夫。

「俺は帰る！」
「だから、何をそんなに嫌がってるの？」
「感じるんだよ、よからぬことが起こるって本能が言ってるんだ！」
「ほら、もう遅い！」

ドアが開けられたので、その中に亜修羅を無理矢理押し込み、自分達も中に入る。色んなお話とかで、恋のキューピッド役をする人が出て来るけど、その人の苦労が、今しみじみとしみて来るようだよ。

「おい、ここはあのクラスの女のにおいがぷんぷんするぞ。明らかにあいつの家だろう。だからあまり来たくなかったんだ・・・・」
「どうしてさ？」
「色々事情があるんだよ」

わからない事情を言われても困る。でも、こっちもちゃんと事情があるんだから、強行させてもらうよ。

「こんにちはー！」
「あっ、丘本君、桜木君。伊織君！」
「すみません、突然お邪魔してしまって」
「・・・・」

亜修羅はブスッとした顔のままソファにドカッと座り込んでしまった。これじゃ、どこかの不良みたいじゃないか。と思うけれど、石村さんにはキザなポーズに見えるのだろうか？顔が真っ赤になっている。うん、恋する乙女はいいね。恋は青春だよ。

「凛君、変なことを考えるよりも、何とか考えて下さい。こっちの方を」
「そう言われてもな・・・・。よし、僕らが考えている間、代わり

をよろしくお願い！バトンタッチ！石村さん！！」
「えっ、お願いって何を？」
「話しの状況を実況するように話して！」
「あっ、あの・・・・・」

そう言ったまま、自分達の話しに暴騰してしまった丘本君達。（これでいいのかな？あんまりよくわからないんだけどな。バトンタッチって言われてもね）

それにしても、学校意外で伊織君と会えるのは、幸運以上の何かがあるのかもしれない。いつも、なんとか話しかけようとしてもうざがられちゃうし、一緒に帰ろうと思っても、もう先に帰っちゃった後だしね。滅多に会えないんだもん。せめて、授業中だけはずっと隣だけどね。

それにしてもうらやましい。私も伊織君と一つ屋根の下で暮らしてみたい。一泊でもいいから。でも、それは話しを上手く出来るようにならない限り無理だからね。頑張れ、私よ！

「別にさ、いいことないよ。亜修羅といったって。いっつも意地張ってるしさ、冷たいし」
「あっ、あの・・・・私の心の中を見ないで！」
「そんなこと言ってもさ、全国ネットで放映されてるんだよ？」
「えっ、本当ですか？知らなかったです。自分の気持ちをベラベラと、恥ずかしい・・・・」

「あっ、あの、嘘ですよ、石村さん。多分ですけど、多分違うと思います。なので、そのまま・・・・」
「でも、何を話したらいいのか」
「気持ちです。気持ちだけで大丈夫です」

気持ち、気持ち。無理に意識をしないで、チラッと伊織君の方を見ると、みんなの騒ぎを一人だけの傍観者として見ている。よし、話しかけてみよう。頑張れ！

「伊織君、あの・・・・えっと・・・・どうして私の家に来たの？」
「凛達に連れられて来た」
「あっ、そうなんだ・・・・」

次の会話に戸惑い、丘本君たちの方を見るけれど、どちらも話を聞いてくれそうにない。

「あ・・・私服姿、初めて見た気がする・・・・」
「そうか？」
「うん・・・・」
「なんか、今日はいつもよりしゃべんないな」
「えっ、そうかな？」

自分でも気がつかないうちにセーブをしていたみたい。いつも通りに接してた方がいいかな？

「ああ、そっちの方が俺はいいと思う」

こっ、これって、どうやって受け止めればいいんだろう？褒めてくれてるのかな？それとも、いつもがダメダメだってこと？

ダメだ、考えると余計わからなくなって来る！

しかし、聞くことも出来なくて、そのままうつむいてしまう。ここで話しかけることが出来たらいいなって思うんだけど、やっぱり無

理。

「あのさ、代わりをありがとう、もう大丈夫。決まったよ、石村さん」

「はっ、はい」

「まず思い付いたのが服。あの通り、冬物の服を持ってないからさ、二人で行ってくればどうかな？」

「ふっ、二人で！？」

「大丈夫、影でちゃんと見守ってる」

「えっ、でも・・・・」

「じゃ、亜、いや、修に話をつけてくれるよ」

ややこしいことをしたと思うけど、今は僕がしゃべってる。交代をした理由なんて、大したことないけどさ、なんとなくしてみたかったんだって。

「あのさ・・・・」

「どうしてあの女に絡むんだ？お前達は？」

「思い切り何でもないよ。たまたま知り合っただけだから」

「・・・・はぁ」

「何？そのため息」

「話は全部聞こえていた。でも行かないぞ。こんな寒い日に外に出るくらいだったらゲームでもしてた方がマシだ」

「そっか。じゃあゲームしよっか！」

「はあ？」

「だって、ゲームがいいんでしょ？だからゲームセンターに・・・・」

「子供だけで行っちゃいけないんだぞ」

「大丈夫。大人に見える人がいればね」
「・・・俺を盾にするなよ？」
「じゃあ、そう言うことでね♪」

とても何か言いたげな表情の亜修羅が話しだす前に、みんなにお知らせをする。子供だけでゲームセンターに行っちゃいけないって言ってもさ、トラブルが起こるからでしょ？そんなトラブルは僕らは大丈夫だから。（色んな意味でね）

「ゲームするの？」
「予定変更だよ。修がそっちの方がいいって言うからさ」
「でも、私はゲームが出来ないのよ？」
「大丈夫。なんだかこっちの方が盛り上がるかもしれないってこと」
「？」
「気にしなくて大丈夫ですよ。何かあった時はフォローしますから」
「うん」

こうなってみて思うのは、間に挟まれるのは大変だなって思うことだった。

「・・・おい、本当に行く気なのか？」
「当ったり前じゃん。僕は、言った事は必ず遂行させる性質だからね」
「前、約束を破ったことがあるじゃないか」

「あれは特別♪」
「『あれは特別♪』じゃねぇよ！」

嫌がる亜修羅を引っ張り出し、ゲームセンターに向かっている道で亜修羅に殴られる。亜修羅がいつも、こう頭を叩くから頭が悪くなっちゃうんだよ。その前だって、よかったとは言えないけど、今よりはマシだったと思うよ。

「頭が悪いのを俺のせいにするな」
「じゃあ、叩かないでよね」
「叩かれるようなことをお前が言うからだろう」

「そんな嫌味ばっかり言ってるから友達が出来ないんだよ」
「・・・・」

本当のところはよくわからないけど、言い返して来ないってことは、図星なんだろう。

いつも、誰に対しても、あんな態度だから好かれないんだと思うんだけどな。でも、そうなると僕はどうなるんだろう。変人？

「ねぇ、伊織君とはいつもこんな感じなんですか？」

「うん。いっつも年がら年中嫌味ばっかり言うからストレスも溜まるんだよね」

「学校では話しかけられても無視ですよ、ほとんどが。多分、丘本君だからあんな風に普通に言い返せるのかもしれません。だから、丘本君は、伊織君に認められてるってことですよ。羨ましいです」

「認めてるからあんな風に憎まれ口を叩くの？それって、好きな女子にちょっかいを出したくなる男子の気持ちかな？」

「・・・・あはははは」

僕の例えに、石村さんは苦笑いをした。当たり前かもしれない。石村さんは女の子だし、僕だってそんな経験がない。だけど、よく言うじゃないか。だからそんな感じなのかな？って。ちょっと方向はずれてるけど、似たような感じかなって思って。

「そう言えば、桜っちを修の彼女と間違えたんだって？この間、桜っちから聞いたよ」

「はい。総合的に見て、と言うか容姿が中性的だから、そうなのかなって。その時は灰になって飛ばされたい気持ちでした。でも、間違いだって気がついてよかったです」

「だってさ、桜っち！」

「はっ、はい？」

隣を歩く桜っちに話を振ると、聞いていなかったように戸惑っていた。本人的にもあまり思い出したくないものかもしれない。

「何でもない！それで、どうしようか、作戦」

「・・・・立ててませんよ。どうしましょう？」

「一か八かでやろうと思う」
「何をするんですか？」

「決めてないよ」
「あっ・・・そうですか。じゃあ、アドリブでやるんですね」
「そう言うこと」

とにかくその場に応じて行動するしかないんだ。下手に作戦を考えても、亜修羅は絶対にその作戦を踏みにじると思うしね。だったらこっちも、作戦なしで行こうと思ったんだ。

そして、ついにたどり着いた。ゲームセンターに。休日だけれど、外は雪が降っている為、あまり人がいない。いや、人は全くいなかった。これは好都合だと思う。

「じゃあ、各自やって下さい。解散！」

何を言う訳でもなく、一応それだけ言って、みんながバラバラに散る。普段のゲームセンターならもっとにぎやかだろうけど、今はゲームセンターを貸切状態にしたような感じだ。とても気持ちがいい。

みんなそれぞれゲームをやっている中、一人だけその輪から外れてベンチに座っている人がいた。それは、言わずと知れている亜修羅だ。

「君、青少年が楽しまないでどうするんだね？」
「うるさいな。ゲームでもしてればいいだろ？」
「いや、亜修羅がしてくれないと意味を成さないんだって！」

「だから、俺はゲームは好きじゃないって言ってるだろう？」

「だって、亜修羅がゲームの方がマシって言ったんじゃないか」
「ものの例えだ」

「じゃあ、僕と勝負して勝ったら、もうしつこく迫らないから」
「・・・・内容は？」

さすが賭け事好き。と言うか勝負好き。やっぱり、相手の性格をわかってると操りやすいよね。

「カラオケで点数が高かった方が勝ち」
「あんのか？」
「もちろん。あるから言ってるんだよ」

「・・・だからって、なんでカラオケなんだよ」
「亜修羅がどんな風に歌うのか聞いてみたかったから」
「・・・・断る」

ベンチの背もたれに寄りかかってしまった亜修羅を無理矢理立ち上がらせ、また無理矢理引っ張って行く。毎回引っ張ってて思うのは、亜修羅って、身長に比べると、体重が軽いなってこと。

「俺は断固として嫌だ」
「だめだよ、亜修羅に断る権利はないんだから」
「何でだよ？」

「色々事情が込み合ってるんだよ」
「・・・おい、何でそんなに軽々しく引っ張ってるんだよ？」
「だって軽いもん」
「お前よりは重いけどな」
「ごちゃごちゃ言わん！」

変な口調になってしまったけど、あえて何も言わずに引っ張る。体重、いくつなんだろうか？物凄く気になる。

「ねぇ・・・・」
「そんなことは、どうでもいいだろう。お前よりは重いってだけだ」
「ねえねえ、石村さん。体重、いくつぐらいだと思う？」

「誰のですか？」
「修」
「なっ、何でそんなことを聞くんですか？」

「身体測定とかやってるかもしれないから」
「わかりませんよ。私は・・・・」

そのまま、友達達に視線を向けたところから、友達は知っているのかもしれない。不思議なことだよ、全く。

「そんなことより、やらないのか？」
「ああ、はいはい。じゃあ、まず僕からね。修は後から」

と言うことで、なぜだか置いてある機械で出た結果は六十二点。まだいい方だと思う。じゃあ、悪い時は？って聞きたいと思うけど、それは秘密だよ。情けないほど点数が悪いからね。

「じゃあバトンタッチ」
「・・・本当に歌うのか？」
「もちろん」

みんなにはあえて聞いていないという素振りをしてもらっている。

本気で聞こうとすると、絶対断られることは普通にわかる。

「・・・歌う事に、何の意味がある？」

「聞いてみたいって言う立派な理由があるよ？」

「・・・・はあ」

僕の堂々とした態度に圧倒されてか呆れてか、ため息を付いた後、僕が出て来た扉の中に入って行った。その部屋は不思議で、扉を完全に閉めてしまえば音が全く聞こえて来ない。

防音と言うことだろうけど、僕には関係ない。ほんのわずかな音だけど聞こえた。まだまだ防音って言っても、ダメだね。

亜修羅は機械から吐き出された紙を普通にちぎると、外に出て来た。

「ほら、俺の勝ちだ。だから、とやかく言われる権利もなくなったぞ」

「でも、それが、亜修羅が出した結果だって言う証拠はないよ」

「まだ言ってるのか？お前、そこで聞いてただろう？防音って言ってもお前には聞こえたんだろう？」

「まあね、悔しいけど丸聞こえ。僕とは比べ物にならないくらい上手かった。それは認めるよ。数字も物語ってるしね」

「そう言うことだ。俺は好きにさせてもらうぞ」

「やっぱ、ちょっと待って！」

ベンチに戻ろうとする亜修羅の腕をつかんで止める。頑張って説得し倒せば大丈夫だと思う。

「何だ？」

「・・・やっぱり、いいや」

約束は約束だから、やっぱりしつこく言うのをやめた。バカな賭けなんかしなければよかったんだけど、好奇心が先走っちゃったんだよ。

どうしようかと思いながらも射撃ゲームを始める僕。何かしら、好きなものがあると思うんだけど、僕にとってはそれがゲームなんだよ。

「凛君、さっき修さんと何かをやっていたようですけど・・・？」
「ごめん。チャンスを逃しちゃった。せっかくのチャンスを泡にしちゃった」
「あの・・・そんなにゲームが好きですか？」
「何でさ？」
「何だか、凛君がやっていると、ゲーム事態が面白そうに見えるんで。ゲームを楽しんでやってくれる人の影響だと思ったんですよ」

「そうなんだ。でも、僕は本当に楽しんでるから楽しんでるだけだしね。桜っちもやってみる？これ、対戦プレイが出来るんだよ」
「そうなんですか？じゃあ、ちょっとだけ」

それから何回かやっているうちに、こっちに向けられる視線を感じた。最初は誰かと思ったけど、目の片隅で捉えた時に、思わず笑ってしまった。なんだかんだ言ってはいるけど、やっぱりやりたいらしい。

「そんなにやりたいならさ、一緒にやろうよ！」
「いや、違う。俺はただ・・・音がうるさいからそっちに目が行

くだけだ」
「いくら言い訳しても無駄！一緒にやろう？」

今なら無理矢理押しても大丈夫だろうと思い、亜修羅を引きずって来て、桜っちには石村さんを連れて来てもらった。これで二対二のチームを作るつもりだ。

「これは二人の対戦プレイが出来るんだけど、それを二人ずつ。合計四人でやるんだよ。ステージは十ステージがあるから、五ステージずつやっていけばいいんだよ。それで、チーム分けは、僕と桜っち。修と石村さんでね」
「おい、それじゃ、あまりにも不公平じゃ・・・・」

「ちゃんとやれば僕らに勝てるよ。ああ、負けたら夕食は外食にしてね。みんなの分もおごってもらうから」
「おい！それじゃ、いくらかかるんだよ？」
「その為にがんばれ！」

まだぶつぶつ言いながらも、亜修羅は取りあえず僕の隣りに立ち、銃を構える。僕もそれに習って構える。

さぁ、バトルの始まりだ！

バトルの結果は・・・・

「もし俺が勝ったら、凛は何をするんだ?」
「だから、凛じゃないって!もし、僕が勝ったら、何でも言う事聞いてあげるよ」
「生意気だな。後で泣いて謝ったって許さないからな」
「どうだろうね。ほら、余所見してると・・・・」

亜修羅が余所見をしているうちに、その場にいる標的を撃ち、次のステージへと進む。だから、まだ向こう側は一点ももらっていないのだ。

そのまま亜修羅のチームが負けたまま、石村さんと桜っちの番になった。

「桜っち、頑張って!亜修羅におごらせるんだ」
「おい、負けるな!巻き返せ」
「えっ、でも・・・私、ゲームは全く知らないし」

石村さんが戸惑っているうちに、桜っちがドンドン容赦なく撃っていくから、残り二ステージだけになった。

僕らは笑顔でいるものの、まだ一点も取っていない二人の表情は引きつっている。

「どうしよう、私・・・・」

石村さんは、なぜか物凄く震えていて、画面に銃が向いていない。向いていたとしても、ガタガタゆれているので、狙いが定められな

い。

それを見ていた亜修羅は、痺れを切らしたように行動に出た。

「違う、こうだ！」

石村さんの手をつかみ、銃口を画面に向けて、震えている手を押さえつけ、そのまま銃を撃つ。

この突然の行動に、僕も想定外だった。これを期に仲良くなってくれたらなって程度のものだった。でも、この格好は、石村さんの背が低いから、亜修羅が覆いかぶさるような状態になってるんだ。見てるこっちが、なんだかはずかしくなって来る。

しかし、当の本人は何とも感じていないようで、と言うか必死にやっているようで、こっちの行動にも気がついていない。

石村さんはと言うと、顔が真っ赤になって失神しかけている。後ろに亜修羅がいるから倒れていないけど、いなかったらとっくに後頭部を強打してるだろう。

そんなこんなで想定外のことも起こったけど、無事勝利を収めることが出来た。だから、夕食は外食だ。

「ちっ、負けたか。まぁ、約束は約束だしな。金取って来る」

「あっ、行ってらっしゃい」

あっけに取られて見送った後、一斉にみんなで輪になる。

「結構攻めるタイプだったんだね」

「いや、多分、修は自分が勝ちたいがためにやった動作だと思うんだけど。凄いドキドキしちゃったよ」

「わっ、私、失神しそうになって・・・・」
「嬉しくて失神？」
「うん。このまま死んでもいいと思ったんです」
「大胆だね。本人は全く平気な顔をしてたけど」

「見てるこっちもびっくりしたわよ。本当」
「僕らもびっくり。これを通して仲良くなってくれたらよかったなってぐらいの気持ちだったからさ」

そんな話をしていると、ゲームセンターの外が妙に騒がしい事に気がついた。

「どうしたんでしょう？」
「じゃあ、ちょっと見てくるよ。変な奴らだったら困るしね」
「あっ、はい。お願いします」

小走りに外に出て行ってみると、想像通り、不良と言うか、チンピラと言うか。そんな人達が、誰かさんを恐喝していた。それを見て、僕は助けようと言う気を起こさずに笑っていた。

理由は、その襲われている人物だ。不良達は、機嫌を損ねたら重傷を負わされることになる。

「どけ、バカ共」
「あっ・・・・」

不良達が怒らせる前に誰かさんが喧嘩を売る。不良達はそれにのせ

られてボコボコになった。

「やり過ぎだよ、このままほっといたら凍っちゃうよ」
「襲って来たこいつらが悪い。ただでさえイライラしてるんだ。雑魚の相手をしている暇はない」
「ほら、みんなが待ってるよ」

「本気か？」
「本気」
「はぁ・・・・」

ため息をついて嫌がるけれど、そんなのを無視してスキップをする。これは決して嫌味じゃないからね。

僕が亜修羅を連れてゲームセンターの中に入ると、さっきのメンバーともう一人、車椅子に乗った男の子がいた。

「その子は？」
「さっき反対側のドアから入って来たんです。名前は、悟琉君だそうです。あっ、読みは「さとる」だそうです」
「こんな雪が降っている日に来る人なんて珍しいな・・・・」
「あっ、迷惑だったら出て行くからさ」

「いや、気にしなくていいよ。ところで君達、未成年だよね？保護者がついてないといけないって教わらなかったのかい？」
「いるよ、保護者なら。この人だよ」
「・・・・なんだか曖昧だけど、仕方ないか」

「悟琉君こそ一人じゃないか」
「僕はここの見張りを頼まれてるんだ」

「ふ～ん」

まだ成人ではないと思うけど、僕らよりはちょっと年上かもしれない。そんな大人っぽい感じがする。亜修羅と同種だ。

「おい、行かないのか？あんまり遅くならない方がいいと思うぞ。校則でだって、子供だけで店に行っちゃいけないんだからな」
「校則なんてよく覚えてるね。僕なんか忘れちゃっててさ」

「おい、仮にも生徒会長だろう？しっかりしろよ」
「じゃあ、悟琉君。バイバイ！」
「ああ、バイバイ」

ここは亜修羅とは違うな。亜修羅なら、無視をするか、やっても無言で手をあげるくらいだろう。

「で、どこ行く気だよ？」
「ファミレス」
「ああいうところに教師がるかもしれないぞ。生徒がいないかって」
「大丈夫だよ」

「あのさ、どこに向かってるの？」
「ファミレス」
「えっ、ダメなんじゃないの？」
「大丈夫」

「それに悪いし」
「ゲームで僕が勝った時の条件だからね。気にしなくていいよ。亜・・・じゃなくて修はそれを承知でやったんだからさ」
「でも、やっぱり先生とかが見回ってるかも・・・」

「その時は上手くごまかせばいいんだよ」

生徒会長が校則を破りまくっていると言うことはあまりよくないことだけど、生徒会長だからって校則をきちんと守っている人なんていないんだ。だから僕も、大丈夫だと自分で思ってる。先生達がどう思ってるかは別だけど。

そんなこんなで店員さんにも怪しまれずに中に入ることが出来た。結構ギリギリだったけど、何とか切り抜けたって感じ。

幸い先生はいなかったけれど、隣の席の人達が、未成年っぽいのに平気で煙草を吸っている。でも、注意する気にはなれない。自分で吸ってるんだから、早死にするのは自分のせいだもん。

「そんなに持ってないからあんまり食うなよ？」
「嫌だよ。せめて八分目までは食べさせてよ」
「いや無理だ。いくらかかると思う？自分が大食いだって自覚してないのか？」

「そんなに食べるの？」
「ああ、この前、寿司四十皿食ったのに、まだ食えたって言ってるぐらいだ」
「羨ましいな、そんなに食べても太らないなんてさ」

石村さんは、問いに答えてくれたことが嬉しいらしくて、満面の笑みだ。ここは話の中に入らない方がいいと思うんだけど、一応さっきの問いは僕にして来たんだし、一応答えないと嫌な気持ちになるよね？

「うん、もとからあんまり太らない体質らしくてさ。もっと太れっ

て言われたんだけどさ、僕は一杯食べてるのに太らないんだ。だから、先生もしつこく言うのをやめたんだ」
「そうだね、丘本君って華奢だもんね」
「力は凄いけどな」
「今のことは聞かなかったことにしてよね？」
「そっ、そうなの？」

まずい、思い切り話が脱線しちゃって、いい方向に向かってた電車が線路切り替えで悪い方向に走って行っちゃった。

しかも悪い事に、もう線路の切り替え地点はない。完全に電車は変な方向に走って行っちゃった。

それから二人が話をすることはなかった。石村さんが話しかけても亜修羅の返事が、「そうか」か、「ああ」だから話が途切れちゃうんだ。

「お前、八分目って言っただろう？」
「えっ、まだ六分目・・・・いや、五分目かもしんない」
「もう食うのはよせ。お前のほかにも払わなくちゃならないんだぞ」

「じゃあ、後五品頼んだら！」
「・・・・」

呆れてものも言えなくなっている亜修羅を無視して、さっさと決めて頼んでしまった。

「本当に凄いですね」
「育ち盛りだからね」
「育ち盛りで言い訳出来る量じゃないぞ。それに、もう成長止まっ

てるだろう?そのチビのまま」

「うるさいな!これは人間の姿。本当はもっと大きいの」

「?」

「あっ、今のは、えっと・・・・。意地張っちゃっただけで・・・・」

「そっか。急に人間の姿とか言い出すから驚いたよ」

何とかごまかすことが出来てほっとしたが、向かい側にいる亜修羅に足を思い切り蹴られた。思わず顔をしかめるも、自分が悪いのだから、言い逃れは出来ずに我慢していた。

僕が食べ終わり、出て行こうとしていた時に、突然扉が勢いよく開いたかと思うと、さっき亜修羅にボコボコにされた不良達が、新たな仲間を引き連れて仕返しに来た。

「どうするのさ?」

「どうもしない。あいつらの相手をしていられるほど、俺は暇じゃないんだ」

「とか言っちゃってさ、本当は殴りたい気持ちなんでしょ?」

「まあな。でも、ここで乱闘を起こすのは迷惑だ」

亜修羅は野次を飛ばす不良達の言葉に耳を傾けずに、捕まれたら睨んで回避した。こう言うところは頭脳種族かもしれない。僕だったら戦いを途中でやめるのは結構きつい。そこで思ったのが、戦闘種族は、身体能力も他の種族より高いけれど、より好戦的だと言うことがわかった。

そのまま会計を済まして無言で外に出る。僕らも一言も口を聞けな

かった。他のお客も、亜修羅に睨まれた不良達も、みんな同じだ。

「あっ、あのさ、今日はありがとうね。じゃあ！」

石村さんが言ったかと思うと、友達を引き連れて走って帰ってしまった。

種族が違っても、仲がいい奴はいい

結構気まずい雰囲気だったなぁ～と、今更ながら反省する。

「あいつ・・・・」

五時になって結構暗くなった道を歩いていると、亜修羅がさっき出て来たゲームセンターを見てつぶやいた。

「どうしたのさ?」

「・・・・」

僕らも亜修羅に習ってゲームセンターを覗いてみると、悟琉君がチンピラに囲まれていた。（今日は、なんでこんなにもチンピラや、不良に会うんだろうか。そんな運勢なのかな?）

「だから、もう少し待ってくれって言ってるだろう?親父も母親も倒れ込んでいるんだから、それしか払えないんだ。だから帰ってくれ」

「・・・・」

「足が使えない僕は雇ってもらえないんだ。もうちょっと待ってくれ」

「・・・・」

「何だかまずい様子じゃない?もしかして、借金抱えてるのかな?」

「ああ、そんな感じだな」

「助けなくてもいいの?」

「だからって、あいつがいくら借金してるのかわからないと、払う分にも払えないだろう」

「えっ!?まさか、払うつもりなの?」
「乱闘は、もううんざりだ。なら、金を削った方がいい」
「貧乏になっちゃうよ。そしたら、今度は僕らが借金を抱えることになるんだよ」
「気にするな」
気にするよ、思い切り。貧乏になったら食べられないんだしさ。そんなの嫌だよ。
「僕が言った助けって言うのは、襲われてるのを助けてあげなよってこと」
「そんなことしたって、また戻って来るだけだ」
「あっ、こっちに来る!」
チンピラ達がそろってこっちに向かって来る為、寸でのところで近くの電信柱に身を潜めてやり過ごす。
「ふぅ、何とかやり過ごしたね。ちょっと事情を聞いて来ようよ」
「貧乏になりたくないんじゃないのか?」
「まぁ、一応ね」
ゲームセンターの中に入ると、悟琉君がガバッと振り返ったけど、僕らだと気づくと表情が緩んだ。
「どうしたのかな?」
「あのさ・・・・」
「お前、借金取りに追われてんだろ?」
僕は順序を立てて聞こうとしたのに、亜修羅がいきなり本題を切り

出したから、逆に何も言えなくなってしまう。

「見てたのか？」

「まあな。いくらなんだよ？」

「一億。父さんと母さんは過労で倒れて病院に行っている。僕はこの通り、足も使えないし、まだ働ける年じゃないからね。毎日うんざりだってこと」

「・・・・そうか。大変だな」

「まあ、それでも生きているだけで幸せだと思うから」

「そうか。また来る」

「もうダメだよ、君達は未成年者だからね」

「じゃあな！」

悟琉君の言葉を無視して、無理矢理さよならを言うと、僕達を引き連れてゲームセンターから出た。

「どうしたのさ？」

「いや、王族の奴に烈火闘刃を渡す」

「えっ、何か・・・・それってまずくない？」

「いいんだ」

「そのお金を上げるの？」

「嫌、さっきのは嘘だ。家計は苦しいからな」

どっ、どっちなんだろう？貧乏じゃないのか。それとも貧乏なのか？

よくわからないけど、一応亜修羅に従うことにした。（何を従うんだろう？）

とにかく家に帰ってみると、三人仲良くそろって待っている人達がいた。無論、僕らを連れ戻しに来た模様だ。

「勝手に帰られちゃ困るよ、君達」

「だって、こっちの世界が家だからさ、仕方ないんだよ」

「いや、そうじゃなくてさ。帰って来てよ、族長。いきなり帰っちゃったからみんな大騒ぎなんだ！」

敵同士のはずなのに、そんなことを言って言いものか。相手にそこを突かれるとは思ってないのかな？僕達は結構長い間友達だったから相手のことは信用してるけどさ、この人達はお互いが敵同士だし。

「関係ない。もう、うんざりだ」

「じゃあ、出直して来る」

そして、三人は仲良くそろって出て行った。本当に三人同時に。

「あの三人、敵方同士なのに仲がいいよね？」

「敵方同士だからって仲が悪い訳じゃない。仲がいい奴だっているさ」

「それって僕らのこと？」

「とは言ってないぞ！」

「へへん」

あまり言うと怒られるので、取りあえず黙っておく事にしたが、絶対に僕の勘は当たっていると思うことにした。だって、違ったらあんなにムキにならないもん。

「ちょっと、出て来る」

怒らせちゃったのかと思ったけど、そうじゃないらしい。取りあえずはほっとした。

しかし、それが最後の微笑みになることに、まだ俺達は気づいていなかった。

魔界では、本当に恐ろしいことが起こり始めていたことを。

ついに来てしまった最悪な出来事

それを知ったのは、神羅達が帰って直ぐに起きた。

突然、血だらけの妖怪が家の窓を破って入って来ると、俺と二人の間に割って入り、二人に武器を向ける。

「なっ、なに??」

「族長、魔界に来て、我々に援助をお願いします！」

「・・・・」

そう言われて、自然と悟った。

ついに、本格的な種族争いが起きたのだと。今までの中途半端な戦争の時とは違い、俺を守ろうとしている妖怪の顔は、恐怖、怒り、憎しみ。その全てを含んだ戦地にいる者の顔をしていた。

「・・・わかった。お前はもう戦うな。血だらけだ」

「そんなことは出来ません。私は、族長を無事に魔界に送り届けることを任されて・・・・」

その時、不意に背後から殺気を感じ、自然と妖狐の姿に戻り、烈火闘刃で飛んで来た何かを弾き返す。

俺が弾いたのは、猛毒の塗ってあった毒針らしく、もし、気づくのが遅れていたら、俺は今頃猛毒によって死んでいたことだろう。

すると、針が飛んで来た方向とは別の窓を蹴破り、妖怪が入って来た。

そして、そのまま桜木を抱える。

「なっ、なんですか！？ちょっと、やめて下さい！」

そう叫んでいる桜木の言葉を無視して、窓から飛び降りて逃げる。

そいつも血だらけだった。きっと、桜木を連れて来る様に言われたやつだろう。

「族長、このように、人間界にも妖怪どもの手が回っております。急いで魔界の砦に向かって下さい」

「・・・・わかった。俺は一人で行ける。お前は先に魔界に帰っていろ」

「それは出来ません。こいつは戦闘種族の族長です。こいつが襲って来ない可能性はありません」

「・・・・わかった。一緒に行く」

「えっ、何？どう言うこと？」

「・・・・短い間だったが、お前達と過ごした日々は楽しかった。だが、ここでさよならだ。一生な。ありがとう」

俺がそう言ったと同時に、妖怪が俺の腕を？み、突如出現させた歪に入った。

これで、もう二度とあいつらには会えない。

そう思うと何とも言えない気持ちになるが、その気持ちを抑えて目を瞑った。

「・・・短い間だったが、お前達と過ごした日々は楽しかった。だが、ここでさよならだ。一生な。ありがとう」

その言葉が、なぜかとても怖かった。

いつも、ふざけて言われたことがある。その時は、「何言ってるのさ！」って怒鳴り返してやることが出来た。

でも、今は、そう言い返すことすら出来なかった。なぜか、本当の別れなんだと思った。

なんでそう思うのかは自分でもわからないでも、わかったんだ。

その時、突然背後から襲いかかられて、何とか犬神の姿に戻ると、その攻撃を避ける。

そして、その妖怪の方を向く。

そこにいたのは、きっと他種族の妖怪だろうね。襲って来たんだから。しかし、その姿を見て驚いた。

血だらけになって、狂命状態になっている。

狂命状態と言うのは、普段の妖怪は、戦闘モードになっても最高の力を出し尽くすことはない。妖力を出し尽くすことは、破滅を意味するからね。

でも、物凄い極限状態の時には別だ。自らの妖力がなくなるのなんて気にせず、ただ、定められた誰かの命を守る為、その人以外の生きとし生ける者の命を全て奪う狂命状態になる。

その状態になるには、極限状態以外の他にも、なんらかのスイッチがあると言われてるけど、それは未だにわかっていない。

そして、狂命状態に陥ると、守るもの以外のものを全て破壊する。と言うことは、友達も、親も、同種族も何も関係なく殺す。だから、同種族同士の争いが起こっている可能性もある。

そんなことを考えていると、不意に襲われて、何とか避ける。

普段の力は、出してもせいぜい六十%ぐらいだ。でも今は、百%の力。全力を出しているから、それなりに強い。

どうしようと思っていると、不意に目の前に影が現れて、僕を守るように立ちふさがる。

「族長、早く安全な場所に向かって下さい」

「錬賭君！・・・でも、君は大丈夫かい？血だらけだけど・・・・」

「俺は大丈夫です。族長が早く避難していただければ結構ですので」

「わかった！」

僕は、錬賭が心配だったけど、目を瞑って魔界に向かうことにする。

何が起こっているのか全くわからない。

でも、本能が告げてる。とても恐ろしいことが魔界で起こっている。
僕らはそれを阻止しなくちゃいけないんだってね。

亜修羅は、もしかしたら知っていたのかもしれない。

もう、僕らが会えないって知らなかったら、桜っちみたいに何も告げないと思う。ただ、亜修羅の場合は、言っていた。だから、知ってたんだ・・・・。

どうして教えてくれなかったんだろうって思った。でも、直ぐにその理由がわかった。

きっと、どこかでそのことを知ったけれど、その悲惨な情景も知っていたから、僕らに言わなかったのかもしれない。不安な思いをさせない為に・・・・。

なんだかんだで優しいと思うけど、苦しかったと思う。

そして、わがままとか言っていた自分が情けないと思うけれど、また、三人そろって楽しく過ごせるように頑張ろうとも同時に思った。
どうか、みんなが無事に助かりますように・・・・。

「なんなんですか！？」

僕は、無言で腕を？んでいる人を見上げる。

そして、驚いた。

血だらけだ。そして、その人の血で僕も血だらけだ。

びっくりして悲鳴を上げそうになったけど、その人が視線を落として、僕に言った。

「お前、妖怪退治屋養成学校に行っていたんだろう。血ぐらいで悲鳴を上げるな」

「でっ、でも！どうしたんですか！何があって、僕をどこに拉致しようとしてるんですか！」

「お前は人間だが、俺達の族長でもある。俺達は、人数が圧倒的に少ない。だから、隠れている。吹雪さんからお前を守るように言われた。砦にお前を連れて行く。目を瞑っていろ」

そう言われると、突然目隠しをされて、目の前が真っ暗になる。何で目隠しをするのかわからない。なんで？？

「なんで目隠しするんですか！」

「お前、他種族の族長と仲がいいらしいな。だから、俺達の砦のありかを教える可能性がある。だから、目隠しをする」

「あっ・・・・そうですか」

信じてもらえてないんだと思うと、自然と高ぶっていた感情が落ち着いて、ため息をついてしまった。

まさか、同種族の人達にここまで信用されてないとは思わなかった。でも、疑るのは確かだよね。うん、仕方ないことだよ。

そう思うながらも、少し悲しくなった。

しばらくしたら目隠しを外された。一番最初に見た風景は、薄暗い建物の中だった。

「ここは、どこですか？」

「地下に作った砦だ。この上では、丁度戦いが繰り広げられている」

「えっ！？大丈夫なんですか？」

「地上の様子を確認して、危なくなったら移動をする。地上の様子を見るか？」

「あっ、はい！」

僕は、魔界の地上がどうなっているのか見たかった。

・・・いや、ここが魔界なのかわからないけど、きっと魔界なんだろうなって思う。

それにしても、なんか、雰囲気が怖い・・・。みんな、気を張り詰めて、どうも自分が場違いの人間に思える。

「よぉ、族長。そんなに固まった顔するな」

そう言って話しかけて来たのは、冬眞だった。

「あっ、冬眞！」
「こいつは俺が面倒見る。お前は安全を確保して来てくれ」
「ああ」

冬眞は、僕を連れて来た人を追い払うと、どこかに連れて行く。

「どこにつれて行くんですか？」
「お前、さっき、地上の様子を見たいいって言ってただろ？だから、見せてやるのさ。ただ、かなりショッキングな絵だぜ」
「・・・・どれぐらい？」

「妖怪のほとんどが狂命状態に陥っている。だから、同種族同士争うことにもなっている。だから、多くの屍がそこらじゅうに転がっていて、異臭を放ってる」
「うっ・・・・」

話を聞いただけで吐き気がして来た。

それって、なんて酷い・・・・。

僕はそう思いながらも、見なくてはいけない気がした。自分はこうして守られているけれど、戦っている人達がいる。その光景を見なくてはいけないと思ったのだ。

「おう、ちょっと退いてくれ。族長殿が地上の様子を見たいらしい」
「ああ、でもいいのか？人間の目には、ちょっとショッキングすぎるんじゃないか？」
「大丈夫だ。一応、こいつも妖怪に近い立場にいる」
「・・・・はい。見せてください」

僕がそう言うと、その人は場所を譲ってくれた。

ドキドキするけれど、僕は、穴の開いている壁に目を近づけてみた。

すると、見えた。

燃えて黒くなった木に、焦げた死体・・・・そして、血だらけになって、死にそうになりながらあちこちで戦いを繰り広げている妖怪達。

その時、突然画面が真っ暗になった。

突然のことに驚いて、飛び退いてしまった。心臓が早く脈打っていて、走った後みたいに息が苦しい。

「お前、大丈夫か？」

「えっ？あっ、はい・・・・。大丈夫です・・・・」

「お前、休んだ方がいいぞ。顔が蒼いぜ」

そう言うと、冬眞は僕の腕を引いてその場から離れた。

「顔が蒼いですか？」

「ああ、休め」

冬眞は、救護室みたいな場所に僕を連れて来ると、カーテンを閉めて出て行ってしまった。

僕は、本当は眠りたくなかったけど、仕方なく眠ることにした。

眠れるはずがない。でも、僕は、眠るしか出来ないとわかったんだ。

思った以上に酷い現状

「ここは？」
「・・・・魔界です」
「嘘だろ？」
「いいえ、本当です」

目の前に広がっていた光景は、まさに、烈火闘刃に見せられた悪夢と重なっていた。それが、今は幻想ではなく、現実として目の前に広がっている。

「では、行きましょう。俺達の砦に」
「戦わないのか？」
「族長が死ぬと言うことは、我ら、頭脳種族の敗北が決まると言うことです。と言うことで族長、これからワープをします」
そう言うと、勝手に俺の腕を？み、ワープを開始してしまった。

それから数秒後に見えた景色は、さっきの焼け野原ではなく、建物の中のようだった。

「おう、族長！こっちだ」
「神羅、ここにいる以外の奴らはどうしたんだ？」
「みんな戦場に向かっています。そして、その四分の一の奴らが既に戦死しました」
「・・・・ちっ」

「族長、座ってて下さい！どこに行くつもりなんですか！」
「俺も戦いに行く」
「やめて下さい！」

俺が椅子から立ち上がろうとすると、周りにいた妖怪が一斉に俺のことを止める。

確かに、こいつらの言い分はわかる。しかし、自分だけ戦わずに守られていると言うのは嫌だったのだ。

「他の奴らは死ぬまで戦い続けていると言うのに、なんで俺だけ守られるだけなんだ！」

「それは仕方ないことです。族長なのですから」

「・・・そんなんで、理が適う話じゃない。俺は戦場に行く」

「お待ち下さい！それでは・・・・・」

そこまで話していた時、今まで固く閉ざされていた扉がバンッと開いて、慌てた様子の妖怪が入って来た。

「大変です！我が族の砦のありかを嗅ぎ付けられたようです！急いで族長を安全な場所に移動させてください！」

その言葉を聞いて、隣に立っていた神羅の顔つきが変わり、今までの、のほほんとした顔からは想像もつかないぐらいに真面目な顔になると、指揮を始めた。

「一番隊、二番隊、三番隊は、外に出て守りを固めろ。四番隊、五番隊、六番隊は、戦闘準備をしておけ。八番隊は、俺と一緒に族長を守れ。以上！」

神羅が言った途端、大勢の妖怪がバタバタと動き出す。

俺は、神羅の物凄く意外な一面を見て唖然としていると、神羅に腕

を引かれて、部屋の隅にある通路に連れて行かれる。

「お前、単なるバカじゃなくて、指揮も出来たんだな。見直したぞ」
「・・・全く、族長も素直になればいいのにな。俺だって、族長がいなかったら、一番偉い立場にいるんだぜ？」
「そうなのか？」
「ああ、族長の護衛と言うことは、国王の次に偉い大臣となる・・・・あれ？大臣が偉かったんだっけな？」

「まぁいい、つまり、俺がいない間は、お前が指揮を取っていたと言うことだな？」
「そう言うことになる・・・うん。だからって、俺に指揮を任せる・・・なんて言わないでよ？」

神羅の言葉を、耳を塞いで受け流す。聴かなければ、無効になる。

「族長、そんなガキみたいなことをしないで下さいよ～。耳を塞いだって、聞こえてるんでしょ？」
「・・・いいや、さっぱり聞こえない。と言うことで、ここで族長命令だ。お前が指揮を取れ。以上」
「そんな道理が通る訳ないだろ！」

神羅が怒って怒鳴るけれど、俺は、再び耳を塞いで聞こえないふりをした。

「そうだ！お前、俺と入れ替われ」
「・・・は？」
「だから、俺が族長と言うことを伏せて、お前が族長と言うことにしておけ。そして、俺が護衛として戦場に行く」

「なっ！？」
「それが一番無難な線だろう？よく考えてみろ。普通のやつらは、守るべき族長を戦場に駆り出すことは絶対にしない。その心理を突くんだ」
「・・・・」
俺の言葉に、真剣に考え込む神羅。
それには思わずうろたえた。なぜなら、俺は、ふざけて言ったつもりなのだ。ただ、戦場に行きたいが為に言った言葉を、そこまで鵜呑みにされたのだ。うろたえないはずがない。
「それ、いい考えだな・・・・」
「・・・本当に言ってるのか？」
「ああ、囮作戦だよな？それならいい。ただ、護衛の俺は、族長を守らなくちゃいけないから、囮は俺ではなく、九番隊の隊長に任せる。いいな！」
突然話を振られた八番隊の奴らは、返事が遅れたものの、慌てて勢いよく返事をする。
「では、九番隊の隊長に伝えてまいります！」
「おう、頼むぜ！」
一人の隊員が敬礼をすると、足早に来た道を戻って行く。
どうやら、確実に、俺の言った作戦は実行されるようだ。なんだか、拍子抜けする。
「と言うことは、俺は戦場に出向いていいんだな？」

「・・・まぁな。その変わり、俺が死守する。それを拒むなよ？」
「ああ、わかってる。そうでもしないと、お前は俺を戦場に出すつもりはないんだろう」
「わかってるじゃないか！」

神羅の反応に、俺は大きくため息をつくと、ふと感じたことを聞いた。

「そう言えば、俺をどこに連れて行くつもりなんだ？」
「最初は、第二の砦に連れて行く予定だったが、戦場に行くんだろ？だから、そのまま地上に出るんだ」

そう言うと、今までずっと立ち止まることなく歩き続けていたのだが、急に止まって、右の壁にあるドアを開けた。そこには上り階段があって、上へと続いている。

「ここ、どこに繋がってるんだよ？今までも何回か見て来たぞ」
「ここは、砦と砦を繋ぐ簡易隠し通路って言うのかな？そして、この上を行けば、地上に出られる。途中にも何個かあった理由は、一個じゃ不便でしょ？だから、何個も作ってるんだ。では、行きますよ」

そう言って、神羅は階段を上り始めるも、かなり混乱した。

なぜなら、今までの隠し通路は、横幅が広かった為、俺を守るように周りを囲んでいたのだが、その階段は、一人が通るのがやっとの幅しかなく、一人ずつ階段を上って行くしかなくて、かなり混乱したのだ。

階段は結構長い間続いた。それだけ深いところに砦は作られていた

らしい。地上に出る前に、三十分近くかかったのだ。

「さぁ、ここを開ければ戦場だ。準備は出来てるか？」

「おう！」

八番隊の勢いのいい返事を聞いた後、神羅が上についている扉を押し上げた。

それと同時に、なんとも言えない臭いが狭い通路に充満して、みなで咳き込む。そして、それと同時に、赤い光りが差して来た。

今まで結構暗いところにいた為、突然の明るい光りに、目が眩んだのだ。

しかし、それに物怖じせず、みなが地上に這い登る。

遂に俺の番が来て、地上に上る。

そして、地上の光景に、目を疑った。

そこら一体に、死体が無造作に転がっており、普段は緑色の草は、真っ赤な血を吸って成長し、変な色になっている。空気は目に見えるぐらいに淀み、においは強烈だ。足元の土は、慣らしたようにフカフカしているが、その色が赤黒い。これで、どうしてそうなったか言わなくてもわかるだろう。おまけに、普段は青い色の空も、真っ赤に染まってしまっている。

・・・これが、種族争い。

そう感じた時、自然と体が震えるのを感じた。ここまで恐ろしいも

のだとは思っていなかったのだ。

普段は青く、快い陽の光を与えてくれた空の色さえも変えてしまうものだったなんて・・・・。

こんな状況で戦っていたら、いくら温厚な奴、喧嘩や争いが嫌いな奴でも、気が狂ったかのように戦うだろう。

こんな光景を目にし、この場に立っていて、戦わないでいられる奴なんていない。

どんどん、このよどんだ空気に汚染されて、戦闘の鬼と化す。そして、全てのものを殺し、やがて、自分の身をも滅ぼす・・・・。

こんな状態にいる奴らを、俺は、本当に救うことが出来るのか・・・・？

過去と今と・・・・

「なに・・・これ？」
「魔界の風景でございます」
「・・・・地獄じゃん」

僕の今見ている風景。それは、地獄のような魔界の様子だった。

「族長、立ち止まっている時間はありません。いつ襲われるかわかりませんから」
「・・・・でも」

僕は、お化け屋敷のお化けに腰を抜かした子供のように、動けなくなっていた。

その光景があまりにも残酷過ぎて、気が狂ってしまいそうだった。

こんな中で戦い続けていたら、どんな人でも気が狂ってしまう・・・。

そう思っていた時だった。突然後ろから斬りかかられて、それを避けることが出来なかった。

「つッ」

顔を歪めて肩を？むと、結構深く斬られていた。慌てて後ろを向くけれど、どこにいるのかわからない。

「族長！大丈夫ですか？」

「あっ、うん。大丈夫。でも、どうして気づかなかったんだろう？普段なら、斬られる前に気配を感じることが出来るのに・・・・」
「族長、とにかく急ぎましょう。この場は危険です！」
「うん」

そう言われて、やっと体の緊張がほぐれたけれど、なんだか息苦しく感じる。

空気が汚染されたように変な色になっていて、上手く説明できないけど、ゲームの世界とかで、紫色の空気の場所とかたいていあるじゃないか。ああ言う図がどこまでも続いていると思ってくれたらいいかな？

そんなことを思っている時、不意に死角から攻撃をされて、思い切り吹っ飛ばされる。

「・・・なっ、なんなんだよ、もう～～～」

僕は、痛むお腹を押さえながら立ち上がる。そして、なんだか、感覚が鈍っている気がする。

そして、押さえようのない怒りが沸々と湧いて来て、今にも感情が爆発するよな気がした。

「お前、他種族の族長だな？」
「・・・お前が、ずっと僕のことを蹴ったり殴ったりした張本人だよね」

自然と冷静な口調になって、微笑みが浮かべられる。

「なっ・・・・」
「痛い目を合わせた分、君にも報いを受けてもらうよ」

僕は、物凄く怒っていた。何でかわからないけれど、このままだったら、自分じゃない誰かに支配されそうで、何とか体を押さえつける。

そうでもしなしと、僕を襲って来た人を殺してしまいそうで、何とか感情を抑える。

前みたいな悪夢を再発させてはいけない・・・・。

「チビ！」
「チビじゃないよ！」
「うるせーよ、化け物！」

子供達が、僕に向かって石を投げつけて来る。

「やめなさい、この子は化け物の子なのよ。もし怒らせでもしたら、大変なことになるわ」
「そうだぞ、危ないからこっちに来なさい」

お父さんお母さんに手を引かれて、子供達が蜘蛛の子を散らすようにいなくなって行く。

残された僕は、血だらけの体でずっとその場にうずくまっていた。
泣いていたことを誰にも見られたくなくて、ずっとうずくまっていたんだ。

夜になって寒くなって来たけど、誰も僕に気づかない。

両親は遠くの村にいて、おばあちゃんに僕を預けてる。

そんなおばあちゃんも、僕のことを怖がっているから、心配して呼びに来るなんてことはない。

物凄く惨めに思える。

どうして僕のことを化け物と言うのかと言うと、僕は、戦闘種族の子だから。そして、冥道を開けることが出来るから。

戦闘種族と言うだけでも「えっ・・・・」ってなるのに、冥道も開けるから、化け物って呼ばれてるんだ。

この村は、本当は頭脳種族の人しか住んじゃいけないことになっているのに、両親が、僕のことを、おばあちゃんがいるって言うことだけで置き去りにしちゃったから、僕は孤立してる。

「おい、そんなところでうずくまってると、風邪ひくぞ」
「・・・・お兄ちゃん?」

僕は、服の裾で涙を拭うと、声の聞こえた上を見上げる。

逆光で顔は見えにくいけれど、優しい微笑みだけは見える。

「おう、久しぶりに帰って来たら、お前、またいじめられてんのか？」

「・・・だって、僕は化け物だから」

「お前、またそんなこと言ってんのか。毎回言ってんだろ？」

その人は、僕の隣に座ると、頭を小突いて来た。

「お前は、化け物なんかじゃない。周りの奴らがどうと言おうが、お前は化け物じゃないんだ」

「でも・・・みんな、僕のことを嫌って・・・」

「周りの奴らが嫌っても、俺は、お前の味方だ。ずっとな」

そう言って、僕の頭に軽く手をのせて来る。

その言葉と優しさが嬉しくて、僕は、違う意味で泣いた。

嬉しくて、苦しくて、ため息をついた。

でも、その一生も・・・・・。

その次の日、僕は全てを破壊した。

「ごめんなさい、許してください！」

「・・・今まで差別して来た罪、僕の苦しみ、その身で味わってみなよ」

僕は、鬼になった。そして、血に染まったんだ。

もう、鬼になりたくない。血に染まりたくない。

「僕は・・・・」

「族長！」

不意に呼ばれて、一気に目が覚める。

慌ててあたりを見渡すと、敵の集団に囲まれていた。

・・・どうしよう。いくら戦闘種族の族長と言っても、百人ぐらいに囲まれたら、いくら僕でも手に負えない。

「族長、ここは俺に任せて下さい」

「えっ、錬賭君は？」

「俺は、族長を守るために生きているんです。だから、死ぬ気で守ります」

「でも・・・・」

「急いでください」

僕は、首を横に振った。そんなことしない。

「僕は、守るのは好きだけど、守られるのは好きじゃない。だから、逃げないよ。錬賭君の方が逃げた方がいい。僕は、こいつらを倒してから行く」
「・・・・でも」
「大丈夫。任せな！」
「・・・・すみません。直ぐに加勢を呼んで来ます」

そう言うと、錬賭君は、足早にその場を去って行った。

「さ～て、行きましょうかね」

もう、人が死ぬのは嫌だ。だから、守るんだ。自分の命を犠牲にしてもね？

優しさの後の、辛過ぎる現実

どれくらい時間が経ったのかわからないけれど、僕は目が覚めた。

頭がボーッとして、寝て休んだはずなのに、むしろ頭が痛くなってきている。

気が滅入るけれど、仕方なく起き上がると、カーテンを開いて歩き始める。

なんだか、魔界に来てから、急に体調が悪くなって来ている気がする。きっと、ショッキングな様子を見たから、気分が悪くなってるに違いない。

早く人間界に帰りたいなぁ～と思いながら階段を上って行って、みんなが集っている場所に行くと、冬眞に話しかけられる。

「大分顔色が悪くなってるな」

「・・・はい、気分が悪いんですよね。魔界に来てから。どうしてでしょう？」

「魔界の妖気にやられたんじゃないか？」

「そんなことないですよ。前まで、一応、魔界で妖怪退治屋養成学校に行ってましたし、それに、妖怪とも戦えるように、妖気に体を慣らしていますし、そんなことはないと思うんですけど」

「・・・なんなんだろうな？」

「どこか、いい空気の吸える場所ってありますかね？」

「・・・今の魔界は、どこに行ったって汚い空気さ」

確かに・・・・。

そう思って、ため息をついた。

きっと、この空気は人間の僕にも苦しいけど、妖怪のみんなも違和感を感じていると思う。

「なんだ?具合悪いのか?」

「ええ、まぁ。なんだか調子が出なくて・・・・」

「そうか。まぁ、確かに、妖怪の俺達ですら、感覚が鈍ってきてるんだ。いくら鍛えられていると言っても、お前も人間だからな。俺達以上に影響を受けているんだろう。外に出ないでそんな状態ならば、外になんか出られないか・・・・」

冬眞はそう考え込んだ後、近くにいる妖怪に耳打ちをした。すると、その妖怪は軽くうなずくと、どこかへと走って行ってしまった。

「あの妖怪、どこに行ったんですか?」

「お前が調子悪そうだから、空気が綺麗な場所を作って、そこに置いておこうと思ってな」

「・・・・優しいんですね、ありがとうございます」

僕がそう言うと、冬眞は顔が赤くなって、フイッと後ろを向いてしまった。

結構優しいところもあるんだなぁ~と思いながら、僕は近くにあった椅子に座る。

立っていられないほどって訳じゃないけど、疲れるんだ。物凄く。

そのまましばらく待っていると、さっき走って行った妖怪が戻って来て、冬眞が僕に声をかける。

「なんか・・・色々悪いな」

「は?何のことですか??」

「人間のお前を、俺達の争いに巻き込んじまってよ・・・・」

「あっ、そのことですか・・・・」

「本当はよ、俺は乗り気じゃなかったんだ。いくら、雷光銃と波長が合っていたと言っても、人間の奴を俺達の族長にするなんてよ」

「僕が人間だから、ムカつくんですか?自分達よりも強くないのに上の立場にいるから・・・・」

申し訳ない気持ちになって、声が小さくなる。

僕だって、なりたくて族長になった訳じゃないけど、族長と言う立場に立っているんだから、もっと堂々としていないといけないのに、こんな性格だから。

「そうじゃない。そう言うこともそうだ。お前は妖怪じゃないから、周りの奴らに認めてもらえてないし、それに、種族争いにまで巻き込んで、体調を悪くさせて・・・・。そもそも、向いてないと思った。でも、前期族長の言うことだから、仕方なくやったんだ。本当に悪いと思ってる」

真顔で謝られる。今まで、そこまで真剣に何かをする人だとは思ってなかったから、かなり驚いた。

「あっ、えっと・・・・。別にいいんですよ」

「でも・・・・」

「えっと、それが運命なら、受けるしかないんですよ。・・・・じゃなくて、あの・・・・そこまで心配してもらわなくても大丈夫ですよ！はい、あの・・・・楽しんでるとは言えませんけど、最近は、あまりそう言うことに関わっていなかったので、自分が平凡な人間に思えていたんですけど、今、自分は普通の人間じゃないんだって実感出来て、よかったです」

自分でも、言っている意味がゴチャゴチャしてるのはわかってる。でも、上手く言葉を話すことが出来ない。

頭があんまり働かないんだ。ただ、これが精一杯考えて出した言葉だと思ってくれると嬉しいな。

「・・・・あんまり訳がわからないが、そう言ってもらえるなら、よかったぜ」

そう言ってホッとした表情を見せる冬眞を見て、僕の言葉は冬眞を傷つけてないんだなってわかって、とてもよかったと思った。

「あいつらも、本当は心配してるところがあるんだ。ただ、お前が人間だから、認められない部分もあってな、結構キツく当たる部分もあるかもしれないが、どうか許してやってくれ。複雑な気持ちなんだ。今まで、妖怪じゃない奴が族長になるなんてミラクルが起こったことはないからな」

「・・・・はい」

僕は、話を聞いて、とても嬉しく思った。

冬眞だけじゃなくて、周りのみんなも、僕のことを気遣ってくれていたのかと思うと、認めてもらえたと言うような気がして、嬉しかったんだ。

「ほら、ここだ」

そう言って案内された部屋は、狭かったけど、空気が他の場所と違って綺麗だったから、思わず深呼吸をしてしまった。

「じゃ、俺は向こうに行くから、また何かあったら呼んでくれ。それから、非常時の場合は、そこの赤いボタンを押してくれ。非常用ベルが鳴って、みんなが駆けつける」

「はい、わかりました！」

僕は、大きく息を吐くと、部屋の隅に置いてある椅子に座った。そこから外の様子を覗いてみるけれど、とんでもないことになっていた。

思わずため息をついてしまうほどに。

しかし、空気が綺麗になったからか、自然と心に余裕が出来て、凛君や、修さんは大丈夫なのだろうか？と思うようになった。

自分だって安全な立場じゃないけど、少しは安全だと思う。二人だって族長なんだから、守られてると思うけど、あの二人は僕みたいにおとなしくしてると思えないんだ。

修さんの場合は、何か上手く理由を見つけて外に出たりするだろうし、凛君の場合は、妖怪に喧嘩を売りそうだし・・・・。

段々不安になって来て、僕は、偶々ポケットに入れていたケータイを握り締める。

もしかしたら通じるかもしれないと思ったけど、戦っている間だったらどうしようと思った。そもそも、凛君はケータイを持っているのかもわからないけど、一応かけてみる。

修さんの場合は、戦場に立つと思うけど、あんまり無謀なことはしないと思う。

でも、凛君は、かなり無茶をする性格だから、とても心配だったんだ。

僕は、ケータイを開くと、凛君のケータイに電話をかける。なぜか、番号を押している間、指が震えるのを感じた。

三回ぐらいコールがなってから、声が聞こえた。

「もしもし」

「誰・・・ですか？」

「俺は、戦闘種族族長の護衛の者だ。お前こそ何者だ」

「あっ、えっと・・・、凛君はどうしたんですか？」

僕がそう聞いた時、急に護衛の人が黙り込んでしまった為、僕は、自然と手を握り締めていた。

その手には汗が出てきた。なんだか・・・。

「族長は、死んだ・・・・」

「族長は死んだ・・・・」

その言葉を聞いた途端、ガタンッと大きな音を立てて立ち上がってしまった。

「えっ・・・・嘘ですよね？」

「実際のところはどうかわからない。ただ、辺りが火の海になっていて、そこに百五十二人の死体は見つかったが、族長と思われる死体だけが見つからなかった。だから、骨まで焼かれたんだろう」

「・・・・そんな」

その言葉を聞いて、自然と足から力が抜けて、ペタンと座り込む。

ケータイを握る手が震えて、ゴクリとつばを飲み込む。

冷や汗がたまらないほどに流れ出ていて、脱水症状を起こすんじゃないかと自分で思えるくらいに汗を掻いていた。

「ところで、お前は何者なんだ？」

「・・・・たっ、ただの・・・・」

喉がカラカラになって、それ以上の言葉が出て来ない。

しばらく無言が続くと、やがて向こうがしびれを切らしたようで、何も言わずに通話が切れてしまった。

でも、僕は、ケータイを耳に当てたまま、床に座り込んでいた。

立ち上がれない。

そもそも、立ち上がろうと言う気すら起こらず、頭が真っ白になって、石のように固まってしまったんだ。

しばらくした後、急に警報が鳴ったかと思ったら、冬眞が部屋に飛び込んで来て、動けない僕の腕を引いて部屋を飛び出す。

そして、やっと僕は正気に戻って、何があったのか、慌てて問いただす。

「なっ、何があったんですか？」

「砦に侵入者が入って来たんだ！」

「ぼっ、僕はこれからどこに連れて行かれるんですか？」

「とりあえず、安全な場所に連れて行かなきゃいけないんだが・・・。それには、一回外に出なけりゃいけないんだ」

「えっ・・・・・」

冬眞に言葉に、自然と顔が蒼ざめるのがわかった。

建物の中でさえこんなに苦しいのに、外になんか出たら、僕はどうなっちゃうんだろう・・・・？

「・・・・我慢出来るか？」

「そうしないと、安全な場所にいけないなら、行くしかないじゃないですか」

「・・・・だよな。おっし、なら、行くぞ！」

「えっ、もうですか・・・・？」

僕の言葉を聞かずに、冬眞は僕を引きずって行くと、地上に出てしまった。

僕は、自然と目を瞑って、息を止めたけれど、感覚でわかる。

地獄のような景色が目に浮かんで、とても目なんか開けられなかった。

僕は、目を瞑りながらケータイを取り出すと、修さんに電話する。

凛君であんなことがあったから、修さんも何かあるかもしれないと不安になったのだ。

「あっ、もしもし？」

「・・・・・」

電話が通じたと思って言葉を話すけれど、その途端ブツッと言う音がして、通話が切れてしまった。

「どうした？」

「・・・・切られてしまいました。どうしたんでしょうか？」

「お前、空気は平気なのか？」

「えっ・・・？」

そう言われた途端、驚いて目を開いてしまった。

そして、目を開いたことを悔やんだ。物凄い光景が脳裏に焼きついて、忘れられない。

その光景を見た途端、不意に体が熱くなって、今まで悪かった体調が、悪くなくなった。

「なっ、なんか・・・体調がよくなりました。外に出ても、全然平気です！」

「そう大声を出すな！」

冬眞に注意をされて、慌ててうなずいたけれど、今度は逆に、体が熱い。何が起こったのかわからないけれど、さっきの寒気よりは、熱い方がいい。

「でも、まぁ、体調がよくなったのはよかった」

「はい！よかったです！」

「・・・でも、顔が赤くないか？」

「はい、逆に熱いんですけどね」

僕がそう言った途端、冬眞がハッとした顔をした後、急いでどこかに連れて行く。

「なっ、なんですか？ここ、どこですか？」

「ここは城だ。魔王達はとっくに逃げたから、誰もいない」

「なんで、こんなところに連れて来たんですか？」

「ここなら安全だと思ったし、何より、誰にも見られない」

「・・・・は？」

僕は、冬眞の言葉の意味がわからなかった。なぜ、誰にも見られちゃいけないのか・・・・。

「覚醒するかもしれないだろ？」

「・・・・覚醒？」

「生き物は、最大で、三回覚醒することが出来る。ただ、滅多なことがない限り、覚醒をしない。ただ、お前の場合は、人間なのに魔界の空気などを吸い、違う世界に触れたことで、覚醒をするかもしれないと思ったんだ。覚醒する前に起こる状態異常として、意味のない体調不良。そして、次に体が熱くなる。こう来ると、大体の奴は覚醒するって気づく」

「なら、なんで誰にも見られない場所に連れて行くんですか？」

「覚醒した直後は、体力や色んなものが鈍ったり落ちたりするんだ。だから、覚醒したばかりだと言うことに気づかせないようにする為だ」

「・・・・僕、ちょっとトイレに行って来ます」

なんだかよくわからない言葉を沢山言われて、ため息をついてしまった。

お城の中のトイレの個室に入ると、壁に寄りかかってため息をつく。

覚醒のことは、昔勉強したけど、まさか、自分の身に起こることなんてないと思ってたんだ。だから、いざそう言われると、とても驚いたんだ。

しばらくしてから気持ちが落ち着いて、トイレから出てみるけれど、外で待っているはずの冬眞がいない。

「あれ？どこに行ったんですか？」

僕がそう言って後ろを向いた時、見慣れた姿を発見した。

「りっ、凛君！よかった。死んでなかったんですね！本当によかったです」

そう行った時、フッと風が通り過ぎて、僕の頬が切れた。

何が起こったのかわからないけれど、慌てて後ろを向くと、凛君が僕に刀を向けて来た。

「えっ・・・・？」

「お前が裏切ったんだ。殺されても、憎むなよ」

そう冷たく言い放たれ、凛君に襲い掛かられた。

その途端、僕の体から熱が引いた。今までの熱さが一瞬にして消え失せたんだ。

そして、死んだんだなって思った。

一人で城へ

「族長、何ボーッとしてるんですか？」
「・・・いや、何でもない。さっさと行くぞ」
「族長、一人で突っ込まないで下さいよ」
「わかってる」
「そう言いながらも、早々と俺達から離れようとしてるだろ？」

神羅の言葉に、思わずビクッとする。

・・・なぜ、俺の気持ちがわかったのだろうか？自然と体が引いていたのか？

「とりあえず、八番隊の一、二、三班は西側の大渓谷方面を行け！四、五、六班は、中央首都方面へ行け！七、八、九班は、東側の運河の方へ行け！残りの班は、また指示を出す。それまで、俺と一緒に族長を守れ！」

「はい！」

八番隊の連中が、威勢のいい返事をすると、速やかに移動をして行く。

ここで説明をして置くと、何番隊とか言っているだろう？その中でも、沢山の班に分かれているらしく、一部隊で百人近くいる。だから、何班かに分かれているんだろう。その中の一斑は、約二十人ぐらいだから・・・。

・・・説明していて意味がわからなくなって来た為、説明をやめ

ることにする。どうか許して欲しい。

「どう思う？」
「・・・・何が？」
「魔界の様子だ。このまま、魔界は壊れてしまう・・・・って、思わないか？」
「・・・・確かにな。魔界が悲鳴を上げているようだ。だが、一つわかることもある」

「何がわかるんだ！？」
「この争いは、無意味に繰り返されている。だから、きっと、何かがあるはずだ」
「きっとってなんだ？」
「・・・・」

そう聞かれてもわからない。ただ、この種族争いには、何かが関連しているはずだ。

しかし、一体それが何なのかがわからない。ただ、この魔界の様子は、どこかで見たことがあるような気がするのだ。それが一体・・・・？

「まぁ、とにかく、城に行こうぜ！」
「どうして？」
「城が一番安全なんだ。だから、城に行こう！」

「俺は、城になんか行かないぞ。戦うつもりなんだ」
「いやいや、族長さん、言いましたよね？『戦場に行かせてくれ！』って。『戦わせてくれ！』とは言わなかったじゃないか～」

神羅の言葉に、思わず黙り込む。

確かに、俺は、戦わせてくれとは言っていない。しかし、そんなのはズルイではないか。単なる子供の言い訳みたいだ。

「そんなの、ガキの言い訳だぞ？」

「この際、ガキの言い訳だろうがなんだろうが、どうだっていいんだ。族長を危険な目に合わせない為なら、なんだって使うさ。と言うことで、城に行きましょう！」

「・・・・チッ」

俺は舌打ちをして、仕方なく神羅の後について行く。

普段なら、ここまで素直に誰かの言うことを聞くことはないだろう。なら、なぜ、今回は素直に言うことを聞いたのか。

それは、今現在の魔界の様子だ。

もし、これが普通の状態ならば、神羅を振り切ってでも一人で行動しようとするが、こんな状態だ。素直に神羅の言うことを聞くしかない。

今の魔界の現状をよく知ってるのは俺でなく、神羅だ。なら、神羅の言うことを聞くしかない。

それに、城に何かを感じるんだ。だから、素直に言うことを聞いた。

「まぁ、族長も、バカじゃないですもんね！」

「ふんっ、人間界に帰ったら、お前のことなんか忘れられるんだろ

？」

「まっ、まあな。種族争いが終われば、俺は護衛として族長に付き添わなくて済むから、お別れだな」

「そうか。それならいい」

大きく息を吐いて、城への道のりを行く。

途中で襲われるのは当たり前だが、俺の周りを大勢の妖怪が取り囲んでいる為、俺は何もしなくても、勝手に倒してもらえる。

しかし、殺していると思うと、嫌になる。

殺さなくてもいいと思っても、狂命状態になった奴らは、自ら命の犠牲にしてでも、守るべき人を守りぬくから、あまり変わらないのだ。

その時に殺さなくても、他の奴が殺すかもしれない。もし、そいつが殺さなくても、いずれ力尽きる。

・・・こうなっては、死への連鎖は止まらないんだ。

ため息をつきながら歩いていると、目の前を歩いていた神羅にぶつかる。

「何だよ！」

「シーッ」

突然振り返って、口の前に指を立てる神羅を見て、自然と緊張が走った。

そして、自分も小声で話しかける。

「どうしたんだ？」

「なんか、物音がするんだ。今、一応数人の奴らが安全を確認してるんだが・・・・」

その時、突然、ガシャン！と言う音がしたかと思うと、上から何かが落ちて来た。しかも、俺の真上に。

「危ない！」

とっさに神羅に突き飛ばされて、俺は難を逃れたが、神羅が、落ちて来たものの下敷きになった。

「おいっ、大丈夫か！」

俺がそう言って近付いた時、上に乗っかっているものを見て驚いた。

「お前・・・どうしてこんなところに・・・・」

「あっ、修さん・・・・ごめんなさい」

「なっ！」

桜木は、そのまま目を瞑ってしまった。

俺は、何がどうなっているのかわからないまま、とにかく、桜木をどかし、下でつぶれている神羅に話しかける。

「おいっ、大丈夫か！？」

「・・・族長、俺はかろうじて生きてますぜ。ただ、ちょっと休憩が必要みたいだ。だから・・・・」

こっちも、そのまま気を失ってしまい、うろたえるが、慌てて指示を出す。

「神羅を直ちに砦に連れて行って、看病しろ。後、こいつも頼む！」

「しかし、族長・・・こいつは確か、転生種族の族長じゃ・・・・・」

「今はそんなこと言ってられる場合か！」

「はっはい、了解しました。しかし、族長はいずこへ？」

「お前らは、そいつらを守ることを最優先にしろ。俺は、城の中に入って、何が起こっているのか確認をして来る」

「それなら、我々も・・・・」

「お前らは来なくていい。俺一人で行く」

「しかし・・・・」

そう言うみなのことを、一人の妖怪が手で制した。きっと、班長か何かだろう。

「わかりました、族長様。我々は、この者達を安全に砦に連れて行くことに専念します」

そう告げる妖怪に、数人の妖怪が抗議の声を上げるが、そいつに睨まれて、黙り込む。

「ああ、話がわかる奴が一人でもいてよかった」

そのまま歩いていこうとしたが、そいつに呼び止められる。

「しかし、族長様。一つお願いがあります」

「・・・・なんだ?」

「必ず、生きて帰って来て下さい。出ないと、私の首が飛びます」

そう言われて、自然と微笑みが浮かぶ。

そして、無言で手を上げると、そのまま城の中に入った。

何かを答えるなんて出来ない。あの笑みだって、余裕の笑みと思った奴は何人もいるだろうが、俺は、この城に入った時点で、絶対何かがあると確信があったのだ。

だから、はっきり言うと、怯えていた。

しかし、みなにその素振りを見せることが出来ずに、笑みを浮かべたのだ。

何があるのかわからない。しかし、何かがある。そう、俺の勘は言っているのだ。

対峙、そして再び闇の底へ

城の中に入ると、その異様な空気に思わず足を止めた。

なんとも言えないけれど、なんだか、外の空気よりも悪い気がする。

ため息をついて、やはり、一人で来なければよかったかと思ったが、その考えを振り切る。

俺は、自分の身は自分で守れる。だが、今のあいつらは、自分の身を自分で守ることが出来ない。だから、いいんだ。

いや、何がいいんだ?・・・・わからなくなって来た。

どうやら、空気に汚染されて、頭までおかしくなったらしい。

ため息をついて城の中を歩いていると、不意に、目の前の四つ角から殺気を感じて、自然と壁に身を寄せると、大きく息を吐いた。

そして、烈火闘刃を握り直すと、壁から出て、鞘から烈火闘刃を抜き、中段に構えて、相手を見据える。

しかし、相手を見た途端、思わず顔が引きつった。

「お前・・・・何やってるんだよ?」

「・・・・関係ない。邪魔をするな。裏切り者」

「なっ!?」

躊躇いもなく襲われ、思わず怯んで、刀が頬を掠める。

「何すんだ！」
「答える必要はない」

その時、フッと思い当たる節があった。あの時は桜木に襲われたが、今は、凛と言うことなのではないのか？と。

「もしかして、お前が桜木をやったのか？」
「・・・・フン、知らん。あいつは裏切り者だからな」
「あいつが何を裏切ったって言うんだ！」

俺がそう聞いても、もう、凛は何も答えずに、俺のことを襲って来る。

いつもの凛と全く違い、容赦がない。何より、刀を振るうことに躊躇いが見えず、凛の本気を受けているようだった。

それにしても、物凄く強い。俺だって、そこまで弱い方ではない。いや、むしろ、強い方の部類に入るぐらいだが、凛は、そんな俺では手の届かないぐらい遠い場所にいる。

攻撃をすることなんか全く出来なくて、防御をしているのが精一杯だった。

「なんだ。攻撃をして来ないのか？」
「・・・・」

俺は、無言で息をする。

思い切り息が上がっていて、しゃべれるどころではない。それなの

に、凛は、全く息が上がっておらず、余裕そうだ。

きっと、空気に汚染されているのも、異常に疲れたりする理由の一つになっているのだろう。

いつも、勘を頼りに攻撃の先を読んでいるのだが、それが出来ないのだ。だから、瞬時に見て、避けるしかない。

俺はいつも、勘で攻撃を避けているから、それは、結構きついことなのだ。

肩で大きく息を吐きながらも、凛には絶対に攻撃をしないと決めていた。血迷ったって、仲間を傷つけるようなことはしないと決めたんだ。

その時、不意に後ろに回られて、思い切り背中を蹴られる。

「クッ・・・・」

そのまま吹っ飛ばされるが、なんとか体制を立て直し、次に来た攻撃を止める。

しかし、そのまま回し蹴りをしようとする為、何とか横に転がって場所を移動すると、二、三歩後ろに下がって構える。

でも、そんな動作も無駄で、直ぐに攻撃をしかけて来る為、なんとか刀で攻撃を抑える。

「お前・・・・ほんとに強いな」

「言っておくけど、まだ、本気のこれっぽっちも出してないけど」

そう言われて、凛の底力が物凄く恐ろしく思える。

確かに、今のところ、体術しか使って来ない。だから、本気なんて出していないのだろうが、俺は、既にかなり息が上がっている。

・・・こいつが本気で俺を襲っていたら、きっと、一溜まりもないだろうな。

「・・・・・」

「そんな顔をするな。直ぐに地獄に送ってやる」

そう言われたかと思うと、冥道を開かれて、そこに突っ込まれそうになる。

何とかそれを避けたが、変な体勢で避けた為、足をくじいてしまった。しかし、何とか顔をゆがめるだけで、声を上げずに立ち上がる。

足がズキズキと痛み、動きが今以上に鈍るが、何が一番危険って、凛に俺の足の具合が悪いと言うことがバレると言うことだ。そんなことがあったら、今の凛は、絶対にそこを突いて来る。

今の凛は、いつもの凛じゃない。温厚でも優しさもない、ただの狂人と化した化け物だ。

しかし、俺の勘は鈍る一方だが、凛の勘は冴え渡っているようだ。

「お前、足に怪我をしてるな?」

「・・・・チッ」

「いつもの運動不足が祟っているんだな」

「ふざけるなよ。運動不足なんかじゃない」
「なら、なんなんだよ、そのざま。ボロボロじゃないか。昔の殺し屋の頃のお前の方が、いい戦いが出来たと思うぜ。でも、もうお前に用はない。地獄へ行け」

そう言われた途端、腹に痛みが走ったかと思うと、ポッカリと口を開けている冥道の穴へと落ちて行った。

俺が入ると、穴が閉じられたのが確認出来たが、それ以降の記憶はなくなっていた。

腹に衝撃を受けて、気を失ったんだろうな、きっと。

「・・・あっ、あれ？」

僕が、ゆっくりと目を開けると、一番最初に見えたのは、僕の顔を覗きこんでいる大勢の人の顔だった。

「うわぁっっ！！！？」

僕はとても驚いて、とっさに顔を布団で隠す。

すると、僕の叫びに驚いたようで、向こうもガシャンッとか、ドタドタッとかいろんな音がして喚いているから、驚いたんだろう。

僕は、しばらく布団に潜っていたが、騒ぎが落ち着いてから、再びゆっくりと辺りの様子を伺う。

すると、さっきと同じような光景が映ったけど、知っていたから、驚かなかった。

しばらくキョロキョロしていると、一人の妖怪が走って行って、誰かともめているようだったが、しばらくしたらその声が止んで、歩いて来る音が聞こえた。

「おっ、お前が俺の真上に落っこちて来た奴だな！」
「神羅さん！？」
「おおっ、覚えててくれたんだな」
「あれ？と言うことは、ここはどこですか？」
「ここは、頭脳種族の砦だ」

そうサラッと言われて、自然と顔が蒼ざめるのがわかった。

と言うことは、僕は、敵陣のド真ん中にいると言うことだ。

でも、どうして・・・・？

「と言うことは、皆さん、僕の敵ですよね？それなのにどうして？」

すると、神羅さんを連れて来た妖怪が、気に食わなさそうに言った。

「族長様の命令だからな。お前らを砦に連れ帰って、看病しろと言うことだ」
「修さんはどうしたんですか？」

「そう言えば、族長はどうしたんだ？」

僕に続いて聞く神羅さんの顔を見て、みなが凍りついたように黙り込む。そして、自然と嫌な予感がする。

「お前ら、族長を一人にしたんじゃないだろうな？」

「・・・・すいません、神羅さん、族長様がどうしてもと言うので・・・・」

「お前ら、何やってんだよ！あの人は、人がいないと無茶ばっかりするんだぞ！一人にするなっつったろ！！」

そう言うと、神羅さんは部屋から出て行こうとするけれど、頭を押さえてしゃがんでしまった。

そう言えば、さっき神羅さんが、「俺の上に落ちて来た」と言っていた。それって、僕が怪我をさせたってこと？

「あの・・・・その怪我って、僕が？」

「まぁ、お前と言うか、実は、お前が落ちて来たのは族長の上だったんだが、俺がそれをかばって、下敷きになったと言うか・・・・」

「すっ、すみません！」

「ああ、気にすんな。大した怪我じゃないからよ」

そう言って立ち上がる神羅さんだけども、頭には包帯をグルグルに巻いており、服の隙間から見えた体には、包帯がグルグルに巻かれていた。

とても、大丈夫と言える体じゃない。

「神羅さん、そんなに無茶をしないで下さい。骨だって折れてる状

態ですし、手術をしたばかりで、今さっき麻酔から目覚めたばかりじゃないですか」

「えっ・・・・・」

その言葉が、僕の心に突き刺さる。

どうしよう?って思う。修さんの護衛の人に、思い切り怪我をさせてしまった。それに、もし、この人が躊躇っていたら、修さんに怪我をさせていたところだったんだ・・・・。

僕の表情を見てか、神羅さんが力なく笑う。

「大丈夫だ。お前のせいじゃない。話を聞くと、お前も俺を踏んだ後、気絶したらしいな。だから、わざとじゃないとわかる。それに、落ちて来た時、窓を破って飛んで来たから、誰かに吹っ飛ばされたんだろうとわかった」

そう言われて、今まで忘れていたことを思い出した。

「そうだ!僕、凛君に襲われて、そのまま意識を失ったんです!」

「そうか。お前を襲ったそいつは、滅茶苦茶強いのか?」

「・・・・はい、修さんもかなり強い方ですが、凛君は、なんせ、戦闘種族の族長ですからね。比べ物にならないぐらい強いと思います」

そう言う僕の言葉を聞いて、周りにいた妖怪達の顔が歪む。

それを察知したのか、神羅さんがため息をついて立ち上がると、フラフラしながら歩き出す。

「神羅さん、どこへ？」
「決まってんだろ？族長のところに行くんだ」
「しかし、まだお体が・・・・」

「お前らが、族長を一人で行かすようなことをしなければ、俺だって、ここまで無理をすることもなかったんだ。そう考えろ」
「あっ、あの、僕も行きます！」
「・・・・ああ、わかった。ついて来い」

神羅さんはそれだけ言うと、今にも倒れそうなくらいフラフラしているのに、部屋の外に出て行ってしまった。

僕は、慌ててベットから出ると、立ち尽くしている妖怪達の間をすり抜けて、出て行った神羅さんの後を追った。

最悪な事態が起こってないといいけど・・・・。

種族争いの意味

「ん？」

ゆっくりと目を開けると、そこは、天国のような場所ではなく、普通の野原だった。

おかしいと思いながら立ち上がると、突然声が聞こえて来た。

【助けて下さい】

「誰だ！？」

【私は魔界の神、魔光霊命です】

「魔界の神様が、俺なんかに何の用だ？」

【今の魔界は、悲鳴を上げています。それを助けて下さい】

「そう突然言われても・・・・」

【今あなた達が見ている現実は、全て幻想なのです】

「？」

思わず眉をひそめる。何を言ってるんだ？こいつは？と思ったのだ。

【この種族争いとは、負の連鎖が折り重なったことを言うのです】

「・・・・は？」

【種族争いと言うのは、実際、起こっていません。ただ、皆が幻の戦いによって争う為、多くの犠牲者が出るのです。実際は、種族争いなど起こっていない。それなのに、神々が幻を見せる霧を魔界に出現させたので、戦いを始める。お互い、それぞれ別の幻を見て、戦うんです】

「しかし、なぜ、神はそんな霧を魔界に出現させたんだ?」
【それは・・・・】
そこで、魔光霊命が言葉を切る。何か嫌な予感がして、自然と大きく息を吐いた。
【神々は、時に悲しいことをします。その一つとして、種族争いがあります。これは、神々にとっては娯楽の一つなのです。どの族が勝つのかを賭けて、楽しんでいるのです。私は、魔界の神として、それをやめさせようとしましたが、楽しんでいる神々にとっては私は邪魔な存在なのです。だから、閉じ込められてしまったのです。どうか、神々の欲望をあなたの技で無くし、私を助けに来て下さい。そうすれば、魔界を元に戻すことが出来ます】
「・・・お前を助ければ、死んだ奴を助けることが出来るのか?」
俺の問いに、魔光霊命は答えない。
・・・やっぱりな。
「わかってるさ、いくら魔界の神と言ったって、そこまで器用なことは出来ないよな?」
【・・・それでは、無理ですか?】
「何がだ?」
【今の魔界を助けることを拒みますか?私を助けることを、嫌がりますか?】
「・・・フンッ、もう、死んでしまった奴らは助からないが、このまま戦争を続けても無駄なだけだ。拒む訳ないだろう」

【それなら！】
「ただ、その賭け事をしている神の安全は、わからないからな」

【やめて下さい！いくらあなたが強いと言っても、相手は神なのです！いくら最低でも、神なのです！楯突くのはやめて下さい！あなたに死んでほしくありません】

魔光霊命の言葉に、思わずため息をついて、その場に座る。

全く、神って奴は。これだから嫌いなんだ。

世界の主権を握っているからと言って、好き勝手にやりやがって。
だから、尊敬なんかしたくない。

しかし、力を持っているのは確かだ。一応神だからな。

・・・理不尽な話だ。

「俺は、神だろうが何だろうが、気に食わない奴は気に食わない。だから、お前には関係ない」
【しかし・・・・】
「話がそれだけなら、早く、その神のところに連れて行ってくれ」

【それは出来ません。今の私は、独房に閉じ込められている状態です。ここは、神を閉じ込める独房なので、私の力も使えず、今も、後もう少しで通信が・・・・】

その時、突然ガタガタッと言う音がして、魔光霊命の悲鳴が聞こえた後、何も聞こえなくなった。

立ち上がって空を見上げるけれど、もう、魔光霊命の声が聞こえることはなかった。

ため息をついて下を向いた時、不意に頭に何かが落ちて来て、思わず舌打ちをする。

大きいものではないが、結構固くて、痛かったのだ。

何が落ちて来たのかと思って、探してみるが、中々見つからない。結構小さいことはわかっていた。しかも、頭に落ちて、どこに飛んで行ったのかわからない。

しばらく探して、やっと見つけたが、それは、なんだか笛みたいなものだった。

しかし、吹いてみたが、音が出る訳でもなく、スーッと言う変な音しか出なかった。

だが、俺は何となくわかった。これは、魔光霊命がくれたものだと。だから、何かに使えるのだろうと思い、その笛をポケットに入れると、どこだかわからない草原を歩き出したのだが・・・・。

そもそも、ここってどこなんだよ？

そう思い、足を止める。

確か、俺は、凛に冥道に蹴り込まれ、そのまま意識を失い、目が覚めたらここにいたんだ。しかし、ここがどこなのか・・・・。

ため息をついて一歩を踏み出した時、突然地面がグニャリと柔らか

くなって、体がズブズブと地面に沈んで行く。

何が起こったのかわからないが、物凄く気持ち悪い。なんせ、体が地面に沈んでいくんだぞ?まるで、沼に沈んで行くようだ。

しかし、そんなのどうだっていい!

俺は、必死でもがいたが、やがて、顔まで沈んでしまって、何も見えなくなった。

「神羅さん!無茶しないで下さい!」

「あっ、ああ。大丈夫だ。気にしないでくれ」

そう言って無理に笑う神羅さんは、とても大丈夫そうには見えない。

「あの・・・もしよかったら、僕が肩を貸しますから、無理しないで下さい」

「ああ、悪いな。でも、急がないと族長が・・・」

「大丈夫ですよ。修さん、約束したんですよね?必ず帰って来るって。それなら大丈夫ですよ!修さんは強い方です!」

僕がそう言うと、神羅さんはため息をついた。なぜだかわからないけど、表情が悲しそうだ。

「お前は、族長のことを信頼してるんだな」
「えっ、そんなことないですよ！・・・・って訳でもないんですけど、神羅さんの方が、信頼していると思いますよ？」

「いやいや、俺は、族長を信頼してると言っても、ピンチの時だとパニックになっちまう。そうなると、自分が族長を信頼してないんだなぁ～って実感するんだ」
「・・・・確かに、そう思うのもわかりますけど、信頼するのと心配するのは違うと思いますよ？」

僕がそう言った時、不意に肩に掛かる力が強くなって、思わず顔を歪める。

肩を貸すと言ったら、神羅さんは素直に僕の肩を借りて来たんだけど、不意に僕の方に体重がかかって来たから、重くなっちゃったんだ。

神羅さんは、結構体が大きい方だから、そんなに太ってはいないんだけど、むしろ痩せてる方なんだけど、重い！

少なくとも、僕よりは絶対重い。そして僕は、自分の体以上に重い物を持ち上げられない。

僕は、何とか顔を歪めながら神羅さんの方を向くと、なんと！目を瞑っていた。そして、寝息まで聞こえる！？

「しっ、神羅さん！起きて下さい。重いです！」

どうやったらこんな状況で眠れるんだろうって思うけど、今はそん

なことよりも、体重が重い！

眠っていない時は意識があるから、自分でちゃんと歩いてくれるけど、今は眠っちゃってるから、僕に全体重がかかって、引きずっているような状態なんだ。

このままじゃ、僕が持たない！

「起きて下さい！」

耳元で悲痛な叫びをすると、やっと目を開いてくれた。

「おっ、ああ、悪いな」

やっと僕にかかる体重は軽減されたけれど、体中が悲鳴を上げている。それぐらいキツかったんだ。

「今、どこにいる？」
「後もう少しで城に着きます」
「そうか、なら、もう一眠り・・・・」
「やめて下さい！お願いします！」

「嘘だよ～。本気にしなくていいと思うよ。さて、ありがとな。もう一人で歩けるぜ」
「だっ、大丈夫ですよ、僕に気を使っているんなら・・・・」
「いやいや、そう言う訳じゃない。本当に大丈夫なんだ」

そう言う神羅さんの笑顔は、さっきの弱々しいものとは違い、元気そのものだったので、僕はホッとした。

それにしても、さっきまで死にそうなぐらいだったのに、どうしてこんなに急に元気になったのかな?もしかして、さっきの数秒の睡眠で治ったとか・・・・。

いや、さすがにそれはないよね、それが出来たら、化け物だもん。

「おっし、行くか!」
「はい、頑張りましょう!」

僕らは、目の前に立っている城を見ると、ため息をついた。

何か嫌な予感が物凄くするんだ。だけど、それが怖くて立ち止まっていられない。だから、ため息が出ちゃったんだろうね。

神域

「全く、なんなんだ！」

イライラしながらびしょぬれの体を振るわせる。やっぱり、ここは動物性が出てしまう。誰もいなかったりすると、体を震わせて水を飛ばしてしまうのだ。

前に湖に落ちた時にそうしてしまって、変な奴を見る目で見られた為、気をつけていたんだ。しかし、今は誰の気配も感じない為、ついやってしまったのだ。

さて、まずは何が起こったのかと言うと、あの意味不明な草原を歩いていると、地面に飲まれて行き、何も見えなくなったのだが、突然足が宙に浮いたかと思ったら、体まで全て宙に出て、顔が外に出た時、自分がでかい湖の上に落ちてるんだなって知った。

しかし、その時になってはもう抵抗の仕様のない高さまで来ていて、うむを言わさずに落下したと言う訳だ。

ため息をつきながら、湖から陸に上がった時、何かの気配を感じて、俺は直ぐ近くの樹に身を潜めた。

息を止めて、自分の気配を殺しながら、近寄って来る足音の持ち主が気になり、そっと覗いてみた。

「どうした？」

「いや・・・聖なる泉に何かが落ちる音がしたんだ」

「そんな訳ないだろ？神域の中でも、もっとも聖なる力が強い場所

だ。誰も踏み入ることはしないだろう。例え、そんな無礼な者がいるとしても、幸明様が正体を突き止めて、抹殺するだろう。大丈夫だ。気にすることはない」

「そうだな。よく思えば、カンテスの湖は聖なる者しか受け付けない。例え入っても、害のない者なのだろう」

そう言う話が聞こえた後、足音が遠退いた為、俺はゆっくりと息を吐いて、そのまま奴らの後について行く。

それにしても、奴らの風体は変わっていた。なんだか、白色を基準とした色使いの、長めな服をまとっている。あれは、ローブと言うのか？

そして何より、あいつらの気が不思議に思ったのだ。

人間のように何も感じない訳ではないが、妖怪のような気を感じる訳ではない。妖怪の気とは違う気をまとっているのだ。

それにしても、奴らの言っていた言葉が気になる。確か、神域とか言っていた。

・・・神域？

その時、急に後をつけていた奴が振り向いた為、慌てて茂みに隠れる。

そして、答えを出した。

ここは、神の住む世界なんじゃないのかと思った。神域って、そん

な意味じゃなかったか？

それだったら話がわかる。神だったら、妖怪とは違う力を持ってい て当たり前だ。そして、その異様な風体にも話がつく。

「どうやら、後ろから誰かに付けられているような気がするんだが・ ・・・」

「そうか？私は何も感じないぞ？」

「いやいや、絶対そんなことはないぞ。なんだか、我々とは違う気 を持つ者の気配を感じるぞ」

「そんなことある訳ないだろ？神域は、我々神に仕える者と、神し か入ることが出来ない。もし入ることが出来たとしても、その時点 で幸明様にバレてしまうだろう」

「だよな」

そんな話をしながら、目の前の大きな門のインターホンを押した。

いや、インターホンとは言わないんだろうが、俺が知っている言葉 では、インターホンが一番近かったのだ。

そもそも、名前は違っても、意味は同じものだろう。なら、そんな のはどうでもいい。

しばらくすると、大きな門が開かれて、そいつらは中に入って行く。

俺も、慌てて茂みから出ると、その門の中に入って行った。

なぜ、こいつらについて行くのかはわからないが、こいつらについ て行けば、何かがわかる気がしたんだ。何も知らない世界で一人で

動くよりも、少なくともこの世界のことを俺よりも知っている奴らの後について行った方がいいと思ったんだ。

門の中に入って一番最初に見えたのは、屋敷とか言うのではなく、大きなドームだった。

まさかとは思ったけれど、つけている奴らがその中に入って行く為、俺も中に入ったのだが・・・・。

「そこの者、しばし待たれよ」

そう呼び止められて、慌てて止まる。こいつらの気と俺の気が違うのは、いくら鈍感な奴でも気づくはずだ。そして、服装も違うのだから・・・・。

「なぜ、そのような風体をしているのだ?」

「・・・・」

「怪しい奴だな。少しこっちに来い」

俺は、仕方なくそいつに従う。下手に抵抗して困るのは俺なんだ。相手の強さがわからない以上、下手に抵抗するのはよした方がいいと思う。

そいつに連れられて入った部屋は、なんと言うか・・・・拷問部屋みたいな雰囲気が漂っている、いかにもマズそうな感じの部屋だ。

その部屋の真ん中に、俺の知っている警察官の服装をした奴がいて、俺のことを見ると、何か変な機械で俺の検査を始めた。

何をされているのかわからないが、とりあえず、まだ抵抗をしない。

本当にマズそうになったら、暴れればいい。

一分ぐらい、俺の体全体にその機械を当てた後、何かボタンを押した。

すると、その警察官が驚いた顔をして、慌てて俺の横に立って、しっかりと腕を?んでいる奴の方にその機械を見せる。

すると、俺のことを今まで物凄い力で?んでいたそいつの手から力が抜けて、慌てて俺の目の前に回り込むと、勢いよく謝り出した。

「申し訳ございません!」

「・・・・何がだ?」

「私としたことが、上級神者様の腕を?み、風体が異様だからと言って、このような貧相な場所に連れ込んでしまいまして・・・・本当に申し訳ありません!」

「いや、別にいいんだが。それより・・・・」

俺が、そいつに上級神者と言うものの意味を聞こうとした途端、勢いよくそれを遮られる。

「ありがとうございます!しかし、このままでは私の面目が立ちません。どうか、付添い人にしていただけないでしょうか!」

「あ・・・・ああ」

「ありがとうございます!それでは早速、お召し物をご用意します。そのままの格好では、上級神者様とは思えませんので、私のような無礼者が出る可能性がございます。ですから、是非、着替えることをお勧めいたします」

「ああ。じゃあ、そうしてくれ」

俺がそう言うと、そいつは足早に去って行った。

俺は、仕方なく、残された警察官に話しかける。

「どうして俺は、その、『上級神者』とかに分類されるんだ？そもそも、この世界はどうなってるんだ？全てを詳しく教えろ」

俺の、あまりにも不自然な質問に、その警察官は顔色を変えることもなく話し出した。

今さっきの様子とは、全くの正反対だ。

「この世界は、神域と言います。神域とは、その名の通り、我々のような神に仕える者、そして、神のみが住む場所でございます。当然、他の世界に住まう者・・・・例えば、人間界に住む人間や、魔界に住む妖怪などは、神域に入ることが出来ません。なので、この世界にいるのは、全て神や、神に仕える者だけと言っても過言ではないと思います。

そして、我々神に仕える者は、本当の神になるべく、現在の神である人に仕えるのです。そして、その人に認めていただければ、無事、初級神者になれると言う訳です。そして、初級神者の者は中級神者の者に。中級神者の者は、上級神者様に認められるのです。

そして、一番偉いのが、上級神者様と言うことになるのですが、上級神者様以上になるには、今現在、神として世界を守っていらっしゃる方に認めてもらう必要がございます。認めていただければ、最も位が高い特級神者様になれると言うことでございます」

俺はその説明を聞いて、俺は、物凄く偉い奴の一歩手前にいると言うことなのだとわかった。それなら、あの慌て振りもわかる気がする。

「しかし、その特級神者様の中でも偉いお方が決まっており、一番下は、草花や生き物を君臨する神。その中でも沢山いるのですが、省かせていただきます。

上から三番目に偉いのは、人間界を守る神、遥光様。

二番目に偉いのは、魔界を守る神、魔光霊命様。

そして、神の中でも一番頂点に立っているのが、神域の秩序を守る神、幸明様と言う訳でございます」

「なるほど、大体わかった。ありがとう」

俺はさっさとお礼を言うと、警察官から離れて考え込む。

と言うことは、魔光霊命を閉じ込めているのは幸明の指示と言うことになる。

それにしても、魔光霊命が二番目に偉いなんて知らなかった。まさか、あいつがそうとは思わなかった。

しかし今は、とりあえず、魔光霊命を助けることを優先しなければならない。

こうしている間にも、魔界は崩れているんだ。

ラスボス登場か・・・・

俺はため息をつくと、その場から出ようとした。

すると、出て行ったはずのさっきの奴が戻って来た。その手には、俺が見た奴らの姿と似たような服があった。

「これを着ろと言うのか？」

「はい、大丈夫です。ちゃんと、上級神者様用のお洋服でございます」

「いや、そう言う問題じゃないのだが・・・・」

「なにかご不満でもございますか？可能な限りは最善を尽くしたいと思いますが・・・・」

俺はため息をつくと、手渡された服を眺める。

真っ白のローブに、金色の腕輪と、なぜか、ゴムがある。

「なぜ、ゴムなんか渡すんだ？」

「髪がとても長かったので、結んだ方がよろしいかと思いまして・・・・」

再び重いため息をつくと、トイレに行って、着替えてみる。が・・・・。

「どうみたって、変だ」

俺は、鏡に映っている自分の姿を見て、思わずため息をついた。

白いローブのようなものは眩し過ぎて、目が眩みそうだし、金の腕輪だって、でか過ぎて、手を上に上げれば肩の方にずり落ちて来る。

そして何より、髪だ。こんな格好をしているのに、髪を一つに結んでいる。なんだか変な気分だ。

ため息をつきながら鏡を見ていると、服を持って来た奴がトイレに入って来て、俺の姿を見て手を叩く。

「とてもお似合いです！・・・・っと、あの・・・・お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「亜修羅だ」

「それは、とてもお似合いのいい名前でございますね。それでは亜修羅様、この場所に何の御用で？」

そう問われ、思わず体が反応する。

ここがどんな場所かも知らない。それなのに、そんなことを問われても・・・・。

「ここは、そもそもどこなんだ？」

「ここは、賭け事をする為専用に作られたドームでございます」

「なぜ、賭け事にそんな大きなドームを使う必要がある？」

「ここでは、神域での一大イベント、種族争いを生中継しているのです。・・・・説明だけではわかりずらいと思うので、是非ご覧下さい」

「お前、名前は？」

「私は、音恩と言います。どうぞこちらへ」

そう言って、音恩は扉を開いた。

俺は、本当は見たくもなかった。しかし、勧められているので、中に入らないと変だと感づかれてしまう為、俺は仕方なく扉の中に入った。

すると、今まで全く聞こえなかった大勢の歓声が聞こえて、思わず耳を塞ぐ。

そのまま目線を上げると、とても大きなスクリーンに妖怪達が映って、戦っているのがわかる。

その映像を見て、大勢の観客が騒ぎ立てているのだ。

「こんなことをして、何が楽しいんだ?殺し合いを見ていて・・・・」

「私にも、よくはわかりません。しかし、幸明様のご命令なので、我々も逆らうことが出来ずに・・・・。現に、魔界の神、魔光霊命様は、魔界を守る為に、幸明様に異議を申し立てましたが・・・・独房に閉じ込められてしまいました・・・・。そのことを知った皆は、嫌が応でも、幸明様に従わざる負えません」

「・・・・そうだな」

その説明を聞いて、思わずため息が出てしまう。

悪いのは、神の世界で一番偉い奴。魔界で言えば、魔王だ。面倒なことになったぞ・・・・。

「亜修羅様、よろしければ、ＶＩＰ席でご覧になられますか？」
「なんだ？そこは？」
「ＶＩＰ席とは、上級神者様のごく一部と、特級神者様だけがご利用になられる特等席でございます。亜修羅様は、その条件に当てはめられている為、ＶＩＰ席にご案内出来ますが、どういたしましょうか？」
「そこには、幸明はいるのか？」
「ええ、幸明様もいらっしゃいます」
それを聞いて、自然と大きく息を吐いた。
ゲームに例えればラスボスに匹敵する奴だ。まさか、こんなところで出て来るとは思わなかった。
「そうなのか？」
「はい、どういたしましょうか？」
「連れて行ってくれ」
「わかりました。では、こちらへ」
すると、近くにあった上り階段を上って行く為、俺も後についていく。
どうやら、他の連中にはこの階段は見えていないらしく、俺が階段を上っているのすらわからないようだし、階段の前に来ても、上って来ようとしない。
物凄くおかしいと思う。多分、特殊なバリアか何かを張ってあるんだろうが、それは、初級、中級神者には見えない。それなのに俺は、

神でもないのに見えている。明らかにおかしい。

しかし、そう思っている間に、エレベーターが見えた為、そのエレベーターに乗り込む。

「ＶＩＰ席は、八階にあるんです」

「・・ああ」

別に言わなくてもいいことを一々言うなんて、なんか変だ。

「そう言えば・・・姿を消した、頭脳種族の族長の名前も亜修羅様と同じ名前でしたね」

そう言われて、自然と体が反応する。

音恩は、俺に背を向けているから表情は見えないが、それが不意に言ったのではなく、故意に言ったような感じがしてならなかった。

自然と殺気立っていると、そんな気配に気づいた音恩が、振り返って笑顔を浮かべた。

「亜修羅様、どういたしましたか？」

「いや・・・・」

俺は、顔が引きつるのを感じた。

こいつ・・・何かがある。

今さっきの微笑みの裏に見えた不思議な気は、今まで沢山感じて来た気とは違うとわかった。しかし、妖怪ではない。

一体こいつは何者なんだ？

「さて、着きましたよ、亜修羅様」
「・・・お前、何者だ？」
「何者って・・・ただの警備員ですよ」
「お前・・・・」

俺の引きつった顔とは違い、そいつは相変わらず余裕の笑みを浮かべている。

こいつ、絶対に何かを隠しているはずだ・・・いや、こいつはまさか・・・。

「お前、幸明か？」
「・・・気づきましたか、頭脳種族族長の妖狐亜修羅さん」
「いつから俺に気づいてたんだ」

「まぁ、最初から気づいていましたよ。私は、どこでも見てますからね、カンテスの湖に落ちたのもあなたでしょう？」

さっきまでの雰囲気とは全く変わって、今では物凄く上から目線だ。

しかし、最初から気づいていた。

こいつは、他の奴と何かが違うとわかっていたのだ。しかし、まさか、幸明とは思っていなかったがな。

「まさか、ここでラスボス登場とはな」

「ええ、あなたの気を感じて、それが魔光霊命のものだとわかりました。ですから、魔光霊命に頼まれて、神域に踏み込んで来たと言う訳でしょう。ですが・・・我々の娯楽の邪魔をする者は、絶対に許しませんよ」

「お前！」

とっさに殴りかかろうとするが、体が何人かに押さえつけられたように、全く動かない。

「無駄ですよ。私を襲うには、あなたの力は弱過ぎます。それでは、素直について来ていただきましょうか」

俺の体は、完全にこいつに支配されている。

本当は、殴りかかりたいぐらいだが、素直に幸明の言うことを聞いている。

「そんなに怖い顔をしないで下さいよ。私は、みなの楽しみを守る為に働いている。そんな善良な神を睨みつけるなんて、ぶしつけな妖怪ですね」

「クッ・・・・」

「とりあえず、牢屋にぶち込まれておいて下さい」

そう言われた途端、今まで周りに誰もいなかったのだが、急に腕をがっしりと?まれて、幸明から引き離されて行く。

物凄く悔しかった。目の前にいると言うのに、傷すら負わせられないなんて・・・・。

そして何より、音恩が幸明だと言うことにもっと早く気づかない自分が情けなかった。

羽交い絞めにされたまま、地下に連れて行かれ、暗い牢屋に閉じ込められた。

せっかく神域に来たと言うのに、どうすればいいんだ・・・・。

「城の中、全く人気がないな」
「そうですね、おかしいぐらいです」
「ここに、族長は本当にいるのか？」

「僕に聞かないで下さいよ！」
「そんなにきつく言うなよ」
「でも・・・・僕にも色々あって・・・・・」

「色々あるようには見えないけどな。そもそも・・・・ここに危険な妖怪がいるんじゃなかったのか？」
「・・・・はい、ここにいるはずなんですが・・・・・」

僕らは今、城の中にいて、凛君を探している。凛君を見つければ、修さんも見つかるかもしれないからだ。

「あっ・・・・」
「ん？どうした？」
「凛君がいます！」

「あいつか？」
「ええ、戦闘種族の族長の子です」

・・・・あれ？

僕らは今、凛君に見つからないように、影から凛君を見つけたんだけど、なんだか様子がおかしい。

キョロキョロと辺りを窺っているから、どうしたのかな？と思っていると、不意に振り返ったから、神羅さんに腕を引っ張られて壁に隠れるけど、見つかってしまったようで、こっちに近寄って来た。

「あっ、よかった！二人がいたのかぁ～、なんか、気配感じるなぁ～って思って。よかった～」
「お前、よくそんな顔でこいつの前に来れるな」

「えっ、どうしたの？二人とも、表情が冴えないけど・・・・それに、桜っち、怪我してない？」
「お前がこいつを・・・・」

僕は、とっさに神羅さんの口を塞いで、続きを話させないようにする。

なんでかって、僕にもさっぱりわからない。でも、今の凛君は、あの時の凛君じゃない。なら、それを知ったら傷つくに決まってる。

だから、言わせたくなかった。

「神羅さん、ちょっと来て下さい」

僕は、神羅さんの腕を引きずって、凛君から離したところで小声で話す。

「お前、いいのかよ？いつあいつに襲われるかわからないだろ？」

「それでも・・・・今の凛君はまともな凛君です。だから、言って欲しくないです」

「でも！」

「二人とも、何やってるの！」

凛君が向こうの方で呼んでいる為、僕は、凛君の方に近づいて行こうとした。それを、神羅さんが止める。

「お前がいくら止めようが、俺は言うぞ」

「絶対に言うなよ。言ったら・・・・」

僕の殺気に気づいてか、神羅さんが今までの勢いをなくして、ゴクリとつばを飲み込んだ。

「どうなるか、わかってますね♪」

「おっ、おう・・・・」

僕は無理に笑顔を作って言うと、怯えている神羅さんを置いて、凛君の方に歩いて行く。

「二人とも、何やってたの？」

「何にもしてませんよ。それより、凛君の護衛の方はどうしたんで

すか？」
「僕の護衛君はどうしたんだろうねぇ？うーん、どっか行っちゃった」
「そうですか・・・それなら、修さんはどこにいるか知ってます？」
「ん？亜修羅なんか見てないよ。見つからないの？」
「ええ、まぁ・・・」
「そっか・・・このまま、生き別れになっちゃうのかな？」
凛君の悲しそうな顔を見て、自然と僕の顔も曇る。やっぱり、生き別れになってしまうのかと思った。
「とりあえず、城から出てみる？」
「・・・いや、城から出るのは危険かと・・・」
「うーん、それじゃあ、どうしようか？」
そんなことを話しながら城の中を歩き回っていると、急に凛君が何かにつまずいて、バランスを崩し、近くにあった何かに？まる。
その何かを凛君が引き下ろし、近くにあった壁が動き出した時には、思い切り驚いてしまった。
「ぼっ、僕、何かした！？」
「なんか、レバーか何かを引き降ろしたように見えましたけど・・・」
「おっ、確かに、何かを握ってるけど・・・これを引き下ろしたから地下への道が・・・？」

「とにかく、行って見ましょう！」
「ゴーゴー！レッツゴー！」
物凄くテンションの高い凛君と一緒に、僕も地下への階段を下りて行った。

運命を変える者

最初の凛君は、探検にでもいくようなテンションだった。しかし、今では・・・・。

「さっ、さむっ・・・・そして、怖っ」

「凛君、そんなにしっかり腕を?まないで下さい、ちょっ痛いです」

「いやいや、人のぬくもりに接していないと、くじけそうになるのさ」

「確かに、今までのお城も不気味でしたが、ここは物凄く不気味ですものね」

「声が響くし、寒いし暗いし、嫌だ〜〜〜」

とか言いながら、僕の腕をしっかり?んでいるものの、ズンズンと前に進んでいくから、その言葉が嘘のように聞こえる。

「凛君、戻りましょうよ?なんだかまずい雰囲気です」

「だってさ、この先に何かがある予感がする。だから、行くんだ」

「えっ、何かを感じるんですか?」

「おうよ!な〜〜んかを感じる」

「その何かってわかりますか?」

「う〜ん、再会出来るかもしれない」

「えっ、誰とですか?」

僕がそう聞いた途端、今まで僕を引きずる勢いで歩いていた凛君が足をとめて、うつむいた。

何かいけないことを言ったかと思うけれど、思い当たる節がない。

自然と僕もうつむいていると、急に凛君が振り返って、僕の肩を叩くから、思わず声を上げてしまう。

「大丈夫だよ！何とかなる！」
「なっ、何がですか？」
「この先に、希望の光りを感じる」

「希望の光りとは、一体・・・・？」
「大丈夫だって！なんか、滅茶苦茶勇気が湧いて来たんだ！」
「はっ、はぁ・・・・」

なんだかよくわからないけれど、凛君が元気になったからいいかなと思う。

「よしっ、怖いけど、頑張るぞ！」
「はっ、はい！その意気です！」

僕も自然と元気になって、体が温かくなって来る。

気分が落ち込んでいたりすると、自然と体も冷たくなるみたいだ。だけど、ワクワクしたりすると、自然と体が温かくなって来る。そうなると、自然と「よしっ、頑張ろう！」って気持ちになれるんだ。

ワクワクした気持ちで地下通路を歩いていると、今まで薄暗くはあったけれど、まだ前を見えていたんだけど、急に真っ暗になって何も見えなくなって、自然と寒気がしてくる。

すると、突然グラグラッと物凄い揺れが起きて、地面に膝をついて

頭を守っていると、揺れは収まったけれど、何が起こったのか全くわからない。

「なっ、何!?」
「どっ、どうしたんでしょうか?」
「とっ、とにかく行こう!」

「でも、何も見えなくなってしまっては、前に進めないんじゃないんでしょうか?」
「うーん、とりあえず進もう」

凛君がそう言った時、突然腕を冷たい何者かに?まれて、思わず悲鳴を上げる。

「シーッ、黙ってろ。今から出口に連れてってやる」

そう言われて、カチッと音がなって見えた顔は、神羅さんだった。

それを確認すると、大きく息を吐いた。今は、懐中電灯で顔が見えているけれど、真っ暗なところで突然腕を?まれたら、驚くでしょ?

「し、神羅さん、凛君はどうしたんですか?」
「えっ、確かに・・・あいつはどこなんだ?」

そう言って、神羅さんが、懐中電灯の光を泳がせるけれど、凛君の姿が見あたらない。

多分、凛君から気を逸らしたのは、ほんの数秒前だ。それなのに、どこにも姿が見えないと言うことは、消えてしまったとしか考えられない。

「それにしても神羅さん、どうして僕らがここにいるって知ってるんですか？」

「知ると言うか、城中で、俺たちの種族と戦闘種族が戦いを始めて、どこにも隠れる場所がないから、どこかないかと探していたら、変なレバーを見つけて、それを引き下ろしたら、扉が開いたと言う訳だ」

「それなら、出られないですね」

「ああ、いずれ、ここも見つかるだろう。だから、早く出口に向かった方がいい」

「そうですか・・・・それなら」

僕は、神羅さんの方を向いたまま、一歩を踏み出した。

と、突然地面が消えてしまったかのように足場がなくなって、僕は下に落ちて行きそうになった。

しかし、とっさに神羅さんに腕を?んでもらって、なんとか宙吊りでも助かった。

「はっ、はぁ〜、助かりました」

「おい、まだ助かった訳じゃないんだぞ！」

「それでも・・・・」

その時、神羅さんがなんとも言えない声を上げた。「うわぁっ」と言うか「おわぁっ」と言うか、とにかく、そんなような声を上げられた為、自然と、何かまずいことが起こったんだとわかった。

「なっ、何かあったんですか？」

そう言った途端、直ぐ近くで神羅さんの声が聞こえた。

「落ちた」

「えっ！？」

「俺の踏んでいた床も、突然消えた」

「それなら、僕達は死んじゃうんですか？」

「わからない。もしかしたら、凛もこうして消えたのかもしれないぞ」

「えっ、でも・・・・」

その途端、何も見えなくなった。

「いたたた・・・全く、地下通路って、こんなに脆いものかね？」

僕は、何とか起き上がると、背中を摩る。そして、辺りを見渡す。

そこは、どこかの建物のような場所だった。

よくわからないけれど、人の話し声が聞こえた為、僕は、近くにあった扉の中に隠れると、息を潜めた。

一応、今までの過程を説明しておくと、僕は、錬賭君を守る為に戦った。そこまでは覚えてる。だけどそこからは覚えていなくて、桜っちにあったところまで、記憶がない。

だから、何が起こったのかわからないんだ。

そしてさっきは、突然桜っち達が消えてしまって、驚いていると、真っ暗になって、今のような痛みを味わうことになったと言うことだ。

ため息をつきたい気持ちも山々だけど、それ以前に、ここがどこなのかわからないから、とりあえず、人の気配もなくなったことだし、出て行こうとした。

しかし、不意に人の気配を後ろから感じて、振り返ると、鉄格子越しに何者かがこちらを見ていることに気づいた。

ここは薄暗いから、僕も相手も、お互いの顔が見えていない。だけど、一応見ていると言うことだ。

「お前は何者だ？ここに何の用がある？」

その声を聞いて、自然とその鉄格子に近づいて行くと、思わず声が漏れた。

「・・・本物？」

「凛か？」

そう言われて、確信した。今、鉄格子越しに見える人は、格好すら違うけれど、亜修羅だってわかった。

「また会ったね」
「もう、二度と会えないなんて言ってない」

「言ったじゃないか！もう、二度と会えないかもしれないって言ったじゃないか！嘘つき！！」
「落ち着け。丁度いい、お前に頼みがある」
「なっ、何！？」

さっきは怒鳴ってしまったが、久しぶりに会った訳だし、怒鳴ることもなかったなと思いながら聞く。

なんと言うか、ツンデレって言うのかな？こう言うの。

本当は嬉しかったりするけれど、恥ずかしくて言えないって言うの。

おおっ、なんだか、珍しいくらいに亜修羅の気持ちがわかったぞ・・・。

僕がそう思って嬉しそうな顔をしていると、亜修羅が不思議そうな顔をしてみている為、自然と笑顔を浮かべる。

「で、頼みって何？」
「ああ、魔界の種族争いの真実は知ってるか？」
「・・・・へ？」
「その様子だと、知らないようだな。なら、わかり易く説明してやる・・・・」

亜修羅がそう言った時、不意に、僕が入って来た扉が開きそうになった為、亜修羅がハッとした顔になり、ポケットから銀色の何かを

取り出すと、僕に投げ渡し、一言言った。

「魔界の命運は、お前に任せた！」

救世主

「魔界の命運は、お前に任せた！」

亜修羅にそう言われた途端、僕は、その投げられた何かを受け取り、壁を駆け上がって、上にある天井窓から外に出た。

本当は、亜修羅を助けたいと思うけれど、いつも、あまりことを大袈裟に話さない亜修羅があんなに言うと言うことは、よっぽど大変な状況なのだとわかった。だから今は、逃げることが一番大切なことだとわかった。

しかし、逃げて来たはいい。だけど、それからどこに行けばいいのかわからなくて、天井窓から顔を出して様子を伺った後、僕は渋々、下に飛び降りた。

これじゃ、カッコいいどころか、カッコ悪すぎる・・・・。あんなにかっこよく出て行ったのに、再びノコノコと帰って来ちゃって・・・。

僕が戻って来たのを確認して、亜修羅が息を吐いた。

・・・・いや、表現を変えると、ため息をついたに等しいかもしれない。

だって！訳もわからないし、行き先もわからないのに、あのままどこに行けって言うのさ？

僕はその反論を、そのまま口に出した。

すると、亜修羅が「もっともだ」と言う顔をしてうなずいた為、僕の方も、ため息が漏れる。

「じゃあさ、まず、何から教えてもらおうかな？」
「まずは、魔界のことを話そう」
「ああ、種族争いがどうこう言ってたやつか・・・・。ふんふん、なるほどね、話してみて？」

「・・・・なんだか偉そうだからムカつくが、まぁ、そんなことも言ってられないな」
「そうそう♪」

僕の返事に、亜修羅が殺気のこもった目で睨んで来るから、僕はシュンとなって、鉄格子の前に正座をして座った。

すると、亜修羅が笑みとは言えないものの、殺気のこもった睨みをやめた為、僕は話を促す。

「それで？」
「今の魔界は、種族争いが起こっているよな？あれの意味から教えよう」
「おおっ、幾度と繰り返されて来た、意味のない戦いの真実を！」

「そう声を上げるな。静にしろよ」
「おっ、ごめん・・・・で？」

「あれは、神の娯楽の一つにされているものだ」
「・・・・ん？」

「どう言うことかと言うと、種族争いは、人間界で言う競馬のようなものだ。俺達三種族に戦わせる。神達は、その様子を生中継で見ていて、自分達が賭けた種族が勝つように祈る。敵種族が殺されれば喜び、自分達の賭けている種族の命が絶たれても、悲しみもしない。

神達は、俺達妖怪のことを、単なる娯楽の道具だと思っている。命だとは感じず、ただの娯楽の一つと考えている」

「と言うことは、僕達は、神の娯楽に付き合わされて、毎回毎回大勢の命を殺し合ってると言うこと？」

「・・・ああ、もともと争いなんか起きていない。神達が、俺達を戦わせる為に、幻を見せる霧を魔界に投下し、争いを起こしている。当然、魔界の神はそれを許さない。しかし、他の奴らにはそれが邪魔だ。だから、魔光霊命を牢屋に閉じ込めた。あいつさえ外に出せれば、魔界に漂っている霧を取り払って、争いごとをやめさせられる。だから、俺は魔光霊命に頼まれた。しかし、このざまだ。だから・・・お前が呼ばれたんだろう。やってくれるか？」

「うーん、大体わかったけど、ここって、どこなの？」

「ここは神域。神のみが生きることを許された世界。そして、ここのどこかの牢屋に魔光霊命は閉じ込められている。だから、魔光霊命を助け出してくれ」

「でも、その前に亜修羅を助けなくちゃ！」

「俺は、一緒にいても邪魔になるだけだ。面も割れているし、俺を助けたところで、役に立たない」

「それでも、僕は亜修羅を助けるの！」

「は？お前、さっきのこと聞いただろ？」
「でも、そうなの！だから、待っててね、今直ぐ亜修羅をそこに閉じ込めた奴殴りに行くから」
「俺のことはいいんだ。魔光霊命を・・・・」

「とにかく！・・・助けに来るから。待ってて」

僕は、亜修羅の言葉を大声で遮ると、何か言っている亜修羅の言葉を最後まで聞かないで、天井窓から出て行った。

「あいつ、何考えてるんだ・・・・」

ため息をつきながら、鉄格子から離れ、壁に寄りかかる。

それにしても意外だった。あいつが、あんな理不尽の殺しに怒りを表さないだなんて。

あいつは、他の奴らよりも、物凄く生死に敏感な奴だ。そんなあいつが怒りを表さないだなんて・・・・。

そんなことを考えながら、只管、ここから出られる方法を考える。

神を閉じ込める牢屋と言っても、人間界の牢屋と同じようなもので、警官がたまに見回りに来る。違う点と言ったら、閉じ込められてい

る奴が少ないってだけだ。

ため息をつきながら天井を見上げる。そこから、太陽の光りが見えるが、俺は、凛みたいに狂人的な身体能力を持っていない為、壁を上るなんて無理だ。

ツルツルした壁で、何回か上ろうとしたが、？まりどころもない訳だし、無理なのだ。

あいつは、本当にとんでもない身体能力を持っていると思う。ツルツルの、支えのない壁を普通に上って、たまたま開いていた窓から出て行った。本当に信じられない。

そんなことを考えながら天井を見上げていると、不意に、隣から声が聞こえた。

「お前、神でも妖怪でもないな。何者だ？」
「・・・人に質問する時は、まず、自分のことを言ってから聞くのが礼儀じゃないのか？」
「ふん・・・偉そうな口を叩きやがって。ガキが」

「話しかけるな。お前のような無礼な奴と話しているだけで虫唾が走る」
「いいのか？俺が助けてやろうって言ってるのによ」
「お前、何者なんだ？」

「『・・・人に質問する時は、まず、自分のことを言ってから聞くのが礼儀じゃないのか？』だっけか？」
「・・・俺は、妖怪・・・頭脳種族族長、妖狐亜修羅だ。お前は何者だ」

「俺は、前期頭脳種族族長、瑛雅だ」
「・・・・変な名前だな。まるで、人間界の映画じゃないか」
俺がボソッとつぶやくと、そいつのいる方向の壁がダンッと音を立ててきしんだ為、口をつぐむ。
「それで、なんの用だ?」
「お前、魔界の神の魔光霊命に呼ばれてここに連れて来られたんだろ?俺もそうだった。だが、お前みたいに閉じ込められて、魔界を救えないまま、百年もここに閉じ込められている」
「・・・・待て」
「なんだ?ガキ」
俺は、「ガキ」と言う言葉に、思わず眉をひそめるが、そのまま、不思議に思っていることを口にする。
「魔界には既に、前期族長と言うヨボヨボの爺さんがいたぞ。それに、そいつにも会った。どう言うことだ?」
「・・・・ふっ、きっと、俺の爺さんだろうな。前期族長のいなくなった今、その族長の権利は身内に託される。俺の場合は、親父がいなかったんだ。だから、爺さんに渡ったんだな。その役目が」
「なるほど・・・・」
再び考え込む。

なんだか、物凄い複雑になって来たようだ。何より、こいつは、何を目的に話しかけて来たんだ?

「お前、俺に何をして欲しいんだ?」

「魔界にいる奴らを助けてやってくれ。もう、これ以上無用な戦いの繰り返しは避けたい。そう言われただろ?烈火闘刃に」

「・・・あいつは、お前は自分の言葉を聞かずに出て行ったと言っていたぞ?」

俺は、ただただ瑛雅の言葉に困惑するばかりだった。今まで俺が教えられて来たこと、見て来たこと、全てがこいつの言葉と矛盾している。ここまで逆転すると、疑いすら持たなくなる。

「それは嘘だ。俺は、烈火闘刃に言われ、ちゃんと技をもらった。しかし、そいつの記憶は、技を託した時点でリセットされる。きっと、幸明か何かにそんな呪文をかけられたんだろう。そして、その呪文は、種族争いを二度と再発させないことによって、消えるだろう」

「・・・で、どうしろと言うんだ?」

「年に一回だけ、牢屋を空けてもらえる時期がある。それが、明日の夜のことだ。その時、俺は抵抗をする。そうすると、当然警官は俺を羽交い絞めにしようとする。その時に、腰にぶら下げている鍵をお前の牢屋に向かって蹴る。そうしたら、お前はその鍵を取って自分で牢屋を開け、天井窓から出ろ」

「お前はどうなるんだ?」

「神の掟は厳しい。だから、俺は殺されるだろうな」

「・・・・」

「これから大勢の犠牲を見るよりも、俺一人が犠牲になって、魔界が助かった方がいいだろう」

「・・・・・・」

俺は、無言のまま壁によりかかった。

一生役に立ちそうにないことでも、極限状態だと、大いに役に立つことがある。

「全く、本当に最低だわ、本当」

僕は、ため息をつきながら、倒れている神達を見下ろす。

「これ、当然の報いだよね?君達は、僕らが殺しあってるのを平気で見てるのに、自分達がやられるのは耐えられない。それって、最低じゃない?」

「なっ、なぜ、戦闘種族の族長が・・・今すぐ幸明様に・・・・」

僕は、すぐ近くに立っている司会者からマイクを奪うと、思い切り怒鳴った。

「ふざけんなっっっ!!!!」

僕の声に、今までザワザワしていた雰囲気が静まり返り、僕は笑みを浮かべる。

ここで少し、僕のいる場所を詳しく説明しよう。僕は、亜修羅と別れてから、ドームのような場所に入って羽交い絞めにされた。そして、その羽交い絞めにして来た奴らを倒して、追いかけて来る神達から逃げるべく、暗い奈落のような場所に逃げ込んでたんだけど、突然地面が持ち上がり、照明を当てられた。

それはまさに、ステージの上かのように。

そして、その僕の想像は当たっていた。なぜなら、僕の直ぐ近くには、マイクを握って唖然としている司会者の姿があったんだ。

僕は、上にあるスクリーンを見て、亜修羅の言っていた言葉を認識し、走ってステージに上って来た神達をＫＯしたと言うことだ。

そして今、司会者のマイクをふんだくり、怒鳴ったと言うことだ。

みんなが静まり返り、僕のことを恐れた目で眺める。当たり前だろうね。僕は、妖怪の中では一番強い妖怪。神ですら手に負えないことも多いと思う。

「って、言ってもいいかな?みなさん！」

「なっ、なっ・・・・」

「みなさん、今までずっと見て来たでしょ?僕のこと!サインなら書いてあげますよ～」

「いっ、意味がわからない、とにかく、幸明様に・・・・・」

「そうだな、怒っていない時に・・・・・」

そう言うボソボソと言う声が聞こえて、僕はそちらに目を向ける。

はっきり言うと、怪我を負わせるだけじゃ物足りない。それだけ物凄い怒りが僕の中で渦巻いてる。

でも、ここで殺しちゃったら、自分の決めたことに背くことになる。それは嫌だった。だから、我慢してふざけてみた。

決して怒ってない訳じゃない。怒りを表に出さないだけなんだ。

「怒ってないって、誰が言った?」

突然の声の変化に、会場の空気が凍りついたのがわかった。

ふざけんな!って叫んだ時よりも、会場の雰囲気がまずくなったのがわかった。

当たり前かな?少し怒りを表したから。

「お前らの自分勝手に付き合わされて、死んで行った人のことを思うと、とても悲しくなる。そして、神なんて、クソだと思う。どうだ?反論出来るか?」

「・・・・」

「そうだよな。そう言うことだ。もう、種族争いなんて二度とするな。・・・・いや、今年でこの行事をやることが不可能になるだろう。なぜなら・・・・」

僕は、そこで言葉を切ると、考え込む。

どうしよう?何もわからないのに。

「とっ、とにかく!もう、やめさせる!もう、この戦いは繰り返させない!覚悟しとけ!」

僕は、半ば逃げるようにその場から離れると、そのままドームの外に出た。

「ん？」
「・・・いたたたたっ、ああっ、体が悲鳴上げてますよ・・・・」
「そっ、そうだな・・・ギシギシ言ってるぞ」

僕らは、コンクリートのような冷たい床の上に倒れてるんだけど、体を思い切り打ちつけたようで、起き上がるのも一苦労だ。

「ここ、どこなんだよ？」
「ここは、神域と言う、神のみが住むことの出来る世界です」

突然後ろから聞こえて来た声に、僕らは体が痛いことを忘れて、思わず飛び退いた。

けれど、その人物の正体を知って、大きくため息をついた。

「あっ、魔光霊命様！」
「お前、知ってるのか？こいつの正体？」
「ええ、魔界の神様ですよ！」

「そっ、そうなのか？」
「ええ、だって、そうですよね？」

神羅さんは、魔界に住んでいるのに、魔光霊命様のことを知らなかったようで、かなり驚いた。

だって、普通は知ってると思わない？

僕が、魔光霊命様に話しを振ると、魔光霊命様がうなずいた。

「私は今、閉じ込められているのです」
「ああ、知ってるぞ。見てもわからない奴はいないだろ？」

「神羅さん！神様なんですから！そんなに失礼なことはいけません！」
「いいえ、今の私は、神でもなんでもありません。この牢屋の中に閉じ込められてしまっては、意味がないのです」

「なるほど・・・鍵ですか」

僕はそう思って、不意にポケットの中を探す。

今の僕の姿は、制服のままだ。だから、もしかしたら、入っているかもしれないと思ったんだ。

「あっ、ありました！」
「なっ、何があったんだ？」
「これで、魔光霊命様を外に出すことが出来ますよ！」

「鍵でも持ってるのか？」
「いえ、ヘアピンです！」

僕が取り出したヘアピンを見て、神羅さんが首をかしげる。

「なんだ、それ？」
「これは・・・まぁ、説明はどうでもいいです！僕、閉じ込められた時に出られるように、鍵開けの技術を持ってるので、きっと大丈夫です！」

「出来るのか？そんな細い棒みたいなので？」
「大丈夫です！・・・・あっ、よいこのみんなは、真似しないでね！」

僕は、一応そう言うと、ヘアピンでは開けるのに大変そうな鍵をガチャガチャやりだした。

「おい、変なことをしない方がいいと思うぜ？」
「そうです、お名前は分かりませんが、人間さん」
「あっ、僕の名前は、桜木明日夏と言います。よろしくお願いします」

僕は、鍵をじっと見たまま、魔光霊命様に挨拶をすると、再び口を閉ざす。

これは、本当に究極の場合しか出来ない。僕の教わった方法は、一回手段を間違うと、本物の鍵ですら開けられなくなってしまうんだ。

そんな方法あるのか？って思うと思うんだけどね、世の中には、色んな不思議がうずまいてるんだよ。

「おい、まだ・・・・」
「神羅さん、静かにして下さい」

僕の言葉に、神羅さんが黙り込む。自然と殺気立ってしまっていたようだ。

だって、それぐらい難しいことなのに、他から色んな言葉を言われたら、イライラするんだもん。

それから三十分後、カチッと言う音がして扉を引くと、鉄格子が開いた。

それには、今まで半信半疑だった神羅さんも驚いたようだ。開かれた鉄格子と僕を見比べては、首をかしげている。

魔光霊命様も信じられないのか、動き出そうとしない。

・・・そんなに信じられないでしょうか？

僕がため息をついていると、魔光霊命様が微笑んで、牢屋から出て来た。

「ありがとうございます。人間、桜木明日夏」

「はいっ、僕は、みなさんみたいに戦闘能力がないので、これぐらいのことが精一杯なんです・・・・」

「ありがとうございます。それでは早速、魔界を助けに行きましょうか」

「あっ、あの・・・それってどう言う？それに、修さん達を探してた途中なんですけど・・・・」

僕がそう言い出した途端、魔光霊命様がハッとした顔をして、僕の顔を見た。

「その二人なら、私が神域に呼びました。直ちにその二人を助け出さねばなりませんね」

「そうなんですか？それなら、早く探し出しましょう！」

「ええ、それでは早速行きましょうか」

魔光霊命様はそう言うと、意気揚々と外に出た。

「こうして日の光を浴びるのは、二十日ぶりですね。ありがとうございます」

「いえいえ、魔光霊命様、お礼を言われるまでのこともございませんん」

「神と言っても礼儀は必要です。何か、して欲しいと言うことはないでしょうか?私は一応神ですから、なんでも出来ますよ?」

「それなら・・・・」

「あの・・・魔界の時間を止めて下さい!」

「なっ、なんだよ、それ?」

意味のわかっていない神羅さんを遮って、僕は続ける。

「こうしている間にも、幾多の命が奪われます。だから、時間を止めてさえいただければ、その時点で時間が止まり、殺し合うことがありません。だから!」

「それで満足なのですか?」

「はい。ですよね、神羅さん!」

「あっ、ああ、そうだな!」

やっと僕の言葉の意味がわかったようで、神羅さんが大きくうなずいた。

そんな僕らの様子を見て、魔光霊命様は微笑むと、歩みを止めて一言言った。

「天命様、どうか、魔界の神、魔光霊命の言葉に耳を傾けて下さい。そして、その願いを聞き入れて下さい」

そう言って、魔光霊命様は手を合わせると、深く礼をした。

僕らは、何が起こっているのかわからないけれど、とりあえず黙る。何かが行われているのかもしれないと思ったんだ。

それから数秒後、魔光霊命様は頭を上げて、大きくため息をついた。

「これでもし、私の願いが聞き入れられたら、魔界の時は止まります。どうか、祈って下さい。私と一緒に」

そう言われて、僕らも手を合わせると、深くお辞儀をした。

どうか、魔界の時を止めて、これ以上無用な命が奪われませんように・・・・。

ついに動き出す！

次の日の夜、ついに鍵が開けられる時が来た。

あれから俺達は、今日の夜のことについて、長々と話し合いをして、リハーサルまでした。だから大丈夫だと思うのだが、かなりドキドキしていた。

「大丈夫だ。百年もずっと考え続けて来た計画だ」

「・・・・のわりには、かなり簡単だな」

「ふんっ、今更生意気を言うな。ガキが」

「お前にガキなんか言われる筋合いはない。こんなことがなかったら、お前なんかを頼らないのにな」

「準備をしておけ。もう直ぐ警備員が来る」

俺は、深いため息をついて座った。なんだか落ち着かなくて、ずっとウロウロとしていたのだ。

そいつの言葉どおり、数秒後、警備員がやって来て、自然と手を握る。

瑛雅から色々聞いたが、神の世界は、地獄のように苦しい魔界の牢獄よりも酷いらしい。

しかし、どんな酷いことをするのかはわからないらしい。なぜなら、神の世界の罰を受けて、生き残った者はいないからだ。

そう言うことを聞かされると、自然と体が強張る。

もし、捕まったら・・・・。

そんなことを考えている間に鉄格子を開けられて、警備員に腕を？まれ、そのまま外に出ると、手錠をかけられ、腕を引かれて瑛雅の閉じ込められている牢屋の方に連れて行かれる。

右腕でしっかり俺の腕を?んで、左手で鍵を開けている。

普通なら抵抗をするから、最低でも一人につき一人を付き添わせるだろう。しかし、警備員は一人だ。なんでこんなに余裕があるかは、きっと監視カメラにあるのだろう。

監視カメラからは、常に警備員が見張っていて、少しでも不審な動きをした場合は警戒モードに入る。警戒モードになった途端、部屋中に毒ガスが発射されて、死に至る。

その場にいる警備員はどうなるのかと言うと、それは、警備員の実力次第だ。

いくら神と言えど、不可能なことをしようとするバカはいない。だから、警備員が一人で来たのだろう。

「下手な抵抗はするなよ。下手な動きをした途端、お前らは毒ガスの餌食になる」

「それを言うなら同じことだろうよ、警備員さん。その様子だと、強がってはいるが、ペーペーのようだな。だから、お前も俺達と一緒に死ぬさ」

「くっ・・・・」

警備員の表情が引きつる。さすが、百年も警備員を見続けて来た奴だ。直ぐに初心者かベテランかわかるようだ。

「いいのか？そんなことを言ったら、すぐさま毒ガスを出すぞ」
「ふんっ、勝手にしろ」
「クソ生意気な奴だ」

俺がそんな風に会話をしている間に、瑛雅が警備員を襲う。

と同時に、サイレンのような音が鳴って、廊下が騒がしくなったと同時に、ガスが噴射された。

「おいっ、話が違うじゃないか！毒ガスは噴射されないように細工をしておいたんじゃないのか！？」
「何か手違いが起こったようだ。この足音の数だと数百人はいるぞ。そんなに相手をしている間に死ぬぞ？」

「仕方ない・・・俺は、そう言う技術がないから、お前に任せる。俺は、お前の邪魔をしないように、この場で警備員を倒す」
「しかし、この毒の中だぞ？どうやって切り抜ける？」

「バリアを張るしかないだろうな。今もバリアを張っている。早く解除してくれ」
「何分持つ？」
「知らん！」

俺は、防護マスクをして迫って来る神を、俺達の部屋に入れまいと思っていた。

絶対に、こんなところでは死んでいられない。そう思っていた。

だから、絶対に生き延びる。その為に、あいつに託したんだ。

大きく息を吐くと、神達に向かって突進して行く。

殺さない程度に倒していくけれど、無限に湧いて出て来るようで、尽きる事がない。

なにより辛いのは、妖気のバリアで自分を守りながら、何百と言う敵に立ち向かうことが一番の苦痛だった。

息が苦しくなって来て、体が鉛のように重い。何人神を倒したかはわからないが、無限に出て来るのは事実。

そろそろ倒れそうになった時、瑛雅が走って来て、俺の襟を?み、引きずりながら走る。

「解除に成功した。今すぐ天井窓から出るぞ」

「これって、意味があることだったのか?解除しなくても出て行くことは簡単だったんじゃないか?」

「・・・それを言うな」

「随分リハーサルと違ったな。おかげで死にそうだ」

引きずられながら、後ろから追いかけて来る神達を眺める。視界がボヤけて見えにくいけれど、何とか相手を見ている。

「・・・悪いな、ガキに無理させて」

「ガキガキ言うなって言ってるだろ?それに・・・・」

俺がそう言いかけた時、突然、瑛雅が俺の襟から手を離した為、思

い切り地面にぶつかる。

しかし、大した痛みもなかった。きっと、体が麻痺しているんだ。そう感じた。

「おい、どうした?」

「あれは毒ガスと言うより、痺れ薬のようだな。足が急に動かなくなった。俺のことはいいから、お前だけ行け!」

「・・・・・」

俺は無言で、地面に倒れている瑛雅を肩に担ぐと、走り出す。俺の体だって限界に来ている。だが、ここでこいつを置いていけない。

「どうして・・・・」

「『助けるのか?』なんて、当たり前のことを聞くな。こんなべたな展開で、そう聞く愚か者はいない」

「ふんっ、生意気なガキだ。だが・・・・」

俺は、天井窓から出ることは不可能だとわかっていた為、廊下の突き当たりの大きな窓に体当たりをして、そのまま落下した。

ここは、人間界のビルに例えると、八階ぐらいの高さだろう。そんなところから落ちたら、いくら妖怪と言えど死ぬ。しかし神は、まだ、俺が死ぬことを認めていないようだった。

地面にぶつかる直前に、何かに服がひっかかり、宙吊りになったのだ。

「お前、運がいいんだな」

「違う。運が悪いんだ。こんなところで助かったって、ろくなこと

もない・・・・」

「助かっただけ感謝しろや」

「・・・・来る」

俺は、とっさに神の気配を感じて、地面に飛び降りると、動けない瑛雅の前に立つ。

「迎えうつ気か？」

「お前は先に行け。お前なら、幸明の居場所を知っているだろう？だから、魔光霊命を助けることが出来る。だが、俺はそれが出来ない。なら、それが出来る奴をサポートするしかないんだ」

「・・・・チッ、ガキに助けられるとはな」

「助けたつもりはない。ただ、絶対に魔界を救え。でないと、死んだ時に呪うからな」

俺は、神達が迫って来る方向を向いたままそう言うと、大きく深呼吸をする。

あいつはもう、あんまり動けない。だから、あいつがここから出るまで、俺がここで時間稼ぎをするしかないんだ。

最初はあそこで死ねないと思ったが、今なら死んでもいいと思った。いや、俺の意思が死にたくないと言っていても、この状況では死ぬしかないだろうな。

もうろうとする意識の中で、考えられたことは一つだけだった。

とにかく、あいつがここから出ることを手助けすること。それが一

番大事だ。

それだけを思って、死にそうな体を動かすけれど、相手は何百人。そして、ピンピンの奴だった為、いくらこちらが強かろうが、不利だ。

突然、腹に激痛が走る。何をされたかはわからない。ただ、もう、動けないことはわかっていた。

全く動かない俺を見て、神達は何を思ったのか、俺をどこかに運び出す。

きっと、これからが本当の地獄の始まりなんだと、俺の勘は感じていた。

一足遅かった・・・・

「ところで、魔光霊命様。その格好のままでよろしいんですか？バレたら、また、捕まってしまうのでは？」
「いいえ、それはないでしょう。あなた達が助けてくれると信じていますから！」

そう嬉しそうに言われて、僕らは、お互いに顔を見合わせてため息をつく。

だって、僕らだって守ろうと思うけど、限度ってものがあるんだから。もしものことを考えた方がいいのに・・・・。

「ところで、どこに向かってるんだよ？」
「妖狐亜修羅の閉じ込められているところです」
「えっ、わかるんですか！？」

「ええ、牢屋から出していただければ、一応神ですからね。一人の者の居場所を捜すことぐらい、簡単です」
「そうか！じゃあ、族長は生きてんだな！」
「ええ、多分生きていると思います。昨日居場所を確認したので、今日もやってみましょう」

そう言って、魔光霊命様は立ち止まり、目を瞑って、何かをブツブツ言っている。

「大丈夫でしょうか？」
「・・・・どうなんだろうな。俺、族長が死んだら、どうすりゃいいんだよ」

「でも・・・・信じましょう！」

そう小声で話しているものの、魔光霊命様の様子が変なので、やっぱり嫌な予感がする。

「魔光霊命様・・・・大丈夫でしょうか？」

痺れを切らして話しかけると、魔光霊命様は目を開いて、僕らの方に向き直った。

その表情は、さっきまでの表情と違って、微妙に曇っているのがわかる。

やっぱり何か・・・・。

「どうしたんだよ！何かあったのか・・・・？」

「なぜか・・・・感じ取れないのです。気配が・・・・」

「それって、どう言うことですか？」

「・・・この世に既にいないのか、それとも、私の力の及ばない場所にいるのか」

「それならまだ、死んだってことじゃないんだな！」

安心する神羅さんとは裏腹に、未だに顔が晴れない魔光霊命様の様子が気になるけれど、とにかく、信じようと思う。

「とりあえず、昨日感じた居場所まで行きましょう。そこから何かがつかめるかもしれません！」

「はい！行きましょう！」

僕は、出来るだけ元気に答えたけれど、みんなの雰囲気が悪い。

「・・・どうやら、この場所にいるようですね」
「この、ドームのような場所ですか？」
「ええ、ここの地下の牢屋に閉じ込められているようよ」

「よしっ、行くぞ！」
「あっ、少し待って下さい」

そう言うと、魔光霊命様は、前に進み出る。

すると、今まで重く閉ざされていた扉が自然と開いて、そのまま中に進んで行くから、僕らも、慌てて後をついて行く。

「これからどうするんですか？」
「ここの牢屋は地下にあります。ですから、会場の裏側を通り、エレベーターに乗って地下へ下りましょう」
「そんじゃあ、まずは、俺が先に偵察に行って来るぜ」

そう言って、神羅さんがドームの中に入って行く為、僕らもドームの入り口の近くまで近寄る。

しばらくそっちを見ていると、神羅さんが、ドームの中を覗いたまま手招きをして来た為、僕らも慌ててドームの中に入る。

ドームの中は、意外にも人通りが少なくて、結構驚いたけれど、それは僕らにとっては好都合だった為、先頭の神羅さんの後について行く。

しばらくしたらエレベーターにたどりついたけど、その途中、何回

か魔光霊命様の正体に気づかれそうになった。

でも、神羅さんが慌てて気絶させて、部屋に閉じ込めて来たから、きっと大丈夫だと思う。

「ん？地下なんてないぞ？」

「ああ、ここです」

そう言って魔光霊命様が押したボタンは、Ｂと言う不思議なボタンと、二階のボタンだったんだ。

「これで地下にいけるんですか？」

「ええ、確かにそう教わったわ」

「幸明って、何者なんだろうな？」

「・・・ただの愚か者です」

神羅さんの言葉に、強張った表情で魔光霊命様が言った。

その様子がおかしいとわかったのか、神羅さんもそれ以上幸明のことについて何も言わなかった。

「さぁ、着きました。ここにきっと彼はいるはずです」

魔光霊命様の言葉を信じて、僕らもエレベーターを降り、廊下を歩き出す。

そして、一つの部屋に入ると、驚いている看守に話しかける。

「ここに、一人の妖怪を閉じ込めましたよね？いますか？」

「まっ、魔光霊命様・・・・どうして？」

「私は、そんなことを聞いておりません。妖狐亜修羅はどこにいる

かと聞いているんです」

「そっ、それは・・・・」
「答えないと、痛い目に合いますよ」
「痛い目とは、どう言うことですか？」
「それは・・・・」

そう言って振り返った魔光霊命様の動きが止まり、思い切り相手を睨みつける。

僕らも慌てて後ろを振り返ると、そこには、背が高くて、全体的に白を主体とした洋服に身をまとっている若い男の人がいた。

「こいつ、誰だよ？」
「神域の神、幸明です」
「えっ・・・・」
「素っ気ないですね、魔界の神、魔光霊命・・・・いや、我が妹、魔光霊命」

その言葉の後、沈黙が続いた。

急展開

「ああっ、恥ずかしい・・・・・」

今思うだけでもあの時は恥ずかしい・・・・。もう、なんと言うか、ため息が出てしまう。

恥ずかしい思いでドームを抜け出して、今は林を走っている。

でも、魔光霊命様を探すことは愚か、亜修羅を外に出す手段すらわからない。

こうやって闇雲に走っているうちにも、ろくなことがないのに・・・・。

ため息が再び漏れる。だって・・・・ねぇ？

僕は、仕方なく、ドームの方に戻る。

もう一度亜修羅の話を聞けば、何かがわかるかもしれない。

今度は、イライラしてどこかに行かないようにしないとね。

そんなことを考えながら、ドームへの道を歩いていた時、不意に人の気配を感じ、慌てて隠れる。

「全く、前期族長に逃げられるなんて、情けないぜ、同じ警備員として」

「と言っても、もう一人の方は捕まえられたらしいぜ。その変わり、

脱走を図ったから、普通の牢屋じゃなくて、あの牢獄に閉じ込められたらしい」

「まさか!?あそこに入れられたのか?」

「ああ、生き地獄を味わうから、率先して死を望む者が多数出ると言われるあそこに閉じ込められたんだ」

「本当か?なら、もう二度と会うことは不可能だろうな。『地獄監獄』に入れられちまったらなぁ・・・・・」

僕は、自然と息を飲むのがわかった。

地獄監獄・・・どこかで聞いたことがある。そのどこかよりも、重要なのは、内容・・・・。

地獄監獄と言うのは、その名の通り、地獄のような監獄。どんな場所かはわからないけれど、まずい場所だったと言うのは覚えてる。具体的な内容は書いてなかったようだけど、インパクトが残っていた。

僕は、その人達が去った後も、しばらくの間はその場で立ち尽くしていた。まさか、亜修羅が地獄監獄に入れられてしまったとは・・・。

どうしようかと迷う。地獄監獄の場所なんて知らない。でも、魔光霊命のいる場所も知らない。

僕は、もうヤケになって、もう一度ドームに戻ることにした。もう一回暴れてやろうと思ったんだ。

いや、それは嘘だけど・・・・って、何やってるんだろうな、僕。

ため息をつきながら裏口から中に入った時、廊下の隅でヒソヒソと話す声が聞こえた為、僕は身を潜めた。

なんだか最近、妙に盗み聞きをすることが多くなった気がする。

「どうやら、魔光霊命様が、このドーム内にいるらしいね」

「本当かよ?あの牢屋に閉じ込められてたんだぞ?」

「でも!なんだか、人間の男の子と妖怪の男の子と一緒に、例の妖怪の閉じ込められていた牢屋のところに行ったって言ってたよ!」

「マジかよ・・・あの、地獄監獄に連れて行かれた奴か・・・・なんで抵抗なんかしたんだろうな」

「そんなの私に聞かないでよ!わからないんだからさ。それにしても、もう、種族争いは終わっちゃうのかな?」

「そうなるんじゃないのか?俺にもわからないが・・・・」

僕は、ある程度の話を聞き終えた後で、さっさとその場を離れると、たまたま通りかかった神に、亜修羅の閉じ込められていた牢屋の場所を聞いた。

普通なら、敵である僕に、素直に教えるはずがない。

でもね、あんな風に暴れた後だと、僕の顔は割れているから、素直に・・・・いや、怖がりながら教えてくれたんだ。

とりあえず、一番近くにあったエレベーターに乗り込むと、地下へ

のボタンを押して、ため息をつく。

エレベーターはちょっと苦手だったりする。狭い場所に閉じ込められたような気分になるからね。

もし、エレベーターの移動途中に止まったりしたら、大変なことに・・・・。

僕がそんなことを考えている時、不意に、ガタンッとエレベーターが揺れた。

その揺れで、とても不安になって、エレベーターの階数表示を見るけれど、電気がついていないようで、ボタンを適当に押しても反応しない。

そして、困ることが、神の世界のエレベーターには、非常用の電話マークのボタンがないんだ・・・・。

僕は、それを確認して、大きくため息をついた。まさか、こんなところで邪魔が入るなんて・・・・。

しばらくの間ボーッとしていたけれど、ハッと我に帰って、天井を見上げるけれど、上に出入り出来るような場所はない。と言うことは、強引にエレベーターの扉を開けるしかないのかな?

僕はため息をつくと、大きく息を吸って、扉を蹴ろうとしたその時、再びエレベーターが大きく揺れて、僕はバランスを崩して転んだ。

大きく振りかぶっていたから、転んでしまったんだ。

「痛ったいなぁ～」

思い切り頭をぶつけてしまって、ため息をつくけれど、エレベーターが動いてくれたから、まぁよしとしよう。

頭を押さえながらよろよろと外に出ると、激しく口論しているのが聞こえる。

何かと思ってそちらの方に歩いて行くと、誰かが突き飛ばされて、しりもちをついている。

そちらの方に走って行くと、桜っちだってことがわかった。

「おおっ、桜っち、お久しぶり！」
「あっ、凛君！」
「どうしたの？色々あったみたいだけど・・・・」

「魔光霊命様が・・・・」
「魔光霊命がどうしたの？」
「とっ、とにかく、ここから逃げましょう。危ないですから！」

よく状況も読めないまま、桜っちに腕を引かれて、窓から外に出ると、連れて行かれる。

「一体どうしたの？」
「魔光霊命様が、殺されてしまいました！」

天界への階段

「またまたぁ～、そんな嘘言っちゃってさ！」
「嘘を言ってどうするんですか！」
「・・・・マジ？」

「ええ。神羅さんが確認した時には、既に息が止まっていたようで・・・・」
「僕がいない間に、一体何が起きたの？」
「・・・・実は、幸明と魔光霊命様は、兄妹だったらしいんです」
「ワオ！じゃあ、家族！？」

「あっ、ええ。実は、物凄く仲のいい兄妹だったらしいのですが、大きくなるに連れて、実力差が開き、段々溝が出来て行ったらしいです。そして、最近になって、種族争いを始めた頃からは、互いの意見が食い違い、話もしなくなったそうです」

「でっ、でも・・・・これからどうするの？魔光霊命がいなかったら、何も出来ないよ！」
「はい、そうしたら、修さんを助けろと言ってました。天界への道を開くことが出来る笛を渡してあると言っていたので」

「えっ・・・・？」

そう桜っちに言われて、ふと、亜修羅に何かを投げ渡されたことを思い出して、ポケットを探ってみると、やっぱり、銀の笛のようなものがあった。

「こっ、これ？」

「なっ、なんで凛君が持ってるんですか！？」

「一回亜修羅と会ったんだよ。その時に投げ渡されたんだ。何かは教えてもらえなかったけど、とりあえず、もらっておいたん・・・・」

「行きますよ！」

僕は、最後まで言葉を言わせてもらえずに、桜っちに腕を引かれて走り出す。

「どっ、どこに行くの！？」

「とりあえず、天界へ行く階段を出現させなくちゃいけません！」

「神羅はどこに行ったの？」

「魔光霊命様を病院に預けた後、修さんを助けるらしいです」

「なるほど・・・・で、これから僕らはどこへ？」

「あの・・・・だから、天界への階段を出現させる為に、カンテス湖へ行くんです」

「ああ、あの、聖なる泉と言われてる湖？」

「そうです。急ぎましょう！」

「でも、天界と言うところに行って、何をするの？」

「とっ、とりあえず、カンテス湖に着いたので、僕の言う通りに動いて下さいね」

そう言われて腕を離されたから、僕は笛を取り出すと、大きく息を吐いた。

目の前には、とても大きな湖が広がっていて、その湖の中央には小

島があって、そこに大きな樹があった。なんだか、聖なる泉と言われなくても、神々しい気配を感じる。

それだけでも神秘的なんだけど、さらにそう思わせる理由は、水の色にあったんだ。普通の水は透明なんだけど、ここ、カンテス湖の水の色は、綺麗な青色なんだ。それが更に神秘的に思わせるんだよ。

「えーっと、まずは、こうして、こうして・・・・」

桜っちは、一人ブツブツ何かを言いながら、近くに転がっていた石で魔方陣のようなものを描くと、僕にそこに乗るように言う。

何が起こるのかワクワクしながら立っているけれど、何も起こらない。

「あれ?どうしたの?」
「あっ、そうでした!この塩を・・・・」
「えっ、塩!??」
「じっとしてて下さい!」

なんだかうそ臭いなって思うけれど、一応おとなしく魔方陣の真ん中に立っている。

すると、桜っちは、魔方陣の外側の円に、一定間隔ずつ、塩を小さい山にしておいて行った。

こんなんで何が出来るのかわからないけれど、やっぱりおとなしく立っている。

「そうしたら、凛君に残りの塩を振りかけるので、目を瞑ってて下

さいね」
「えっ、そんな・・・・」
「ごめんなさい、世界を救う為だと思って我慢して下さい！」
「・・・・了解！」

僕は、思い切って目を瞑ると、サッと塩を振りかけられて、しょっぱい。

ため息をついて目を明けようとした時、突然周りが明るくなって、思わず目が眩んだけれど、眩しくなったのは、その一瞬だけだった。

「大丈夫ですか？」
「うっ、うん。でも、これに意味があるの？」

「はい、実はあるんです。天界への階段を出現させるには、カンテス湖に入る必要があるのですが、その際に、体を清めないと、カンテス湖には入れないんです。だから、体を清めたんですね」

「なるほど・・・・。で、次の手順は何？」
「次は、カンテス湖に入ってもらえますか？」
「了解！」

僕は、カンテス湖の近くまで歩いて行くけれど、中に入ることが躊躇われる。入ってもいいと言われても、こんな綺麗な湖に、足を踏み入れていいものかと躊躇われるんだ。

でも、それじゃあ、天界とやらに行けないから、なんとかカンテス湖に足を踏み入れると、その水の冷たさに全身が震えたけれど、なんとかそのままジャバジャバと奥に向かって歩いて行く。

「中央の樹の場所まで行ってもらえますか？」
「桜っちは来ないの？」
「僕は、一応体を清めましたけど、あんまり大人数で行ってはいけないかと思いまして・・・・」
「そっか。そっちの方がいいかもね。ものすっごい冷たいから」

水が腰の高さまで来た時に、やっと中央にある樹までたどり着いたけど、これからどうすればいいのか。

「で、これからどうするの？この樹の植えてある小島に乗っていいの？」
「あっ、ダメです！その樹に向かってお辞儀をしてから、その樹の周りを三回回って下さい」
「えっ、めんどくさ・・・・」

そうつぶやきながらも、小島の周りを歩く。けれど、樹の幹が思った以上に太くて、面倒だ。

やっとの思いで三回回り終えると、大きく息を吐いた。

「そうしたら？」

「そうしたら、小島に乗っていいですけど、再び樹の周りを、今度はさっき回った方向とは逆向きに三回回って下さい」

「・・・・」

何とかため息をつかないように息を止めると、大またで樹の周りを三回回る。

「そしたら?」
「そうしたら、樹の幹に触りながら、願いを込めて、銀の笛を短く三回吹いて下さい」
「わかった!」

やっと笛の出番か・・・と思いながら樹の幹に触ると、願った。

「どうか、天界への扉を開いて下さい。そして、魔界を助けて下さい」

小さくつぶやくと、ポケットから笛を取り出し、短く三回吹いた。

すると、突然空が曇って来て、早くも雨が降って来る。

「なっ、何?どうなってるの?」
「凛君、戻って大丈夫ですよ。天界への階段が出現しました」
「了解!」

僕は、安堵のため息をつきながらカンテス湖から出て来て、振り返る。

すると、天界への階段が出現しているのが見えた。

不思議なことに、階段の先は雲を突き抜けていて、その部分だけは雲が避けるように晴れていた。

「とっ、とりあえず、上る?」
「はい、行きましょう!」
「よしっ、行くぞ!」

桜っちの勢いに乗せられて、僕は大きく返事をすると、透明に近い黄色の階段を上って行った。

「お前は！」
「俺のせいにすんじゃねぇよ。こいつをこんなふうにしたのは、幸明だ。お前らの絶対的信頼を受けてるな」

「そんな・・・・」
「信じられないなら、お前の目で確かめてみろよ」

信じられないと言った様子で俺の方を見る医者にそう告げると、さっさと病院を出て、再びドームに向かう。

族長の閉じ込められていた牢屋の看守なら、族長の居場所を知っているかもしれないと思ったのだ。

そのまま、早足で歩いていると、不意に話しかけられた。

「お前、もしかして、頭脳種族族長の護衛の奴か？」
「・・・誰だよ、あんた」
「俺の正体なんか、どうだっていい」
「そんなことねぇよ。俺にとっては大したことだ。お前、なんでこんなところにいんだよ。妖怪だろ？」

「俺は、前期頭脳種族族長の、瑛雅と言う者だ。昨日の夜まで、現在の族長と同じ部屋の牢屋に閉じ込められていた」

そう言われた途端、自然と体が反応した。

こいつ、何かを知ってるのか・・・・？

「お前、何か知ってるのか?」

「ああ。俺達は、昨日の夜、牢屋から脱走した。そして、あいつは、俺を逃がす代わりに捕まり、地獄監獄に閉じ込められた。俺は、あいつに託されたんだ。魔光霊命を探し出し、魔界を助けて欲しいと」

「魔光霊命は、幸明の手によって息を引き取った・・・・」

「それじゃ、どうするんだ?」

「・・・俺の知り合いが、天界と言う場所に行って、天命と言う奴に頼みに行くらしい。その天命と言うのは、宇宙をつかさどる神だ。だから、幸明なんかより、ダントツで偉い。そいつに頼みに行って、俺は、族長を助け出すことになってるんだ。そんで、その地獄監獄って、どこにあるんだ?」

「・・・わからない。あそこは、幸明と、その側近の者しか知らない場所だからな」

「そうか。なら、力ずくで教えてもらうまでだ」

俺はそう言うと、その、瑛雅とか言う奴のことを無視してドームに向かう。

あいつの居場所なんか知らない。ただ、ドームにいるような予感がしたんだ。

「お前、こんなところに来てどうするつもりだ?」

「あんたも俺のことを手伝うのか?それだったら言ってやってもいいけど、そうじゃないなら、俺は、あんたに何かを教える義務はな

い。なんせ、族長を危険な目に合わせた本人だからな」

「当たり前だろ？大人が子供に助けられたんだ。情けないことこの上ない」

「・・・・まぁ、いいか。でもまぁ、まだ、俺はあんたを認めてない。俺が信頼するのは族長だけだ。とりあえず、このドームの最上階に行こうと思う」

ドームの中に入り、エレベーターに乗り込むと、最上階の十四階のボタンを押す。

なぜ最上階にいるって思ったのかって？そんなの、ラスボスは大体最上階にいるって決まってるからだ。

そんなに単純でいいのかって思うかもしれないが、俺は生憎、今までそうやって気分で生きて来たからな。それが俺の生き方なんだ。

十四階につき、エレベーターの扉が開いた先に見えたのは、真っ直ぐ続く長い廊下だった。そして、その先には大きな扉がある。きっと、あの先にいるだろう。

「おい、二手に分かれないか？」

「・・・・？」

「あいつのことだ。きっと、何人も付添い人がいる。そいつは俺がやる。お前は幸明をやるって言うのはどうだ？」

「・・・・別にいいけど、変な気を起こすなよ。俺は、あんたを敵とみなしている。変な行動をした途端、命はないと思ってくれよ」

そうだ。俺は、こいつを信用していない。それは、こいつに限ってじゃない。俺は、元から人を信用しない性質なのだ。

凛達だってそうだ。敵とはみなしていないものの、族長を襲おうものなら、殺してでも止める。

俺が、本当に信頼しているのは、親でも仲間でもない。族長だ。

守れと言われた族長。例え族長に襲われても、俺は抵抗しないだろう。守れと言われた人を傷つけることは、俺には不可能だ。

なぜ、俺がここまで人を信じなくなったのか・・・・いや、これはどうでもいいことか。話すのはやめよう。

扉の前まで来ると、俺は大きく深呼吸をした。そして、左手で扉を押すと、すぐさま刀を抜き、部屋の中に入った。

すると、やはり、ここは幸明の部屋らしく、奥の方に幸明が座っていて、ニヤニヤとこちらを見ている。

周りの使い達は、俺達の登場に驚いた様子だが、俺達を止めるべく、大声を上げて襲って来る。

しかし、俺はそいつらの攻撃を避けると、さっさと幸明の方に走って行く。あいつらは前期族長がなんとかするとか言っていたからな。だから、俺は幸明をやるんだ。

「随分と荒い登場の仕方ですね」

「おい、族長をどこにやった?答えないと、お前の首が飛ぶぞ」

「いいんですか?そんなことをしたら、地獄監獄の場所がわからないままですよ。それに、彼はもう死んでいるかもしれません。自らの手で。こちらは、彼をなんとか死なせないようにするので精一杯ですからね」

「・・・どう言うことだ?」

「戦うんですか?なら、私の部屋ではやめていただきたい。場所を移動しましょう」

そう言われた途端、場所が変わっていて、どこかの屋上のような場所に立っていた。

「さて、では、やりますか?」

「・・・死んでも知らねぇぜ」

「心配は無用です。それに、私が死んだ時点で消えますからね。地獄監獄の存在は」

「どう言うことだよ?」

「あそこは、私が作り出した幻で成り立っています。もともとは、何もないところに私が作り出した幻です。だから、私を殺した途端、その地獄監獄ごと消えてなくなります。と言うことは、なかにいる者達も消えるのですよ」

「・・・とことんせこい奴だな」

「せこくありません。素直に牢屋に閉じ込められていればよかったのです。しかし、その掟を破ったから、ちょっとした罰を与えたのですよ」

「お前、なんで種族争いなんてやろうと思ったんだよ?意味わかん

ねぇよ」

「娯楽の一つですよ。ただ、それだけです」

「・・・そうだよな。実の妹を殺すぐらいの奴だからな。俺達みたいな他人同士が殺し合っていたとしても、なんとも思わないよな」

「ふん、あなたは何も知らないのですね。自分の無力さを知って、尚もそんなことを言い続けることが出来ますか?」

「・・・どう言うことだ?」

「例え、私が地獄監獄の場所を教えたとして、あなたがその場所へ行って、彼に会う。しかし、彼は死にたがっている。それをあなたは止めることが出来ますか?」

「・・・・」

「地獄のように苦しいことをされて、死にたいと思っている主人に、あなたは生きろと言えますか?それこそまさに、鬼じゃないですか?」

「・・・・」

「しかし、そこまで言うなら、やってもらいましょう。もし、あなたが彼を説得して、彼と一緒に私の前に現れることが出来たら、種族争いをやめてもいいでしょう。その変わり、あなたがそれに失敗したら、種族争いよりも、もっとスリルのある戦いを実現させます。どうしますか?この駆け引き。やってみますか?」

うなずきたいと思う。しかし、心の片隅が邪魔をする。

本当に出来るのか?もし、失敗したらどうなるんだ?

そんな思いが片隅にあって、うなずくことすら出来ない。自分でも情けないと思うが、冷や汗が出て来た。

「無理だと思うなら、やめた方がいいでしょう。生半可な気持ちで生きろと言われては、彼が可哀相ですからね」

「・・・・生半可なんかじゃねぇ!俺は、族長の護衛になった時から、ずっと族長を守ることを決めたんだ!」

「・・・・そうですか。ならどうぞ。私は止めません。その代わり、失敗した時の代償・・・・その予想はついてますよね?種族争いよりも酷い惨事・・・・」

「心配するな。俺は、必ず族長を死なせない」

「では、その言葉、後で後悔しないようにして下さいね。もう、言い戻りは出来ません。では、ここから中に入って下さい。そうすれば、自然と地獄監獄内に繋がりますよ」

そう言って幸明の指差した先には、モヤモヤとした、明らかに変な空間があった。

俺がそこに入ろうとした途端、幸明が小さくつぶやいた。

「地獄監獄へ一度入れば、あることをしない限り、二度と出られませんよ」

「今更脅しなんか、神がすることじゃねぇぜ。絶対族長を連れて出

て来る。それまでそこでおとなしく待ってろよ」

俺はそう言うと、地獄監獄に繋がる空間に足を踏み入れた。

解決策

「今、何段目かな？」
「確か、二千七百三十六歩、今、二千七百三十七歩目です」
「げっ、何段上ってるのさ・・・・」
「でも、まだまだ階段は続いてますよ。どうなってるんでしょうね」
「うーん、そんなに階段ある・・・・」

僕は、今までそんなに多くの階段を上って来たのかと思って後ろを振り返ると、今まで上って来たはずの階段が消えていて、僕の立っている段すらも消えかけている。

今、僕らのいる高さは、役二百メートルぐらいだ。だから、何もかもが小さく見える。そんなところで階段が消えて行くと思ったら、慌てるのは普通だよね？

「かっ、階段が消える！？」
「なっ、そんな・・・・」
「いっ、急げ！」

僕は、状況を把握出来ていない桜っちの腕を引くと、階段を二段飛ばしで駆け上る。

「なんでそんなに急いでるんですか？」
「階段が！」
「でも、二段飛ばしで階段なんかを上ったら転んでしまう・・・・」
「あっ！？」

僕は、桜っちに言われた途端、無様に転んでしまった。

でも、痛みはなく、何とか起き上がると、そこはさっきの階段ではなく、まさしく雲の上と言えるような場所であった。

「ここ・・・・天界？」

「どうなんでしょう？でも、これって雲の上ですかね？」

「うーん、こんなフワフワした感触なのかね？そもそも雲って、なんだっけ？」

「雲とは、空気中の水蒸気が集ったものですね。ですから、実際は雲の上に乗ることは出来ません。となると、これはどこですか？」

「あなた達、この場所になんの用ですか？」

そう声をかけられて、僕らは自然と後ろに下がった。だって、怖いからさ。

「あなたは・・・・誰ですか？」

「私は宇宙を司る神、天命です。魔光霊命の願いを受けて、魔界の時は止めてあります。まだ何か御用ですか？」

「えっと・・・・。その、魔光霊命様が・・・・幸明の手で殺されてしまったんです。でも、その前に、魔光霊命様が教えてくれたんです。天命様のところに行けと。なので、天命様のところに来たんです」

「そんな・・・・」

僕の言葉に、天命様は言葉を失ったようで、そのまま一分間近く固

まってしまった。

「だから、助けて下さい！」
「そうと言っても・・・・出来るかどうか・・・・」
「お願いします！助けて下さい！！」

「・・・・魔界の様子はよく知っています。ですから、あの惨事を止めようと思うのですが、幸明を倒しても、あれは止まりそうにありません。幸明以外にも種族争いを楽しんでいる者達がいます。その者達が、幻を見せる霧を魔界に投下してしまえば終わりです。ですから、今は、幸明を倒すことよりも、その争いの原因である霧を消し去ることが一番です」

「なるほど・・・・と言っても、あれって、幸明の力じゃないんですか？」

「いえ。確かに、あの者は力がありますが、あれだけ広い世界に霧を落とせるほど力はありません。原因は、別のところにあると考えられます」

「うーん、霧の発生場所がどこなのかわからない以上、僕らはお手上げだよね」
「そうですよね。強大な力で幻影効果を持っている霧を発生させる場所ですか・・・・そんなところ・・・・」

そうつぶやいてから、桜っちの様子が変になった。明らかに驚いていて、目を見開きながら、ぶつぶつ何かを言っている。

「桜っち、どうしたの？」
「僕・・・・心当たりあるんですよね・・・・」

「まっ、マジ！？」

「はい。学校で習ったことなんですけど、神域の隅の方に、邪悪な気を放つ森があるそうです。確か、そこに入った者は、強い催眠状態に陥るんです。だから、そうかなって思ったんです」

「うわぁ！ビンゴだよ、ビンゴ！よしっ、そうとなったら行こう！」

そう言って桜っちの腕を引いて天命様の前から消えようとすると、不意に呼び止められた。

「あそこは危険です！入ってはいけません！でないと、死んでしまいます！」

「大丈夫ですよ、天命様！僕らはこれでも強いんだ！」

「そうではありません。そちらの少女が言っていた通り、あの森の霧には強い催眠効果があり、幻を見せられることがあります。ですから、その催眠に打ち勝つぐらいの強い精神力がなければ、あそこを出られません！」

天命様は、とても真剣に言っているようだったけれど、僕らは「えっ！？」って聞き返してしまった。

だって、天命様、今、桜っちを指差しながら、「そちらの少女」って言ったんだ。「少年」じゃなくて、「少女」。

桜っち、僕って言ってたのに・・・・。わざとじゃないのはわかってる。パッと見は、女の子みたいだからね。でも、僕って言ったのに、女の子だんて・・・・。

「あの・・・・天命様？」

僕が恐る恐る手を上げて、その間違いを訂正しようとすると、今までずっと、うつむいて口を閉ざしていた桜っちが、僕の腕を？んで首を振っている。

僕は桜っちに近付いて、小声で話す。

「えっ、訂正しなくていいの？」

「仕方ないですよ。こんな声ですし、見た目も女の子みたいですからね。それに今は、そんなことよりも天命様の話を聞きましょう」

「まぁ、桜っちがいいって言うならいいんだけどさ。後で後悔しない？」

僕の問いに、桜っちは数秒ぐらい固まっていたけど、うなずいた。

「どうしたのですか？」

「いえ、なんでもないです。それで、話を戻しますが、僕らは大丈夫です！強靭な精神力を持ってます！大丈夫です！きっと魔界を救ってみませます！」

僕は、大きく胸を張って言った。

危険な森へ突入！

「どうしたのですか？」

「いえ、なんでもないです。それで、話を戻しますが、僕らは大丈夫です！強靭な精神力を持ってます！大丈夫です！きっと魔界を救ってみませます！」

僕は、大きく胸を張って言った。

「本当は、私が行きたいのですけれど、いつ、何が起こるかわからないので、ここから動くことが出来ないのです。せっかくここまで頼みに来ていただいたのに、申し訳ありません。せめて、魔光霊命の命を救えるように努力をいたします」

「はい！とりあえず、目的地は、神域の最果てに位置する邪悪な森。で、目的は、そこの霧を撤去する・・・・？ところで、どうやって霧を無くすんですかね？」

「多分、あそこには、邪悪な霧を発している何かがあるはずです。それを倒せば霧は消えるでしょう」

「うーん、了解です！とりあえず、目的地に向かってみます！」

僕は、天命様に敬礼をすると、クルッと後ろを向いて、歩いて行こうとする。しかし、またも引き止められた。

「これを持って行って下さい」

そう言って投げ渡されたのは、明らかに毒々しい紫色をしていて、

しかも、ドロッとしている液体の入った小瓶だった。

「・・・これは？」

「これは、催眠を解く・・・・言わば、解毒剤のようなものです」

そう言われて、とても不審に思う。

天命様を信じてる信じてないの問題以前に、この液体の色が、明らかに毒だと告げているんだ。だから、逆に、解毒剤と言われて驚いた。

「催眠にかかると、まずは暴れます。そして、しばらくすると、息が荒くなり、頭痛やめまいがします。この時は、もう暴れません。催眠は解けていますからね。それからしばらくすると、死に至ります」

あまりにも淡々とした口調で普通に死ぬとか言われたから、思わず聞き流しそうになった。

「えっ！？死んじゃうんですか？幻を見せる霧じゃないんですか！？」

「あそこの霧には、幻を見せる効果と、猛毒効果があるのです。ですから、長時間あの場にいては死に至ります。長くても、せいぜい一時間以内に外に出て、新鮮な空気を吸わないと、死に至ります。と言っても、頭痛やめまいがしない状態の時は、まだ安心して大丈夫です。ですが、そう言う症状が出た場合、直ちにその薬を飲ませて下さい」

「えっ・・・・飲むんですか？この毒を？」

「毒ではありません。解毒剤です」

「わかってますけど・・・・これ、明らかに『俺は毒だ！誰も飲むんじゃねぇぞ！』って色してるじゃないですか！」

「そう言って飲まなければ、死にますよ。進行が早いのが難点なんです。頭痛やめまいがした三十分以内にこの解毒剤を飲ませないと、その者は死ぬだけです」

「えっ・・・・それなら、空気を吸わなければいいってことですか？」

「そう言うことですが、体からも中に入って来る上、防護マスクも意味のないようなものです。ですから、せいぜいハンカチで口を覆うぐらいでいいでしょう。下手に重装備で行って動きが遅くなるよりは、軽装備で挑んだ方が、生存確率はあるでしょうから」

「・・・了解です！僕、必ず種族争いを断ち切って見せます。だから、天命様もお願いしますね！」

「ええ、しかし、くれぐれも気をつけて下さいね」

「大丈夫です。っね、桜っち！」

今までずっと、僕と天命様で話をしていたのに、急に話を振られた桜っちはうろたえたけれど、雰囲気を上手く読んで、大きくうなずいた。

「はい、僕達に任せて下さい！」

「・・・わかりました。ご武運をお祈りします。今私が出来ることは、せいぜい、あなた達を目的地に飛ばすことです。今から行き

ますか？」

「はい！」

僕が大きくうなずいたのとは裏腹に、桜っちはなんだか心配そうな顔をしていたけれど、僕が肩をポンと叩いて笑いかけると、笑い返してくれた。

「では、どうかご無事で」

「ありがとうございます。天命様も、頑張って下さいね！」

僕がそう言った後、天命様が、優しい微笑みを浮かべたのが見えた。

だけど、直ぐに景色が変わったから、一瞬しか見えなかったんだけれど、どことなく、雰囲気が魔光霊命様に似ているような気がした。

「さて、ここかな？」

「・・・みたいですよね。明らかにまずい色をしてますし・・・」

僕らの目の前には、確かにそれらしい森があった。

それと言って、普通の森と大差ない気がする。でも、違うところが一つある。それは、森の中の空気が紫色をしているんだ。明らかに毒ガスってわかる色の空気。

こんなところを防護マスクもなしで行くなんて危険だと思ったけれど、天命様の言葉を信じて、ハンカチで口を押さえる。

これだけの方がいいって言ってたんだ。もう、天命様の言葉を信じ

るしかない！

「なんか、飲み込まれそうですけど・・・・」

「大丈夫！僕らは魔界の英雄になる為に、頑張るんだ！」

「英雄？」

「そうだよ！無事に帰還したら、テレビとかの取材が来て、きっと、歴史に残る英雄になれるんだ！これは、その為の試練だと思えばいいよ！」

「・・・・はい、頑張りましょう！」

桜っちの不安そうな顔は消えたけれど、僕だって不安なんだ。表情には出さないだけで、本当は物凄く怖い。心臓を握る潰されるような感覚がしてる。

でも、約束したんだ。絶対に魔界を助けるって。それに何より、あの亜修羅に託されたんだ。絶対に諦められない。ここでやめちゃったら、僕の負けだ。

「よしっ、皆様、これから僕達は、この不気味な森に飛び込みます！準備はいいですか！三、二、一・・・・ゴー！」

僕は、大声でそう叫ぶと、時計の針を確認している桜っちを引っ張って森の中に突っ込んだ。

地獄監獄の内部事情

「ここが地獄監獄・・・・なのか？」

俺は今、地獄監獄らしい場所にいる。

なぜ、らしい場所かと言うと、俺の想像していた場所とは明らかに違っていたのだ。

俺が今いる場所は、暗く閉ざされた場所なのだが、隙間から外を覗くことが出来る。

しかし、見えた光景は、作業服を着た奴らが流れ作業で何かを作っている様子だった。

俺が想像していた地獄監獄と言うのは、本当に、明らかに地獄のような場所かと思ったのだが、どうも想像とは違っていたようだ。

とりあえず、どこからか出られないかと辺りを手当たり次第に触っていると、急に警報のような音がうるさく鳴り響き、地獄監獄内の照明が真っ赤に変わった。

俺は驚き、かなり慌てたけれど、とにかく逃げ延びることが先決な為、部屋の隅にあった扉から外に出ると、一気に走り出す。

「不審者がいたぞ！追え！！」

「やっ、やべっ！」

振り返らずとも見つかったとわかり、全速力で逃げる。

それにしても、ここは大きな迷路のようだ。同じような景色がずっと続いていて、迷子になりそうだ。

そんなことを思いながら走っていると、不意に、目の前に俺を追っていた作業員の奴らが立ちふさがった為、俺はギョッとした。

通路は、俺が今走っている道しかないはずだ。それなのに、どうして俺よりも先回り出来たんだ？

しかし、俺なんかよりも、ここで働いてる奴の方がここの地理に詳しいのは事実だ。きっと、一方通行と見せかけて、隠し通路みたいなのがあるんだろう。

そいつらは笑みを浮かべると、俺に飛びかかって来るが、何とかそれを全て避けると、攻撃すらも加えずに、すぐさま方向転換をすると、再び走った。

一方通行だから、あいつらの前から俺の姿が消えるのは、ゆるいカーブの時だけ。

ここは所謂、螺旋階段のようにグルグルとなっているのだ。だから、撒くには、その一瞬の隙で逃げるしかない。だが、どうやって・・・？

走りながら辺りを見渡すが、どこも逃げられるような場所はない。ただ、扉が沢山あるだけで、それ以外はほとんど何もない。

そこで、次のカーブに来た時に、その扉の中の一つに入ってみようと思った。

そして、遂に、次のカーブが見えた。俺はそこでスピードを上げると、一番最初の扉を開け、急いで閉めた。

そこで大きく息を吐くと、扉に寄りかかり、少し休憩をする。

こんなに本気で走ったのは久しぶりだ。それに、距離も半端ない。きっと、十キロ近く走っただろう。全速力でそんなに長い距離を走ったら、いくら俺だって疲れる。

ため息をつきながらよろよろと立ち上がり、部屋の奥に歩いて行くと、何か機械のようなものを見つけた。

「なんだ?これ??」

適当にボタンを押してみると、今まで真っ暗だった画面が光り出した為、急いで飛び退いたけれど、直ぐに画面に近寄る。

そこには、何かのデータのようなのが映っていた。左上に顔写真があり、そのとなりに名前らしきものと、住所らしきものが長々と書いてあって、一番下に、ロック設定と言うものがあった。そこをいじくると、ロックを解除しますか?と言う質問が出た為、とりあえず、ロックを解除した。

すると、突然後ろからピーッと言う音がした為、声は上げなかったものの、五メートルぐらい飛び退いた。

「お前、どうして私のロックを解除した?」

「ん?お前、誰だよ?そもそも、俺がお前のロックを解除したって

どう言うことだよ?俺、お前の牢屋にロックを解除したって言うのか?」

「でもまぁ、解除してくれてありがとう。よければ、他の者のロックも解除してやってくれないか?」

「ちょっと、訳を聞かせてくれないか?」

「とは?」

「お前は確か、詐欺で捕まったそうだな。懲役期間はそこまで長くなく五年。それなのに、五年過ぎても牢屋から出してもらえず、抗議をしたところ、ここに連れてこられた。だから出した。でも、自分が悪くて閉じ込められている場合は別だぞ」

「大丈夫だ。みな、逆らったと言うだけで閉じ込められた者達だ。そしてここは、牢屋なんてものじゃない。拷問部屋と言うに等しい」

「・・・そうか。ところで、最近ここに連れて来られた人はどこにいるか知ってるか?」

「ああ、あの上級神者か。あいつは可哀相なことに、もっとも辛い刑を下される地下にいるぞ。ここは三階だから、まだマシなぐらいだな」

「そうか、ありがとな。よしっ、そんじゃ、行くか!」

俺はそう言うと、ゆっくりと扉を開いて外の様子を伺うが、相変わらず、サイレンと赤い照明は変わっていない。

それにしてもここの扉を閉めると、外からの音は全く聞こえない。

それがとても不思議だった。

「これ、止められるか？」
「わからぬ。だが、止められないこともないだろうな」
「よしっ、ちょっとやってみるか」

俺は、適当にボタンをピコピコ押していると、セキュリティー設定と言うものを発見した為、それの警報機能をオフに設定をした。

「おしっ、これでＯＫだ！」
「そう言えばそなた、なぜ、その機械に触れることが出来るのだ？我々は触れなかったぞ？」
「ああ、それはきっとな、俺が神じゃないからな！俺は、頭脳種族族長の護衛なんだ」
「そうなのか！？」

俺の言葉にそいつはかなり驚いた顔をしたが、直ぐに真顔に戻って、急に土下座をしだした。

「なっ、どうした！？」
「すまない！我々は、そなた達の命をもてあそぶようなことをして楽しんでいた！」
「ああ、その話か。別にいいぜ。今年で種族争いの歴史がなくなる。俺の仲間が言ってたんだ！」

「そうか・・・それならよかった！」
「ああ、そんなちっさいこと気にすんなよ！それより、早くみんなを助け出そうぜ！」

本当は、許されるようなことじゃない。だが、今、こいつに怒ったところで何も変わらない。だから今は、早く族長を助け出すことが

先決なんだ。

再び扉を開け、外の様子を伺うと、もうサイレンは鳴っていなかった為、深くため息をついた。

「そちらから行くよりも、こちらから行く方が効率的だろう」

そう言って、そいつが指差す先は、何もない壁だった。

「何にもないぞ？」

「ここのレバーを下ろせば・・・・」

そう言って、そいつは・・・・そう言えば、まだ名前を聞いてなかったな。

「おい、あんた、名前は？」

「私は、灸縁」

「なるほど・・・・」

灸縁が、近くにあったレバーを引き下げると、何もなかった壁が突然動き出して、隠し扉が出来た。そして、向こう側に通路が見える。

「おおっ、この仕掛けで俺は追い詰められたのか！せこいぜ・・・・」

「とりあえず、先へ進もう」

「おう！」

俺は勢いよく返事をすると、灸縁の後に続いて隠し通路から外に出た。

森の奥へ

「うーーん、なんか、苦しいねぇ」

「そうですね。ハンカチで押さえていると言うのもあると思うんですが、それ以外にも何か訳がありそうで・・・・」

「毒・・・・かな？」

「でしょうね。このまま奥に連れて息が苦しくなったりすると思います」

「うわぁ～、耐え切れないような気がする」

「凛君、弱気になっちゃダメです！」

「・・・・だよね！よしっ、強気で行こう！勇者様！」

「えっ・・・・？」

「何の意味もないよ、ごめんごめん。突然大きな声を出して」

「いえ、別に大丈夫なのですが・・・・」

僕らは今、あの危ない森に来ているんだ。しかも、森の中。天命様は、危険だって言ってたけど、そこまで危険には感じないんだ。なんでだろうね？

でもね、息が苦しいから、毒なんだなってことを忘れない。まぁ、忘れない方が安全でいいんだけどね！

「今、森に入ってから何分経った？」

「五分経過しましたね。後五十五分なんですが・・・・この森の奥

へ行って帰って来るまでに、間に合うでしょうか？」

「でも、仕方ないよ。地図とかもらってないしさ。それに、二手に別れることも出来ない。だから、二人で地道に探していくしかないよ」

「あの・・・凛君？もし幻が見えて、凛君を遅ってしまったらすみません。その時は、全力で止めてくださいね」

「えっ、そんなことしないよ！僕は、攻撃を避け続けるから！」

「僕、一応、妖怪退治屋養成学校に通っていたんです。それに、自分で言うのも難ですけど、エリート・・・みたいな感じです。だから、結構強いです。だから、本気で戦って下さい。僕、凛君に怪我を負わせてしまうのは嫌です。なら、凛君に襲われた方がいいです」

そう言う桜っちの表情は、顔の半分以上が隠れて見えないけれど、視線が足元を向いていて、何となく悲しそうに見える。

うーん、何かがあったのかもしれない。桜っち、僕の記憶がない間に、僕は、桜っちに何かをした・・・の？

「あのさ、僕、桜っちに何かした？」

「えっ！？どっ、どんなことですか？？」

問いかけたはずなんだけど、逆に問い返されて、思わず目を伏せる。何かをしたような感覚がする。ただ、それが何かわからない。だから、なんとも言えない。でも、一番近いのは・・・。

「僕、桜っちのこと・・・・襲った？」

僕の問いに、桜っちが目を見開いて、うつむくのがわかった。それで、僕は悟った。自分は記憶がないといいつつも、桜っちを襲っていたことを。

変だと思った。桜っちの態度と、神羅の態度。それが、何となくぎこちなくて、亀裂が走っているように感じた。だから、もしかしたらって思ったんだけど、やっぱり・・・・。

「やっぱり、襲ったんだね」

「そっ、そんなことありません！凛君が僕を襲う理由がないじゃないですか！」

「・・・・」

僕は、桜っちの言葉に思わず息を詰まらす。そして、涙が出そうになって来る。

襲われたと言うのに、僕に気づかれないように隠して、バレたと知っても、尚、その真実を否定しようとする姿に涙が出て来たんだ。

「あっ、う・・・・凛君、どうかしましたか？」

「・・・・ごめんね。僕・・・・」

涙を堪えようとするけれど、堪えきれずに、涙が頬を伝った。それを見て、桜っちが慌てて立ち止まる。

「すみませんでした、泣かせるようなことを言ってしまって・・・・。僕、悪気があった訳じゃないんです」

僕は声が出ない為、無言で首を振った。今はこれしか出来なかった。ハンカチで鼻と口を押さえているから、涙も拭けない。

「あの・・・本当にすみませんでした。・・・泣かないで下さい。僕、どうしたら許してもらえますか?」

僕は、再び首を振ると、大きく息を吐いて、服の袖で涙を拭うと、桜っちに向かって笑った。

「うん、ごめんね。突然泣き出しちゃって・・・・」
「いえいえ、僕が悪いようなので、気にしないで下さい」
「でも、僕が立ち止まったから、随分と時間をくっちゃったね」

「そうですね、残り五十分です。大丈夫なんでしょうか?」
「うん・・・・ごめん」

僕がうつむいて謝った時、不意に、後ろからガサガサと草をかき分けるような音が聞こえた為、僕らは、自然と近くの大きな樹の裏に身を寄せた。

「こんなところに来るなんて、どうしたんだろうね?誰だろうね?」

「はい・・・誰なんでしょうね?こんなところに来るなんて、幸明ぐらいしかいないと思ってたんですけど・・・・」

「そんなまさか!こんなところに幸明がいる訳・・・・」

僕は、小声でそんなことを言いながら、樹に身を潜めつつも、外の様子を伺って、物凄く驚いた。だって、桜っちが言っていた通りの人物が目の前を通ったんだ。

僕らは、数秒、お互いに顔を見合わせた後、急いで幸明の後を追った。

なぜかって、幸明は、森に何回か来てるってことになるから、森の奥へと迷わずに行けるかなって思ったんだ。それに、やっぱり、心配だしね。こんな危ない森を一人で口すらも塞がないで歩くのは。

「幸明、どうして口も塞がないんだろう？大丈夫なのかな？」
「多分、神様だから大丈夫なんじゃないんですか？」

「うーん、どうなんだろうね？僕もよくわからないや。でも、なんだかついて行った方がいいと思うからさ」

「ですよね。やっぱり、この森に一人で入るのは危険ですからね」

僕らは、出来るだけ気配を潜め、ヒソヒソ声で話しながら道を歩く。

「今、何分経った？」
「二十分経ちましたね。後四十分です」
「・・・・なんだか、顔、赤くない？」
「えっ、そうですかね？」

「うーん、そろそろ桜っちに症状が出始めてるのかもしれない。僕は、特に変わったところはある？」
「・・・・ないように思えますが」
「そっか、じゃあ、体調が悪くなったら言ってね」

僕は、特に体調も悪い訳じゃないし、息が苦しいだけだから、別に、桜っちに何も言わなかった。

桜っちも、ここが危険な場所だとちゃんと理解しているから、いくら我慢強くても、取り返しのつかない時まで我慢することはないだろうと思ったんだ。だから、素直に引き下がった。

「もう直ぐで森の奥に行けるようですね」
「そうだね！このままだったら余裕で帰って来られるんじゃないかな？」

そう僕が言った時、前方で、バタッと言う何かが倒れる音がして、とっさにそちらの方向を向いた。

すると、今まで見えていた幸明の姿が消えてしまっている。

「今の音は？」
「急がないと！幸明が倒れたんだ！」
「えっ、あっ・・・・」

僕は、うろたえている桜っちの腕を引っ張って幸明のところまで行くと、死んだように動かない。

「しっ、死んでるのかな？」
「うーん、どうなんでしょうか？こう言う時に神羅さんがいると助かるんですけどね」
「とりあえず、えーっと、気道確保・・・・だっけ？」

「僕、応急手当の仕方は習っていないので・・・・とりあえず、心臓が動いてるかどうか確かめて見ましょうか」

「よしっ、こんな時は意識確認！幸明、聞こえますか～！」

僕が言うけれど、当たり前の如く、返事なんて返されず、桜っちは脈を計っている。

「一応脈はあったので、生きていることは生きています。ただ、この症状は重いので、薬を飲ませても、助かるかどうか・・・・」

「でも、何もしなかったら死んじゃうんでしょ?だったら助けよう!」

僕は、ビンを取り出す為にハンカチを脇に挟み、ポケットに入っている薬のビンを開けると、幸明の口に無理矢理押し込んだ。

「凛君、早くハンカチを!」

「・・・・ううん、それは出来ないよ。幸明をここにおいていくことは出来ない。となると、運ぶしかない。だから、押さえられない」

「・・・・でも、そうじゃなきゃ、もう、薬はないんですよ?」

「仕方ないよ。もし、僕が倒れちゃったら、幸明と一緒に外に出てね。僕のことは気にしないで」

「でも・・・・」

「大丈夫!」

一気に低くなってしまった桜っちのテンションを上げる為に明るく言うと、僕は、気絶している幸明を担いで、前に一歩踏み出した。

「んで、これで全員か？」
「・・・みたいだな。助かった、そなたのおかげだ」
「いやいや、礼なんていらないぜ。と言うより、なんで、地下への道がないんだよ！」

「・・・そこまではわからないのだ」
「それじゃ意味ねぇじゃねぇかよ。最悪だぜ・・・・」

俺はため息をつくと、近くの壁に寄りかかって、大きく息を吐いた。
族長を助けに地獄監獄に来たと言うのに、他の奴らを助けて、肝心の族長を助けられないのなら、意味が全くない。

「地下へ行きたいのか？」
「・・・ああ。知り合いが、地下の深い底に閉じ込められたんだ」
「俺、地下への道を知ってるぞ」

「本当か！？」
「ああ。だが、地下へ行くには、厳重な警備をすり抜けなければいけないぞ」
「そんなに厳重に警備されてるのか？」

「ああ、まず、監視カメラが二十ぐらいあり、赤外線センサーもあって、面倒なんだ」
「・・・・」

俺が無言でうつむいていると、再びそいつは口を開いた。

「だが、俺達神は、助けてもらった恩を返すように言われている。だから俺達は、お前の仲間を助けられるように努力をする。それに、これぐらいの人数がいれば、何とか全てを乗り越えることは可能だろうな」

「なるほど、よしっ、それなら、早速地下に行こうじゃねぇか！」

「いや、待て。まず、役割分担をしなければいけない。それに、ここから最短で行ける通路を考えないとな。今は警戒態勢がとられていないが、警戒態勢を取られたここは、まさに、地獄監獄と言うに等しい場所だ。警戒態勢がとられた時点で、この作戦は消滅する。だから、事実上、勝負は一度きりだ。誰かが失敗したら、そこで終わりだ」

そう言われて、自然と大きく息を吐いた。緊張感が体に走り、一気に体が冷たくなる。

「まずは、地下に行く人物を決める。それは、お前を除いて、後四人」

「なんで、そんなに大勢で地下に行くんだ?」

「万が一と言うことがある。だから、四人を予備として地下に送る。でないと、困るのはお前だ。そして、防犯カメラを破壊するのは二十人。そして、赤外線センサーを止める為に警備室に入り込む奴は五人。そして、地下への扉のロックを解除する奴が一人。この配置で、丁度全員に役割分担される。それぞれ相談を仕合い、役割を決めろ。以上」

そう言われた途端、みなが輪になって話し合いを始める。

俺は、子供の会議みたいだな・・・・とか呑気なことを考えていると、話を仕切っていた奴に肩を叩かれた。

「お前、大丈夫か？」

「・・・・は？」

「間違えた。お前の仲間は大丈夫か？」

「わからない・・・・。ただ、こいつが言うに、族長はもっとも地下・・・・一番辛い刑の場所に連れて行かれたらしい」

俺は、直ぐ近くにいた炎縁を目で見やりながらそう言うと、大きくため息をついた。

「まず、そいつが生きているのか確かめるのが先なんじゃないのか？」

「・・・・族長は生きてるさ」

「そんな保障はどこにもない。まず、生きているかどうかを確認しろ。もし死んでいたら、無駄になるからな」

俺はため息をつくと、深く考え込む。

どこを見たところで何も変わらない。ただ、目をウロウロと動かさないと、落ち着かないのだ。

「確か、地下を監視している部屋は、この近くにあるはずだ。俺が力を貸すから、お前の族長の様子を見に行くか？」

「・・・・」

「行きたくないなら行かないでいい。ただ・・・・」
「族長の様子を見ることが可能ならば、そうしたい。生きているかぐらいは確認出来るんだろ？なら・・・・」

「そうか。なら、みんなが決めている間に俺達だけで行くか」
「私もついて行くぞ」

そう言って近寄って来たのは、俺が一番最初に牢屋から出した奴。
炎縁だった。

「お前、どうしてついて来るんだよ？」
「そなたの族長と言うのを見てみたいと思ったのだ。どんな者なのか・・・・」
「まぁ、別にいいけどな、顔とかなんか、見えないかもしれないぞ。俺だってよくわかんね」
「それでもいい。ついて行こう」

俺は、うなずくと、そいつの後に続いてその部屋から出た。

「確か、ここの中に入れば見れるはずだ。今は丁度誰もいないみたいだな。入ってみよう」

扉を開けて中に入って見ると、中央に三つぐらいの椅子があり、それを囲むように液晶画面が並んでいて、色んな場所が映し出されている。

「どこだろう？」
「さあな。ん？」

一つだけ、気になる画面を見つけて、自然とその画面に見入る。

壁に貼り付けられ、視線を落としている人の姿が見える。髪が顔を隠して顔は見えないが、雰囲気で、族長だってわかった。

「あっ、族長！」
「どれだ？」
「これだ」
「百七十二番カメラのマイクを入れよう」
「ん？？」

意味がわからなくて、自然と首をかしげる。どうやら、俺達妖怪は、戦闘能力が高いが神ほど頭が働かないらしい。

「我々の声を、向こうに繋げる」
「そんなこと出来るのか？」
「ああ、出来る。向こうの声も聞こえるようにしよう」

まさか、そんなことが出来るとは思っていなかった為、俺は、自然とワクワクした気持ちになった。

「とりあえずこの様子だと、今のところ、地下には誰もいないらしいな。それなら、監視カメラからのスピーカーでいいな」

そんなことをブツブツ言われるけれど、俺は全く理解出来ない。でも、大事な部分だけ理解していればいいよな？

「とりあえず、ここに向かってしゃべってみてくれ」

そう言われて、マイクらしき何かに向かってしゃべってみる。

「・・・・族長？」

俺の声が聞こえたのか、族長の体が動いたが、声が聞こえることはなかった。

「・・・・大丈夫か？」

「・・・・・」

やっぱり無言のまま、体が微妙に動くだけだった。もしかしたら、言葉すら発することが出来ないのかもしれない。

「クッ・・・・」

そう思うとやりきれない気持ちになり、せっかく話せると言うのに、言葉が続かない。

その時、突然警備室の扉が開き、警備員が入って来た。

俺達は、なんとか済んでのところで影に隠れたが、さて、これからどうやって外に出ようか。

ついに発見！

「凛君、大丈夫ですか？」
「うっ、うん。全然大丈夫だよ」
「でも、息が上がっているのでは？」
「それは、幸明の体重が重過ぎてね・・・・」

僕は、何とか大丈夫だと言うことを示す為に、さまざまな言い訳を言っているものの、息が上がっていることを隠すことは出来ない。

頭が痛いし、なんだか吐き気がするし、頭がグルグルする。でも、それを桜っちに言う訳にはいかなかった。心配かけちゃったら困るからね。

「それにしても、森の奥遠いっ！」
「幸明・・・・大丈夫でしょうか？」
「うーん、あれから十五分ぐらい経ったと思うけど・・・・どう？」

「んーと・・・・あれ？」
「どうしたの？」

僕は、驚いている桜っちの腕時計を覗き込むと、残り四十分のままだった。さっきも四十分だったはずなんだけど・・・・あれ？

「なんか、止まっちゃってるの？」

「うーん、どうなんでしょうか？この時計、電波時計なので、遅れたりすることはないと思うんですけど・・・・」

「うーん、僕らの感覚がズレてるのかもね。じゃあ、進もう！」
「そうですね！」
「でもね、なんか、変な間隔に陥ってる・・・・」

「ですよね。なんか、時間の感覚がおかしくなってるようです」
「これも、毒気のせいかな？」
「うーん、でしょうね」

そんなことを話ながら歩き出そうとした途端、不意に、後ろの幸明が動いた。とっさに振り返ると、目を覚ましたようだ。

「ここは？」
「ああ、幸明、起きたんだ。おはよー！」

僕が笑顔でそう言うと、幸明は心底驚いたようで、必死で僕から離れようとする。

「あっ、ちょっ、あんまり動かないでよ、うわぁっ！」

僕は、幸明があんまりにも動くから、前に転んでしまった。

「だっ、大丈夫ですか？二人とも？？」
「ぼっ、僕は大丈夫だけど・・・・そっちは？」
「うーん、どうなんでしょうか？」

僕は、何とか立ち上がると、後ろで転んでる幸明を見下ろす。まだ、あまり体調がよくないのか、そのまま動かない。

「大丈夫かね？」
「なんで、お前が私を背負っていたのだ？」

「ちぇ、なんでそう言う風に敵視するのさ？せっかく助けてやったのにさ」

「・・・・そうなのか？」
「そうじゃないの？」
「・・・・は？」

「あっ、あれ？僕ら助けたんだよね？」
「えっ、助けたんじゃないんですか？」
「だよねっ！と言うことで、感謝をしなさい！」
「・・・・助けろなんて言ってない」

「うわぁ～、亜修羅に似てのツンデレだね、そう言うの嫌だなぁ～、素直にありがとうって言えばいいのに」

僕は、小声でボソボソ言いながら、後ろから文句を言っている幸明の言葉を無視して、桜っちと一緒に歩き出す。

「おいっ、私はどうなったんだ？」
「ん？森の中で倒れちゃって、僕らが救助しましたっ！で、はい、直ぐに口を塞ぐ！」
「多分、解毒剤を飲んだ人は、もう気にしなくて大丈夫だと思いますよ？」
「そうか・・・・なぜ、私を助けようとしたんだ？」

「うーん、まぁ、なんでもいいんじゃない？訳なんて。だって、普通じゃない？死にそうな人がいたら、敵でも味方でも助ける・・・・それって、あたり当たり前じゃない？」

僕の言葉に、幸明は目を見開いた後、ため息をついた。

「と言うことで、僕らはこれからこの森の瘴気を消し去ります。と言うことで、行きましょか！」

「どこにいくつもりだ？」
「森の奥・・・・瘴気の塊を滅する為に！」
「そんなことをしたら、種族争いが・・・・」
「その為に止めるんだよ。悪い？」

僕の声のトーンと殺気に、幸明は自然と黙り込んだ。当たり前だよ、これ以上種族争いを繰り返されるのは嫌だもん。

「いや・・・・」
「と言うことで、森の奥へ連れてって！」
「そんなこと・・・・」
「連れて行きなさい！」
「・・・・全く、どうして私が・・・・」

そうぶつぶつ言いながらも、幸明は僕らの前に立って歩き始める。結局連れて行ってくれるんじゃんと思いながらも、僕らも後をついて行く。

「少しは感謝してるのかな？」

「だと思いますよ、ああ言う態度をとってはいるものの、ちゃんと僕らを案内してくれてますからね」

「でも、もしかしたらはめようとしてたりとか・・・・」

「とりあえず、信じてみましょうよ？」

「私を信じていないなら、どうしてついて来るんだ?」

「ん?心配だし、信じてみようと思うしね。別にいいでしょ?僕らがついて来ても」

「・・・・ふん」

「まぁ、いいじゃん。そんなに嫌がることはないじゃない!」

僕は、幸明の背中をバシッと叩くと、笑った。

「叩くな!」

「あっ、すいません」

「・・・・」

「何?その顔?素直に謝っただけじゃん」

僕が素直に謝ったのがよっぽど驚いたのか、目を丸くしてこちらを見ている。

「まぁ、いいや。とりあえず、行きましょか」

そう言って歩き出した時、目の前の光景に、思わず足を止めた。今までずっと道が続いていたのだけれど、ついに行き止まりに行き着いた。

行き止まりには、中央に大きな樹があった。そこから紫色の空気が出ていて、ここら一体は、今まで以上に空気が紫色になっていた。

「ここの樹が要因かぁ〜」

「・・・こんなことになっていたのか?」

「よっしゃっ!イッチョ倒すか!」

僕は気合を入れると、この瘴気の原因でもある樹を倒そうと誓った。

信頼とは何か

「どうするんだ？このまま出られないのか？」
「俺に聞くな」
「それにしても、こっちに来られちゃ、ばれちまうな」
「ああ・・・・」

俺達が隠れている場所は、中に入ると三つの椅子と、それを囲むように機材が並んでいると言った。その機材の裏側に隠れている為、立ち上がってこちらを覗かれたら、もう終わりだ。

それなのに、もう、部屋から出ようとする気配は全くない。休憩時間が終わって勤務に戻ったと言うところだろう。

「仕方ない、私が囮に・・・・」

そう言って立ち上がろうとする灸縁の腕を、俺はなんとか引っ張り、座りなおさせる。

「やめろ。今更お前が囮になったところで、出られるものじゃない。だったら、ここでじっくりと作戦を練った方がいい」

「・・・しかし」

「大丈夫だ。族長の安否は確認出来た。族長は絶対に、死ぬなんて自ら吐くような根性の弱い奴じゃない。だから、大丈夫だ」

「なぜ、そこまで信じられる？」
「何をだよ？」

「組の長と言っても、赤の他人を、どうしてそこまで信頼出来るんだと聞いているんだ」
「お前らも、使えてる神を信頼してるんじゃないのか？」

「・・・我々は、そこまでお互いを信じあうことはしない。いつ、何が起こってもいいように、いつも抵抗出来るように、銃だって常備している」

「そうか」

「そんな我々よりも、妖怪と言う生き物は相手を信頼しないと教わった。それなのに、お前はなぜだ？」

そう問われるが、はっきり言ってよくわからない。そう言われればそうだ。どうして俺は、あの人をここまで信頼しているのか。まだ出会ってそう経ってもいないし、そもそも、何かきっかけがあって出会った訳でもなく、ただ、護衛としてついているだけなのに、どうしてここまで信頼しているのか。

もう、人を信頼しないと決めた俺は、どうして族長をここまで信頼してるんだ？

考えれば考えるほど訳がわからなくなって、ため息をつく。

どうして、ここまであの人のことを信頼してるのか。なんで、ここまで危険な目にあって助けようとしているのか。

そんなことを考えていると、うとうとして来て、目の前が真っ暗になった。

「お前、馬鹿だな・・・・」
「馬鹿とはなんだ！馬鹿とは！」
「馬鹿だから馬鹿って言ったんだよ」
「ちょっ、二人とも、落ち着いて下さいよ！」

「馬鹿って言う亜修羅が悪いんだもん！」
「なら、アホだな！」
「違う！僕はアホじゃない！」

族長たちが、制服を着て学校に向かっているところを、俺はいつも観察していた。

その度に、いつもいつも楽しそうだと感じて、お互いのことを信頼していることが羨ましいとも思った。

「おい、ちょっと話が・・・・」
「うるせーよ。お前なんかに合わせる口なんざ、俺はもってねぇ」
「・・・・」

そいつは俺から放れて行き、仲間とこちらを見てクスクスと笑って

いる。

俺はただ、その光景を見て、唇を噛むことしか出来ない。俺は、話すら聞いてもらえない。誰かと仲良くするなんて、出来ない・・・・いや、そんな生易しいことをしてる奴等は、みんな弱いやつらなんだ。俺は強いから、人と関わらないで生きて行ける。

「お前は、我々の族長の護衛になったから、今から人間界に向かってくれ」
「俺は、そんなえたいの知れない奴の護衛なんざ、やりたくないな」
「前期族長の言伝だ。断ることは出来ない」
「・・・・ちっ、なんで俺が・・・・」

もう、人と関わることはやめると決めたのに、何があってこんなことをしなくちゃいけないんだ。

しかも、妖怪なのに、人間界に行っているような奴を護衛するなんて、馬鹿らしい。

「お前には、関係ないだろ？」
「でもさ、一緒に帰ろう！」
「付きまとうなって！しつこい奴だ」
「いいじゃない！」

どうして、あいつは人を冷たく突き放しているのに、人が寄って行くのだろうか？

俺は、あいつと違って、話しかけても冷たくあしらわれるのに・・・・。

「おいあんた、ちょっといいか？」
「なんだよ？お前、妖怪だな？」
「俺は、お前の護衛だ」

「だからなんだよ？俺は、お前なんかに構ってもらわなくても生きていける。付きまとうな」
「なら、俺の存在を認めなくてもいい。無視してもらっても構わない」
「それは出来ないだろ？俺が嫌がっているとは言え、守られている身だ。無視はしないさ」

そう言った族長の顔が忘れられない。笑みとは取れないし、優しいと言う訳でもない。それなのに、妙にホッとする顔だった。

「なぁ、族長？」
「なんだよ？」
「いや・・・・なんでもない」

「なんでもないなら話しかけるな」
「・・・悪い」
「別に謝らなくてもいいがな。どうして話しかけた?・・・・まさか、寂しいとか言わないよな?」

「・・・だったらどうする?」
「まぁ、それならいいか。寂しいと言うのも理由の一つになる。だから、寂しい時はいつでも話しかけろ」

意外な返答だ。いや、意外どころじゃない、普通、こんな答えをする奴はいるだろうか?

もしかしたらこいつは、他の奴等とは違うかもしれない。

「おい、何を寝ている?」
「ん?あっ、ああ・・・・」

俺は伸びをすると、欠伸をした。

「どうした?」
「警報が鳴って、警備員は出て行った。今のうちに逃げるぞ」
「あっ、ああ」

俺は、よろよろ立ち上がると、鍵を開けて、部屋から出た。

「ちょっと待て！」
「・・・ん？何かようかい？」
「違う、そんなあからさまに近付くのは危険だと・・・・」

「聞こえないんだけど、なんか、声が聞こえないよ！」
「だから！」

幸明が何か言おうとしているけれど、全く聞こえない。

なんだか、大声で言っているのは見えるけれど、壁と壁で仕切られているみたいに、声だけは全く聞こえなかった。

「よくわからないけど、ちょっと行って来るよ」

僕は、なんだかよくわからない状況な為、ニコニコしながら瘴気を出している樹に近寄った。なんだか危険だとはわかってるけど、苦しくもなんともなくて、僕はそのまま、瘴気の出ている穴の中に入った。

「なっ、中に入っちゃいましたよ、大丈夫でしょうか？」

「なんで私の言葉を無視したんだ！あの中に入ったら、もう・・・・生きて出て来ることは不可能なのに・・・・」

「えっ！？そうなんですか？どっ、どうしよう・・・・」

「・・・・仕方ない。我々はこの森を出よう。出て来ない者を待って死ぬのは馬鹿なものだ」

そう言って、幸明はスタスタと森の出口の方へと歩いて行ってしまって、僕は、慌てて追いかける。

「待って下さい！」

「なんなんですか？」

「『なんなんですか？』じゃないです！なんで、そうやって人を切り捨てるんですか！心が痛まないんですか！？」

「・・・・私には関係ないことだ。私の忠告も聞かずに、瘴気の穴の中に入ってしまったあの人が馬鹿なんです」

「聞こえてなかったみたいなんですよ！それに・・・・助けてもらった人を、普通見捨てますか？信じられませんよ」

「私は今までそうやって生きて来たんです。だから、仕方がないことです」

「くっ・・・・」

僕は心底、この幸明と言う人が嫌いと思い、性格が悪いと思った。

命の恩人が危険な目に遭っていると言うのに、それを普通に見捨て

るなんて人間じゃない。

僕には信じられないことだった。仲間とか、友達とか関係なく、命を助けてもらった人が危険な目にあっていると言うのに、自分には関係がないとか言って切り捨てるなんて・・・・。

僕は、幸明を殴ってやりたい気持ちになったけれど、なんとかその衝動を抑える。

今、この人を殴ったとしても、何も変わらない。むしろ、怪我をさせてしまっては大変だ。だから、なんとか残りの理性で怒りを抑えた。

「・・・いいですよ。なら、あなたは先に森から出て下さいよ。僕は凛君を見捨てるようなことはしません。もう少し、救いようのある人だと思ってたんですけどね」

僕は、幸明を冷たい視線で見ると、瘴気の出ている樹の目の前に座った。

「何をするつもりだ?」

「僕は、ここで凛君を待ち続けます。幸明は家にでも戻って、親に泣きついてればいいですよ」

「そっ、それは・・・・」

僕の発言に、幸明の表情が引きつる。まさか、僕にそんなことを言われるとは思ってなかったみたいだ。でもね、僕だって怒ったら牙くらい向くんだよ、今はかなり怒ってるから言葉に出して言ってるだけで、普段だって怒ったりするけど、それを現さないだけなんだ。

「早く行けばいいじゃないですか。神域の神と言っても、所詮、小心者の臆病な人ですからね」
「くっ・・・・・」
僕は、幸明の気を感じて、自然と幸明に向き直り、睨みつけるまでは行かなくても、じっとみつめる。
「そんなことをいいと言ってもいいと思っているのですか？」
「・・・僕は、いけない言葉は言ったつもりはないです」
「そうか・・・・それは今、後悔することになりましたよ」
「意味がわかりませんが・・・・」
僕がそう言った途端、幸明が襲って来て、僕は慌てて飛び退いた。
それが故意なのか、それとも、霧の幻にやられてるのかわからないけれど、意外に強いことが驚きだった。
でも別に、普通に攻撃をして来るだけで、ダメージを食らっても、そう強くはないだろうなと思っていた。
「・・・舐められては困る。これでも神域の神だ。本気を出せば・・・・」
そう言われた途端、今まで五メートル近く離れていた幸明と僕の距離が一気に縮まって、僕は、幸明に殴られた。
そのまま一メートルぐらい飛んで、僕は、そのままゆっくりと立ち上がった。
思い切り殴られたからかなんだかわからないけれど、頭が思い切り

クラクラしていて、頭痛が酷い。

「あたたた・・・・なんか、頭が痛い・・・・」
「私が殴ったからな」
「神の力を使うなんてズルいですよ」
「仕方がない。お前が幻を見せられていたようだからな」
「へ？？」

僕は、幸明の言葉に耳を疑った。

今、「幻を見せられていた」って言ったよね？それって、どう言う・・・・。

「あれ？じゃあ、あのことのどこまでが本当の出来事なんですか？」
「凛と言う奴が瘴気の穴に入ったところまでは事実。しかし、それ以降のことは幻と考えていいだろうな」

と言うことは、僕の見ていた光景ほとんどが幻と言うことだ。

幸明が凛君を見捨てようとしたのも、僕が言った言葉も、全て・・・・。

「いや、私の言動は幻だが、自分の言っていた言葉は私に聞こえていたと取っていいだろう」
「えっ・・・・・」

僕は恥ずかしくなって、思わずうつむいた。

あの言葉、全部言葉にして話してたんだ・・・・。そう思うと恥ず

かしくなって、幸明の顔が見られない。

「そう照れることではないと思うよ。君がそれ程、あの子のことを思っていると言う象徴だ」

「いや、そう言う言い方、誤解を招くからやめて下さい。しかし、恥ずかしいものですね」

「どうやら、私が悪者になっていたようだな。散々私に文句を言っていたぞ」

「・・・・もう、言わないで下さい！すみませんでした」

「まぁ、謝らなくてもいい。しかし、あの子が瘴気の穴の中に入って行ったのは事実。さて、どうするか」

「どうすればいいんでしょうか？」

「そもそも、君も危険な状態になっている。幻を見た後は、症状が出始める。気をつけなきゃいけないぞ」

「はい・・・・」

僕は大きくを吸うと、ため息をついた。

救出作戦開始！

部屋に戻ると、みんなが自分達の役割を整理し終わっていて、今直ぐにでも作戦を実行出来るまでになっていた。残るは、俺たちが帰って来るだけと言う状況まで進めていたらしい。さすがは大人だ。子供と違って、何も言わなくても話を進めてくれる。

「では、作戦を実行に移すが、いいか？」
「大丈夫だ。準備は出来てる」
「よし、では、作戦開始だ！」

掛け声と共に、「おーー！」と言う声が上がり、みながバタバタと部屋から出て行く。

俺は、灸縁と共に、地下へ続く階段のある場所まで歩いて行く。

「結構いい奴らなんだな、お前ら神ってやつも」
「失敬だな。我々は、常に清い心を持っている」
「そうか？俺達の殺し合いを楽しんでみているような奴らがか？」

俺の言葉に灸縁は目を見開いて、深くうなだれた。

「本当にすまない。私としたことが・・・・」
「気にすんなよ。別に俺は、あんたらを攻めてる訳じゃないんだぜ？」
「申し訳ない・・・・」

「ってか、もう、気にしてないしな！お前らが族長を助けることに手を貸してくれてるからな！」

「・・・・」

申し訳なさそうな目で灸縁は俺の方を見る為、首を大きく振った。

「おっ、第一地点だな」

俺は、次の角にある監視カメラを発見し、トランシーバーで話しかける。

「おい、そっちの方は大丈夫か？」

「ああ、一応警備室には侵入成功」

その返事を聞いて、灸縁に向かってうなずくと、再び通信が入る。

「こっちも準備完了だ。カメラを破壊する準備は出来ている」

「よしっ、それでは、カメラを破壊してくれ。出来るだけ姿を映さない方がいいが、最悪、姿を捉えられても、警備室にいる奴が監視カメラのデータを初期化するから大丈夫だ」

「了解」

「ああ、任せろ！」

「では、検討を祈る！」

そう言ってトランシーバーを一端しまうと、灸縁に準備をするように言って、自分も、壁に張り付いて、いつでも走り出せるように準備をしている。

ここで、少し、この地獄監獄内に設置されている監視カメラのことを書いておこう。

ここの監視カメラは、動くものの気配を感じると、そちらの方に自然と向きを変えるように出来ている。だから、監視カメラの前を通ると、今まで左側を向いていた監視カメラが、追跡するように動いて、その人物の姿を捉え続ける。だから面倒なのだ。

その上、人間界にあるようなボロい監視カメラとは違い、ここの監視カメラは、破壊することが簡単に出来ない。と言うのも、画面を破壊したとしても、超高速スピードで修復作業を行うのだ。

信じられないだろ？カメラが自分で自分を修復するんだ。しかし、これがありえるから厄介なんだ。修復する時間は、故障の頻度によって違うが、思い切り画面を壊しても、せいぜい三十分後には、元通りになる。

三十分以内にここを通ることは可能だが、一度監視カメラが破壊されると、監視カメラが警戒モードになる。それは、壊されたカメラが修復作業を終えた後に作動することなのだが、警戒モードになると、姿を捉えるだけじゃなく、攻撃をしかけて来る為、色々と面倒なのだ。

となると、三十分以内に、カメラを破壊、進む。の動作を繰り返し続けなければいけないのだ。

カメラを完全に破壊することは、可能なことは可能だ。しかし、カメラを破壊した時点で、警報装置が作動する為、破壊してはいけないのだ。だからって手加減をすると、直ぐに修復作業を終えて、警戒モードに監視カメラが入る。だから、壊さない程度に強く衝撃を与える必要がある。

これで大分、この地獄監獄と言う場所の面倒な監視カメラのことがわかってもらえただろう。

「では、破壊するぞ？」
「ＯＫ」

俺が答えた途端、どこからか何か鋭い物が飛び、それを捉えた監視カメラがそちらの方に画面を向け、その攻撃をもろに受けた。

「よしっ、この打撃で与えられた時間は・・・・十分！？」
「なっ、十分なのか？？」

「ああ、修復時間に十分かかりますと表示されている。でもまぁ、とりあえず、画面には何も映っていないから大丈夫だ。音声データもちゃんと消しておくから安心してくれ」

「了解だ」

俺は、灸縁に手でついて来るように促すと、監視カメラの前を通り過ぎ、次の地点まで走って行く。

十分とは想定外だった。俺達の作戦では、最低でも二十分は必要だ。それなのに、十分となると・・・・出来るのか？

そう思い、自然と足を止め、大きく息をついた。

「どうした？」
「いや、なんでもねぇ」

俺はそれだけ言うと、再び走り出す。出来る出来ないを考えている

暇はない。今は、頭よりも体を動かすことが先決なんだ。

「物凄い汗ではないか。本当に大丈夫か？」

「ああ、多分な・・・・」

普通の汗と、冷や汗が混ざっているのかわからない。ただいつもより、汗の量が多い気がした。

「とにかく、次のポイントまでもう少しある。そこまで走ったら、一回休憩をしたらどうだ？顔色が悪いぞ？」

「大丈夫だって、俺は平気だ。熱でも出ない限り、倒れたりしないさ」

「・・・そうか。ただ、あんまり無理をしてはいけないぞ。族長様も、お前が倒れてしまってはお喜びにならないだろう」

「俺たちの世界では、結果が全てだ。いくら頑張りましたと言っても、族長を助けられなかったら、俺は非難されることになる。体調を崩したと言おうが、全治三ヶ月の怪我を負ったと言おうが、結果が成功か失敗かで決まるんだよ」

俺の言葉に、炎縁が怯む。

そうだ。酷いとか辛いとかありえないとか、色々思うが、俺達の世界ではそれが普通なのだ。

だから例えば、医者の場合、治せる確率が低い病気と言うものがあると思う。それを治せと言い、十パーセントしか生存確率がないと言っても手術をして欲しいと言って来る為、ダメもとでやって、や

っぱりダメだったりすると、自分達がやれと言ったくせに、失敗してどうのこうのうるさく言われる。

それから、店の店員の場合は、命をかけて強盗犯に立ち向かったのだが、殺されてしまって、店の物を盗まれたら、死を悲しんでもらえるどころか、ずっとブツブツ文句を言われ続けることになる。

命をかけて守ろうとしても、結果が失敗の場合は非難される。そう言う悲しいことが、俺達の世界では普通なのだ・・・・。

瘴気の奥は・・・・

「さて、どうしようかね」

僕は、瘴気の中でため息をついた。入ったはいいけど、何をすればいいのか・・・・。

そんなことを思いながら歩いていた時、不意に、地の底から響いて来るような声が聞こえて来た。

【ここになんの用だ?】

「おっ、ボスの方ですかね?なら、言わせてもらいましょー!この瘴気をなんとかして下さいっ!以上です!」

【それは出来ん】

僕の申し出は考えもなく却下されてしまった為、僕は大きくうなだれた。

だってそうじゃん!少しくらい考えてくれたっていいのにさ、考えもしないで否定されたら、僕も嫌な気分になっちゃうよ。

「なんでですか?」

【それを今、ここに来たばかりの奴に言う義務は私にはない】

「まぁ、そりゃごもっともと言いたいところだけど、ダメ!言ってくれなきゃ、ここで暴れちゃうもん!」

【そんなことをしても追い出すだけだ。ここは、私の体の中と言っていい。いつでも追い出すことは可能だぞ】

「・・・・と言うことは、あなたは、あの大きな木ですか？」

【まぁ、それぐらいなら教えてやってもいいだろう。そうだな、私はこの森一番の巨木だ。霊樹と呼ばれている】

名前まで教えてくれとは言わなかったけど、教えてくれたので、何も言わなかった。

「・・・・チェッ、全くさ、イジワルだね！もういいよっ！僕、出て行っちゃうもん！」

薄暗かった木の中から出る為に、明かりの方へ歩いて行った途端、今まで余裕に聞こえていた霊樹の声が、突然切羽詰ったものに変わった。

【その先に行くな！】

「えっ・・・・？」

僕は既に光りの中に足を踏み込んだ後で、僕は、どこか違う場所に飛ばされてしまったようだ。

「おっ・・・・おろ？」

僕は、慌てて辺りを見渡すけれど、さっきの瘴気のような雰囲気はなく、むしろ物凄く澄んだ空気の綺麗な森の中に立っていて、今までいた怪しい雰囲気じゃなくて、汚れ一つない綺麗な森だ。

二回綺麗と言ったことは気にしないでよ。だって感動して、思わず二回言っちゃったんだ！

水が流れる音、青い空、澄んだ空気。そして、目の前には風車小屋があった。まるで、映画の中のワンシーンのような気がした。

とりあえず、その風車小屋が気になったから、そこに入ってみた。

その風車小屋は結構安易なつくりで、強く蹴ったら壊れちゃいそうだった。木造だから、脆く見えるのかもね。

とりあえず、ドアノブを回してみると、鍵もかかっていないで開いた為、僕はそのまま風車小屋に入った。

その途端、鋭い声がした。

「誰！？」

僕は、とっさに体が反応して、両手を上に上げて、引きつった笑みを浮かべた。

刃物か何かを突きつけられた訳ではないのだけれど、その声だけで危険を感じて、体が動いた。

「あっ、えっと・・・・失礼しました」

僕は、なんとかそれだけ言うと、お辞儀をしてその場を去ろうとするけれど、呼び止められた。

「あなた・・・・悪い人じゃなさそうね」

そう言って、その声の主が姿を現した。

歳は、僕と同じくらいで、僕と身長はそんなに変わらない。紅くて長い髪に白い肌で、これまた、アニメの登場人物のようなイメージがあった。

「ええ、まぁ・・・珍しいですね、紅い髪って・・・・。今まで神の世界にいたけど、見てないよ?」

僕がそう言うと、そのこは僕のことをじっと見た後、視線を逸らし、部屋の隅にあるベットに座った。

僕はどうしていいかわからず、そのまま動かないでいると、手招きをされて、ベットに座れと促された為、ゆっくりと扉を閉めると、出来るだけ足音を立てないように歩いた。

「どうしてそんな変な歩き方をしてるの?」

「えっ、だってこの家、ちょっと力入れただけで壊れちゃいそうで・・・」

僕が苦笑いでそう言うと、そのこはクスクス笑い出した。それを見て、何かおかしいことを言ったかと思うけれど、思い当たる節がみつからない。

「まぁいいわ。とりあえず座って」

ポンポンとベットを叩かれた為、僕は、ベットに座った。最初は、なんでこの子がベットに座ったかわからなかったけど、部屋の中を見渡して、椅子がないことがわかって納得した。

「あなたの名前は？」
「僕は、凛だよ」
「あなた、不思議な子ね、女の子なのに僕って言うなんて・・・・」
そう言って、そのこは再びクスクス笑った為、僕も、同じように笑うしかなかった。

やっぱり、男って見られないんだなって思うと、悲しくなって、ため息をついてしまう。でもまぁ、こんな体型に声だし、当たり前かな？って思った。

「いやね、僕って言うのが癖づいてるんだよね。気にしないで！ところで、君の名前は？」
「私は、朱音（あかね）って言うの」
「そっか、いい名前だね。それに、髪の色も綺麗だね、珍しいと思うけど・・・・」

「・・・私ね、神様じゃないんだ」
「えっ、そうなの？じゃあ、何？」
「・・・それは」

僕が聞いた途端、朱音ちゃんは黙り込んでしまった。深刻なことなのか、話し出そうとしない。

「僕ね、今は普通の格好をしてるんだけどね、実は、妖怪だったのです！」
「えっ！？」

僕のカミングアウトに、朱音ちゃんは驚いた。そして、なぜか、ホ

ッとしたような顔をした。もしかして、朱音ちゃんも妖怪だったり・・・？

「実はね、私、神と妖怪の子供なんだよね・・・・」

裏切りは直ぐそこにある

「ちっ、まずいな・・・・」
「やはり、もう少し作戦を練った方がよかったのだろうか？」
「いや、そんなことをしている暇はない。次でこの二十の監視カメラの地獄から開放される。そしたら、直ぐに地下へ行くんだ」
「しかし、このままでは、体が持たぬ」
「ったく、運動不足の奴は、これだから困るんだ」
「馬鹿にするでない！それに、そなただって、息切れをしているではないか」

俺達は今、二十個目の監視カメラを通り抜ける為に待機しているのだが・・・・。

ここで、今までのことを説明しよう。

二十分で二十個の監視カメラを突破すると言うことは、一個を一分で通過する考えだ。しかし、監視カメラが連なって設置されている訳もなく、次の監視カメラに向かうまでの時間も込んで、一分だ。

それでもかなりキツい状況なのだが、その予定よりも、十分も早く一番最初に破壊したカメラの修復作業が終わってしまった為、俺達はなんとかそれを潜り抜けて来たのだ。

しかし、警戒モードに入ると、警備室に直通で知らせが入ることになる。だから現在は、防犯カメラと警備員から逃げながら、目的地へ向かっているのだ。

「とりあえず、どうする？一応目の前に最後の防犯カメラがあり、その奥は、地下への入り口があるが・・・・」

「とりあえず、行くか？」

俺は、無言でうなずくと、トランシーバーで、二十個目のカメラを破壊する係の奴に話しかける。

が、返事がない。いや、繋がらないと言った方が妥当だろう。

「おい、どうした？」

俺が問いかけるものの、なんの音も聞こえなくなって、舌打ちをする。

「どうしたのだ？」

「なんか、トランシーバーが通じなくなった。どうしたんだ？」

「・・・まさか、回線が切れたのか？」

「は？回線？」

「多分、騙されたんだな。仕方ない、でもまぁ、警備員の方も通信機能は使えないだろう。だから、お互い様と言う訳だ」

「・・・しかしな、騙すって、誰が・・・・？」

「もちろん、俺達の仲間として動いていた奴の一人だろうな。しかも、警備室にいる奴だな」

「・・・・」

俺は、無言でうつむいた。まぁ、そう言うこともあるだろうと思っ

た。裏切りなんて、よくあることだしな。

「そう気落ちするでない。どこの世界でも裏切りがあるものだ」

「・・・・そう言う訳じゃない。ただ、許せないんだ」

そう、言葉で言っているのがわかる。しかし、なぜ、そう言っているのかはわからない。ただ、口から出たのだ。

「それは・・・・？」

炎縁が聞いた途端、俺達のいる通路から走って来る音が聞こえて、俺達は、自然と体が強張って、互いに顔を見合わせる。

しかし、逃げ場がない。俺達のいる通路はT字のようになっており、足音が聞こえて来るのは、T字路の上の横長通路だ。そして、もう一つの通路は、監視カメラの設置されている通路で、まさに、八方塞と言う訳だ。

「さて、どうするか？」

「・・・・仕方ない。バレたらここで終わりだ」

「逃げないのか？」

「ああ、逃げないな。こっちに向かって来る奴が敵でも逃げないぞ」

「なぜ？」

「賭けてみようと思うからな。いつも、俺は賭け事のように毎日を生きて来た。だからここで、大きな賭けに出ようと思う。もし、俺の生き方が間違っていたら、ここから出て来る奴は警備員だ。もし、俺の生き方が間違っていなかったら、仲間に違いない」

「しかし、俺達の人数は五十人。それなのに、向こうは何百人といる。向こうの可能性の方が高いではないか？」

「・・・・だから賭けるんじゃねぇか。こうでもしないと、俺の生き方が正しいのか正しくないのか、わからないからよ」

俺の言葉に灸縁は黙り込み、ソワソワしていた様子がなくなり、その場に留まる。

「逃げないのか？」

「私も、そなたの意見に賛成しよう。一度、己の生き方が間違っているのかどうかを確かめてみたかったのだ。いい機会をくれてありがとう」

そう言われて、思わず微笑んでしまう。

前にも、これと似たような言葉を言われたような気がした。

〔自分の生き方が間違っているのかいないのかをジャッジしてくれるような機会なんて、滅多にない。そんな機械をくれたお前に感謝する〕

自然と、その時の様子と風景が現れて、大きくため息をつく。

「来るぞ」

「ああ、ついにジャッジの時が来たぜ」

バタバタと言う足音が近づいて来て、目の前に現れた。

俺達はとっさに身構えたが、出て来たのは俺達の仲間だった。

「・・・・ふぅ」

互いに顔を見合わせて、大きくため息を吐いた。

やっぱり、俺の生き方は間違っていないようだ。今まで何回も困難がぶつかって来たが、いざって時には、やはり助かる方向に向かう。

それがわかっていたからとかじゃなく、毎回、緊張はするものだ。ただ、そうでもしないとわからないだろ?自分の生き方が正しいかなんて・・・・。

「どうした?」

俺がそう聞くと、走って来た奴は、肩で息を切らしながら、なんとかと言った様子で話しかけて来た。

「俺達の仲間が寝返りやがった!警備員に釈放してやると言われて、それにのっかった奴等は、俺を除いて四十五名。残りの奴等だけが俺達の仲間だ!」

「・・・そう言うことか」

「どうすんだよ?」

「私に聞かないで欲しいのだが・・・・」

「と言うことは、ここで立ち止まっていても無駄だってことだな。監視カメラを破壊をする奴はいない。と言うことで、強行突破と言うことか」

俺がそうすんなりと言うと、炎縁と、俺達に大変な事態を知らせて来た奴は、目を見開いたが、俺は、この意見を変えるつもりはなかった。

「本当にやるつもりか？」

「当たり前だろうよ。だって、そうでもしなきゃ、族長を助けられねぇ。だったら、やるしかないぜ」

「・・・・了解した。では、早速行こうではないか！」

「おう！」

炎縁の言葉に相槌を打つと、監視カメラのことなど気にせずに、地下への扉を目指して突進した。

現実の世界への一歩

「実はね、私、神と妖怪の子供なんだよね・・・・」

僕は、その言葉を聞いて黙り込んでしまった。それって・・・・なんか、いけないような雰囲気がするぞ。まずい雰囲気だぞ、これ。

「そっ、それって、はっ、ハーフ？」

「・・・・？」

僕の言葉に、ハーフの意味を知らない朱音ちゃんは首を傾げたけれど、僕がハーフの説明をすると、「そんなもんかな？」と言って、少し寂しそうに笑った。

「妖怪とは、神にとっては単なる娯楽の為に生きている存在。それなのに、私のお父さんは、妖怪の女性に一目ぼれをしてしまった。お母さんもそうみたいでね。でも、神と妖怪の恋愛なんて、許されるはずもなく、二人はこっそりと会っていた。しかし、それもバレて、私のお父さんは地獄監獄の奥底に閉じ込められて、お母さんは、殺されてしまった」

「えっ、ちょっと待って、じゃあ、朱音ちゃんはどうしているの？」

「ああっ、そこの説明省いちゃった！」

僕が聞くと、朱音ちゃんはクスクスと笑い出しだ。

こんなに明るい子が、まさか、神と妖怪のハーフの子だとはとても思えない。でも、やっぱり雰囲気が不思議な感じがするから、言っていることは嘘じゃないってわかった。

「私のお母さんは、自分が死ぬとわかって、私の命を、現在妊娠している女性の赤ちゃんに宿らせたんだよね。それで、私は生まれた」

「ほぇ～～～！そんなこと出来るんだ！」

僕は、自分も同じ妖怪なのだけれど、そんなことが出来ると知って、物凄く驚いた。なんと言うミラクルだと思ったんだ。

「だけど、その夫婦は妖怪の夫婦だから、妖怪の子供しか生まれないはずなのに、妖怪よりも運動神経が悪かったり、異常に頭がよかったりして怪しまれたんだ。そこで、私のお母さんの情報が入って、その夫婦は、私が自分達の子供じゃないとわかって、牢屋に連れて行こうとしたんだ」

「えぇっ、酷い・・・でもさ、お母さんお父さんは死んじゃったのに、どうして知ってるの？」

「お母さんの記憶をそのまま受け継いだからね。でも、必要以上のことはわからなくて、お母さんお父さんの顔はわからないの。ただ、私が生まれる過程だけしかわからなくてね」

「そっか・・・で？」

「そして、私は逃げ出したの。神達の間では、私は汚らわしい者として、早く抹殺したい対象だった。神域を司る神にバレたら、とんでもないことになる。だから、指名手配状態になって、私は逃げ場がなくなった。お腹も空くし、喉も渇くしで、死にそうになったところを、助けてもらったんだよね、優河さんに」

「ほうほう、で、その人って誰？」

「今は樹になって、瘴気を出してるんだ。私をかくまう為に、いつも死にそうになりながら、人を森に寄せ付けないように、瘴気を出してるんだよね」

その言葉を聞いて、僕は大きくうなずいた。じゃあ、あの樹は、この子を守る為に瘴気を・・・・。

「瘴気を出すと言うのは、体に負担がかかる上に、自分もその瘴気を吸ってしまって、どんどん体が弱って来てるんです。そんなことを、かれこれ五十年も続けてるんです・・・・」

「五十年！？」

僕は、あまりにも長い月日に、体がのけぞった。まさか、五十年もの間、自分の身を犠牲にこの子を守っていたのかと思うと、尊敬に値する人だなって思って、大きく息を吐いた。

「はい。でも、もうやめてもらいたいんです。このままじゃ、優河さんが殺されかねない・・・・。だったら私が死んでもいいです。凛ちゃんも、私と話してたら、勘違いされて殺されちゃうよ？」

「ああっ、大丈夫大丈夫。僕は強いよ？そして、君を見捨てない。だから、行こうか！魔界へ」

「えっ、あっ・・・・へ？」

「僕らの住む世界の魔界は、そんな小さなことは気にしない。それにもし、文句を言う奴がいたら・・・・ね？」

僕がそう言った後、朱音ちゃんの体が震えた気がして、僕は、慌てて「ね？」って笑顔を向けた。

「でも・・・・」

「気にしないで♪僕は、君の味方だよ。見捨てたりなんかしない。だから一緒に、優河さんを止めよう？自分の発した瘴気と言えど、自分の身を侵すことは事実なんだからさ。命の恩人を、このまま殺す訳には行かないよね？」

僕がそう言って微笑みかけると、その子も微笑んだけれど、直ぐにハッとした表情になって、今度はとても不安そうな顔をして僕の方を見た。

「どうしよう・・・優河さんが、殺されちゃう・・・・」

「へっ？いっ、一体どうしたの？」

「私ね、時々未来が見える時があるの。それで、今見えた未来は、優河さんが・・・・」

「うわぁっ、そりゃ大変！急いで外に出ないと！いこ？」

「えっ、どこへ？」

「外の世界だよ！幻の世界じゃなく、本物の現実世界へ！」

「えっ、でも私、怖い・・・・」

「大丈夫！こっちには、神域の神様・・・・いや、宇宙の神様がついてるから、大丈夫だよ！」

「えっ・・・・」

そこまで言っても戸惑っている朱音ちゃんの手を取ると、僕は、幻の世界から脱出する為に、走り出した。

まさかの面倒事

「よしっ、ここからが勝負だぞ」
「とは言ったものの、ここは・・・地下なのか？」
「わからない・・・とりあえず、進もうか」
「・・・ったく、どこに行けばいいのやら・・・」

俺達は、地下への扉の中に入ったのだが、その中は、真っ暗闇で何も見えない状態だった。

だから、地下で合っているのかわからないが、琉貴（俺達に緊急事態を知らせた奴だ）が持っていた地図を確認すると、やはり合っていた。しかし、なぜ、ここまで真っ暗なのだろうか？

「多分、俺達の居場所がばれているんだろうな」
「そうなのか？」

「二十個目のカメラを通りぬけた後は、地下へ通じるこの通路しか通れない。だから、ここを暗闇にしたんじゃないのか？今の数が少ない状態じゃ、警備員室に乗り込むのも危険だから、他の仲間には、足止めをしてもらっているんだ」

「だよな、向こうは何百といるのに、こっちは、残り七人になっちまったんだもんな」

ブツブツそう言うことを言いながら歩いていると、不意に目の前が明るくなって、道が開けた。

「これ・・・なんか、凄いな」

「ああ、まさに、想像通りの場所だな」
「しかし、ゲームの世界に入り込んだようだぜ」

俺達が出た場所は、螺旋状に道が上に伸びていて、俺達の立っている通路の左側には、マグマのようなものがボコボコ音を立てている、まさに、地獄監獄と言うにふさわしい場所だった。

「しっかし、暑いな、ここ」

「それはそうであろうな。マグマから離れていると言えど、マグマの近くにいることは確かだ。このぐらいの熱気はあるだろうな。そして、近付くに連れて、灼熱地獄と言えるほどの熱さになり得るだろう」

「・・・族長はどこにいるんだ?」
「確か、百七十二番の監視カメラに映っていたような気がするぞ。百七十二番と言ったら・・・・」

そう言って、琉貴は地図に目を落として、一瞬目を見開いてから、俺に、百七十二番と書かれた場所を指差した。

俺も、その場所を見て、一回ゴクリとつばを飲みこんだ後、大きく息を吐いていた。

百七十二番の監視カメラがある場所は、俺達のいる一番下の通路の下側についていることになる。そして、マグマの中央には、一つだけ小さな小島があるから、あの時みた光景は、あの小島に族長がいたと言う訳だ。

その小島は、マグマの上に浮くようにある為、マグマとの距離は、

その小島の床の厚さ分しか離れていない。だから、普通なら、死んでしまう程の熱さなのだ。それを族長は生きていられたのか。

想像しただけで身震いをして、口の中がからからになった。今俺達のいる通路とマグマは二十メートルぐらい離れているのにこんなに暑いのだ。よく族長は熱さに耐えられたものだ。

「しかし、今は誰もいないようだな」
「いや、わからねぇぞ。いるかもしれない」

「例えいたとして、我々はあんな小島に行くことは出来ない。どうやってあそこまで行くのかもわからんし、何より、近付いた時点で焼け死んでしまう」

「そうか・・・お前らは、俺達よりも体が弱いんだったな。そんじゃ、俺より役に立たないのか・・・・」

俺のつぶやきに、炎縁と琉貴は不満そうな顔をしたが、俺の言っている言葉が事実な為、何も言えない様子だ。

「まぁ、その代わり、頭は俺達よりもいいはずだ。だから、考えることはお前らに任せる。俺は、頭はからっきしダメなんだ」

俺がそう言うと、二人はほっとしたような顔になって、お互いの顔を見合わせるとうなずき、俺の方を向いて、再びうなずいた。

「それじゃあ、まずは、ここら一体を探索するか。螺旋状にしか通路はないが、扉はあるからな」
「しかし、当然の如く、鍵が掛かっていると思うのだが・・・・」
「それを開けるのがお前等の仕事だろ?」

俺が笑顔を向けて言うと、二人は大きくため息をついた。

「じゃあ、とりあえず・・・ここを開けてもらおうか」

俺は、丁度横切りそうになった扉の前に立つと、指差した。

「このロックはパスワード式だな。しかし、一体何を入れれば・・・・」

二人で考え込んでしまった為、俺は、その中には入らずに、キョロキョロと辺りを見渡す。考えるなんてごめんだ。ほんと苦手なんだよ、だから、族長とかが学校とやらに行って、勉強と言う頭を使うことをやっているのを見て、いつもため息をついていたのだ。それほど、俺は頭を使うのが嫌いだ。

不意に、「三、五、三、五、九、五、七、一、七」と書かれた板を見つけた為、それがパスワードなんじゃないかと言ったが、普通にあしらわれてしまった。

「チェッ、もういいぜ。俺は向こうに行くからな」

そう言ってブラブラと歩いていると、再びロックを見つけ、その横には、さっきと同様の数字が書かれた板を発見したが、その板に書かれていた数字は、さっきのものとは違った。

今度は、「八、一三、一二、十一、三、六、五、零、七、二、一、四、一四、九、十、一一」と言う数字が書かれていた。

「はぁ？なんか、意味わかんね・・・・」

俺はため息をつくと、その場に座り込んだ。そして、もう一度立ち上がると、適当にボタンを押してみるが、四桁までしか数字が入らなくて、ため息をついた。

全部を足した合計数を入れることは可能だが、何回打ってもエラーと表示される為、間違っているのだと理解出来る。

逆に、ひいてみようと思うが、直ぐにやめた。

俺には解けないとわかり、俺はもう、考えるのをやめて、その場に再び座りこんだ。

全く、面倒な問題を出しやがって。こんなの、警備員だって面倒でやってられないだろうな。

実力をわからせたい！・・・・けど、案外難しい

「あっ、凛君！？」
「お前！？」
「よっ！帰って来たぜ、無人島！」

「・・・・へ？」
「まぁ、気にしないで。とりあえず、この子を外に出して！急いで！」
「へっ、あっ・・・・凛君は？？」
「僕は、後から行くから、とにかくそのこの指示に従って！」

僕は、よくわからないまま、とりあえず、凛君の連れて来た女の子の手を取ると、戸惑っている幸明の腕を？んで、走って森から出る。

「どうしたんだ？なぜ、あいつを置いて来た？」
「だって、凛君が、この子を連れて森から出ろと言ったんです。だから、出るんです」

「えっ、私、一体どうしたら・・・・ここはどこですか？」
「どこも何も、ここは神域だ。お前、なぜそれを知らない？」
「あの、私は・・・・」

幸明の言葉がきつかったのか、その女の子がうつむいてしまった為、僕は、幸明をにらみつけた後、その女の子に向かって微笑んだ。

「大丈夫ですよ？そんなに大事なことじゃないですから、大丈夫ですよ。ここは、現実の世界の神域です」

「あっ、はい・・・・」
「他にも聞きたいことがあったら、なんでも聞いて下さいね」
僕がそう言うと、その子は安心したような表情を浮かべると、微笑み返して来た。
「全く、大丈夫なのか？人のことを気づかっている場合か？」
「幸明は黙ってて下さい！今は、この子に不安感を持たせてはいけないんですっ！安心感だけを与えなくてはいけないんです！」
「どうしてそう言える・・・・」
「この子、きっと、何かを抱えているはずです。だから、心を開くのに時間がかかるはずです。その時間を少しでも短くする為に、細心の注意を払うんです！」
「・・・・」
僕の勢いに、幸明はしり込みしたようで、もう何も言わなくなった。
そんな僕らのやり合いを、女の子は不思議そうな顔をしてみていたが、警戒している顔色をしていない。
「そう言えば、名前をまだ教えてもらってなかったんですが・・・・よかったら、教えていただけませんか？」
「あっ、えっと・・・・私の名前は朱音って言うんです」
「なるほど、いい名前ですね。ところで・・・・あの樹の中で何が

あったか、もしよろしければ教えてもらえませんか？」

僕が丁寧に聞くと、朱音さんは、ゆっくりと、間違った言葉を話さないように、丁寧に話すように話し出した。

「実は、私・・・・妖怪と神の子供なんです。だから、妖怪とも言えず、神とも言えず、どこの世界にもいけないんです。神の世界では妖怪と恋愛をすると言うのはいけないことなのだけれど、私のお父さんとお母さんはその掟を破り、私と言う神と妖怪の融合した生命体を作り出してしまった。

私は、神にとっては堕ちた存在で、直ぐに私を殺そうとしました。神の科学者は、私は今のところ世界で一人しかいない珍しいものだから、研究をしようと追われ、私は、逃げ場を失った。そして、たどり着いた森が、ここでした。ここで、優河さんに拾われ、今までずっとかくまってもらっていたんです」

僕は、うなずきながら聞いていたけど、ほんとは、よく意味がわかっていなかった。

だって、難しいじゃない。今直ぐに理解しろと言われても無理があるだろうと思う。

「そうですか・・・・僕は、人間なんです」

僕がそう言うと、朱音さんは目を丸くしたけれど、僕が微笑むと、微笑みを返される。

「人間なんですか・・・・。でも、どうして神域なんかに？」

「僕は、この通り・・・とは言ってもわからないと思うのですが、妖怪関連に精通している人間なんです。だから、全然平気ですよ？まぁ、普通の人間に妖怪のことを言っても怖がられるだけでしょうけど、僕は事情を知ってるので大丈夫です。それに、妖怪と互角に戦うことが出来るので、襲われても大丈夫ですよ」

「えっ、それは一体どう言うことなんですか！？」

人間なのに、妖怪のことを普通に話していて、しかも、互角に戦えると言うことに衝撃が走ったのか、勢いよく聞いて来た為、これは言っていいものかと思ったけれど、一応言うことにした。

「実は、妖怪退治屋養成学校と言うところに通っていた為、妖怪のことを知っている上に、退治屋と言うことなので、互角に戦えると言う訳です」

「それじゃあ、敵・・・・？」

「いいえ、一応卒業をしましたけれど、そのまま人間界に戻って平凡な暮らしをしていたので、大丈夫です！それにもし、僕が退治屋に仕事をしているとしたら、妖怪である凛君や修さん、神羅さんと仲良くする訳ないじゃないですか！だから、大丈夫です。まぁ、たまに、襲われたりしますが、大丈夫です」

「・・・・はぅ」

僕の説明に、朱音さんは訳がわからなくなったようで、風船が萎んだかのように黙り込んでしまった。

「あっ、えっと・・・とりあえず僕は、妖怪並の強さを持ってい

て、妖怪や、神域などの知識に普通の人間よりも富んだ存在だと思っていただければいいと思います」

「なるほど、理解しました」

物凄くわかり易く短縮したところ、朱音さんは理解して、大きくうなずいていた。

「でも・・・・みたところ、普通の人間のように見えるのですが・・・・？」

「にっ、人間ですもん。うーん、信じてもらえないようですね・・・・うーーーん、じゃあ、ちょっと、これを使ってやってみます」

僕はそう言うと、近くにあった木の棒を朱音さんに向けて言った。

「何をするんですか？」

「今から、この棒を上に投げるので、これが落下する前に、ここからここの距離を、往復十回します」

「えっ、そんなこと出来る訳ないじゃないですか」

「でも、出来るんですよ、脚力には自信があるので」

僕はそう言うと、さっそく木の枝を放り投げると、十往復して、余裕で木の枝をキャッチした。

「はいっ、これで理解してもらえますか？」

「あっ、あの・・・・よくわからなくて・・・・・」

僕は、肩で大きく息を吐きながら、ため息をついてしまった。だって、頑張ったのに・・・・。

「じゃっ、じゃあ・・・・」

僕は、大きく息を吐いて、汗を拭った。

「こんなところで遊んでいててていいのか？」

「あっ、そうでした！こんなところで立ち止まっている場合ではないですもんね！」

僕は、慌てて呼吸を整えると、まともに歩き出した。

ふざけちゃいけないんだ。今は大変な時なのに・・・・。

苦悩の末の現実は・・・・

「んーーーーっ、わからん！っとか、この数字、一体なんなんだよ・・・・」

俺は、ため息をつきながらも、頭を回転させる。

「こんな時、魔方陣でも書いて、ちゃちゃっと終わらせたいな・・・・」

そう自分でボソっとつぶやいて、ふっと何かが引っかかった。

何が引っかかったのかわからないが、一応、再検索をしてみると、数字に関連する単語は魔方陣と言う言葉だった。

俺が言った魔方陣の意味は、魔法とかを使う時に出現するあの魔方陣を思い浮かべたのだが、数学の世界でも、魔方陣と呼ばれるものがある。

確か、三つぐらいの四角があり、そこに数字を当てはめるのだが、その三つの数字を足した答えが縦、横、斜め全てが同じにならないといけない。そんなルールだったと思う。

「ちょいとやってみるか・・・・」

そうつぶやくと、三×三の正方形を書いたが、数字の数を数えて違うと思った為、四×四の正方形を書いた。

そして、そこに数字を当てはめて行く。

それから三十分近く格闘した末に、答えが見出せた。

「・・・・十八」

俺は、そう自然とつぶやいて、急いで立ち上がると、扉をロックしている機械に「十八」と打ち込むと、「読み込み中・・・・」と言う言葉が表示された後、「ピーッ」と言う音がしたと思ったら、突然、その機械の下側からカードのようなものが飛び出して来て、一瞬驚いたが、それを取ると、目の前で固く閉ざされていた鉄製のドアが開いた。

「おおっ！」

自然と驚きの声が漏れるが、それよりも、中に何が入っているのかと言うのが気になって、中に入って行くと、人が座り込んでいた。

「お前、大丈夫か？」

そう話しかけたが、返事がない。

俺は、更に近付いて歩いて行くと、その話しかけた相手が骸骨だと気づいた為、俺は驚いて、二、三歩後退りをして部屋から出ようとした時、今にも死にそうなほど力のない声が聞こえて来た。

「助けてくれ・・・・ここから出してくれ・・・・」

何とか聞き取れる声だった為、俺は、骸骨が多少不気味だったが、その部屋の奥に歩いて行った。

すると、隣にある骸骨と変わらないぐらいガリガリに痩せ細った神が、俺の方を見ていた。

「お前、大丈夫か!?ガリガリじゃないか!」

「やっと助けに来てくれたのか・・・ここに閉じ込められて百五十年、誰とも会わずに生きて来たことに終止符を打つ時が来たのか・・・」

俺は、今にも消え入りそうな声でしゃべるそいつの腕を取ると、肩に担ぎ、歩き出す。

身長が高めなのだが、子供のように体重が軽い。もう、肉なんてないだろう。皮が骨に張り付いていると言う表現が一番忠実だと思う。

「もうちょっと待ってろよ。ここから出して、飯を食わせてやる」

「・・・・」

「おいっ、聞いてるのか?」

「・・・・」

俺は、何もしゃべらなくなったそいつの方を向くと、そいつは、目を閉じていた。

「・・・おい、寝るなよ」

「・・・・」

「なんで死ぬんだよ・・・・」

俺は、自然とうつむき、そいつの体を引きずって、灸縁と琉貴の元

に歩いて行く。

「おっ、お前、どこ行ってたんだよ?」
「肩に背負っている者はどうした?」
「・・・・」
「何もしゃべらないとわからないではないか」

そうぶつくさ言っている灸縁とは裏腹に、琉貴は近づいて来て、俺の顔をじっと見た後、ゆっくりと振り返って灸縁に一言言った。

「雰囲気で察しろ」

そのセリフで全てを理解し、灸縁は目を見開くと、俺の近くに寄って来て、手を合わせると、深く礼をした。

「しかし、この者をどこで発見したのだ?」

俺は、無言でカードを見せるけれど、二人は、もちろん首をかしげた。こんな説明でわかるのは凄いと思う。

俺は、背負っていた神をゆっくりと床に寝かせると、灸縁達が苦戦していたパスワードを入力する機会にカードを差し込むと、「読み込み中」と言う表示がされた後、「ピーッ」と言う音と共に、鉄製の扉が開き、カードが出て来た。

「なんだって?」
「何が起きたんだ?」

「パスワードを解除した後、直ぐにこのカードが出て来た。どうやら、これがあれば、どこの部屋でも開けられるぞ」

「パスワードはなんだったんだ?どうやって答えを見出したんだ!?」

俺は確か、カードの説明をしたはずなのだが、炎縁はよっぽどパスワードが知りたかったらしく、物凄い勢いでまくし立てて来た。

だから、わかり易く説明してやると、炎縁は納得して、先にある扉で確かめに行った。

「あの人も案外子供なのだな」

「多分、あの扉の向こう側は、結構惨い光景が広がっている可能性が高い。だから、あまりいい気分にならないことは覚悟しておいた方がいいぜ」

「わかっている。だけど、こんなところに閉じ込めておく訳には行かないだろ?」

「・・・そう言うと思った。こいつみたいに、俺達のような存在を待って日々を過ごしている奴もいるはずだ。だから、その為にも、一つ一つ扉を開けて、中を確認して行く」

俺がそう言うと、琉貴は少し驚いたような顔をした。

「いいのか?一つ一つ扉を開けていたら、時間がかかり、お前の族長を見つけ出すまでの時間が延びることになるんだぞ?」

「・・・決めたことだ。やるしかないだろ?それに、どこかに族長がいるかもしれないからな」

「そうだな。では、やるとするか」

お互いの意見を言い終わった後で、動き出そうとした時だった。

「おいっ、こっちに来てくれないか！？」

いつもは口調をあまり荒げない灸縁が、かなり慌てた様子だった為、俺達は急いで灸縁が開けた鉄製の扉の中を見た。

そこには、長い金髪の妖怪が、壁に寄りかかっていた。

俺は、それを見た途端、族長だと思って走って近寄ったが、姿が見えた直後、足を止めてしまった。

目の前にいたのは、妖怪ではなかった。神でも、人間でもない。

骨・・・骸骨だったのだ。

「さて、優河さん、朱音ちゃんはいなくなったから、瘴気を出すのをやめようね！」

【私をバカにしているのか？】

「とか、優河さん、殺されちゃうんだよ！よくわからないけど、朱音ちゃんの能力で未来が見えるんだけど、そこの未来で優河さんは殺されちゃうって！」

【ふんっ、どうせもうじき死ぬ。それなら、この森から出ることはしない】

「なっ、なんで？何か思い出か何かがあるの？」

【お前に言う必要はない】

「・・・ほぅほぅ、そう言うことですか・・・。よしっ、推理完了！」

僕は、笑みを浮かべながら優河さんを見る。

【何がわかったと言うのだ？心が読める訳でもないのだが・・・】

「もしかしてさ、この森に何か思い出があるんだね。そして、その思い出が忘れられなくて、死ぬ場所はここと決めた」

【・・・】

「もしかして・・・恋人かな？しかも、朱音ちゃんそっくりの女性だったり・・・」

【・・・】

「ここで彼女は死んじゃったんだね。それからずっと、彼女のことを忘れられなくて、この森にい続けていると、彼女にそっくりの朱音さんがやって来て、守らないといけないと思って、自分の身を削ってまで瘴気を出し続けて来た・・・・」

【・・・なぜ、そこまでわかったのだ?】

「だって、大体の目測でわかるよね、冷たい人が優しくするってことは、何かがあるはずだからね」

【あまり説明になっていないような気がするが・・・】

「とにかく、そんな面倒なことは言わないの!と言うことで、出ましょう!この森からね!」

【そこまでわかっているのに、なぜ、この森から出そうとするのだ?】

「だって、死なれちゃったら困るからね。それが嫌なら、せめて元の姿に戻ろうよ~!」

最初は渋って中々元の姿に戻ろうとしなかったけれど、僕の長い説得の末に、優河さんは神の姿に戻った。

「これで満足か?」

「うんうん、案外ちっさいんだね」

僕がそう笑顔で言うと、優河さんは?みかかろうとしたけれど、僕はそれはスルリと避ける。

「それに、僕と同年代っぽいね!」

「黙れ！これでも十七だ！」
「あれれ？僕より年上なのに、僕より小さいかも・・・・」

「そんなことはない。お前なんかと違って、俺はそんなにちっさくない！」
「しかも、性格変わってる～♪」

僕がケラケラ笑っていると、優河君（同年代だからね、君って言う方がいいもん）は怒り出したけど、僕は、攻撃をスルスルとかわしながら、段々と森の外へと誘導して行く。

そう言えば、最初は紫色をしていた森だけれど、優河さんが瘴気を発するのをやめた為、綺麗な色をしている。それにもう、苦しくもない。

「さて、ここまで来たら、もういいだろ？俺はここで死ぬって決めたんだ。彼女の死んだこの地で死ぬことが、唯一の願いなんだ」

「だから、瘴気を出すようなまねもしてたんだね？守る方法として、バリアがあるのに、なぜ瘴気を出してたのかと思ってたんだけど、少しでも早く彼女の元に行きたいから、自らの体を蝕む行動を起こした。でもね、そんなことしても、彼女は喜ばないと思うよ？」

「なぜ、お前にそれがわかるんだ？」
「いやいや、それが常識よ？普通、喜ばないもん！」

「そんなことはない。俺達は、どちらか一人が死んだら、直ぐに後を追うと約束したんだ。それなのに、俺は、彼女にそっくりのあの女を見て、死にたくないと思った。あの女を守ってくれる誰かが見つかるまで、自分が守らなくちゃいけないんだと思ったんだ」

「別に、それでもいいんじゃないの？とか、むしろ、そう思わない方がおかしいと思うよ。生物って言うのは生きたいと思うのが自然の摂理だしね。逆に死にたいと思うのは・・・・ねえ？」

僕の言葉に、優河君はため息をついた。

「それは違う。俺達は、死んでからもお互いを愛し合おうと誓った。だから、あの女の為に生きるなんて、許されないことだ。彼女との約束を破ることになる・・・・！」

「・・・うーん、一度死んじゃった人を愛し続けるって難しいことだと思うよ？とか、いつまでも死んだ人を愛すのは、残された人が苦しいと思う。優河君の彼女さんも、自分の愛しい人が苦しむのは見たくないと思うよ？」

「いや、そんなことは苦悩にすらならない。お前はおこちゃまだから愛と言うのを知らないだけだ」

明らかに馬鹿にしたような態度でため息をつかれた為、僕はムカッとして言い返す。

「そんなことないもん！僕だって、人を好きになったことあるもん！」

「そうなのか？お前みたいな幼稚な奴がか？」

「ばっ、馬鹿にするな！僕だってね、恋ぐらいするもん！それにね、馬鹿にしないでよ！」

「それは悪かったな。お前みたいなガキが恋をするとは思えなくて

な」

そう言って声を殺して笑う優河さんのことを、僕は心底嫌いになって、思い切り睨みつけてやった。

だけど、朱音ちゃんを守った人だし、朱音ちゃんと約束したからね、助けるって。だから、何とか怒りを抑える。

「全くさ、とんだカップルだね。とかさ、僕が呼ぼうか？その子」

「・・・はぁ？お前は何言ってんだよ？彼女は死んだんだぞ？それをどうやって呼ぶのか・・・・」

僕は、冥界から彼女さんを連れて来ようと大きく息を吸ったが、途中で動作を止められた。

「それには及ばないわ」

急にそう声をかけられて、思わずビクッとしたけれど、直ぐに振り返って、思わず二、三歩退いた。

だって、足が・・・ないんだもん！

逃走劇の始まりは・・・・。

「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」

俺達は、無言でその光景を眺めていた。

目の前の現実があまりにも無残なもので、誰も何も言えなかった。
いや、言うこともなかったのかもしれない。

一番最初に我に帰ったのは琉貴で、恐る恐る骸骨に近付いて、触ってみる。

「これ、本物なんじゃないか？」

「・・・それを言うな。言われなくても、希望なんか持っちゃいない。その髪の色は族長のだ。間違うはずがない」

「しかし、どうして髪だけが残ったんだ？」
「・・・・俺が知る訳ないだろ？」
「・・・・」

「元気を出せとは言わない。だが、そんな顔をするな。族長殿の為にも、我々はここを無事に出よう」

「・・・・」

俺は、無言で髪を取ると、紐で縛って部屋から出た。

「何をするつもりだ?髪などを持ち帰って?」

「何もしない。ただ、せめて、髪だけは持って帰ろうと思ってな。そうすれば、皆も納得するだろうからな」

「・・・・骨はいいのか?」

「重くなるだけだ。それに、骨なんかで本人とわかることはない。だったら、髪の方がいい」

「それじゃあ、俺達は出るのか?ここから。もう、お前の族長はいない訳だし、ここにいる意味もないだろ?」

「・・・・いや、まだしばらくここに残るぞ」

俺の発言に、琉貴と炎縁が大きく息を吐いたのがわかった。

きっと、ため息なのかもしれないが、俺にはよくわからない。

「なぜ、こんな危ないところに残るんだ?」

「・・・・言わなくてもわかってんだろ?なら、言わせんなよ」

「わからない。・・・・そうだとしても、お前の口から聞いてみたい。それが本当の意思なのであれば、躊躇わずに言えるはずだからな。お前は、ここに閉じ込められた奴を救う為に、危険なこの場所から出ないのか?」

「・・・・確かに、ここは危険だよな、今までは族長を助けると言う目的があったから、ここまでギリギリ来れた。だが、もう、そこ

まで漠然とした目的はないから、これからの難を乗り越えられるかわからない。ただ、やれるだけやってみたいと思う。もう、あんな思いをする人を見たくはない」

「・・・・そうか。なら、俺も協力しよう。お前もそうだよな？」

今までずっと黙っていた炎縁に琉貴が話を振る。

「私はついて行くぞ。助けてもらったのだからな」

「・・・・それだけか？」

琉貴にそう言われ、炎縁は目を逸らす。どうやら、軽度の照れ屋のようだ。

「・・・・まぁ、惚れた部分もあるな」

そう言われ、今まで緊張していた空気が一瞬にして緩み、「・・・・それだけか？」と聞き返した琉貴も目を丸くした。

「いや、俺は、そんなことをカミングアウトしろとは言ってないぞ・・・・いや、しかし、まさかな・・・・」

そう言って、琉貴は俺と炎縁の顔を見比べてから、顔を背けて、クスクス笑い出した。

「おっ、おい！なぜ笑うのだ！それに、何を勘違いしている！私は、生き方に惚れたのだ！決して勘違いするな！」

そう必死に炎縁が抗議をするが、琉貴は相変わらず笑ったままだ。

「とか、なんにも勘違いしてないぜ」
「!?」
琉貴の言葉に炎縁は目を見開き、よろよろと壁に寄りかかった。
自分でその言葉を言ったらお仕舞いだろうと思う。それに余計おかしくなって、琉貴が笑い始める。
しかし、そんな時間はいつまでも続かなかった。
「誰か来るぞ!」
俺の一言で、今までの緩んだ空気が一転し、俺達は影に隠れる。
「どうしたんだ?」
「誰かが来たんだ。これが敵だったら、俺達は終わりだな」
「とは、どう言うことなんだ?」
「ここを閉められたら、俺達は出られない。ここは、外側からじゃないと鍵を閉めることも開けることも出来ないんだ」
「・・・マジかよ。どうするんだよ?」
「せっかくやる気出したところだったのによ。全く・・・・」
そんなことをブツブツ言いながら隠れていると、入り口に影が差して、誰かが立っているのがわかった。
俺達は息を殺して縮こまったが、部屋はかなり狭い為、直ぐに見つかった。

「お前達、そこで何をしている！」
「・・・・」
「クソッ」
「これで、逃走劇も終わりか」

警備員が笛を吹いた途端、どこから湧いて出たのか、無数の警備員が群がって来て、俺達の腕を？むと、部屋の外に連れ出す。

その祭、壁に寄りかかるようにあった族長の骨がバラバラになって、俺の心は物凄く痛み、自分の無力さを呪いたかった。

族長をあんな姿にしてしまったのも、全て俺のせいなのだ。

そう思うとやりきれない思いで、ここで捕まっていられないと言う気持ちになり、今まで素直に連れて行かれていたのだが、抵抗をし始めた。

「こらっ！抵抗をしたって、どうせどこにも逃げられないんだ！なぜ抵抗を始める！」
「うるせぇ、離せ！俺は、こんなところで無残に捕まってる暇はねぇんだ。離せ！」
「抵抗をすればするほど刑は重くなるんだぞ！」
「そんなの関係ねぇ、ここでくたばれねぇ！」

俺が抵抗をしているのを見てからか、琉貴と灸縁の方も騒がしくなる。

当然、警備員の奴らは必死に押さえつけようとするが、俺はそれを振り払うと、灸縁達の方に歩いて行く。

「コラー！」
「『コラコラ』うるせぇぞ！」
「うるさいだと！」

「ああ、うるせぇよ！」
「うるさいとはなんだ！刑を重くするぞ！」

「ったく、『うるさい』って言っただけで刑を重くするなんて、ほんとに馬鹿だよな。信じられねぇよ」

「何！？」

ついに怒った警備員が襲い掛かって来るが、俺はそれを屈んで避けると、傾れのように倒れている警備員を見ながら、琉貴と灸縁を助け出し、警備員のいる反対側に走り出す。

「中々やるんだな」
「これで中々やるって言ったら、俺達の世界じゃ生きていけないぜ」

「ふんっ、我々は、元々神の世界の住人だからな。魔界に住むつもりはないさ」
「そんなガキの言い訳みたいなこと言ってんじゃねぇよ！」
「そうだな。ところで、脱出したはいいが、どこで奴らを撒く？」

「とりあえず、この地下から脱出しよう。まずはそれが先決だ」
「ああ、了解！」

俺達は、互いに顔を見合わせると、大きくうなずいた。

いつの間にか、こいつらを信用している自分がいた。今まで人をあ

まり信じなかった自分が人を信じれるようになったのは、あの人のおかげかもしれないと思った。

そして、改めてあの人を失って、俺は悲しい気持ちで一杯だった。

その心理は一体・・・？

「ぬぁっ、足がない！？」
「なっ、何がどうなってんだ？！」
「・・・私のこと、覚えてないの？」
「そんなことある訳ないだろ？でも・・・・」

優河さんは、とても嬉しそうなのだけれど、その中にも、戸惑いの色を浮かべている。足を見ては、その女の人の顔を見ている。

「この森は、結構霊力が強いの。だから、結構霊とかが降り易くてね。ここにあなたがいるから降りて来たの」

「そっ、そうなのか！」

僕はなぜか、優河さんの反応にしっくり来なかった。

と言うのも、優河さんの表情が引きつっているように感じる。なんでそうなのかわからないけれど、笑顔を浮かべているものの、その笑顔が自然なものとは思えないんだ。

「逢いたかったよ、優河！」

その女の人は優河さんに飛びついていくけれど、霊体だから、もちろん、優河さんが受け止められる訳もなく、スルッと通り抜けてしまった。

それを感じてか、優河さんは蒼い顔をしてブルッと身震いをしていた。

やっぱり、その反応を見て、僕は不思議な気持ちになる。

普通、好きな人が幽霊の姿になって現れても、ここまで怯えたりしないんだと思う。

僕は、優河さんには意地を張って言ったけど、ほんとは、人を好きになると言うことはあったけど、愛してるって言えるほどの人がいる訳でもない。でも、なんとなくわかる。優河さんは、もう、この女の人を好きじゃない。

「あらら・・・そっか、私、死んじゃってるんだもんね。でも、優河に会えて嬉しいよっ！」

「あっ、ああ・・・。俺も嬉しいぞ」

「どうしたの？顔色が優れないけど・・・・」

「あっ、ああ、少し気分が悪くてな」

そう言う優河さんの表情は、明らかに優れていなかった。まるで、もう直ぐ消えてしまうような気がした。

そんな僕の不安は的中しないといいなって思う。とか、絶対にしないで欲しい。でも、不安をかきたてられるほど、顔色が悪かった。

「本当に大丈夫？」

「あっ、ああ・・・・」

女の人が近付いた途端、優河さんは怯えた表情をして一歩下がった。

その光景を見て、女の人の表情が一気に変わった。今まで満面の笑

みを浮かべていたのだけれど、一気に無表情に変わって、呆然とした目で優河さんを見つめていた。

その表情がとても怖く思えて、僕は後ずさる。睨みつけてる訳でもないのだけれど、何も表情を感じさせないその目は怖かった。

「なんで・・・なんで、怯えた目で私を見るの?」
「違う、怯えてなんかない!・・・・ただ」
「ただ・・・・何?どうしたって言うの?」
「くっ・・・・・」

優河さんはその女の人から顔を背けると、僕の腕を?んで、森の出口へと走り出した。

「なっ、何!?どうなってるの?」
「今は何も言わせるな!俺は・・・・・」
「えっ、なっ、何がなんだか・・・・・」

僕は、訳がわからないまま、優河さんに腕を引っ張られた。

「大分歩きましたね、もう少しで森の外に出られる頃だと思いますよ?」
「そうですか・・・・。これで、優河さんを救えるんでしょうか?」

「えっ、そう言われても・・・・」
「さぁ、見えて来たぞ。ここを出ればこの森から出られっ・・・・」
急に幸明が言葉を切った為、僕は不思議な気がしたけれど、直ぐに、自分も言葉を切った理由がわかった。
外に出ようと一歩を踏み出した途端、僕は、何かに思い切り顔面をぶつけて、思わず星がちらついた。それほど思い切り頭を打ったのだ。
僕は、しばらくの間フラフラしていたけれど、なんとか頭を振って意識を取り戻すと、朱音さんに注意を促そうとした。けれど、時既に遅しの状態で、隣で朱音さんも額を抑えてうずくまっていた。
「だっ、大丈夫ですか?」
「ええ・・・・。でも、結構痛くて・・・・」
「ですよね・・・・僕も、星がチラチラ飛びましたからね」
「それにしても・・・・これは一体なんなんだ?」
幸明は、僕らの話を無視しながら、ボソボソ言って、透明のバリアのようなものを叩いている。
それは、バリアと言うよりも、ガラスのようなもので、とても固かった。せめて、バリアのように柔らかくて、ボンッと跳ね返される程度ならいいのに・・・・。
僕は、そんなことを思いながら、恨めしげにそのバリアのようなものを睨みつけていると、矛盾している部分に気づいた。
・・・・どうして、このバリアのようなものがあるんだろうか?入

る時は、こんなものにぶつかることはなかったのに・・・・。

「なんでこんなものが突然出現したんでしょうか??」

「もしかしたら、この森は入ることを拒むことはないけれど、出て行こうとする者を拒むように出来ているんじゃないか?」

「えっ、そんなこと・・・・なんでですか?」

「私に聞かれても困る」

「あっ!?」

僕らが言い合いをしていると、不意に朱音さんが声を上げて立ち上がった為、僕らは口論をやめて、朱音さんの方を向く。

「どうかしたんですか?」

「優河さんが危ない・・・・」

「はい、それは知ってますけど・・・・・」

「場所は・・・・ここ?そして、襲ってるのは・・・・誰?」

「何か見えたんですか!?」

「わからない・・・・なにが彼を襲ってるのかわからない・・・・でも、なんだか、物凄く嫌な予感がします」

そう言った朱音さんの顔は、元々白かったのだけれど、血の気が引いて、余計白くなってしまった。これは、何か大変な子事が起きてると僕は直感で感じた。

「とりあえず、引き返してみましょうか?」

「はい・・・・怖いですけれど、優河さんを救いたいです」

僕は、状況がよく飲み込めてないけれど、朱音さんの後を追って森の奥へと走り出した。

仲間だけど仲間じゃない

「ふぅ～～～ったく、俺達、今どこにいんだよ？」
「悪いな。さっき警備員に捕まった時に地図を奪われてよ、現在地がわからないんだ」
「それに、道を覚えられるほど単純な道を歩いていないからな。ぐねぐねと・・・・」
「・・・・まだ、落ち込んでいるのか？」

そう琉貴に問われ、俺は首を振った。こいつ、中々鋭い奴だ。俺が元気ぶっているのを見透かしている。

だから、最初は嘘をつこうと思ったが、どうせそれも見抜かれるとわかって、俺は素直に言った。

「・・・・まあな。やっぱり・・・・・ん？」

俺は、自分の懐を探って首をかしげた。

「どうした？」
「いや・・・・族長の形見が・・・・・」
「髪がなくなったのか？」

「ああ・・・・俺、ちょっと探して来るぜ。お前ら、ここで少し待ってろ」
「待て、今一人で行動するのは危険だ」

そう炎縁に止められた時、俺は、不意に悪寒が走った。炎縁に止められたとかは関係ない。ただ、嫌な予感がしたのだ。

だから、自然と震えが走り、炙縁達の方を向いた。

「どうした?何か感じたのか?」

「お前ら、俺のことはいいから、早くここから出て、瘴気の森へ行け!」

「はぁ?突然何を言い出すんだ?」

「嫌な予感がするんだ。だから、俺のことはいいから、お前らだけで外に出て行け」

「そんなこと出来る訳ないだろ?」

「じゃあ、せめて、俺の変わりにロックを解除して皆を解放してくれ。俺が囮になって逃げ回る」

「状況がよく飲み込めないのだが・・・・」

「とにかく、俺も、ロックを解除するから、頼んだぞっ!」

俺は、そのまま走り出した。後ろから琉貴と炙縁が声を上げているけれど、俺はそれを無視して走りだすと、そのまま誰かにぶつかった。

「うわぁっ!?」

「っ・・・・」

互いに結構飛ばされ、相手を睨む。けれど、お互い敵じゃないとわかると、ほっと息をついた。

「なんだ、お前、警備員じゃないんだな。よかったぜ・・・・。しかし、敵って場合もあるよな・・・・顔、見せろよ」

俺にそう言われて、最初は躊躇ったようだが、無言でフードを取った。

「うーん、一応は仲間ってことなのか？」

「俺は敵ではない。裏切り者もいるようだが、私は違う」

そいつは、何だか変な奴だった。黒い髪なのだが、その長さが微妙なのだ。見た目の割りに、髪の長さが不自然なほど短いのだ。ギリギリ肩に乗るくらいの長さで、とても不思議な気がした。

しかし、直ぐにその疑問は消えた。俺は、妖怪を基準として考えていたのだが、こいつが妖怪なんて言う確証はないのだ。だから、髪が短くてもおかしくはない。

そう一人で考え込んでいると、そいつは不思議そうな顔で俺の方を見てから、地図らしきものを見ている。

「お前は、何の為にここに来たんだ？」

「まぁ・・・なんと言うかな・・・。族長を助けに来た・・・か？」

「・・・族長？お前、妖怪なのか？」

「はぁ？逆に、お前、それを知らなかったのか・・・？俺達の仲間じゃないのか？」

「・・・俺は、ここに閉じ込められている者じゃない。故意に侵入した者だ。だから、お前の正体を知らない」

「そうなのか・・・。まぁ、じゃあ、そう言うことだ。俺は族長

を守る護衛。それなのに・・・・族長を殺しちまった・・・・・」

自然と目の前が霞むのがわかった。慌てて後ろを向いて袖で涙を拭う。

「泣くほど大切な奴だったのか？」

「なっ、泣いてねえ！それに・・・・そこまで大切とかじゃない！ただ・・・・情けなくてよ、護れと言われた人も護れねぇで。それに・・・・・」

そこで言葉が詰まる。全く、本当に情けねぇ。

「まぁ、そいつは幸せだろうな。死んだとしても、そうやって泣いてくれる奴がいるならそいつは幸せな奴だな」

「・・・・だからっ、泣いてねぇって！」

「とにかく、お前が泣いてるか泣いてないかはどうでもいい。しかし、惜しいことをしたな。そいつに会ってみたかった」

「・・・もう無理だぜ。死んじまったんだからよ。それに、泣いてねぇからな！勘違いすんなよ！ゴミが目に入っただけだからな！」

「のわりには、鼻水まで出ているようだが・・・？」

そう薄ら笑いを浮かべているそいつは、とても憎たらしく思えるが、あまり言い返せなかった。何せ、事実だからな。

「とにかく、もうベソベソ泣くな。ガキじゃないんだから」

「なっ・・・・ガキって言うなよ！」

「大声を出すな。俺の言う通りにしておけば、ここから出られる。それで、仲間のところに向かえばいいだろ？」

「牢屋に閉じ込められている奴らを助けてもいいか？それに、形見も・・・・」

「そんなことをしている暇はない！」

「・・・・でも、大切な物なんだ！」

「なら、勝手にしろ。俺は、お前に手を貸すことをしない。友情なんちゃら言ってここを出られるほど、甘くはないんだ」

そう言う奴の表情がなんとも言えなくて、俺は、何も言い返せなかった。

「そうか・・・・なら、またな」

俺は、それだけつぶやくと、そいつに背を向けた。

「待て、これを持っていけ。きっと役に立つはずだ」

そう言って投げ渡されたのは、琉貴が見ていた地図よりも、はるかに細々とした色んなことが書かれたものだった。

俺はそれを見て、あいつは、そんなに悪い奴でもないのかもしれないと思った。

まさかの希望！

奴と別れた後、俺は、その地図を頼りに歩きだした。警備員に捕まったのは、確か、螺旋状の通路の中間部分だった気がする。

しかし、自分がどこにいるのかわからない。

「ったく、現在地がないと、地図って意味がないのが難点だよな」

そうつぶやきながらも、何とか上に向かって歩いて行く。上に、何か気になるものを見つけたのだ。地図の一番てっぺんの通路のところに〇印が書いてあり、「ココ」と書いてあった。何があるのかわからないが、ここに何かがあるのは事実だと思ったのだ。

だからとりあえず、上って行く。現在地はわからないが、前に進めば、いつかは上にたどり着くだろうと思ったのだ。

しかし、現在地がわからないと、物凄く細かく詳細が書いてあるわかりやすい地図なのだが、意味がなくなってしまっている。

どれくらい詳しいかと言うと、監視カメラの位置はもちろん、この辺りを何時に警備員が巡回に来るかとか、一つ一つの扉の答えまで書いてある。それなのに、現在地がわからないから、全く意味がない。

「ったく、見にくい地図だな・・・・」

俺がそうボソッとつぶやいた時、不意に、地図が抵抗をしたかのように動くと、バサッと下に落ちた。

俺は理解不能だった。今の表現は明らかにおかしかっただろう?地図が動くはずがない。抵抗をするはずがないのに、動いたと言う表現をした。しかし、そう言う表現をするしかなかったのだ。風も吹いていないのに、地図が俺の手から落ちたのだから。

【何を無礼なっ!私のどこが醜いの!?】

「・・・・は?」

俺は、突然しゃべり出した地図を唖然と見つめていた。何が起こったのかわからない。しかし、これは一体・・・・?

「・・・・お前がしゃべってるのか?」

俺は、地面に落ちている地図にしゃべりかけるけれど、返事が返って来ない。それを確認して、俺は大きく息を吐いた。

自分がおかしくなったんじゃないとわかって、とても安心したのだ。

そのまま地図を拾い上げようとするが、石のように重くなって、持ち上げられない。しばらく粘って頑張ったが、百トンぐらいの重さになってしまったかのように、全くもってびくともしない。

「重過ぎて対処しきれないぜ」

俺がそう言った途端、今まで重かった地図が、さっきまでのペラペラの紙の重さに戻った。それは嬉しいことなのだが、再び幻聴が聞こえて来た。

【そう!綺麗って言えばいいのよっ!さっ、どこへ行きたいのかし

ら？】

「・・・・」

俺は、無言でしゃべっている地図を見下ろすと、そのまま停止した。

・・・やっぱり、地図から声が聞こえる。やはり、頭をおかしくしてしまったらしい。

「いやいや、そんなことはねぇよ。俺は、ついに幻聴まで聞こえるようになったのか・・・・」

【幻聴なんかじゃないわっ！失礼ね。どこに行きたいの？】

「・・・まずは、俺の今いる現在地を教えてくれないか？」

【お安い御用よっ！】

そう言うと、今まで何も書かれていなかった場所に、赤い丸印が出現した。

「うおわぁっっ・・・・」

俺は驚いて、地図を取り落とした。そして、自分の大きな声に驚いて、慌てて口を塞ぐと、通路の端でしゃがみこんだ。そんなことをしても姿は見えるのだが、出来るだけ体を小さくして身を隠そうとしたのだ。

【そんなに驚くこともないじゃない。私はね、あなた達の知っているような低レベルの地図じゃないのよ！超スーパーハイレベルの未来型地図なのよ！覚悟しなさい！】

「ちっげーよっ！俺が驚いたのは、お前の高性能ぶりからじゃねぇ

よっ！総合的に驚いたんでぃ！」

【あらあら、お口が悪いようね。でも、私の高性能ぶりに驚いたのは確かね。でははでは、次に何を聞きたいかしら？】

「じゃっ、じゃあ・・・・後何分でこの場所に警備員が来るのか。そして、監視カメラの数。後、目的地」

俺は、地図が物凄い高飛車な為、少しイジワルを言ってみた。さすがに、目的地までは言えないだろうと思ったのだ。

【警備員は、三十分ごとにここに現れるわ。だから、後二十分後にここに現れる。そして、監視カメラのことは気にしなくていいわ。オーナーが既に、使い物にならなくしてるわ。そして、今、あなたの向かうべき道は、最上階です】

「・・・・お前、ほんとに高性能なんだな」

まさか、目的地まで的確に答えるなんて、思っても見なかった。だから、つい本音が漏れてしまった。

【やっとわかったのですか！それならよろしい！では、急ぎましょう！】

「ところでさっき、オーナーって言ったよな？そいつって、あの、頭が変な奴か？」

【失敬なっ！修羅様は頭の変なお方ではないっ！無礼なっ！】

「修羅・・・・？」

【ええ、オーナーの名前でございます。それでは、行きましょうかね！】

「待て！その修羅って奴・・・・それが本名なのか？」

【いえ、確かなところは私もわからないわ。ただ、オーナーは修羅と呼ばれておりました】

俺はそれを聞いて、電撃が走ったような気がした。修羅とは、族長の名前に近いじゃないか。だから、自然と、あいつが族長なんじゃないかと言う思いがしてならなかった。

「じゃあ、その・・・・修羅とか言う奴の居場所はわかるか？」

【オーナーなら、あなたを連れて来いと言っていたので、私が示した場所に行けば会えると思いますよ】

俺はそれを聞いて、やる気が出た。単純だと思われるだろうが、それは事実なのだ。

側近の奴と変な通路

「おい、合ってんのかよ、この地図・・・・」

【合ってるに決まってるでしょっ！私は、超スーパーハイレベルの地図なのよっ！？間違ってるはずがないわ！】

「ったく、その言葉を何十回聞いたが、まだ上にたどり着かないのはどう言うことだ？」

【・・・そっ、そんなことないわっ！私はオーナーに雇われて、あなたを上に連れて行くことを言われたのに】

「なぁ、その修羅って奴、いつからお前を雇ったんだ？」

【それは教えられません。オーナーの名前を言った時点でアウトなんです。修羅様になんと言われるか・・・・怖いです】

「そんなに怖い奴なのか？」

【ええ、それはもう、とても・・・・。修羅と言う名前も、本当の名前ではないような・・・・はっ！私はまた何を！？いけない！なんでこんなことを言わせようとするのですか！？】

「俺は、単に聞きたいことを聞いただけだぜ！それに、どうして修羅なんて・・・・」

【修羅場とか言うじゃない？その修羅の部分を取って修羅】

「じゃあ、本当の名前はわからないのか？」

【噂です。本当の名前かも知れないし、偽名かもしれないです。ただ、私は雇われた身なので、オーナーのことを詳しく詮索しちゃいけないの！】

「お前、口調崩れてるぞ」

【うるさいわね！あなたに一々丁寧な言葉を使わなくてもいいなって思ったのよ！】

俺は、怒鳴って来る地図の声がかん高過ぎて、思わず耳を塞ぐ。そして、顔も歪める。それほど耳に刺さるような声なんだ。

「うるせぇよっ！もっと声潜めろ！」

【なんでそんなことをしなくちゃいけないの？私、うるさい？】

「そこだけ無邪気に言うな！」

俺は、何とかツッコミを入れると、大きく息を吐いた。

何せ、こいつはうるさいし、ボケばかり言って来る。俺はもともとボケの立ち位置にいると族長に言われたことがあるが、こいつは、そんな俺でさえツッコミをいれるような奴なのだ。大ボケに違いない。

そんな言い合いをしながら歩いている時、不意に目の前に立ちふさがれて、自然と姿勢を低くして身構えたが、相手は、修羅と似たような格好をした奴だった。

「武器を向けないで下さいよ。俺は、貴方の味方です」

そう言って、俺が何も言わずともフードを取った。

その顔は無邪気な笑みを浮かべていて、とても敵だとは思えないような雰囲気がした。髪の色は黒色で、長さは修羅と同じく、肩上だった。やっぱり、こいつも妖怪じゃないらしい。

「なら、何の用だ?」

「いや・・・どうも、苦戦しているようなので、部下である俺に連れて来いと頼まれたんです」

「そうなのか・・・。お前は修羅の部下なのか。それなら、修羅のことを知ってるか?」

「うーん、修羅様のことは、俺もよく知らないんですけどね。あの人、結構部下とかにも秘密を教えようとする人じゃないので。側近の俺でさえもよくわからないお方なのでね。俺が知ってることと言えば・・・修羅って名前だけですね」

「・・・そうなのか」

俺は、大きくため息をついた。そして、もっと、修羅と言う人物が族長であるような気がしてならなかった。

族長なら、骨に自分はなったと見せかけて、脱走でもしそうな人だからだ。

「まぁ、とりあえず、俺について来てくれれば的確です。俺、こう見えて、方向感覚抜群なんで」

そう言って笑う奴を、俺は不思議な感覚で見ていた。

「そう言えば、お前、名前は？」
「俺は、優羅（ゆうら）って言います。以後、お見知りおきを」
優羅はそう言ってお辞儀をすると、歩み寄って来て、握手をした。
「優羅っと修羅って・・・・似てるな？」
「ああ、俺のこの名前、修羅様が付けて下さったんです。だから、似てるのかもしれません」
「そうか・・・・優羅か」
「・・・・はい、それがどうかしましたか？」
優羅がけげんそうな顔をした為、俺は慌てて首を振って弁解をした。
「と言うか・・・方向感覚抜群って、関係なくないか？ここは元々一方通行だし・・・・」
俺がそう言うと、優羅は再びけげんそうな顔をして、ポンッと手を叩くと言った。
「そうか、貴方は知らないのかもしれませんね？俺達の通路」
「・・・・俺達の通路？」
「ええ、俺達、主にこう言う場所で移動しないんですよ」
「・・・・は？」
にこやかに説明している優羅の説明がわからず、俺は物凄く戸惑った。こう言う場所で移動しないって、どう言う意味なんだ？

こう言う場所と言うのは、今、俺達のいる通路のことだとわかる。
しかし、それ以外にどこを通路と呼んでいるのかわからない。

「こう言う場所と言うのが普通の・・・俺達が今立っている通路だとわかる。しかし、それ以外に通路と呼んでいる場所がわからない。それはどこだ?」

「・・・それはですね、ズバリ、下水ですよ」

俺は、その言葉を聞いた途端、思わず耳を疑った。下水だって?こんなところに下水なんてあるのか?そもそも、下水って、マンホールの下のことを言うんだろ?ありえないぞ・・・。

「はぁ?下水なんて、こんなところにないだろ?」
「いやいや、俺、嘘はつきませんよ。嘘だけは・・・ね?」

「・・・下水かよ・・・臭いんだろ?あそこだから黒いマントを着てるのか?」
「いえいえ、違いますよ、下水なんて思わないで下さい。嘘ですから」

そう言ってクスクス笑う優羅を見て、イラッと来たが、俺はなんとか精神を保たせた。

「まぁ、そう言う嘘は置いといて、そろそろ出発しましょうか」
「どこを通るんだよ?」
「俺達が通る道・・・それは、『隙間』ですよ」

「・・・隙間?」
「ええ、聞くより見る方がわかりやすいです。では、行きましょう」

「えっ、あっ、おいっ！」

俺は、強引に腕を引っ張られ、そのままずるずると引きずられて行った。

案内役って言ってもね・・・・

俺は、あれから優羅に引きずられて、優羅いわく、「隙間」と言う場所に連れて来られている。

優羅の言う隙間と言うのは、部屋と通路の隙間だった。だから、天井の隙間のようなものと思ってくれればいいだろう。

「狭いなぁ、ここ」

「確かに、俺も最初は狭いと思いましたが、慣れればそこまででもないですよ」

「っぽいな、慣れた感じで進んでるもんな」

俺は小声でボソボソ文句を言いながら、ゆっくりと前に進んで行く。

「とか、なんでこんな場所を通るんだよ?」

「ああ、あの通路、トラップなんです。警備員とかは、他の通路を通ってますよ。あの通路を真剣に登っても、上に行くことは出来ないんです」

「と言うことは、俺達は、無駄な道を懸命に歩き続けていたと言うことか・・・・」

どうりでたどり着けないはずだ。いくら歩いても進まないものなのだから。一時間近く歩いた俺は一体・・・・?

「大丈夫ですよ、そんなに気落ちしないで下さい。誰でも気づきませんよ」

「・・・気落ちなんかしてねぇ！」
「それに、もう直ぐでつきますから」

「・・・は？？上にのぼってないだろ？真っ直ぐに歩いてるだけだろ？そんなの嘘に決まってるぜ」

「言いましたよね？俺、嘘だけはつきませんから。もう直ぐですよ」
「お前、よくそんなことをニコニコ顔で言えるな？さっき、普通に嘘をついただろ？」

「ま、まぁ、それは置いておきましょう。今度は嘘じゃないですよ、修羅さんにバラされたら大変ですからね」

そう言って俺の方を向いて微笑むが、俺は、その笑みを信じることはしなかった。また嘘に決まってる。さっきだって普通に嘘を言っているんだ。

しかし、俺の予想は外れた。三十歩ぐらい歩いた時、突然両端の壁が無くなった為、俺は、前に倒れ込みそうになって、なんとか体制を立て直す。

「なんなんだ、ここ。やっと出られたぜ。で、ここがてっぺんなのか？何もない場所だが・・・？」

「・・・あれ？ここに修羅様がいるはずなんですけどね・・・
もしかして、間違ってしまった・・・かな？」

「はぁ！？お前、方向感覚抜群じゃなかったか！！？」
「あっ、えっと・・・その地図を貸して下さい」

そう言って、優羅は恥ずかしそうに手を差し出した為、俺は仕方なく地図を渡してやると、現在地を教えてもらい、大きくうなずいていた。

「ああっ、そうか・・・・！」
「何がわかったんだ？」
「俺、一本道を間違えたようです。どうりでおかしいと思った。なるほど・・・・」

優羅は、それから五分近く地図とにらめっこをして、上へ行く方法を考えているようだったが、俺は、それを手伝わず、ボーッと突っ立ってた。

こう言う性格の奴は、考えている途中で何かを話しかけると、考えを中断してその答えを言う為、俺は何も話しかけない。それが一番いいのだ。

「では、出発しますか？」
「ああ、出発しようぜっ！」

やっと優羅が地図から顔を上げてそう言った為、俺は大きくうなずいた。

「今度は間違うことはないよな？」
「・・・・それは、愛嬌にお任せすると言うことは出来ませんかね？」
「そんなので許される訳ないけどなっ！」

そう笑顔で問うて来る為、俺も笑顔で言ってやった。

すると、笑みを消して、ため息をついた。まぁ、仕方ないな、愛嬌なんかで流されるほど、世の中は甘くはない。

「でも・・・・怒らないで下さいよ」

「怒りゃしねぇよ。機嫌を損ねない限りな！」

「それ、物凄く個人的なものさしじゃないですか・・・・」

「まぁ・・・・それは、人間関係は難しいんだよって言うことだ。人生大変だからな」

「その様子だと、貴方、よっぽど大変な人生を送って来たんですね。同情します」

「・・・・お前、皮肉屋って言われないか？」

「いえいえ、そんなことを言われたことはありませんよ。天使だとは言われたことありますけど」

俺は、そう言う優羅の頭を思い切りはたいてみたいと思った。歳も年下のようだし、叩いてもいいかと思ったけれど、何とか理性を繋ぎとめる。

「そうか、そうか。そんなことはどうでもいいぜ。さっさと行こうぜ！」

「そうは言っても、貴方が問うて来たことなので・・・・」

「お前、皮肉屋って言われたことあるだろ？」

「それ、二度目ですけど、俺、皮肉屋なんて言われたことはありませんよ」

「いや、それは絶対嘘だ。お前が修羅の側近だからって言わないだけで、お前はかなりの皮肉屋だぞ。自分でも気づいてるだろ？皮肉を言ってるって」

俺は、一応聞いてしまった。ここまであからさまなのに、自分が皮肉屋だと自覚していないはずがない。もし、自覚をしていなかったら、そいつはよっぽど馬鹿なのだろうか。

「えっ、俺・・・・皮肉屋だなんて一回も思ったことありませんけど・・・・。俺、そこまで皮肉屋ですか？」

俺は、優羅から顔を背け、小声で文句を言った。「こいつ・・・・本気で皮肉屋だって気づいてねぇ」それだけ言うと、ため息をついて、優羅の背中を押すと、前に歩かせる。

「方向、こっちじゃないですけど・・・・」
「それを早く言えっての！」

俺は、そうツッコミを入れると、再び深いため息をついた。

「でも・・・俺は貴方に背中を押されたから・・・・」
「俺のせいにすんなっての！とか、先進めねぇじゃねぇか！早く案内しろよ！」

「全く・・・・無粋な方ですね。俺は元々、貴方が修羅様の元にたどり着くまでの道案内をするはずなのに・・・・ここまで時間がかかるとは思ってなかったですよ。俺も」

「そんなの、お前のせいだろ！」

俺がツッコむと、優羅は心外そうな顔をしたが、大きくため息をついて、俺から地図を奪うと、ブツブツ何かを言い始めた。

俺は、最初のイメージと随分違うものだと感じた。最初は、ただニコニコ笑ってるだけの奴かと思っていたが、こいつ・・・・只者じゃないほど馬鹿なんだ。

そう感じて、俺は大変な奴に絡まれたなと思って、深いため息をついた。

地獄監獄消滅

「さて、もういい加減着くよな？」
「・・・・」
「おい、大丈夫か？」

「・・・・」
「全く、これだから信用で・・・・」
「着きましたよ、ここです！」
「本当にそうなのか・・・・？」

俺がなぜいぶかしんでいるのか。それにはちゃんと訳がある。あんなに大苦戦をしていた割に、着く時間が早かった。それに、誰もいない。修羅らしき人物と思える人影がいないからだ。

「ええ、そうですよ」
「修羅らしき人物はいないじゃないか」

俺がそう言った時、突然上から何者かが降って来た為、俺は驚いて、とっさに飛び退いたが、フード付きの黒いマントを確認して、俺は安心した。ついに、修羅が出て来た。

修羅は立ち上がると、俺に近づいて来た。そして、手を差し出して来る為、握手をした。

「牢獄に閉じ込められている者。大切な物。全てを拾って来たか？」
「・・・・なんでそんなことを聞くんだ？」
「ここを今から完全に消し去る」

「なっ・・・・それじゃあ、残った奴らはどうなるんだ?」
「それは、消えるんじゃないか?俺には知った事じゃない」
「・・・・・」

俺は、思わず押し黙ってしまった。まさか、族長の口からそんな言葉を聞くことになるとは思っていなかった。

「・・・お前、修羅って名前なんだろ?」
「ああ、それがどうした?」
「それ、本当の名前なのか?」
「本当の名前さ。嘘を言って何になる?」

「そう・・・か。俺が、『大切な物、閉じ込められた者を全て救出した。残ってるのは警備員だけだ』と言ったら・・・?」
「準備完了と見なして、この地獄監獄と言う場所を消し去る」
「俺達はどうするんだよ?この場から出ることは出来ないだろ?」

俺がそう言うと、修羅が首を振って言った。

「ここの脱出方法なんて、簡単なものなんだ。ワープを使えばいい。そうすれば、一瞬で外に出ることが可能だ。準備はいいか?」

「・・・・」

俺は、そこで黙り込んだ。炎縁達と別れたせいで、あいつらが無事に外に出られたのか、牢獄に閉じ込められている奴らは逃げられたのかと言うことがわからなくなった。無線も使えず、あいつらと通信をする手段がなくなった。

・・・・待てよ。

「警備員はどうするんだ？」

「警備員の奴らのことなんざ知らん。お前だって大切な族長を苦しめられたはずだ。だから、死んだって構いはしないだろう？」

俺は、無言で首を振った。

「おい、優羅、俺、ここに来る時に、修羅が族長に似てるって言ったよな？」

「・・・・ええ、そう言えば、そんなことを言っていたような気がします。・・・・それが今、どうしたんですか？」

「・・・・違うんだよ」

俺は、何とか怒りを堪えながら、つぶやくように言った。

「は？」

「こいつは、族長とは全然違う！こんな奴が族長なはずがねぇ！族長は、こんな意地汚ねぇ奴とは違う！！」

俺がそう怒鳴ると、修羅は今までポカンとして聞いていたが、やがて、「クックックッ・・・・・」と声を殺しながら笑い始めた。

「何が可笑しい！？」

「俺が意地汚いか・・・・。まぁ、なんとでも言え。俺は、人に嫌

われるのには慣れている。別に、何を言われたって構わない。ただ、俺は、地獄監獄に恨みを持つ者同士、仲良くしようと言っているだけだ」

「・・・・復讐とか言う奴か？」

俺の問いに、修羅は少し考え込んだ後、微笑を浮かべて言った。

「それと似ても似つかないもの・・・・だけど、総合的に言うと、そうなのだろうな」

「・・・・確かに、幸明のやり方は気に食わねぇ。何の罪もない奴らを閉じ込めて、逆らっただけで罪を重くする。・・・・それに仕えている警備員もどうかと思うぜ。そのことに納得が言っていない奴でも、従っていれば同じ。

・・・・ただ、俺達と同じ生物だと言うことは変わりねぇだろ？生きとし生けるもの。その全てが、お互いの死を攻め立ててはならない。お互いを殺していいことなんかない。例え、国王でも神様でも、いけないんだ。だから、お前は、神達すらやってはいけないことを実行しようとしてるんだ」

俺の言葉を、修羅は馬鹿にしたような表情を浮かべて聞いていた。

「俺に説教か？お前、俺に説教出来るほどいい生き様して来たのか？」

「いい生き様とか・・・・そんなので言葉を言う権利は決まるものか？まぁ・・・・確かに、俺なんかがこんな言葉を言ったって、単なる綺麗ごとにしか聞こえないかもしれないな。でも、これだけは

言っとくぞ」

俺は、そこで一回言葉を切ると、大きく息を吐いた。そして、大きく息を吸う。

感情が溢れて、今にも爆発して変な言葉を言ってしまいそうで、心を落ち着けるには、何度かの深呼吸が必要になったんだ。

「復讐の鬼にならないことだ。復讐の鬼となって果てるのは、悲しいものだからな」

「・・・その言い方、まるで、自分が一度経験したとでも言いたげな言葉だが・・・・？」

「それは、あんたに言う必要はない」

「そうか・・・・では、もう時間がない。地獄監獄を消滅させる」

突然そんなことを言われた為、俺は面食らった。

「まっ・・・・・」

「終わりだな」

そう言って修羅が笑った途端、俺の体は宙に浮いた気がして、そのまま地獄監獄から消えた。

優羅と修羅の正体

ハッと目を覚ますと、俺達はどこかの草原に転がっていた。

最初は頭がボーッとして、なぜ自分がこんなところに転がっているのかと不思議に思っていたが、やがて直ぐに思い出して、隣に転がっている修羅の首を?むと、大きく揺すった。

「おいっ、てめぇ!何してんだっ!」

俺が揺すると、修羅は目を覚ましたが、ぼんやりとした目で俺を見た後、俺の手を?んで離させると、大きく伸びをした後、欠伸をすると、立ち上がった。

「貴方、どうして野蛮なんですか?」
「お前は修羅じゃねぇな。お前らそっくりでわかりづらいぜ」
「ところで、修羅様はどこに行かれたのでしょうか?」

「そんなの知らん。あんな奴、どうなったっていい」
「まぁ、そう言わないで下さい。とりあえず、探しに行きましょう?」
「・・・ふんっ、あいつなんか・・・」

「貴方はどうでもいいことかもしれませんが、俺にとってはどうでもいいことじゃないんです。貴方にとって、修羅様は最低な人間かもしれませんが、俺にとっては、修羅様は命の恩人なんです」

そう言って俺の方を見る優羅の目は、睨んでいる訳でもないのだが、やけに鋭く、誰かに似ているような気がした。笑みが消えると、随

分雰囲気が変わった。まるで・・・・。

俺は、自分の考えに首を振ると、ため息をついた。

「・・・・」

「貴方だって、命をかけて護らないといけない人がいるでしょう？俺は、それが修羅様なんです。それだけです・・・・」

それだけ言うと、優羅は歩き出した。

「わかった。俺が悪かった。ちょっと奴のことを悪く言い過ぎた。すまん」

俺がそう言うと、優羅はいつもの笑顔に戻った。それを見て、俺は自然とほっとする。こいつは、怒らせたら危ないと思った。殺気とは違うが、なんとも言えない雰囲気に、そう思ったのだ。

「そう言っていただけると、こちらとしてもありがたいです。では、修羅様を探しましょう・・・・」

その時、後ろから、突然声が聞こえた。

「いたぞーーっ！捕まえろ！」

「！？」

「えっ？？」

俺達は驚いて後ろを向くと、なぜか、警備員が追いかけて来た。

「なっ、なんだってんだ！？」

「俺に聞かれてもわかりませんが・・・・とりあえず、やるしかないようですね」

そう言うと、俺よりも早く振り返ると、警備員の方に突進して行き、動きずらいであろうフードつきマントを着たまま戦い始めた。

その機転の切り替えの早さに俺は唖然としていたが、それよりも、動きのよさに驚いた。今まで見て来た神の動きなんかより、ダントツで動きがいい。まるで、妖怪のトップクラス並の強さだ。

「優羅は強いぞ」
「!?」

俺は、いつの間にか隣に立っていた修羅に驚いて、二、三歩飛び退いたが、直ぐに聞き返した。

「なんで奴は強いんだ?まるで、妖怪のトップクラス並だぞ?」
「だが、あれ以上強くなる。この刀を使えばな」

そう言って渡された刀を抜いた時、俺は目を見開いた。

「これって・・・・」

「何を考えているのかはわからないが、とりあえず、加勢をした方がいい。いくら優羅が強いと言ってもな一人で戦わせるのはまずいだろう」

「・・・・そうなのか?」
「ああ・・・・まぁ、訳は言えんがな・・・・」

そう修羅が言った時、優羅の方から声が聞こえて来た。

「修羅様、刀を下さい！」

そう言われた途端、修羅は慌てて俺から刀を奪うと、優羅に向かって投げた。そして、そのまま自分も走り出す。

「おっ、おい！俺、どうすりゃいいんだよ！」
「お前も加勢しろ！でないと、色々とまずい状況だ」
「わっ、わかった！」

俺はよくわからないまま、とりあえず走って加勢に行く。

しかし、修羅がどうして危ないと言ったのかがわからない。状況的にはこっちの方が圧倒的に有利なはずなのに、どうして・・・？

そう言えば、刀を渡す時の修羅の顔がかなり焦っているように見えて、加勢に行く途中で考え込んでしまう。

今戦いに向かっても返り討ちにされそうだ。

いや、そんなことはどうだっていい。しかし、どうして・・・何が危ないんだ？

何かが引っかかって、なんだか変な気分だ。何か思いついた気がするけれど、違うような気がする。

「避けろ！」

そう声をかけられているのが俺だと気づいたのはそれから数十秒後

で、俺は、反応が間に合わなかった。しかし、目の前に黒い何かが出て来て、警備員からの攻撃を変わりに受けてくれた。

「おいっ！大丈夫か??」

俺は、慌てて走り出すけれど、それよりも早く修羅が走って行き、優羅の顔を隠すようにフードを急いで被せると、飛ばされる時に吹っ飛んだ刀を取りに行った。

優羅はと言うと、ゆっくりと立ち上がると、うつむいたまま、しっかりとした足取りで歩き出している。

修羅は急いで刀を拾うと、優羅に向かって投げた。優羅はそれを上手くキャッチすると、身をかがめて攻撃の構えをしたかと思うと、突っ込んで来た警備員を一斉に吹っ飛ばした。

「なっ、なんだよ・・・・あれ、今までの力と全然違うじゃねぇか。ありゃ、まるで妖怪だぞ?」

「・・・・ここまでみたいだな。必死に隠して来たが、私の限界が来たようだ。すまないな、修羅さん」

修羅はそう言うと、優羅の方を見た。

信頼の証

「・・・ここまでみたいだな。必死に隠して来たが、私の限界が来たようだ。すまないな、修羅さん」

俺は、修羅の口から出た言葉が信じられなかった。修羅って言ったぞ。俺は訳がわからなくなって、修羅の方を向くと、修羅はマントのフードを取り、俺の方を向いた。

「なっ、お前・・・誰だ??」

俺は、修羅の顔を見て驚いた。なぜなら、最初に見た時の姿は、少し長めな黒髪に、何となく幼さの残った顔立ちだったのだが、今俺が見ている修羅の顔は、短い金髪で、俺なんかより大人びた表情をしている顔立ちだった。

「私は、優羅と申します。今まで騙していてすみませんでした」

そう言って、優雅にお辞儀をする修羅に、俺は戸惑いを隠せなかった。しかも、口調と声も変わってる。今までのは演技だったらしい。

「はぁ?何が起こったんだ?よくわからないが・・・」

「相変わらず鈍感な奴だな。前にも言ったろ?周りをよく確認して、相手をよく見極めろってな」

「!?」

俺は、その声を聞いた途端、電撃が走った。そして、自然と答えが

わかった。

それの答えあわせをするように、優羅が黒いフードつきマントを脱いだ。その時、突然スローモーションになったような気がした。風が吹いて、自分の髪が視界に入って目の前を遮った。しかし、はっきりと見えた。風になびく長い金髪を。

俺は、目の前の光景が信じられなくて、思わず目を擦るけれど、ちゃんとぼやけて長い金髪が見えた。

俺は、とっさに修羅の方を向くけれど、修羅は相変わらず無表情のままだ。

「俺が勘違いしてたのはバレてたんだな・・・・。さすが族長だぜ」

俺がそうボソッとつぶやくと、族長は振り向いて、微笑をした。

「当たり前だろ?俺は、護衛のお前なんかよりもよっぽどお前を観察している」

「ああ、そうだな・・・・。でも、まさか、優羅の方が族長だったとはな。てっきり、修羅の方が族長だと思ってたぜ」

「話は後にしろよ、こいつらを先にやる」

そう言う族長の顔を見て、俺は、自然と微笑みが浮かんだ。まさに、勇気百倍っ!って感じだ。

「おっしゃ、行くぜ!」

俺は、そう声を上げると、刀を鞘から抜いて警備員に突進して行った。

一分後、周りにいた警備員はみんな動かなくなり、俺達は大きく息を吐いた。

「さて、族長、ちゃんと説明してくれよ?俺、意味わからなくて頭が死にそうだ」

「死ぬなんて言うなよ、こっちは死にそうなところを脱して来たんだ」

「貴方たち、本当に仲がいいんですね」

俺達の表情を見て、優羅はしみじみと言った。

「まぁ、当たり前・・・・」

「そんなことはない。俺は、まだお前を認めてないからな」

俺が胸を張って言おうとするけれど、冷静に族長に遮られた為、俺の体温が一気に下がった。

今まで興奮していた為か、一気に体が熱くなったのだが、さっきの言葉が冷水のようで、一気に熱が下がったのだ。

「・・・・」

俺が無言で族長の方を見ていると、その視線を感じてか、族長は慌ててそっぽを向くと、一言言った。

「まぁ、今だけは認めてやる」

「・・・・だけは??」

俺はそう聞くけれど、それ以外は全く教えてくれなかった。全く、素直にもっとなれよなって思うぜ。

「で、どう言うことか説明してくれないか??」

「俺は説明したくないっ！」

「族長、何怒ってんだよ?優羅の時と、声もしゃべり方も全然違うじゃんか！」

「・・・・とりあえず、優羅、お前が説明しろ。俺は寝る！」

なぜか、族長はいじけた子供のようにそれだけ言い張ると、その場に寝転がって目を瞑った。俺は、ほっとして肩を下ろした。その途端、族長の口が動いた。

「護衛なんだから、ちゃんと護れよ、俺のこと」

「あっ、ああ！」

族長はそれだけ言うと、再び目を瞑った。俺は数十秒間固まっていたが、ゆっくりと族長に近付いていき、顔を近づける。寝息を確認すると、そのまま後ろに倒れ込んで、大きくため息をついた。

この人は油断も隙もない。ホッと気を抜いた瞬間に話しかけて来たりするから、物凄く驚くのだ。

「・・・・貴方のことをよほど信頼しているようですね」

「・・・・なぁ、その、『貴方』って言い方やめないか?どうも女のような口調で、変だ」

「悪いね、これは私の昔からの癖なんだ」

そう言って苦笑する優羅の表情は、なんと言うか・・・・大人の余

裕と言うような、そんな表情が浮かんでいた。

「で、なんで、族長が俺を信頼してるって思うんだよ、理由があるんだろ？」

「修羅さん・・・・私の前だったら一睡もしなかった。二週間近く、一睡もしなかったんだ。だから、相当眠かっただろうに、私の前では一睡もしなかったんだ。それなのに、貴方に会った途端、眠気に耐えかねなくなったのか、眠った。それは、貴方のことを修羅さんは信頼してると言うことにつながるんじゃないですか？」

「・・・・・」

そう言われて、俺は、深く息を吐いた。なんとも言えない嬉しさがあった。言葉ではああ言っているものの、本当は俺のことを信頼してくれたのかと思うと、嬉しくなった。

一段落つきました。

「で、今までのことを説明してくれないか？」

「修羅さんの口から聞いた方がいいと思うのですが・・・とりあえず、話しましょうか」

「ちょい待った。それより、どうして修羅って族長のことを呼ぶんだ？族長の名前は亜修羅だろ？」

「亜修羅だと、色々面倒なんで、修羅さんと呼んでいるんです」

「面倒か？？」

「私達神は、主に名前が二文字なんだ。しかし、修羅さん・・・・いや、亜修羅さんは、三文字ですよね？だから、修羅さんと短く切っているんです。亜修《あしゅう》さんとかよりはいいでしょう？」

そう言われると、確かにそうだ。修羅さんの方がしっくり来る。しかし、亜修と言う名前もいいかも知れないともちょっとだけ思った。

「じゃなくてっ！」

「・・・・？」

「あっ、いや、気にしないでくれ。で、じゃあ、なんで、性格を転換させてたんだ？」

「性格を転換・・・・？」

「それに、見た目だって、どうやって変えてたんだよ？」

「・・・見た目を変えていたのは、私の薬です。姿を変えないと、

貴方の前に現れることが出来ないでしょう？だから、姿を変えさせてくれって修羅さんに頼まれたんです。姿を変えれば、自分だって気づかれずに、貴方を助けることが出来るから。

そして、性格を変えたって言うのは、私の方に注意を向ける為です。修羅さんの性格を私がやって、私の性格を修羅さんがやることで、怪しいと思う方を私の方に仕向けた。おかげで、少しおかしい部分も気づかれずに気づきますから」

俺は、まんまと優羅の策にかかっていたようだ。優羅の上手い演技のおかげで、俺は優羅を族長だと思い込み、本当の族長を全く別の関係ない奴だと思っていたのだ。

そう聞かされると、自分の馬鹿さ加減にため息が出て来る。しかし、それと同時に、心が温かくなるような気もした。

まさか、自分の姿を変えてまで、俺を助けようとしてくれていたのかと思うと、不思議な気持ちになる。

あんなニコニコ笑うようなキャラじゃない族長が、バレないようにニコニコ笑ってボケをかまして、俺が殴ってやりたいと思うほどに馬鹿な振りをしたのだ。

俺はあの時、優羅を殴らなくてよかったと心の底から思った。もし、あの時俺が優羅を殴っていたら、族長を殴ってしまったことになる。

「そうか・・・なるほど、では、重要な経緯を話してもらおうか？どうしてお前らは会うことが出来たのか。そして、なぜ、族長は生きてあの場から出られたのか・・・」

「・・・修羅さん、続きは貴方が話して下さいよ、起きてるんでしょう?」

そう言って、優羅は眠っているはずの族長の方に話しを振る。俺は、族長は眠っているものだと思っていたが、急にむっくり起き上がった為、かなり驚いた。

「族長、起きてたのか?」
「いや、話を振られたんで起きたんだ。で、なんなんだ?」
「俺に、今までの経緯を教えてくれってことだ。教えてくれないか?」
「・・・・・」

族長は大きくため息をつくと、話し出した。

俺は、内心ほっとしていた。優羅が実は俺だったと知った時、神羅は怒らなかった。それが物凄く助かった。

しかし、どうも、神羅の目の前にいるのは落ち着かない。今まで姿を隠した形で目の前にいた為、素の姿で目の前にいるのがなんとも恥ずかしい。

しかも、この、プライバシーのかけらもない優羅が、俺の心理を勝手に言っ・・・いや、勝手に解釈をして話すから、神羅が変な勘

違いをしている。それが無償に困った。

〔族長！〕

〔なっ、なんだよ・・・・〕

〔俺のこと、信頼しててくれたんだなっ！話は優羅から聞いたぜっ！〕

〔はぁ？何を言ってんだ・・・・〕

〔まさか、族長がそんな風に思ってくれてたとはな、嬉しい限りだぜ〕

そう嬉しそうに言う神羅の顔を見ていると、違うとは言えなくなってしまう。それにまぁ、優羅の妄想とは言え、思っていることは、違う訳でもなく、そこまで合っている訳でもない。だから、強く違うとも言えず、なんとも言えない苦しい状況であった。

「俺達、どこまで一緒にいたんだ？それがわからないと思い出せない」

「・・・確か俺は、族長が城に入ったところから、族長がどうなったのか知らない」

「マジかよ・・・そんな前から話すのか？」

「そりゃな、俺は、族長の護衛につき、族長の周辺で起こったことを全て理解しておかねばならないのでな！」

そう言う神羅は、半ばニヤニヤした様子だった為、俺はため息をついた。あの過程を全て話すのかと思うと、とても面倒になって来る。

とりあえず俺は、地獄監獄に閉じ込められるまでの過程を神羅に説明した。

神羅は興味ぶかそうに聞いていたが、凛に襲われたと言うと、目を丸くして、ブツブツ何かを言っていた。が、自分達が話しかけた時には平気だったと言われて、俺はとても驚いた。

「あの時の凛はおかしかったからな」

「いや、あれは幻だろ?悪夢を見せる幻。だから、襲われたのは、自分で見ていた幻だ」

「じゃあ、なんで族長は、冥道みたいな場所に飛ばされたんだ?冥道を開けるのは凛だけだろ?俺達が知っている中では」

「・・・多分、あれは、冥道なんかじゃなかったんだ。俺は、あの暗闇に放り込まれた後、冥界にいたんじゃなく、どこかしらない原っぱだった。だからきっと、あの変な空間は、魔光霊命が作り出した空間だったんだろうな。そしてそのまま、俺はどこか意味のわからない場所に吹っ飛ばされた」

「なるほどなぁ・・・、ほうほう」

神羅は、俺が言うと、そう相槌を打ち、大きな伸びをした。

「俺、長い話を聞くのは苦手なんだ。眠いから寝るぜ」

「おいっ、それって、俺の話が面白くなかったとか言うのか!?お前が話せっつったんだろ?」

「ああ、悪いな族長、俺も眠いんだ。もう寝るぜ」

そう言うと、神羅はその場で寝転がると、早々に目を瞑って眠って

しまった。

俺は仕方なくため息をつくと、再びその場に寝転がると、目を瞑った。

「修羅さん、こんなところで本当に寝るつもりですか?草原のど真ん中ですよ?」

優羅に言われ、思わず片目を開けるけれど、再び閉じた。

眠い。話している最中も、ただ只管眠かった。

自分で話しているのに、自分の声が子守唄・・・・いや、何かの呪文のように聞こえて来て、自己暗示をしているようだった。

「それなら、私も寝ることにしましょう。修羅さんに比べれば大したこともありませんが、眠いので」

優羅は独り言のようにつぶやくと、その場に寝転がった。

話をしている間に夜になり、焚き火をしていたのだが、既に、火は始末済みだ。だから、寝てはいけないことはない。

俺は大きく息を吐くと、気を抜いた。その途端、眠りの渦に引き込まれるようにして、俺は眠った。

あの時は・・・・。

目が覚めると空は白んで来ていた。けれど、まだ薄暗い状態だった。多分、四時くらいだろう。早く寝たから、早く起きてしまったようだ。

起き上がって大きく伸びをすると、近くで熟睡している二人を見下ろした。俺よりも早く寝た神羅は、まだ熟睡している。熟睡をし過ぎて、死んだように動かない。

一瞬動いていないように見えて、近寄ってみると、体が上下に動いている為、ちゃんと生きているとわかる。しかし、それ以外は、全く動いていないのだ。寝返りすら打たず、寝た時の格好のまま眠っている。

優羅はと言うと、こちらは眠りが浅いようで、何回も寝返りを打っているが、ちゃんと眠っているようだ。

俺は、それを見て大きく息を吐くと、その場に座り、辺りを見渡した。

あの時は眠かったから、場所なんて気にせずに眠ってしまったが、今起きて、冷静になって考えてみると、俺達は物凄く危険なことをしてたんだなと思う。

普通なら、テントとかに入って寝るものだが、俺達は、テントなんかにも入らず、その辺の草むらで寝袋にすら包まず、そのまま雑魚寝をしていたんだ。しかも、物凄い熟睡をしていたから、敵が襲って来たら、イチコロだろう。よく、そんな状態で襲われなかったも

のだ。我ながら、眠ったことを悔い、ミラクルに感謝をしたいと思う。

よほど眠かったのだろうと思う。眠くて思考が止まっていたとしか考えられない。でなきゃ、俺は、こんなところで眠れるはずがない。

空を見上げると、まだ暗い部分と明るい部分があり、こんな時間に起きているのは、なんでも屋をやっていた時以来だなと思う。

いつもは、人間界で暮らしていた為、人間は夜は寝る暮らしをしているから、それに合わせて、自分も自然と夜行性じゃなくなって来た為、懐かしい気持ちがした。

それに、人間界にいると、どんな真夜中でも明るいし、うるさい。それに、空気がまずい。しかし、今いるここは、どこなのかわからないけれど、物凄く静まり返っていて、人口の光りがなく、空気が綺麗だった。それに、そよそよと気持ちいいくらいに風が吹いていて、とても快い気持ちになる。何もかも忘れて、心が洗われるようだ。

立ち上がって何回か深呼吸をした後、目を瞑った。今は平和だが、地獄監獄にいる時は、もう、こんな快い気持ちになることは二度とないだろうと思っていた。

まさか、再び、こうやって快い風に当たって、自由に動くことが出来るなんて思ってもいなかったのだ。

「ここはどこだ？」

意識を取り戻し、立ち上がろうとするが、体に激痛が走って、思わずうめき声を漏らす。

何とか首を下に向けて、自分の体を見ると、服が血だらけで、髪や肌にも血がこびりついていた。それを見て、何とか今までのことを思い出し、俺は、瑛雅を助けて、体調が悪いにもかかわらずに戦い、そのまま力尽きたのだと思い出した。

息をするだけでも体が痛くて一苦労だ。きっと、応急処置もしないで放っておいたので、血が流れ出て、貧血気味になっていると思う。ここまで血が出てるのは、返り血よりも、自分の出血の方が多いと思ったのだ。

薄暗い部屋で目を開いてても、目の前がぼやけていて、よく見えない。入り口の扉が三重にみえるから、かなりの重傷なんだろう。

意識がぼんやりした中で考えるのは、瑛雅は無事にここから逃げられたのかと言うことだ。ここまで体を張ったのに、逃げ切れなかったと言われたら、俺は悲しくなる。何の為にここまでやったのかわからなくなる。それが嫌だから、俺は瑛雅のことを思ってるだけだ。それ意外に何もない。心配とかなんて、もってのほかだ。あくまでも俺だ。

自分に暗示のようにそう言い聞かせていたその時、突然扉が開き、

警備員が懐中電灯を持ってやって来た。そして、その光りを俺の顔に向ける為、そのまぶしさに、思わず片目をつぶった。

「なんだ、生きていたのか。さすが妖怪だな、もう死んだかと思っていたが・・・・仕方ない、地獄を見ることになるな」

俺は、そいつを睨みつけて、文句を言ってやろうと思っていたが、声が出ない。視線をそいつに向けるだけで精一杯だったのだ。

そいつは俺が動けないことをいいことに近づいて来て、俺と同じ視線になるようにしゃがむと、ニヤリと笑った。

「ちなみに言うとな、お前が命をかけて救おうとした奴、あいつ、捕まったぜ。今頃死刑にでもなっているんじゃないのか?」

その言葉に、自然と力が入り、何とか足だけを動かして、警備員の足を引っ掛けて転ばせると、思い切り蹴り飛ばし、壁を使って立ち上がると、そいつに向かって歩いて行く。しかし、途中で足がもつれて転んだ。

俺が起き上がるのとそいつが立ち上がるのとでは、当然奴の方が早く、素早く立ち上がると、俺のことを蹴り、悪態をついた後、何もすることなく出て行った。

俺は情けなくて、自分が心底嫌いになった。あんな奴にやられっぱなしだなんて、認めたくないことだが、仕方が無い。普段なら、あいつの方が弱いのに、今の俺が弱ってるからと言うのを逆手に取って、襲って来る奴に負けると言うことが屈辱だった。

なんとか体を引きずって部屋の奥に行くと、壁によりかかった。

今頃、魔界がどうなっているのかと言うことが気になる。きっと、種族争いで大変なことになっているんだろう。

魔界の様子を知っていながら、俺は、何も出来ない自分が憎かった。せめて、魔界がどんな風になっているのか知りたいと思ったが、よく考えてみると、それはただ自分にストレスを与えるだけだと気づいて、考えるのをやめた。

「遂にお前の処刑日が決まったぞ。来週の日曜日だ」

「ふんっ、処刑でもなんでもすればいい。俺は、お前らみたいな軟な体じゃないことを覚えとけ」

「確かにな、一週間にしてあの傷をほぼ回復させているその生命力。研究に使わせてもらいたいところだ」

「生憎だな。俺は、回復は早いほうじゃない。むしろ、遅い方だ。早い奴は、お前等が殺してしまったんだろ?そいつを研究すればよかったのにな」

「フンッ、今のうちに粋がっていろ。どうせ死ぬ時になったら、お前は何も出来ない自分の無力さを思い知ることになるからな」

「・・・・どんな方法で殺そうって言うんだ?」

「・・・・まぁ、どっちみち、ここから出ることは出来ない。なら、教えてやってもいいだろう。来い」

そいつは、俺に背中を向けてドアから出る。

こいつはきっと、素人なのだろう。普通、敵に背中を向ける馬鹿はいない。まぁ、俺は、襲うつもりもないけどな。背後から襲うなんて、一番醜いやり方だ。そう言うやり方はしたくなかったのだ。

それに、一週間前は無理だったが、今なら両腕を使わなくたって、

こいつぐらいの奴三十人は相手にすることが出来る。

警備員に連れられて歩いて行くと、この建物内の様子がわかった。

まるで、地獄の刑務所のようなイメージがあった。

そんな俺の心理を見抜いてか、聞いてもいないのに、警備員が口を開いた。

「ここの建物の名前は、『地獄監獄』と言う。その名のとおり、ここは地獄だ。覚悟しておくといい。ここの死刑は、普通の死刑とは全く違う。ここで死んだ者は、絶対に天国にはいけないんだ。直通で地獄へと飛ばされる。だから、死んでからも尚、苦しむことになる。可哀相な奴だな、お前も。まぁ、そこまで悪いことをしたと言う訳だ。せいぜい大人しく死刑が実行される時を待つだけだな。ここから脱出することは不可能だ」

「・・・余計な説明と補足をありがとうな。残念だが、俺は、こんなところでくたばっている暇はないんだ。絶対に脱出させてもらう。魔界が大変なことになっているんだ。ここでこうやってのんびりと過ごしている時間ほど無駄なものはない」

「フンッ相変わらず威勢だけはいいみたいだけどな、死刑執行場所を見たら、お前のその勢いも消えるかもな。ほら、ここだ」

そう言って開けられた扉の先にあったのは、なんと言うか・・・大きな壁だった。そこの高い部分に二つ、低い部分にも二つ鉄のようなものがあったので、きっと、あれで手足を固定するのはわかった。と言うことは、あそこに貼り付けにされると言う訳だな。なんとなくそんな推理がついた。

俺は、そのまま歩いて行くけれど、物凄い熱さに、思わず足が止まった。何がここまで、この辺り一体の気温を上げているのかわからなかったが、下を見下ろすと、その理由がわかった。

「あれは・・・・マグマか?」

「よくわかったな、そうだ。この下にある赤い液体は、まさにマグマだ。ここに落とされたら、いくら炎に強いお前でも、一溜まりもないだろう」

「・・・・」

確かに、これは脅しじゃないようだ。自然と冷や汗が流れる。いや、もしかしたら、暑いから汗が出ているのかも知れない。

・・・いや、この際、こんなことは限りなくどうだっていい。

「お前の死刑実行は、このマグマに落とされることだ。骨さえも残らない。そして、そのまま地獄まで沈んで行くんだ。・・・・どうだ?これで死が怖くなっただろう?」

そいつは、俺の顔を覗きこんで来る。こいつは、あくまで俺をビビらせたいらしい。どうしてそこまでビビらせようとするのか。

「悪いが・・・・俺は、地獄に落ちることも、命を失うことも怖くはない。恐怖すら感じない。なぜなら、俺は今まで沢山の者を殺して来た。その時点で地獄に行くことは確定しているだろうし、それに、相手を殺すと言うことは、自分も危ない目に合うと言うことだ。つまり、今まで死と紙一重で生きて来た。今更死ぬのが怖いとかなんて、言える訳ないだろ?」

俺がそう言って、警備員を見返してやると、警備員は表情を歪めて、俺のことを突き落とそうとした。しかし、そのギリギリ手前で、突然耳をつんざく様な大音量のサイレンが鳴り響き、俺は一瞬意識が遠のきかけたが、何とか意識を繋ぎとめて、まだうるさく鳴っているサイレンから耳を守る為に耳を塞ぐ。

「くそっ、侵入者か・・・・」

警備員がそう呟いた時、通信が入って来た。

〔こちら、地獄監獄フロア四にいる者だが、侵入者を感知した。ただちに上層部に戻り、援護をしてくれ〕

「了解」

警備員はそれだけ言うと、俺に何も言わずに歩き出す。俺は、自然と胸騒ぎを覚えた。何がそうさせているのかはわからないが、胸騒ぎがする。

しかし、それと同時に、なんとも言えないワクワクとしたような感覚がした。こんな監獄に侵入するような馬鹿だ。何かをやらかしてくれるんじゃないかと言う気がした。

俺は、早足で歩き出す警備員の後をついて牢屋に戻ると、大きく息を吐いた。

なんだか、今までの最悪の毎日を覆すぐらいワクワクした気分になった。こんな気分になったのは、いつ以来だろうか。

ストーカー？それとも、仲間？

「起きて下さい！」

そう聞こえたかと思ったら、何回か体を揺すられて、やっと目が覚めた。ゆっくりと目を明けて見えたのは、俺の顔を覗きこんでいる男の顔だった。それを見て、とっさに跳ね起き、二、三回後ろに飛ぶと、相手の様子を伺う。

この部屋に閉じ込められているのは俺一人のはずだから、もう一人の人間がいるはずがない。だから、気を張らずに眠っていたのがいけなかったようだ。

「お前・・・何者だ？警備員じゃないようだな。かと言って、俺の味方でもなさそうだ」

「・・・まぁ、仲間・・・ではないですね。しかし、敵ではありません。私は、あなたの力を借りる為にこの部屋であなたが起きるのを待っていました」

そう言われて、自然と顔から血の気が引いたのがわかった。

俺は、こいつがいたにも関わらず、それに気づかないで熟睡をしていたらしい。それは、こいつが気配を殺すのがよほど上手かったのか、それとも、俺が気を抜き過ぎていたのか。そのどちらも重なったことだろう。

俺は、結構気配には敏感な方だ。一応頭脳種族だし、その中でも気配などには過敏に反応するのだ。だから、長時間、他人に見られて

いると言うのに気づいていないと言うことを知って、自然と血の気が引いたのだ。

なぜなら、強い者ほど気配を殺すのが上手い。そして、こいつの気配は、ほぼ無いに等しい。こいつは只者ではない気がした。

ここは下手に挑発などをしない方が得策だろうと思い、戦闘の構えをやめ、そいつに視線を向ける。

歳のころは、俺よりも五、六歳ぐらい上だな。短い金髪に青い瞳で、肌の色も白い。まるで、異国の者みたいだ。これだけじゃ、あまりわかることは少ないが、一つだけわかることがある。

それは、こいつは囚人ではないと言う訳だ。身なりが整っている。と言うことは、こいつが侵入者か?

「・・・お前が、昨日ここに侵入した者か?」

「ええ、そうですよ」

「・・・なぜ、侵入を試みたんだ?こんな地獄みたいな場所に侵入するなんて、よっぽどの馬鹿か、物好きくらいだと思うが・・・」

「・・・まぁ、それは、後で話すことにします。私に協力してくださいますか?それとも、侵入者である私を警備員に報告しますか?・・・まぁ、後者を取ると、あなたの命は今日で終わりますが」

そう言って微笑んでいる奴を、俺はにらみつけた。物腰は柔らかいものの、言っていることはとんでもない。こいつが言っていることは本当みたいだ。

「・・・俺は、お前の力量や信憑性がわからない以上、信用することが出来ない」

俺はそう言うと、近くにあった鉄の棒みたいなものをそいつに向かって投げてみた。結構スピードを出したから、普通の奴だったら当たるところだろうが、鉄の棒は、そいつに当たる前に溶けて消えた。

「・・・お前、何をやった？」

「ああ、一つ言って置きますが、私は妖怪ではありませんよ。神です」

「なら、どうして、鉄の棒が解けたりしたんだ？火を飛ばした訳でもないようだが」

「まぁ、それは・・・貴方次第です。私の攻撃は、一瞬で貴方をさっきの鉄の棒のように破壊することが可能です。だから、やるなら一瞬ですよ？」

相手の行動が見えないのが悔やまれる。薄暗いと言うのもあるし、妖怪でもない奴が鉄の棒を溶かしたと言うのに驚いて、動揺したのもあるだろう。とにかく、相手の姿が見えにくいのだ。

「・・・わかった。お前に力を貸してみようと思う。しかし、お前のことを信じた訳じゃないからな。覚悟しておけ」

「そう言うと思ってましたよ。では、早速お願い事を言ってもいいですかね？」

「図々しい奴だな。人が寝てるのを観察する、悪質なストーカーめ」

「・・・とても不快な言葉を浴びせられましたが、一応流します。

待機場所をここにさせて欲しいのです」

「勝手にしろ。で、お前は何を目的でここに侵入したんだ？」

「・・・・とりあえず、ここから出ましょうか？」

「なぜ？」

「過程よりも何よりも、結果が全てです。行きましょう！」

そいつはそう言ったかと思うと、普通に扉の前に行くと、鍵を開けて、外に出た。

俺は、開いた口が塞がらなかった。ここのドアは、内側から鍵を開けるのが不可能なはずなのに、どうしてこいつは内側から普通に開けたのだろうか・・・・。

「お前、どうやってここの鍵を開けたんだよ？」

「・・・・それは、企業秘密です」

そう言ってニコニコ笑う奴を見て、俺は、こいつを本気で怒らせなくてよかったなと思った。

研究員に、白衣と実験薬はつき物で・・・・・

「さて・・・・では、どこに行きましょうか」

「・・・・それは、お前が決めることだろ?俺はあくまで協力者であって、お前の仲間じゃない。よって、お前が決めるんだ」

「それは酷いですね・・・・。でもまぁ、仕方ないですね、貴方の言い分も一理ありますから。では、出発しましょうか?」

そう言って、奴は白くて長い着物を翻して歩き出す。そう言えば、この着物、人間界で見たことがあるような気がする・・・・。

「おい、お前の着ているその白い服の名前はなんて言うんだ・・・・?」

「これは、人間界で言う『白衣』と言うものです。白い衣と書いて、『はくい』と読みます」

「ああ・・・・・」

そいつは丁寧に教えてくれた。なるほど、そう言えば、この白衣と言うのを着ている教師を見かけたことがある。

確か、それは理科の教師で・・・・まぁ、細かい部類はいいとして、理科の教師が着ていたのだ。

その時、自然とわかった。なぜ、奴が鉄の棒を一瞬で溶かしたのか。どうして内側から開けられない鍵を開けたのか。

「お前・・・もしかして、何かの研究員とかか?そして、さっき鉄の棒を溶かしたのは、実験薬だったりするのか?」

「・・・まぁ、白衣を見たら、大体健闘がつくでしょうね。そうです。私は、超科学研究科特別支援員です」

「・・・・は?」

俺は、奴のセリフをちゃんと聞き取る事が出来なかった。ちょうかがく・・・・なんだ?それ以降の言葉が思い出せない。まるで呪文のようだった。

「私は、『超科学研究科特別支援員』なのです」

「それはわかった。で、それはどんな奴のことを言うんだ?」

「『超科学研究科特別支援員』とは、まぁ、その名のとおり、『超科学研究科』と言う科がありまして、そこから、特別に、他の科に支援に行く者のことを指します」

「でも、それならただの研究員だろ?だけど、お前は、ただの研究員と言うには強過ぎる。ただの研究員とは思えないな」

俺がそう言うと、奴はため息をつきながら口を開いた。

「『特別』と言う言葉がついているでしょう?だから、特別なんです。我々は、普通の研究はしない。ものを破壊する薬を作り出す部署に所属していますから。だから、よく、戦闘に繰り出されることも多く、戦闘能力も高いと言う訳です。なんとなくわかりましたか?」

「・・・曖昧だが、何となくわかったのは、お前らは、戦闘に特化した研究員で、お前はこれから何かを破壊しに向かっていたのだな？きっと、支援に行く場所も、他の研究所じゃなくて、軍隊施設辺りと言うことか・・・・」

「まぁ・・・・そう言うことです。しかし、あくまで研究員です。本当の戦いに出ることはしません。薬を売るぐらいのことしかしませんよ。しかし、戦うことは出来る。それはあなたも見ていましたよね？なので、襲おうとは思わないことです」

「・・・・チッ」

俺は舌打ちをすると、余裕な表情をしている奴をにらみつけた。

「そう言えば、まだ、お前の名前を聞いてなかったな。なんて言う名前なんだよ？」

「私の名前は、優羅と言います」

俺は、素直に名前を教えた奴に、少し違和感を感じたが、その名前が正しい名前とは限らない。だから、とりあえず、うなずいた。いつまでも奴と呼ぶのは面倒だ。

「族長、起きてたんですか？」

不意に後ろから話しかけられて、一気に現実の世界に引き戻される。
そうだ。今は、地獄監獄にいたあの頃とは違う。今は、地獄監獄から脱出して、神羅と合流した後なのだ。

「ああ、まあな。昔のことを思い出していた」

「・・・なるほどねぇ・・・じゃ、聞かせて下さいよ、思い返してたんでしょ？なら、もう一度説明するのは簡単なはずだぜ？」

そう言って隣に座る神羅を見て、大きく息を吐くと、さっき思い出した部分までを話した。

「なるほどな・・・で、それからは？」
「まぁ・・・また思い出しながらしゃべるから、お前はもう、口出しをするなよ」

俺はそれだけ言うと、再びあの時の状態を思い出すように、目を瞑った。

実験台か、薄情者か

「ところで、お前と侵入者はグルなのか？」

「いえ、グルではないですが、その者の顔は見たことがあります。なんと言うか・・・・子供らしい大人のような感じの者で、赤い髪をしてましたね。仲間と一緒にここに侵入したみたいで、数人の者と行動を共にしていましたよ」

俺はそう言われて、体が自然と反応するのがわかった。あいつだ・・・・。

「そいつ、族長がどうこうとか言ってなかったか？」

「そこまではわからないのですが、かなり荒っぽい方法だったので、性格の荒い方だとは思いますよ」

「あいつ・・・・」

俺の呟きが聞こえたのか、優羅がこちらを振り返る。

「もしかして、お知り合いですか？」

「そうかはわからないが、きっとそうだろうな。そいつな、俺の護衛で、怪我してたはずなんだが・・・・」

「そうなのか。しかし、怪我をしている素振りは全く見せていなかったですよ？既に治った後だったのではないですか？」

「・・・・かもな」
「なるほど・・・・では、少し、偵察に行ってみましょうか」

そう言って、優羅は立ち上がると、ポケットから何かを取り出して電源をつけ、しばらく何かをした後、それをしまい、立ち上がる。

まだ説明していなかったが、俺達は今、牢屋の中に閉じ込められている。いや、表現がおかしいな。閉じ込められているふりをしている。

本当は、外に出て色々したいところだが、優羅が俺の牢屋を待機場所使わせてくれと言って来た為、外に出ない時は、二人で牢屋にいる訳だ。まぁ、定期的に来る警備員をかわすのは簡単なので、そこまで苦なくやって来たのだ。

俺達が脱獄を計画していることを相手に悟られてはいけない。だから、警備員が見回りに来る時間帯には、必ず、自ら牢屋に戻って、鍵を閉める。そうすれば、相手はずっと俺がここにいると思うから、バレない。それが優羅の作戦らしい。

「では、警備員もまだ来ないようですし、その、護衛の方の様子を見に行きましょう?」
「そんなこと言ったって、今、あいつがどこにいるかなんてわからないだろ?」

「いえ、大丈夫ですよ。彼の居場所は把握しています。発信機をつけておいたので、位置確認は大丈夫です」

「・・・・しかし、最新の注意を払って様子を見に行っても、もしも、何かがあって、俺の姿が見えるようなことがあったらどうする

んだ?あいつ、これでもかなり無茶なことをして来たのに、もっと無茶なことはやりかねない」

俺がそう言うと、優羅はしばらく考え込んだ後、懐から、一本の薬品入り試験管を取り出した。そして、俺にそれを渡すと、じっと見て来る。

俺は、何をしていいのかわからず、その、澄んだピンク色の薬品と、優羅の顔を交互に眺めていたが、やがて、しびれを切らしたのか、優羅が一言言った。

「それを飲んで下さい」

「断る」

飲めと言われた瞬間、俺は、とっさに断っていた。こんな訳のわからない薬品を飲むような馬鹿はいない。しかも、この薬を飲んだ後の効果すらも教えられていないのに、この薬を飲むような奴は、勇者と言うに等しいだろう。

「なぜですか?貴方が不安だと言うので姿を変えさせてあげようと思っただけなのですが・・・・」

「それって、どう言う意味だよ?変な姿に変えるんじゃないだろうな?」

「それはわかりません。その薬は実験途中の薬なので、これを期に試していただこうかと」

そう言って、二コリと微笑む優羅の顔が心底怖いと思ったのは、今が初めてじゃない。が、今が一番嫌な気分だった。

「ふざけるなよ?俺が実験台になれと?そんなのやってられるかよ」

そう言って、俺が試験管を床に投げつけようとした途端、さっと試験管を奪い取られて、優羅を睨みつける。

「あのままでは危険ですねぇ、捕まってしまいます」

「・・・・は?」

「貴方の護衛の方たちの行動です。荒々し過ぎて危険なんですよ。だから、警備員に捕まるのも時間の問題かと・・・・」

「・・・・何が言いたい?」

「言葉では言っていないものの、貴方、実は、その護衛の方のことをとても心配してらっしゃるのでしょう?本当は助けたいと思ってる。でも、私が納得するはずも無い。だから言い出さなかった。しかし、この薬の実験台になってくれれば、あの方の補助をすることを認めてもいいですよ。これならどうですか?」

「・・・・交換条件か」

「悪くないでしょう?」

俺は、大きくため息をついた。悪くないも何も、まさか、心を完全に読まれているとは。こいつ、心理を読み取ると言うのにも特化しているらしい。こいつは恐ろしいぞ。

変身・・・・と言うか、若返り？

俺は、無言で優羅のことを睨みつけたが、優羅も微笑みを浮かべたまま、俺のことをじっと見て来る。

しばらくの間にらみ合いが続いたが、ついに俺が折れた。こいつが言っていることが本当か嘘かわからないが、確かに、あいつはあまり冷静に考えて行動もしないから、捕まるのは時間の問題かもしれない。

「・・・わかった。これを飲めば、あいつを助けることを許してくれるんだな。なら、仕方が無い」

「はい、やっと折れてくれましたか。では、この薬を頭から被って下さい」

「・・・・は？話が違うじゃないか。飲むんじゃないのか？」

「一応、この薬は、飲むと被る両方で変化が出来るようになっているのですが、飲む方が確実なのです。だから、飲んで欲しいと言いました」

「じゃあ、とりあえず、かければいいんだろ？」

俺は、差し出された薬をひったくる様に奪うと、栓を抜いて、頭から被った。

香水に近いような甘いにおいが体中についてしまって、くしゃみが出そうになるけれど、何とか我慢した。

しかし、何か変化がある訳でもなく、俺は、ジトッとした目で優羅の方を見た。すると、慌てながら懐からハンカチを出し、俺に差し出す。

俺は、それをひったくると、体を拭いた。それから、おずおずと差し出された薬をグイと飲み込んだ。

本当は飲みたくなかった。しかし、半ばヤケになっている部分もあって、体が動いていたのだ。

薬の味は、意外にも甘くて、とてもまずい味ではなかった。上手く現すと、子供用の薬みたいな味だと言えばいいかもしれない。

しばらくの間、俺は、そのまま動かないで立っていたのだが、何も変化が起きない。

「・・・実験は失敗だったようですね？」

「ったく、人に実験薬をぶちまけた挙句、何も変化が起こらなかったじゃないか。でも、一応実験台にはなったんだ。約束は守ってくれよ？」

俺は、そう言って一歩を踏み出した途端、体が地面に沈んでいくような感覚がして、視線が下に落ちて行く。

わかりにくいとおもうが、そうとしか言い様がなかった。視線を下に向けた訳でもないのに、見える位置が下がっていくのだ。同じところをみているはずなのに、視線が下がっていると言うことは、体が縮んだとしか思えなかった。

「成功したようですね！」

「・・・全く、どうして縮むんだよ！まぁ、変なものに変えられるよりはマシだが・・・・」

「これが貴方の姿です」

そう言って差し出された鏡を見て、俺は、思わず絶句した。

歳は十三ぐらいに戻っていて、髪の色は黒色。その長さは、肩よりも少し短めの長さで、曖昧な感じだ。

「・・・これは??」

「まぁ、何も言わないで下さい。一応変化はした訳ですし・・・・行きましょうか?」

「お前は姿を変えないのか?」

「私は、ヘマをするようなことをしないので。それに、最悪は、姿を消すことが出来るので、ご心配なく」

そう言ってスタスタと歩いて行く優羅の後を、俺は何とかついていくのだが、優羅は歩くのが早い。付いていくのがやっとだ。

「あっ、そうだ。これも着て下さいね」

そう言って渡されたのは、俺の今の背丈に丁度いいくらいの、黒いフード付きマントだった。

「これは、何か特別な何かなのか？」

「いえ、これと言って特別な性能はありませんが、この紐を引っ張ると、姿を消せます」

「・・・それ、十分便利な性能がついてると言えるんじゃないか？」

「いえいえ、こんなの序の口ですから」

そう言って笑う優羅を見て、こいつはきっと凄い奴なのかもしれないと思う。

「まぁ、とりあえず着ておこう」

「随分と素直になりましたね。少しは私の凄さがわかったようで」

「そうじゃない。これは役に立つと思ったから着ているんだ。勘違いするな」

黒いマントを羽織ってフードを付けると、腰のベルトを締めて、大きく息を吐いた。

「なんで、ここまで俺にピッタリに作られてるんだ？もしかして、元から、俺が小さくなるってわかってたのか？」

俺がそう聞くけれど、優羅は何も答えずに、そのまま鍵を開けて外に歩き出した。

運動神経って、結構重要ですよね？

「おっと！」

「貴方、またつまずきそうになったんですか？多少は慣れて下さいよ。もう、その格好で二時間は経っているんですから」

「うっせーな。俺だって必死なんだぞ。しかし、体が小さくなるなんて、動きずらくなるだけで、ろくなことがないな・・・・」

俺がブツブツ文句を言いながら歩いていると、前を歩いていた優羅が立ち止まり、振り返った。

その顔には微笑みが浮かんでおり、俺は、それを見ただけで、優羅の考えていることがわかった。

「もしよかったら・・・」

そう言って、懐を探る優羅を手で制し、視線を逸らした。

「もし、いいことなんかない。どんな時でもＮＯだ。そして、俺の愚痴なんて、どうでもいいだろ？早くあいつ等のいる場所まで案内してくれ。その為に体を縮めると言うことまでしたんだ」

「わかりましたよ。よっぽどあの者が心配なのですね。まるで母親のようですね」

「・・・・何か言ったか？」

ニコニコしながら言う優羅の顔をジトッとした目で睨むと、俺はため息をついた。

なんだか最近、自分がお節介焼きのように思えて仕方がないのだ。昔は、自分以外の奴に興味はなかったのだが、凛達と出会って、随分と性格が変わってしまったようだ。

しかも、あまりにお節介を焼いたり心配をしたりするから、母親みたいだと言われることも少なくない。だから、嫌な気分になるのだ。

「まぁ、とりあえず、もう少ししたら着きますよ」

「そうか・・・そう言って、早三十分は経っているように感じるのは、俺の気のせいか？」

「まぁ、そんな減らず口を叩かずに。ほら、この上に上れば着きます」

そう言われて、俺は、床から視線を持ち上げたが、そのまま顔が引きつった。

「あっ、あれを上れって言うのか？」

「まぁ・・・ロッククライミングですね」

「・・・お前、なんで人間界の言葉を知ってるんだよ？白衣のこともそうだ。人間界にいた俺よりも、よく知ってた。なんでだ？」

「まぁ・・・一応研究員ですから、色んな書物を見ます。そこに、人間界のことが書いてあったのですよ。その中の一つに、ロッククライミングと」

「・・・一体、どんな書物を読んでるんだよ」

俺がボソッとつぶやくと、それに気づいた優羅が首をかしげて来るが、俺は首を振ると、目の前の断崖絶壁と言うに等しい壁を見上げた。

「もう少し楽な道はないのか？」

「ないですよ」

俺の僅かな希望は、即消されて、思わずため息が漏れる。ここまで即答をされると、逆らおうと思う気にもなれなくなる。

「まぁ、上手く登って行きましょう！」

「・・・よく、そんなに乗り気でいられるな。こんなツルツルで足の掛け場のような場所を登れるのは、凛くらいだぞ・・・・」

「早く上がって下さい！警備員に見つかりますよ！」

そう上の方から声をかけられて、俺は思わず、上を見るのを躊躇った。まさかな・・・・、まさか、俺のあの呟きの間だけで、こんな壁を上ったはずがない。そんなことが出来るのは、化け物か、凛ぐらいだろう。

そんなことを思いながら、下を向いている俺に追い討ちをかけるように、再び上から声が聞こえる。

「もしかして、これぐらいの壁も登れないんですか？見込み違いだったのでしょうか・・・・」

その言葉にイラッと来て、俺は思わず上を見上げて言い返す。

「おいっ！何勝手なこと言ってんだよ！俺がいつ、登れないと言ったんだ！」

そう言ってから、慌てて下を向いた。やはり、優羅は壁を登り、真上で俺の方を覗きこんでいた。それに、自分で登れると言ってしまった。絶対無理なことなのに・・・・。

「どうしたんですか？登れるなら、早く登って来て下さいよ」

これは、素なのか皮肉なのか、俺にはわからなかったが、どうも、今の俺には皮肉にしか聞こえない。いや、他の誰が聞いたって、これは皮肉だ。

しかし、ここでどう反応すればいいのか俺にはわからなかった。あいつは思った以上に頭の回る奴だから、俺が必死に考えた言葉すら、平気で跳ね返してくるだろう。だから俺は、何も言わずにうつむいていた。

「・・・まったく、登れないのであれば、下手な意地を張らずに私に言って下さいよ」

「だっ、誰がそんなっ！」

俺がそう反論した途端、ロープが垂れて来た。俺は、それを見て、なんとも言えない気持ちになった。俺の考えているとおりのことを言って欲しくはない。そう願いながら、俺は、上を見上げた。

「そのロープを体に縛り付けて下さい。しっかりとですよ！」

「・・・・」

俺は、想像通りの答えが帰って来て、大きくため息をついた。やはり、俺の思ったとおりか・・・・。

最初は恥ずかしくて、そんなことはするものかと思っていたが、体を縮めてまで神羅達を助けようと思ったので、引っ張りあげられるぐらい大したことはないだろうと自分に言い聞かせ、ロープを体に巻き、しっかりと結んだ。

「それじゃあ、持ち上げますよ?」
「・・・・大丈夫なのか?今は体が縮んだとは言え、結構重いぞ」
「大丈夫です。絶対に」

そう自信満々の顔で宣言すると、その言葉どおり、俺を苦もなく引っ張り上げた。

「・・・・お前、本当に妖怪だな」

俺が、体に巻きつけたロープを外しながら言うと、優羅はいつもの笑みを浮かべた。

「いえ、私は立派な神ですよ。ただ、身体能力が他の者よりも突出してるだけですよ」

「・・・・その突出している度合いが普通じゃないって言ってるんだ。普通じゃ考えられないぞ?」

「まぁ、色々やってますからね」
「・・・・?」
「さぁ、行きますよ、この先に行けば、彼等の様子を見ることが出来るはずです」

そう言って、優羅は歩き出す。俺は、色々疑問に思う部分もあったが、あまり聞いてはいけないことなのかもしれないと思い、黙って後をついて行った。

作戦タイム

「えーっと、この辺りですかね？」
「ん？何もないんじゃないか？」
「ここですよ」

そう言って、優羅はしゃがむと、目の前のタイルを取ろうとした。
それを見た俺は、とっさに優羅の腕を？んだ。

「おいっ！何やってるんだよっ！」
「えっ・・・何って、ここのタイルを取って、下の様子を伺うんじゃないですか」
「このタイルを取ったてな、下が見える訳ないだろ？」

「ええ、普通は見えませんが、ここはちゃんとした場所です。だから、大丈夫です！」

「全く言葉になってないぞ。とか、ちゃんとした場所ってなんなんだよ。そんな強引な説明じゃ、俺は納得しないぞっ！それに、ここのタイルを取ったら、目立ってしょうがないじゃないか」

「貴方、もしかして、ここのタイルを取りたくないと言うんですか？一応自分のものではないからと。とてもいい心がけですね」

「違うっ！」

俺は、優羅の勝手な解釈に、思わず大声で反論してしまった為、優羅に口を塞がれた。

「全く、その辺りがお子様と言うのです。もう少し状況を考えて下さい」

「まっ、まぁ・・・今のは俺が悪かったよ。ただ、お子様ってなんだよっ！お子様じゃないぞっ！」

「落ち着いて下さい。これはどうでもいいことですから」

そう言って、再びタイルを取る作業に戻った優羅を、俺は手伝わなかった。

別に、ここが人のものだから壊しちゃまずいとか言う優羅のような考えがあるからじゃない。ただ単に、ムカついたから、こいつを手伝ってやろうと言う気になれなかったのだ。

「そう言うところがお子様と言うのですよ」

「お前っ！人の心を読むなっ！」

「そう大声を出さないで下さい。ほら、取れましたよ」

そう言って、取ったタイルを横に置き、光りが差し込んでいる下を覗き込む。

俺は、最初は一緒に覗き込むのが嫌で、ずっと我慢をしていたのだが、これも嫌味かなんなのかわからないが、優羅が一向に退こうとしない為、俺は仕方なく、反対側から下を覗き込んだ。

そこには、かなり大勢のみすぼらしい格好をした者達と、神羅が見えた。

「私が見たのは、あの方です。あの方で合ってますね？」

「ああ、あいつだ。相変わらずだな」
「護衛の人を、護られる人が心配するなんて珍しいことですね」
「当たり前だろ？護衛とあいつは言っているが、俺は、護衛とは思ってないからな」
「・・・・でしたら、なんと？」
そう言われて、俺は覗き込むのをやめて、ふと考える。
護衛とは思っていないのは確かだ。それなのだが、じゃあ、何と思っているのかと聞かれると、全くわからない。俺は、神羅のことをなんと思ってるんだ？
「・・・・『仲間』じゃないんですか？」
そう言われて、自然としっくり来るものがあったが、なんだか、それに肯定をすると、自分が負けたような気がして、首を振った。
「違う。そんなもんじゃない。そこまでは思ってないはずだ」
「それにしては、あの方の為に結構体を張ってますよね？私の実験台になったり、引っ張りあげられたり。普段の貴方では絶対にしないような行動をしてるじゃないですか？」
「・・・・おい、なんで、お前は俺の普段を知っているような口ぶりなんだよ。まさか、お前・・・・」
俺がそこで言葉を切る為、優羅は不思議そうに首をかしげたが、直ぐにポンと手を叩くと、してやったりと言うような表情をすると、一言言った。

「ストーカーじゃないですよ」

「・・・・いや、そう言おうとはしてないぞ。とか、そう引きずるってことは、よっぽどストーカーと思って欲しいと取っていいのか？」

「・・・・それはないですよ。それに、貴方が言いそうだったので、言っただけです」

「ふんっ」

俺が鼻で笑うと、優羅はシュンとなって、ため息をつくと、俺に背を向けて黙り込んでしまった。

俺はそれを見て、いじけていると解釈をするまで、約数秒かかった。

「もっ、もしかして・・・・いじけてるのか？」

「いじけてなんかいませんよ」

優羅は否定をするが、これは、誰がどう見たっていじけているように見える。しかし、こいつがこんなに子供っぽいことをするなんて、意外だと思った。

「まぁ、とにかくだ。俺は、あいつのことを仲間だとは思っていない。だが、護衛とも思っていない。それだけだ。そして、お前に思ったことはない」

「・・・・さっき、何か言いかけてませんでしたか？」

「あれは忘れてくれ。あの先がどうも思いつかない。だから、いく

ら思い出せと言っても無駄だ。以上」

俺はそれだけ言うと、再び下を覗き込んで、会話を聞き取ろうとするが、俺達が話している間に重要な部分を聞き逃してしまったようで、話の内容が全くわからなかった。

「全く、お前のせいで、話を聞き逃したじゃないか！」
「私のせいじゃないですよ。運が悪かったんです」

「しれっと言ってんじゃねぇよ。全く」

「八つ当たりもいいところですね。貴方が覗くのをやめたのに」
「まっ、まぁ・・・・」

俺はそう言われて、黙り込むしかなった。確かに、覗き込むのをやめたのは俺自身だ。だから、優羅のせいではない。

「あの様子だと、どうやら、強行突破を図っているようですね」
「・・・・とは？」

「貴方を助ける為に、地下の牢獄・・・・私達の牢獄の場所に行く為の作戦を練っているようです」

「地下とか地上とか、バラバラになってるのか？」

「まぁ・・・・ここの牢獄は、罪が重い程に地下へ行くことになります。ここは地上なので、ここにいる方達は、そこまで罪が重いことはないでしょう。しかし、地下に入れられる者は極悪な者で、地上から地下への入り口は、とても厳重に閉ざされています」

「なるほどな・・・・。っと、それって、危なくないか？」

「ええ、危険ですよ。私ですら裏口から入ったんです。表から行くのは危険だと感じましてね。しかし、あの方は裏口を知りませんし、表から突破しようとするでしょうね」

「・・・・どうするんだよ」

「そこまではわかりませんが、とりあえず、これからも何回か集会があるようなので、覗きに来ましょう。そして、私達も作戦を練りましょう」

「ああ」

俺はうなずくと、大きく息を吐いた。

神羅は死ぬ気で俺を護るだろう。そんな奴を、俺はいつまで認めないつもりなんだ・・・・。

面倒だから、説明しません

「今日は何曜日だ？」
「今日は、日曜日ですね」
「・・・そうか、今日、俺は死刑にされることになるんだな」

「そう言うことですね。でも、死ぬ訳には行きませんよ。なぜなら、今日、あなたの救出作戦が始まるようですから」

「と言っても、どうするんだよ？」

「そうですね・・・一回警備員について行って、死刑になるまでの過程を調べたところ、警備員に捕まったら、もう、逃げるタイミングはなさそうです。だから、元々、自分で自殺したと見せかけて行動しましょうか」

「・・・そんな簡単な方法で騙せると思うか？」

「はい、この地獄監獄とは、自殺をする囚人が多いことでも有名ですから。自殺したと見せかければ、何の疑いもないでしょう」

「・・・なら、なんで、最初からそうしないんだ？」

俺の最もらしい発言に、優羅は一瞬考え込む。きっと、そこまで思考が行かなかったのだろう。しかし、それを俺に素直に言うのがしゃくだから、何かいい理由がないかと考え込んでいるみたいだ。

「私達の居場所を確保する為です。貴方が自殺したことになると、この部屋は他の囚人に回されてしまう為、居場所がなくなります。

だからです」

そう言った優羅の表情は、大人とは思えないほど嬉しそうな表情で、俺は、どうのこうのと言えなくなった。

「・・・そうか。でも、死んだって見せかけるには、どうしたらいいんだ？」

「そうですね・・・。あっ、それは私に任せて下さい！」

「そう言われても、どうするか教えてもらわないと、俺は動けないぞ」

「・・・ここの部屋に、幻覚を見せる薬を巻きます。そして、部屋の奥には、骸骨と、この・・・」

そう言って優羅が懐から出したのは、どこで使うのかわからないぐらい長い金髪の鬘だった。

「・・・それは？」

「骸骨にこれを被せれば、貴方の死体だと思わせることが可能でしょう。そして、警備員がそれを確認して出て行ったところで、我々はこの部屋から出ます」

「おいっ、ちょっと待て！」

「どうしました？」

「今、言葉がおかしくなかったか？」

「何がですか？」

「警備員が、俺が自殺したと確認してから部屋を出るって部分だ！

普通、先に出てるものじゃないのか?薄暗いと言っても、相手は懐中電灯を持っているし、この部屋は狭いんだ。おかしくないか?」

「・・・まぁ、そうなんですけど、もし、警備員に私達がいることがバレても、それを周りに知らせる前に気絶させて、鍵を奪い、ここの鍵を閉めてしまえばいいのです。そうすれば、彼は真実を知っていても、ここから出られないので、私達が生きていると言うことを知る者はいないと言うことになります」

「だが、通信手段になるものも奪っていかないと、意味がないんじゃないのか?」

「大丈夫です。この部屋の中は、電波などが繋がらないようになっているので、あらゆる通信手段を使っても、外に通じることはないでしょう」

「なるほどな。しかし、まだまだ言いたいことが沢山あるんだが・・・」

俺がそう言いかけると、優羅は俺の口元に指を突きつけると、言葉を遮り、何かの機械をいじくり出した。何をしているのかわからないが、俺は腑に落ちないまま黙らざる終えなかった。

しばらく俺は、イライラを堪えて黙っていたのだが、優羅が一心に機械の画面を見続けて、いじくり続けている為、ついに限界が着て、優羅の頭を思い切り叩いた。

「なっ、何するんですか!?」

「お前、何一人で機械をいじくり続けてるんだよ!少しは俺の気持

ちも考えろ！何を調べてんだ！」

「・・・まぁ、色々とですよ。では、行きましょうか」
「おい、どこに行くんだよ？」
「とりあえず、この、地獄監獄にある研究所へ行こうと思います」

「・・・なんでだ？」
「それは・・・面倒なので、説明しません」

俺は、その言葉にイラッと来たが、大きくため息をつくと、さっさと動き出す優羅の後を追って、歩き出した。

人のことを必要以上に探るのは、あんまりいいことじゃない

それにしても、こいつは半ば身勝手なところが多過ぎる。だから、頭を叩くぐらい、別に構わないだろうと思った。

「一応言って置きますが、私の方が、貴方よりも年上なんですよ？」

「ああ、わかってる。ところで、いくつなんだ？」

「・・・・それを聞きますか？全く、無神経な人ですね」

最も無神経な奴にそうサラッと言われて、俺は、今まで以上の怒りを覚えたが、確かに、少し無神経な部分もあるなと思った。

「じゃあ、教えなくていい」

「でも、そうすると、貴方は絶対影で文句を言うはずなので、言って置きますが、私は二十四です」

「・・・・案外、年とってるんだな」

俺の呟きに、優羅は一瞬足を止めたが、また直ぐに歩き出した。その手には、さっきいじっていた機械を持っていた。

「・・・・おい、何してんだよ」

「貴方の個人データを朗読します。名前、亜修羅。種類、妖狐。年齢、十六歳、家族構成、父親は健在しているが、命が狙われている。母親は既に他界している。人間界に来るきっかけは、父親の事情。人間界では普通の高校一年生として生活し、その整った顔とスタイルの良さで、女子にはモテモテ。そんな彼の初恋は・・・・」

そこまで言われた時、俺はとっさに優羅の背中にタックルをして突き飛ばし、それ以上言葉を続けさせないようにした。

いつの間に、こんな大量の俺のデータを調べたのかわからないが、こいつはとても恐ろしい奴だ。俺の初恋の時まで知っているとは・・・・。いや、知らなくて、ふざけて言ったのかもしれないが、もし、本当にわかっていて、それを朗読されたら、俺は恥ずかしくて、しばらく顔が赤くなるだろう。だからそれを防ぐ為に、ギリギリ言葉を続けさせないことにしたんだ。

「・・・なんなんだ、今のデータは？嫌がらせか？」

「いえ、そう言う訳じゃないですよ。研究所の仲間に、貴方のことを調べて、そのデータを送ってもらったんです。ちなみに、初恋と言いましたが、そのデータは現在解析中だそうで・・・・」

そう言ってニヤニヤ笑う優羅を、俺は思い切り睨みつけてやったが、全く相手にされなかった。

「あっ、解析結果が送られて来ました。初恋は・・・・」

「やっ、やめろ！」

俺は、再び優羅にタックルして、優羅の手からその機械を奪い取ると、慌ててそのデータを消去した。

ちなみに、その時に初恋の歳のデータを見たが・・・・合っていた。俺が初恋をした年齢までもが、データ化されていたのだ。

俺はため息をついて、後ろから抗議を言いながら歩いて来る優羅を

黙らせると、研究所の場所を調べさせる。

「一応、通路として使われていない部分とは言え、声が聞こえないことはないだろ？静かにしろよ」

「・・・貴方が叫んだんじゃないですか」

「叫んでない。元はと言えば、お前が悪かったんだ。俺の個人データを朗読するような真似をして・・・普通、怒られることがわかるだろうに」

「いえ、大元は、貴方が私の年齢を馬鹿にすることから始まったんです。よって、貴方が悪いんですよ」

「おい、減らず口叩いてないで、早く調べろよ」

「少し待って下さいよ、データを受け取るのに、少し時間がかかるんですよ」

「ったく、めんどくさい機械だな」

俺がそうボソッと言うと、優羅は心外そうな顔をして、自分が使っている機械の凄さを説明し始めた。その説明は二十分にも及び、俺はその言葉のほとんどを聞き流した。

「・・・と言う訳です」

「で、お前の言いたいことはそれだけか？」

「・・・貴方には、何を言っても無駄のようですね。もういいです。諦めました。さぁ、データも取得出来たことですし、研究所へ行きましょうか」

「向かっていたんじゃないのか？」

「ええ、向かっていましたが、途中で立ち止まったでしょう？あの場所からわからなくなったんです」

「・・・そうか。じゃあ、もうわかるんだな」

「ええ、行きましょう」

「しかし、行って、何をするんだ？」

「研究所には、色んな薬品があると思うので、戦う前の準備と、貴方の死体と思わせる人形を持って来るんです」

「なるほどな」

「理解していただけましたか？」

「まあな。俺だって、物分りの悪い、頭の固い奴じゃないんだ。説明して、納得すれば、言うことを聞くさ」

俺がそう言うと、優羅は面白そうに笑ったが、直ぐに真顔に戻ると、目の前にある扉を開けて、中に入った。

俺も続けて中に入ったが、そのにおいの臭さに、一瞬下水に降りてしまったのかとすら思った。しかし、目の前に広がっている薬品の山と、沢山の実験器具に、研究所らしいものを感じる。しかし、においだけは下水だった。

「あっ、そうだ。これを付けておいて下さい」

そう言って渡されたのは、普通の紙マスクらしいもので、俺は顔をしかめたが、何もつけないよりはこのとてつもないにおいを防ぐ事が出来るだろうと思い、マスクをしてみて、とても驚いた。

「なんだこれは?普通のマスクと違うな?」

「そうですよ。それは、毒と臭いを防ぐことが出来ます」

「凄いな、全くにおいを感じないぞ。さっきまで下水みたいなにおいがしてたのに、無臭になった」

「まぁ、それはどうでもいいです。それよりも、そこに埋もれてる人形を運んで下さい」

「・・・これか?」

俺は、直ぐ傍に転がっていた人形を持ち上げたのだが、それを見てギョッとした。最初は普通の人形かと思っていたのだが、持ち上げてみて、骸骨だと気づいたのだ。

「・・・これ、人形とは言えないんじゃないか?」

「そうですね。でもまぁ・・・・それで誤魔化すことは出来ると思います。・・・・しかし、とても役に立ちそうな薬品はないですね。みんな、扱い方が乱雑で、既に使い物にならなくなったものばかりです。とりあえず、部屋に戻りましょうか。もうそろそろ警備員が来る頃ですから」

そう言って研究所から出る優羅の後を、俺はどうしていいのかわからずにうろたえていたが、でかい骸骨を抱えて、俺は、何とか音を立てないように歩き出した。

「・・・なんで、俺のことを考えないで、こんな狭い道を歩くんだよ！」

「慣れて下さいよ、私達の道は、普通の道じゃないんです」

「でもな、もう少し歩き易い道があるだろうに・・・・」

「そんなわがままを言わないで下さい。ここしか道がないんですよ」

「チッ」

俺は、下を見ないように、ただ只管、真っ直ぐに歩き続ける。

今俺達が歩いているのは、横幅二十センチしかない道だ。それを、俺の体よりもでかい骸骨を抱えて歩いているのだ。ここまででも結構酷いとは思うが、まだ許されるだろう。俺だって、ここまで怒りはしない。

なぜ怒るのか。それは、その道の高さに問題がある。その道は、一番下の地面から六十メートルぐらいの高い位置にあって、下を向くと、目が眩みそうになる。しかも、自分の体よりもでかい骸骨を抱

えている為、俺は、ほとんど前を見ることが出来ないのだ。

いつ落ちるかわからないような状態で、俺はなんとか歩き続けて来たのだ。これだけでも評価されるだろう。まるで、サーカスで綱渡りを披露しているピエロの気分だ。ただ違うのは、その高さから落ちたら、即死レベルだと言うことだけだ。

「・・・おい、俺を殺す気か？」

「どうしてですか？」

「俺が、骸骨で足元が見えないのをわかってるか？それでも歩いて来てるのを知ってるか？」

「ええ、知ってますよ。だから、ゆっくり歩いてるじゃないですか」

「・・・嘘付け。俺の遥か先を歩いてるじゃないか。・・・とか、なんでお前はそんなにすいすい歩いて行けるんだよ。足元が見えているとは言え、普通の奴なら、一歩も踏み出せないような高さなんだぞ！」

「これぐらい、訓練で歩きますからね、なんとも思いませんよ」

「お前は訓練してるかもしれないが、俺は、そんな訓練してないんだぞ！」

「まぁ、ゆっくりと歩いて来て下さいよ」

優羅は、既にこの細い道を渡り終えて、微笑みすらも浮かべているのだが、俺は、そんな表情にはとてもなれない。

足元も見えないのに、命綱すらもない。しかし、ゆっくり歩いたら、警備員に見つかるリスクが上がる。今の俺は、まさに、究極の危機

と言えるだろう。

俺は、一端立ち止まり、頬を伝った冷や汗を拭って、骸骨を抱えなおすと、何回か深呼吸をしてから、再び歩き出す。かなり慎重に動いている為、集中力が切れるのも時間の問題かもしれない。

そんなことをふと思った時だった。一瞬だけ気を抜いたのがいけなかったのか、俺は足を踏み外して、空中に投げ出された。

その途端、体中から血の気が引いて、一瞬で、「死ぬんだな」と思った。今までの出来事が走馬灯のように蘇って、大きく息を吐いた。

心が穏やかで、もう、死ぬことに抗おうとしない自分がいて、こんなにも簡単に死を受け入れるんだなと感じた。

その時だった。突然腹に縄のようなものがまとわりつき、その縄が腹を締め付けた。思わず呻きをあげて、腹に巻きついている縄を緩めようとしたが、優羅に止められて、動くのをやめる。

「全く、集中力のない人ですね」

「うるさい！」

「それにしても、骸骨を離さなかった事は、偉いと言うべきかなんなのか・・・自分の身をもっと大事にして下さいよ」

「・・・うるさいな。もし、俺が手を離して骸骨を落としたとして、その下に人がいたら、怪我するだろ」

俺がそうボソッとつぶやくと、今まで文句を言っていた優羅がしゃべるのをやめた。今、奴がどんな表情をしているのかはわからない

が、なんとも言えない表情をしているのだろう。

「・・・・もっと、自分の命を大切にしなくちゃいけませんよ。あの神羅とか言う人の他にも、貴方の身を案じる方は沢山いるんです。人に怪我をさせないことも大切ですが、人を守って、自分が死んでしまえば、意味がないんですよ」

そう言う優羅の言葉に、ただ、温かいような感情が、心に流れて来るのを感じた。

準備の途中で・・・・

「さて、大丈夫ですか？」

「ああ、一応は大丈夫だが、もう少し、縄の締め付けを緩く出来なかったのか？おかげで、腹が痛むんだが」

「まぁ、それぐらいの代償があってもいいでしょう？死ぬなんて、もっと痛いんですから。それぐらい、マシだと思って下さい」

「・・・お前、ドSだな」

「そんなことないです。私は優しいですよ」

そう言って笑みを浮かべる優羅は、とても優しい奴には見えなかった。

俺は、今さっきまで、死にそうになっていた。しかし、それを優羅が助けてくれたのだが、巻きついたロープが腹に食い込んで、違う意味で死にそうになったところだった。

なんとか無事に、優羅のいる地面に立つことが出来たが、もしあの時、優羅が俺を助けなかったら、あのまま死んでいたんだろうなと思う。

「まぁ・・・何はともあれ、助けてもらったんだ。一応礼は言っておく」

「そうですよ、素直になって下さい」

「・・・・」

「どうしたんですか？お礼を言っておくんじゃなかったんですか？」

「お前のその言葉がなかったら、俺は素直に礼を言えたんだ！だが、お前が変に畳み掛けるから、なんか、嫌になったんだよ！それだけだ！！」

俺は、そう吐き捨てるように言うと、自分の部屋へと足を進める。

この監獄の裏通路は全部制覇した為、もう、自分の居場所さえわかれば、部屋への道は優羅の後をついて行かなくてもわかるようになっていた。

「全く、自分で道がわかるようになったら、勝手にさっさと行ってしまうんですから、困ったものですよ」

「道がわかった以上、お前の後をついて行かなくてもいいからな。それに、もうじきお別れなんだ。いつまでも仲良くしてる訳にはいかないだろ？お互い、ここから脱出したら、それぞれ別の道を進むんだ」

俺の言葉に、今まで微笑みが浮かんでいた優羅の顔から笑みが消えて、真顔になった。

「まぁ・・・確かにそうですね。こんなに馴れ馴れしくしている事自体がおかしいんですよね」

そう言った優羅の表情が気になるが、俺は、何も言わずに歩き出した。

「さて、ギリギリ間に合いましたね。そろそろ警備員が来る頃です。準備をしましょうか」

「そう言えば、あいつらはどうなったんだ？」

「ああ、護衛の方の様子ですか？それはわかりません」

「でもお前、この前、わかるみたいなことを・・・・」

「まぁ・・・多分、彼等は貴方を救出する作戦を遂行中でしょうね。彼等がここにたどり着くまでに、私達はここから出なきゃいけませんから、急ぎましょう！」

「あっ、ああ」

俺は、とりあえず、部屋の中に入って正面の壁に骸骨を立てかけると、顔がうつむくような感じに座らせ、優羅から渡された金髪を頭に被せるのだが、とても、俺の死体とは思えない。まず、髪の色が、全然違うのだ。

「おい、俺の髪はこんな色じゃないんだが・・・・」

「すみません、私の薬品で染めたところ、この色が一番貴方の髪の色に近かったので、使わせてもらいました」

「これ、金髪って言うより、ブロンドに近いんじゃないか？」

「大丈夫ですよ、暗いんですから、色の違いなんか気づかないですよ」

「お前、細かいところと大雑把なところの差が激し過ぎるよな」

俺がそう言うけれど、優羅はその言葉を完全に無視して、自分の世界に入り込んでいる。

「その次は、この部屋に、幻覚を見せる薬品を撒くんだよな？」

「ええ・・・・でも、それは今準備中で・・・・」

俺達がそこまで話していた時、突然、今まで固く閉ざされていた扉が開き、光りが差して来た為、俺達は、とっさに影に隠れた。

「なんなんだ、警備員がこんなに早く来るなんて言われてないぞ！しかも、薬品巻き忘れてるじゃないか！」

「こればかりは仕方ないじゃないですか。私も予測しかねましたので。とりあえず、来てしまったものは仕方ないです。静かにしましょう」

俺達は、ギリギリ聞こえる小声でそう話しながら、影から顔を覗かせた時、部屋に入って来たのが警備員じゃないことを知った。それでは誰かと言うと、この前見た、みすぼらしい服を着ている奴だった。

準備の途中でしたが上手く騙せましたので、結果オーライってことで！

そいつを見て、もしかしたら神羅の仲間なのかもしれないと思って、ずっと観察を続けていると、神羅が部屋の奥にある骸骨に走りよって来たが急に減速して立ち止まった。

きっと、俺が死んでしまったと思って驚いたのかもしれない。後から入って来た奴も、骸骨を見て、そのまま歩き出そうとしなかった。

誰も何も言わず、耳が痛くなるほどの沈黙が続いていたのだが、突然、最後に入って来た奴が歩き、部屋の奥にある骸骨に触った。本物だと信じられない様子だ。

「これ、本物なんじゃないか？」

そうそいつが言うと、今まで黙っていた神羅が、ボソッと呟くように言った。

「・・・それを言うな。言われなくても、希望なんか持っちゃいない。その髪の色は族長のだ。間違うはずがない」

神羅はそう言っているが、俺の髪の色は全然違う。もっと、純金に近い色だ。

「おい、俺の髪はもっと純金に近い色だぞ。そんなブロンドみたいな色じゃないぞ！」

「シッ！」

俺がボソッとつぶやいたものだから、優羅が慌てて俺の口を塞ぎ、

ついでに羽交い絞めにされた。羽交い絞めにされる意味もわからないが、あまりバタバタ出来ない為、俺は大人しく羽交い絞めにされていた。

「しかし、どうして髪だけが残ったんだ?」

「・・・俺が知る訳ないだろ?」

「・・・・・」

神羅の言葉に、骸骨に触れた奴は黙り込んだが、一番最初に入って来た奴が話し出す。

「元気を出せとは言わない。だが、そんな顔をするな。族長殿の為にも我々は、ここを無事に出よう」

死んでもいないのに死んでしまったような感じで話を進められるのは、なんとも不思議な気分になる。まぁ、そう言う機会が滅多にないだろうからこの気持ちは伝わりにくいと思うが、なんとも不思議な気持ちだ。そして、一つ言えることは、気分のいいものではないと言うことだ。

「・・・・」

神羅は、そんな仲間の言葉に何も反応しないまま、骸骨に近寄ると、髪を取った。

「おいっ、あの鬘、なんであんなに簡単に毛が取れるようになってるんだよ!」

「色々想定したところ、あんな風に直ぐに抜けた方がいいかと思いまして・・・・」

「色々想定したって、何を想定したらあんな鬘が出来上がるんだよ。それに、そんな無駄なところに試行錯誤するのなら、もっと、俺の髪の色に近い色に染めようとか思わなかったのか？」

「いつまでも髪の色のことを言わないで下さい、しぶといですよ。とりあえず、黙りましょう」

優羅の言葉にイラッとして口を開こうとするが、それをいち早く察した優羅に再び口を塞がれ、やっぱり抵抗出来ず、素直に観察を続ける。

「何をするつもりだ？髪などを持ち帰って？」

「何もしない。ただ、せめて髪だけは持って帰ろうと思ってな。そうすれば、みんなも納得するだろうからな」

「・・・骨はいいのか？」

そう言われた時は、思わず冷や汗が吹き出した。骨を持ち帰ったら、鑑定とかをされるかもしれない。そうしたら、その骨が俺のものではなく、ましてや、本物の骨ではないと言うことがバレてしまうと思ったのだ。

「重くなるだけだ。それに、骨なんかで本人とわかることはない。だったら、髪の方がいい」

俺は、その言葉を聞いて、大きく息を吐いた。そして、神羅がＤＮＡ鑑定と言う言葉を知らなくてよかったと言う気持ちになった。まぁ元々、人間界にしかない技術のようだが、何があるかわからない

から心配したのだ。

「それじゃあ、俺達はここからでるのか？もうお前の族長はいない訳だし、ここにいる意味もないだろ？」

「・・・・いや、まだ、しばらくここに残るぞ」

神羅の言葉を聞いた時、俺達は驚いて、互いの顔を見合わせた。俺が死んだ今、神羅の目的はないに等しい。それなのに、どうしてこんな危険な監獄にいたいと言うのかと思ったのだ。

「なぜ、こんな危ないところに残るんだ？」

「・・・・言わなくてもわかってんだろ？なら、言わせんなよ」

そんな神羅の言葉を聞くが、はっきり言うと、俺達は何がなんだかさっぱりわからなかった。テレパシーが使える訳でもないのに、何をどうやって理解しろと言うのだ。

ピンチ到来

しかし、そんなことを言葉で言えない為、とても歯がゆい思いをしていたのだが、神羅の仲間が、俺のその思いを感じとったかのように話し出した。

「わからない・・・そうだとしても、お前の口から聞いてみたい。それが本当の意思なのであれば、躊躇わずに言えるはずだからな。お前は、ここに閉じ込められた奴を救う為に、危険なこの場所から出ないのか？」

「・・・確かに、ここは危険だよな。今までは、族長を助けると言う目的があったから、ここまでギリギリ来れた。だが、もう、そこまで漠然とした目的はないから、これからの難を乗り越えられるかわからない。ただ、やれるだけやってみたいと思う。もう、あんな思いをする人を見たくはない」

あんな思いと言うのがよくはわからないが、その言葉を発している神羅の表情を見て、俺は、とても真剣なのだと言うことがわかった。

「・・・そうか。なら、俺も協力しよう。お前もそうだよな？」

神羅の本気さが伝わったのか、神羅の仲間の一人が、もう一人の仲間に話しかける。

「私はついて行くぞ。助けてもらったのだからな」

「・・・それだけか？」

「・・・まぁ、惚れた部分もあるな」

俺は、その言葉を聞いた時、思わずバランスを崩して、床に倒れこみそうになった。優羅も驚いているようで、目を丸くして、俺の顔を見ている。

「おい、もしかして、あいつ・・・・」

「そうかもしれませんね、まさか、ここで大胆告白とは・・・・。盗み聞きをして申し訳ない気持ちが一杯で・・・・」

俺は、気づいてボケているのか、それとも普通に気づかないでボケているのかわからないが、とりあえず、優羅の頭を叩くと、常識と言うことを教えた。

「おい、よく考えろ。あいつは男で、神羅も男だ。成り立つ訳がない」

「それがですね、結構そう言う特殊なカップルが成立することもあるようですよ。私達男同士のようなカップルが」

俺は、そう言われた途端、自然と寒気がして、優羅から離れる。今、「私達男同士のような」と言ったが、私達と言わないでもらいたい。

「おい、お前にそう言う趣味があるのは自由だが、俺を勝手に巻き込むな！俺は、そんな異種じゃない」

「そう言う言い方はいけませんよ、差別じゃないですか」

「違う、そう言う意味じゃ・・・・！！」

俺は、感情が高ぶり過ぎたのか、少し声を大きく荒げ過ぎた。俺は、優羅に口を塞がれる前に、自分で口を塞ぐと、ゆっくりと影から神

羅達の様子を伺う。

すると、少しいぶかしそうな表情をしていたが、そこまで気にしていないようだ。

俺は、大きく息を吐くと、欠伸をした。一安心したら、眠くなって来たようだ。しかし、そんな気の緩みも束の間、突然、神羅が何者かの気配を感じ、仲間にしゃべることをやめさせた時は、バレてしまったかと思った。

「誰か来るぞ！」

「どうしたんだ？」

「・・・・誰かが来たんだ。これが敵だったら、俺達は終わりだな」

「とは、どう言うことなんだ？」

「ここを閉められたら、俺達は出られない。ここは、外側からじゃないと鍵を閉めることも開けることも出来ないんだ」

「・・・マジかよ。どうするんだよ？」

「せっかくやる気を出したところだったのによ。全く・・・・」

神羅達の言葉に、俺達の意識も研ぎ澄まされる。敵か味方。どちらにしても、俺達は見つかってはいけない。見つかったら大騒ぎになるはずだ。

そんなことを思いながら隠れていると、神羅達三人が、俺達の直ぐ隣に隠れている為、俺達は、心臓が止まるかと思った。神羅達が左を向けば、俺達の姿は絶対的に見えるだろう。

俺は、優羅の顔をうかがったが、優羅は引きつった表情を浮かべるだけで、何をする訳でもなかった。

しばらく、そんな緊迫した空気が続いた後、全開に開け放たれている入り口に影が差して、誰かが立っていることがわかった。

運を持ち合わせた者は、最強です

「おいっ、こんなに同じ場所に多くの奴が隠れていて、バレなくないか？」

「それは、時の運です。もしバレたとしても、相手が味方なら問題ないのですが・・・・」

そんなことを、ほぼ口の動きだけで話していると、俺達の隠れている方向に真っ直ぐ足音が近づいて来るのがわかった。

俺は、みつからないように、今まで以上に体を縮めたが、懐中電灯の光が俺達の隠れている場所に当てられ、これまでかと思った。

「お前達、そこで何をしている！」

「・・・・」

「クソッ」

「これで、逃走劇も終わりか」

神羅達が言った途端、警備員が笛を吹き、どこからともなく、無数の警備員が俺の部屋に入って来て、神羅達の腕を？むと、部屋の外に連れ出して行った。

俺達が捕まるのも時間の問題だろうなと思いながら待ち構えていたのだが、いつになっても俺達のもとに警備員が近付いて来ることはなく、そのまま、多くの警備員は、部屋から出て行った。

それと同時に扉が閉まり、外の音が遮断されたが、騒がしかった為、神羅達は抵抗しているのだろうと言うことがわかった。

俺達は、扉が閉まったことを確認すると、そろそろと影から出て来て、大きく息を吐いた。

「まさか、バレないとはな・・・・」

「護衛の方達が見つかった時は、終わったと思いましたが、私の運も、まだ尽きてないようですね」

「それにしても、幻覚を見せる薬品を撒くこともなく終わったな」

「そうですね。きっと、警備員達は、あの骨に気づかなかったでしょう。でも、後でここにもう一度来ると思うので、一応薬品は撒いておきましょう」

「で、俺達はどうするんだ?」

「多分、あの方達が本気で抵抗をすれば、あんな警備員ぐらい、打破することが可能でしょう。だから私達は、あの方達を、ここから出す手助けをします」

「と言っても、ここからどうやって出るかとかって、わかってるのか?」

「ええ、方法を知らなかったら、こんなところに来る訳ないじゃないですか」

「・・・・」

俺は、無言で優羅を睨みつけるが、仕方なくため息をついた。

「そろそろ警備員も離れて、あの方も出口の方へと歩いている頃だと思います」
「でも、どうやってあいつを助けるんだよ？」
「とりあえず・・・・私も、貴方みたいに、姿を縮めることにします」
「はぁ！？」
「別にいいじゃないですか。そして、貴方と同じ服を着ます。そして、わざと彼にぶつかります。そこから会話を繋げます」
「そうか・・・・でも・・・・・」
「わかってます。貴方も彼と話したいでしょう。だから一回、私はここの地図を彼に渡して、姿を消します。そうしたら、今度は貴方が彼の前に現れればいいのです」
「しかし、おかしくないか？同じ格好をした奴が二回も出て来るなんて」
俺がそう言うと、優羅は色々と考えた後、口を開いた。
「それでは、こうします。貴方は、私の部下と言うことにしましょう。そうすれば、『遅いから案内役として来た』みたいな言い訳が出来ます」
「・・・・おい、それって、自分が高い身分になりたいとか、そんな気持ちがあるからとかじゃないだろうな？」
「何を言ってるんですか？私は、そこまで子供じゃありません。そ

うすればいいんじゃないかと思ったんです。それから、演技をしてもらいたいんですよ」

「演技？」

「ええ。貴方は、彼に優羅と名乗り、私に似た振る舞いをして下さい。そして、私は修羅と名乗り、貴方に似た振る舞いをします。そうすれば、自然と、彼の目は私に向けられるはずです。それなら、多少ボロが出ても、バレにくいと言う訳です」

「・・・なるほどな。お前にしては、よく考えたな」

俺が一言言うと、優羅はジトッとした目で俺を睨んだが、俺はその睨みを受けながし、ゆっくりと立ち上がった。

しかし、突如、巨大な地震が起こったかのように、足元が揺れ、目の前が真っ暗になって、俺はその場に倒れた。

「大丈夫ですか！？」

それにはさすがに驚いたようで、優羅も心配そうに駆け寄って来たが、息を飲んだ。

俺は、何とか起き上がると、自分の体が元の大きさに戻っていることを確認した。

「戻ったんだな」

「・・・どうしましょう」

「ん？どうした？俺が元の大きさに戻ったら、そんなにまずいこと

なのか？」
「ええ、まぁ・・・・」

「まぁ、確かに、この姿であいつの前に出ることは出来ないが、また、姿を縮めればいいことじゃないのか？」

「それが出来れば、私もここまで落胆しませんよ」

俺は、優羅のその言葉に、全身から血の気が引いて行くのを感じた。

まさか、もう一度縮むことが出来ないなどと思っていなかった為、俺は気楽に考えていたのだが、それが不可能となると、一体どうしたらいいんだ・・・・。

名前とは、その人と示す、とても大事なもの

「とりあえず、方法はなくもありません」
「あるのか！？」
「ええ、でも・・・なんと言いますでしょうか・・・幻に近いような感じですね」

「・・・とは？」
「まぁ・・・色々うやむやな感じなんですよ」
「・・・それは、お前の言葉も含まれてるんだな」
「そんなつもりはないですよ」

俺はその言葉に、思わずため息が出てしまった。うやむやって、「その効果よりも、お前の言葉の方がうやむやじゃないのか」とツッコみたいところだが、この様子だと、こいつはそれを全く自覚していない為、俺は、これ以上この事について言わないことにした。めんどくさいことになりそうだからだ。

「まぁ、自覚がないのなら、それでもいい。で、幻に近い感じとは、一体どう言う意味なんだ？」

「えーっと、これはこれで、また説明が難しいのですが・・・本当は、体は縮んでないのです。が、相手に幻を見せることで、縮んだように見せると言うことです」

「・・・まぁ、なんとなくわかった」

「でも、私は魔法使いではないので、ただ幻を見せると言うことが出来ないのですよ。さっきも言ったように、薬品などを使わないと、

幻を見せることが出来ないんです」

「じゃあ、薬品を使えばいいんじゃないか？」

「そう言うことになるんですけど、その薬品をかける物が必要なんですよ。その薬品は、人体に影響のあるものなので、体に直接かけると、大変なことになるので」

「おい・・・それって、何か変なものじゃないだろうな？」

俺は、ふと、人間界で流れている裏の薬を思い浮かべた。確か、あれも幻覚や幻聴などを起こし、体に害があるはずだ。

「大丈夫です。貴方が考えているものとは違いますよ。あれは、体の中を蝕みますが、私が言っている薬品は、体の外に害が出る感じです。言って見れば、塩酸とかの類ですね。体にかかれば、火傷は必須でしょう」

俺は、笑顔でそんな恐ろしいことを言う優羅から飛び退いた。こいつは、塩酸以上に危ない奴だ。近くにいたら、火傷どころじゃ済まないと思ったのだ。

「・・・お前、そんな危険な薬品を俺に使わせる気か！？」

「だから、私も落胆したんじゃないですか。貴方を危険な目に合わせたくないので」

「・・・お前、演技してるつもりだろうが、十分に、現在の感情が顔に表れ出てるぞ。嬉しいんだろ？そんな危険な実験に付き合わせられる実験台がいて」

「何を言ってるんですか。私は、にこりとも微笑んでいませんよ」

俺は、優羅に鏡を突きつけてやりたい衝動を必死で押さえ、これ以上言っても時間の無駄だと思い、さっさと話を促す。

「まぁ、そう言うことなので、その薬品をかけるものを決めて、その薬品をかけたものを離さずに持っていれば、相手に幻を見せ続けることが出来るでしょう」

「そうか。なら、早速そうしてくれ。早くしないと、あいつはまた暴れそうだ」

「それで、ものは、何にするんですか？」

「ああ、かけるものか・・・・」

「出来れば、常に離さないものがいいと思いますが・・・・」

「じゃあ、この刀か？」

俺が常に持っているものと言ったら、烈火闘刃ぐらいだ。これだけは、いつも確実に持っている。

「そうですか。まさか、魔界の国宝を使うと言い出すとは・・・・まぁ、魔界の国宝なら、こんな薬品ぐらいじゃ、傷も付かないでしょうしね」

そう言って、優羅はさっさと懐から危ない色の薬品を取り出すと、とてもワクワクしながら待っている。

俺は、仕方なく烈火闘刃を渡すと、優羅は危ない薬品を普通に烈火闘刃にかけた。その途端、ジュワッと言う音がして、何事かと思って烈火闘刃の方をみるが、傷一つ付いていなくて、俺は大きく息を

吐いた。

さっきの音は、油をひいたフライパンに、水を投げ込んだ時のような音だった為、物凄く驚いたのだ。

「大丈夫ですよ、魔界の国宝と言われているほどの刀です。これぐらいで破損することもないでしょう」

「お前・・・刀の持ち主より、なんで平静でいられるんだよ。それの持ち主は、一応俺なんだぞ?」

「わかってますよ。さぁ、行きましょう」

「おい、どこに行くんだよ?」

「当然、護衛の方のところに行くに決まってるじゃないですか。その為に、ここまでしたんでしょう?」

そう言う優羅の言い分も最もだとは思うが、こいつの場合、言い方が悪いのだ。あんな言い方をされては、素直にうなずけない。

「とりあえず・・・」

「行くんだろ?神羅のところへ。わかってる。と言うか、お前、人の名前をちゃんと呼べばどうだ?神羅のことも、『護衛の奴』としか言わないし、俺に対しては『貴方』としか言わない。それじゃあ、不自然だ」

「そんなことはないですよ。私は、生まれた時から今まで、人の名前など覚えたこともありませんし、呼んだこともありませんから」

そうサラッと言ってのけるこいつは、まるで、昔の自分のように思えた。

昔の俺も、人の名前を呼ぶなんてことは全くせず、覚えるなんてこともしなかった。ただ、取引相手と思うのと、獲物と思うだけの二つに一つだった。

しかし、人間界に来て、あいつらと出会って、俺は変わった。名前をちゃんと覚えるようになったし、呼ぶようにもなった。ただ、それをあまりにも簡単にやってしまっているから、よく考えたことがなかったのだ。

優羅の態度を見て、昔の自分と似ていると思わない限り、俺は昔、人を名前で呼ばず、獲物としか捉えていなかったと言うことは忘れていただろう。

「ほら、行きますよ。あんまり野放しにしていると、彼はこの地獄監獄の出口を知りませんから、変な方向に行ってしまうはずです」

「・・・お前に原因があると思うのは、俺だけか？」

「そうですね。私は何も悪くないですから」

俺は、優羅の平然とした言い方にため息が漏れ、それと同時に、一気に疲れも出て来た。

尾行って、思ったより大変・・・・

「よかった。まだ、彼は変な方向へは向かっていないようですね」
「そうか」
「ほら、あそこに、彼の様子が見えるでしょう?」

そう言って、正面を指差す優羅の指を辿って視線を移動させると、意外にも近くに神羅がいることがわかった。

「こんな近くで観察してて、あいつに感づかれないか?あいつ、護衛をやってる分、普通の妖怪よりも、勘や気配を察知することに長けてるんだぞ」

「大丈夫です。心配には及びませんよ。では、ここからは別行動です。貴方はこの画面を見て、彼の居場所を把握して私に教えて下さい。私は、先に走って行って、彼にぶつかりますから」

「・・・・ああ」

俺は、優羅から目を逸らし、渡された機械を見下ろす。画面には、赤い丸が、クネクネと折り曲がっている通路を移動している。これが神羅と言うことだろう。

「俺達の現在地はどこだ?」

「現在の居場所調べる為には、ここのボタンを押して下さい。そうすれば、３Ｄ映像でわかり易く出て来ますから」

俺は、優羅に教えられたボタンと押すと、神羅の赤い丸とは別に、

青い丸があるのを発見した。きっと、ここが俺達がいる現在地だろう。

「それでは、私は行きますよ」

「最後に一つ言っておくが・・・・」

俺は、走り出そうとしている優羅に向かって一言言った。俺が身をもって体験した忠告だ。

「その姿で走り回らない方がいい。以上だ」

「大丈夫ですよ、体を縮めたとは言え、それで身体能力に支障が出るほど運動音痴ではないので」

俺は、優羅の言葉にムカッとしたが、微笑みを浮かべて手を振った。

優羅は意外そうな顔をして、俺のことを伺っていたけれど、俺が真顔に戻り、追い払うような仕草をすると、慌てて走り出した。

しかし、慌てていたからかわからないが、優羅は何もない場所で転んだ。きっと、自分の足に自分の足を引っ掛けて転んだのだろう。一番恥ずかしい転び方だ。

俺は、それを見ると、慌ててかけより、優羅を立ち上がらせると、微笑みを浮かべた。

「だから言ったでしょう。俺の言うことを聞かないから痛い目に合うんです。自分だけ特別とか、そんなことを考えない方がいいですよ」

俺は、皮肉を込めて、優羅の口調で言ってやった。すると、優羅は悔しそうな顔をした。

「・・・・わっ、わかってますよ！」

「じゃあ、謝ってもらおうか。俺が、その小さな体に慣れないことを馬鹿にしたことをな」

「・・・・わっ、悪かったです」

優羅はいじけたようにそう吐き捨てると、視線を逸らした。俺は、本当は全く許していなかったが、これ以上時間を食っていると、神羅が変なところに行ってしまいそうな為、仕方なく優羅を許したフリをしてやった。

じゃあ、本音はどうなのかって？そんなの、許してないに決まってるだろ？あんなガキみたいな謝り方が許される大人なんか、いる訳ないんだ。

俺がため息をついて画面に視線を移した時、突然直ぐ近くで優羅の声が聞こえた為、俺は物凄く驚いた。優羅は、今さっき走って行ったはずなのに、直ぐ近くで声が聞こえたからだ。

「お前、どこにいるんだよ！？直ぐ近くにいるのか？！」

「いませんよ。これは、貴方が着ている服に仕込まれた通信機です」

「・・・お前、なんで、俺にそれを言わなかったんだ・・・・。おかげで驚いただろうが・・・・」

「まぁ、それはどうでもいいとして・・・・。護衛の方は、今、ど

こに向かってますか？」

俺は、「そんなことって・・・・・」と言う怒りを込めた言葉を何とか飲み込み、優羅に渡された機械で神羅の居場所を調べる。

「神羅は今・・・・地下五階にいる。どうやら、地上に向かってるようだな」

「なるほど・・・・そうしたら、貴方も彼の居場所まで走って下さい。私もその場所まで行きます」

「なんで、俺まで一緒に来なくちゃいけないんだ？」

「そうした方が、色々便利だからです」

俺はそう言われて、もう、深く問うことはやめて、優羅の言うことを聞くことにした。

ここでまた何かを言ったら、こいつは絶対何かを言い返して来て、言い合いが止まらなくなる。そうなったら、色々と面倒だ。だからもう、諦めよう。

この考えを今まで何回して来たか数えていないが、きっと、三回以上は諦めて来ただろう。もう少し、周りに合わせてもらいたいと心底思う。

俺はため息をつくと、機械に表示されている赤い丸の後を追って、走って行く。

しかし、それが中々大変である。なぜなら、神羅と同じ道を歩いていないからだ。同じ道を歩いていれば、追いかけるだけなのだが、

俺が通っているのは、狭い隙間なのだ。当然、通路では真っ直ぐ続いている道でも、俺の通っている隙間は行き止まりのことだってある。

それで、何度迷いそうになったことか。その度に出るため息が俺のやる気を削ぎ、そろそろ精神的にも支障が出始めた時だった。

「そろそろ突入する予定ですが、直ぐ近くに来ていますか？」
「・・・・ああ。行くなら、早く行ってくれ。精神面が色んな意味で壊れそうだ」

「わかりました。では、最終確認をします。貴方は私の部下で、振る舞いを私のようにして下さい。わかりやすく言うと、貴方の性格の正反対にして下さい。そうすれば、わからないでしょう」

「・・・・ああ」

俺は、色々言いたいこともあったが、口を開いただけで、大きく息を吐いた。ダメだ。もう、意見を言う余力すら残っていない・・・・。

「じゃあ、行って来ます」
「ああ、行ってらっしゃい」

俺は、半ば、気合の抜けた声で返事をすると、その場に座り込んだ。ここにたどり着くまで滅茶苦茶走り回って大変だったんだ。少しは座って休んでも怒られはしないだろう。

癖と言うものは、中々本人は気づかないものです

俺が座り込んでから二十分近く経った時、やっと優羅から通信が入った。

「今、彼と別れました。彼には地図を渡してあるので、それのとおりに進んでくれれば大丈夫だと思うのですが、彼とあの地図の相性は悪そうですので、貴方が助けてあげて下さい」

「・・・・相性？」

「はい、あの地図は普通の地図じゃないんですよ。一番似ている人間界の代物と言えば・・・・カーナビですかね？」

「・・・・」

俺は、その、「かーなび」と言うものを知らなかった。しかし、それを言ったら絶対に馬鹿にされる為、絶対にわからないとは言わなかった。

「まぁ・・・・その様子だと、知らないようですが、説明いたしましょうか？」

「・・・・俺がいつ、カーナビを知らないと言った？」

「言ってはいませんよ。しかし、貴方の表情を見れば、一目瞭然です」

そう言われて、俺は慌てて下を向いた。わからないような表情をしたと言うのか？いや、俺はそんなことをした覚えはないぞ。だが、それなら、どうしてこいつにバレたんだ・・・・。

「どうしてバレたのか、わからないようですね」
「何で、俺の心が一々わかるんだっ！」

「とりあえず言っておきますと、私がカーナビと言う言葉を話した時に、貴方の眉間に一瞬シワが寄りました。今までのことをまとめると、貴方は自分の知らない単語が出て来ると、眉間にシワが寄る癖があるようですね。それで、知らないとわかりました」

「・・・・そんなことしてないぞ」
「本人は気づかないのが癖と言うんですよ」

俺の言葉は全て跳ね返され、なんとも言えない気持ちになったが、最終的には知っていると言う素振りをするのをやめて、素直にカーナビの意味を教えてもらった。

「なるほどな・・・・」

「はい、音声で目的地への道順を教えてくれるんです」
「だが、それと相性と言うのは関係ないんじゃないか？」

「あの地図とカーナビの違いは、会話が出来るか出来ないかなんですよ。カーナビの場合は、目的地への案内をすることが目的のものなのですが、あの地図は、一人旅が寂しい人用に作られた音声機能付きの地図で、会話が出来るんです。それ故に、地図にも性格が搭載されていて、それによって言動パターンが異なるのですが、私が思うに、あの地図とあの方の相性は悪いと思うんですよね」

「・・・・じゃあ、なんでお前は、その性格の地図をあいつに渡したんだよ？」

「そうしないと、道に迷わないで、貴方の出番がなくなるじゃないですか。だから、あえて貴方の出番があるように、相性の悪い性格の地図を渡したのですよ」

それを聞いて、こいつは俺のことも少しは考えてくれていることを知って、何となくホッとした。

「さぁ、と言うことで、行って来て下さい、私は目的地で待ってます。あっ、これは返して下さいね」

そう言って、優羅は俺から便利な機械を取り上げると、さっさと走って行ってしまう。

「あっ、おいっ！待て！それがなかったら、俺はどうすればいいんだよ？神羅の居場所すらわからないぞ！」

「それは、私が教えます。なので、早く進んで下さい！彼なら、このまま真っ直ぐ歩いて行きましたよ」

「そうは言ってもな、わかりずらいだろ？」

「とりあえず、彼と同じ道を走っていいですよ。途中で私が裏道を教えますので」

「・・・わかったよ」

これは、何を言っても渡すつもりはないと見て、俺は仕方なく諦め、通路に出ると、優羅の言う通りに走り出した。

やっと出会えました

しかし、よく考えてみると、ここの通路は一本道で、とても裏道があるとは思えない。しかし、とりあえず、地図を持っているのは優羅なので、言う通りに動くしかないなと思っていた。

しばらく歩くと、神羅と思わしき人物が見えて来た。その時、突然優羅から通信が入った。

「大分護衛の方に近付きましたね。そろそろ、裏道から先回りをした方がよさそうですね」

「そうは言っても、裏道なんてどこにあるんだよ？ここの道は一本道じゃないか？」

「普通には見えないから裏道なんじゃないですか。そこを右に曲がって下さい」

「そうは言っても、正面には壁しかないし、その奥はマグマだぞ」

「あっ、そうでしたね。じゃあ・・・・彼を追い越して下さい」

「・・・・は？」

「彼にバレないように前に回って下さいね。それじゃあ」

「あっ、おいっ！」

勝手に優羅が通信を切る為、俺はしばらくの間呼びかけ続けていたが、手段はそれしかないと思い、俺は、神羅を追い抜くことを考える。

しかし、どうやって前を通っていけばいいのか。あいつは結構敏感

だから、気配を殺して横を通ろうとしても、絶対無理だろうと思っていた。

しかし、よく考えてみれば、前に一々回り込むことはないのだ。後ろから話しかけたっていい。そう思うと大分気が楽になって、普通に横を通って行くことにした。

「うるせぇよっ！もっと声潜めろ！」

【なんでそんなことをしなくちゃいけないの？私、うるさい？】

「そこだけ無邪気に言うな！」

俺は、出来るだけ気配を殺して目の前に回り込んだが、そんなことをしなくても、今の神羅は地図に気をとられていて、俺が目の前に立ちふさがっても数秒は気づかなかった。

しかし、直ぐに気が付き、姿勢を低くして身構え、今にも襲い掛かって来そうな感じ立った為、俺は急いでフードを取った。

「武器を向けないで下さいよ。俺は、貴方の味方です」

いつもは笑みを浮かべることはないのだが、優羅に演技をしろと言われている為、止むを得なく微笑みを浮かべた。

「なら、なんの用だ？」

用心深く問われ、俺はどうしようかと迷ったが、あまりにも考え込むと、より疑われそうな為、適当なことを言った。

「いや・・・・どうも、苦戦しているようなので、部下である俺に連れて来いと頼まれたんです」

「そうなのか・・・・。お前は修羅の部下なのか。それなら、修羅のことを知ってるのか？」

かなり口からでまかせを言ったのだが、神羅が素直に受け取ってくれた為、助かったと思いながら、神羅からの問いに答える。

「うーん、修羅様のことは、俺もよく知らないんですけどね。あの人、結構部下とかにも秘密を教えようとする人じゃないので。側近の俺でさえもよくわからないお方なのでね。俺が知ってることと言えば・・・・修羅って名前だけですね」

「・・・・そうなのか」

ため息と一緒にそうつぶやく神羅の表情が、今までに見たことのないような表情で、俺は対応に困った。なんと言っていいかわからずに、とりあえず、優羅のところに連れて行くことが先決だと思った。

「まぁ、とりあえず、俺について来てくれれば的確です。俺、こう見えて、方向感覚抜群なんで」

「そう言えば、お前、名前は？」

そう聞かれて、俺は、とっさに本名を答えそうになったが、優羅の言葉を思い出して、何とか喉元でその言葉を飲み込んだ。

「俺は、優羅って言います。以後、お見知りおきを」

俺はそう言うと、出来るだけ優羅っぽくお辞儀をして、あいつなら握手ぐらいするだろうと思って、握手をした。

序盤から転びました・・・・。

「優羅と修羅って・・・・似てるな？」

握手をした後、ふと気づいたように神羅が言う為、俺は、確かにそうだと気づいた。それまで全く気づかなかったのだ。いや、納得している場合じゃない。さっさと適当な言い訳を考えないといけない。

「ああ、俺のこの名前、修羅様が付けて下さったんです。だから、似てるのかもしれません」

「そうか・・・・優羅か」

「・・・・はい、それがどうかしましたか？」

意味深に呟く為、何かあるのかと思ったが、神羅は首を振った。

「と言うか・・・・方向感覚抜群って、関係なくないか？ここは元々一方通行だし・・・・」

神羅の最もな発言に、俺は一瞬自分の言葉を悔いたが、とりあえず、適当に話を進めることにした。

「そうか、貴方は知らないのかもしれませんね？俺達の通路」

「・・・・俺達の通路？」

「ええ、俺達、主にこう言う場所で移動しないんですよ」

「・・・・は？」

俺は、頑張って今まで使っていた通路のことを説明しようとするのだが、どう説明していいのかわからない上に、結構適当なことを序

盤から言っていた為、神羅が全然わかっていない。

こう言う時に、自分の説明下手なところが憎く思う。自分で言っている言葉ながら、何も知らない状況で聞かされたら、意味がわからないだろうと思うくらいだ。当然、神羅がわからないのは当たり前である。

「こう言う場所と言うのが、普通の・・・俺達が今立っている通路だとわかる。しかし、それ以外に通路と呼んでいる場所がわからない。それはどこだ？」

「・・・それはですね、ズバリ、下水ですよ」

俺の発言に、神羅がポカンとした顔をした。当然だ。俺だって、自分で下水と言って、馬鹿じゃないかと思ったのだ。

しかし、言ってしまった物は仕方ない。下水で話を通すしかないのだ。

「はぁ？下水なんて、こんなところにないだろ？」

「いやいや、俺、嘘はつきませんよ。嘘だけは・・・ね？」

「・・・下水かよ・・・臭いんだろ？あそこだから黒いマントを着てるのか？」

俺は、その問いに肯定しようとしたのだが、突然優羅から通信が入り、小声で注意される。

「貴方、なにデタラメばかり言ってるんですか。少しはまともに答えて下さい。私達が通ってるのは下水なんかじゃありませんよ。『隙間』です」

優羅はそれだけ言うと、再びしゃべらなくなる為、俺は何か言おうと思ったが、傍に神羅もいる訳だし、やめようと思った。

そして、とりあえずすることは、通路が下水と言うのを否定することだ。

「いえいえ、違いますよ、下水なんて思わないで下さい。嘘ですから」

俺はそう言うと、明らかに嘘だったかのように笑う。すると、神羅はイラッとした顔をしたが、それ以上何かをすることはなかった。怒られるかと思っていた為、それを見て、少しホッとした。

「まぁ、そう言う嘘は置いといて、そろそろ出発しましょうか」
「どこを通るんだよ？」

そう言われて、優羅が言っていた「隙間」とか言う言葉を使ってみようと思う。

「俺達が通る道・・・・それは、『隙間』ですよ」
「・・・・隙間？」
「ええ、聞くより見る方がわかりやすいです。では、行きましょう」
「えっ、あっ、おいっ！」

俺は、強引に神羅の腕を引っ張ると、優羅に告げられた道を進むことにした。

悪戦苦闘中です

「狭いなぁ、ここ」
「確かに、俺も最初は狭いと思いましたが、慣れればそこまででもないですよ」
「っぽいな、慣れた感じで進んでるもんな」

神羅にはそう言っているが、俺は、別に慣れた訳じゃない。まぁ、今、初めてこの隙間と呼ばれる場所を通っている神羅に比べれば、慣れていのかもしれないがな。

「とか、なんでこんな場所を通るんだよ？」

そう神羅に問われ、思わず考え込む。普通は、侵入者が堂々と表の道を歩ける訳がないから、こう言う道を通っていると思うと思っていたのだが、そんな道理は、神羅には通用しないだろう。ちゃんとした訳を言わないと、納得しなさそうな雰囲気だ。

「ああ、あの通路、トラップなんです。警備員とかは、他の通路を通ってますよ。あの通路を真剣に歩いても、上に行くことは出来ないんです」

「と言うことは、俺達、無駄な道を懸命に歩き続けていたと言うことか・・・・」

俺の適当な言い訳を真に受けて、神羅は顔をしかめる。そうされた時は、さすがに悪いかと思ったが、そんなことを言わない限り、神羅はずっとこの話題を引きずりそうな為、訂正をしないでおいた。

「大丈夫ですよ、そんなに気落ちしないで下さい。誰でも気づきませんよ」
「・・・・気落ちなんかしてねぇ！」
訂正はしないものの、さすがに申し訳ない気持ちになって、一応フォローしたのだが、神羅がムキになる為、これ以上言うのはめんどくさくなりそうだから、話題を変えることにした。
「それに、もう直ぐで着きますから」
「・・・は？上に上ってないだろ？真っ直ぐ歩いてるだけなのに、上にたどり着くなんて、嘘に決まってるぜ」
「言いましたよね？俺、嘘だけはつきませんから。もう直ぐですよ」
これは本当のことだ。神羅と話をしながら、優羅に道を教えてもらい、歩いて来たのだが、もう直ぐで目的地に着くらしい。
「お前、よくそんなことをニコニコ顔で言えるな？さっき、普通に嘘をついただろ？」
神羅にそう指摘されて、そう言えば、さっき嘘はつかないと言って、直ぐに嘘をついたことを思い出し、苦笑いをする。しかし、あれは、嘘と言うよりも、いい間違えみたいなものなのだが・・・別にいいか。
「ま、まぁ、それは置いておきましょう。今度は嘘じゃないですよ、修羅様にバラされたら大変ですからね」
俺は、慌てて笑顔を作ったが、神羅は疑り深そうな表情を浮かべて

いる。まぁ、もともと人をそこまで信用しない奴だが、他人には、本当に厳しいんだな、こいつ。

優羅の指示通り、それから直ぐに、開けた場所に出ることが出来たのだが、優羅の姿が見当たらない。

「おいっ、どうなってるんだ？お前はここで待ってるんじゃないのか？」

俺が小声でそう聞くと、しばらく声が聞こえて来なかったのだが、やがて、「あっ・・・・」と言う声が聞こえて、優羅が話しだした。

「すみません、道を一本間違っていたようです。どうも、道が入り組んでいる為、見間違えたようです」

そう言われた途端、思わずため息をついて、体から力が抜ける。あんなにはっきりとここだと言ってしまったのに、違うとバレたら、完璧に、神羅からの信頼を失うことになる。

「なんなんだ、ここ。やっと出られたぜ。で、ここがてっぺんなのか？何もない場所だが・・・・？」

そう神羅が言っているのを、俺はどうしようかと戸惑いながら聞いていた。それが皮肉なのか、それとも素なのかわからないが、とりあえず、適当に誤魔化してみる。

「・・・あれ？ここに、修羅様がいるはずなんですけどね・・・・もしかして、道を間違ってしまったかな？」

俺の言葉に、神羅は目を見開いて抗議を始めた。当たり前だな。絶

対この先で合っていると言い張っていたし、確か、方向感覚も抜群とか適当なことを言っていたような気がする。

「はぁ！？お前、方向感覚抜群じゃなかったか！！？」

「あっ、えっと・・・・その地図を貸して下さい」

俺は、下手に偉そうにするのをやめて、今度は下手に出た。ここでも偉そうにしたら、完璧に、神羅からの信用を失う。そうなると、色々厄介な為、仕方がないのだ。

案外気づかないのが人間です

「ああっ、そうか・・・・・・！」
「何がわかったんだ？」
「俺、道を一本間違えていたようです。どうりでおかしいと思った。なるほど・・・・」

俺は、そうブツブツ呟くと、地図を見て、道を確認しているフリをして、優羅に話しかける。

「今度は間違えるなよ。次に間違えたら、神羅から信用を失って、お前のところに連れて行く前に、神羅が単独行動を始めるぞ」

「そうやって脅さないで下さいよ。はっきり言うと、彼は、貴方よりは心の広い方じゃないんですか？」

「あいつは、自分が認めた相手じゃないと、言うことを聞かない」

「それじゃあ、ちゃんと言うことを聞く貴方は、彼に認められてるってことじゃないですか？」

「なんで、今、そんなことを言うんだ？」
「彼、貴方の髪を無くしてしまったんですよ」
「髪・・・？ああ、あの時に取ってたからな、あの、鬘の髪だろ？」

「ええ、それでも、彼はそのことを知らないから、その髪をなくしたことを物凄く悔いていましたし、泣いていました」

「・・・・」

優羅の言葉が自分の心に刺さり、抜けなくなる。俺は、神羅に優しくした覚えもないし、むしろ、酷いことを沢山して来た。それなのに、俺の死を悲しんでくれたのだ。

護衛だからと言うこともあるとは思うが、嬉しい事に変わりはなかった。

「貴方の護衛だからと言うことも少なからずあると思いますが、それは、自分が責められるとか言うことではなく、自分が護衛としてつけられているのに、貴方を守り切れなかった悔しさだと思います。でも、それ以外は、純粋に、貴方の死を悲しんでいるんでしょうね。彼は、頭脳種族の族長として護っていたんじゃなく、一人の仲間として、貴方を護っていたんじゃないでしょうか？」

「・・・・」

優羅の言葉に、俺は何も話せなくなる。色んな思いがあって、でも、そのうちの、どの感情が自分の正しい感情かわからなくて、何も言えなかったのだ。

ゆっくりと、後ろにいる神羅の方を振り返ってみると、俺の心境とは裏腹に、とても呑気そうにボーッと辺りを眺めていた。

それを見た途端、突き刺さっていた何かがスルリと抜けて、やっと苦しくなくなる。後で、ちゃんとお礼を言えばいい。今は、神羅を優羅のところに連れて行くのが最優先されることだからな。

「では、出発しますか？」

俺がそう話しかけると、神羅は、ハッと我に返ったような表情をすると、大きくうなずいた。

「ああ、出発しようぜっ！」

その表情を見て、俺は、自然と笑みが浮かんだ。なんでだかわからないが、笑みが浮かんだのだ。

「今度は間違うことはないよな？」

「・・・それは、愛嬌にお任せすると言うことに出来ませんかね？」

「そんなので許される訳ないけどなっ！」

そう笑顔で返されて、物凄くほっとする自分がいた。もしかしたら、俺は、こいつを少しだけ勘違いしていたのかもしれない。

「でも・・・怒らないで下さいよ？」

「怒りゃしねぇよ。機嫌を損ねない限りな！」

「それ、物凄く個人的なものさしじゃないですか・・・・」

俺がボソッとつぶやくと、神羅は得意そうな顔をする。

「まぁ・・・それは、人間関係は難しいんだよって言うことだ。人生、色々と大変だからな」

「その様子だと、貴方、よっぽど大変な人生を送って来たようですね？同情します」

「・・・お前、皮肉屋って言われないか？」

俺は、皮肉で言ったつもりではなく、ただ、普通に言ったつもりだが、神羅には皮肉に聞こえたらしい。今思い返すと、「同情する」の部分が皮肉に思わせているのかと思った。

「いえいえ、そんなことを言われたことはありませんよ。天使だとは言われたことありますけど」

俺が、今度こそ、本当の皮肉を言うと、神羅はイラッとした表情をして拳を握り締めたが、なんとか息を吐いて、自分を落ち着かせている。

「そうかそうか。そんなことはどうでもいいぜ。さっさと行こう！」
「そうは言っても、貴方が問うて来たことなので・・・・」
「お前、皮肉屋って言われたことあるだろ？」

俺は、またもや同じ質問に、思わずため息が出そうになったが、再び笑顔で皮肉を返してやった。

「それ、二度目ですけど、俺、皮肉屋なんて言われたことはありませんよ？」

「いや、それは絶対に嘘だ。お前が修羅の側近だからって言わないだけで、お前はかなりの皮肉屋だぞ。自分でも気づいてるだろ？皮肉を言ってるって」

「えっ、俺・・・・皮肉屋だなんて、一回たりとも思ったことありませんけど・・・・？俺、そこまで皮肉屋ですか？」

俺がそう言うと、神羅は後ろを向き、ボソボソッと何かを呟くと、直ぐに俺の方に向き直り、ため息をついて、俺の背中を押す。

その時、自分の正体がバレないかとビクビクしたが、どうやらバレていないようで、大きく息を吐いた。

「方向、こっちじゃないんですけど・・・・」

「それを早く言えっての！」

「でも、俺は、貴方に背中を押されたので・・・・」

「俺のせいにすんなっての！とか、先進めねぇじゃねぇか！早く案内しろよ！」

そろそろ本気で怒り出しそうな為、俺は、素直に道案内に徹することにした。

「全く・・・無粋な方ですね。俺は元々、貴方が修羅様の元にたどり着くまでの道案内をするはずなのに・・・ここまで時間がかかるとは思って無かったですよ」

「そんなの、お前のせいだろ！」

神羅が怒る為、俺は、一瞬だけ顔をしかめると、大きく息を吐き、神羅から地図を強引に奪うと、優羅に文句を只管言った。優羅の間違いなのに、どうして俺が怒られなくちゃいけないんだ。後で、散々文句を言ってやると誓うと、優羅に文句を言うのをやめて、歩き出した。

どんな嘘をついても、結局はいい人

「さて、もういい加減着くよな？」
「・・・・」
「おい、大丈夫か？」

俺は、神羅の言葉を無視し、真剣に優羅の指示を聞いていた。

「この先を真っ直ぐに行き、右に曲がったところで合っているはずです」
「・・・・今度は間違えていないだろうな？これで間違えていたら・・・・」
「私のことを信用して下さい」
「・・・・・」

ため息をつきながら、優羅の指示通りに歩いて行くが、神羅がしつこく話しかけて来る。

「これだから信用で・・・・」

俺が無視をし続けると、神羅は諦めたようにボソッと言ったが、俺は、その言葉を遮るように言葉を発した。

「着きましたよ、ここです！」
「本当にそうなのか？」

そう神羅に聞かれて、普通は躊躇わずにうなずくはずなのだが、俺は躊躇ってしまった。なぜなら、優羅の言うとおりの場所に来たのに、優羅の姿が見えない。だから、躊躇ったのだ。しかし、ここで

うなずかない訳にもいかないと思って、無理矢理うなずいたのだ。

「ええ、そうですよ」

「修羅らしき人物はいないじゃないか」

そう神羅が言った途端、突然上から何者かが降って来て、俺は、一歩後ろに下がったが、俺と同じ黒いマントを羽織っている為、優羅だとわかった。

優羅は立ち上がると、俺を無視して、真っ直ぐ神羅の方へ歩いて行き、神羅と握手をした。

「牢獄に閉じ込められた者。大切な物。全てを拾って来たか？」

「・・・なんでそんなことを聞くんだ？」

「ここを完全に消し去る」

その言葉を聞いた時、俺は思わず目を見開いた。そんなことは聞いていない。今初めて聞かされたのだ。目の前にいる優羅に今すぐ話を聞きたくなったが、神羅が話しを進める為、黙ってその話を聞いていることにした。

「なっ・・・それじゃあ、残った奴らはどうなるんだよ？」

「それは、消えるんじゃないか？俺には知った事じゃない」

「・・・・」

俺は一瞬、目の前にいて話しているのは優羅じゃないんじゃないかと思った。確かに、あいつは性格が悪いところもあるが、あんなことを平気で言えるほど最低な奴じゃない。だから、一瞬そう思ったのだ。

「・・・お前、修羅って名前なんだろ？」
「ああ、それがどうした？」

「それ、本当の名前なのか？」
「本当の名前さ。嘘を言って何になる？」

「そう・・・か。なら、俺が、『大切な物、閉じ込められた者を全て救出した。残ってるのは警備員だけだ』と言ったら・・・？」

「準備完了と見なして、この地獄監獄と言う場所を消し去る」

俺は、口を挟むと言うことはしなかったが、疑問が沢山頭の中で渦巻いている。まず第一に、この地獄監獄を消滅させるとはどう言うことなのか。それから、もし、地獄監獄を消滅させるにせよ、俺達はどうやってここから出るのかと言うことだ。

しかし、それもまた、神羅が俺に変わって聞いてくれた。

「俺達はどうするんだよ？この場から出ることは出来ないんだろ？」

「ここの脱出方法なんて、簡単なものだ。ワープを使えばいい。そうすれば、一瞬で外に出ることが可能だ。準備はいいか？」

そう問われている神羅は、うつむいて黙り込んでしまった。戸惑っているのが手に取るようにわかる。しかし、不意に顔をあげた。

「警備員はどうするんだ？」

「警備員の奴らのことなんざ知らん。お前だって大切な族長を苦しめられたはずだ。だから、死んだって構いはしないだろう？」

俺は、その言葉には黙っていられなくなって、優羅に近付いた。もう黙ってはいられない。いくら演技とは言え、言っていいことと悪いことがあるのだ。しかし、神羅に突然話しかけられて、俺は立ち止まった。

「おい、優羅、俺、ここに来る時に、修羅が族長に似てるって言ったよな？」

「・・・・ええ、そう言えば、そんなことを言っていたような気がします。・・・・それが、今、どうしたんですか？」

「・・・・違うんだよ」

「は？」

俺は、神羅が何を言いたいのか全くわからず、間の抜けた声しか出せなかった。しかし、神羅が怒っていることはわかった。今まで俺が見たことがないほどに。

「こいつは、族長とは全然違う！こんな奴が族長なはずがねぇ！族長は、こんな意地汚ねぇ奴とは違う！！」

予想を覆した反応に、優羅はポカンとした顔をしていたが、慌てて表情を元に戻すと、声を殺して笑い出した。いくら演技をしていると言っても、想定外の反応に、思わず素に戻ってしまったんだろう。

「何が可笑しい！？」

「俺が意地汚いか・・・・。まぁ、なんとでも言え。俺は、人に嫌われるのには慣れている。別に、何を言われたって構わない。ただ、

俺は、地獄監獄に恨みを持つ者同士、仲良くしようと言っているだけだ」

「・・・・復讐とか言うやつか？」

神羅は、ずっと変わらない、睨むような鋭い目で優羅を見るが、優羅はその視線を受け流し、微笑みを浮かべた。

「それと、似ても似つかないもの・・・・だけど、総合的に言うと、そうなのだろうな」

「・・・・確かに、幸明のやり方は気に食わねぇ。何の罪もない奴らを閉じ込めて、逆らっただけで罪を重くする。・・・・それに仕えている警備員もどうかと思うぜ。そのことに納得がいっていない奴でも、従っていれば同じ。

・・・・ただ、俺達と同じ生物だと言うことに変わりはねぇだろ？生きとし生けるもの、その全てがお互いの死を攻め立ててはならない。お互いを殺していいことなんかないんだ。例え、国王でも神様でもいけないんだ。だから、お前は、神達すらやってはいけないことを実行しようとしてるんだ」

神羅が真剣に言っているのだが、優羅はそれを馬鹿にしたような笑みを浮かべると、口を開いた。

「俺に説教か？お前、俺に説教出来るほどいい生き様をして来たのか？」

優羅はそう言って神羅の方に目を向けるが、その視線が俺に向けられているようで、自然と目を逸らす。別に、睨んでいる訳でもない

のだが、自然と、その目を見ることが出来なかったのだ。

「いい生き様とか・・・・そんなので言葉を言う権利は決まるものなのか？まぁ・・・・確かに、俺なんかがこんな言葉を言ったって、単なる綺麗ごとにしか聞こえないかもしれないな。でも、これだけは言っとくぞ」

神羅はそこで一端言葉を切ると、大きく息を吐いた後、しっかりとした目で優羅を見た。

「復讐の鬼にならないことだ。復讐の鬼となって果てるのは、悲しいものだからな」

そう言った神羅の目は、今までの鋭さがなくなり、悲しそうな色をしていた。

「・・・その言い方、まるで、自分が一度経験したとでも言いたげな言葉だが・・・・？」

「それは、あんたに言う必要はない」

「そうか・・・・では、もう時間がない。地獄監獄を消滅させる」

優羅は再びその話題を持ち出すと、腕を振り上げた。

「まっ・・・・・」

「終わりだな」

優羅はそう言って微笑むと、腕を振り下ろした。その途端、神羅の体が宙に浮き、同時に目を明けていられないほどの光りに包まれた。

俺は、とっさにマントで顔を覆ったが、頭がクラクラするし、目がチカチカしている。

しばらくすると、やっと光りが納まった為、何とか当たりを見渡すが、さっきと何も変わっていない。いや、目の前にいたはずの神羅がいなくなっていた。

「おいっ！神羅はどこに行ったんだよ！」

「そんなに慌てないで下さい。彼には、一足先にここから出てもらっただけですので」

「ここを消滅させると言うのは本気なのか？そもそも、神羅をどうやって移動させたんだ？」

「まずは落ち着いて下さい」

「・・・・はぁ」

俺は深いため息をつくと、再び優羅の方を見やった時、異変に気づいた。

「おい、お前・・・・」

「はい？私が何か？」

「体が元の大きさに戻りかけてるぞ！」

「えっ？」

優羅は、慌てて自分の体を見下ろしたが、既に元の体に戻っており、ため息をついていた。

「まさか、こんなにも早く元の姿に戻ってしまうなんて・・・・」

「どうするんだ？」
「・・・・実を言うと、もう、薬はないんですよね」
「と言うことは？」
「貴方の刀を借りるしかないと言うことです」
「それじゃあ、俺はどうするんだよ？」
「・・・・」
優羅はそこで黙り込み、力のない笑みを浮かべた。それを見て、俺はため息をつくと、刀を優羅に渡した。
「助かります、まだ、私にはやらなくちゃいけないことがあるので、よかったです」
「やらなくちゃいけないこと？」
「この牢獄内にいる者全てを、地獄監獄から外へと飛ばすことですよ」
「・・・・やっぱり、そうだよな」
「当たり前じゃないですか。確かに、警備員はムカつきますが、囚人達は助けたい。しかし、警備員を残して囚人を助けると言うことは出来ないので、仕方なく、警備員も連れて行くんですよ」
「そうか。俺はどうすればいいんだ？」
「・・・・とりあえず、貴方も先に行ってて下さい。では！」
「おいっ！」
俺は、まだ聞きたいことがあったのだが、優羅に勝手にワープを使われて、そのまま地獄監獄からどこかへ飛ばされた。

遂に戻れました

「おいっ、てめぇ！何してんだっ！」

俺は、そう怒鳴られて目が覚めた。おまけに大きく揺すられてるせいか、頭までグルグルしている。何とか神羅の手を?んで服から離すと、大きく伸びをした後、欠伸をしてから立ち上がった。まるで、寝起きにコーヒーカップに乗せられたようだ。

「貴方、どうして野蛮な行為しか出来ないのですか?」
「お前は修羅じゃねぇな。お前ら、そっくりでわかりづらいぜ」

「あははは・・・気のせいですよ。ところで、修羅様はどこに行かれたのでしょうか?」

自分で聞いてから、なんて馬鹿な発言をしたんだと思って、ため息をついた。

「そんなの知らん。あんな奴、どうなったっていい」
「まぁ、そう言わないで下さい。とりあえず、探しに行きましょう?」
「・・・ふんっ、あいつなんか・・・・」

神羅はボソボソと言っていて、俺が修羅を探そうと言っても、素直にうなずきそうにないため、少し素に戻って言ってみることにした。

「貴方はどうでもいいことかもしれませんが、俺にとってはどうでもいいことじゃないんです。貴方にとって、修羅様は最低な人間かもしれませんが、俺にとっては、修羅様は命の恩人なんです」

「・・・・」

「貴方だって、命をかけて護らないといけない人がいるでしょう？俺は、それが修羅様なんです。それだけです・・・・」

俺は、少し本気に言い過ぎたと思って、慌てて演技に戻ると、前に歩き出した。

「わかった。俺が悪かった。ちょっと、奴のことを悪く言い過ぎた。すまん」

神羅が謝って来る為、俺は笑顔を浮かべた。それを見て、ほっとする神羅を見て、やっぱり、少し本気で怒り過ぎたなと思った。

しかし、なぜ、あいつのことを貶されて、あそこまで本気で怒るのかと不思議に思った。しかし、とりあえずは歩いて行こうと思い、気にしないことにした。

「そう言っていただけると、こちらとしてもありがたいです。では、修羅様を探しましょう・・・・」

「そうだな」

その時、突然後ろから声が聞こえた。

「いたぞーーーっ！捕まえろ！」

「！？」

「えっ？？」

俺達は、驚いて後ろを向くと、なぜか警備員が追いかけて来た。

「なっ、なんだってんだ!?」

「俺に聞かれてもわかりませんが・・・とりあえず、やるしかないようですね」

とりあえず説明は後にして、警備員を倒すことに専念することにした。そろそろ優羅も来る頃だろうし、そうしたら、優羅が説明をするだろう。

俺は、警備員に突進して行くと、神羅よりも先に戦い始めた。

その途端、突然優羅からの通信が入って、思わず注意がそちらに向き、その隙を突かれて腹を殴られるが、なんとか最小限のダメージに抑えた。

「なんだ?出来れば、今は話しかけてもらいたくはないんだが」

「すみません、でも、とても大事な用なので」

「用件はなんだ?」

「もう直ぐ薬の効果が切れる頃です。後四、五分ぐらいでしょう」

「・・・了解」

元々、刀は優羅のもとにあるのだ。きっと、後四、五分も持たないだろう。せいぜい二、三分だ。

そんなことを思っている時、突然、頭がグルグルと回り始めて、焦点が定まらなくなった。それが何を意味しているのか、自然と悟っ

た。

俺は、目の片隅で優羅がいる方向を捉えると、そちらの方向に手を伸ばして言った。

「修羅様、刀を下さい！」

その一言で、俺の状態がわかったのか、優羅は刀を俺の方に投げると、自分も走り出した。しかし、俺達の事情を知らない神羅は、とても焦って喚いている。

「おっ、おい！俺、どうすりゃいいんだよ！」
「お前も加勢しろ！でないと、色々とまずい状況だ」
「わっ、わかった！」

神羅は、返事はしているものの、その場に立ち止まって考え込んでいる。それに気づいた警備員が神羅の隙を突いて襲おうとしていた為、俺は、何とか走って行くが、間に合うかどうかわからない。なぜか、妙に体調が悪くて、足にも力が入らないのだ。だから、間に合うかどうか・・・。

「避けろ！」

なんとかそう声を上げるけれど、神羅の反応は遅く、俺は、そのまま神羅の前に出て、警備員の攻撃を受けて吹っ飛んだ。

「おいっ！大丈夫か??」

神羅がそう言って走り寄って来るが、それよりも早くに、優羅が走り寄って来てフードを被せ直すと、俺が取り損ねた刀を取りに行こ

うとするが、ギリギリのとこりで呼び止める。

「待て！もう遅いぞ、元に戻ってる！」

「それでも、戦う為に武器は必要ですよね？」

「まあな」

「だから、取りに行きます」

俺は、ゆっくりと立ち上がると、完全に回復した体で、警備員の群れに向かって歩いて行く。

修羅が刀を投げ、今度はそれを上手くキャッチすると、身をかがめて居合いの構えを取ると、突っ込んで来た警備員を一斉に吹き飛ばした。久しぶりに妖力を使ったせいか、少し暴走気味だったが、まぁ、厄介払いは出来たことだし、いいだろう。

ある意味、長い戦いでした。

警備員を吹き飛ばして大きく息を吐くと、神羅達の方を向いた。すると、優羅はフードを取っていた。きっと、正体をばらしているのだろう。

「お前・・・誰だ??」

「私は、優羅と申します。今まで騙していてすみませんでした」

驚愕している神羅を無視して、優羅は優雅にお辞儀をする。それにしても、毎回毎回、あいつのお辞儀の仕方はムカつく。どこかの王国の王子のような仕草をするのだ。それが、どうも鼻につく。

俺が、そんなことを思いながら、ボーッと二人のことを見ていると、突然、優羅が小声で話しかけて来た。

「何をボーッとしてるんですか。あなただって、自分の正体を明かすんですよ?そんなところでボーッとしていないで、近寄って来て下さい」

俺は、その発言にイラッと来たが、渋々二人に近付く。しかし、どうやって切り出すかが問題だ。あいつは、俺のことをわかっているようでわかっていない。だから、普通に言葉をしゃべっただけでは俺だと気づかないだろう。しかし、あえて、わからないように言ってやろうと思う。理由なんて、別にないが、試しと言うのが妥当だと思う。護衛なら、俺の声ぐらい判別しろと言うことだ。

「はぁ?何が起こったんだ?よくわからないが・・・」

「相変わらず鈍感な奴だな。前にも言ったろ?周りをよく確認して、相手をよく見極めろってな」

「!?」

意外にも、神羅は俺の声を聞いただけで反応した。俺の髪の色を見分けられなかった為、てっきり、声だけを聞いても俺だとはわからないと思っていたが、わかったようだ。

俺がフードを取ると、とても驚いたような顔をして、自分が見ている光景が信じられないのか、目を擦っているのが見える。確かに、そうする気持ちもわかる。一回死んだと思った奴が、目の前に現れたんだからな。自分の目が信じられなくもなる。

「俺が勘違いしてたのはバレてたんだな・・・・。さすが族長だぜ」

「当たり前だろ?俺は、護衛のお前なんかよりも、よっぽどお前を観察している」

俺がそう言うと、気の抜けたように神羅が笑った。それを見て、俺も自然と笑みが浮かぶ。

「ああ、そうだな・・・・。でも、まさか、優羅の方が族長だったとはな。てっきり、修羅の方が族長だと思ってたぜ」

「お前は、俺達の罠にまんまとハマったって訳だ」

「チッ、なんか、その言い方がムカつくぜ」

ムカつくと言っているが、表情はとてもムカついている人の表情ではないので、嘘だとわかる。

「話は後にして下さい、まだ、敵は残っているようですよ」

優羅に言われて後ろを振り向くと、さっき吹っ飛ばしたはずの警備員が突進して来ていた。中々しぶとい奴だ。

「おっしゃ、行くぜ！」

「そんなに気合入れなくてもいいんじゃないか？」

「いやいや、さっさとやっちまいたいからよ！」

とても疲れているはずなのに、それを思わせない神羅の元気ぶりには、いつも感嘆させられる。その元気のおかげで、俺は、ほとんど戦わずして警備員を倒す事が出来た。ほぼ、神羅が倒した訳だ。

「さて、族長、ちゃんと説明してくれよ？俺、意味わからなくて頭が死にそうだ」

「死ぬなんて言うなよ、こっちは死にそうなところを脱して来たんだ」

「まぁ、確かにそうだな！」

「貴方たち、本当に仲がいいんですね」

優羅に突然言われて、思わず耳を疑う。仲がいいなんてことはないはずだ。

「まぁ、当たり前・・・・」

「そんなことはない。俺は、まだお前を認めてないからな」

神羅が何を血迷ったか、変なことを言い始めた為、俺は、それを遮るように言葉を発した。しかし、少し言い過ぎたかもなとも思ったが、とりあえず、そのまま神羅の様子を伺う。

「・・・・」

神羅は、無言で俺の方をじっと見て来る。その視線を感じて、俺は後ろを向いた。そんな目で見られると、何だか、物凄い罪悪感を感じるんだ。

「まっ、まぁ・・・・今だけは認めてやるっ！」

「・・・・だけは??」

最後の最後には、そう吐き捨てるように言ったのだが、神羅がからかうように聞き返してくる為、もう、これ以上は何を言われても答えなかった。

「で、どう言うことか説明してくれないか??」

「俺は説明したくないっ！」

「族長、何怒ってんだよ?優羅の時と、声もしゃべり方も全然違うじゃんか！」

「・・・・とりあえず、優羅、お前が説明しろ。俺は寝る！」

それだけ言うと、俺はその場に寝転がり、目を瞑った。あれは嘘じゃない。本当に眠いのだ。まぁ、説明が面倒なのもあるが、眠かったからだ。しかし、神羅と優羅は俺の言葉を信じていないようだ。俺がもう眠ったと思ったのか、ボソボソと小声で話している。

「護衛なんだから、ちゃんと護れよ、俺のこと」

「あっ、ああ！」

俺が起きていることにうろたえているのは、声を聞くだけでわかっ

た。優羅も慌てたらしく、俺は、神羅に言ったはずなのだが、優羅のうなずきも聞こえた。

それからしばらくの間は起きていたが、さっきのように陰口を言う様子もなかったので、俺は、本当に眠ることにした。

仲がいいと言うことは、中々気づきにくいもの

全てを話し終わった時には、もう、一日が経っていた。どうりで疲れたと思っていたが、一日中しゃべっていたらしい。しかも、話を聞いている神羅も、ちゃんと眠らずに俺の言葉に耳を傾けて来るところが凄いと思った。

「なぁ・・・今思ったんだけどよ、地獄監獄から出て来た部分からは、もう、説明しなくてよかったんじゃないか？」

神羅の最もな言葉に、俺は思わず黙り込む。確かに、あの部分は言わなくてもよかっただろう。神羅がいない時の行動を話すのだから。しかし、ここで肯定すると、負けてしまうような気がして、何とか理由をつけることにした。

「まぁ、そっ、その・・・あれだ。一応、補足として言っておいたんだ」

「まぁ、あの時、族長が何を思ってるのかと言うのがわかったからいいんだけどな」

「・・・そっ、そう言うことだ」

「やっと終わりましたか・・・」

突然、優羅の声が直ぐ近くで聞こえた為、俺は心臓が跳ね上がるほど驚いたが、直ぐに平常心を取り戻し、直ぐ近くに来ていた優羅を睨みつける。

「そんなに睨み付けないで下さいよ、神羅さんは近くにいてもいいけど、私は嫌だと言うんですか？」

優羅の言い方が嫌で、立ち上がって全力で否定する。別に、変な意味はないのだ。ただ、気づかないうちに直ぐ近くにいたから、驚いただけなのだ。

「・・・そんな言い方するなっ！なんか、気持ち悪いっ！」

俺の言葉に気持ちを害されたようで、神羅も立ち上がって反論する。

「なっ・・・その言い方はないだろっ！」

「まぁまぁ、落ち着いて下さい。この辺りに家がないからいいですけど、もしここが住宅街でしたら、近所迷惑で、通報されますよ？」

「・・・まっ、まぁ・・・『気持ち悪い』って言うのは、確かにまずいと思った。一応謝る。ただ、元々はと言えば、お前が変な言い方をするのがいけないんだろ？」

「別に、私は変な意味で言ったんじゃありませんよ。勝手に勘違いしたのは貴方ですよ？」

「俺のせいにするな！お前がいけないんだ！」

「貴方と行動を共にしていていつも思っていたのですが、貴方は人のせいにすることが多過ぎです！もう少し、人のことも考えたらどうですか？」

優羅も立ち上がり、珍しく声を荒げて反論する。

「まぁまぁ、お二人さん、喧嘩はそこまでにしましょうや」

神羅が俺達の間に割り込み、諭すような口調で言う。その表情が、まるで暴れている子供を宥めるような表情で、それすらもイラッとして、言葉を発しようとするが、神羅に腕を突き出されて止められる。

「そう言えば優羅、お前、俺と族長の仲がいいなってしみじみ言ってたけどな、俺から見るに、十分お前も族長と仲がいいと思うぜ？」

予期せぬ言葉だったのか、優羅は今までのまくしたてるような勢いをなくし、ポカンとした顔で神羅を見ている。

「まぁ、そう言うことで、仲良く行こうぜ」
「行くって、どこか目的地でもあるのか？」

「ああ、急いで行かないとな。ただでさえ遅れてるって言うんだ」

「・・・・は？」
「とりあえず、行こうぜ！」

一人だけ状況のわかっている神羅に、俺と優羅はされるがままになっていた。一体、どこに連れて行かれると言うのやら。

やっと目的地へ

「ここだぜ」

そう言って神羅は立ち止まった。目の前に広がっているのはとても大きな森で、一見、どこにでもありそうな普通の森だった。ここで何が起こるのか、全く検討がつかない。

「一体・・なんなんですか?この森は・・普段は・・立ち入り禁止に・・なってるん・・ですよ?よっぽどの・・用なんでしょうね?」

神羅に引きずられ、息の上がっている優羅はとても苦しそうだ。それを見て、ざまあ見ろと思う俺は、酷い奴なのだろうか?

「ああ、よっぽどの用だ。なんせ、ここに重要人物達がいるんだからよ」

そう言われた時、ふと、凛達のことを思い出した。今まではそれどころじゃなくて二人のことを忘れていたが、あの二人はどこに行ったのだろうか?

「そう言えば、凛達はどうなったんだ?」

「ああ、この森の中にいるぜ」

「・・・なんでわかるんだ?」

「まぁ・・勘・・・だな?そんでもって、幸明も一緒にいるんじゃないか?」

幸明と言う名前を聞いた途端、俺と優羅は顔を見合わせた。なんで、

神羅は、こんなにも幸明と言う奴の名前を平然と言ったのか。それがまさに不思議だった。

「お前、よくあいつの名前を平然と言えたな。あいつは、俺達の殺し合いを楽しんでた奴なんだぞ？」

「・・・奴は最低です。そんなに軽々しく名前を呼んでいいものじゃない」

俺達の反応に、神羅は少し気まずそうな顔をした後、俺に向かって手を差し出して来た。

「・・・なんだよ？」

「ちょっと、携帯電話を貸してくれないか？」

「別にいいが、持って来てたらの話だな」

そうは言ったものの、持って来たと言う確率は、ほぼゼロに近い。普段外出する時は、一応ケータイは持ち歩くようにしているのだが、今回のは、外出は外出だが、ほぼ拉致と言っていいほどの勢いだった為、もちろん、持ち物の確認をしている時間もなく、ケータイを持って来たかどうかもわからないのだ。

多分持ってきていないだろうなと思いながらも、一応ケータイを探す。すると、意外なことに、ポケットにケータイが入っていた。

「ほら」

神羅にケータイを渡すと、耳をすます。誰に電話をかけるのかとても気になるところだが、それを聞くのも気が引ける為、盗み聞きをしようと言うのだ。

「はっきり言うと、そちらの方が、気が引けたりはしないのでしょうか？」

すぐ隣にいる優羅がボソッとつぶやく為、最初は独り言だろうと思っていたのだが、どうも、視線が俺の方に向けられていることがわかる。また、心を読まれたらしい。

俺も、無言で優羅のことをにらみ返してやると、ため息をついて目を逸らした。どうしてあいつは、妖怪でもないのに俺の心が読めるのか。今まで凛とかに心を読まれていたのは、妖怪の能力かと思っていたが、こいつは神だ。能力は関係ない。と言うことは、俺がよほど心を読まれやすい奴なのか・・・・いや、そんなはずはないのだが・・・・。

「そんなに余計なことを考えてていいんですか？神羅さんの電話を盗み聞きするんじゃなかったんですか？」

「お前は・・・・」

俺は、後ろを向いてケータイをいじっている神羅に聞こえたんじゃないかと思って、一瞬背中に冷たい何かが走ったが、聞こえていなかったようで、神羅は普通にケータイで話し始めた。

「よぉ、元気にやってるか？」

〔あっ、もしかして・・・・神羅さんですか！？〕

「ああ、そうだぜ。族長のケータイを貸してもらって電話してるんだ」

〔と言うことは・・・・修さんを助け出すことが出来たんですねっ

！〕

「まあな。変わるか？」

〔あっ、それなら、是非！〕

急いでたんじゃないのか？と言う疑問を飲み込みながら、ケータイを差し出された為、とりあえずは受け取る。森に入れば直接会えるんじゃないのか？と言う疑問は、この時は思い浮かばなかった。

「もしもし」

〔あっ、修さんですか！よかったです、無事だったんですね・・・・〕

「まあな。色々あったが、無事に外に出てこられた。ところでお前、今どこにいるんだ？凛は一緒か？」

〔いえ、凛君は、今は一緒にいませんが、僕達のいる場所と同じ場所にいますよ〕

「・・・達ってことは、お前一人じゃないのか？」

俺がそう問うと、桜木は少し躊躇ったようにしばらく無言が続いたが、やがて意を決したのか、しゃべり出した。

〔僕の直ぐ傍にいるのは、幸明と、女の子です〕

「・・・そうか。今俺達は、お前がいる森の前にいるから、入り口まで来てくれないか？」

〔えっと・・・・一応、入り口にはいるんですけどね、外に出られなくて・・・・・〕

「・・・・どう言うことだ？」

〔多分、入る分には問題ないんですけどね、出ることが出来なくて・・・。バリアか何かに遮られてるんです〕

その言葉を聞いて、自然と二人の方を向く。二人は、俺が何を考えているのかわかったのかわからないのか、とにかくうなずいた。

「まぁ、とりあえず、俺達も中に行くから・・・」

俺がそう言いかけた時、桜木が突然言葉を遮った。

〔待って下さいっ！修さん達は、中に入らないで下さい！〕

「・・・なんでだ？」

〔えっと・・・説明をすると色々と長くなるんで、後で説明します。でも、訳だけを言っておきますと、この森に、もうじき警察などがやって来ます。その人達は、この森の中にいる人を殺そうとしていて、僕らは、それを阻止しようと外に出ようとしたのですが、バリアに阻まれて出ることが出来なかったんです。だから、修さん達は外に残って、警察達を止めて欲しいんです〕

「なるほどな・・・その、殺そうとする訳って言うのは、悪いことじゃないだろうな？」

〔・・・えっ？〕

「例えば、脱獄したからとか、そう言うのだ」

〔いえ、全然違います。神達の勝手な都合です。だから、安心して下さい〕

安心の意味がよくわからないけれど、とりあえず、桜木達は、何も

悪くない奴を殺そうとしている警察を止めようと森から出ようとしたが、なぜか、バリアに阻まれて、出られなくなったと言うことだろう。

しかし、桜木達がどうしてあの森に入ったのかがわからなければ、俺達も無闇に森に入ることは出来ない。多分、入ったら出られなくなるだろうから、まずは、その対策方法と、何をしようとしていたのかと言うことを聞いてからでないと、森に入るのは危険過ぎる。

「ところで、お前達は、何が目的でこの森に入ったんだ？一見、なんの変哲もないただの森だが・・・・」

〔あっ、えっとですね、それは・・・・〕

「待て！詳しい説明はいいから、とりあえず、何を目的でその森に入ったのかだけを教えてくれ」

桜木が丁寧に話をしようとする為、それを遮って言った。警察が来ると言うことは、色々面倒なことになりそうだから、出来るだけ早く三人で話し合わないといけない。その為には、長電話はダメだ。

〔はっ、はい・・・・。実は、この森の霧・・・・って、今は霧がないんですけど、少し前までは、幻を見せる霧があったんです。そして、その霧と言うのが、魔界で種族争いを起こしている原因の霧なんです。幸明は、ここの霧を魔界にまいてたんですよ。だから、種族争いのもとになる霧を消滅させてしまえば、幸明もどうにも出来ないんじゃないかと思って、凛君とこの森に来たんです〕

「わかった。とりあえず、しばらくしたら掛けなおすかもしれない」

〔あっ、了解です〕

俺は、それだけ言うと通話を切り、電話で話していたことを二人に話して聞かせた。

何事にも真剣に取り組んでいれば、何かと役に立つ時がある

「わかった。とりあえず、しばらくしたら掛けなおすかもしれない」
〔あっ、了解です〕

俺は、それだけ言うと通話を切り、電話で話していたことを二人に話して聞かせた。

「なるほどな・・・・。じゃあ、問題点は二つってことか。まずは、どうやって警察から俺達の身を護るか。それから、森から出る方法だな」

「どちらも可能そうで不可能のような・・・・そもそも、この森って、有毒性の霧がある危険な森なのでしょう?今は、その霧はないようですが、なぜ、こんなところに・・・・」

「まぁ、種族争いをやめさせる為に必要なことだったんだ。・・・・で、お前、どうにか出来ないか?」

「は?・・・私ですか??」
「ああ、そんな無理難題を解決出来そうなのは、お前ぐらいしかいないだろ?」
「そんな無茶なことを言わないで下さい・・・・」

そう口では言っているものの、真剣な表情で考え込んでいる。きっと、何か策があるかもしれないと考えてくれているのだろう。

「最悪は、森からでる方法だけ考えてくれればいいからな。警察は、俺達がどうにかする」

「なっ!?どうにかするって・・・どうやって?」
「とりあえず、戦って止めるしかないよな」
「・・・だよな」

そう言葉では言うけれど、ため息が出るのは事実だ。ここ最近、全然休んでいないから、少しは休みたいと思うんだ。まぁ、種族争いのことに関わった時から休みはないと思っていたが、流石に、思うのと実践とは疲れ方が違う。一回眠ったとは言え、まだまだ休養が必要なほど体が弱っていた。それは、俺と同じく戦い続けて来た神羅も同じだと思う。

「一応、方法は、なくもないです。ただ・・・」
「・・・なんだ?」

「持ち合わせの薬品では、その効果がある薬品を作り出せないことがわかりまして・・・ははは」

そう言って苦笑いをする優羅に、俺は、今度ばかりは真剣にため息をついた。俺は、よくため息をする性質なのだが、今度ばかりは本気で漏れたため息だ。

「それは、どちらの方だ?」

「・・・私が考えた方法と言うのは、森の入り口を塞いでしまえばいいと言うことです」

「なっ・・・それじゃ・・・」

「話は最後まで聞いて下さい。森の入り口を塞ぐと言っても、もと

もとこの森は、入ることは可能ですが、出ることは出来ない仕組みになっています。なら、それを逆転してしまえばいいと言うことです」

「なるほどな、入ることは不可能だが、出ることは可能と言う風にしようと言うことか」

「随分と便利なことが出来るんだな、お前って。魔法使いか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。ただ、薬品のことを知り尽くし、その性能を最大限に活用すれば、そう言うことも不可能ではないんです。それに、私は、結構有能な研究員ですので、一般の研究員にはこんな芸当は出来ませんよ」

本人は普通に言ったつもりなんだろうが、俺は、その態度が物凄くムカついた。しかし、確かに、魔法使い並に便利なのは事実なので、下手に逆なでしないようにした。直ぐに機嫌を損ねそうだからな。

「そう言うことなので、一回、研究所に帰って薬品を持って来なくちゃいけないことになりました」

優羅はそこでうつむいた。俺は、優羅がうつむく理由がわからないが、嫌な予感だけはした。きっと、こいつのことだから、とんでもないことを言うに違いない。そう思ったのだ。

「しかし、ここから研究所までの距離はかなり遠いので、私が全力で行っても一日以上はかかりますから・・・・」

そこで、優羅は言葉を切ると、少しだけ顔を持ち上げて、上目遣いでこちらをジッと見て来た。その目が、何も言わなくても、全てを

教えてくれた。

「・・・・ワープを使えばいいんじゃないか？」

「私だって、真っ先にそう考えましたが、一番最初に言いましたよね？私は魔法使いじゃないって。なので、薬品の力を使わないと、ワープも出来ないんですよ。長旅になると思ったのでかなりの量の薬品をストックしておいたのですが、ワープは、色んな種類の薬品を多くの量使うので直ぐになくなってしまいました」

「・・・・」

俺は、無言で優羅の方を見ると、再びため息をついた。確かに、優羅は魔法のようになんでもこなして来たが、あれは全て、調合した薬品の効果。今思えば、あの魔法のような効果に何度も助けられた。と言うことは、かなりの量の薬品を使ったと言う訳だ。これは仕方がないことか・・・・。

「そうですよ、貴方が色々ヘマをしそうだったので、そのカモフラージュをね？大変でしたよ」

「・・・・ああ、俺が悪かったよ。俺が悪かったから、どうか静かにしてくれ」

ため息まじりに俺が言うと、優羅もため息をついて、あの便利な機械をいじくりだした。俺は、大きく息を吐いた後、思考を巡らせる。

しょうがない、まずは、誰が薬品を取りに行くかと言うことを決めよう。ワープが仕えない優羅は、今は一番足が遅いことになる。この中で一番足が速いのは神羅だが、ここから距離が遠いと言うこと

は、それなりに体力も消費するはずだ。今の神羅に、全速力で研究所まで走っていける体力などあるのだろうか？

俺が、それとなしに神羅の方を向くと、神羅は何が言いたいのかわかったのか、「よしっ！」と一言言った。

「俺に任せろ！全速力で研究所まで行って、帰って来るぜ！」

「・・・しかし、体力は大丈夫なのか？俺だって相当疲れてる。お前は、俺以上に疲れてるんじゃないか？」

「まぁ・・・確かに、疲れてることは疲れてるぜ？でもな、やらなきゃいけない時には、自然と力が湧いて来るもんよ。まぁ、極限状態に限るけどな」

後々の言葉が、キリッとしたいい雰囲気を粉砕したが、それもまた神羅らしいだろうと思い、ここは素直に神羅に任せることにした。

「神羅さんが行ってくれるんですね、事情は私が話しておきましたので、神羅さんは、研究所に行けば薬品を渡されるので、それを受け取って来てくれれば大丈夫です」

「そうか・・・じゃあ、早速行って来るかな！」

「悪いな、なんか、助けてもらって早々、大変なことをさせて・・・」

「大丈夫ですって、族長。そんな顔しないで下さいよ。俺はいつだって全力で取り組んでるんで、体力だけは普通の奴の二倍はあるんですから、まだまだ大丈夫ですよ。じゃ！」

神羅は勢いよく言うと、目にも止まらない様な速さで走って行った。

人間、どこで再会するかわからない

「それでは・・・どうしましょうか?神羅さんが薬品を取りに行っている間、我々は・・・・」

「とりあえず・・・森の中に入るか?」

「そうですね。中に入らないと、わからないことも色々とあると思いますし・・・・」

そう言って、優羅はさっさと森の中に入ってしまった。普通、入ったら出て来られないと言うことを事前に聞かされている場合は、ここまですんなり中に入れるものだろうか?普通なら、入れないかもしれない。入れたとしても、躊躇いは見せるはずだ。しかし、優羅には、躊躇いと言う仕草が一つもなかった。それは、自分の力を信じているのか。それとも、ただ、何も考えていないのか・・・・。きっと、後者の方だろうとは思いながらも、優羅が先にスタスタと入ってくれたことで、少しは気が楽になって、自分も躊躇わずに中に入ることが出来た。しかし、これが吉と出るか凶と出るか・・・・。

森の中に入ると、その森の異様な空気に、思わず体がビクッと震えた。それは優羅も同じようで、大きくため息をついていた。

「しかし、有毒性の霧がないにも関わらず、この気味の悪い空気はなんなんでしょうね?背中がゾクゾクします」

「ああ、そうだな・・・・。俺も、入った瞬間に感じた。ここは、なんだか異様な空気が立ち込めてるぞ」

「これは、妖気・・・・いや、もっと恐ろしい何か・・・・ですね。我々の気とは違う何かで、今まで感じたことがありません」

「・・・・そう言えば、桜木達はどうしたんだ?」

森に入った途端に感じた異様な空気で、桜木達のことを忘れていたが、確か、桜木達は、森の入り口近くに来ているはずだったのだ。普通なら、桜木達と会うはずなのだが、辺りを見渡しても、それらしき姿が見当たらない。

「とりあえず、森の奥に行ってみますか?この異様な気も、森の奥から発せられているようなので」

「そうだな。この気を発している奴が、何かを知ってるかもしれない」

そう思い、森の奥へと進もうとした時だった。突如、近くの草がガサガサと揺れて、思わず声が漏れそうになるが、なんとか飲み込んだ。

空気が張り詰めて、背筋に冷たい汗が流れる。何が来るのかと思って身構えていたのだが、出て来たのは、紅い髪をした女だった。

そいつからは、この異様な気を感じられなかった為、安全な奴だと把握出来た。しかし、優羅の表情は固かった。

「おい、どうしたんだ?あの女は味方だぞ?」

「それはわかっています。ただ、ちょっと・・・・」

そう言って優羅は顔を伏せた。俺は、何が起こったのかわからない

まま、とりあえず、その女に話しかける。

「おい、お前が、桜木の言ってた女か？」

「あっ、明日夏さんを知ってるんですね！よかった・・・・。私一人だけになってしまったんじゃないかと思ってたんですが、よかったです！」

女は嬉しそうに微笑むと、駆け寄って来た。そして、俺の隣にいる優羅を見て、かなり驚いた顔をした。

「あっ・・・・優羅叔父さん」

その女の呟きに、優羅は顔をあげた。しばらく無言が続いたが、二つだけわかることがある。それは、この場が物凄く固い雰囲気だと言うことと、二人は顔見知りだと言うことだ。

ある意味一番恐ろしい相手

「・・・知り合いなのか?」
「ええ、まぁ・・・なんと言いましょうか・・・そのまんまの意味ですよ」
「そのまんまの意味って言うと・・・お前は、この女の叔父ってことか?」

「そう言うことです」
「でも、なんで、そんなに気まずそうな顔してんだよ?」
「それは・・・」

その時、今までずっと黙っていた女が口を開いた。

「優羅叔父さん、そんな顔しないで?これは、叔父さんのせいじゃない。私は、叔父さんが、無事に私の前に現れてくれたことだけで嬉しいの」

「・・・」
「だから、そんな顔しないで?」

二人の間で何が起こったのか、俺は全くわからないのだが、単純なことではないのだろうなと言うことだけはわかった。しかし、今は、その話は後にしてもらいたい。

「話に割り込んで悪いが、今は、奥にいる得体の知らない奴を倒すことを優先するべきじゃないのか?その後だったら、俺は、もうこの話には割り込まないさ」

「・・・そうですね。すみません、勝手に話込んでしまいまして・・・」

「謝るな。何も事情を知らない俺が勝手に割り込んだんだ。むしろ、俺が謝るべきだろう」

「いえ、気にしないで下さい」

何だか、今までと、優羅の態度が少し違っている為、違和感を感じる。いつもは、もっと砕けた感じでイラつかせられることもしばしばあるのだが、今の態度は、目上の人に対して会話するように緊張している感じだ。

「ところで、お前は桜木達といたんだろ?あいつらに何があったのかわかるか?」

俺がそう聞くと、今まで笑顔だった女の顔が、見る見る真っ白になって行くのがわかる。この女の目の前で何が起こったのかわからないが、ショックを受けるようなことだったのだろう。

「・・・話せば長くなるんですけど・・・・」

「短く頼む」

「あっ、すみません。えっと・・・・私をかくまってくれていた方の愛人・・・・もう、死んでしまってるのですが、その人に、どこか連れて行かれてしまったんです」

「お前は、その間どうしてたんだ?一緒にいたんだろ?」

「はい・・・・でも、とっさに明日夏さんに隠れてろって言われて、

あの場所に隠れてたんです」

「・・・・」

俺は口を閉ざすと、深く息を吐いた。と言うことは、桜木達は、霊によってどこかに連れて行かれたと言う訳だ。しかも、その連れて行った奴は、今もここにいるはずだ。この、異様な気がそれを物語っている。

今まで、色んな奴を相手に戦ったことがあるが、さすがに、霊と戦ったことはない。だから、どんな対処をすればいいのかもわからない。

「相手が霊となると、戦いで済ませられるほど単純じゃなさそうですね」

「そうなのか？」

「ええ、無闇に戦ってもこちらの攻撃は当たりません。相手は空も飛べますし、力も、我々みたいに物質的なものではなく、どちらかと言えば魔法と似たようなものなので、下手に戦いを挑んでしまえば、我々の負けは確実でしょう」

「・・・じゃあ、どうするんだ？」

「話し合うしかなさそうですね」

「・・・俺の性に合わないな」

「それでも、これも、一種の戦いです。ただ刀を振って相手を痛めつけるだけが、戦いじゃないんですよ。時に、相手の絡まった心を説き解いて、互いに和解しあおうと言う試みも戦いなんです」

「そうだとしても、俺にはむいてなさそうだ。お前にそれは任せる」
「わかりました。それでは、行きましょうか」

そう言って優羅は歩きだすが、なぜか、女は歩き出そうとしない。

「どうしたんだ？」
「いっ、いえ、何も・・・・・」
「・・・・怖いのか？」

俺がそう聞くと、女はおずおずと首を縦に振った。確かに、目の前で知り合いが襲われるのを見た後、その襲った相手のところに行くのは怖いだろう。

俺は、地獄監獄に出るまで着ていた黒いマントを、女に投げ渡した。

「これは・・・・・？」

「それを着ると、敵から姿を隠すことが出来る。だから、まず、襲われることはないと思うが・・・・もし、何かあったら教えろ」

「あっ、はい」

こんなことで安心するかどうかはわからないが、とりあえずは歩き出した。だから、少しは気持ちを楽にすることが出来ただろうと思った。

「貴方も、中々優しいんですね」
「・・・・優しくはない。ただ、歩いてもらわないと困るからな」

「どんな言い訳をしたとしても、彼女の心を楽にしたのは事実です

よ、そんなに謙遜しないで下さい。彼女のことは、貴方が護って下さいね」

「まぁ、まず、警官が入って来なければ、ここにいるのはその霊だけだから、敵はいないと思うけどな、一応そのつもりではいる。だから、お前は安心して説得をしろ」

「はい」

「ああ、そうだ。小型の通信機をくれないか？あのマントに通信機はついていても、俺がもってないと意味がないからな」

「そうですね、どうぞ」

手渡された通信機を服の襟につけると、大きくため息をついた。

森の最深部へ

「それじゃあ、少し詳しく今までの経緯を話してもらえないか？」

「えっとですね、それじゃあ、私をかくまってくれていた人のことを話しますね。その人の名前は優河さんと言って、異質な私をかくまってくれたんです。命をかけて。でも、異質な私をかくまったせいで上層部の人達ににらまれてしまったんです。だから、警察官が来るんです。ここにいる優河さんを殺し、私を殺す為に」

その、「私を殺す」と言う単語に、今まで無言で前を歩き続けていた優羅が足を止めたが、そのまま、直ぐに歩き出す。

「そして、この森は、霊が降り易い場所らしくて、優河さんの彼女さんが現れたんです。それで・・・・」

「こんなことになったのか。まぁ、その辺りの説明はいい。なんとなく話は読めた。ところで、お前は桜木達と一緒にいたんだろ？凛のことは知ってるか？」

多分、それはないと思っていた。途中まで一緒に行動していたようだが、この森に入って別れたと桜木が言っていたから。しかし、女の返答は、俺の想像とは違った。

「凛ちゃんは、私を現実の世界へと連れて来てくれた大切な子です。その子ともお知り合いだったんですか？」

「・・・・あいつ、男だぞ？」

「えっ！？」

「それに、桜木も男だ」

「それじゃあ・・・私、結構酷い事をしてしまったんですね、女の子と勘違いするなんて・・・・」

「でもまぁ、あいつらの容姿じゃ、仕方ないと言ったら、仕方ないんだろうな。声だって男とは思えない。普通は勘違いするだろう」

「もっ、申し訳ないです・・・・。でも、その子は、私を明日夏さんに託して、森の奥に留まっていました。でも、今はどうか・・・・。あの人に襲われて、明日夏さん達みたいにどこかに連れて行かれたかも・・・・」

「なるほど、行かないとわからない訳か」

「はい。あっ、ところでまだ、あなたのお名前を聞いていなかったんですけど、もしよろしければ、教えていただけませんか？私は、朱音と言います」

「ああ、俺は、亜修羅だ。凛達どうよう、妖怪だ。お前は・・・・」

そう考えた時、ふと、こいつの何かがおかしいことがわかった。なぜか、妖気と神の気の両方を感じる。最初は、神である優羅と、妖怪である俺がいる為、空気が混ざっているのかと思っていたが、地獄監獄にいる時には、この気を感じなかった。と言うことは、やはり、この女が・・・・。

「その様子だと、私の正体がわかったみたいですね。・・・・はい、私は、神と妖怪の間に出来た子供です」

「・・・・」

もしかしたらとは思っていたが、まさか、本当にそれが事実だとすると、とても驚かざるおえない。

神は、俺達妖怪を娯楽の為の道具としか思っていない。それなのに、こんなこどが起こるなんて・・・・。

「だから神達は、私を殺そうとしてるんです。私のお母さんは既に殺されてしまっていて、お父さんは、地獄監獄に閉じ込められています。神達にとっては、妖怪の血がある私は下劣な存在だから、上層部の人達は、どうにかして私の存在を消そうとしたんです」

「そうか・・それは・・・・」

俺が言いかけた時、優羅が突然振り返って、一言言った。

「それらしい人物を見つけました。ここは森の一番奥の部分なんでしょうね。一段と異様な気が立ち込めています」

「そうか。それじゃあ、俺達は、木の影にでも隠れてる。何かあったら教えてくれ」

「はい、わかりました」

優羅はそう言うと、森の最深部へ歩いて行った。

優しさは、時に、人のすさんだ心さえ変えることが出来る

「叔父さん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だとは思うが、もしものことがあれば、助けに行く。だから、安心してくれ」

「はい、そう言ってもらえると、安心します」

俺達が話している間、優羅は森の奥へ歩いて行く。すると、突然、目の前に目的の人物らしき人影が現れて、優羅が立ち止まる。

「あなた・・・・誰？」

「私の名前は、優羅と言います」

「この森に何の用？私、ある女を消したら元の世界に帰ろうとしてるところなんだけど・・・・」

「その女性とは・・・・？」

「私の恋人を取った憎い女よ！どちらかが死んでも、一生愛し続けようって約束したのに、あの女が現れたせいで、彼の心は・・・・」

「なるほど・・・・とてもお辛い経験をなされたのですね」

優羅の優しい言葉に、今まで険しかった女の表情が、少しだけ緩んだ。多分、同情されて、少しは気持ちが楽になったのかもしれない。

しかし、俺にはそれが理解出来なかった。同情されても、なんにも

嬉しくない。ただ、ふがいない気持ちになるだけだと思うのだが・・・。

「お前は、同情されたら嬉しいか？」

「同情・・・ですか？」

「まぁ、気持ちをわかってくれるってことだな」

「そうですね、気持ちをわかってもらえると言うことは嬉しいことです。亜修羅さんは、嬉しくないんですか？」

「嬉しくないことはないが、そこまで嬉しいとは思わないな」

「そうですか・・・。あの、それは、『同情』と思ってるからじゃないですか？同情と思わないで、ただ、気持ちをわかってくれているんだと思えば、きっと嬉しいと思いますよ？」

朱音の言葉に、思わず黙り込む。確かに、言われてみればそうだ。同情と思うから嫌な気分になるだけで、気持ちを理解してくれていると思えば、嫌な気持ちにはならないだろう。

「確かにそうだな、言われるまで気づかなかった」

「あっ、すっ、すみません、偉そうなことを言ってしまって・・・。そんなに偉そうなことを言えるような者でもないのに・・・」

「いや、いいんだ。あんたのおかげで気づかせてもらった。ありがたく思ってる」

俺は、礼だけを言うと、再び優羅達の方に視線を向けた。この分だと、案外早く、女の気持ちをどうにか出来るかもしれないと思った。

やっぱり、優羅に任せてよかったと思う。多分、俺があの女を説得しようとしても、中々上手くはいかなかっただろう。

「貴方も、この気持ちわかる？」

「ええ、私も以前、似たような経験をしました。その時はとても辛くて、私から大事な人を奪った奴をとても憎く思いました」

「そうよね？憎んで当然よね？」

女は確かめるように言って、自分でうなずくと、今まで宙に浮いていたのだが、地面に降りて来た。きっと、気を緩めたらしい。だが、俺達はまだ、気を緩めてはいけない。少しでも動いて物音を立ててしまったら、今まで優羅が説得したことが無意味になってしまう。

「ええ、憎んで当然だと思います。そんなことをされて、相手を憎まないのは、仏様ぐらいでしょう。普通の方なら、憎んで当然です」

俺は、その言葉を聞いて、思わず立ち上がりそうになった。まさか、優羅自身が、朱音を憎めと言ってるも同然じゃないか。

しかし、なんとか思いとどまると、優羅の次の言葉を待ち続ける。

「そうよね！」

「でも・・・・殺してしまうのはやり過ぎだと思います」

「えっ・・・・・？」

「相手は憎い相手ですが、殺すと言う行為は、相手の命を絶ってしまうと言うことです。それは、どんな罪があっても、やってはいけないことなんです」

「どうして!?」

「なぜ・・・ですか。そう言われると難しいのですが・・・、貴方が苦しむと思うからです」

「えっ?私が?」

「ええ、気持ちが落ち着くのは、その殺した瞬間だけです。その後には、想像も出来ない苦しみに苛まれるんです。愚かですよね、我々人間と言う生き物は。一瞬の感情の高ぶりで、同じ生き物を殺してしまう。後に残るのは、どう足掻いても拭いきれない苦しみだけなのに・・・・」

「そんな苦しみ、私が感じる訳ないじゃない。そこまで出来た人間じゃないわよ、私」

そう言って笑う女の顔は引きつっていた。無理に笑おうとしているみたいだ。

「私は、そうは思いませんね。貴方と私では、力に差があり過ぎる。殺すなんて簡単なことでしょう。それなのに、貴方は私を殺さずに話し合いをしている。それが出来る人間は、人を殺してもなんとも思わないような人じゃなく、普通に苦しめる人なんですよ」

俺は、その言葉の意味があまりよくわからなかった。道理が通ってるのか通っていないのかすらわからない。ただ、妙に納得するような部分があった。矛盾していることでも、正しい事は、普通に思えてしまう。それと同じようなことなのかもしれない。

「だから、私は、もう、これ以上貴方に苦しんでほしくない。これ以上苦しんだら、貴方は壊れてしまいます。だから、殺すなんて野蛮なことはやめましょう?」

「・・・・」

女は、うつむいたままブルブルと震えている。それだけでは、怒っているのか悲しんでいるのかがわからなかった。ただ、女の発している霊気に、複雑な感情が混ざっているのはわかった。

その時、突然優羅が動いた。俺は、優羅が何をするのか全く健闘もつかなかったが、突然、その女のことを抱きしめた時には、思わず下を向いてしまった。横にいる朱音も、不意を突かれたようで、真っ赤になってうつむいている。

「憎むのをやめろとは言いません。ただ、殺すと言うことだけはやめて下さい。貴方が苦しむのは嫌です。だから・・・・」

優羅はそう言うと、女から離れた。その時にはもう、女の震えは止まっていた。あの時の震えは、怒りではなく、怯えだったのだとわかった。しかし、優羅は、それをわかっていて抱きついたりしたのだろうか?もしわかっていなかったら、随分と賭けに出たと思う。怒っていたのだとしたら、殺されかねないからな。

「ごっ、ごめんなさい・・・・」

女は、弱々しげにそう言うと、座り込んだ。なぜ謝るのか俺には理解出来なかったが、これ以上会話を聞くことは出来なかった。なぜなら、俺達の後ろから、警察と思われる大勢の足音が聞こえたからだ。

時に、誰かが犠牲にならなくてはいけない時がある

「ごっ、ごめんなさい・・・・」

女は、弱々しげにそう言うと、座り込んだ。なぜ謝るのか俺には理解出来なかったが、これ以上会話を聞くことは出来なかった。なぜなら、俺達の後ろから、警察と思われる大勢の足音が聞こえたからだ。

幸いなのは、まだ近くに来ていないから、森の奥にいる優羅達にまで足音が聞こえていないことだ。

これは緊急事態だと思い、小声で優羅に伝える事にした。女の心も落ち着いただろうし、今なら、話をしても大丈夫だろうと思ったのだ。

「おい、話しているところ悪いが、ちょっと報告をしなくちゃいけないことがある」

俺がそう言うと、優羅が僅かにうなずいた。しゃべることは出来ないから、うなずきで話を聞くらしい。

「警察が森の中に入って来た。まだ入り口付近にいるから足止めをするのは可能だが、俺の体力がどこまでもつか・・・・。それに、朱音のこともある。どうする?」

「あの・・・・私の仲間を帰してはもらえませんかね?」

優羅は、俺の言葉を無視して女と会話を進めて行く為、俺はイラッ

としたが、会話中の為、俺の声が聞こえたら大変だと思い、口を閉ざす。

「・・・・わかったわ。この先に行けば、彼らに出会えると思います」

そう言って女が手をかざすと、何もなかった空間に、渦のような不思議な入り口が現れた。

「私は・・・・殺人未遂を起こしました。だから、これから冥界に行って、女帝様に罰をいただきに行きます。ありがとうございました。あんなに気持ちが乱れていたのに、今はこんなにも平静でいられます。それも、あなたのおかげです。ありがとうございました。それでは、私はこれで・・・・」

女は、そう言って立ち去ろうとするが、優羅がそれを引き止める。そして、何かコソコソッと耳元で言っているのだが、小声だから、聞くことが出来ない。

俺は、じれったい思いをしながらも、そのまま様子を見ていると、女は突然姿を消した。それに驚いていると、優羅がやっと俺に向かって話し出した。

「とりあえず、もう茂みに隠れていなくて大丈夫ですよ。彼女に貴方たちのことを言いましたし、離れていては話しずらいでしょう？」

「わかった」

俺はうなずくと、立ち上がって、しゃがんでいる朱音に声をかける。

「もう大丈夫らしい。と言っても、まだ、危機が全て消えた訳じゃないがな」

「そうなんですか・・・・。何か、私にも、お手伝い出来ることはありませんか?」

「・・・・大丈夫だ。お前は、何も心配することはない。強いて言うなら、『俺から離れるな』だな」

「えっ・・・・・!?」

俺の言葉に何を勘違いしたか、朱音の顔が真っ赤になるが、俺は、それを無視することにした。下手に何かを言うと、余計に勘違いをされて面倒なことになりそうだったからだ。

「あの女はどうしたんだ?」

「あの方には、一度姿を消していただきました。警察が近づいて来ている今、彼女の姿を見られるのは面倒なことに繋がるので」

「でも、冥界に行くとか言ってたんだろ?姿を消したと言うか、本当に冥界に行っちゃったんじゃないのか?」

「それはないですよ、ちゃんと彼女の気を感じています」

「でも、なんであいつを引き止めたんだよ?もう、あいつをここに引き止めておく必要はないだろ?」

「まだですよ、彼女と、その彼氏さんが話し合っていません。互いが納得しないと、無駄なんですよ」

何が無駄なのか俺にはわからなかったが、それ以上聞いても何も答えてくれなかった為、俺は仕方なく諦めた。

「で、どうするんだ？もう直ぐ警備員が来る頃だぞ？」

「とりあえず、神羅さんに電話してみましょうか。彼が、もう直ぐここに来られるのであれば、私がここで待ってます。でも、彼が直ぐに来ないようなら、貴方も残って下さい。私一人では倒しきれないので」

「後者はわかるが、前者の意味がわからないぞ。神羅がもう直ぐでつくからって、一人で戦うって言うのか？」

「ええ、そうですよ。あなたは、朱音さんを守って下さいね」

「でも、お前一人であんなに大勢の相手が出来るのか？足音を聞いただけでも、百人以上はいるぞ」

「大丈夫とは言い切れません。もしかしたら、死んでしまうかもしれませんね。薬品はほとんど残っていませんから、調合も不可能ですし、体術もそこまでではないので、きっと無理だと思いますよ」

「なら・・・・」

「でも、ここは私に任せて下さい。彼らが会いたいのは私じゃなくて、貴方なんです。真っ先に会って話したいのは、貴方なんです。だから、一刻も早く、彼らの元へ行ってあげて下さい。私が言いたいのはそれだけです。では！」

優羅はそれだけ言うと、俺達の言葉も聞かずに森の入り口の方へと走って行ってしまった。

「おいっ、待て！神羅に電話するんじゃないのか？」

俺は、必死に大声でそう問いかけたが、優羅は俺の言葉を無視し、右手をあげた。それが何を意味しているのかはわからなかった。さよならなのか。それとも、また別の何かなのか・・・・。

「・・・・行こう」

「えっ？」

「凛達を助けに行くんだ」

「でも、叔父さんは・・・・」

俺は、無言のまま、朱音の腕を引いた。まだ、優羅が負けると決まった訳じゃない。なら、奴を信じるしかない。そう思ったのだ。

そこまでしてやった理由とは

「はぁ・・・・ここ、どこかな?」

「わかりません・・・・。でも、どこか変なところに連れてかれてしまったのは確かですね。唯一よかったと言うべきなのは、僕達が一緒に変な場所に連れて来られたと言うことでしょうか?」

「そうだね・・・・」

今、この不思議な空間に一緒にいるのは、僕と、桜っちと幸明だ。

「でもさ、優河君の姿が見当たらないんだけど、どこにいるのかな?」

「さぁ・・・・。凛君が一緒にいたんじゃないんですか?」

「いやね、僕も一緒にいた訳さ。でも、一足先に、この変な空間に連れて来られちゃったから、優河君がどこに行ったのかわからないんだよね」

「そうなんですか・・・・」

僕らがこうしてしゃべっている間も、幸明は黙り続けていた。なんでかわからないけど、不機嫌なのかな?と思って割り切ることにした。もともと、僕らはそんなに仲良しな訳じゃないし、あんまり首を突っ込まない方がいいと思ったんだ。

「でもさ、もし、優河さんだけがあの森に残ってて、警察の人が来たらどうしよう?そうしたら、優河さんはやられちゃうよ?」

「そうですね・・・・。あっ、でも、修さん達が近くに来ているようだったので、多分、大丈夫だと思いますよ？」

「そっ、そうなの！？」

「ええ、ここに連れて来られる直前に、神羅さんから電話があって、森の前にいると言っていました」

「そっか。無事に亜修羅を助けたんだね、やった！」

「ええ、神羅さんは約束を果たしたのに、僕らは・・・・」

そこで桜っちが黙り、うつむいた。それを見て、僕も、自然と気分が落ち込む。そうだ。僕らは、自分達の役目をまだ果たせていない。どうやって神羅と顔を合わせればいいのか・・・・。

「約束って、なんなんですか？」

「えっ！？」

突然幸明に聞かれて、僕は驚いた。だって、心を読まれちゃったんだもん。そりゃ、驚くでしょ？

「今、貴方が言っていた約束ってことですよ」

「えっ・・・・それは、まぁ・・・・この森の霧を払って、幸明に種族争いをさせないようにすることで・・・・」

「種族争いは、もうやりませんよ」

「えっ！？？」

僕は、その言葉にとても驚いた。幸明は種族争いをとても楽しんでいて、何がなんでもやり続けると思ってたんだ。この森の霧を消しても、何か方法を考えて、種族争いを起こすつもりだと思っていた。だから、とても驚いた。

「なっ、なんで!?」

「なんで・・・・って、種族争いを続けてもらいたいですか?」

「いっ、いや!そんなことないけどさ、突然やめるって・・・・。何がなんでも種族争いだけはやり続けると思ってたからさ・・・・」

すると、幸明は大きくため息をついた後、ゆっくりと口を開いた。

「私は今まで、貴方達のことを、何も考えないで殺戮を行う非道な奴らだと思って来ました。だけど、こうして貴方達と接して、貴方達も私達と同じように、人を思い、自分を犠牲にすることも出来るんだと知りました。だから、もう、種族争いはやめますよ。約束もありますしね」

「はっ、はい・・・・」

僕は、大きく息を吐くと、桜っちの肩を叩いた。

その時だった。突然、僕等の目の前が光ったかと思うと、天命様と、魔光霊命様が姿を現した。

その突然の出来事に、僕は、思わず桜っちの肩を?んだまま転んだ為、桜っちまで巻き込んでしまった。

「大丈夫ですか?」

そう言って駆け寄って来る魔光霊命様に助けられて、僕らは立ち上がった。

「あっ、助けてもらえたんですね！」

「ええ、貴方達のおかげで、私はこうして復活することが出来ました。ありがとう」

「いえ、気にしないで下さい」

僕らがそうして話していると、天命様がゆっくりと近づいて来て、僕らと幸明の間に割って入る。その表情は、僕らに向けられた時の聖母様のような優しげな表情ではなく、とても険しい顔をしていた。まるでメデューサのように鋭い目で、その目で睨まれたら固まってしまいそうだった。

それを見た魔光霊命様は、幸明から離れるように、僕らの手を引いて二人から離れる。幸明から離れるようにって言ったけど、もしかしたら、本当は、天命様が怖かったのかもしれないね。

「幸明・・・貴方は、何も罪のない妖怪達を操り、自らの欲を満たす為に殺し合いをさせました。それだけではなく、自らの妹である魔光霊命を瀕死の状態に陥れました。その罪は重く、とても非道なことです。そんな行いをした神の罰を知っていますか？」

「・・・わかっていますよ。神である権利を剥奪される・・・ですよね？」

「ええ、よく理解していますね。それなのに、なぜ、そのような罪を犯したのですか？」

天命様の言葉に、幸明が黙り込む。

確かにそうだと思う。多分、神の権利を剥奪されると言うことは、僕らに置き換えてみれば、妖力を抜かれることと同じだと思う。要するに、なんの力もない者になるってことだ。だから、そこまでして種族争いを続けた理由が知りたかったんだ。

「・・・わかりません」

その言葉を聞いて、僕は、漫画さながらにこけそうになった。だって、「わかりません」って・・・。それなりの答えを期待してたのにさ、なんだか力が抜けちゃったんだ。

「わからない・・・・？」

幸明の発言に、天命様も眉をひそめた。まさか、そんな言葉が返って来るとは思ってなかったのだろう。

「はい・・・なぜ、自分がそこまで種族争いに執着していたのか、わからないんです。最初の頃は、本当に種族争いを楽しんでいました。でも、年を重ねるごとに、段々と面白いと言う感情が薄れていきました。

しかし、そんな私の心境とは裏腹に、神達は種族争いの楽しさに目覚めたのか、種族争いを楽しみにするようになったのです。そうなっては、私はどうすることも出来ません。自分から種族争いのことを皆に教えたのに、自分の興味がなくなったからと言って、勝手に種族争いを止められませんから」

その言葉を聞いて、僕は、深いため息をついた。幸明は、もう、種

族争いをやめてもいいとは思っていたけれど、大勢の神達が種族争いを楽しむようになって、もう、後にひけなくなってしまったんだ。自分から種族争いを始めたのに、自分の事情で種族争いをやめたら、きっと、神達は怒って反乱が起こるかもしれない。だから、やめられなかったんだ。

「・・・悲しいことだね」

「そうですね、幸明が悪くないとは言えませんが、幸明も可哀相な立場ですね」

「でもまぁ、色々あるにせよ、種族争いをもうやらないって言ってくれたんだから、よかったよね」

僕は、その時、魔光霊命様の様子がおかしいことに気がついた。なんだかソワソワしていて、引きつった顔をしていた。なんだか、嫌な予感がするなぁ・・・。

「どっ、どうしたんですか?そんなにソワソワして・・・」

「えっ、ええ、気にしなくていいわよ?」

「でも・・・表情も物凄く引きつってますよ?以上な程に・・・」

僕がそう言うと、魔光霊命様はハッとした顔になって、うつむいたけれど、浮かない顔のまま、僕らの方に向き、小声で話しだした。

「幸明は、神である権利を剥奪されちゃうからよ」

「・・・それって、そんなに深刻なことなんですか?まっ、まぁ・・・結構深刻なことだとは思いますけど、そんな顔をするほどのことでもないような気が・・・」

「神である権利を剥奪される・・・・それは、その人の死を現しているのよ」

現実は、とても厳しいもので・・・・

「神である権利を剥奪される・・・・それは、その人の死を現しているのよ」
「なっ！？」

僕は、そう叫んで、慌てて口を塞ぐと、気持ちを落ち着かせる。まさか、殺されちゃうなんて・・・・。

「本当ですか？！」

「ええ、だから、神である権利を剥奪されることは、よっぽどの罪人じゃなきゃ受けないのよ」

「それって、死刑と同じじゃないですか・・・・」

「いえ、死刑とはまた別なのよ。死刑は、親族が呼ばれて、罪人の最後を見届ける。でも、神である権利を剥奪された場合の死刑は、みなが見ている前で、その者の首を落とす・・・・」

僕は、その言葉を聞いて、思わず震えが走った。鏡を見なくても、自分の顔が蒼いのがわかる。それに、気分も悪くなって来た。

「大丈夫ですか？」
「うっ、うん、心配してくれてありがとね」

「ごめんなさい、気分を悪くさせてしまったかしら？」

「いえ、大丈夫です。魔光霊命様は、本当のことを説明してくれた

までのことなので・・・・・」

「そう・・・・」

そう言って、魔光霊命様は微笑むけれど、直ぐに浮かない顔になった。当たり前だろう。仲があまりよくないとは言っても、実の兄妹なのだ。喜ぶはずがない。

「神域を司る神、幸明に、神の権利剥奪の刑を下します」

僕は、天命様がそう言うのを聞いて、慌てて二人に駆け寄った。その際、魔光霊命様が僕を止めようとしたけど、それを上手く交わした。

「待って下さいっ！」

「どうしたのですか？」

「神の権利剥奪はやめて下さい！」

「・・・・どうして、貴方は彼をかばうのですか？」

「だって、彼は今までいけないことを沢山やって来たけど、もう、種族争いはやらないって言ってるし、それに、反省してる。だから、そんなことをしないであげてください！彼に、やり直すチャンスを上げて下さい！」

「貴方は、彼を憎んでいないのですか？」

「はい・・・・とは言い切れないです。彼のことは、今でも許してはいないとは思います。でも、それよりも、幸明の生死の方が大事なことなんです。ここで死んじゃったら、彼は、何も感じないまま死んでしまう。それは、とてももったいないことだと思います。生

きていれば、沢山のことを感じて、自分の犯した罪を認識して、もう二度とそんなことは行わないように思うと思います。だから、彼に反省出来る時間を下さい！」

僕は、そう言うと、土下座をしていた。なんで、そこまで懸命に幸明の命を守ろうとしているのかわからない。種族争いを起こした張本人なのにね。でも、ただ、助けたいって気持ちだけで一杯だった。

「・・・まぁ、その言い分も一理ありますね・・・。貴方はまだ若い。人生をやり直すには可能な時間が残っているでしょう。その命を無闇に奪ってはいけませんね」

天命様のその言葉に、僕は顔をあげて立ち上がった。

「それじゃあ・・・・！！」

「それには及びません。私は、神の権利剥奪の刑を受けます」

幸明のその一言に、僕の心は真っ白になった。何を思って、その言葉を発したのか。考えを変えてくれたと言うのに、どうしてその道を選ぶのか。僕にはわからなかった。

「どうして！」

僕は、感情に任せて、つい、幸明の襟首を?んで揺らしてしまった。しかし、幸明は、力ない表情で地面を見つめているだけで、何も答えない。

「どうしてその道を選ぶんだよ！せっかく生きていけるチャンスがもらえたのに！どうして死を選ぶんだ！どうして・・・・！！」

僕は、足の力が抜けて、その場に座り込んだ。頭がグルグルして、何がなんだかわからない。気持ちを抑制することが出来なくて、色んな感情が一気に溢れ出して来る。目の奥が熱くなって、涙が出そうになったけど、僕は、それをなんとか堪えた。

そのまま沈黙が続いた後、足音が僕に近づいて来るのが聞こえた。でも、その相手を見る余力すらなかった。

その相手は、僕の目の前でしゃがむと、僕の肩を叩いた。

「貴方の気持ちはわかります。あの言葉はとても嬉しかったです。こんな最低な私に、助けの手を伸ばしてくれたことに感謝したいと思います。でも、私は、その手を取って良いほど清らかな人間じゃないんですよ。最初から知っていました。種族争いを起こすことで、自分が、神の権利を剥奪されることを」

「なら・・・・」

「でも、やってしまったんですよ。種族争いと言う惨劇を起こしてしまったんです。そんな私は、これからを生きて、人生をやり直す資格なんて持ち合わせていないんです。だから、私は、神の権利剥奪を選びます。貴方の優しさはとても嬉しかったです。死ぬ前に、優しさと言うものに触れられた私は幸せ者です。だから、心置きなく地獄へといけるでしょう。ありがとうございました」

僕は、幸明のその言葉を無表情で聞いていた・・・・つもりだった。でも、涙が出て来て止まらなかった。なぜかなんて、考える余裕すらなかった。心が空っぽで、悲しい気持ちなんてなかったはずなのに、なんで涙が出て来るんだろう・・・・。

幸明はそれだけ言うと、立ち上がって、天命のもとへ歩いて行く。
僕は、それを呼び止めたかった。あんなことを言われても、止めたかった。生きてて欲しかった。でも、体を動かす事は愚か、声を出す事も不可能で、僕はそのまま座りつくして泣いていた。

魔光霊命様も、天命様達の後を追って走って行く足音が聞こえるけれど、僕は顔をあげなかった。顔をあげることが出来ない。動いたら、粉々に砕けてしまいそうで、動けなかった。

「・・・・凛君」

桜っちが近付いて来て、僕の肩に手を置いた。その優しさが、とても苦しかった。嬉しいのに、それと同じくらい、苦しかった。

「ごめんね、僕・・・・」

そう言った時、突然目の前が真っ暗になり、意識がなくなった。

「あれは・・・・桜木じゃないか？」
「・・・・そうですね、明日夏さんです！」

俺達は、不思議な空間から出て来る桜木を見つけ、慌てて走り寄った。

「大丈夫か？」
「はい、僕は大丈夫ですけど、凛君が・・・・」

そう言って、桜木が、自分の背中にいる凛の方を見る。凛は、まるで眠っているかのように目を瞑って動かない。

「眠ってるのか？」

「いえ・・・実は、気を失ってしまったようなんです。ちょっと、中で色々ありまして・・・・なんとかここまで運んで来たんですけど、力がなくて・・・・」

そう言う桜木は、今にも凛を落としそうだった為、俺が凛を背負うことにした。

なぜ凛が気を失ったのかがわからないが、桜木の様子からすると、あまり聞いてはいけないことなのかもしれないなと思い、俺は、黙ったまま歩き出していた。

「そう言えば、あの、恐ろしい女性は・・・・？」
「あいつは、優羅がなんとかしたんだ。あいつは凄い奴・・・・」

そう言いかけた時、突然、入り口の方から血のにおいがすることに気づき、言葉を切る。そして、もう一度大きく息を吸い込み、その血のにおいが誰のものかわかった。

「急ぐぞ！」
「なっ、なんでですか！？」
「・・・・優羅が危ないんだ！」
「そんなっ！」

俺の言葉に、朱音の顔が一気に蒼くなり、立ち止まった。しかし、その手を桜木が引っ張って走る為、自分も、凛を背負ったまま走り出した。

入り口に行くに連れて、血のにおいが強くなるのを感じ、自然と気持ちが焦る。もし、あいつが死んでしまったら・・・・。

俺達は全力で走り、なんとか森の入り口にたどり着いた。しかし、そこにあった光景は、既に血を流して倒れている優羅と、それをかばうように立ちふさがる優河の最期だった。

スローモーションのように、目の前の光景が流れていく。優河は、俺達の目の前で警官に撃たれ、地面に崩れ落ちた。それを見て、朱音が走り出した。桜木は、それを止めようと手を伸ばしたが、朱音の手には届かず、朱音は、そのまま、二人の元に走り寄った。しかし、それと同時に警官が発砲して、朱音の体を拳銃の弾が何個も貫通した。朱音は体中血だらけになったが、尚も二人のもとへと歩いて行こうとする。俺は、それを止めようと走り出した。

その時、後ろにいた凛が意識を取り戻したのか、もぞもぞと動いた。

俺は、とっさに、凛の方を見てしまった。その動作がいけなかったのか、警官に隙を突かれて、発砲されてしまった。

体のいたるところに激痛が走り、思わず顔をゆがめるけれど、何とか立ち続けた。今倒れたら、凛を落としてしまう。だから、なんとか歯を食いしばって頑張った。

「修さん！」

「・・・・凛を預かっててくれないか？」

「なっ、何するんですか？・・・・まさか、この大人数相手に戦うつもりですか？！無理ですよ、勝てません！そんな無茶なことはしないで下さい！」

「大丈夫だ。俺は、絶対に死なない。お前は、自分と凛の身のことだけを考えてろ」

「でも・・・・」

俺は、それ以上桜木の言葉を聞かずに、凛を桜木に預けると、烈火闘刃を鞘から抜き、目を瞑って大きく息を吐くと、警官を見据えた。

僕は、修さんの身がとても心配だった。

なぜなら、今の修さんは、いつもの修さんじゃない気がするんだ。いつもの優しくて、冷静な修さんじゃなくて、ただ、相手を倒すことだけに集中する・・・・。そんなように見えた。

何がそう思わせるのかと言うと、雰囲気もいつもと違う感じがするし、刀の構えもいつもと違う。でも、それ以上に、修さんの目が怖かった。いつものような優しさのある目じゃなくて、今の目は、まるで、鬼神のような目だった。

「十、九、八、七・・・・・」

僕は、突然数を数え出した修さんに驚いた。何を思って、そんなカウントダウンをしているのかがわからない。でも、僕は、それを聞くことは出来なかった。今の修さんに何か聞いただけで、自分がボコボコにやられてしまいそうな気がして、とても怖かったんだ。

「六、五・・・・」

「何を数えているんだね、君。自分がやられるカウントダウンでもしているのかな?」

「・・・・違う。お前ら全員が地獄に行くまでのカウントダウンだ」

修さんの発言に、そう問いかけた警官は高らかに笑った。きっと、この警官の集団の中で、一番偉い人なんだろう。

「何を言っているんだ。明らかに不利なのは、自分達の方だと自覚しているのか？可哀相な奴だ」

「三、二、一・・・・」

僕は、「一」の言葉の後、思わずゴクリと唾を飲み込んでしまった。体が強張って、緊張している。このカウントダウンの先には何が待ち受けているのか知りたいと言う気持ちもあったけど、それと同じくらい怖かった。とても怖かったのだ。だからなのか、冷や汗が止まらない。でも、僕は、ずっと修さんを見続けた。

「零・・・・」

修さんはそう言ったけれど、動こうとはしなかった。それを見て、再び警官は笑い出したが、後ろで、ドサドサッと言う音が聞こえて、慌てて後ろを振り返った。

僕も、慌ててその方向に視線を向ける。すると、そこには、血だらけになった警官の屍が沢山転がっていた。今までずっと高らかに笑い続けていた警官を除いた全員の屍が・・・・。

その光景に、警官の笑顔が引きつり、声すらも出ないまま立ち尽くしていた。修さんは、依然として動かないままだったけれど、烈火闘刃を鞘にしまったと確認出来た時には、残りの警官も、立ってはいなかった。

「修羅刹那（しゅらせつな）・・・・」

修さんは、そうつぶやくと、後ろを振り返って、僕の方に歩いて来

た。

その時の修さんからは、もう、あの鬼神のようなオーラは消えていて、いつもの修さんに戻っていた。

「・・・・こいつ等を病院に運ぼう」

修さんにそう言われて、僕は、大きくうなずいた。

さよならは、いつも直ぐ近くにある

血だらけの優羅を背負い、歩き出そうとした時だった。意識を取り戻したのか、優羅がうっすらと目を明けた。

「やっと来たんですか・・・・遅かったですね」

「ああ、悪かったな。まだ、神羅は来ていないようだな」

「警官はどうしたんですか・・・・・？」

「あいつらは、俺が全て消した。問題ない。だから、少し黙ってろ。うるさい」

「私は運ばなくていいですよ・・・・・」

「・・・・・」

俺は、無言で前を見据えた。そのまま、優羅が続ける。

「もう直ぐ神羅さんが来るはずです。そうすると、凛君、優河さん、朱音さんをそれぞれ運んでください。私は、ここで待ってます」

「・・・・それは、あつらを先に病院に連れて行って、お前は後回しにしろって言ってるのか？」

「ええ、そう言うことです」

「・・・・ここで、『待ってるんだな？』ここで、『死ぬ』んじゃないんだな？」

俺の発言に、優羅が黙り込む。それが、優羅の考えを物語っていた。

「お前は、ここで待つんじゃない。ここで死ぬつもりなんだ。そんなの、許す訳ないだろ？」

「しかし、二人を同時に運ぶのは、無理じゃないんですか？」

「・・・・無理でも、やるんだ」

俺は、目の前に倒れている朱音を左手で抱えると、何とか立ち上がる。後ろでは、桜木が、頑張って凛を運んでいる。

「・・・・神羅さんは、まだ来ないと思いますよ？」

「さっきは、直ぐに来るって言っただろ？嘘ついたのか？」

「ええ、そうですね。貴方が無茶をしないようにね。さすがに、三人を運ぶのは無理でしょう？」

「・・・・」

俺は、ため息をついた。どうして、こいつはこんなに・・・・。

「お前は、そんなに一人でここにいたいのか？」

「違いますよ、優先して助ける命を考えたんです。朱音さんは、まだ若いから死ぬには早過ぎる。優河さんも、朱音さんにとっては大事な人です。だから、死んではいけないんです」

「・・・・その言い方だと、自分は必要ないとでも言いたげだな」

「そうですよ。私は必要ありません。約束もろくに果たせないような奴が、どの面を下げて生きていけばいいんですか。必ず助けると

言って助けられなかったのに、生きているのは・・・・」

「・・・お前らの約束を、俺は知らない。だが、これだけはわかるぞ。朱音が必要としてるのは、優河だけじゃない。お前も必要としてるんだ。唯一血のつながりのあるお前をな。あいつは、相当な傷を負って来た。それなのに、お前まで失ったら、あいつは更に傷を負うことになる。もし、朱音のことを傷つけたくないと思うのならば、絶対に生きろ。そして、あいつの心を支えてやれ。それだけでも、あいつの心は大分楽になるはずだ。朱音を支える為に生きろ。生きている意味がわからないなら、そう思えばいい」

俺の言葉を、優羅は黙って聞いていたが、やがて、微笑みを浮かべると、大きく息を吐いた。

「そうですね、私もそうしてあげたいと思います。でも、それも、無理みたいです・・・・」

俺は、その声を聞いて、とっさに振り返る。今までのしゃべり方とは違い、ほとんど聞こえないほどの小さな声だったのだ。

「おいっ、死ぬな！お前が死んだら、こいつはどうなるんだよ！お前だけなんだぞ！」

「すみません・・・・でも、なんだか、とても体がダルいんですよ・・・・。まぶたも自然と落ちて来て、痛みも何も感じません・・・・。とても眠くて仕方がないんです」

優羅はそう言うと、ゆっくりと目を閉じた。俺は、慌てて優羅に声をかける。

「目を開けろ！俺の背中で寝るんじゃない！」

「・・・すみません、でも、もう、動けないんです。こうやって口を動かす事が精一杯で、もう、体が動かないんです」

「そんなこと言うな！お前は・・・」

「私を下ろして下さい、そして、優河さんを背負って、この森から出て下さい、そうしたら、みんな助かります」

「・・・お前はどうするんだよ？」

「私は、もう・・・死んでしまいますからね、病院に行っても助かりません。だから、私は置いていっていただいて構わないんですよ」

「だが・・・」

「これは、私の最期の望みです。貴方は、死に際の人間の最期の望みを聞かないと言うんですか？」

「・・・わかった」

俺は、そうつぶやくと、優羅を地面に下ろした。そして、優河を背負うと、顔を伏せた。

「そうです、それでいいんですよ」

「・・・」

「どうしたんですか？歩いていかないんですか？」

そう不思議そうに問うて来る優羅の言葉に、俺は首を振った。

「一人でこの世界からいなくなるのは、とても寂しいことだろ？だから、せめて俺は、お前が生きている間は、お前の前に居続ける。寂しくないようにな」

俺がそう言うと、優羅は力なく笑ったが、直ぐに真顔に戻った。

「・・・ありがとうございます。最初は、一人でこの世界から旅立とうとしましたが、心の片隅では、やっぱり寂しかったのかもしれませんね。こうして、貴方が傍にいてくれるだけでもありがたいんですから」

「お前は、本当に馬鹿だな。本当に・・・」

「・・・ええ、私は馬鹿でした。強がって嘘までついて、結果、死ぬことになるんですから。でも、貴方には、見透かされてしまうんですね。私の心が。おかげで、私は寂しくありません・・・」

「もうしゃべるな。静かにしてろ」

「・・・わかりました。そう言うなら、これだけ言わせて下さい」

優羅はそう言うと、ゆっくりと息を吐いた。

「・・・ありがとう」

俺は、無言でその言葉を聞いていたが、優羅がそれ以上しゃべらないのを確認して、近くにあった優羅の白衣を上から被せると、顔を伏せて歩き出した。どうか天国へ行けますようにと思いながら。

「こら、伊織、ボーッとせんで、授業に集中せんか！」
「ああ、すみませんでした」

俺は立ち上がると、悪いとも思っていないのに謝り、席についた。
すると、隣の席の女が話しかけて来る。その女とは、言わずと知れている、しつこい女だ。

「一週間休んでたけどさ、どこに行ってたの？」
「・・・・別に、大したところに行ってた訳じゃないさ」

「えっ、そうかな？なんだか、一週間休む前よりも、大人っぽくなった気がするよ？」

「・・・・気のせいだ」

俺は、それだけ言うと、机の上の教科書に目を移した。

あれから一週間が経った。あの後、朱音と優河は病院に連れて行き、無事に一命を取り留めた。そして、これからどうするのかと聞いたところ、魔界に住むと決めたらしい。神域にいては、お互い命が危ないからだろう。

凛はと言うと、しばらく寝かせていたら、自然と目が覚めた。なんで気絶したのかと聞いたが、本人はわからないと言っていた。だから、それ以上深く聞かないことにした。しかし、後に、桜木からあの不思議な空間の中にいる時の出来事を説明されて、なんとなく納得したような気がした。あいつは、元々人の生死に敏感なところが

あるから、幸明のことで興奮し過ぎて気を失ったんだろうと思ったのだ。

そう言えば、桜木は、森から外に出ることは出来ないと言っていたが、なぜか、普通に外に出ることが出来た。その、あまりにもあっけなく外に出られたことに、桜木も不思議そうな顔をしていたが、そのまま急いで病院に向かった為、どうしてそんなことが起こったのかわからない。でも、俺の予想では、森の入り口を塞いでたのがあの女で、あいつはいなくなったから、通れるようになったのだろうと思う。あくまでも俺の予想だから、正しいかはわからない。だが、そう思わざるおえなかった。

あの後、魔光霊命や、天命達の姿を見ることはなかった。俺達は、気づかないうちに魔界に連れ戻されていて、神域があれからどうなったのかはわからない。でも、きっと、種族争いは起こらないと思う。種族争いの元凶である幸明は罰を受けたし、あの森の霧も発生しなくなったからな。結局、烈火闘刃の奥義を使わずに事が片付いてしまったので、何だか複雑な気持ちだが、まぁ、別に、それもいいだろうとは思った。

そう言えば、種族争いの一見から一週間が経ったが、神羅の姿を一回も見ていない。あれから結局、神羅の姿を見ないまま魔界に連れ戻された為、あいつがどうなったかは不明だ。だが、種族争いも終わったのだから、護衛として俺を護ることもない為、魔界で自由に過ごしているんだろうなと思った。

魔界の様子は、俺達が飛ばされた時には、何事もなかったかのように元通りに戻っていた。まるで、今までの地獄のような出来事が嘘だったかのように、昔の面影を取り戻していた。ただ一つ違うところと言えば、大勢の妖怪が家族や友人を亡くし、泣いているところ

だった。

その光景がなくなれば、もとの魔界に戻り、種族争いと言うことがあった記憶も薄れてしまうだろう。種族争いは、もうこれ以上起こることはないだろうが、みんなには、種族争いと言うとても恐ろしい争いがあったことを覚えていて欲しい。魔界の様子を見ただけでは信じがたいだろうが、血で血を洗うような争いがあったのだと言うことを、一つの歴史として覚えていて欲しいのだ。もう二度と、そのようなことが繰り返されないように・・・・。

その時、チャイムが鳴って、六時間目の授業が終了した。日直の号令とともに挨拶を済ませると、俺は、大きく伸びをした。

最近は、ずっと妖怪として過ごして来たので、人間としての生活が退屈で仕方が無いのだ。だが、心の片隅では、それもいいのではないかと言う気持ちになった。

教科書を鞄にしまい、担任の話を聞いた後、やっと教室を出ることが出来た。俺は、さっさと階段を下りて靴を履き替えると、校門を出た。

「やっ！一緒に帰ろう！」
「お疲れ様でした！一緒に帰りましょう？」
「ああ」

俺は、それだけ言うと、歩き出した。凛と桜木が、俺を間に挟んで会話をしている。それが、一ヶ月前では当たり前のことだったのだが、あんなことがあった後だから、なんとも言えない気持ちになる。

「・・・・だよねっ！」

「なっ、なんだ？」

「えっ、もしかして、聞いてなかったの？」

「・・・・まぁ、な」

「ちぇっ、なんだよ、全く！こんな平和な生活を取り戻せるとは思ってなかったから、ボケちゃったのかい？」

凛の馬鹿にしたような言い方に、思わずムカッとするが、深いため息をついて、その言葉を受け流した。

「おっ、珍しいね、いつもなら、僕のことをボカボカ叩いて来るくせにさ」

「まぁ・・・・な、あんなことが起こった後なんだ。お前にも優しくしてやろうと思ってな」

「め～ずらしっ！でも、その珍しさがいいよねっ！」

「やっぱり、こう言う平和がいいですよね～。癒されます」

「あっ、そう言えばさ、僕達、約一ヶ月休んでたはずだよね？なのに、今日教室に行ったら、一週間ぶりって言われてびっくりしたよ！」

「ああ、それは俺も同感だ。多分、神域と魔界との時間の経ち方も別なんだろうな。でもまぁ、逆に、一週間ぐらいが丁度いいじゃないか。下手に一ヶ月とか経っていると、中々面倒なことになりそうだ」

「そうだね、一件落着、一件落着！」

俺は、そんな凛の反応を見て、深いため息をついたが、自然と心が穏やかだった。

「そこのお兄さん方、ちょいと道をお聞きしてもよろしいですかな？」

突然後ろからそう問われて、俺達は後ろを向いた。そして、みなが驚いた。そこにいたのは、行方不明だったはずの神羅だったのだ。

「お前・・・久しぶりだな。今までどこに行ってたんだよ？」

「まぁ、色々とあって、中々族長殿のところに参上出来なかった次第でございます。申し訳ございません！」

神羅は深々とお辞儀をすると、ゆっくりと顔をあげた。

「それでですね、ちょっとお話がありまして・・・・」

「なんだ？」

「種族争いが終わったので、俺はもう、族長の護衛はしなくてよくなったんですよ。だから、前期族長が、護衛の任務は終わりだって言うんですけど・・・・」

そこで神羅は言葉を切り、顔を伏せた。何が言いたいのか、俺には検討がつかなかった。

「・・・だからなんだ？」

「想像つかない？」

「あっ、わかった！」
「おおっ！じゃあ、俺の変わりに代弁してくれっ！」

「えぇ～～～、まぁ、いいよ、言ってあげるよ。多分ね、神羅は、寂しいんだと思うよっ！」

凛はそう言うと、得意げな顔を神羅に向けたが、神羅は全力で首を振っている。きっと、違うようだ。

「違うっ！」
「え～、違うの？」

「まっ、まぁ・・・全くないとは言えないが・・・まぁ、いいか。あのな、俺は、族長だからと言って、今まで護衛をしてた訳じゃないんだ。族長と言う人だからこそ、死ぬ気で守ろうとした。そして、種族争いが終わったら、俺は族長の護衛をしなくていいことになる。だけど、俺はまだ、族長の護衛でいたいんだ！だから、これからも、護衛として護らせてくれないか！」

神羅は、そう大声で言って、俺に向かって手を突き出した。俺は、なんて答えたらいいのかわからず、うろたえていた。

あの発言は、そんな大声で言うものじゃない。なぜなら、普通の高校生が、護衛なんているはずがない。まぁ、金持ちならいそうだが、多分、執事とかそう言う感じだろう。きっと、護衛とは言わない。そう考えると、皆から不審な目を向けられるのではないかと思ったのだ。

俺の予想は大当たりし、下校途中の生徒が一斉に俺達の方を振り返る。誰もしゃべろうとせず、まるで、俺達の会話に耳を傾けている

ようだ。

俺は、とにかく、こいつらを連れてどこか他の場所へ移動しようと考えた。まだ、護衛と言う単語くらいなら、上手く誤魔化すことが可能だ。だが、これ以上核心に迫るような発言をされると、弁解のしようがないのだ。だから、一刻も早く、こいつらをこの場所から移動させようと口を開いた。

「おい、ここじゃ・・・・」

しかし、俺の声を遮るかのように、凛が、神羅に負けないような大声で話を続ける。凛のかん高い声と、俺の声では、明らかに凛の声が聞こえ易いに決まっている。悲しいことに、俺の声は、凛の声で、完全にかき消されてしまった。

「それはありがたいことだね、本人、渋ってるように見えるけど、神羅に護ってもらって、とても助かってるからさ、これからもずっと護ってあげてよ！」

俺は、今だけは本気で凛を殴りたいと思った。まぁ、確かに、神羅に護衛として護ってもらっていたおかげで、俺は、死なずに済んだし、今までよりも神経を使うこともなくなったので、疲れなくもなった。しかし、これと、それとは話が別だ。今は、さっさと、こいつらを他の場所へ移動させなければ。

「おい、お前ら、この空気を読め。話の続きは家に帰ってからやれ」

俺は、それだけ言うと、三人の言葉も聞かずに腕を引いて家に帰った。

久しぶりに会ったと言うのに、早速面倒なことを巻き起こして来た神羅を、俺は複雑な気持ちで見ていた。凛がいるだけでも大変なのに、神羅まで加わったら、どんなことになるんだろうか・・・・。そう思うと少し怖くなったが、にぎやかなのは嫌いじゃない為、それぐらい我慢出来るだろうと思った。

久しぶりの登校

魔界から帰って来た次の日、僕は桜っちに起こされて起きたけれど、なんだか、まだ、人間界に帰って来たと言う実感が湧かない。だから、桜っちに起こされた時は、なんで起こされたのかと言うのが思い出せなかったんだ。

「なんで起こしたの・・・・？」
「学校ですよ？人間界に戻って来れたので・・・・ね？」
「あっ、そっか・・・・でも、亜修羅達は？姿が見えないけど・・・・」

「修さん達なら、朝早くにどこかに行ってしまいましたよ？」
「ずるいよ！なんで、自分達だけエスケープしてるのさ！」
「えっ、エスケープですか？」

「そうだよ！自分達だけ、学校と言う子供の宿命から逃げて・・・・」
「まっ、まぁ、落ち着いて下さい。とりあえず、僕らは学校に行きましょう？」
「・・・・ちぇっ」

僕は舌打ちをすると、嫌々起き上がって制服に着替えると、顔を洗ってから外に出た。

「それじゃあ、行きましょうか」
「えーっ、行きたくないなぁ・・・・・」

「でも、一応、人間界にいる時は学校に行くって決まっているので・

・・・」

「ねぇねぇ、僕らもエスケープしちゃおうよ！」

「ええっ！？」

僕の発言に桜っちは驚いたのか、持っていた鍵を落としてしまった。

「そっ、そんなに驚く事？」

「まっ、まぁ・・・・。でも、今日は生徒会があるんじゃないんですか？」

「あっ・・・・」

僕は、そう言われて深いため息をついた。

今日は、生徒会の集まりがあったことを思い出したからだ。生徒会の集りは、絶対にサボっちゃいけないから、エスケープも無理ってことだもん。

僕はため息をつきながら階段を下りた。桜っちは、慌てて家の鍵を閉めると、一回鍵がかかったかどうかを確認した後、転びそうになりながら階段を下りて来る。

「そう言えばさ、あれで一応種族争いは終わったみたいになってるけど、妖怪達の記憶は残ってるんでしょ？だったら、まだ、種族間の争いは耐えないんじゃないの？」

ふと思い立ったことを桜っちに言ってみる。すると、桜っちは大きくうなずいた。

「確かにそうですよね、種族争いのような大きな争いは起きなくて

も、何事もなかったようになることは不可能でしょうね・・・・」

「そっか・・・・。悲しいね、戦争って」

「ええ。例え、戦争が終わったとしても、そこで傷ついた心や失った人への悲しみは、戦争が終わっても消えることないんですから・・・・戦争なんて、起こさないのが一番ですよね？」

「そうそう！でもまぁ・・・・これから永久に続くよりは、僕らの力で種族争いの連鎖を食い止めたんだから、それで上出来だと思うよ？」

「・・・・そうですね、種族争いを止められただけでもいいことですよね！」

「うん！」

あの疑問が浮かんだ時は、心の中に雲が立ち込めたけど、桜っちと話して、自然とその雲が晴れた。そして、やっぱり、仲間はいいなと実感する。

「でもなぁ、やっぱり、学校はめんどくさい・・・・」

僕がそう言うと桜っちは苦笑いをした。桜っちは、学校が嫌じゃないんだろうか？

「桜っちはさ、学校嫌じゃないの？」

「ぼっ、僕ですか？うーーーん、嫌と言うか、それが当たり前のように思ってるので、あんまり深くは考えたことないですね・・・・」

「おおっ、それは偉いね！」

「ええ、まぁ・・・もともと、魔界でも学校に行っていたので、あの場所に比べれば人間界の学校の方がいいかなと思っているので、全く苦じゃありませんね」

「そっ、そんなに苦しいの？」

「まぁ・・・学校に行くぐらいなら、死んだ方がマシと思ったことが何回もありました。まぁ、授業で死にかけたことも何回かあるので、あんまり変わらないんですけどね」

「ええっ！！！？」

僕は、その発言に物凄く驚いた。学校に行くぐらいなら死んだ方がマシと言うのも驚きだけど、その後の言葉が怖過ぎる。授業で死にかけるって、一体何をやったらそんな・・・・。

「大丈夫ですか？顔色が悪いですけど・・・・」

「うっ、うん、大変だったんだね、学校・・・・でも、死にかけるって言うのは、ちょっと違うんじゃ・・・・？」

僕は、「さっきのは、訂正します」って言って来るのを待っていた。だって、言葉のあやって言うのは、誰でもあるからね。

「いえ、正しいですよ？僕達の学校では、主に真剣で授業を行うので、一度ミスを犯したら、命取りになるんです。おかげで、学校にいる間は、一秒たりとも気が抜けなくて、家に帰ったらクタクタでしたよ・・・・」

「しっ、真剣!?木刀とかじゃなくて?」

「ええ、その他にも、銃器の扱いもならうので、練習試合では、本物の銃や刀で戦うんです。相手は妖怪なので、それぐらいして当然のようです」

「・・・・こわっ」

僕は、思わずそうつぶやいてしまった。だって、学校で本物の銃や剣を使って戦うなんて・・・・しかも、練習試合・・・・。

僕は、ため息しか出て来なかった。そして、そんな過酷な学校を卒業した桜っちは、人間界の普通の学校なんて苦でもないんだなと実感した。だって、そんな過酷な学校を先に経験をしたら、ただ紙と鉛筆を使って勉強する学校の方がいいと思うのが当然だもんね。

「・・・・お疲れ様」

僕はそう言うと、桜っちの肩をポンと叩いた。

「突然どうしたんですか・・・・・?」

「えっ、別に、気にしなくていいよ。ほら、学校についたよ、入ろう」

「はっ、はい・・・・・」

僕は、うろたえている桜っちの手を引くと、学校の中に入った。

生徒会長の役目

そう言えば、今日は遅刻者取締り日だったらしい。校門のところに生徒会の人がいて、登校して来る人を見ていた。

僕は、それを見て、ホッと胸を撫で下ろした。だって、生徒会長が遅刻なんかしたら、とんでもないことになるからね。

「よかったですね、結構ギリギリでした・・・・」

「うん、遅れちゃったら、色々面倒だからね・・・・」

そんなことを言いながら、上履きに履き替えて教室に向かう。その道中、学年問わずにみんなが挨拶をしてくれるから、何だか嬉しい。

「凛君は人気者ですね」

「そうかな？」

「そうですよ。こんなに挨拶をされているのは、他に先生ぐらいしかいないと思いますよ？」

そう言われて、僕は顔をしかめた。先生と一緒にされるのは、なんだか嫌だったんだ。

「先生と一緒にしないでよ、何だか気分悪い・・・・」

「やっぱり、先生が嫌いなんですね」

「やっぱりって？」

「僕も、先生ってあまり好きじゃないんですよ。友好的な先生だったいいんですけど、この学校の先生は、ちょっと苦手です」

桜っちは、前方を歩いている数学の先生をちらりと見ながら小声で言う。

「僕もだよ。なんかさ、本当に苦手になりそうなタイプの先生が多いもんね」

僕も、桜っち同様に、ちらりと見ながら小声で言う。でないと、聞こえてしまって、謹慎ルームに連れて行かれちゃうんだよね。

そうそう、ここで、ちょっと生徒会長の仕事を説明しようと思う。なぜそんなことを説明するのかは、普通の生徒会長の役割と、全く違うからなんだ。

どんなことをするかと言うと、まずは、生徒のまとめ。次に、生徒の相談役。それから、生徒のために働く。一つ目意外意味がわからないものだと思うけれど、二つ目よりも三つ目の方がわからないと思うから説明しておく。働くって言うのは、身の回りの整理整頓から、生徒にとってより良い環境を作ること。そんなのは先生がやる仕事に近いけど、生徒会長の役目なんだよね。ちなみに、生徒会長がするような仕事は副生徒会長がいて、その人の役目。何だかめんどくさいよね、この学校ってさ。

「凛君も頑張ってますよね。授業中にまで呼び出されて、成績が悪いのどうのこうの言われても平気なんですから。僕だったら耐えられませんよ」

「だって、頭が悪いのは今に始まったことじゃないし、それがもっとわからなくなるってだけのはなしだよ。それに、結構授業をサボって話をするのは面白いよ?」

「いつも、授業を抜け出して、何をしてるんですか？」

桜っちにそう聞かれて、僕は、言おうか言わまいかと迷ったけど、結局、言うことにした。先生に、そのことは生徒に聞かれても答えるなって言われてたんだ。

「この学校ってさ、カウンセラーいないでしょ？だからさ、学校に電話がかかって来るんだよ。話がしたいって言う生徒からね。それで、僕が話しに行ってるんだよ」

「この学校、本当に変ですよね。カウンセラーがいなくて、その相談を生徒会長に押し付けるなんて。このせいで、年々生徒会長の成績が悪くなっていってるんですよ」

桜っちの言葉も一理あると思うけど、僕自身で生徒会長に立候補した訳だし、副生徒会長の子が頑張ってくれるから、僕にとっても辛くはない。何よりも、授業を抜け出す時の気持ちが最高なのだ。その気持ちがあるから、僕は、この、生徒会長と言う苦行をやってのけられるんだ。

ホームルームにはギリギリ間に合い、三つ横の列にいる桜っちに向かってＶサインをする。すると、Ｖサインは返って来ないものの、微笑みを返してくれた。それが、上手く言えないけど、嬉しくて、平和だなって実感出来た。

そんなかたちで授業が始まり、二時間目の数学の時間だった。教室のドアが開き、ひょっこりと教頭先生の頭が出て来て、僕に向かって手招きをする。これが、僕を呼ぶ時に使う手だ。

それを見て、生徒達が羨ましそうな目を向けたり、理不尽だと言葉に出したりもするけど、数学の先生は止めることが出来ない。なぜなら、本当のことだからね。理不尽なのも、ずるいのも。僕だけ不公平に出て行くのはどうしてかと言われたら、もう終わりだから。

僕は、静かに立ち上がって、教室の後ろのドアから廊下に出ると、教頭先生のもとに歩いて行く。

「丘本君、今回の話し相手なんだがね、今謹慎中の生徒でな。言わば、不良だ。他校の生徒と喧嘩をした奴だ。最初は危険だと思ったんだが、君を呼べと暴れ出したんだ。我々も必死で抵抗したが、この有様だ」

そう言った教頭先生は、自分の頭を指差す。そして、拳を握りしめた。なぜ、こんなことをしているのかと言うと、教頭先生の残り少なかった髪の毛は、全て抜かれていたんだ。これは、身体へのダメージよりも、精神的ダメージが大きかったと思う。そう考えると、手を握り締めるしか、僕には笑いを耐える手段がなかったんだ。

僕の思ったとおり、謹慎ルームに僕を連れて行く間、最低でも十回は頭を触り、ツルツルだと感じては深いため息をついていた。これは、僕が思っている以上に、大きなダメージを食らってると思う。

その姿に笑わないように尚も必死になりながら、何とか謹慎ルームにたどり着いた。途中、何回も噴出しそうになったけれど、なんとか堪えた自分を褒めてあげたいなと思う。

僕は、大きく息を吐いて、気を取り直した。まだどんな子か姿は見てないけど、喧嘩をしてここに連れて来られたと言うことは、喧嘩っ早いことは確かだと思う。そんな子を前に笑ってたら、怒られち

ゃいそうだからね。

やっと心が落ち着いて、僕は、謹慎ルームの扉を開けた。そこには、体のところどころに絆創膏を張って、こっちを睨みつけている、いかにも「喧嘩をして来たぞ」って感じの生徒がいた。

「生徒会長の丘本だ。これでいいだろう。私は忙しいんだからな。仕事に戻るぞ」

教頭先生は、明らかに怯えた表情で言い捨てると、早々と走り去って行った。普段、廊下を走るなと怒る先生が走ってどうするんだろうと思いながらも、僕は、その生徒の方に目を向けた。

さぁて、どんな子なんだろうな？

「愚弄」の意味がわかれば、頭がいいのです。

僕は、とりあえず、その子が座っている机の向かい側に座ると、名前を聞くことにした。

「名前は？」
「佐久間」
「下は？」
「和音」

「そっか、和音君か。僕は、この学校の生徒会長、丘本宗介。よろしくね」

僕は、そう言って手を差し出すけど、僕のことを無言で睨み続けている。それを見て、握手は無理だなと思って、僕はため息をつきながら手を引っ込める。まずは、仲良くなることから始めることにした。

「ところでさ、教頭先生のこと・・・・嫌い？」
「・・・・」

相変わらず、僕を挑戦的とも言えるような目で睨みつけて来る。でも、ひるみはしない。だって、戦ったら僕の方が上だもん。だから大丈夫。まぁ、暴力を振るわれても、自分からは攻撃しないよ？そんなことしたら、和音君に怪我を負わせちゃうからね。

「じゃあ、誰先生が一番嫌い？」
「・・・・・」

尚も何も言わない和音君を、今度はじっと見てみた。睨んでないよ、ただ無心になって見てるだけ。でも、そう言うのって苦手だから、すぐに降参した。戦闘になると、普通に出来るんだけど、今は普通の時だから、普通の時は、一点に集中するのが苦手なんだ。

「さっきさ、教頭先生と話してたんだけどね、残り少なかった髪が全部抜けて、相当ショックを受けてたよ。でも、僕にとっては最高。教頭先生が朝礼台に乗って話している時に風が吹くとさ、その髪がなびくんだよ。それがおかしくてさ、いつも死ぬ気で堪えてる。だから、髪が抜けて、堪えることがなくなったから、もう最高。死滅した毛根は、もう二度と再生しないからね」

僕が笑いながらそう話していると、しびれを切らしたように、和音君が口を開いた。

「お前、喧嘩のことを聞きに来たんじゃないのか？不良はどうのこうのって、愚弄しに来たんじゃないのか？」

和音君の言葉に、僕は、頭が真っ白になった。ぐっ、ぐろう？グロー？それとも、グロウ？
頭の中で、「グロウ」と言う言葉が色んな形で変換されるけれど、それも違う気がする。僕の脳内辞書には、その言葉は存在しないようだ。

「あのさ、悪いんだけど、先に聞いていい？」
「・・・・・」

無言なので、勝手に聞いていいと解釈をし、「グロウ」とか言う言葉の意味を聞いてみる事にした。

「グロウってなに？」
「は？」

僕の問いに、今まで睨みつけて来た表情が驚きの表情に変わった。それを見て、少し嬉しい気持ちになるけれど、自分の頭が悪いんだなと言うことを実感して、少しへこむ。でも、その素振りを見せないで、さらに畳み掛ける。

「だから、さっき言ってたじゃん。『グロウしに来たんじゃないのか？』って。その、『グロウ』ってなんて意味なのかなってこと」

「グロウじゃない。愚弄だ。そんなこともわからないのか？」
「そうだよ。わからないんだ。だから、教えてって言ってるの」

和音君は、心底僕を馬鹿にしたような表情をしてため息をついた後、渋々と言った様子で説明してくれた。

「愚弄は、『バカにしてからかい、価値を認めないような扱いをすること』だ」
「・・・和音君って、頭いいね」
「当然だ」

滅多なことがない限り、愚弄って使わないと思う。普通の中学生なら、もうちょっと子供っぽい言い方すると思うんだよね。それなのに、そんな言葉を遣う和音君を、僕は心底凄いと思った。

「酷いんだよ、教頭先生ってさ、和音君のことを不良って言ったんだよ！」
「お前もそう思ってるんだろう？」

「そんなことないよ。和音君は、不良でも良い不良。だから、不良じゃないだ！」
「・・・・何言ってるんだ？」
今度は、少し困惑の表情をする和音君。その表情の変化が、なんとも面白い。
「その言葉の通りだよ。だから、簡潔に言うと、和音君はいい人で、不良じゃないってこと」
「簡潔に言えるなら、何で始めから言わないんだ？」
「上手い言葉が見つからなかったんだ」
僕の言葉にブツブツ文句をつぶやいているけれど、最初の時みたいな雰囲気はすっかりなくなっていた。わかり易く言うと、殺気がなくなったって感じかな？。
「バカだな」
「そうだよ。もう、いろんな人に言われてるから慣れちゃったよ。見返す気はないのか？って言われるけど、ないって答えるしね。それに、そんなことを聞いた先生だって言ってたんだからさ。普通、言えないよね？言えるとしたら、ボケたか相当の鈍さだね」
すると、今まで固かった和音君の表情がフッと和らいだ。その表情を見て思ったのは、色んな仕草が亜修羅に似てるってこと。口調とか、動作とかがね。
「お前なら、その心配もなさそうだな」
「？」

「いや、何でもない。行けよ、話はついた。授業を受けないと、それ以上頭が悪くなるぜ」

「あっ、嫌・・・・それはいいよ。これ以上頭が悪くなる事はないからさ。ちょっと待ってて、今持って来るから！」

「おい！」

慌てて呼び止めようとする和音君の言葉を無視して、僕は廊下に出ると、生徒会室に向かった。そこに、みんなが楽しめるものがあるんだ。

こっそりと生徒会室の中に入り、鍵のかかっている引き出しからあるものを取り出すと、シャツの中に入れて、誰にもバレないように謹慎ルームへ戻った。

「やぁ！」
「・・・・シャツの中に何を隠してるんだ？」
「ゲーム機」
「・・・・は？」
「だから、ゲーム機！授業に行くのが嫌だからさ、亜修羅に懇願して買ってもらったんだ」
「亜修羅？随分と変な名前の奴だな・・・・」
そう言われて慌てて首を振ると、謹慎ルームの鍵を閉めて和音君の向かい側に座った。
「気にしないでね。では、やるとしますか！」
「・・・・それをか？」
「当然！二つあるんだしさ、一緒にやろうよ！」
「・・・・カセットは？」
「エルドラ」
ゲーム機を和音君に渡してから、鍵がかかっているか確認した後、時計を見て、時間を把握した。
あっ、説明しておくと、エルドラって言うのはエルドドラゴンって言うゲームを略した名前なんだ。そのゲームは、勇者を育てて七頭のドラゴンを倒し、ドラゴンの王様を倒すゲーム。ちなみに、倒し

たドラゴンは、三体まで仲間にすることが出来るんだ。

このゲームを買うことに、亜修羅は、最初は渋ってたけど、僕が一生懸命頼んで、やっと、買ってもらえたゲームなんだ。

「新発売の奴か？」

「あぁ、そんな大声を出さないで！先生に許しなんてもらってないんだから！」

「お前、生徒会長だろ？いいのかよ？校則を守らないで」

「いいんだよ、先生は嫌いだし、生徒会長って言うのも趣味でやっただけだし」

「悪い奴だな・・・・」

「違うよ、僕はいい子だから、校則を破るんだ」

「？」

「まっ、始めましょ」

困惑顔の和音君を促して、さっそくゲームを始める。さっきの言葉の意味、あれは、自分でもよくわからない。いい子だから校則を破るって、どう言う意味？みたいなね。でも、そんなこと言ってると、少ない時間を無駄にするだけだと思って、さっさと始めることにしたんだ。

ゲームを二個買った理由は、二つある。一つ目は桜っちとやるため。二つ目は、こうやって、相談に来た生徒と遊ぶため。

当然、学校に許しなんかとってないし、僕が勝手にやってることだけど、相談に来てくれた子は、これをやって楽しんでるみたいだし、僕の考えはあながち間違ってはいないようだった。

こうやって話をするに当たって、僕が一番大切にしてるのは、相手を楽しませることだから、これも一種の手段だと思えばいいんだ。たとえ校則を破ってどうこう言われても、みんなが楽しんでくれればそれが一番だしね。ゲームを持って来る時点で、バレた時のことは考えてるから、覚悟は出来てるんだ。

「・・・・他の奴のデータがあるぞ」

「当たり前じゃん。色んな生徒がやってるんだからさ。ゲームがあることを知らないのは先生ぐらいだよ。他の生徒は毎回やりに来てるぐらいだよ、生徒会室にね」

「そうなのか」

そんな会話をしながら、マルチプレイを始めたけれど・・・・。

「もしかしてさ、和音君って・・・・このゲーム苦手なの？」

「うるさい！」

和音君は、毎回ドラゴンに突っ込んで行って、その度に一撃で殺されている。僕は、そんな和音君を生かしながら戦っているから、結構大変なんだ。普通なら、もう少し考えて行動するだろうから、僕は、和音君を初心者と見たんだ。

それから何分か経った時、突然チャイムが鳴り、一番近くの教室から号令の声が聞こえる。そして、教室の戸が開く、ガラガラと言う音が聞こえた。

「あっ、まずい。みんなが出て来た」

僕がとっさに電源を切ると、和音君に怒鳴られた。

「おい、何をやってんだ！」

「何って、みんなが出て来ちゃったんだからさ。仕方ないよ」

ブツブツ怒っている和音君からゲーム機を取り上げて、ポケットにしまう。そして、何事もなかったかのように和音君に別れを告げる。

「じゃあ、また今度！」

「・・・・」

答えを聞かないまま、急いで生徒会室に戻り、ゲーム機を引き出しにしまうと、鍵をかける。鍵をかけられるのは、僕の机は先生用の机だから、鍵をかけることが出来るんだ。その理由は、大事な書類とかをしまう為だとかね。でも、僕は、違う意味での大切な物を入れてるんだよね。

ゲーム機を鍵のかかっている引き出しにしまい、大きく息を吐き出した時、生徒会室の扉が勢いよく開いて、同じクラスの男の子が入って来る。

「おっす！生徒会長！」

「あっ、おはよ。どうしたのさ？」

「実はな、俺の仲間が茸にさらわれたんだ」

「えっ、本当！？そりゃ大変だ！？」

「場所は体育館だ。すぐに来てくれ！」

「わかった。すぐ行くよ！」

このやりとりは、日常のことで、僕らの間の、遊ぶ誘いみたいなものかな?。普通に「体育館行こうぜ!」って言うよりも面白そうじゃないか?って、向こうから言って来たのがこのやりとりのきっかけ。それに僕が乗って、そのやりとりが始まったんだけど、最初は、なんか不自然でね、やめようかと言う話にもなったけど、今では、それが普通と言うまでになったと言うことなんだ。

僕は、いつもの調子で体育館に行って、その光景を見た時、体が引きつるのを感じた。

そこには、本当に、大きな手足の生えた茸がいて、紫色の花粉を飛ばしながら、生徒を捕まえては食べるを繰り返していたんだ。

あれは、魔界の人種茸と言って、人間のように動いたり話したり感情があったりする、魔界ではありふれた茸の一種だ。でも、人間界ではそんなのいないはずのに、なぜ魔界の茸が人間界のとある学校の体育館に?

「おい、何とかしてくれよ。生徒会長!」
「へっ?あっ、む、無理だよ!」
「そこを、何とかしてくれよ!」

僕が躊躇している間に、茸が両手に握っていた生徒を口に放り込んだ。噛んでいない。丸呑みだ。その光景は、惨いの一言だった。

すると茸は、人を食べたからなのか、さっきの一，五倍くらいの大きさになった。

そして、体育館ギリギリの大きさだったのに、それ以上の大きさに

なったから、体育館の壁を吹き飛ばした。凄い音と地響きが起きて、生徒と先生達が悲鳴をあげながら僕らのいる方向に走って来る。

魔界から帰って来て早々、こんな自体が起こるとは思っていなかった。やっぱり、僕は、平和と言う言葉とはかけ離れた存在なんだなと実感した。

一騒ぎ起こします！

「何が起こったんだ？」
「なっ、何！？あの茸！」

色んな悲鳴や叫びが飛び交う中、人種茸が口を開き、大声で喚いている。

「犬神はどこだ～。どこにいる～～！！」

そう喚き散らしながらも、逃げそびれた生徒に手を伸ばしては口に放り込む。その光景を見た生徒や先生達が四方八方に逃げ惑うけれど、それを巧みに捕まえては次々に口に放り込んで行く。

その度に茸はどんどん大きくなって行って、早く対処をしないと大変なことになりそうな雰囲気だ。でも、どうすれば・・・・。

「凛君、どうしたんですか？あの茸。魔界の茸ですか？」

「おおっ、桜っち。いいところに来たよ。あの茸、魔界の人種茸って言うんだけどさ、あれは何かを食べるとその分大きくなるんだよね。どこから来たのかわからないけど、そいつが暴れ出しちゃって・・・・。どうしよう？」

「そうですね。こんなに人が多いところで元の姿に戻るのは不可能ですよね？」
「・・・・そうだね。でも、あいつは僕を探してるみたいだしさ。どうしたもんかね・・・・・」

ため息をついて考え込んだ時、廊下を走って来る足音が聞こえた。
僕は、それを聞いて何だか嫌な予感がしてたまらなかったけど、ゆっくりと振り返ってみた。すると、カメラを従えたキャスターがマイクを持って走って来ていた。

それを見た時には、思わずため息が漏れた。まぁ、確かに、こんな状況でマスコミが気づかないはずもないよね。でもね、そうは思っても、ため息は漏れるものなんだよ・・・・。

僕は、再び体育館の方に向き、マスコミの人と目を合わせないようにしてた。それをしたからって何が変わるのかって思うだろうけど、目を合わせなければ、話しかけられないと思ったんだ。でも・・・・。

「すみません、テレビ局の者ですが、あなたが噂の生徒会長さんですか？」

最初は気づかないふりをして無視をしていた。でも、しつこく話しかけて来るから、僕はおずおずと振り返った。すると、即座にマイクを突きつけられて、問いただされる。

「あっ、はい・・・・」
「この状況をどうお思いですか？」
「えっ・・・・・」

「すまないが、生徒を巻き込まないでもらいたい。話は私が聞こう」

僕が戸惑っていると、後ろから校長先生が出て来て僕をかばう様に前に進み出る。

こう言う時、あんまり頼りにしていない先生が頼もしく思えるのはなぜだろう?何だか物凄く助かったと言うか、気持ちが軽くなった気がする。

「なぁ、生徒会長!」

「悪いけど、僕じゃどうにもならないよ。あんな化け茸・・・・」

肩を?んで勢いよく揺すって来る男子生徒に、僕はため息をつきながら言った。人間の姿でもあいつをどうにか出来ると思うけど、こんな大勢が見ているところ・・・しかも、マスコミがいるところでそんなことをしたら、僕は普通じゃないってバレるからね、そう言うしか出来ないんだ。

「どこじゃ犬神~ここにいることはわかっている!!出て来ないなら、ここにいる人間共はどうなってもいいと言うのか!こんなカスの人間共は!!」

僕はそう言われた時、カチンと来た。そして、こいつを倒したいと言う妖怪的な気持ちが沸々と湧いて来て、我慢出来なくなった。こいつを倒すことに決めたんだ。

「・・・カス・・か。ふ~ん、そんなことはないよ。この人達は僕の大切な人達なんだ。だから、カスなんかじゃないんだよ。これから、その身をもって証明してあげるよ」

「凛君?」

「僕、行って来るよ」

「どこへ?」

桜っちの言葉を振り切るように、僕に助けを求めて来た生徒の肩を

叩く。

「僕の知り合いを呼んで来るよ。その人ならきっと大丈夫。あんな大きいのも直ぐ倒しちゃうから。そうみんなに伝えて」

「どっ、どうやるんだ？」

「放送でもすればいいよ」

「ああ、わかった。頼んだぞ！」

僕は、もみくちゃにされながらも、何とか頼むと、急いで逃げ惑う生徒達をかき分けて、一人、廊下の奥に進む。

それを捉えたカメラマンがカメラを僕の方に向けようとするけれど、人ごみにもみくちゃにされて、それどころではないようだ。それが、唯一の幸運と言えるかもしれない。

僕は男子トイレに入り、個室のドアを閉める。ここまでしないと安心なんて出来ない。それから役作りを始める。

役作りって言うのは、僕を僕じゃない人に見せると言うことで、言葉の言い回しを変えようと言うことなんだ。やっぱり一番いいのは、口調をもうちょっと男の子っぽく荒々しくしてみようかなと言うことだ。

「決まり・・・・」

自然と微笑みが浮かんで来て、犬神の姿に戻ると冥道霊閃を腰に下げる。これで準備万端。

最初の時は茸が学校を襲って来て、僕には平和はないんだなとか思

ってたけど、今はむしろ、とても楽しみだった。今の僕は、人間の丘本宗介じゃない。妖怪、犬神の凛なんだ。

トイレの窓から外に出て、そのまま床しか残っていない体育館へ向かう。

犬神の姿に戻ると、元の身長に戻るから、僕だって気がつかないと思う。普段はちっちゃいけど、これが普通の姿だしね。と言っても、わからないよね、わかり易く説明すると、人間の姿の時は百六十センチだけど、今は百七十センチ以上は普通にあると思う。百七十センチ以上あるのが、僕の本当の身長。人間の姿の時に身長が小さい理由は・・・まぁ、いろいろあるんだよね。

僕はそんなことを考えてて、慌てて首を振った。今は、自分の背が小さいとか大きいとか言っている場合じゃない。早くみんなを助けることが先決なんだ。

体育館の天井・・・はないから、校舎の天井の上に立って、下の様子を窺う。茸は多くの人達を丸呑みにしたようで、最初の五倍ぐらいの大きさになっていた。

「さぁて、行きますか！俺！！」

怪しい人について行く時は、仲間を道連れにしましょう

「さぁて、行きますか！俺！！」

冥道霊閃を鞘から抜き、校舎の天井から飛び降りて、一気に急降下をする。久しぶりの感覚だ。こうやって風を切るように落ちるのって、人間じゃ出来ないからね。

突然空から降って来た僕に驚き、みんなが一斉に僕の方を向く。それは人種茸も同じで、僕の姿を見つけると、ニヤリと笑った。

僕も、人種茸に向かってニヤリと笑ってやる。それが気に食わなかったのか、人種茸の顔が歪んだけれど、僕はそれを無視してどんどんしゃべる。

「化け茸！観念しろ！俺が犬神だ」

鞘から抜いた冥道霊閃の剣先を化け茸に向かって突きつける。

「来たな、犬神」

「ああ来たぜ。でも残念だな。俺の姿をやっと見ることが出来たのに、その途端に死ぬなんてな」

「何を言っている、お前がわしに食われるのだぞ」

「・・・ものわかりの悪い奴だな。率直に言うと・・・お前は俺の姿を拝んだ後で、直ぐに死ぬ！」

化け茸の言葉を聞かずに、冥道霊閃を上に振り上げて飛び上がった。
そして、化け茸のてっぺんまで飛び上がると、冥道霊閃の剣先を下にして人種茸に突き刺し、そのまま、力を込めて人種茸を真っ二つに切り裂いた。

バチャンと言う音とともに、紫色の液体がそこらじゅうに飛び散り、飲み込まれていた人達が紫色のベチャベチャに包まれて出て来た。
幸いなことに、四方八方に飛び散ったけど、そのベチャベチャの弾力で無傷で済んだらしい。

その途端、驚きや嬉しさ、安堵の気持ちが溢れた人達が一斉に動くから、もう大変だ。

僕の場合も同様。人間なのに獣耳が生えている上に、人間離れした身体能力。こりゃあ、野次馬やマスコミにとっては大きなネタになることだろう。だから、僕は大変な事になった。

「ちょっとお話を伺ってよろしいですか!?」
「いや、時間がないんだ」
「そこをなんとか!」
「生徒会長の知り合いですか?」
「今、空から降って来ましたよね?」

真ん中でもみくちゃにされる上、質問攻めにされて、全く逃れられない。これは、生徒にとっても驚きだろうからね、ある一人の生徒を除いては。

なんとかその生徒は僕のところに近づいて来て、耳元でコソコソと言った。

「りっ、凛君。大丈夫ですか？」
「ああ。大丈夫」

「もう直ぐ警察が来ます。見つかったら面倒ですよ？」
「そうか。じゃあ、ここらで退散っと。じゃあ、また！」

警察に見つかったら変な目で見られるに決まってる。全身、人間とは全く違うからさ。

何とか人を振り切り、登場時同様、空に向かって飛び上がり、校舎の屋上に着地。

その時、丁度警察のパトカーが到着したのが見えた。かなりギリギリのところで退散したからよかった。

僕は、男子トイレの窓から校舎に入り、個室の中でいつもの姿に戻ると、何食わぬ顔で体育館へ走って行った。そこには、警察と先生と数人の生徒しかいなくなっていた。野次馬は家に追い返されて、生徒は教室に戻るように言われたんだと思う。警察官と先生にね。

「君が噂の生徒会長の丘本君だね？」
「あっ、はい。そうですけど・・・・何か？」
「ちょっと話を聞かせてもらっていいかな？」

警察官はにこやかに話しかけて来るけど、心の中はお見通しだ。妖怪は、人間よりも勘が鋭いんだから。

「ちょっと待ちたまえ。それは困る。生徒に取り調べのようなことをさせることは出来ない。代わりに、私が受けよう」

校長先生が再び僕の前に立つ。頼もしいとは思うけど、ちょっと無理してるんじゃないかな?そう思わせるほど、校長先生の顔が引きつってた。

僕はそれを感じて、校長先生の前に再び回った。今度は、自分で答えた方がいいと思ったんだ。

「大丈夫です、校長先生。僕が行きます。それから、一つお願いがあるんですが・・・いいですか?」

「なんだい?」

「桜木君も一緒にいて欲しいんです。ダメですか?」

「別に構わないよ。話を聞かせてくれるだけでありがたいからね」

僕の申し出を素直に受け入れてくれたから、少しはいい人なのかなとは思ったけれども、僕は警戒心を解くことが出来なかった。

「じゃあ、ちょっと桜木を呼んで来る!」

残っていた生徒が僕達の会話を聞いて、廊下を走って行く。その子はなぜ残っていたのかわからないけど、誰も止めたりはしなかったから、用があった訳ではないらしい。

しばらくすると、桜っちが一人で走って来た。呼びに行った生徒は、先生に何かを言われたらしい。

「何でしょうか?」

「丘本君が、君と一緒なら質問に答えてくれると言ってるんだ。色々と忙しいと思うけど、少しだけいいかな?」

「はい」

桜っちは快く承諾して、僕達は警察官の後について行った。どこに連れて行かれるのかと思いながら後をついて行くと、校舎の端っこにある図書室に入れられた。

そして、警察官は扉を閉めると、鍵まで閉めてしまったから、もう、誰も入って来ることは出来ない。その動きを見て、やっぱり、桜っちを連れて来てよかったと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8523q/

想造世界

2011年12月3日09時55分発行